THE CENTRAL REVIEW

中央公論

五月號

第四十二年　第五號　第四百七十二號


松屋の松美會
五月一日より
自然の生命から感受した美しさ、優しさ、快さを模樣、訪問服、友禪、小紋、帶、着尺類の上に發現して常に流行の先驅としての新しい服飾美を生み出してゐるのが夏、冬二季の弊店を代表する松美會で御座います、今年も納戸、珠朱、鳩羽、小豆、鼠、薄綠、淡紅、淺黄等の流行色を基調として夏の清涼な氣分を遺憾なく發揮致して居ります。
東京 銀座
松屋呉服店

全四十巻

世界戯曲全集

五月五日締切

日本文化の最高レベルを示す理想的大出版

嚴選されたる原作者と原作

戯曲飜譯家として定評ある元老新進八十名

内容の豊富さに於て廉價版中第一位

如何なる全集も原作の選擇を誤る時は價値の大半を失ふ。本全集は未だ飜譯のなかつた各古典、戯曲全集として除外することの出來ない代表的近代戯、他で見る事の出來ない現代劇、飜譯至難とさへ云はれる名戯曲に至るまで、凡そ世界の舞臺を飾つた傑作は、悉く本全集に集る。飜譯も亦、世界各國語の權威、演劇運動に携る人々、芝居に理解深き人々の殆どすべてを集め、理想的な名譯ばかりで、直に上演用臺本となり得るだけのこなれた立派な譯である。

萬人に愛讀され永久に

愛藏し得る堅固な美本

小山内薫氏監修 世界戯曲全史 別冊として會員に進呈

各册舞台面の寫眞挿入

廉價版中の

最低廉價

一册 九拾錢

四六版上製美本

一册七百頁平均

古典劇、近代劇、現代劇を綜合せる空前の大出版!!

申込所 全國各書店へ

近代社

東京市京橋第一相互館

電話京橋四七五四番
四七二八番

振替東京六七九五七番

早稻田大學文學講義

大改造成る

今や世を擧げて文藝普及、思想研究の必要が叫ばれてゐる。見よ、新聞雜誌の廣告欄を！ 見よ、その大部分が東西古今の文藝思想ものによつて占領されてゐる狀を！ 然しながら、それら東西古今の文藝及び思想を根本的に研究せんとならば、それら一々の作物を味到するに先立ち、それが準備として一定の學問が必要である。卽ち、文藝及び思想方面に關する全般的教養が必要である。本講義は、卽ちさうした準備機關として、それが研究に最も必要なる知識を組織的に與ふることを本旨とする。殊に、今回は、從來の毎月二回發行を改めて月一回發行とすると共に、內容を倍加し、講義全部に亙つて大改造を斷行することとなつた。

菊版四百頁

一圓廿錢

毎月一回發行

一ヶ年半修了

內容見本

申込次第無代進呈

東京牛込 **早稻田大學出版部** 電話牛込 三四[illegible]番 三六六番 三七四八番 三七四九番

糖尿病內服新藥

獨逸ザールブルッケン微生物研究所製

ランゲリン

フォルネット氏インシュリン丸劑

○インシュリン療法の發見が近時に於ける醫學上の劃期的成功にして、糖尿病の治療的方面に大なる貢獻を致せるは著名なる事實なり。

○從來インシュリンは注射としてのみ用ゐられ、重症患者以外に應用し得ざりき、而してこれを初めて內服的に用ゐ、作用を緩和に、應用を絕對安全とし、輕症及び中等症患者に簡易に與へ得るに至れるはランゲリンなり。

○數日の內服により糖尿を減退し、連用により種々の自覺症并びに合併症を輕快せしめ、嚴重なる食餌上の制限を緩和し、患者をして精神的并びに肉

詳細は糖尿病のランゲリン療法と題する小冊子にあり、御申越次第進呈す。



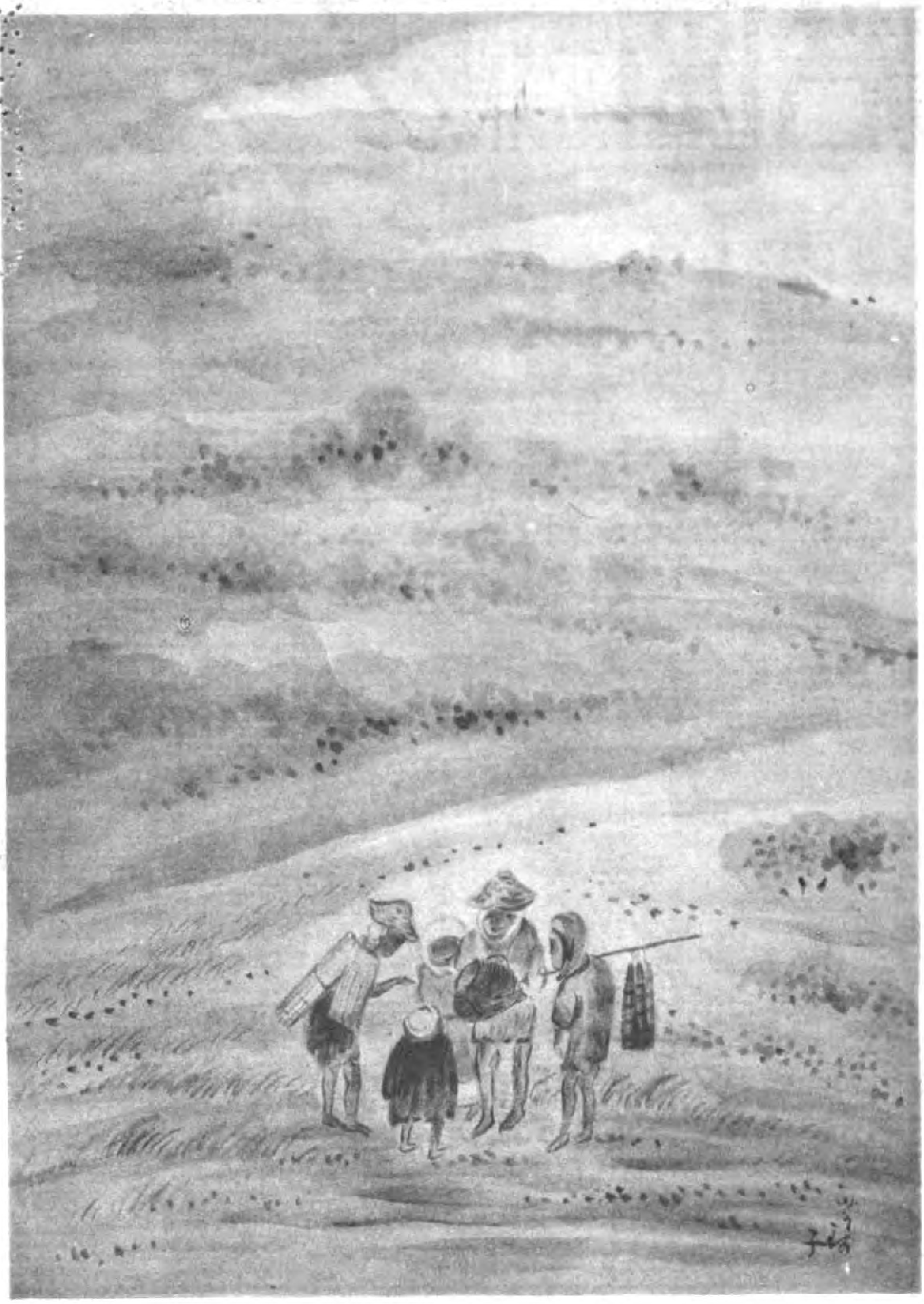
日本總代理店
株式會社 田邊元三郎商店
東京日本橋區本町

體的に强健ならしむ。

○ランゲリン一丸は尿中の糖約四瓦を補償す。



クラブ煉歯磨
美しき歯
に恵まれ
た健康美
クラブ歯刷子
便利で經濟で衛生的
なセルロイド製柄の
クラブ歯ブラシ



漁人　　小川芋銭筆

モ、地理モ、科學モ、古イノモ、新シイノモ、日本モ、西洋モ、小學生ガ面白イト思フコト知ラネバナラヌコトハ、皆ナ此内ニアル。面白クナイ事ヲ、ドコマデモ面白ク教ヘルノガ此本ダ、探偵ノ話、英雄ノ話、映畫ノ事、算術、理科何デモアツテ、ソレガステキニ面白イ。

申込はスグ、近所の書店へ

兩先生責任編輯

四百頁
四六判

小學生全集

兄から弟へ、
姉から妹へ、
父から子へ、子から孫へ、
只今から、永遠への
三十五錢！

少年少女への一大倶樂部

麴町區
下六番町
文藝春秋社



バレーの時代

安全剃刀界は今やバレーの時代となりました。何しろ、僅か數分間で、研ぐ、剃る、つる〳〵綺麗になる事が出來、そして一枚の刄が半年もの使用に耐へ、機械は上手に使へば其人一代も持ち、しかも其價が僅か、一圓八十錢と云ふのですから當然過ぎる程當然の事でせう。

刄を外さないで
其儘研げる

バレー自働研安全剃刀

賣捌店　全國著名百貨店洋物雜貨及び金物店等

上記の外に三圓三十錢五圓五十錢(各金屬製箱入刄三枚付)上製十三圓五十錢以上等ありますが刄は皆同一品、替刄は五枚入一包一圓四十錢

送料各十八錢(カタログ進呈)

努力家の萬年筆

オノトは努力家の萬年筆と云はれてゐます。十年以上も其人に付添つて、毎日絶間なく數多の事務を片端から片付けて行つても少しもひるむ事のない計りでなく、より一層益々其眞價を發揮し、使はれゝば使はれる程書きよくなるからです。

オノト萬年筆　七圓五十錢以上
アテナ萬年筆　三圓五十錢
萬年筆用アテナ・インキ　三十五錢

送料各十八錢(カタログ進呈)



"VALET"
Auto Strop
Safety Razor

大阪　神戸　京都　名古屋

東京市日本橋區通三丁目
丸善株式會社
東京—神田・三田・早稲田・丸ビル

横濱　福岡　仙臺　札幌

佐々木指月著

（發行元へ直接御註文の方に限り著者が英文で自署をしてさし上げます）

價 貳圓

四六判三七八頁クロース極上製本（送料十錢）

女難文化の國から

内容

著者は人も知る通りの珍らしい天才詩人だ。アメリカで暮すこと前後二十年、其のアメリカ生活の描寫は深刻で透徹してゐること到底尋常旅行家の見聞記等と比較すべきものではない。而も此の人の文章には一種獨特の妙味があつて何人の追隨も許さない。本書は佐々木氏が大正十一年に再渡米してから今回の歸朝迄滿四年間ニユーヨークで生活しながら書いた作品を全部網羅してゐる。アメリカの眞相がこれを讀めば照魔鏡に掛けたやうにハツキリとわれ〳〵の眼に映る。眞個のアメリカはわが佐々木指月に依つて初めて日本へ紹介されたとも云へる。又其處で生活してゐる此の詩人の姿と感情の中に更に一層強く讀者の魂を撲つものがあるであらう。

亞米利加の女難文化。雇はれ人の市場に晒されて。灰撒きしながら書いた日記。禁酒國の秘密食堂にて。塔の上から大紐育を見渡して。太陽のお座敷に引越して。針。紐育便り。勞働歸りの夕。アメリカから高天ケ原の蜃氣樓を眺めて。再びニユーヨークに住んで見て思ひ出した日本のいゝところ。

東京神田材木町二

騷人社

振替口座東京二六〇〇八

永年難治の習慣も忽ち改まる

簡易な禁煙方法

驚くべき『カロット』の効力

昨年三月五日の讀賣新聞はボー型の天才富ノ澤麟太郎氏の死を報じてゐるが、その後に『彼の生命を奪つたものはバットではないかと思はれる。彼は一日に十三箱も吸つてゐたからだ』とある。バットの十三箱とは聞くだに物凄い。兎に角、煙草の害は過度に用ふるに依つて起ることは事實だが、吸つてゐる中に段々多量に吸ふ様になるので、不知不識の間に身體を惡くしてゆくものである。煙草を止めると云ふ言葉はよく聞くが、絶對に禁煙したと云ふ人は餘り多くない。それは如何に禁煙が困難であるかを物語つてゐるもので永年の習慣は容易に改まるものでない所が、茲に面白い一つの禁煙方法がある。「カロット」を一度口にすれば煙草を用ゆるに少しも異ならないから手持無沙汰でないばかりでなく適量の朝鮮人蔘の精氣を含んでゐるから根氣をよくすると同時に溫雅な香氣と忘れ難き清涼な甘味は、輕い刺戟と快感を長く口中に殘して、一度之を口にすれば煙草に對する永年の嗜好を忘れて斷じて二度と吸ふ氣になれない。殊に口中の惡臭、又は食後や夜中口の中がねばる時に用ゆれば忽ち爽快になり、輕く常用すれば永年のニコチン中毒も完治する効力がある。但し、これは眞劍に煙草をやめようとするのでなければお勸め出來ない。何故なら再び煙草がまずくて吸へなくなるからである。是は實業之日本社あたりでも實驗して此効力に驚いてゐるのでわかる。煙草の害を知りつゝ、永年禁煙出來なかつた人、神經衰弱、慢性胃腸病消化不良その他禁煙したら屹度肥つて身體を改造し得るだらうと感じてゐる方は是非一度カロットを試みられるが良い。大倉男爵の大阪朝日の村山社長との禁煙の約束なども面白い一例である。

昭和二年

中央公論

五月一日發行

五月號

第四十二年　第五號

第四百七十二號

日支兩國大衆の精神的聯繫

本誌は前號に於て、戴天仇君の渡來を機とし、日本民衆の全體に代るの意味を以て、國民黨に依て代表せらるる南方支那の改革運動に滿腔の同情を寄する旨を述べ、併せてまた彼等の誠意に恃んで彼我の間に解決せらるるを要する二三重要の問題に關し我等の憚る所なき注文を開陳したのであつた。細目に亘つては猶大に論すべき點あるは言ふを待たないが、その大綱に於て日本民衆の新興支那に對する要請は略ぼ之に盡くると觀てよからう。不幸にして歸りを急ぐ戴君から之に關する何等の意見を與り聞き得なかつたのは、吾人の大に遺憾とする所であつた。

所が三月の末つ方から支那の調子は少し變つて來た。戴君の俄に歸りを急がれたのもその爲ではなかつたらうか。そは外でもない、共産黨と國民黨との露骨な內爭が表面に現れたこと是である。人或は之を左右兩翼の軋轢といふ。この言ひ方は必しも當らない。少くとも我國の無産階級運動部內に於ける左右兩翼の爭の如きものと思はれては困る。之等の點は玆に詳說するの遑はないが、要するに共産黨の進出擡頭、之から蒙る國民黨正統派の最近の壓迫は、かね〴〵氣遣はれたことではあるが、近來更に一層兩者の反目軋轢を鋭くし、今や所謂南方政府の勢力は將に二分せんとするの危機に瀕して居るかに見えるのである。その結果差當り我々に取て一つの重大なる問題が起つた。そはこの相爭ふ二つの黨派につき何れを以て隣邦民衆の希望を代表する正統勢力と觀るべきや、又孰れを以て信賴と期待とを寄するに足る換言すれば支那の健全なる良心を代表する中心勢力と認むべきやの點是れである。我々日本國民の態度がきまつても、交涉すべき對手が判然しなくては困る。判然するまで待つといふも一策だが、出來るものなら早く之を見定め陰に陽に之を聲援するのも惡くはない。我々は支那の時局の一日も早く安定に着かんことを冀ふも、同時にまた我から進んで聲援支持すべき勢力の孰れなりやを穿鑿するの必要もあらうと考へるのである。

吾人の觀る所を率直に云はしむるなら、支那の中心勢力は、また中心勢力たるべきものは、巨人孫文先生の遺鉢をつぎ三民主義の綱領を嚴守する國民黨の外にはないと確信する。孫文先生の遺志の何であるか三民主義

の何であるかは、既に餘りによく知られたる事柄である。その積極的内容を外にして、更に國民黨の本體を鮮明ならしむる消極的標準はといへば、一つには徹頭徹尾軍閥と相容れざることであり、又一つには所謂共産黨の事實上の指揮を受けざることとである。世間に往々蔣介石君の張作霖との妥協を傳ふるものあるが、若し之が實現せん乎、蔣君は最早斷じて國民黨の正系を代表するものではない。我國の論客中にも往々南北を妥協せしむべしなどと說くものあるが、之は少くとも國民黨に對ては不可能を迫るものである。若しそれ共産黨に至ては、本來その根本主義に於て三民主義と相容るゝものに非ず、何の見る所ありてか故孫文先生がその來投を許した以上、國民黨の統制に服する限り黨内の活動を認めなくてはなるまいが、若し彼れが自ら進んで指導の位地を占取するが如きことあらん乎、之れ取も直さず三民主義の露骨な蹂躙でなければならぬ。支那に於て最近國民黨内の内訌の傳唱さるゝ所以その因實にこゝにある。若しこの内訌が、傳ふる所の如く、共産黨が國民黨内に喰ひ入りその中央支配權を壟斷せんと狂奔する所から起つたものとするなら、我々は之に對抗して三民主義の忠實なる遵奉に終始せんとするものの方を正統なる國民黨となし、之を聲援することに依て支那國民全體の眞の要望に少しでも實現の機會を多からしむる樣、骨折らなくてはならないと考ふるのである。

支那の内爭はどう決まるか。之に依て我々の態度も自ら同一なるを得ない。併し忠實に三民主義に終始するものは、日本の民衆からの盡くる所なき聲援を期待することが出來る。彼等が三民主義に終始する限り、我々も亦安んじて東洋の將來を共に語り得ることを疑はぬからである。

支那にも色々の考の人があるが、日本にも種々雜多の思潮がある。日支兩國民の共存共榮の眞諦に徹し、最も正しく東洋將來の平和的發展を策する爲には、お互に内部に於て亦この先多くの戰を鬪はねばならぬ。而してこの際に方り、支那に於ける軍閥若しくは共産黨の多少の跋扈が如何に日本の國論を險惡にするか分らない。恐らく支那に於ても、日本に於ける眞の輿論の何れに存するやが明白でない爲め、正しい議論の不當に非難されることも再々であらう。それが爲にも我々は日本民衆の眞の要求を茲に改めて高調力說するの必要を感ずるものである。之と同時に國内の同胞に向つては、繰言ながら、支那の本當の勢力を決して見誤らざらんことを忠告せざるを得ない

斯うした吾人の立場は、自らまた、日支兩國の中堅勢力の何等かの聯繫を希望するといふ結論を導くべきは、識者を待たずして明であらう。此問題に付ては他日また稿をあらためて說くことにする。

中央公論



第四十二年第五號
五月號
第四百七十二號

伸びゆくドイツ

經濟學博士　太田正孝

一

一八〇七年、ドイツは、チルシツトに、屈辱的條約を結んだ。が、國王フリードリッヒウイルヘルムは『われらは物質的に失つたところを精神的に回復しなければならぬ』と叫んだ。――ベルリン大學は、かやうにして建てられた。人材を教養して、他日に備へやうとした。その收穫が、一八七〇年の普佛戰爭の勝利となつてあらはれたのである。

ドイツは、くせ者である。踏みつけられても、彈ね返る力をもつてゐる。世界大戰に破れたざまは、むごたらしいものであつた。しかも、ドイツ人は『われらは物質的に失つたところを精神的に回復しなければならぬ』と王者の口から宣下せしめる代りに、『經濟的復興の主體』（これはスチンネスの用ゐた言葉である）たる資本家の口を通して、『戰場で失つたものは平和なる産業で取戻せる』と豪語せしめた。いかにも、片腹痛い、小憎らしい豪語である。しかも、その豪語が、戰後の經營八年の今日において、早くも、まことゝなつて現はれて來たことを見るときに、いよ〳〵以て、くせ者ドイツの感を深くせずにはゐられない。私は今こゝに、新聞記者らしい態度を以て、經濟眼を通して見た復興ドイツの現狀を、摘記して見ることにする。——巷々の柳は、日ごとに芽を伸ばしつゝあることよ。

二

ドイツの經濟狀態を見やうとするものは、何人も、直ちにドーズ案に眼をつける。ドーズ案に表はれてゐる數字をながめて、ドイツの經濟生活における動きを計る一つの目やすにしやうとする。が、ドーズ案は、ドイツの經濟生活を左右する全體ではない。あからさまに言ふならば、ドーズ案の存在は、ドイツの資本家にとつて、都合のよい申譯の口實となつてゐる。ドイツの資本融通の行きつまりも、産業進展の不振も、このドーズ案があるためである。ドイツの資本家は、いくら儲けてもドーズ案によつて、その利益の全部を取り上げられてしまふから、依然として資本家は窮境にある、といふやうなことをいふ。筋の通つた、據りどころのある、理屈のつく口實である。ドーズ案は、ドイツの窮狀を訴へるには、もつて來いの宣傳資料である。この意味からいへば、ドイツは、ドーズ案によりて搾取せらるゝところも大であるが、この宣傳によつて窮狀を訴へ、外國からの資本融通に利してゐることも大きいから、差引して、ドーズ案はドイツ人が口でいふほど惡いものでもなければ、ドイツを傷めてゐるものでもない。ドーズ案は、元來實行可能の範圍を限定として案出

されたものであるといふ前提のあることを忘れてはならない。假令ドーズ案によるドイツ工業家の負擔は極めて大なるものがあるにせよ、これによつて混沌として前途の見極めのつかなかつたドイツの經濟界が、回復の緒に就いたものであるといふ事實は否むことが出來なからう。

今日ドイツの經濟界は、どうかといへば、個々の問題について見れば、色々と不振なものもあり、また全體として見ても、未だ以て樂觀をゆるさないものもある。さりながら冷かに批判的立場に立つて、數字を檢討して、一括してこれを言ふならば、ドイツの經濟的復興は正に驚ろくべきものがあるといはねばならぬ。そして、特に注目すべきことは、その將來においての發展が大いに期待せらるゝものがあるといふことである。即ち、ドイツは今日決して富裕な樂な經濟國ではないが、既にその最大難關を切り拔けて、今や進取發展の機運に向つてゐるといへやうと思ふ。

然らば、ドイツの經濟界をして、今日の如くあらしめたる動因は、何であるか。私は

一、勞働者の協調的態度
二、產業の合理化運動
三、機械・工場の改善と新式經營
四、冗員淘汰と能率增進
五、企業組織の擴大と國際協定

の五つを擧げておきたい。

三

アメリカの勞働者の間には、早くも、資本家の武器たる資本の蓄積によつて、勞働者の地位境遇の向上を實現せんとす

る傾向が著しく現はれてゐることは、かつて本誌上において紹介したことがある。勞働者が資本蓄積の運動を起すといふことは、一面には資本家との協調を意味するものである。アメリカの勞働者の協調的態度は、この資本蓄積運動によく現はれてゐる。しかし、ドイツの勞働者間における協調的態度は、アメリカにおけるやうに、資本蓄積といふやうな形式においては現はれてゐない。むしろ企業經營といふ方面において、著しく現はれてゐる。これは、ドイツの勞働者間にみなぎつてゐるドイツ復興といふ精神と、みづから築きあげたドイツ共和國の建設といふ精神との二つが、根強く勞働者の民族心と愛國心とを支配して、復興と建設のためには、勞資相爭ふべきものでなくて、同一民族たるドイツ人が相互に協同一致して、この大業を全うしなければならぬと信じてゐるからである。そして、ドイツの勞働者と資本家との間には、今日では互ひに相敵視するといふやうなことはなく、どこまでも相協調せんとしてゐるやうに見受けられる。

この勞働者の協調的精神は、政治の上にもよく現はれてゐる。勞働者を背景とする社會黨は、共和國憲法の精神が犯されない限りは、常に一切を忍んで、資本家黨たる人民黨や民主黨などと協調を遂げてゐることは、戰後八年の經過が、如實に證明してゐる。もとより共和國憲法の精神に背くやうなことである場合には、キッパリと反對してゐる。實際ドイツの勞働者の協調的態度が、ドイツの戰後經營の上に最大の貢獻をしてゐることは、充分に認めてやらなければならない。ポアンカレーがルールの占領を斷行したとき、ドイツの勞働者たちは、消極的抵抗の名目の下にストライキをやつたが、それ以來今日に到るまで、ストライキらしいストライキを一度もやつてゐない。勞資間の問題は、今日まですべて協調的態度のもとに、祖國の復興といふことを大眼目として、相互の話し合ひのもとに解決されて來てゐる。

ドイツの工場には、法制上定められた資本家の幹部會と勞働者の幹部會とがあつて、その役員は常置的に專任せられてゐる。その俸給は、會社から支拂つてゐる。この二つの幹部會は、毎月一回づつ聯合會議を開く。この會議に附議せらるゝ問題は、營業上のことや勞働の問題など、いはゞ會社經營に關する一切のことについて、兩者胸を開いて話し合ふこ

とになつてゐる。この話し合ひによつて、資本家側も勞働者側の意のあるところを諒解し、勞働者側も資本家側の營業上の一切の難點や數字などを諒解することが出來、こゝに氣持ちのよい協調が遂げられるのである。

ドイツの勞働者が、歐米諸國の勞働者にくらべて、二割方も安い賃銀で滿足し、一週五十六時間乃至六十時間の長い時間の勞働をやつてゐるのは、その協調的な精神と、復興を急がうとする愛國心の現はれに外ならない。最近賃銀問題について、勞働者間に動搖の色合が見えないのでもないが、ある人々の論ずるやうに、これがドイツ勞働界の暗礁であるとは思はれない。ドイツの勞働者に愛國的協調の誠意がある以上、資本家側においても必然的に同じ誠意を表明して、協調的態度を示すであらうと信ずるからである。

四

ドイツ人は組織的天才をもつてゐる。ドイツ人の組織癖は、遺憾なくあらゆる方面に發揮されてゐる。しかも、それが、手ぎわよく運用されてゐる。ドイツの軍隊が、最も整然たる行動をなすことにおいて有名であるが、同じ特長を産業組織の方面においても、勞働運動においても、遺憾なく發揮してゐる。停止するところを知らなかつたマルクの暴落が、レンテンマルクの發行によつて、ピッタリとやまつたことに對して、ドイツ人は、組織力の偉大さを見よと誇つてゐるが、その一面の美點は、たしかにあると思ふ

組織は、形式の整備だけを以て全しとすることは出來ない。組織の運用は、その組織の中に配置せらるゝ人そのものの活動如何にあるからである。各自の配せられたるところの位置にゐて、その本務を完全に果すのでなければ、組織の運用は行はれない。ドイツ人が組織の天才をもつてゐるといはれるのは、ドイツ人には、その本務を果すといふ義務觀念が强いからである。カント以來根强く養はれた義務心が、組織運用の妙味を發揮するにいたつたからである。

ドイツの勞働者の協調的精神は、たしかにこの自己の本務を果さうとする義務心から出てゐる。勞働者としての本務を、社會の組織の一つの位置において、完全に果さうとするのが彼等の義務心である。ドイツの勞働者は、マルクスの理想とした組織せられ且つ階級的自覺を有するプロレタリアとして現はるゝ代りに、組織せられ且つ國家的自覺を有するプロレタリアとして現はれて來たのである。いはゞ、彼等は、自由主義と國家主義の混血兒である。ドイツの勞働者は、ワイマールの憲法を贏ち得てから今日にいたるまでよくも革命の勝利者であるといふ面目を抑へて、あまんじて政治を資本階級にまかして來たのは、一に彼等が、その胸のうちに、ドイツ民族、ドイツ共和國といふものを秘めてゐるからである。彼等の意識は、階級意識でない。民族意識である。彼等は、ドイツ復興の主體は、勞働者であることを確信してゐる。彼等は資本家との協調を以て、階級的屈服と見てゐない。民族的協力であり、一致團結であると信じてゐる。一九一四年の開戰に同意して、世界の社會主義者から、ドイツ社會主義は墮落してゐる——反逆であるとさへ非難された——その社會黨は、今日も依然として當年の信條であつたドイツ及びドイツ民族を主眼とする生活保障の目的を變へてゐないのである。ドイツの勞働者の協調的態度が、復興の要因となつたことは爭はれない事柄であると思ふ。

五

先年日本に來たハーバー博士は、カイゼルから石炭石油などの燃料消滅後に於ける燃料の研究をすゝめられたといはれてゐる。研究癖と科學の應用とはドイツ人の最もすぐれてゐるところである。戰前ドイツの農業は、その一反當りの產額の增大することにおいて驚異的事實を示してゐた。これは、全く農民の努力と、科學の應用とに基いてゐる。戰時から戰後にかけて、ドイツの農業は可成り疎外され、その產額も減じた。戰後に及んでは牛豚等の家畜が賠償によつて一時その大半を失つたゝめに牧畜そのものが衰微した一方、牧畜の衰微に伴ふ動物肥料の減少などが、農耕の上に影響して、農產

物は甚だしく減じて來た。さなきだに、磽确なる土地と六百五十餘萬の人口を失つてしまつたことは、農業に大なる打撃を加へた。かやうにしてドイツの農業は一時非常に衰へた。しかるに今日、一九二三年以來の統計について見るときには、その恢復の實顯著なるものがあつて、殆んど戰前の域に達せんとしてゐるほどである。これは、農民の努力と科學の應用とによつて、合理的增收の道を講じたといふことが、その成績を高めることになつたといはれてゐる。

ドイツ人が科學の應用に熱心なことは、今さら繰り返して言ふまでもない。戰後の產業においては、特にこの科學の應用に心を傾け、一面には硏究發明の熱を高め、一面には實地應用の道を講じつゝあること、まことに驚ろくべきものがある。ドイツの染料工場において、戰後技師等は、硏究に熱中して、八萬種に及ぶ新染料を製出したといはれてゐる。しかも、その中商品として計算のとれるものは千分の一、即ち八十種位に過ぎないといふことである。また、戰後ドイツにおける專賣特許下附數を見ると、一ケ年少いときでも一萬六千、多いときには二萬にのぼつてゐる。その發明工夫の熱心の度は、推量するに難くない。

ヴエルサイユ條約の結果として、ドイツはその重要なる炭坑を奪はれたが、硏究に熱心なるドイツ人は、褐炭の科學的利用法を發明して、これを工業用、家庭用、發電用などに用ゐてゐる。これによつて硬炭の缺乏を補つてあまりがある。硬炭による電力供給が充分でなくなつたことに對しては、褐炭と水力とを以てこれを充たし、今日では驚くべき供給量を示してゐるのである。

これらは、發明工夫の方面から見たのであるが、產業を合理化しやうとする運動は、たゞに發明工夫によるばかりでなく、事業の經營、工場の設備などにおいても、すべてこれを科學的に合理的に行はうとしてゐる。鐵道從業員を見るに、一九二二年には百萬人を越してゐたが、一九二三年には九十一萬人、一九二四年には七十一萬人に減じてゐる。これは何のためか。——機關車の牽引力が增大されたこと、貨車が大きくなつたこと、運轉時間及系統などの硏究改善が行はれた

ことなどによつて、運輸能率が高まつて來たからである。その他この種の改良と能率增進とは、各方面において行はれ、科學の力を出來得るかぎり利用しつゝある。産業の合理化運動として、特にこの方面の研究書が多く出版せられつゝあることによつても、その一般の意氣込みのほどが察せられるではないか。

六

いまこゝに、ドイツの復興振りを、最近のスターチストによつて、數字的に列記して見よう。註釋を拔きにして、雛段式に一瞥することにしやう。

第一表

造船（單位噸）		
國内注文		
年次	汽船	モーター船
一九二〇	一、四二九、九七二	七二、二二〇
一九二一	一、三七〇、六九三	一四四、二四七
一九二二	一、〇三五、一三七	一一八、二〇四
一九二三	五〇八、九二三	八一、六一〇
一九二四	一八四、三九四	二一七、七二五
一九二五	一三四、七一二	一二七、六〇六
外國注文		

年次	汽船	モーター船
一九二〇	一三九、二二七	、九一
一九二一	五二、九一〇	一、六五三
一九二二	二三、七八八	六二、五六一
一九二三	四三、二〇五	七五、三四二
一九二四	六一、一六六	一七〇、二一三
一九二五	三六、一〇六	二四二、六二四

モーター船の建造の著しい發達の跡が注目される。

第二表

石炭及褐炭の産額（單位千頓）

年次	石炭	褐炭
一九二二	一一九、一八二	一三七、一七七
一九二四	一一八、七六八	一二四、六三七
一九二五	一三二、七二九	一三九、八〇四

第三表

電力の供給（單位キロワット）

年次	硬炭より	褐炭より	水力より	合計
一九一三	一、二〇二、一六〇	二六八、三四〇	一五三、五一〇	一、六二四、〇一〇

一九二四	一、八五九、一二〇	一、一六七、三二〇	五六一、五一〇	三、五八七、九五〇

第四表

鐵鋼の産額（單位噸）

年次	銑鐵	鋼
一九一三	一〇、九〇〇、〇〇〇	一一、五〇〇、〇〇〇
一九二四	七、八〇〇、〇〇〇	九、八〇〇、〇〇〇
一九二五	一〇、二〇〇、〇〇〇	一二、二〇〇、〇〇〇

この産額は、ドイツの現在地域からするものである。

第五表

車輛の増加（百キロメーターにつき）

年次	機關車	客車	貨車
一九一三	二八	一一一	一、一二一
一九二四	五四	一四一	一、四五三

第六表

主要農産物（單位千噸）（地域現在）

年次	ライ麥	小麥	大麥	燕麥	馬鈴署	甘藷
一九一三	五、二五九	四、〇三六	三、〇三五	八、六一五	四四、〇一三	—

一九二一	四、二六五	二、九三三	一、九三八	五、〇〇四	二六、一四九	七、九七八
一九二五	四、七〇八	三、二一七	二、五九九	五、五八四	四一、七一八	一〇、三二六

第七表

家畜屠殺數（單位千頭）

年次	牡牛	牝牛	若牛	仔牛	豚
一九一三	九五九	一、四六八	七九四	三、七一三	一六、四〇六
一九二〇	五三三	八九九	六六三	一、二二七	三、〇二四
一九二五	八〇九	一、三九六	九六四	四、一九三	一二、〇〇四

右の七つの表を通して見たゞけでも、ドイツが復興に向つて顯著な成績を擧げてゐることが窺はれる。その成績の因つて來るところは、單一的の原因に基づくのではなくて、最初に擧げたる五つの大きな原因が綜合されたものである。そのうちの勞働者の協調的態度と産業の合理化運動とについては、既に簡單に一言しておいたから、殘りの三つの原因について述べることにする。

七

今日ドイツの工業に投ぜられてゐる外國資本は、内輪に見ても、二十餘億圓（四十億マルク）と見積られてゐる。その大部分は、アメリカの資本である。この莫大な資本がどういふやうに使用されてゐるかといふと、殆んどすべてが工場の改善に向けられてゐる。戰後におけるドイツの工場は、その機械と設備とにおいて、まさしく、その面目を一新してゐ

る。最新式の機械を据付け、最新式の設備をなしつゝある。勞力を節約せんが爲に、機械の發明工夫と設備とについて、特に苦心しつつある。

復興の最高の原動力としての工業の振興に對しては、ドイツ政府も、州政府も、乃至は市町村自治體の役所にいたるまで、出來得る限りの援助と奬勵とを怠つてゐない。造船、飛行機、炭坑、製鐵、化學工業、機械工業、釀造業、農業等に貸しつけてゐる低利資金は、二パーセント乃至二・五パーセントといふが如き無利子同然のものである。かやうな低利の融通は、スタイン以來のドイツ人特有の産業奬勵法である。今日この低利資金の融通は二十四億マルク（十二億圓位）にも及んでゐるとのことである。

中央政府及び州政府は、産業振興の基礎政策として、道路橋梁の改修、水陸運賃の低減、電話使用料の低下などについて、出來るだけの方法を講じ、一方には電化政策と動力事業とを講じつゝある。さうして國家の事業として、ドイツ工業を外國に宣傳することに專心し、工業都市を書籍とか、畫報とか、繪はがきとか、ポスターなど、あらゆる方法で宣傳するばかりでなく、盛んに外國からの觀光客を歡迎してゐる。また、英佛米その他諸外國に向つて、觀光客を勸誘することについても怠らない。

かやうに工場の改善に資本を投ずることを惜しまず、國家も事業家も一致協力して工業振作に努力する一方に、經營法についてもいろ〳〵の方法を講じてゐる。ドイツの工業家は、すべて中間者の手數料を取り除けることに苦心して、直接に安い原料と、低い運賃と、低い賃銀とを以て、出來るだけ安い品物を作り出すことにつとめてゐる。今日ドイツ人のなすところを見るに、まことに意外なやり口の多いのに驚ろかされる。

例へば、印刷機械の如き大きな機械を世界市場に出して、ドイツのものを以てその優者の位置に立たしめるため、どし〳〵機械を注文主に提供して、その代價は年賦の方法を以て回收してゐる。そして、その永年にわたる資金をどうする

かといへば、この機械を抵當にして銀行から金を借りるのである。ドイツ銀行は、一面には産業奬勵の精神から、一面には安全なる投資といふ見方から、極めて低利で資金を融通してゐる。かやうにしてドイツ製品は外國製品と競爭して譲るところがない。ドイツの銀行業者が國家的見地からと、永久的對策とから低利融通の道を開いて、この方面に力を注ぎつゝあることは、産業振作に對する大なる貢獻といはなければならない。

八

戰爭の直後において、企業統一の運動が盛んに行はれ、スチンネス・コンツエルンをはじめとして、重要なる企業系統が十有餘を算するに至つた。この企業統一の運動の結果、ボロ會社やボロ工場を一掃してしまつて、强靱性のあるもの取りのこされた。けれども、この企業統一の運動は、いはゆる變動期における急策が多く、時の經過と經濟狀態の安靜につれて共に、組織の構造を變改しなければならないものが少なくなかつた。それが今日見るが如き小トラストや、小トラストを集合せる大トラストを成立せしのたのである。

ドイツの企業家は、今日決して一人で儲けやう、成金にならうとするやうな、いはば原始的な企業觀念を懷いてゐない。協力して出來るだけ大きい仕事をして、その配當を得やうとしてゐる。考へ方が國家的である。個人的ではない。たとへば――製紙業者の間には、大なるトラストが出來あがつてゐる。紙の注文は一會社を目當てとして注文しても、その會社の製品を得ることの出來ない場合がある。甲の會社のA紙がいゝからといつて、そのA紙を十萬ポンド注文しても、トラストの方で五萬ポンドしかくれず、殘りは他の紙を供給するといふやうなことをやつてゐる。これには一利一害の伴ふことはいふまでもないが、少くとも生産者としては、製品全部の處理と價格の協定とには便宜である。なほ、同業者間における粗製濫造を嚴禁して、その監督精選の道を立てゝゐるところに、トラストの道德的規約がある。

ドイツの企業家の目ざすところは、世界市場である。その商品の販路を擴張するためには今日もなほ戰前と同じやうな方法で、補助金制度を採用してゐる。ダンピングと思はるゝことまでやつて、産業を奬勵してゐる。今日ドイツの企業經營法なるものは、官民一致協力して、ドイツ商工株式會社といつたやうな形で、組織的に有機的に極めて整然たる行動をとつてゐる。そこに、國家的産業發展の道が開かれてゐるやに見うける。スチードが、ドイツのこのやり方を見て、『組織的な餘りに組織的な』といつてゐるのは、その優れたる點も大なるものがある代りに、一面には欠點の大なるものもあることを暗示してゐるのである。その欠點とは何か？私は、暫らくこのことを露骨にいふことを憚るであらう。

九

ドイツの産業振興の原因の一つとして、私は、冗員淘汰と能率増進とを擧げておいた。新式機械の採用、設備の改善等によつて、冗員淘汰の實を擧げつゝあることは、前に述べたところによつても知られる。なほまた工場經營法の合理化、組織化によつてその實を擧げつゝあることも、事實である。さらにまた、能率の増進による生産増加によつても同じことが行はれてゐる。

能率増進に關しては、研究ずきのドイツ人として、各方面からいろ〳〵の調査研究が進められ、いろ〳〵の方法が實地に試みられてゐるが、今日ではテーラーシステムを基礎としてゐる人物採用と事業經營の方法とによつて、その効果を擧げんとする努力が、最も盛んである。

今日ドイツにおいて、大量生産と密度生産とが行はれるのを見て、アメリカ式の輸入であるといふ人もあるが、そのやり方はアメリカ式ではなくて、本當のドイツ式であるところを見のがすわけには行かない。これも一に能率の増進を打算しての努力である。漫然たる模倣ではない。深い研究と工夫とによつてなされてゐる。彼等は、『科學的經營法は、科學の

打算の許す限りにおいて能率を增進せしめるが、結局それ以上には出ない。けれども、科學的經營法において到達する最高限度の能率增進をして、更に有利に發展せしめやうとすれば、人間の勤勉と健康とに俟たねばならぬ。科學は未だ人間以上に出ない』といつてゐる。味ふべき言葉ではないか。――フライス・ウント・アルバイト（いそしみはげむ）といふ語は、依然としてドイツ人にとりて、最高の道德的標語となつてゐる。天下を取つた勞働者たちが、すべてを忍んで、安い賃銀と長い勞働時間とに滿足して、『いそしみはげみ』つゝある所以のものは、復興後における『ある日』を樂しみに、ドイツ民族國家のために期するところがあるのではなからうか。

以上述べたやうに、企業家も、勞働者も、共に能率の增進といふことを心がけ、凡只淘汰によつて産業勞働の精兵主義を實現してゐる。機械工場の改善、設備の完備、經營法の改良等によつて、産業振興の實を擧げてゐるが、その成績は著しいものあるに拘らず、未だ以てドイツの國礎そのものを固むるといふまでには到つてゐない。數字面上から見るドイツは、たしかに復興しつゝある。勞働者を中心として一般中産者の小額貯金は、月々五千萬圓位づつの增加を見つゝある。一中産階級は、極めて順境におかれてゐる。一般民衆の奢侈娛樂に關する消費高から見ても、生活程度が著しく高まりつつあることを認められる。しかしながら、特別の補助投資に關する金利の外は、すべて極めて高率なる（八パーセントから十パーセント以上）金利で貸出されてゐるところを見ると、金融經濟の底流には未だ〳〵不健實なあるものゝ潜んでゐるやうにも思はれる。この點から申せば、ドイツ今日の復興の景氣なるものは、經濟的實力による景氣ではなくて、復興を急ぎつゝあるドイツ人そのものの精神意氣の景氣であるとでもいふことが出來やう。ホンガリアの志士コッスートは、國民に生氣ある間、國家は救はれるであらうと叫んだが、ドイツ人のこの生氣は、ドイツのために感賀すべき貴いものである。

ラーテナウが復興大臣になつた當時、彼は盛んにフランスとの經濟協定を說き、また、ドイツの復興のためには、ドイツはどうしても國際的協定によるのほかないと强調した。彼はこの指導的意見を高調すると同時に、その實行を期したゝめに、つひに頑冥なる國粹主義者のために暗殺せらるゝに至つた。スチンネスは、國際協調主義の實行者として、その大企業コンツエルンを全世界的にした。ストレーゼマンは、その外交上の要位からして、國際協調の實現に向つて努力し、これによつて今や外交界にも經濟界にも拔くべからざる位置を占めてゐる。

ドイツの經濟上の國際協調主義は、フランス、ベルギーその他の諸國の製鋼業者との聯盟の實現を皮切りとして、だんだんに明らさまに發揮されて來てゐる。ドイツの企業家の間には、今日强くヨーロッパ大陸企業家の聯盟の必要であることが信ぜられてゐる。ドイツは、今日もなほ依然としてイギリスをその眼中においてゐるが、ドイツの大望は世界における經濟戰にある。蘇州に建立した工科學堂は、將來における極東の經濟戰士の養成所である。南洋に浮んでゐる海洋研究船は、將來における海上權の擁護者である。――ドイツは眠つてゐない。

ドイツは將來においてアメリカとの經濟戰を豫想しながらも、今日においては、これと協調して、その資本を取り入れてゐる。アメリカはドイツの大工業者との間に協定を結んで、盛んに投資しつゝある。その經濟提携についての新協定の成立は、頻繁にドイツの新聞雜誌に報告されてゐる。その最も注目すべきものをあぐれば、ヨーロッパ鋼鐵カルテルがアメリカとの間に協定があるといはれてゐることであつて、これはゲーリー氏の言動によつて一般に信ぜらるゝところである。かくの如くドイツは、內國的復興に專心するのみならず、國際的復興に向つても邁進してゐる。ドイツの企業家がその國際協定において、相手國の信用を贏ち得るところを見るに、一にその組織の力にある。また、その運用の力にある。

ドイツの工業家は、ドイツ復興の中心勢力中の中心勢力であると自任しつゝある。しかも、一たびドイツの現狀について外間から質さるゝところあれば、直ちにドーズ案を引き出してその重荷の堪へ難きを訴へる。しかし、決してその口にするほどの苦しみでないことは、本文のはじめにおいて述べたとほりである。一九一三年における三千三百四十七會社の負債は、社債、抵當借を合して、三百七十五億五千萬マルクであつたが、彼の通貨膨脹のために著しくこれが減少を來し、一九二四年には六十六億一千二百萬マルクに減じてゐる。かやうなことについては、彼等は、一言も口外するところがない。

ドイツは、今まさに復興を急ぎつゝある。その復興の中心を產業振興におき、それがためには、國も、政府も、資本家も、勞働者も、一體となつて組織的行動をとつてゐる。しかも、その行動は、內國的であるのみならず、否それよりも、むしろ國際的であつて、目標は、一に世界經濟戰にある。そのなすところには欠點も難點も少くはないが、こゝには注目すべき二三の長所について述べたにすぎない。——あはれ、伸びゆくドイツ！　時分柄、春風に吹かるゝ青柳にもたとへやうか。（昭二・四・一）

破綻銀行續出に對する考察

牧野輝智

一

昭和二年三月は我國の金融史上特記さるべき一つの時期となつた。震災手形整理案が朝野の大問題となり、漸くにして帝國議會を通過したことも、金融史上の注目すべき一事實であるが、更に世間を驚した事實は、東京横濱にありて一般世間では堅實なる銀行の如くに信ぜられてゐた、六、七の銀行が引續いて破綻したことである。其前月當りにも共榮貯蓄銀行、小風銀行などいふ曖昧銀行が大藏省から營業停止を命ぜられたことはあつた。又地方では徳島銀行が不始末を暴露し、東京では個人銀行の廣部銀行が支拂停止をなしたことはあつたが、此程度の銀行破綻は我財界に有勝ちのことである。特に一般の人々を驚駭せしむる程のことではなかつたが、三月十五日の東京渡邊銀行及び同銀行系あかぢ貯蓄銀行の破綻、同十八日の中井銀行破綻、同二十二日の村井銀行、左右田銀行、中澤銀行、八十四銀行の破綻は僅に七八日間に續出せる出來事で、財界の事情に通ずる人々は別に以外とは思はなかつたが、一般の人々には非常なショックを與え、是等銀行の預金者の驚き悲みは勿論、財界の全般にも可なりな波動を生じ、廿三、四日頃の東京各銀行は何れも店先人波を見るといふの混亂せる不安狀態であつた。

二

東京渡邊銀行及びあかぢ銀行は東京の古い大地主として知られたる渡邊治右衛門一家の經營にかゝるものである。村井銀行は煙草王から銀行經營に轉じた村井吉兵衛氏の創設したもので多數の人々には渡邊銀行と同樣、背後に大財力の支持あるもの

と信ぜられてゐた。左右田銀行、中井銀行、中澤銀行、八十四銀行等も亦程度の差こそあれ、個人的財力を中心として何等不安なき銀行であるかの如くに素人仲間には考へられてゐた。此傳統的の盲信が、是等の事實上の不良銀行を幸して、其蒐集した預金の額は二億圓に近い額に達してゐた。今最近のバランス・シートにより是等の銀行の貸借上の重要なる數字を掲げると左の通りである。（昭和元年十二月現在）

△東京渡邊銀行

一、資本金	五、〇〇〇、〇〇〇圓
内拂込濟	二、〇〇〇、〇〇〇
一、諸積立金	一、三五八、五九〇
一、諸預り金	三七、〇〇五、二〇三
一、諸貸出金	三八、三七七、九五〇

△村井銀行

一、資本金	一〇、二五〇、〇〇〇
内拂込濟	五、一二五、〇〇〇
一、諸積立金	三、四三五、二〇二
一、諸預り金	六〇、〇五九、二三二
一、諸貸出金	五七、〇六〇、四三九

△中井銀行

一、資本金（全額拂込）	五、〇〇〇、〇〇〇
一、諸積立金	二、五四八、二三〇
一、諸預り金	四五、五五一、一六〇
一、諸貸出金	四一、四三三、六四七

△左右田銀行

一、資本金	五、〇〇〇、〇〇〇
内拂込濟	二、五〇〇、〇〇〇
一、諸積立金	七三、三七〇
一、諸預り金	二一、八〇二、六四六
一、諸貸出金	二三、三九七、四二四

△八十四銀行

一、資本金	五、〇〇〇、〇〇〇
内拂込濟	二、三〇〇、〇〇〇
一、諸積立金	八二〇、四〇〇
一、諸預り金	一七、七九八、〇五五

一、諸貸出金　一六、一三二、五六五

△中澤銀行

一、資本金　五、〇〇〇、〇〇〇
　内拂込濟　一、二五〇、〇〇〇
一、諸積立金　三八〇、〇〇〇
一、諸預り金　八、六八六、二六二
一、諸貸出金　一二、一四二、五三九

右の計數に依れば六銀行の預金總額は一億九千二百萬圓である。是に對する貸出金は一億八千八百萬圓である。單に預金や貸出の數字を見たゞけではそれが不健全の狀態であるとは思へないが、其貸出なるものゝ内容に立入つて見ると、大部分はコゲ付で容易に回收の出來ないものである。容易に回收の出來ないのはまだよい方で、全然回收の見込のないものも資産として計上されてある。而かもそれが巨大な額である。その詳細な内容は今後整理が進捗して見ないと分らないが、兎に角莫大の金額であることだけは確實である。一面預り金一億九千萬圓の方を見ると、此の六銀行の預ケ主は小商賣人や勤め人が多い。從つて社會政策的に見た影響の甚大であることは特に注目に値する事實である。

三

私は是から進んで是等の富豪中心の銀行が何が故に遂に破綻の已むなきに至つたかを考へて見る。或る一部には今回の銀行破綻の原因は片岡藏相の失言であると稱してゐる。現に渡邊銀行の如きは休業當時、それとなく銀行の營業は堅實であるが、藏相の失言のため、とんだ災難に遭ふたといふやうな態度をほのめかしてゐた。可愛相に預金者の中にはあかぢさんは東京一の地所持、大藏大臣の失言のため休業はしたが、すぐ開業するに相違ないと思込んでゐるものもある。然し片岡藏相の失言は渡邊銀行破綻の重大原因ではない。腐つて落ちかゝつてゐる果實に誤つて手を觸れたためそれがぼとりと落ちたやうなものである。此場合に一寸目には手を觸れたため落ちたやうに見ゆるけれども、實はそれは輕微な導因に過ぎない。片岡君が早まつて渡邊銀行の破綻を言明したことは、藏相として輕卒の譏を免れないこと勿論であるが、さりながら政友會當りで騒いだやうに、それを今回の銀行破綻の主要原因となすは素人氣質を遺憾なく發揮した針小棒大の論である。

改めて云ふまでもなく今回の銀行破綻の原因は銀行自身の不始末である。殆ど手の下しやうのない病的狀態が銀行をして遂

に今日の破綻に立至らしめたのである。而して此の破綻に對して震災手形法案が一種の導火線となつたまでのことである。片岡藏相は震災手形法案を以て財界を安定さする法案であると揚じてゐたが、國民に對して二億三千萬圓からの公債負擔を課せんとする震手法案が何等救濟の內容に觸るゝ所なく、議會を通過しやうとは誰も期し得ざることである。果して該法案に對しては國論沸騰し、五十二議會に於ける論議の中心問題となつた。此の論議中、表面堅實を裝ふてゐる銀行中にも頗る危險なものが少くないことを素人仲間にも知らしめるやうになつた。其結果札付銀行に對しては緩漫な取付けが始まつてゐた。であるから三月十四日片岡藏相が公議の席上東京渡邊銀行の破綻を口走つた時に、同銀行は未だ店を閉めてはゐなかつたにせよ、實は明日にも休業の貼紙を出さうといふまでに窮迫してゐた。若し震手法案が議會に出なかつたら、臺銀以下諸銀行の內狀に就ての論戰は起らなかつたであらう。藏相の失言なども無論起らなかつたであらう。從つて渡邊銀行其他の破綻は數ケ月後或は一年後まで繰延ばされたかも知れないが、併し是等の銀行に見るが如き營業狀態では、如何に彌縫に彌縫を重ねてゐても、遂には其の今日あることは免れ難い運命であると信ずる。

四

然らば是等の銀行を斯くまで不良ならしめた原因は何であるかといふに、其の第一は銀行業として其人を得なかつたことである。預金銀行の經營者は堅實第一を遵奉する人でなければならぬ。渡邊銀行にせよ、村井銀行にせよ、左右田銀行にせよ、中澤銀行にせよ、其堅實を以て稱せられたのは先代以前のことである。現在の經營者は第二世第三世或は縁續きの者である。是等の人々に先代又は先々代と同一の堅實さを望むは望む人の無理かも知れない。

渡邊銀行が破綻しても純朴な預金者中にはあかぢさんは東京一の地所持であるからといつて希望を囑してゐるものがあるけれども、何ぞ知らん其地所なるものは悉く抵當に入り、それも四番抵當五番抵當まで設定され、資金融通の最極度をも超えてゐることを。而かも是等の土地には特に何々銀行所有地といふ大標木を立て、純朴なる預金者を欺瞞してゐる銀行經營者の其の老猾なる仕打は憎みても餘りありといふ可きである。

此種の不眞面目な銀行家が、其營業を死地に陷るゝ徑路は殆ど同一である。それは或種の事業に對して無謀なる巨額の貸付を行ふことである。東京渡邊銀行といひ、村井銀行と云ひ、

他の一面には各種の事業に携はつてゐる。例へば前者に於ける渡邊商事、上毛モスリン、渡邊倉庫、東京乘合自動車、東京灣汽船等の諸會社、後者に於ける村井貿易會社、村井汽船會社、村井鑛山會社等の類である。而して銀行の金を貸す人と借る人とが事實上は同一人であるから、どんな無理でも不都合でも容易に行はれる譯である。尤も同一財閥の事業として銀行以外に各種の事業を營む者は總て不成績であるといふのではない。三井でも、三菱でも、住友でも、銀行業と對立して各種の事業を營んでゐるが、事業の經營上には妄りに利用し得ざるやう限界を定め互に相戒めてゐるやうである。渡邊や村井などに至りては、事業不如意の結果でもあらうが、亂暴に銀行の資金を流用し、銀行は事業と心中する外はない狀態であつた。中井銀行などは自身經營の事業はないが、其の高田商會や上毛モスリン等との關係は、渡邊が商事や上毛モスで大打撃を受けたのと同樣である。同一事業に極度の未練を殘し、遂に高田商會沒落の傍杖を喰つたやうな次第である。此の遣方が最も大規模に行はれてゐるのは臺灣銀行と鈴木商店の關係である。臺銀の拂込資金は四千萬圓、諸預り金は九千萬圓、それが一鈴木商店に融通してゐる額は二億八千萬圓に達してゐるといふ。亂暴にも程こそあれ、是が普通の銀行であれば、疾の昔破産してゐる譯であるが、特殊銀行であり發券銀行であるが爲めに、政府の不當た保護が濫行され、依然營業を繼續してゐるやうな次第である。此の臺銀の不仕鱈も、要するに第一の理由は銀行の經營者に其人を得なかつたことである。此點に鑑みて今回制定された銀行法では銀行重役の他業兼營を禁じてゐる。是は當然の改正であると思ふが、此趣旨を徹底さするためには、單に外形上銀行の重役を事業とするばかりでなく、經營の實質に於て、貸し手（銀行家）と借り手（事業家）と同一人であるといふ弊根を除去することが肝要である

五

さりながら臺銀と鈴木、中井と高田商會、上毛モス等の如く一銀行が一事業に其資力の大部分を固定さするの弊は法令を以て防止する譯には行かぬ。假りに法令にて外形上之が制限を設けても其實行は不可能である。といふのは例へば臺灣銀行の鈴木商店に對する貸付といつても、其の內容は鈴木の經營せる五十餘の會社に分れてゐるので、形式からいへば別種の貸付になり、一事業に對する固定貸ではないと辯解し得るからである。斯樣な次第であるから此の種の不都合を阻止することは一に銀行經營者の德義心と手腕とに待つの外はない。今日經濟界の

言葉に『銀行から思切つて澤山の借金をなせば其營業は如何に不振でも潰れつこはない』といふ語がある。現に東株の或る取引員の如きは借金の總額が一千萬圓に達したからとて内祝の宴を催ふしたと云ふ話もある。個人の家計に就て云へば借金が殖えることは一家の恥である。成る可く明みに知れないやうにと努めるが常であるが、近年のやうに不景氣がつゞくと事業界などでは、借り手の方で借金の殖えるのを一種の强味と心得てゐる。斯やうに借金が殖えては銀行の方で自分の事業を見棄てる譯には行かぬ。見棄れば銀行など共倒れになるからといふのである。まるで不貞腐つた女がたんかを切るときの態度である。臺銀と鈴木との關係は正にそれである。時々内派喧嘩はするやうであるが、手を切る譯には行かぬ。今回破綻した各銀行も程度の差こそあれ、それ〳〵之と同樣の關係を有し、遂には貸付先の沒落に伴ふて、銀行の醜態暴露を餘儀なくせしめた次第である。

然らば今回の銀行破綻は我財界にとつて悲しむ可きことであるかといへば、私は必ずしもさうではないと答へたいと思ふ。勿論銀行經營者の不心得のために、斯かる營業上の不良狀態を釀成したことは、悲しむ可きことに相違ない。又多數の預金者をしも途方に暮れしむることはそゞろに同情に値することである。此點は前にも一言して置いたが、今回の破綻銀行の預金者は多く小商賈人又は勤人、或はしもたやの類で、其數は二十萬人を超えてゐるといふ。是は社會政策的見地から十分考慮す可きことであるに相違ないけれども、是等の銀行に見るやうた亂暴な、狀態では、結局破綻の運命は免れないことである。尤もこゝ暫く營業を繼續してゐる内には預金を引出して後日の災厄を免れる人もある代りに、一面には新なる預金をなし、災厄の因を作る不幸な人も出來る譯であるから、破綻の遷延が必ずしも社會政策的に見て望ましいことであるとは申されぬ。併し私が今回の破綻を目して財界全般の問題として必ずしも悲しむ可きことではないといふのは是が爲ではない。他により重大な理由があるからである。

六

我國の經濟界にありし我々の最も遺憾とする點は、銀行の整理が少しも行はれてゐないといふことである。大正九年春の財界反動來、大正十二年夏の大震火災により財界に整理の必要は各方面にありて高唱された。其結果事業界の整理は不充分ではあるが、兎に角一通り目鼻がついたやうな感じがないでもない。然るに銀行の整理に至りては殆ど全く手を着けてゐないと

云つてよい位である。第一流銀行と自稱するものすら、其營業の內部に立入つて考査すれば全然回收の見込みないものをも確實な資產であるかの如くに考課狀に計上してゐる。それといふのは銀行の整理なるものは、業務の性質上之を實行することが却々容易でないからであらう。工業會社などであれば、財界が不況であれば、工場を縮小し、生產を減少することも、左程困難ではないが、銀行は信用を唯一の生命とするものであるから、營業の內容不良のために整理を必要とすることが分れば、直に取付けに遭ふ惧がある。よし取付騷ぎ程には至らずとも預金の漸減は免れ難いことである。從つて其整理は極秘に行はねばねばならぬ。それも僅ばかりの滯貨ならば目立たぬやうに處理することも難くはないが、我國現在の多數銀行の如く不良貸が多くては、極秘に是を處理するは不可能事である、勢ひ彌縫に彌縫を累ね、外面を飾るため、蛸配當を續行するの外はない。

現に今回破綻した六銀行なども不良貸の整理には全く手を染むる所なく、一攫千金の投機により萬一を僥倖せんとするか、さもなくば無方針に其の日其の日を遣り繰るといふ狀態であつた。であるから資產の實質には莫大な缺陷があるに拘らず、每期々々相當の純益を計上し、少くとも年五分、或は年八分といふが如き配當をも繼續してゐた。臺灣銀行や朝鮮銀行、東京渡邊銀行や村井銀行、中井、左右田、中澤、八十四などは特に極端な例かも知れないが、是等の銀行と遣口を同ふしてゐる銀行は全國至る所に存在してゐる。而して是等の多くは銀行業の性質として自發的に整理を完了することが不可能であるとすれば、他動的に整理淘汰を實現さすより外はない。私は今回の銀行破綻を目して一種の他動的整理となすものである。繰り返して云はねばならぬ程、預金者に對しては氣の毒であるけれども、是を財界の眞の立て直しから觀察すれば、斯の如き整理が行はれ、所謂札付銀行の淘汰が實現して、茲に始めて財界の實質は改善される次第である。是が私が今回の銀行破綻を以て必ずしも悲しむには當らないと稱する所以である。

七

上述せる不良貸整理の問題は實に我國銀行界の全體を通じての最大なる惱みである。尤も不良貸といつても全部が回收の見込みないものばかりではない。中には現在にありてこそ回收の見込がつかないけれど、假すに歲月を以てすれば、回收され得るものがないではない。が、所謂不良銀行の實狀は、何れも此の一縷の望みに餘りに期待を置き過ぎてゐる嫌がある。であるから銀行の堅實性を回復するには、此種の不良貸を嚴正に査定

する必要がある。而して全然回收の見込みなきものに對しては是非とも之を切り棄てゝ營業を立て直す方法を講ぜなければならぬ。以上私は現在の銀行に不良貸の多いことを繰返したが、是が銀行全般の問題としては毫も整理されず、却つて增加の情勢にあることは、全國の銀行統計に徵して、預金の總額に比し貸出の總額が著しく超過しつゝある事實によりても、之を知ることが出來る。試みに大正三年以來全國銀行の預金總高及び貸出總高を揭ぐれば左の通りである。(大藏省銀行局調査)

全國銀行の預金及び貸出高(單位千圓)

	預金	貸出
大正三年末	二、三二八、八六〇	二、八二六、五七〇
同　四年末	二、八一一、〇一八	二、九九六、七三一
同　五年末	三、八三三、二〇六	三、八四〇、五七四
同　六年末	五、七三九、七九四	五、一三二、九六七
同　七年末	八、二〇九、七七八	七、四三四、〇一三
同　八年末	九、八八三、〇九八	九、八八一、五九八
同　九年末	九、八三一、九二六	九、七三九、六七一
同　十年末	一〇、四一五、〇九〇	一〇、五四七、四四一
同十一年末	一〇、二五八、六二八	一〇、九八三、二六五
同十二年末	一〇、五七三、五四六	一二、〇五〇、八三七
同十三年末	一一、〇一九、七六七	一二、三一五、四八〇
同十四年末	一一、〇四三、六九三	一二、一五四、四六四
昭和元年末	一一、四一五、七九六	一二、五五四、六二六

我國の銀行勘定は預金貸出とも大正三年末に二十億臺であつたものが十二ケ年後の昭和元年末には百一、二十億臺に增加してゐる。是は著しい進步で國力の增進を具體的に表示するものと解して差支あるまいと思ふ。併しながら我銀行界の變態現象とも云ふ可きことは預金と貸出の間に開きが殆どない。開きが少いのはまだよいとして貸出總額が殆ど常に預金總額に超過してゐる。而かも此の兩三年は其超過額が目に立つて甚しい。右表の數字に就て簡單な說明を試みれば歐洲大戰中の好況時代には少額ではあるが預金の方が貸出に超過してゐた。大正六、七、八、九年の實績は卽ちそれである。ところが大正十年以後は常に貸出が預金總額を超過してゐる。大正十年末には一億三千萬圓、十一年末には七億二千萬圓、十二年末には急增して十四億六千萬圓(此年は大震災の年である)、十三年末には十二億七千萬圓、十四年末には十一億一千萬圓、昭和元年末には十一億四千萬圓の貸出超過である。

元來銀行の貸出なるものは預金額との間に幾分のゆとりを置

き融通さる可きものである。然るに我國の銀行貸出は預金よりも却つて一割も多いといふ變態的の遣方である。是は危險な遣り方であること勿論であるが、此危險な遣方は銀行の收益を多くする爲めに、或は又事業界の生産資金を豐富にする爲めに貸出してゐるのではない。計數上では預金の總額に一割も超過する程貸出してゐても、事業界の實際は資金難に苦みぬいてゐる。といふのは此の貸出は銀行から新に貸出したのではなく、既に死せる貸出をも依然貸出と看做し或は又利子の如きも不拂のものを新な貸出しとして計上してゐるから、如何に貸出の數字が殖へても生産界では資金豐富の利益に浴してゐない譯である。詰り貸出が預金より遙に多いことは不良貸未整理貸が非常な額であるといふことを語るものである。尙は此事實を證明する他の一つの點は財界好況時代には貸出が預金よりも少く、不況が深刻になるに從ひ貸出の額が却つて激增し、預金に對する貸出超過の程度も增加してゐることである。銀行の貸出がノルマルの狀態であるならば、好況時代には貸出が增加し、不況時代には減少す可きものであるが、我國の貸出しは正しい意味の新規貸出ではなく、コゲ付の增加であるから不況時代に却つて貸出の數字が增加すること丶なる。要するに不況時代に貸出の數字の激增してゐることは大體觀として滯り貸が如何に多いかを證明するものと云はなければならない。

八

斯樣な次第であるから私は銀行が何とか整理されなければ財界の堅實な恢復は六ケ敷いと考へてゐる。大藏省が頻りに奬勵してゐる銀行合同も其一策には相違ない。然し大規模の銀行が必ずしも堅實といふ譯ではない。現に一億圓からの公稱資本の大銀行で不良貸の始末に困り拔いでゐるものもある。私の欲する所は規模の大小に拘らず內容の堅實であることである。地方の銀行などは大銀行であることを必要としないが、如何なる場合にも內容の堅實といふことは必要條件である。銀行の合同奬勵は此趣旨を誤らないことが必要である。

銀行の內容を刷新するためには極端なる不良銀行の破綻は已むを得ないことであるが、尙ほ或る程度の不良銀行を合同せしむる場合には、必ず同時に整理を行ふことを忘れてはならぬ。マイナス銀行が其まゝ合同しても、マイナスが大きくなるばかりである。此場合に情實を排し、整理を斷行し、合同を行ふたならば玆に初めて內容を一新することが出來る譯である。要するに不良銀行の整理には重役や株主が其不良程度に相當する犧牲を拂はねばならぬ。減資減配などは勿論のことであるが、不良銀

行の理事者は是をすら避け、政府の救濟に便りて其の難局を切拔けんとするものが多い。政府當局でも策略其他の情實から不合理な救濟を敢てすることが稀でない。其の結果は銀行の不良狀態をかばうことゝなり堅實なる整理、健全なる回復を遲延せしむるのみである。愼む可きことである。

* * *

銀行の不良狀態に麻痺してゐる人などは、銀行の貸出が逆に預金に超過してゐることを寧ろ當然のことのやうに考えてゐるから、私は本稿を終るに臨み英國組合銀行の預金貸出比較表を掲げて參考の一助としたい。（左表はBankers' Magazine, London 本年一月號から轉載したものである）

英國手形交換所組合銀行の預金及び貸出高（單位千磅）

	一九二五年末	一九二六年末
一、預金總高	一、六五六、五七七	一、六六〇、一三二
一、現金及び英蘭銀行預金	一九一、二九六	一九四、八四三
一、コール・マネー	一一五、三七五	一二一、七五九
一、手形割引	二三七、九二五	二二二、一九六
一、貸付	八五三、三五二	九〇三、一三一
一、有價證券	二七七、一六九	二六七、一七七

右表に依れば一九二六年十二月現在の手形割引は預金額の一三％二で、貸付は五三％六である。此二口を合計したものゝ預金に對する比率は六六％九である。即ち總預金の約七割が割引及び貸付に用ひられてゐる計算である。英國の銀行は堅實第一を主義としてゐること何人も知る所であるが、預金銀行としては正に斯くある可きことである。而して此の主義は右の簡單なる數字の上にありても遺憾なく表徴されてゐる。不良貸に惱める我國の金融機關を整理し、預金銀行の經營方針を新刷せんと欲するものゝ一考す可きことであると思ふ。

——昭和二・三・三一——

沒落期の政黨政治

馬場恒吾

人氣のなくなつた役者が、何んとかして見物の目を惹かんとして、妙なケレンをやる。故らに馬鹿の眞似をする。果ては盲目的に跳回はる。そして益々見物に愛想を盡される。それにも似たのが今年の議會であつた。又今年ほど議會が露骨に世間から見放された事はなかつた。東京の新聞は申し合せたやうに議會記事を省略した。去年迄の例では、議會記事となると、何時何分に議長が開會を宣し、書記官が諸般の報告をしてから書き出して、誰れが登壇、何んと演說して、誰れが彌次つた迄書いた。其上に議會雜觀と云ふ別見出しを付けて、各黨の控へ室で集めた代議士の逸話まで掲げたものだ。新聞に一寸でも名の出ることは、選擧區への廣告になり、從つて選擧運動費の足しになると云ふ理由の下に、新聞記者の前には顏を突き出しても、名前を書かれ度く思ふ代議士に取つては、かうして新聞に彼等の行動を大小漏れなく書かれる事を、非常に喜んでゐた。然るに今年は何うだ。雜觀は東京の新聞からは全然影も沒して了つた。本會議の記事も、開會から散會迄、速記錄の拔粹と云つた形式も全然採らなくなつた。何か變つた事でもあれば、貴族院、若しくは衆議院で、何時頃こんな事があつたとのみ報道する。其外に議會で誰れが演說しやうが、何が議せられやうが、それは全然新聞に載らなくなつた。所謂一言居士と云はれて、如何なる問題でも一言なかるべからず、そして新聞に名前を出されざるべからずと云ふ事を、生活信條としてゐる代議士は、今年は顯微鏡で探しても、自分の名を新聞に發見する事が出來ず、世界が變化した事に對して、大に悲觀の色を漂はした。だから議會が將さに終らんとする間際に臨んで、政友會の柔道の達人、其他武勇に秀でたる者が、舊革新俱樂部の清瀨一郎氏の

演說に腕力の制裁を加へ、今一息で絕命させんと云ふ所迄行つたのは、かうでもしなければ彼等の存在を世間に知らしめる事は不可能であると考へた爲めかとも解せられる。さう云ふ操觚的の考へはなかつたにしても、事實としては、彼等は此活劇亂鬪に依つて、初めて其存在を新聞に認めしめ得たのである。恰も役者が藝では觀客を引き付ける事が出來なくなつたから、舞台で本當の喧嘩をして見せると云ふ類である。

議會が何故にかうまで世人から見放されたかと云へば、それは今の政黨が愛想を盡かされてゐるからである。地方に行けば代議士の演說が今尙あるやうであるが、東京では代議士の演說會がある事は殆んど聞かなくなつた。あつても氣の利いた者は聞きに行かない。何となれば政黨の代議士は政黨の云ふ事を云ふに極まつてゐる。そして政黨の云ふ事は其時々々の都合で何うにでも變はるものである事が、過去の事實で證明されてゐるのだから、其云ふ事が少しも當てにならない。口で云ふ事を腹で思つてゐるのか、或は腹にもない事を口先き許りで滔々辯じ上げてゐるのか、其所からして已に疑問である。故に彼等の演說を聞いても、つまらないと云ふ事になる。

代議士や政黨や、惹いては彼等が組織する議會がかうまですつかり世人に見捨てられたのを、自然の運命だと云つて了まへばそれ迄であるが、此自然の運命に千萬無量の悲しみと苦悶も含蓄されてゐる。人の死ぬるは自然の運命である。併し死ぬる間際まで、生に對する執着が色々の形ちで現はれる。今の政治家は不合理な權力を握つてゐる。其不合理な權力を維持する爲めには當然不合理の手段に出でなければならぬ。どんな手段を盡くしても不合理な權力は消滅するのが自然の運命だ。併し彼等は最後迄其不合理な權力に對して執着してゐる。其斷末魔の苦悶が第五十二議會で露骨に現はれた。

先づ衆議院を見ると、此衆議院は解散がなくとも今一年で任期が盡きる所であつた。然るに議會の初めに政友會と政友本黨が提携して朴烈外二問題で內閣不信任案を提出して來たときは解散の空氣が濃厚であつた。それが今迄の解散ならば、各政黨、各代議士共に、今迄の經驗に依つて、大體選擧の手心も判り、見當も付く。所ろが今度解散にならば普通選擧で選擧が行はれるのである。それは今迄飛び込んだ事のない海である。中に河童がゐるか、暗礁があるか、一切見當が付かぬ。だから自然彼等の足が悚くむ。三黨首妥協して代議士の生命が一年延びたとき、彼等は口では色々の熱を吹いてゐたが、實際は一人殘らずほつとした。憲政會の黨員は我黨內閣の時こそ總選擧を行ふべき絕好の時機であるに關らず、首相若槻氏が三黨首妥協をやつたのに

怪しからんと突つか掛つた。それなら眞實彼等は解散を歡迎してゐるのかと思つたが、內情を聞くと彼等も矢張解散を歡迎してゐなかつた。其證據には、眞に解散を歡迎してゐるものならば、議會閉會後にでも解散論が起りさうなものであるが、憲政會に於て誰一人さうした議論を發表したものがない。今は皆んな解散の事は忘れて、先づ一年丈け代議士としての壽命が延びた事を祝福してゐる。

　これは平代議士の事であるが黨の首領としても其心持ちは甚だしく違つて居らぬ。尤も若槻首相の方は眞逆に三黨首妥協があのやうにたわいもなく成立しやうとは豫想してゐなかつた。問題になつてゐる『深甚の考量を拂はれん事を望む』と反對黨の首領から云はれたとき、若槻氏は拂うとも拂はぬとも云はなかつた。只例の昭和新政の初めの豫算を成立せしめ度いと云つたのみだ。それで反對黨が承知しなければ、事玆に到つては已むを得ぬと云つて、議會を解散する積りであつた。所ろが、反對黨が存外譯けもなく妥協に應じた爲め、若槻氏は當てが外づれた形になつた。世間では之を智者智に溺ぼれたと批評した。餘りに手が見へすぎる爲めに、ツイ餘計な手を打つて失策したと云ふ意味である。併し三黨首妥協は憲政會の黨略から云へば失敗であつても、全ての代議士から一年壽命が延びたと感謝される事から云へば成功である。

　それにしても政友會總裁の田中義一大將は何故あんなに容易に妥協に應じたものだらうかと云ふ事が問題になつた。一杯ペテンを喰つたのではあるまいかとさへ云はれた。田中總裁が此批評に答へて、『木戸錢を拂はないでもよい見物は解散を喜ぶだらうが、總選擧の費用を拵へる身になつて見ればさうは往かない』と云つたさうだ。政黨を有つ者は總選擧の費用として、どうしても二三百萬圓を拵らへねばならぬ。もしそれが出來なければ政黨首領の資格がないとして、政黨から放逐される。其前例は日本の憲政史に幾らもある。政黨首領の末路は板垣、大隈、伊藤、桂、犬養、高橋、何れを見ても落寞たるものがある。さうした悲劇の原因が重に金に關係した事である事を考へるとき、田中男の述懷も恐らく其本音ではなからうかと思はれる。

　何の政黨首領も首領となつてゐる爲めに、從つて政權を取る爲めに、莫大な資本金を作らねばならぬと云ふ事實が、現在の政治は搾取の上に立つと云ふ特長を付ける。二百萬、若しくは三百萬と云ふ金は如何なる形に於てか不當な搾取をするか、或は搾取した金の上前をはねるかでなければ出來るものでない。其金がなければ政黨も存在せず、政黨首領も存在せず、政黨內

間も存在しないと云ふ所の、爭ふべからざる事實を認める以上は、現在の政治は搾取を基礎として立つと云ふ斷定を認めざるを得ぬ。搾取の基礎の上に立つ政治が不合理である事は云ふ迄もない。啻に不合理であるのみならず、永續性がない。搾取は搾取される一般人民が默つて搾取に甘んじてゐる間のみ存在し得る。現在の如く、搾取者が憎惡の目を以て諸方から睨まれる時勢になつては搾取は永續しない。從つて其上に立つ政治も永續しない。此政治上の資本主義は經濟上の資本主義と同じく何日かは自然に崩壞すべき要素を其素質の中に含んでゐると云つてもよい。何となれば、政黨の費用は殆んど際限なく嵩む。總選擧資金の額が總選擧毎に增加して、とても政黨首領若しくは少數幹部の力では集める事が不可能になるからである。

併し現在では政黨は資金なくして存在を保つことが出來ぬ。總選擧に際して、政黨は各候補者に公認料として、即ち選擧運動費の補助として一萬圓內外を出す。尤も金持ちの候補者には政黨から出さずして、却つて出させる事もある。其他の候補者に向つても一萬圓とは定まつて居らぬ。必要の程度と當選の可能不可能を考量して五千圓位の場合もあり、或は二三萬圓からに上る例もある。併し平均一萬圓として政黨首領は豫算を立てゝゐる。だから、候補者を三百人立てるとすれば三百萬圓、二百人で我慢すれば二百萬圓である。勿論選擧運動費は此公認料のみで濟む譯ではない。候補者は其の外に各自四五萬圓の金を算段して、選擧に出る。それは候補者自身の緣故を辿つて拵らへる金である。政黨に依つては、公認料を出す前に、候補者自身で幾許の運動費が出來るかを調査する。少くとも二萬圓位は自力で作る力のあるものでなければ、公認候補者とせぬ。從つて公認料の一萬圓も遣らぬ。それは金を拵へる腕のない男は、選擧に出ても當選覺束ないと云ふ、かうした原則が、政黨幹部の信條になつてゐるからである。

扨一萬圓宛出して立候補さした候補者の幾割が當選する乎。過去の選擧の經驗によると政府黨ならば七割が當選し、在野黨ならば五割だと云ふ事である。だから假りに玆に憲政會が政府を取つてゐる今日總選擧を行ふとして、三百萬圓の資本を拵らへて三百人の候補者を立てるとする。其七割が當選すれば二百十名の代議士を得る。衆議院の總數四百六十四名の過半數は二百三十三名である。七割當選した二百十名ではまだ二十三名足らぬ。其二十三名は憲政會には黨籍を置かないが併しそれに好意を懷く者と及び何の內閣の時でも常に政府の御用を聞く實業家出身の代議士で頭數を揃へる。それで衆議院の過半數を占めて政策を行ひうると云ふ豫算になるのである。

これは政府黨としてゞある。在野黨としては五割の當選率しか當にならぬが故に、二百名の代議士を得んが爲めには四百名の候補者を立てねばならず、四百名の候補者を立てる爲めには四百萬圓の總選擧資金を作らねばならぬ。それ故に三黨首妥協の時の田中政友會總裁床次本黨總裁が解散か妥協かの瀬戸際に立つたとき、即時に妥協に走つたのも無理はないと同情するものさへある。

かうした狀態に直面して見れば、政黨の大小は大部分は黨に積む金の大小に依つて決せられる。だから憲政會とか政友會とか云ふ四角張つた名前を付けるよりは、寧ろ三百萬圓黨とか四百萬圓黨とか、銀行會社の如く資本金公稱の方が簡短明瞭には行くまいかとさへ思はれる。少くとも政黨の實體は銀行會社と同じく資本金の多少に於て其大體の構へは決定してゐる。主義政策の如きは第二義的の重要さしかない。これ丈けの事は世人が誰れでも知つてゐる事であるから、政黨其ものが馬鹿々々しい感じを與へるのは止むを得ない。若槻、田中、床次如何に偉らくとも、金を拵らへる段になつては、岩崎、三井一家には及びもつかず、或は其所らの株屋にも劣るであらう。政黨の原動力が金と云ふ事に分析された以上は、かうした政治家よりは金作りの上手な銀行家若しくは實業家をして政黨を計營せしめた方が能率を上げる方法だとも云へる。それは言論機關である新聞が漸次實業家の支配する所になりつゝある現狀と少しも變りはない。

それのみでない。今の代議士で嚴密に云つて選擧違反にかゝぬらぬ代議士が幾人あるか疑問である。都會地に於ては投票買收は殆んど跡を絕つたらしい。それは必ずしも正義感ばかりからさうなつたのではなく、都會人は多忙な上に比較的金儲けの機會が多いが故に、投票を賣つて五圓や八圓貰つたが爲めに、拘引でもされては損だと思ふ。その利害の打算から彼等は賣收に應じない。然るに地方農村では今尚買收が行はれる。質の惡るい地方では、全ての候補者から金を取つて、其内に最も多く呉れた者に投票する。質の惡くない地方でも、選擧場に行く日當を出さなければ、有權者が棄權して了ふ。かうしたことは警察でも知つて居り、白晝公然と行はれる。何故それを選擧違反で檢擧せぬかと云へば、若し一々それを檢擧したならば、全國では何百萬といふ犯罪者が出る。それを收容すべき監獄もなければ、亦到底そんなことが實行出來るものでない。だから選擧違反で檢擧されるのは選擧ブローカー、運動員と云つた樣な、金を遣つた方の重なるものにして、一般の買收された方は先づ大抵の場合に見逃しにされてゐる。それが實狀である。

其實狀は代議士それ自身はよく心得て居る。只そんな事を公言すれば、自分が代議士たる面目を失ふが故に、彼等自身としては公言しない迄である。だから、現在代議士となつてゐるもので、嚴密に云つて實際代議士をして居る資格があるものが幾人あると云ふ疑問が起る。投票買收に依つて代議士になつた者は眞正の代議士ではない。只代議士の假面を被つてゐるのみだ。此內部のからくりが世間一般に知られてゐるのだから、代議士と及び彼等の組織する政黨が信用を失つたのも已むを得ない。

普通選擧になつても、急に此投票買收の弊は已むまい。買收の金高を前の選擧の時に比較して値下げをする事さへ困難である。然るに今迄の選擧で二千五百票買收して濟むものならば、今度は一萬票買收せねばならぬ。選擧運動費が五萬圓かゝつたものならば二十萬圓要る。此計算が現在多くの代議士の頭を惱ましめつゝある。

かうして選ばれた代議士、かうして作られた政黨、其政黨の頑張る衆議院は法律的又は形式的には代議士、政黨、衆議院と云へるであらうが、常識から、直觀から云へば何處にか僞物であるかの如き感じがする。其製作過程が不合理であるからだ。其ものは早晩沒落崩壞すべき必然的な運命に面してゐる。だから世間は之を見放したのである。

世間から見放されてゐる事は彼等自身にも漸々氣が付いたらしい。田中政友會總裁は三月二十八日黨の幹部に演說して、『既成政黨の現狀に對しては國民の間に隨分辛辣なる批判が行はれてゐるが、我々は決して悲觀せず、自から革める云々』と云つた。既成政黨に對する批判はそれが金で拵しらへたものだと云ふ點にある。それを改めると云つても彼等は金なしの選擧を行ふ事を不可能とする。それは政友會のみならず、他の政黨も同じ事である。若し强いて行はんとすれば彼等は消滅する。それが出來ない內は、政黨の本質は改まらないのである。

兎も角も、何れの政黨も世間から見放され、そして沒落の運命を辿りつゝあると云ふ豫感に襲はれてゐる。第五十二議會に於ける彼等の非常識も脫線も皆此豫感のなせる業である。

三黨首の中でも、沒落の豫感に最も脅かされてゐるものは床次本黨總裁である。彼れは何んとかして早く政權に辿り付いて、政府を有つ力で本黨消滅の運命を免れんと希望してゐた。其爲めには手段を擇はずして、政權を取る事に焦つた。彼れ朴烈問題で政友會と提携して、政府不信任案を出して、今の政府は皇室に對する觀念を異にする不倶戴天の敵とまで罵しつたそれが彼の眞意ではなく、只政友會に引づられた爲めに、豚々

ながら、かうも云はざるを得ない立場になつたのである。心情を酌めば寧ろ氣の毒であるが、さう云つた口の下から、彼れは政府黨と鞏固なる聯盟を結んで、以て政局の安定を計ると云つた。昨是今非、政治家の無節操を責めるのはまた事實の根柢を見極めたものでない。溺れんとするものは藁をも把む。生死の界に立つてゐる政友本黨は生きんが爲めの手段を擇ぶ暇はない。憲政會と聯盟を作つてゐれば床次内閣が出來るかの如く匂はされたので、忽ち不倶戴天の敵とも聯盟を辭さないのである。

憲本聯盟が成立してから後、床次氏は若槻さへ辭職すれば政權は必ず自分の手に來るものと豫想してゐる。だから、機會がある毎に人をして内閣に辭職の催促をなさしめてゐる。議會が開かれる前にも、自分で若槻首相を訪問し、次ぎに貴族院の研究會を使つて辭職勸告をなさしめた。其時は若槻首相は議會解散の決心でゐたから、辭職勸告を鼻であしらつた。憲本聯盟が出來た後はさう鼻であしらう譯けには行かず、只自分も疲れたから永く現職に止る譯けには行くまい位の事を云つて居る。

かうまで苦心した結果、床次氏が近く政權を握る事が出來るかと云へばそれが甚だしく心細くなつてゐる。彼れの反覆表裏は極端に國民の信望を失つた。彼れは憲本聯合懇親會の席上で、衆議院の多數を占める此聯盟の力で政局を安定せしめるのが憲政の常道であると演說した。恰も自分を首相に推薦せよと、元老西園寺公に向つてデモンストレーションをした格恰になつた。併し近來の西園寺公は其晩年を汚さゞるが爲めに、國民の輿論に聞く事を專一に念掛けてゐる。彼れも已に輿論に反抗して不人氣な總理大臣を推薦する力を持たぬ。(茲にも舊勢力が崩壞する一例が示されてゐる。)それ故に、床次氏の不評判なる事、(無節操の彼れに首相の地位を與へるのは國民の風教に害ありと迄云はれてゐる)は彼れの首相になる可能性を極端に少なくするものである。

併し床次氏が首相として推薦されない場合に憲政會内閣が再び出來ると云ふ事も期待されぬ。若槻氏の辭職が例令病軀其任に堪へずと云ふ理由でなされたとしても、西園寺公が今一度憲政會内閣(其の時の總裁は濱口になつてゐても)を推薦するやうな事は絕對にない。其理由は西園寺公は已に三度續けて憲政會内閣を推薦したからである(大正十三年に加藤、十四年に再び加藤、十五年に若槻)。さう重ねて憲政會ばかり贔屓にする譯に行かぬ。と西園寺公はさう云ふ遠慮をする。以前には元老が内閣首班を奏請するとき其人に私恩を賣ると思つた時代がある。其の觀念が今尙多少殘つてゐるのである。

政友會、本黨共に政權を握ることを期待してゐるがそれは、若

槻首相が辭職する事を前提としてのみ期待される事である。然るに若槻首相は果して辭職するであらうか。それが疑問である。

世間では若槻首相の辭職は確定してゐるものと思つてゐる。併し何故に辭職せねばならぬかと云ふ事を、私は政界各方面に探し廻つた。それを誰もハッキリと知つてをらぬ。若槻腹心の關係ですら、若槻のやる事は判らぬ。三黨首妥協だつて、閣僚に相談しなかつた位だものをと云ふ。然らば何故に辭職が確定的に豫想されるかと云へば、それは三黨首妥協に依つてさうした空氣が作られたのである。あの妥協、其前後に於て首相は別に辭職の約束はしてない。只三黨首妥協に依つて豫算が通過した事は爭へない事實である。若槻一人の力では豫算は成立しなかつた。豫算の成立の爲めに田中、床次二黨首の力を借りた。だから此儘辭職せずに居る爲めには此二人に何とか挨拶せねばならぬ義理が殘つてゐる。其挨拶が辭職より外に挨拶の仕様がないと云ふのが、若槻辭職説を生んだ氣團氣である。所ろが若槻首相に云はしめると『深甚の考慮』は向ふが云つたので此ちらは考慮するともしないとも云はない。それは彼れが公會の席上で屢々言明した通りである。彼れは辭職しなくとも、別に何處に信義を欠く事はないと云ふ立場に居る。

それたらば、若槻首相は辭職しないか、さう斷定するのも早計である。若槻腹心とも云ふべき安達遞相は若槻は辭職するものと見極めを付けて、それでも其政權を全部手放しするのか厭さに憲本聯盟の作者になつた。憲政會の若手代議士百十名は若槻を辭職せしめざる運動を起した。その連中は床次内閣か成立しても、憲政會は其内閣に入るべからずと云ふ主張を有つてゐる。彼等は云ふ。政友本黨とは何者ぞ。特權階級を代表する貴族院の走狗ではないか。護憲運動の敵ではないか。普選法案に反對の投票をしたものではないか。そんな者と提携援助しては憲政會は國民を裏切る。從つては滅亡の淵に突貫するものだと、此議論を以て、彼等は だから辭職してはならぬと若槻氏に迫つた。若槻氏は辭職するとも、したいとも云はなかつた。蓋し、まだどちらとも決心してゐないと云ふのが、事實の眞相であらう。

併し若し彼れか辭職すると決心するならば、其原因は貴族院にある。三黨首妥協、憲本聯盟に依つて作られた所の彼の辭職の氣團氣は、只それが氣團氣たるが故に、彼をして辭職せしめる決定的の理由を含んで居らぬ。本黨に對して種々の義理に絡らまれてゐる事は事實である。併し今日の形勢が示す如く、若槻内閣が辭職すれば、政權が本黨に行かずして、政友會に行くべき可能性が多い場合には、彼れが辭職が直ちに其義理に酬ゆる途にはならぬ。

雰圍氣は問題にならぬ。若し若槻首相をして辭職せしめるものがありとすれば、それは貴族院である。我々局外者は貴族院何者ぞと考へる。併し實際の政局に當つてゐるものは貴族院を鬼以上に恐がる。何となれば無反省の華族は貴族院の特權を栖として、政局を專制君主的に支配しうるからである。貴族院の特權とけそれが解散せられない制度になつてゐる事にある。勅選議員上級華族(公侯は終身議員である。他の華族は七年の任期である。だから、それらに頑張られては政府は一たまりもない。

殊に貴族院の研究會は政治に策動するを以て商賣と心得てゐる。大正十三年の清浦內閣は彼等の策動に依つて作られた。其時の護憲運動に叩たかれて、少しは懲りたやうであつたが、近來再び策動し初めた。第五十二議會で貴族院は豫算案で揉み、震災手形案で揉んだ。其揉むのは事實が示すが如く、敢てそれを否決せんとするのではなく、只意地惡るく揉んで、其內に政府から辭職すると云ふ言質を取らんとしたのである。政府が辭職すれば彼等は政權ブローカーとして活躍する機會を得るのである。

議會が將さに終らんとする前日、貴族院は國政振作に關する決議案なるものを議した。それは研究會ではなく、寧ろ政府反對黨である公正會中心で提出された。提出者の阪谷男は說明演說に、是れは政府に對する不信任案でも、辭職勸告案でもない。只今日は重大な時機であるから、心から國政振作を希望して、國民の決心を促がさんとするものだと云つた。所ろで此決議案は千古の惡文で何が趣意やら捉へ所のないやうに書いてあるが、其中に

『方今國家の綱紀弛緩し云々、此時に當り、內外の政務は動もすれば其宜しきを失し云々、帝國の前途轉た深憂に堪へざるものあり云々』

だから國政を振作せねばならぬと結んで居る。若槻首相は此決議案を政府彈劾案だと見て、若しそれが貴族院を通過すれば彼れは直ちに辭職すると決心してゐた。さうすれば今一度貴族院に向つて徹底的の戰ひを始める事になるからである。然るに研究會が此決議案に反對した爲めに、決議案は否決され、折柄の貴族院征伐の意志が闇から闇へ葬られた。

研究會は何故此決議案に反對したか。それ彼等の狡猾な心理狀態から、表面に立つて、內閣を倒したと云ふ責任を負ひ度くないからである。彼等の戰法は姑が嫁をいびる如く、常に眞綿で首を絞めるのである。此議事に際して、決議案反對、即ち政府辯護の演說をした所の、研究會代表者林博太郎伯は『立つ鳥は跡を濁さず、若槻首相は定めし立派な退却をなさる事と、我々は信ずるのであります』、だから此決議案には反對すると云つ

たのである。

此要點を別にしても、林伯の演說は貴族院と研究會の生活態度を代表するものとして、天下の記憶に値する。彼れは眞劍に政治上の主張を貫かうとするのではなくして、寧ろ骨董でもいぢくる態度で政治を取扱つてゐる。彼は演說して曰く『貴族院は政治に餘裕あらしめる。人生には詩がなければいけませぬ。金ばかり溜めてゐると云ふ實業家では一生涯浮ぶ瀬がない』。其時の一例として屋島の合戰の時那須與市が日の丸の扇の的を射つた物語りを、平家物語か謠曲から覺へてゐたと見へて永々と獨誦してゐる。其扇を持つてゐたのが玉蟲前と云ふ美人であつたと云つて、其美人の形容を詳しく述べた。そして其扇が宙に飜へつたとき、玉蟲が詠じたと云つて、『時ならぬ、花か紅葉を見つる哉、芳野初瀨の麓ならねど』といふ歌まで暗誦した。それを玆で私が引用するのさへ氣恥づかしく感ずる事を、貴族院の演壇で、滔々と喋つたである。彼れは何飽きたらず、芝居の劇評まで此演說でやつた。曰く『三津五郎の藝は蒸溜水、菊五郎の藝は山を歩るいて疲れた時に滾々として湧き出づる山の水を一滴飲んだ氣持ちがあるのであります』と此幽の浮くやうな演說はすべて、若槻に切腹を迫るやうな決議案を出すに及ばぬ『自然に死ぬものは貴族院議員として、もどうも致し方がない。死屍に鞭たずと云ふ事は武士道の德であります』と云ふ事を說明する爲めであつた。

貴族院では三四年前前田利定子（遞信大臣であつた人）が春雨演說をした。華族はかうした消閒的詩人の氣分に浸たる事を以て得意としてゐる。各國の歷史を見ても貴族は滅び行く階級である。特權の溫室から出た事がないから、筋骨が軟弱になり、酒色に耽ける餘裕がある爲めに、精神が弛緩する。それ故に、滅び行くのは自然の運命で免かれんとしても到底、免れ難い所だ。貴族院の演壇で花や紅葉が朗吟さるゝ事が已に彼等の沒落の兆と云ひ得られる。併し彼等は沒落の運命に迫まられてゐると云ふ事を自覺せぬ。それを自覺する程の聰明さへ持ち合せてゐない。長袖能く舞ふ。それは彼等の死の舞である。只當人が知らぬ丈けだ。

沒落期に直面してゐる所の衆議院や貴族院の連中は餘り問題にする價値がない。只現在の政局に於て殘されたる問題で、多少なりとも吾々の關心を惹くものは普通選擧を誰れが實行するかと云ふ事のみだ。若槻首相が貴族院、本黨、若くは政友會との關係の爲めに進退を決せんとするのは、問題の本末を忘れた事だ。彼れが進退は普通選擧を實行する責任を考へて決すべきだ。

普通の政務を處理する內閣としては何の政黨內閣も大差はな

い。何となれば彼等は何れも搾取を基礎とする政治を維持せんとするからである。只普選を初めて實行する內閣としては比較的に現在の憲政會內閣を適任とする。普選法を成立せしめた議會の時に今の若槻首相は內務大臣として、普選法案の通過を妨げるものがあらば、自分は辭職すると云つて、辭表を懷ろにして閣議に列した。普選法が曲りなりにも成立したのは、憲政會五六年の努力が與つて力ある事は認めてやらねばならぬ。當時衆議院で普選法に賛成した政友會は貴族院と策應して、陰かに其成立を妨げんとした。政友本黨は正面から普選に反對した。だから、今日になつて憲政會が普選に依る總選擧を行ふに躊躇するのは、卵を產み放しにする家鴨に似て、其政治上の責任を知らざるものだ。

三黨首妥協が不評判であるのは、それに依つて普選實行の責任を若槻內閣が回避した結果になつたからである。憲本聯盟に依つて、床次內閣が成立し、それが總選擧を行ふ事になれば、若槻首相は普選に反對したものに、普選實行の任務を讓つた事になる。それは彼れが普選に對する誠意を疑はしめるものである。田中男と其率ゆる政友會はそれが議會に於てなしたる暴力行爲が示す如く、伊太利のムツソリニ式の彈壓政治を行ふには適するかもしれぬが、到底、普選に對して正當なる理解を有するものとは思はれぬ。若槻內閣が何日退却するともそれは敢て吾吾の問ふ處ではない。只それは退却する前に、普通選擧に依る總選擧を行ふべき義務を負つてゐる事を忘れてはならぬ。

第五十二議會に於ける、變態的の政情は各政黨共に沒落期の症狀を呈してゐるものである。若し彼等に民衆と共に國家を背負つて立ち得るといふ自信があつたならば、彼等も變態的な政治行動をせずに、まつすぐに總選擧に進んだであらう。所ろが彼等には最早其自信がない。彼等は今迄が制限選擧に依る少數の有權者を懷柔して其地位を得たのみだ。だから眞の一般民衆の中に飛び込むのが恐ろしい。殊に世間から見放されてゐる事を彼等自身も感じつゝある。故に、彼等は勇氣を振つて、國民の中に行くよりは、何か拔け道で政權を握らんとする。本黨の朴烈問題がそれだ。三黨首妥協がそれだ。憲本聯盟がそれだ。すべて憲政の常道ではなくして、國民の背後を通る拔け道である。沒落期の政黨はかうして斷末魔の苦しみに悶へつゝある。貴族院の狂態痴態に至りては沙汰の限りである。併しこれもどうせ永い命ではあるまい。只斯の如く、何れを見ても瀕死の病人然たる政治團體が、新興日本の支配階級として頑張つてゐる。それが可能である事のみが限りなく吾々を悲觀せしめるのである。（二、四、六）

『機密費』並に『金塊』事件

(臨時軍事費特別會計の總決算)

法學博士　清　瀨　一　郎

○「臨軍」の構造

「ボスニヤ」の一市で放たれた拳銃の煙は、擴がり、擴がつて全歐洲の天地を包み、遂には東亞の空にも及ばんとした。帝國は獨逸に對し、青島の武裝解除を勸告したが、彼は之に對し回答を與へない。そこで大正三年八月二十三日、對獨宣戰の詔書は發布せられた。「朕、茲に獨逸國に對して戰を宣す。朕が陸海軍は宜く力を極めて戰鬪の事に從事すべく、朕が百僚有司は宜く職務に率循して軍國の目的を達するに勗むべし」と。之と同時に戰時豫算を議定する爲めの臨時議會召集の詔書が發布せられた。議會は九月三日に成立し、十日に閉ぢた。此間に議したのが彼の「臨時軍事費特別會計法」(大正三年九月十日法律第四二號)である。此會計法はタッタ一箇條の法文から成り立つて居るのである。簡單であるから今、其全文を掲げる。曰く、

「大正三年臨時事件ニ關スル臨時軍事費ノ會計ハ一般ノ歳入歳出ト區分シ、事件ノ終局迄ヲ一會計年度トシ特別ニ之ヲ整理ス」

と。毎年の一般會計や、其他の特別會計は、孰れも、其年の四月一日を以て始まり、翌年の三月三十一日を以て終り此間を一會計年度とするのであるが、此「臨軍」會計は、事件の終局までを一會計年度とするのであるから、何年つゞくかも判らぬ。尤も、日清、日露の戰役の場合に於ても同樣な規定に依つたが、彼の場合に於ては、平和克復を以て事件の終局と見、こゝで特別會計を打ち切つた。此度の場合は、平和克復(巴里平和條

約）を以て事件の終局とは見なかつた。それは西非利亞出兵といふものが殘つて居つたからである。西非利亞は撤兵しても、樺太の保證占領が殘つた。遂に此會計を打ち切る時期がなくなつて、大正十四年に此會計法を廢止するの法律を作り、大正十四年四月一日を以て此會計を締切つた。此間年を閲すること十年六ケ月。內閣を更ふること八回（大隈、寺內、原、高橋、加藤（友）山本、清浦、加藤（高）會計檢査や、決算は、年度終了後に始めて着手せられる。十年六箇月の間無檢査、無決算の此會計。紊亂せさらんと欲するも、豈、得べけんや。

加之、此會計は、仲々便利に出來て居る。其歲出は一欵、二項より成り立つて居る。

第一欵　臨時軍事費

第一項　臨時軍事費

第二項　豫備費

といふだけの立て方で、何でも彼でも使ひ次第である。さすがの當局も、これでは少々心地が惡いと考へたか、「臨軍」の引き出しには、豫め目的を示して勅裁を乞ふ事に申合せた（大正三年九月十二日、內閣大甲第一二三號）。始めの頃は、眞面目に勅裁目的を尊重したが、遂には勅裁目的も何もあつたものでない。後にも說く通り、出兵費じやといつて勅裁を受けた金で支那米を買入れ、米價調節をやる（因に曰く、軍隊には外米を用ゐず）。人件費じやといつて勅裁を經て靖國神社寄附金に使ふ（宇垣陸相が公金を以て公債を買へりといふ金）。金がいれば「臨軍」で來い。自由自在に切り廻した。

豫算は大正三年の三十四議會に成立した五千百萬圓を台にして、大正十一年の四十五議會に至るまで、前後十一回に亘つて「追加豫算」の形式で接ぎ足したが、（此額七億五千四百萬圓）、何ぼさて、戰時の好況時代を含む十年半、幾億の國庫剩餘金がダブ附いて居る。豫算外の支出（所謂責任支出）は手當り次第に行はれた。回數にして二十五回。金額にして一億五千二百萬圓。始め六回までの責任支出は次の議會に提出して承諾を求めることゝしたが、七回目より、次の議會とは、會計年度經過後の次の議會であつて、臨軍の會計年度は事件終局しなければまだ經過して居らぬと强辯し、次の議會に事後承諾案を提出せぬ。大正十四年四月に、とうとう會計を打切つたから、止むを得ず、昨年の五十一議會に大正五年以來の責任支出の事後承諾案を提出した。これは、衆議院は通過したが、貴族院の議了を見ず、本年また再び提出せられた次第である。

○出兵目的と豫算目的

・九億の「臨軍」の使ひ方は大體以上の如くである。不正、不當の數々は之を擧示するに遑がない。彼の强健な會計檢査院が不法、不當として批難するものでさへ十九件、金額に積つて三千百三十四萬圓。之に使途の怪しい機密費二千六百十八萬圓を加へてもザツト五千七百五十二萬圓。昭和二年度の日本全國の地租額より一寸少く、營業收益稅額より一寸多い。然し乍ら、こゝでは、「臨軍」支出の法規的の當、不當は暫く預る。こゝでは論點を制限して、「臨軍」九億が果して豫算の目的に從て使用せられたかを研究することにする。此豫算は軍事豫算であるが故に、豫算の目的は、軍事の目的である。軍事の目的は出兵の目的である。

兵は國の大事、死生の地、存亡の道、察せずんばあるべからずとは孫子の言である。無名の軍のあるべき筈がない。尤も周圍の事情に制せられ中途にして出師當初と目的に付き變更の生じたのはやむを得ぬが、公に布告せられたる目的以外に陰密目的のあるべき筈がない。作戰には秘密の計略はあつても、戰爭の主眼、目的は炳乎として明ならねばならぬ。左もなくば、兵卒の志氣は勿論の事、國民全體の應援協力を獲ることは出來ない。立憲國家に於ては殊に然り。軍閥者流、果して「臨軍」を其目的の爲めに使用したりと斷言し得るや。

此臨時事件の出兵目的については前後四回の詔書又は告示、聲明に依り、中外に宣布せられた。今一々本文を掲載せぬが（一）第一回は前にも引用した大正三年八月二十三日の宣戰布告である。獨逸は其租借地たる膠州灣に於て日夜戰備を修め、其艦艇を東亞の海洋に出沒せしめ、帝國及與國の通商貿易を威壓する。それ故日英同盟の豫期する全般の利益の爲めに戰を宣すと言ふに在る。（二）第二は大正七年八月一日の西非利亞出兵の宣言である。右は「チエック・スローヷアック」の救出の爲めに出兵するのであることを說明し、特に露國の領土保全を尊重し、併せて其國內政策に干涉せざることを言明して居る。（三）次は大正九年三月卅一日の駐兵繼續の聲明である。西非利亞出兵は「チエック・スローヷアック」軍の救援を目的としたものであるから、同軍の救出を了りたる以上は撤兵すべきものであるが、我國の地理的關係は他國と異り、西非利亞の政情は直ちに滿鮮地方の情況に波及する。且、西非利亞地方には多數の居留民が居るから、其生命財產を保全する必要がある。それ故直ちに撤兵は出來ないが露國に對して何等政治的野心あるものではないと言つて居る。（四）次は大正九年七月三日の薩哈嗹州の保障占領並に後貝加爾撤兵に關する聲明である。尼港の慘劇に鑑み、其善後の交涉を爲すべき政府樹立せられ、本事件の滿足な

ろ解決ある迄薩哈嗹州内を保證占領する者、並に後貝加爾方面に於ては、「チエツク・スローヴアツク」が全然撤退したる爲め帝國も撤兵す。但し、浦鹽方面は、朝鮮に對する脅威が除かれざる爲め、已むを得ず、相當數の軍隊を駐むといふに在つた。――其後十一年二月十二日浦鹽軍亦全部撤兵と決し、同年十月下旬之を完了した。薩哈嗹派遣軍は其後大正十四年五月に歸還したのである。

○知らぬは亭主のみ

以上、四回の宣言、何れも公明正大である。特に繰り返して内政の干渉はせぬことを言明して居る「チエツク・スローヴアツク」救援の目的以外に露西亞の一政派を敵とし、他の政團を援助するなどいふ事は曾て言つては居らぬ。加之、當時の陸軍大臣は議會に於て屢々之を明言して居る。乃ち、我議會は上記各聲明、宣言並に議會に於ける陸相の演説に信頼して數次の追加豫算を議決して居るものと言はねばならぬ。當時日本人は大體斯く信じて居つた。世の消息通なるものが、色々の風説を爲すけれども、「これは異説として取扱はれて居つた。然るに外紙の報ずる所に依れば、我軍は「チエツク」救援の目的の外に盛に過激派と戰を交へて居る。獨り過激派と戰つたのみならず、大正七年十二月以來は、公然白軍援助の爲めに多額の金品を給與して居る。此方針は實に大正九年二月廿二日迄繼續したといふことである。我々國民は半ばは信じ、半ばは疑つた。然るに、それより七、八年後「臨軍」の決算が議會に附議せらるゝに及んで、外紙の傳へた所が裏書せらるゝを見て、國家の爲め悲まざるを得ない。

決算の參考書として政府より提出せられたる「臨軍特別會計始末」といふ書類に依れば、大正七年十一月二十一日の條下に二百四十萬圓の機密費の支出がある。其備考として「時局の關係に依り、後貝加州、黑龍州、沿海州及北滿州に於ける露軍を糾合して、同地方の保安に任ぜしむる爲要する機密費」と在る。備考は簡單であるが、意味は判る。右は七年十一月廿一日の事であるが、これが外紙の報じ來つて居つた、七年十二月より帝國は白軍を援助せりといふに相當するや明である。此外決算參考書に依れば、陸軍は大正九年七月以來「露軍援助費」の科目を設けて前後八十一萬圓の支出をなしたことを證明して居る。其説明を聞けば此時露軍を援助す るために支出したものではないが、それ迄に援助したものを決濟したのであるとのことである。これ亦、外紙の大正九年二月迄、日本軍が「オムスク」、其他の白軍政團を支援せりといふ事に符合する。政府、殊に軍事

當局は、口を軍事秘密に藉りて、我國軍の行動につき說明するに吝であるが、此「臨軍」豫算が、帝國の中外に對する聲明を裏切り、帝國議會を欺き、他國の內政干涉に使用せられたりといふ事實は動かすことが出來ない。此責任は抑々何人が之を負擔するのであるか。

○米價調節と萬歲騷ぎ

臨時軍事費で米價調節をやつたと言へば、世間の人は一寸ほんとうにはすまい。或は糧秣として買ひ入れた米が、其後の戰況の爲に餘剩となり、自然に米價調節の爲めに使はれたのであらう位に想像するであらう。然るに事實はそうではない。始めより「臨軍」の經費を利用して內地の米價を引く爲め外米を買入れたのである。大正八年一月より十一月迄の間に陸軍は外國米四十四萬二百七十餘石を買入れた。之を內地に輸送する爲めの運賃を合して代金として支拂はれたものが、驚く勿れ、壹千六百九十萬七百四十一圓。軍隊には日本米のみを用ゐる。外米は用ゐない。故に始より軍隊にて食ふものでない事はこれで明である。加之、當時の出兵數は五萬人、一年、二石の平均で、一年に十萬石を出でぬ。四十四萬石は四年半分である。これを一時に買ひ集める筈もない。此外米は直ちに、東京、大阪、神戶、門司に荷揚せられ、御用商人に賣拂はれた。御用商人が儲けたか、損したかは說明せぬ。たゞ當時は原敬內閣であつた事を附言して置く。之が爲め農商務省の買入外米は六十萬石手持になり、翌九年、翌々十年に、分けても買つたのが賣り切れず、十一年度に手殘り米三十六萬石となり、此分は大てい蟲に食はして、國家は約三千萬圓の損をした。

大正九年中に朝鮮に騷擾事件が起つた。俗に「萬歲騷ぎ」といふものである。日本人が、今日の形に於ける朝鮮問題といふものに氣のついた初めての機會である。其性質はどう見ても國內的のものである。言はば昨年の長野縣事件のやうなものである。之が鎭壓の爲めに步兵大隊を派遣したが、其經費は大正九年五月中にやはり「臨軍」の豫備費外の豫算超過支出となつて居る。陸軍は朝鮮人を敵國人と間違へたか。いくら不逞でも、日本人は日本人だ。之を鎭壓する經費が、對獨宣戰に引きつゞく軍事費とは驚いた。

序にいふが、右萬歲費の外に、大正九年五月二十六日より同年六月二十五日迄の間に五回の責任支出がある。合計金額は三千六十八萬七千圓である。大正九年五月より六月末迄に三千萬圓の金を、非常手段たる責任支出をしなければならぬ事情であつたか。同年五月十日には衆議院議員の總選擧を終り、代議士

は出來て居る。議會召集期日を短期にすることに依り、此等の經費を議會に諮ることは可能であつた。現に大正三年の三十四議會は十二日の期間を置いて召集せられ、同年の三十二議會は十八日の期間を置いて召集せられ、大正元年の二十九議會は十六日の期間を置いて召集せられ、明治三十七年の二十議會は十七日の期間を置いて召集せられ、明治二十七年の七議會は二十四日の期間を置いて召集せられて居る。獨り大正九年の四十三議會は、原敬君、何の見る所あつてか五月十五日より四十六日の期間を置いて七月一日に召集し、三千六十八萬圓の大軍費を殊更に責任支出としたのか。原君今や亡し。當時の閣僚何の辯解かある。

○手製の機密費

立憲國に於ては、國費は豫算の款項に計上し、行政府は其範圍内に於てのみ支出を爲すことが出來る。行政府の爲した支出が、豫算款項の目的に副ひたりや否やは會計の檢査を受ける。これが原則である。たゞ、斯くては行政の機務を處辨し能はざる場合あるを慮り、特に機密費なるものを設け、一定の範圍を劃し、此限度だけについては後日の檢査を免れしめる。故に機密費なるものは議會が豫め認容したる限度のものでなければならぬ。議會が、通常の人件費、物件費の考で議定したものを行政府の方で、任意に機密なりと名づけて支出し、以て會計檢査を免るることが出來るとしたならば、豫算制度、決算制度は有名無實となつてしまふ。されば、我國の實際に於ても、一般會計に於ては機密費は豫算中の一項となし（所謂立法科目）特に大正十二年の勅令第三百五號を以て他の費途との流用を禁じてゐる。

「臨軍」十年間の支出中、陸軍に於ては二千四百四十七萬圓、海軍に於ては百七十一萬圓、合計二千六百十八萬圓を指して機密費なりと言つて居る。しかし、以上の理論に依り之を會計法上の機密費と見ることは出來ない。軍事上、秘密用に使つた金といふ事で、事實上檢査を勘辨してくれといふなら、耳を傾けぬでもないが、之が會計法上の機密費であるから、性質上檢査すべからざるものであるといふならば、これは斷じて許すことが出來ない。もし彼等が言ふが儘に二千六百萬圓を機密費として認めるならば、彼等が更に五千萬圓が機密費なりと稱したる場合に於ても、之に叩頭しなければならぬではないか。我國の會計檢査院が、上記二千六百萬圓を會計法上の機密費と認めて之に一指を染めなかつたのは、眞に其職責を瀆したものといふ事は出來ない。

此理論は昨年來、私が院の內外に於て唱導した所であつた。今や院內に於ては、此理論が承認せらるゝに至つたのを喜ぶものである。今回、「臨軍」の決算が院議に附せらるゝに際し、私は、憲、本二派の委員に次の附帶決議案を示して其同意を求めた。曰く、

「豫算上、機密費として認められざる金額を行政府に於て機密費なりと決定し、會計檢査を免れんとするが如きは不當なり、本委員會は機密費に關する法制の完備を望む」

と。憲、本二派の委員諸君は其立場上、右文言を婉曲にし次の如く書き直し、之を委員會に附議せられ、委員會は之を可決した。曰く、

「本委員會は、臨時軍事費決算の審査を爲したる結果に鑑み、政府は此種の出納に關しては、會計檢査院、其他の機關をして適當の檢査、監督を爲し得べき方法を調査研究すべし」

と。もし、軍事機密費を會計法上の機密なりと認めたるならば、之を會計檢査院の檢査に附すべしとの事は矛盾である。右決議案は不徹底ながら、軍事機密費が、會計法上の機密費にあらざる事を認めたことだけは明である。右決議案の提案者たる松浦議員の說明演說を讀めば、此意義は一層明白となる。

○機密費と選擧費

機密費も亦國費である。國家の爲めに使はれなければならぬ。會計法上の機密費であつても、それは會計檢査院の檢査を受けぬといふ迄であつて、其橫領、私消の疑あるときは、司法官は其費途を調査し得べきは勿論である。況んや會計法上の機密費にもあらざる上記の手製機密費が一黨一派の爲めに私消せられたるの疑ある場合に於ておや。

軍事機密費が或派の選擧の爲めに使はれたといふ事は、殆んど國民の常識となつて居る。之が爲めに告發も起つた。しかし司法部は取上げぬ。私の手もとにも、多少の資料はあるが、司法部の取上げなかつた事項を、今具體的に發表する事は法律の許さぬ所である。たゞ政府の發表した書類の內より、如何なる內閣が幾何の軍事機密費を使つたかを發表するは差支はあるまい。

大隈內閣	五五〇、六〇〇圓
寺內內閣	三、六八六、六一五
原內閣	二〇、四二四、九二四
高橋內閣	一、〇五五、八〇〇
加藤(友)內閣	一一〇、〇〇〇

山本内閣	四八、〇〇〇圓
清浦内閣	ナシ
加藤(高)内閣	三一四、〇〇〇
合計	二六、一八九、九三九

たゞ原内閣（陸相田中）の二千萬圓が嶄然一頭地を抜いて居るに氣がつく。而して試みに原内閣時代の七、八、九、十の四年間の陸軍機密費を併記すれば、

大正七年度（寺内時代も含む）	七、七〇五、八〇〇圓
大正八年度	一〇、六一九、七八二
大正九年度	二、七九〇、二五七
大正十年度（高橋内閣時代を含む）	二、六七〇、一〇〇

知るべし、大正八年度は一ヶ年にして一千萬圓を突破せることを。而して大正九年二月十六日（同年三月三十一日迄は八年度なり）には議會は解散せられ、原氏は直ちに彼の有名なる第十四回選擧に着手したるものなることを。（尤も此一千萬圓を悉く選擧に使用したるものであるとは言はぬ。前にも説明した如く、大正七年十二月より、大正九年二月までは露軍援助時代であつたから、前記八年度の一千萬圓は此方にも相當つぎ込まれたことはいふ迄もない）。

○金塊の行衛

西非利亞出兵と金塊。流言紛々、底止する所を知らぬ。政府の答辯自體に依るも「ゼーヤ」に於て押收したる金塊あり、黒龍江「ブレア」に於て押收したる金塊あり。此外樺太に於て押收鹵獲せるものは金塊及砂金二百七十七貫四百三十二匁、銀塊及銅貨八百十留、紙幣及證券三十九萬七千留であるといふ。此等の行衛について疑を挾むべき點は一二にして止まらぬ。例へば前記「ゼーヤ」金塊は昨冬、私の提出した質問書に對しては政府は之を露國官憲に返還せりといふに拘らず、決算委員會へ提出の文書には、右二貫九十匁（九千五百九十三圓と評價さる）は鹵獲品として取扱はれて居る。又鹵獲品中金銀塊は必ず實物にて後送し、國庫（大藏省）に納入しなければならぬことは三十七年の陸軍省達第八十七號に在る通りであるに拘らず、我軍部の手に歸したる金銀塊が彼の地で兩換され、消費せられた事は彼の地に在りし者、誰れ知らぬ者はない。たゞ、主として、我軍部巨頭に疑のかゝつたものは、彼の「カルムイコフ」より「ハバロフスク」に於て預つた金塊のことである。それ故、少しく此金塊の行衛を記さう。

大正八年六月以來「ハバロフスク」市は我第十四師團（宇都

宮」の後援の下に白軍の「エターマン」、「カルミコフ」が占領して居つた。前にも説いた通り、大正九年二月に至り、我軍の方針一變し、露軍を援助せざるに決したるため、「カルミコフ」は到底、敖に踏み止まること能はず、二月十三日には愈々亡命することに決したが、前夜、「カルミコフ」は哈府に在る國立西非利亞銀行より金塊を押收し來り特務機關の五味大佐の諒解を得たりとて之を十四師團下の第三十聯隊長菅大佐に託したのが始まりである。當時山田旅團長も、大井軍司令官も之を預るには反對であつたそうであるが、既に菅大佐の預りたる後なれば之を奈何ともする事が出來ず、其後同年（大正九年）七月十四日附で「歩兵第二十七旅團」より菅大佐宛の受領證を渡し、菅大佐個人よりの預り品なる形式となし、菅大佐は此受領證を「カルミコフ」に引き渡して問題を整理した。包裝の儘の受取であるが、當時之を百萬留位といはれて居つた。此金塊は其後浦鹽の朝鮮銀行支店に保管せられて居つたが、大正十一年二月、我全軍撤退と共に內地に轉送せられ、下の關の朝鮮銀行支店や、宇都宮やに分割保存せられ來つた。然るに預け主「カルミコフ」は其後大正十一年中、支那吉林省にて何者かの兇手に斃れたるを以て右百萬留の金塊は反返すべき相手方なき狀態となつたが、たゞ彼の菅大佐宛の預り證にして、同大佐より「カルミコフ」に渡したるもののみは、露人の手に轉輾し、大正十二年頃之を振り廻して、陸軍に要求を爲し來る者がある。陸軍（山梨）は斯る證書のみに依りて該預り品は何人にも渡すべきでないとして右金塊の引渡を峻拒したが、後、或者の口添もあり、且、又此證書の世間に轉輾することは、我軍の威信にも關すると考へたか、金塊返還といふよりも、證書囘收といふ心持で極めて小額の金を與へて右、菅大佐宛の預り證を取戻さんと企て、大正十二年三月二十四日、當時の責任者、山田少將、五味大佐、遺家主計監を下の關に使はし、先方は、同じく白軍に屬したる「セミヨノス」、「サウキツキー」黑木顧問等を立會はせ、此等に八萬圓ばかりを遣り、銀行の保管料六萬圓を仕拂ひ、右證書を返還せしめ、且「サウキツキー」よりは感謝狀まで徵して事濟みとした。菅大佐名義で預りたるものは約百萬留であるとは、山田少將も唱へる所であつたが、此額については御說區々である。なかには三十萬留といふ人もある。然るに、此點は今回決算委員會に於て極めて明白となつた。政府委員は、右金塊は九年三月二十四日秤量して渡したといふ。其量目を聞いて見ると、陸軍當局は色々躊躇したが、遂に二百十六貫四百匁であると自白した。二百十六貫は百六萬圓（百六萬留）に相當する。二百貫の金塊を實際筋違ひの「セミヨノフ」一派に

渡したものではない。右の當局の言明は二百貫の金塊に關する陸軍の責任が解除されたといふに外ならぬ。八萬圓と六萬圓、合計十四萬圓の金は先方及び銀行に渡つてゐる。九十萬圓前後の金がこゝに浮いて來る。此九十萬圓こそは實に疑問のかたまりである。幸に今日までは金の輸出は禁止せられて居る。何處に在るか。誰が持つか。知る人ぞ知る。

○金がなければ「臨軍」でやれ

臨時軍事費の會計締切は前途遼遠である。會計年度が來て決算となるも、機密費に振り替へて置けば檢査はない。そして、「臨軍」の金はダブついて居る。大正十二年四月一日現在に陸軍の手もとに殘つて居つた金は、勿驚、六千萬圓餘だ。それで不足ならば責任支出も出來る。軍國の必要といへば國民は皆屁古たれる。金がなければ「臨軍」で來い。これが過去十年間に於ける軍部の鼻いきであつた。會計檢査院の指摘して居る十九項、三千百萬圓は、皆此やり方である。前記千六百萬圓、四十四萬石の支那米買入の外内鮮米十三萬二千石、大麥六十九萬七千餘貫、小麥粉三十二萬二千餘貫も初より軍事用ではなかつた。農商務省の注文に依り買入れたものである。大麥の如きは西非利亞で買つて內地へ送つたものだ。之に要したる金は約八百萬圓である。大正八年八月より九年十月迄の間（撤兵明）に三井物産等よりホールスコット飛機發動機を買つた其代金は三百九萬圓。勿論戰爭にも、實習にも曾て使用せぬ。其儘廢兵器として格納してある。大正九年九月に至つて陸軍衛生材料廠は患者用自働車十二輛其他を買つた。代金は百二十五萬圓である。無論戰地へは送らない。戰爭が濟んでからであるから。海軍もなか〳〵負けて居らぬ。大正八年二月より大正十年四月にかけて、海軍鍊炭製造所の擴張と稱して、製油工場を新設した。勿論海軍では平和條約調印後に、西非利亞出兵の如き、繼續事件はない。全く平時に復して居る。油の必要な事は無論であるが、それは臨時事件の爲めではない。將來に對する軍備充實である。此金額が六百九十七萬圓。これが臨軍とは凄じい。

○腹藝の責任

國費九億圓は煙と消えた。かち得たものは尼港の慘殺事件か。——尤も正確に言へば九億全部を煙に譬へる事は出來ぬ。靑島戰は當年の狀況として必要であつたらう。又西比利亞出兵にしても、「チエック」を救出する限度に於ては義軍たるを失はぬ。しかし、右二件以外の事は、國民に無斷で行はれた腹藝である。私とても人の心持を察する事の出來ない偏狹者流ではな

い。原君の心も、田中大將の心も、乃至は外交調査會員の心もよく判つて居る。原氏は選擧に金を使つた。しかし、一身一家の繁榮を希つた人ではない。田中氏乃至軍閥巨頭は「オムスク」を援助し、「セメノフ」「カルミコフ」を援助した。國民に默秘して之を援助した。其心持は讀める。我帝國の爲といふ事は念頭を去らなかつたのであらう。又、去る代り、之を爲し遂げれば、先輩寺内、山縣にも地下に見えて申譯が立つとも考へたであらう。之が爲めには、五萬六千の出兵を爲し乍ら、國民には、二萬六千に過ぎぬと告げた。「國内政策に干涉せざるの既定方針を聲明す」との聲明を發すると同時に白軍政團の糾合を圖つた。苦しかつたではあらう。――しかし乍ら、斯の如き腹藝を爲す者には一の決心がいる。腹藝が當れば、其人は英雄豪傑と爲る。往年、英國の「セシル、ローズ」は無斷で南亞を征服した。是亦腹藝である。成功したが故に彼は英國の恩人と歌はれた。去る代り、此種の藝當が失敗したときは、其人は反叛者類似の汚名を甘受せねばならぬ。勝てば官、負れば賊。此決心がなければ此藝當は出來ぬ。大石良雄も亦腹藝をした。京、山科に假寓して遊蕩三昧に耽つた。事、もし成らなかつたならば彼れ、人倫の罪人たるの汚名を甘受したであらう。――オムスク政府の援助者、「セメノフ」「カルミコフ」の後援者、過激派の掃蕩者、汝もし之が成功を期して、護國の神を夢みたりとすれば、同時に其失敗の咎を覺悟せざりしか。二千の壯丁は西比利亞の露と消えた。七百の老幼は尼港の氷に骨を埋めた。之が原因を爲したる人、胸中悔ゆる所なきや。なほ恬として政界に馳驅するの勇氣ありや。臣節を完ふすとは抑々何を意味したりや。

動亂支那が脅かす我利權問題

(一) 支那の動亂と我利權問題

法學博士　高柳松一郎

一

一九一一年の革命によつて支那人は滿洲朝廷を倒し、立派な共和政治を創設し得るものと信じた。然るに民國となつて十有六年間の經驗によれば、この期待は全然裏切られ、共和政治の實蹟が一向擧らないのみならず、淸朝時代よりも寧ろ國內の政治狀態は惡化し、今や憲法なく商法なく民法なく國會もない紊亂たる封建制の戰國に墮落した。北京政府はあるが名ばかりで、十六年間に大總統は二十八回も變り、內閣總理大臣は五十數回も變り、現在では大總統もないといふ有樣で、政府の權力は北京城外一歩も出でない薄弱のものとなり、甚しきは官憲の俸給さへ支拂へない醜態を呈したことが屢々である。殊にこの數年來內亂は年中行事となり、惡辣な軍閥と政治家とは私利私慾私權を爭つて毫も愛國的社會的奉仕の觀念を有しない。

此の如く引續き繰り返へされる動亂によつて支那國民は塗炭の苦を嘗め、諸外國人も直接間接多大の損害を受けた。然し動亂が軍閥と政治家の內輪喧嘩である間は、列國としては迷惑なが

ら辛棒するの外なく、敢て內政內爭に干涉すべき筋合のものでないといふので、今日まで列國はこれを傍觀し來つたのである。

二

然るに昨年夏國民軍といふ新らしい軍閥が廣東より湖南に侵出し、破竹の勢を以て湖北、江西、福建、浙江、江蘇等揚子江以南の地域を占領するに至り、支那の動亂は從來或は北京を中心とし、或は廣東を中心として演ぜられた國內的戰亂と異る性質を帶ぶること丶なつた。これ私共の先づ注意すべき點である。國民軍は對內的には北方の軍閥を打倒し、對外的には列國の支那に於ける帝國主義、資本主義を打破し、列國との不平等條約を撤廢して、國民革命を完成することを標榜する點に於て、在來の軍閥と異り、今回の南北戰爭は從來の動亂と異るものである。即ち國民軍は國內の革命に排外的運動を伴はしめ、列國の勢力を國外に驅逐せんと企てつ丶あるから、今回の內亂が支那に於ける列國の利權と直接の關係を有すること丶なるのである。例へば漢口九江に於て暴力を以て英國租界の回收をなしたのを始めとし、上海共同租界奪回の計畫に熱狂し、最近には南京に於て各國領事館、學校、病院、住宅、店舖の掠奪を組織的計畫的に行ひ、又漢口日本租界に於ける暴民の掠奪暴行を取締り得なかつた。

國民軍は尙進んで共產黨と共同して諸外國及び外國人が支那に於て有するあらゆる利權を根こそぎ回復するを目的とするのである。而してその回復方法は平和的合理的手段によると宣言されて居るが、列國の武備が薄弱なる場合には、往々暴力を使用すること、一九〇〇年の義和團匪（ボクサー）に類するものである。

三

現在列國が支那に於て、有する所謂利權とは何であるかといふに、純經濟的の利益例へば貿易企業等を指稱するものでなく、通常の國家としては類例の少い外國又は外國人の享有する特殊的權利を包含するものと解するのが妥當であらう。而して所謂利權はこれを二つに分ち得る、第一は列國共通的のもの、第二は列國特有のものである。

列國の共通的利權とは今日國民軍始め支那人が一般に不平等條約と總稱するものであつて、（一）關稅の協定、（二）治外法權、（三）共同租界、（四）外國船の沿岸（內水を含む）貿易權、（五）海關、郵政、鹽政に於ける外人の監督權、（六）北京及び北京と海口間に於ける駐屯軍、（七）教會、學校、病院の施設等を

擧げることが出來る。我國及び我國人も種類により厚薄淺深の差こそあれ、此等共通的の利權に與り居ることは説明するまでもない。而して此等の利權は何故に生じたかといふに、開國以來八十年間に支那と列國との相互の便利のために、條約、協定、約定又は慣習によつて發生したものであつて、一般支那人及び我國の一部の人々によつて想像せらるゝが如く、必ずしも列國が支那を壓迫强制した結果ではない。又從來必ずしも支那に損害を與へたものとは斷定し難い。中にはこれあるがために支那の行政、財政乃至經濟上に利便を與へ、支那の文化事業に貢獻したものも少くないことを認めねばならぬ。例へば（一）と（四）の如きは支那の經濟的發展を阻害したといふよりも寧ろ助長したと觀るのが正當である。（五）の如きは明かに支那の財政行政上に多大の貢獻をなしたものである。（三）と（六）とは外國人の居住貿易生命財産の安全を期するために必要の協定である。（二）は支那の法典と司法制度の不完全なる間已むを得ざる條約上の規定である。最後の（七）に至つては過去に於て多少の弊害もあつたが、外國人が多年支那人の教化方面に貢獻した功績は著大なもので、今日支那人がこれを目して教化權の侵害などと騒ぐのは狂愚の至りである。本問題に就いては他日詳述したいが、茲では私見の一端に止める。又現時の支那人は涉外事件の利害損失を冷靜に判斷する餘裕を有しない。何でもかでも不平等條約あるがために、支那は外國から侮辱を受け、支那に內亂が絶えず、支那の統一が出來ないと信じ、これを撤廢しさへすれば支那は直に善い國となり、統一平和を樂み得ると信じて居る。

然し私共から見れば今日支那が急に不平等條約を撤廢し、各種の利權を回復し得たとしても、支那人の國民性が改まらず、政治的訓練を積まない以上、支那はそれだけでは決して善い國とは成らぬ。動亂は絶えないと信ずるのである。從つて列國が此等の共通的利權を放棄しない前、貿易企業關係が我國の千分の一には及ばないロシアに倣つて、我國が先んじてこれを放棄するのは愚策である。のみならず支那に於ける我國民の立場を競爭の地位にある列國人に比して不利に導くべき必要はない。

四

次に我國特有の利權は何であるかといへば、第一滿洲に關するものと、第二滿洲以外に關するものとに區別し得る。滿洲以外に於ける利權の主なるものは、一九二二年のワシントン會議の結果山東に關する利權を支那に還附したから、現在殘つて居るものは主として借款關係のものである。その主要なるものを

左に列擧して見る。

(一)漢冶萍公司借款　漢冶萍公司は清朝時代から石炭の採掘と製鐵業を營む大會社であつて我國より資本數千萬圓を貸與しその元利支拂に當つるため公司から鑛石と銑鐵とを八幡製鐵所に供給することに取極めてある。そこで我國は大正四年五月二十五日の日支條約によつて彼我全權間に文書の交換をなし、「支那國政府は……將來同公司と日本資本家との間に合辦の議成りたるときは之を承認すべく、又同公司資本家の同意なくして同公司を國有と爲すことなかるべく、又日本國以外より外資を同公司に入れしむることなかるべき旨を承認」せしめたのである。その後連年の內亂と軍閥の誅求とにより、同公司は經營難に陷り近來我國に對し約束の鑛石銑鐵を納入し難くなつたので、本邦から更に資金の供給をなし經營の改善を圖ること〻なつた。かういふ成行を有する會社で相互の利益のため借款に應じた譯であり、又我國の製鐵政策上この利權の放棄し難いことは說明するまでもない。

(二)双橋無線電信權　この問題は我が三井物產が支那政府の海軍部との契約に基いて、北京の郊外双橋に大規模の無線台を建築し、これが營業權を一定年間獨占することであつたが、その後支那政府の交通部は別に米國のフエデラル無線會社との間に無電契約を結んだので、日米支間に面倒な問題を惹起し今尙未解決である。然しこの種の利權は米國側さへ手を引き、且つ三井も建設費の賠償を受くれば、我國政府としても敢て固執すべき性質のものでもあるまい。

(三)專管租界　我國は現在天津、漢口、杭州、蘇州、厦門、福州、沙市、重慶等の諸地方に租界を有するが、實際利用して繁榮して居るものは天津漢口の二ケ所である。他の都市の租界は還附しても利害關係は少いが、右兩地の租界は日本人の居住貿易の爲めに留保すべく支那に即時これを返還する必要を認めない。

(四)山東鐵道借款　ワシントン會議の結果我國は山東鐵道を支那政府に返還したが、支那政府は鐵道收入を擔保として我國に數千萬圓の債務を負ふて居る。從つて我國から運輸と會計との監督官を派遣してゐるが、近年の內亂によつて鐵道の營業狀態が惡るくなり、借款の元利支拂は延滯し勝である。本問題の如きは支那政府が借款元利を皆濟すれば事なく解決し得るものである。

(五)西原借款　歐洲大戰中寺內內閣が段內閣に對し西原龜藏氏を通じて取極めた三億圓內外の無擔保借款であつて、元利未拂のまゝ今日に至つたものである。これ亦支那政府に於て元利を皆濟すれば問題は直に解決さるべきものである。

その他正金銀行、東亞興業、中日實業、等の鐵道鑛山に對する借款關係があるけれども、今日に於ては我國の出資者はその元利の回收を希望する次第で、支那側が利權回收を欲すれば何れもこれを拒絶する筈はない。

五

滿洲に關する我國特有の利權は日露戰役の結果から生じたものである。更に溯つて云へば日清戰役後支那が以夷制夷の狡猾なる外交を弄せず、我國に對する露佛獨の三國干涉問題を起さなかつたならば、發生しない問題である。現在我國が滿洲に於て有する利權は遼東半島の租借權、南滿鐵道營業權、撫順炭抗採掘權、本溪湖炭坑採掘權、鞍山站鐵鑛採掘權、鴨綠江木材公司、吉長鐵道其の他滿蒙諸鐵道に對する借款等甚だ廣汎複雜なる範圍に亘つて居る。

遼東半島は租借地とはいへ、その實我國が國運を賭し且國民の膏血を以て露國より得た領土の割讓を意味するものである。將來支那が安定統一し、强い國となり、再びこれを他國にとられないやうになれば兎も角、現在の支那にこれを還附するのは危險であり、又我國民の意志でない。滿鐵その他の利權に至つもこれを日本の手に委ねる方が滿洲開發のために利益である。且つ我國の莫大なる資本の投下せられてある關係から見て、支那は當分その回復を期し難い實情にある。殊に滿洲に於て我國は經濟上の關係のみならず、軍事上政治上の關係がヨリ重大であるから、支那の利權回復運動が滿洲に及べば、我國は斷平たる處置をとるの外あるまい。

六

表面上支那の國內の統一と外國からの解放を主義とする國民軍の主張に對して、隣邦たる我國としては理論上反對すべき理由はない、寧ろ好意を以て迎ふべきであらうが、このナショナリスト運動にボルシエヴイズムとボクセリズムを加味し、秩序の破壞と排外運動とを伴ふに於ては、同じく隣邦として且つ政治上經濟上の利害關係密接なる我國としてはあらゆる利權を放棄して支那の爲すがまゝに支那の要求するまゝに成行を傍觀する譯には行かぬ。況んや現今の如く國際上の權利のみを主張し、國際上の義務を履行しない事例の頻出するに於ては、强硬の態度をとつて支那國民の反省を促がすの已むを得ざる場合に立ち至るかも知れない。

然し幸にも支那國民が自力によつて統一し、一國として列國に對して責任を負ふべき强固なる中央政府を樹立するに至れ

ば、不平等條約の撤廢、利權の回復の如きは容易に解決し得らる丶問題であると思ふ。（四月五日）

（二）正義人道に基く解決

長野朗

從來の支那動亂は、單に我が在支商工業者の營業を妨害したに過ぎなかつたが、今回の國民革命に至つては、我が利權問題の根本に觸れて居るだけ、之に對して明確な觀察を下して置かねばならぬ。

日本の利權問題に關係を及ぼすものは、支那時局の變化如何である。これ現在支那には、根本的に主義思想を異にした數個の勢力があるから、その何れが優勢を占むるかによつて餘程異つて來る。第一は舊軍閥勢力であるが、これは大體に於て列國の既得利權を承認しながら、反帝國主義運動の波に揉まれて、列國特殊利權の漸進的回收に努めて居る。然し舊軍閥勢力は今では殆んど瀕死の狀態にあるから、これは大して問題にならない。第二は國民黨であり第三は中國共產黨である。日本の在支利權問題の將來は、この二つの勢力の消長如何に關することが多い。

國民黨の對外政策は、孫文の三民主義や建國方略、乃至は國民黨第一次大會宣言によつて窺ひ知ることが出來る。それによると外國の既得利權を回收はするが、支那の產業破壞を根本的に愼むから、その遣方は非常に穩健である。例へば長江一帶の邦人の工場や長江航路權にしても、今これを叩き潰すことは、支那人自身の交通運輸を不便にし、多くの職工をして職を失はしむる。そこで支那自身の產業が發達して外人工場を不用とする時機に到着するか、又は長江航路の國營準備が完了した場合、支那政府は工場或は汽船を買收し、買收費を完濟するまでは、依然邦人をして管理を續けさせるといふのが三民主義や建國方略の趣旨である。この方法は共產黨の遣方に較べては遙かに支那の實狀に適して居る。

共産系の對外方針は、國民黨と同じやうに反帝國主義の看板を掲げて居るが、たゞ手段を同じくしたゞけで、目的は全く異つて居る。國民黨が得んとして居るのは、國家の完全なる獨立と自由である。共産派の覗つて居るのは國際無産革命である。孫文は支那に社會主義を採用せんことを主張するが、列國が資本主義を保持することには干渉しやうとしない。否却て列國資本主義と提携し、其力に依て支那の國家社會主義を實現せしめんことを希望して居る。所が共産黨に至つては、列國の資本主義を倒すのが目的だから、國民革命が成功して支那が獨立と自由を恢復すれば、國民黨は共産業建設のため必然列國に近づかねばならないが、共産黨は其後も依然として資本主義の打破に努むるだらう。從て國民黨内にあつても、共産系一派の遣口は、國際法も條約も全く無視し、暴力を以て列國の利權を奪取する方策に出て居る。漢口の英租界回收や海關占領、上海に於ける現在の遣口は皆之を證明して居る。

そこで問題になるのは、漢口を中心とした共産系と國民黨系の蔣介石一派の内爭である。これは昨春來芽えて居たのが愈々表面に現れただけである。而しこゝで兩者が内輪喧嘩をすることは、双方に取つて不利益である。國民黨は共産派の援助なくては革命は成功しないし、共産派にしても、今蔣介石一派を驅逐しては、全革命軍を統率して奉天派に對するだけの總指揮官が居なくなる。又共産黨が舞台の表面に出て來ることは、とにかく彼等には損である。然し今の所で見ると、蔣介石も油斷はならない。といふのは、相手は國民黨部と國民政府とを有つて居るから、下手をやると國民黨から追ひ出される。黨を離れては蔣介石も全く勢力を失墜せざるを得ぬ。共産黨の方では成るだけ國民黨と國民政府の蔭に隱れて、國民革命の名に依て仕事を進めやうとする。殊に彼等は勞働組合、農民組合、學生會の中に深く喰ひ込んで居るだけでなく、革命軍の中にも黨代表や政治工作員を通じ、或は將卒の間に細胞組織を進めて居るから、其の勢力は今や牢として拔くべからざるものがある。武漢が完全に其勢力圏内にあるだけでなく、蔣介石が乘り込んで來た上海でも、共産派の手で市政府其他の機關が造られ、右派は全く閉息の有樣である。これを蔣介石が乘り切り得なければ、左派勢力が優勢を占めはしないかと思ふ。少くとも長江一帶には共産系が巾を利かして居るから、武漢で行はれたと同じ方法が、武漢から上海に至るまで行はれるだらう。それによると、外國租界でも工場でも、殆んど無償暴力にて占領し、商店銀行等は引揚げの止むなきに至らしむるもので、恐らく上海上流一帶のこれまでの外人施設は一應全部破壊されるものと覺悟しなければならぬ。

上海だけは列國が極力武力を以て保存してゐるから、まあ形骸だけは取り止むるだらう。更に革命の力が北上するにつれて、北支那も同樣な運命に遭ふかも知れない。それが東三省に及んで來れば、愈々日本の根本利害に影響を及ぼすから、事體は日本の國內問題としても重大なものだと思ふ。反帝國主義運動は、共產黨國民黨共に支持して居るが、たゞ共產黨が最も之を徹底的に主張し、且つ其手段が直接的だといふことである。國民革命の帝國主義打破の目標及方策からすれば、彼等は日本の滿洲に於ける凡ゆる利權を回收し、且つ朝鮮の獨立運動援助まで行くだらう。然し革命にも矢張り高潮期がある。今は皆民衆が反帝國主義の叫びに熱し切つて居る。殊に支那人はかうした場合、他國人に比し興奮して常軌を逸し易い國民である。彼等が國民大會等で悲憤慷慨の演說をやつて居るのを見ると、全く狂人である。排外運動の行列が能く外人と衝突して種々な事件を起すのも、支那人のかうした性狀にもよる。從つて飽まで帝國主義打破の激勵辭で革命幹部から煽り立てられて居る民衆は、放たれた奔馬のやうに、無鐵砲極まる行動を採る。南京事件の如きも、共產派の計畫的な行動もあらうが、餘りに煽てが利き過ぎた點もあらう。殊に無智な支那人は、譯分らずに騷ぐ。「打倒帝國主義」とは外國人を打殺すことだと解して居る支那人が少くない。かうした有樣だから、これまでに煽り立てられた支那民衆の此後の出方は大體想像し得る。從つて國民黨左派が適當に引き締めやうとしたつて、それはとても出來ない。殊に共產派には血氣の青年が皆前線の指揮に當つて居るから、何處まで脫線するか見當が附かない。從つてこの嵐しが一通り過ぎ去るまでは、日本の在支利權等も破壞されたまゝ手の着けやうがないだらう。然し革命も最高潮期を過ぎて熱が醒めて來るに伴れて、次第に平靜に復して來る。平靜に歸れば列國とも修交關係を結ばねばならぬ。然しその場合、果して以前と同じ立場に在て我國の利權を認むるだらうか、それは恐らく期待出來まい。全く異つた基礎の上に立つて行はるゝだらう。

次に私は少しく具體的問題に這入つて論じて見たいと思ふ。先づ長江一帶で日本の特殊利權としては、長江航路權、工場設置、大冶鐵鑛購買がある。支那側では內河航路權の回收を叫んで居るが、長江航路は若干他と異つた所がある。孫文の建國方略を見ても、漢口を以て外洋航路の終點として居るから、上海漢口間の諸港は一の海岸諸港と同樣に認めなければならぬ。たゞ之の諸港間を航行する日淸汽船の航路の如きは沿岸航路と同一だから、これを如何にするかは新しく出來た支那政府との間に交涉さるべきもので、「支那の主權を害し、或は不平等のものであ

つてはならぬ。然し支那が愈々建設にかゝるまでは、外國船の沿岸航路及內河航行も支那人のために必要であるから、支那は其主權さへ收めて置けば之を存置するのが有利だと思ふし、又孫文の主義からしてもそうである。又利權回收の方法も、孫文主義により、列國に對し正當な手續きを取り、支那の經濟狀態を破壞しないやうな移轉を行はねばならぬ。

それから大冶の鐵山である。日本はこれから鑛石を買入れて八幡製鐵所の原料にして居るが、元來漢冶萍公司は私設會社であつて、日本と支那政府との契約では、其組織を變更することは出來ないやうになつて居るけれども、國民政府の方針は鐵鑛の國有にあるから、勿論之を國有に移すであらうし、現に政府で沒收した形になつて居る。從つて日本としては、舊契約を其儘行ふことは出來まいが、大冶鐵山の鑛量は非常に豐富だし、現に稼行して居るのは其一部に過ぎないから、需要が增せば幾らでも採掘量を增加し得る。たゞ大冶と河岸十一哩の鐵道を改築し貨車を增加すれば宜い。單に鑛石を賣却することは別に支那の主權に關係を有つ譯でもなし、又支那側の需要を妨げることもなく、其剩餘を買收するに過ぎない。支那は之に依て必要な資金を得て建設を進めて行けるだらうし、孫文の主義にも合する。支那は自國民の生存問題を尊重するやうに他國民の生存問題をも尊重しなければならぬ。

次には在支外人工場問題である。外人工場といつても其主なるものは邦人である。邦人工場の主なるものは邦人紡績である。邦人紡績工場は支那全紡績工場の半に近い。上海だけでも百萬錘位ある。この邦人紡績の大發展は種々な方面の反抗を惹き起した。第一は支那人同業者の競爭上からの反對であつて、邦人紡績のより以上の發展を制止するために、紡績工場設置制限運動等が起つたこともあるし、又特別關稅會議中にも、外人工場の特權廢止、支那人工場の保護政策等を要求して居た。所が國民革命軍は愈々邦人紡績の根據地上海を手に入れたから、此後の邦人工場問題は一に國民黨の出方による。共產黨首領陳獨秀は嘗て外人の在支工場驅逐を說いたことがあるし、國民黨としても略々同樣な考へを有つて居る上に、紡績工場等の國家經營を其主義として有つて居る。たゞ今日までは工場管理は實現して居ない。最高會議の決議でも外人工場の特權廢止、支那人工場に稅則上の特權を與ふることを述べて居るに止まる。然し彼等が根本的に邦人工場の驅逐を計畫して居る以上、問題はもつと深く進んで行くだらう。殊に今日では反帝國主義運動の主力軍は勞働者であつて、勞働組合の指導者は共產黨だから、外人工場に對してもかなり亂暴な方法を採つて居る。漢口では

英米煙草トラスト工場の罷業で、トラスト側が工場閉鎖をやつた所が、總工會では例の糾察隊を派遣して工場占領に向はせた。然し工場でも陸戰隊を揚げて豫め警備して居たから事なきを得た。上海では現に租界外の邦人紡績工場は殆んど彼等の手に管理されて居るやうな有樣である。武漢で聞いた所では、國民黨の工場占領の手は先づ租界外工場から延びるだらうといふことであつた。外人は開港場で工場設置を許されて居るが、國民黨では開港場の意味を狹く租界だと解釋せんとして居るらしい。さうなれば租界の狹い區域には殆んど工場設置の餘地はなく、自然外人工場の發展は阻止さるゝだらう。然し日本としては邦人の財産が不合理に蹂躙さるゝことは默認されまいし、邦人の特權を固守せざるまでも、其處理は正當なる條約の改正により行はるべきもので、強盜的方法で行はれてはならない。又支那のために計るも、今日邦人紡績は、幾萬の支那人勞働者に職を與へ、支那民衆に必要な綿糸布を供給して居る。もし工場が職工を餘り搾取するといふならば、純然たる勞働爭議に訴ふればよし、支那人紡績の發展を妨ぐるといふなら、現在以上の工場增設を制限すれば宜い。勿論今日では邦人中新たに支那で工場を興さうと考へて居るものもなからうが、又外人工場が不當な保護を受けて居るのは當然支那人と同一條件の下に置かるべきものである。更に國民黨が進んで孫文の建國方略に基き、主要工場の國營をやるといふなら、正當な方法で買收したら宜からう。彼等の頭が冷靜になつて來れば、問題の解決は極めて易々たるものである。たゞ共産一派の破壞的遣方は自他共に損はれ、支那は失業者の續出により、引いては一般的大混亂を惹起し、折角の革命運動も破壞し去らるゝかも知れない。吾人は敢て支那の獨立自由を阻碍する特權を固持する如き考へは毛頭ない。たゞ公平な立場から日支兩國共に有利なやうに解決の方法を見出したいと思ふ。

最後に述べたいのは、滿洲に於ける問題である。滿洲は其特質上國民黨がいふやうに、支那本部と同一に處分し去ることは出來ない。滿洲問題の解決は、滿洲の特質と國際的特種の關係を考慮して決定されねばならぬ。滿洲は滿民族の故土である。然るに主人公の滿民族は僅か二百萬の人口に減少して一個に閉息し、二千萬の漢人種の移住民、百萬の朝鮮移民、それに日本人ロシヤ人等が雜居した一の共同殖民地である。從つて支那が之を獨占すべきものでもなく、日本が占領すべきものでもなく、又日露支三國で占有してもならない。國際的に開放され世界人のための自由の新天地でなければならぬ。凡ての問題は住民の自由意志に依て解決され、人々は凡て平等と自由を完全

に與へられた新しい組織の一天地であつて欲しい。

吾人は最早從來のやうな古い觀念で支那に臨むことは出來ない。支那が如何なる革命を完成しようとそれは他國の干渉すべきものではない。一國には一國の特性がある。假令他國が支那に自國流の革命を植え付けやうとしても、それは早晩失敗する。世界何れの國の人民も支那人を眞に指導し得る能力を有つたものはなからう。四千年の歴史を有つた支那は、他のより短き歴史を有つたものよりも、どこかに優れた點を備へて居る。支那は自ら進むべき所に向つて進むであらう。たゞ日本と支那との交渉に於ては、吾人は正義人道に基き、主張すべきを主張し讓るべきを讓り、世界に訴へて公平と信ずる所を實行せんとするものである。從來のやうな支那の正義も認め得ず、自己の正義も主張し得ないやうな、勇氣に欠けた方法には出たくない。

(三) 更生の陣痛たらしめよ

神田正雄

一

更生支那の陣痛と觀察を下すことによつて、支那の動亂にも意義が生ずる。この點の共鳴から北伐軍の行動は、内外の人から寧ろ歡迎されてゐた。然るに三月下旬に演ぜられた、南京に於ける國民軍正規兵の暴行事件、更に四月に入つて漢口に起つた日本租界地へ暴民侵襲の事は、今更に世の耳目を聳てしめる太問題で、普通一般の常識では到底判斷が出來兼ねる。

二

支那の動亂は嚴格に分けると、對内的の動亂と、對外的の動亂とに區別することが出來る。對内的の動亂は、最近に於ては第一革命の大動亂をはじめ、その前後に亘つて大小の差こそあれ毎年繰り返されて居るので、支那の動亂は寧ろ年中行事とさ

へ云はれて居る。對外的動亂に至つては、彼の有名なる義和團事件は勿論、その前に於て支那が所謂中華の矜りに醉ふて居つた頃阿片戰爭を始めとして基督教會堂の燒打、宣教師の殺害など隨分に數多く繰り返されたものである。

義和團事件は、列國を相手とした對外的の大動亂であつたことは云ふ迄もない。唯その結果支那の國民は物質的には莫大なる損害賠償の重荷を負ふこととなり、精神的には文明國人として齒することの出來ない取扱ひを受けることゝなつて、從來よりは外國人が支那人を輕蔑する度を增すに至つた。

然しこれは支那人一般の考としては、當時の主權者であつた滿洲朝廷が無力爲すなきの結果であつて、支那を形成する中心勢力である漢民族が天下を支配するの時が來る場合には、かゝる失態は演じないと不平の間にも自ら一道の慰藉を持つて居つたのである。

然るに第一革命以來は、五千年の歷史を背景にして居る漢民族が兎に角天下を取つたのである。玆に漢人は民族全般の上から觀た文化の進否を顧みるの遑もなく、過去に於ける中華の矜と、少くも歐洲の大戰爭以後偉大なる變化をなした世界的思潮とを眺めて、前滿洲朝廷が外國人壓迫の下に卑屈退嬰全く國民としての資格を無視せられたることに憤慨し、國內革命は曲りなりにも成功を遂げたので、更に百尺竿頭一步を進め孫文一派が支那民族發展の爲めに、外交上の根本的改革を提げて起たなければならぬ運命に遭遇し、一部先覺者は、その希望を到達する爲めに起たざるを得ないことになつた。此運動が形の上に表れたものが即ち現在の支那動亂の原因を爲してゐる。

而してこの動亂は、新らしき支那を更生するの陣痛であるか、老衰の支那が病魔の爲めに最後の悶を演じて居るのであるかは、各々觀察する人に依つて結論を異にするであらう。

三

更生の惱みか、病魔の苦痛か、これが診斷をなすには少くも支那なる躰軀の性質から考慮しなければならない。

日本人は支那を觀察するに當つて、多くは日本人の性格を基礎として判斷を下すか、又は支那の歷史文藝を通じて批評を爲すのが大部分である。しかし日本人の性格を以て支那を判斷することは根本に於て誤謬である。これは色眼鏡をかけて他を觀察すると何等の差がない。歷史文藝を通じて支那を觀ることは前者程の過誤に陷ることはないとしても、少くも服裝の華美を見てその人の性質を判斷する誤謬に陷ることを免れ得まい。

唯支那民族に向つて何人も否認することの出來ない點は、永き歷史の所有者であること、形而上の營造物が偉大であること、形而下の文藝が他に比類のない壯觀を現はして居ることである。

されど支那の民族は、古來よりその文化が場所の上に於ては普及して居るが、人の上から見ると頗る徹底を欠いて居る。而もその間に智的財的の不平等がよく緩和されて居ることは、外國人の容易に窺ひ知ることの出來ない精神的の何ものかゞ伏在して居ることを思はなければならない。

歐洲戰爭の未だ酣の時であつた。北京に發行する佛字新聞の主筆は、身、軍籍にあつたので本國の召集に應じ親しく戰線に立つたが、後東洋方面に向つて聯合軍の事情を宣傳するの必要から、除隊となつて支那に歸つた。その時の感想を私に物語つた中に、

『悲慘なる歐洲の戰場を目のあたり見て來た環境の變化からでもあらうが、支那に歸つて來ると聞くもの見るもの暢んびりした氣分の漂つて居ることは、羨ましい限りである。上海に着くや否やあの阜頭に群つて居る船頭が如何にも愉快げに船を操縦して居る有樣や、更に上陸して煉瓦積をして居る職工が櫛々として働いて居る具合は、あの穢い衣服によつて包まれて居る躰軀の中には清き高々たる精神が宿つて居るのではないかと思はれた。その他郊外に出て糞尿を扱つて居る農夫迄が、その顏には一點の愛もない有樣を見た時に、眞の人生は支那人に於て初めて認め得らるゝのではないかと感じた』と

この感想は極度に興奮した戰地から歸られた、而も感傷的である佛蘭西人の觀察なので、直に以て一般を律する譯には行かぬが、確かに支那人には寧ろ無教育者下層階級の間に一種の宗教的宿命觀があつて、支那に於ける階級的の紛爭を防ぎ、一面に動亂を助成する主なる原因をなして居ると觀察することが出來る。

從つて支那の動亂は、物質的利害の關係から發する政權爭奪から起ると同時に、所謂宿命觀から出發する動亂のあることを認めざるを得ない。現に今回の動亂の如きも宿命的運命觀を度外して、觀察すると到底判斷の出來ないことが多くあると思ふ。

四

支那人特に漢民族は、宗教としては大教の名の下に孔子の教も、佛陀の教も、老子の教も混淆して信仰して居るのである

が、就中最後の道教は、漢民族と共に發達したと云ふてもよい支那的の宗教であつて、天地の主宰者として玉皇があり、その下に神仙が居り、人間もその修道の結果で弟子になれる、その仙人の術は過去の業因を明にし、未來の運命を知ることとであつて、その透視の巧拙によつて仙人の等級が分れる。上級の仙人になると根本の運命に影響のない限り多少は運命を支配することが出來ると云はれて居る。從つて玉皇と雖も宇宙の創造者ではない。宇宙の事をよく知つて居るものに過ぎない、かゝる宗教觀を信じて居る支那人は、種々なる場合に於て自分の一代の運命を決するにはこの仙人の判斷を乞ふ場合が多い。

今支那で押しも押されもしない大立物の張作霖は兵を遣る時には必ず占者をしてその運命如何を占はしめて斷行したと云はれ、張將軍に對抗した吳佩孚も亦運命觀を信ずると頗る厚い一人であつて、河南の洛陽に大軍を擁して北京政府を意の儘に動かして居つた當時は、運命我に可なりとして天下の統一を夢見て居つたことは事實である。

支那が十數年に亘る動亂の繼續も、天運の然らしむるところで凡人が如何に焦せつても仕方がない、世の中が治まる運命の時が來ない以上は、治まるものでないと諦めて居る。支那人は不可抗力のことに遇ふ度毎に「沒法子（メーフワーツ）」（仕方がない）として諦めをするのも、この宿命觀念に出來するものと見なければならぬ。

而もこの宿命觀は一面に於て消極的に働くと共に、他面に於ては頗る積極的に行動をするのである。消極的のことは前に述べた通りであるが、積極的の例は團匪事件に於て現して居る。同事件の發端は山東省の一村落に道教を奉ずるものが一の拳法を案出し、之を練習するものは外國人の銃丸には當らない、刀劍では切られないと云ふことで、當時外國宣教師が支那到る處に、跋扈して支那國人の敵愾心は各地に漲つて居つた際で、ここに拳法術修練の一團は、外國人を中華の國土より排斥し去るの時期が到來したものと確信を有するに至り、彼の有名な團匪の動亂が起され列國の使臣を北京に籠城せしむるの大騷ぎを演じたのである。

對內的に宿命觀から動亂の起されたことは枚擧に遑がない。私が四川省重慶府に居つた折隣縣の知縣衙門を襲つた動亂の如きは、全くその縣下の一村落の油屋の小僧に將來帝王となるの運氣があるとの說が遂に一般無智なる民衆の信用する所となつて第一着手として知縣衙門の襲擊を行つたと云ふことである。これ等の例は非常に多く又この運命觀を信ずる多數の民衆を利用し、自己の利慾を遂げんとするものがこれ又亂世にはあり勝

ちの事實である。

支那の動亂が一筋縄に行かぬ複雜な所以もこゝにあると同時に、又その平定することも意外に迅速な所以もこゝに存するのである。「支那には動亂起り易くして而も起り難し」との一見矛盾の論理が成り立つのもこゝにあるのである。

之を要するに支那最近の動亂は、野心家の政權爭奪の爲と時代に適應したる社會革命の旗印の下に行動を開始したものにソビエート露西亞が參加し一部に共產主義的の行動が加はり、更に漢民族固有の宿命觀が織り成されて五色の麻を亂したるが如き混亂狀態を呈して居るのではなからうか。

五

支那の動亂が叙上の如しとすれば、時に小康は得らるべしとするも近き將來に於て、支那人自身の力を以てして支那の動亂を全く終熄せしめ得るとは見ることが出來ない。然らば明末の亂世に滿洲より愛親覺羅氏が起つて蒙古人を聯ね、曲りなりにも中原を定めた如き統一した外力が加はるとすれば、問題は自ら別な結論を生むのであらうが、現在の國際關係は、列國悉くの共同一致が望みなきは勿論、利害の一致する英米二國の間すらも、完全の協調を期し難い狀況から、外力を以て支那の動亂を鎭定することも、容易の業ではないことを思はせる。

かく感じ來る時は支那の動亂は對外的は暫くをき對內的には、更に二十年乃至三十年は繼續するものと判斷を下さなければならない。

こゝに支那の動亂と尤も密接の利害を有する我國は如何なる態度を以て之に臨むべきであるか。今や我朝野の人々は南京事件、漢口事件の勃發して以來俄かに對支論策を囂々するに至つたが、果して何人か名案を樹て得るのであらうか。南京事件漢口襲擊に今更驚いたる人々は、兵力干涉も辭すべからずとの強硬論を唱へ、その論者は揚言して居る『若し今日の儘に放任する時は、我國の支那に在る利權は、根幹から覆され、再び同胞の支那發展は望むことが出來なくなる、日支兩國の關係は歐米諸國と支那との關係の樣に單に貿易上の利害だけに止るのではない、日支の關係は結局するところ兩國の生存の問題なのである」と。

支那の人は動もすると、日本は人口が多くて物資が少ない、支那との經濟關係がなくなると、自然と滅亡である。日支親善の提唱が日本側に多い譯はその爲めであると、眞しやかに云ふて居る。

併し實際の話は、東洋に日本がなかつたならば支那は歐米人

の勝手氣儘にされ、列國半殖民地はおろか印度の二の舞となるのではあるまいか。兎に角日本も支那なくして少くも向上發展のの餘地の乏しいことは事實である。現に昨年度我國輸出貿易總額の二割六分、輸入貿易總額の一割七分は支那との間に行はれて居る。唯支那が動亂相次ぎ且つ思想上の變化よりして、我國が過去に於て有したる經濟上の權利は如何に成り行くべきかは大なる疑問であると同時に、南京事件、漢口事件の如きことが繰り返さるゝに於ては、依然傍觀態度を繼續する事が果して上乘の對支方針であるか、考慮の餘地があると思ふ。

支那の新人が唱へ居る治外法權の撤廢の一事に就て見ても現在支那の司法制度及びその司法官の下に完全なる裁判が遂げ得らるゝであらうか、支那人の如く宿命觀の下に於て裁判に服し得ざる外國人は、この點に非常なる苦痛を感ずるであらう。

司法權は支那の制度の改良と、司法官の訓練によつて整備するとして、關稅自主權の恢復より來る我對支貿易の前途は大いに考慮を要すべき點であると思ふ、この點に就ては、我朝野共に利害關係が尤も大いなることを察し、これを緩和する爲に兩國の間に通商上の互惠條約を訂結せんとして居る。しかしこれは果して成功するであらうか。よし成功しても永續的の性質を有することが出來るであらうか。支那商人が唱へて居る如く日本は支那に向つて帝國主義的に經濟侵略をなすことを抑止する爲に關稅を引上げ外國品の輸入を防ぎ、又支那の原料品、食糧品の輸出を制限し、更に工業方面にあつては支那に設立した外國工場を不利の地に陷らしむる爲に課稅上の手加減をなし又外國工場の設立に制限を加へることも出來ることゝなり、又是等のことは自由に任すとしても、勞働者を使嗾して工場經營に不利を來たさしめることも出來る。その上に現在の支那は、是迄と性質を異にした、新らしい對外運動がロシヤ人指導の下に、全國に亘りて漫延して居る折柄とて、單に我國が從來支那に有する權利の蹂躙を受ける許りでなく、工場經營者は勿論、貿易業者も多大の損害を被るものと見なければならない。

六

英國は對支貿易に於て、これ迄第一位であつたが、近時實際に我國が第一位であり、又支那に於ける企業でも、日本は英國を凌駕してゐる、更にその本國の貿易總額から見た、英國の對支貿易は、僅かに五分强に過ぎない。米國の對支貿易は、近來著しく發展したと云ふても、尙ほ本國貿易總額の六分三厘を出てゐないので、我日本が前に述べた如く輸出入共に非常な總貿易額に對して、大なるパーセンテーヂを有つて居るのと較べ

て、その利害が同日の談でないことは無論の話である。

されば今回の動亂に就ても、痛切な影響を蒙るものは我國が第一である。今物質的の事は暫く措き、南京事件の如きが屢々繰返される時は、容易ならぬ國辱として、國民の憤慨を買ふは必然である。現に日本人の一部には、今回の事件に對し、支那の責任を問ふべく至急陸兵を派遣すべしとの論議を見るに至つて居る。特に上海居留民團は決議を以て、我政府に之を要求して來てゐる。

私は引續き混亂の支那に在つて、親しく我商工業の發展に努力し、而も絶えざる不安に襲はれてゐる、我同胞の境遇には深き同情を表する。しかし退いて熟慮することを忘れてはならぬ。目前のことのみを見て輕々しく動くことが、果して我在留邦人の眞の利益となるであらうか。更に大局より見て我國の利益となるであらうか。

支那に何か重大な事件の起る毎に對支共同出兵と、共同干渉とは列國間に常に起る議論であり、又過去に於ては屢々これを實行した。しかしその結果は必しも良好でなかつたことは周知の事實であつた。特に時勢は代り、世界の思潮は著しく違つて來た今日に於て、再びシベリヤ出兵の二の舞を演ずる如きは、大に考慮の必要があると思ふ。

勿論支那人は、前に述べた宿命觀に支配さるゝ國民性を有するので、列國が餘りに退嬰のみこれ事とするに於ては、如何なる事態を惹起するやも計り難い。この點よりして南京事件の如き不祥事が、更に蔓延の兆あるを認むるの時は、利害を共通にする列國は、少くも手を携へて支那に臨み、飽くまで暴行者の責任を糾彈するの必要を感ずると同時に、心より支那が支那自身として從來の壓迫より逃れ眞に漢民族更生の陣痛に惱むとすれば、その産婆役を勤めて日支兩國が眞の共存共榮を遂ぐる上には、飽くまで共同の歩調に出づることを努めなければなるまい。

七

最後に私の支那動亂の内面的觀察が誤りないとすると、從來の我對支政策であつた、我が利權の擁護、同胞の發展援助にのみ重きを置いた丈では、眞の提携は望が薄くはないであらうか。言葉を換へて云ふと、將來の對支態度は、單に獨自的愛國心の發動では、効果を擧げることは困難で、寧ろ相互扶助、共存共榮の國際心を發揮して進むことを心懸けねばならぬ。

此見地からは、今度支那一部の誤つた暴擧を、膺懲する爲めに、列國と協調して行動に出ることがあるとしても、東亞永遠

の大策から觀て、自國の存立の爲めに動くと共に支那の動亂は、飽くまで更生の陣痛たらしむる爲めに盡すのが、日本及び日本人の責任であると信ずるものである。（二、四、五）

（四）國民革命を成就せしめよ

根岸信

一 反帝國主義

目下燎原の火の如く、支那全土に廣まる革命運動が、世界を驚かすに至つたのは、主として反帝國主義を標語とし、列強を排斥するからである。此の標語が革命運動をして今日あらしめたのは、八十餘年に亘れる所謂帝國主義國家の束縛から解放されんとする支那國民の熱望に投じたからである。從來支那國民が解放を熱望し、種々なる運動を試みしも、覩るべき歸結を得なかつたに拘らず、今回は恐るべき効果を來たしたのは、赤露の後援を受けたこと確かに一原因たるを失はない。赤露は民族自決の提唱せられた後、支那の特に解放を欲求するに至つたことを見、已れ其欲求を滿足せしむべきことを宣傳して、先づ其歡心を買ひ、一方には反帝國主義の運動を熾ならしめて自國と主義を異にする列強の排斥を行はしめ、他方には該運動を社會革命に導き、自國と主義を同ふする與國を作らんと企てた。即ち赤露は一九一九年七月二十五日カラハンの名を以て、『勞農政府は支那をして列強の束縛を脱せしむる爲め、帝政時代に結んだ一切の條約を廢止し、これによつて獲たあらゆる特權を抛棄する』と聲明し、尋でカラハンをして支那と對等條約を締結せしめたので、支那の輿望を自國に收むることが出來た。彼は其主義を支那に流布するにつき利用すべき對手を物色し白羽の矢を國民黨に立てた。國民黨は三民主義を標榜し、其主張が社會主義に近いのみならず、相當に整つた組織をもち、全國に信者を控へて居る。それで彼は種々なる方便を以て國民黨に近き、遂

にボロジンを廣東に派遣し、孫逸仙と握手せしめた。當時國民黨は悲境に沈淪して居つたので、赤露の援助を得ることを喜び、國民黨の組織を改め共産黨を加入せしめ、政綱中に共産主義を加味し、遂に不平等條約廢止を對外政策とした。それから、世界革命の前進國と聯合し、帝國主義を打倒することを題目とし、猛烈な運動を惹起した。赤露と聯合するにつき非常に異議あるものでも、不平等條約を廢止し、利權を回收するにつき、極力贊成する。國民黨は赤露の援助を得て北伐軍を起したとき、出師の名義として、國民を熱狂せしむべき反帝國主義を用ゐたので、豫想外の大捷を博したが、勢ひの激する所、不幸にして列國と衝突を起すに至つた。

二　列國の利權

所謂帝國主義の國家は、支那で如何なる特殊の權利や利益を持つて居るかといふに、概して二大別することが出來る。其の一は列國共通のものであり、其二は各國專屬のものである。一八四二年の南京條約締結以來、列强は通商貿易其他の必要から、支那にとつて片務的な種々の特權を要求した。しかしこれは單に自國の爲めに私するのでなく、諸外國にも均霑せしめた。然るに普佛戰爭以後、列强の間に殖民地獲得の競爭起り、其影響も亦支那に及び、列强の支那に要求する利權は、漸次自國專屬のものと變じ、日淸戰後特に甚だしくなつた。有名な利權戰爭といふ言葉さへ生じた。列國共通のものは、治外法權を始めとし、關稅協定權、沿海內河航行權、布敎權等であり、各國專屬のものは俗に所謂勢力範圍、即ち不割讓約定地、一般投資優先權、又は鐵道鑛山等に關する優先權を有する一定地域、租借地、及專管居留地、鐵道、鑛山、森林、其他政治的經濟的特權である。各國專屬の利權獲得は、啻に支那全土を各國勢力範圍に分割する嫌あるのみならず、他國の通商投資をも妨害するとの理由で、支那に勢力範圍を持たない米國から門戶解放、機會均等、領土保全の三大原則の提唱があり、兎に角列强の贊成を得たので、專屬利權に多少の制限を附くることになつた。日露戰後、列强間に競爭することを止め、協調して投資する傾生じ、歐洲戰後此傾向著しく、遂に日英米佛間に新四國銀行團を組織し、各國の勢力範圍に於ける特殊の要求を除斥し、國際銀行團の協同的活動の爲め、支那全土を開放することになつた。尋でワシントン會議開催せられたとき、二十餘年前に米國の提唱した三原則確立したので、各國は特定地域に於ける優越權を拋棄し、三原則の適用を無效に歸せしむるが如き獨占權又は優先權を要求せないことになつた。從つて各國專屬利權なる

ものは非常な制限を受くることとなつた。然るに列國共通利權は該會議に於て見るべき制限を受けなかつたばかりでなく、各國の地理的勢力範圍に對し、英佛の行政的勢力範圍なりと稱せられた海關、鹽政、郵政さへ、幾分列國共通の性質を佩びて居るので、何等の制限を受けなかつた。反つて支那外交監督機關たるべき極東諸議院の設置が可決せられ、支那鐵道國際管理の前提と目すべき鐵道統一案も通過した。それで支那分割の憂全然消滅したが、支那を國際管理に附すべしとの意見歐米で行はるるに至つた。從つて各國專屬の利權を回收することよりも、寧ろ列國共通の利權を回收することが、支那にとり、重要な問題となつた。孫逸仙が不平等條約廢止の遺言を爲し、主として列國共通の利權を回收し、列國と對等の地位を占めやうとしたのは、卓見である。彼の妄りに過激な說を唱へ、徒らに列國の反感を挑撥する、反帝國主義者の反省すべき所でなからうか。

三　對外政策

支那が不平等條約を廢止し、國權を恢復する手段に、二つある。一は合法的であつて、二は非合法的である。前者は列强を對手とするか、又は國別談判により、條約を改正し、其目的を達せんとするものであつて、北京政府が特別關稅會議で列國に對し關稅自主權の恢復を要求し、又は現在日本と互惠主義の對等條約締結の交涉を爲すが如きこれである。後者は直接間接の行動により、外國から利權を回收し、又は外國の特權を無効に歸せしめんとするものであつて、國民政府が學生、勞働者、農民、及中小商人を打つて農工商學なる共同戰線を形づくり、政府指揮の下に、所謂帝國主義國家と決戰を爲さしめ、或は暴力を以て漢口、九江、の英租界を奪回し、或は排貨、罷工、勞働者工場管理、經濟斷交等の手段を以て、外國の通商投資を妨害し、彼等をして已むを得ず支那より退却せしめんとする如きこれである。

合法的手段に對しては、列强たるもの支那國民の正當なる希望に係る限り、互に相勸めて之を達成せしむべきであるが、非合法的手段に對しては、正義人道の上から一致協力し飽くまで之を排斥せなければならぬ。國民政府も亦豫め之を慮り列强の共同的壓迫を受けないやうに、各個擊破の方法を採つて居る。日本に於て國民政府はかゝる手段を採るものでない、のみならず日本に對し好意を表して居るとの說有力であつたが、彼等として客年十二月二十日ボロヂンの武昌に於ける演說を讀ましめば轉迷改悟するだらう。該演說に曰く「吾人の聯合戰線は英、日、佛、米、の有力なる帝國主義者を網羅するものであるが、其目標は孫總理の烱眼により指示せられた通り、一英帝國主義

を倒せば足るのであつて、其他は風を望んで降參する。特に注意すべきは英日帝國主義者の立場である。吾人は先きに兩帝國主義者の結合たる聯盟關係を打破した。彼等の經濟上の地位は、競爭的關係にある。英帝國主義の經濟的野心は愈々吾人に好意好感を寄せて來た。日本帝國主義に對しては、飽くまで打倒英帝國主義の巧妙な運用に依つて之を操縱する必要がある。斯くして英、日、米、佛の個々の利害に順應した對外策略を運用することに依つて、支那に於ける有ゆる不平等條約は撤廢せられ、軍閥援助を阻止し得らるゝと共に、帝國主義者相互の提携を牽制し、各個に打倒し得らるるものである。」と彼等は此戰略に依つて、無人の境を行く如く、列國の權利利益を蹂躪したのである。

四　支那の冒險

革命黨は赤露の支援により、反帝國主義を標語とし、揚子江以南を征服し、征服域内の列國の權利々益を蹂躪したが、二個の危險に出遇つた。其一は共產主義に引込まれること、其二は列强を敵に廻はすことである。赤露は歐亞の諸國に於ける赤化運動の失敗に鑑み、左翼小兒病即ち急燥に左傾運動を爲すことを戒め、支那共產黨に厳命し、隱忍して國民黨と結合し、單に無產階級のみに止まらず、國民黨の右翼や、都會のブルジョアに至るまで、苟くも利用し得べきものは之を利用して、革命の共同戰線に立たしめ、先づ支那人の熱血を沸かす反帝國主義運動に努力し、共產主義の正敵たる帝國主義の國家を排斥し、絕えず共產主義の宣傳を行ひ、漸次同志を增加し、反對分子を淘汰し、徐ろに國民政府の施設を共產主義に引つけ、社會革命を行はんと企て、昨今遂に共產系をして革命派内に於て非常の勢力を占むるに至らしめた。即ち革命派の三大系統たる黨、政府、軍、及黨の指揮に屬する民衆組織につき之を驗するに、黨に於ては、共產系は殆んど中央部に勢力なかつたが、最近遂に漢口本部を乘取り、政府に於ては、國民黨の先輩を表面に立て居つたが追々自ら要路に當り、軍に於ては、聯隊長以下下級幹部を占め、民衆組織にあつては其牛耳を執り百二十二萬の會員を有する勞働組合を赤色勞働組合に加入せしめた。支那のケマル・パシヤを以て稱せらるゝ國民系の蔣介石も亦共產系の跋扈を如何とも出來ず非常に困つて居つて、目下クーデターに依つて共產系を驅逐しやうとして居るが、若し成功せない曉には、支那をして露西亞の二の舞を爲すべき虞がある。又革命黨は各個擊破の戰法により先づ英國を目標とし、奏功少くなかつたが、漢口九江に於ける英租界を强奪したので、血は水より濃い

との說通り、アングロサクソン人種たる英米をして協同出兵するに至らしめた。隨で國民黨内左右兩派の爭から、共產系のものが蔣介石を陷れんが爲め、南京に於ける各國官民を掠奪せしめた爲め、日本をして英米と協力して抗議を持込むの已むなきに至らしめた。然るに共產系は尙ほ省ることなく漢口の日本租界に侵入し、昨今切りに便衣隊を青島濟南に入込ましめて居る。若し此等地方で、日本官民を殺傷することになれば、流石無抵抗主義の日本政府も亦英米と同樣出兵することになるだらう。さうすると豫て世人の心配した通り、南軍と列强の衝突を來たし、連戰連勝の南軍も長髮賊と運命を齊ふする虞がある。場合に依つては列國の爲め沿海河岸の名港要津占領せられ、交通機關の一半も支配せられ、部分的國際管理を受けることになるかも知れない。從つて革命黨が調子に乘つて飽くまで反帝國主義を振舞はすと、或は赤露の二の舞を爲し、或は長髮賊の轍を履み、其他不測の禍を被むる心配もあるから、成るべく早く、該看板をふり捨て、合法的手段に依り、不平等條約を改正して、對等條約と爲し、隨時國權を恢復する手段を取るべきであらう。

五　列强の對策

南軍が反帝國主義の目的を貫徹せんが爲め取る所の手段は、列强を害し支那に禍するものであつて、排斥せなければならぬ。然し不平等條約を廢止し、國權を恢復して、列强と對等の地位まで向上せんとの希望は、正當であつて、合法的手段で其目的を達成せんとする限り、之を承認せなければならぬ。殊に日本の如く嘗て不平等條約に苦められた經驗あるものにありては、支那の希望達成に援助すべきこと勿論である。日本の支那に對する政策は頗るリベラルなもので、日本の經濟生活の安定を保つ爲め、自由貿易主義に適つた通商上の自由や資源の開發に便宜を得ればよいのであつて、支那が之に對し永久的保障を與へるなれば、日本は幾多の權利々益を拋棄して差支ないのである。現に支那の希望に應じ、北京に於て條約改訂談判を行つて居るが、條約改正に伴ふ急激なる變化に依る我國民の實害に對し、一時的調節法を設けしめて、互惠的對等條約を締結すべきであらう。さうなれば、他の列强も亦日本に倣ひ、條約改正を承諾し支那多年の熱望達成せるべきこと、日本の前例に照らし疑を容れない。若し一旦支那が列强と對等の地位に進めば、南軍の主張して居る政治的、經濟的、教育的の國權を恢復するの容易であること、是れ亦日本の例に顧みて明かである。然るに南軍は列强を敵とする赤露の手先となつて、暴力を用ゐ、國權を恢復せんとするのみならず、無辜の外國人の生命財産に危害

を加へ、殊更らに列國に挑戰するのは、自他を禍する外、何物をも得られないではないか。

國民政府の暴動は日を重ぬるに從つて慘烈になつて來た。若しこれが華府會議以前の如く列强の協調保たれて居つたならば禍の今日に至らぬ前に、喰止め得ただらう。列國協調の保たれない原因は種々あるが、日英の反目して居ること最も重要なものである。英國は日本の懇請を斥けて日英同盟を破棄した。日本の支那に於ける經濟發展をそねみ、往々支那人を指嗾して排日運動を爲さしめたこともあり、少くとも排日運動を痛快がつて、高見の見物をした。關稅特別會議の時でも、今回の支那事件でも、自國は他の何れの國よりも優越の地位を占めて居るから皆我が提案に贊成せよとの風があつた。これは英國の失策であつて今日の窮境に立たなければならぬ原因である。然し今や彼は大に後悔し、日本に協調を求めて居るのだから、日本の利害から考へて利益あるなれば、區々たる感情に囚るることなく、協調して未曾有の時局を匡救すべきであらう。前に述べた通り支那の排外運動は、當初南方に利害の最も多い英國のみを目標にしたが、今や假面を脫いで、一般的排外に移つたから、將來最も不利を被むるものは、北方に最も利害の深い日本でなければならぬ。日本は滿蒙に於て特殊の利益を有するばかりでなく、支那本部殊に北部に居住營業するもの最も多いこと云ふまでもなく、貿易に於ては三割一分、投資に於ては十九億、借款に於ては七億を占め、何れの國も日本に匹敵するものがない。且つ日本は支那を以て經濟生活の安固を期して居るのだから、南軍の排日は日本の生存に危害を加へる恐れがある。從つて日本としては、英國の求めに應じ、相互に協調して共通の大禍を免るべきことを計るべきであらう。然るに日本政府は對支通商投資上、英國と同じく根據地といふべき上海に關し、英國より該居留地及其附近を防禦せんとする提議ありたるに對し、異議を唱へ、僅かに居留民の生命財產を保護すること丈け一致の行動を採るに過ぎなかつた。又南京に於て、南軍の爲め日本領事館は徹底的に掠奪せられ、領事夫妻を始め守備の海軍上陸兵及避難の商民が有ゆる凌辱を受けた爲め、始めて英國と共同して南軍に抗議を出すことになつたが、或條件につき英國と爭ひ、まだ適切な手段を採るに至らない。グズ／＼して居る內に、時局が急速に進展し、南軍の魔手が北方に延ぶるやうになれば、貿易投資の大半、日本人の手にあることとて、排外は即ち排日となつて、列國は高見の見物を爲し、日本のみ獨り窮境に陷り、協調せざりしことを後悔しても追付かぬことになるだらう。

日本政府が時局の眞相を知らず、種々な誤算があり、從つて對策も誤つて居つたが、今一々之を咎め立てする暇がない。唯現在問題となつて居る、居留民の生命財産の保護につき一言したい。英米は夙に時局の容易ならざるを慮り、奥地に居留する人民に引上を命令し、成るべく之を上海に集中し、大兵を派遣し之を保護する手段を採つた。然るに日本は、時局を樂觀し、引揚の準備をせなかつたのみならず、劣勢な軍艦を派遣し、居留民の生命財産の保護につきては、萬遺漏なきを期すと揚言して居つた。然るに一たび南京事件起るや、南京碇泊の日本軍艦や上陸兵は無抵抗主義を採り、少なからぬ失態を演じた。日本政府も不面目の爲め今に至るまで、事件の眞相を發表し得ない。照れかくしの爲め、事件は單に南京に止まり其以外に波及しないなど言ひふらして居つたが、忽ち漢口事件起り、居留民全部日清汽船に避難した。目下上海丈けは大丈夫心配なしと、日本總領事が告示を出して威張つて居るが、上海の安全なるは、日本政府の保護充分な爲めでなく、英國が二萬の大兵を派遣し、死守して居るからではないか。上海在留日本人が、英國の保護に對し、感謝狀を捧呈したとの事だが、日本政府の國辱でなからうか。毎年支那を旅行するとき、往々在留日本人から我政府は支那官民の壓迫に對し保護して呉れない。領事館や、軍艦は日本に引揚げてもよろしい。吾々が日本國籍を有する利益何處にありやなどの怨言を聞かされた。彼等は昨今如何に憤激して居るや想像するに餘りある。日本政府も口先ばかりでなく、本氣に在支同胞の保護をして呉れねば困る。若し南京事件が所在に起れば、四十年來日本が血と金とで支那に經營したものは根本的に破壞せられ、將來復興すること思ひも寄らないことで、文字通り日本の經濟生活を脅かすことになる。

以上述べた通り、各種の方面から觀察し、日本は列國と協調して成るべく速かに時局を拾收すべきである。然し之が爲め支那の國民的運動を妨害し、日本と竝び極東に於ける二大獨立國たらんとする願望を頓挫せしめてはならぬ。又義和團事件の二の舞を演じ、無闇に支那人の生命財産に傷害を加へることを避けるは勿論、支那を部分的國際管理に陥らしむることを防がねばならぬ。更らに支那國民をして列國の態度に失望し、勞農ロシアを謳歌せしめ、或は新興勢力を打壞したため、反て支那の紛亂を招き、勞農ロシアに乘ずべき機會を與へ、支那を共産化することも大に戒しめねばならぬ。從つて支那ケマル・パシャの稱ある南軍の總司令蔣介石を始め、支那唯一の政黨と目すべき國民黨右翼のものに援助を與へ、彼等が出師の名義として居

る反帝國主義の看板を引卸さしむる爲め、不平等條約廢止等を聽入れ、支那を列強と對等の地位に進めるやうにし、彼等をして斷然赤露や共產系と手を切り、支那國民の熱狂する國民革命を成就する便宜を計つてやつて、時局を拾收することが上策であらう。若し此策が行はれなければ、支那の前途言ふに忍びない。

(五) 動き行く支那の局面を見て

法學博士 米田實

一

曰く南京の國民軍兵掠奪暴行事件、曰く漢口暴民の日本租界侵入事件、曰く漢口に於ける共產派の政權壟斷、曰く蔣介石對極左分子の衝突、曰く汪兆銘の歸國及び政界乘出し、曰く外國財力の後援ある陳獨秀の南下及新活動、曰く何々、

見來ると、支那刻下局面の轉移は迅速を極め、現はれ來る事件は送迎に遑あらざる位ゐだ、その上に例の通りの支那のことゝて複雜に複雜を極め、矛盾撞着もあれば猫眼的な變化もある、表裏反覆もある、殊に日本に來る諸報道になると、その經由する道程の如何に伴ひ、いろ〳〵に色彩づけられて居るので、一屑判斷に厄介だ、兎も角武漢、義を興し、民國を建てゝより十五年、行き詰つたところから、昨年頃から未曾有の大變轉の秋に際してゐる上に、又た多年混亂の風浸潤してゐるので、コウならねば止まぬであらう、此場合にいろ〳〵論評を加へても、論評の材料は正確でないことあるをも想像せねばならぬ、然らざるまでも、時局は進轉して、月刊誌上の言議は「時おくれ」なる危險あることを考へねばならぬ、ソコデ此際、予等も細目に渉つて局面を說くわけには行きにくいのである。

だが、予は大體を見て、下の二つの事實を指摘せねばならぬのである、何ぞや、

第一、今後、進路に多少經緯があり、消長があるとして

も、支那では從前の如き個人本位的な軍閥の時代が、漸く過ぎ去り、一の綱領に結ばるゝ國民黨系のやうなものゝ勢力擡頭を見る可き點が、北伐軍の近事に依つて證明せられたこと、

第二、北伐軍の成功と共に、國民政府の支那政權掌握期が近きつゝあると考へた國民黨内の極左派若くは共産派及准共産派は、ソロ〳〵將來に對する準備として、彼等の所謂右系、若くは穩和派の蔣介石氏等の勢力失墜を圖らねばならぬと考へ、之が爲めに種々の策を講じ、今や外國人排斥で此等の右系を苦境に陷れる策をも敢てしてゐること是れである。

二

先づ第一の點から述べやうか。

今の支那で、軍事的に見事な成功を收めてゐるのは、蔣介石を總司令とする北伐軍なること、恐らく誰も異論があるまい、同軍は、昨年七月二十五日廣東を出發してから、約八個月半、その間、疾風迅雷の勢で長驅し、湖北まで進み、九月一日武昌を包圍し、九月七日漢陽を陷れ、轉じて江西に於て九月十七日南昌を占領し、十月九日になると所謂宣統三年興義の地と言はるゝ武昌そのものを領したのであつた、此事自身已に世を驚かしたのであつたが、その後の經過を見ると、益々華々しいのである、蘇浙に雄を唱へてゐた孫傳芳も困り拔いて、多年の仇敵張作霖と提携し、山東の張宗昌軍の南下さへも見たけれども、それは南軍の北進を阻止するに、殆んど何の効果も無かつた。本年、二月浙江省の杭州が陷落したのは、古い話しとしても、安徽方面に入つたものゝ手で先づ三月六日蕪湖陷り十五日には秣稜關も陷り、同二十日になると常州も占領せられ、江蘇省略取の準備が完了し、同二十一日上海の占領行はれ、同二十四日、南京の陷落を見たのであつた、かくて國民政府の勢力はその本據であつた廣東を外にしても、湖北、湖南、江西、福建、浙江、江蘇、安徽に及ぶこととなつたのである、一昨年志半ばにして死んだ孫逸仙氏は、その計畫した軍官學校教育が意想外と言へる程効果を擧げ、又黨員の巧妙な宣傳策も加はつて、多年廣東に不安全な蟄居振りを示してゐた國民政府が少くとも支那南半の支配者となつたを見て、恐らくは地中に感泣しつゝあることだらうと思ふ。

予は之を望見して、「何の爲めに戰はねばならぬかを知らず、唯だ俸給を貰つて闘ふ機械」たる支那舊式軍隊の生命が愈々終りに近きつゝあることを思はねばならぬ、矢張り能く何の爲に戰ふかを知り、熱心に之に共鳴する青年を中心とするやうな軍

隊の時代となりつゝあることを認めねばならぬ、(勿論南のすべてが、今日コウ言ふ分子から成つてゐると言ふのでは無い、四五十萬と言ふ大軍、その多くの部分が無教育者であるのは、言ふ迄も無い、がその中堅にコウ言ふ分子があつて、彼等を引きづるところに目を留めねばならぬ、)同時に個人の權力慾の外何ものも持たぬ軍閥の勢力が、孫文の三民主義のやうな、國權回復のやうな明確な主張、プラットフォームを持つ團結の勢力に、屈せねばならぬ運命をも看取せぬわけにはいかぬのである。

予は今日、支那の事を考へ又た論ずる人々が、如何なる局面に對しても、先づ此根本的傾向丈けを善く記憶に留めて置かねばならぬと思ふものだ。

三

次ぎに記憶せねばならぬのは第二の點だ、北伐軍の成功で、支那政權掌握期が漸次近づくと見た共産系が將來に對する策として、右系の排擠を企てつゝあることだ、蓋し今日の南方系統の思想には異れる流れ、異れる分子があり、久しく葛藤を續けたものだ、一昨年十二月北京西山に於ける右派の決議、昨年三月蔣介石の共産系逮捕、ロシア人放逐、昨年後半蔣介石北伐中、廣東に於て行はれた排斥陰謀皆な左右兩系の軋轢を證據立てゝゐる、而して最近になると、共産派即ち左派の排擠熱が烈しくなつて來たのである。

而して予の所見によると、三月末の南京事件は一面に於て矢張り之を語る點に於て意義深いものがあるのである。

南京事件とは何かと言ふと、三月二十四日南軍が南京を攻略すると、その軍兵の一部が盛に外國公館、外人住宅に來襲略奪を恣まにし、我日本領事館も悲慘なる犧牲者の一となつた出來事である、而して最初、之は所謂「進軍と共に掠奪を事とする」無規律な支那軍隊の常例から出たものであり、唯だ無識な彼等がその亂暴を外國公館にさへ及ぼしたのであらうと思はれたのであつた、がやがてすると、多少異つた事情が判明して來た、即ち右亂暴軍兵は南軍の第二軍、第六軍の一部から成ること、明確となつた、加ふるに、その掠奪は支那人に向つて行はれずして專ら外國人を目標として行はれ、且つそれは、南京の共産系分子が豫じめ準備し計畫し、新に入り來つた軍兵に之を實行せしめたことが分つたのである、換言すれば、此暴行は今日、國民政府に於て、半分の勢力を占めつゝある共産系が少くとも直接若くは間接に責を負はねばならぬことが分つたのである、次ぎに又た漢口の暴民日本租界侵入事件が起つた、之は支那小兒の遊戯から起つて、日本水兵と勞働者との爭ひとなり、延い

で暴民の日本商店襲撃となつたと傳へられてゐる、故に事の起りは偶發であつたのだらう、即ち南京事件とは異るだらう、けれども共產黨全盛の漢口に於ける暴民の來襲に直接、間接に共產系の排日宣傳の映響が無かつたかは、予は將來今少し事情の判明する迄、疑問を殘さゞるを得ないのである。

四

だが漢口事件を保留するとしても予は南京事件に現はれた長江一帶及び南支那に動きつゝある空氣を見て、國民政府內外の共產分子が一の新らしき作戰に出でつゝあるを思はぬわけにはいかぬ。

新らしい作戰とは外でも無い、日本人を含む外國人排斥を盛んにし、以て一は日本等と協和せんとする蔣介石氏其他穩和分子を對外的に苦境に陷らしめ、一は之に依つて外國の强硬政策を誘致して、反射的に、支那人の對外惡感を挑發し、比較的に外人と協和的だと見られてゐる蔣氏其他穩和分子を支那國民間に於て不人望ならしめんとするに在る、而して彼等が此新戰術に出でつゝある心事は、目下戰勝と共に地位高まる危險ある蔣氏を失勢せしめやうと言ふ嫉妬氣分も交つて居るが、又た大體をして此際右黨側を屛息せしめて、彼等の赤化の理想の急速なる實現、否なそれ程でなくとも、彼等の政權獲得、政治支配を齎らさうとするや、言ふ迄も無い所である。

斯くの如く考へる外に、南京事件などの說明はつかぬと思ふ、けだし、同事件を偶發の排外事件と見做すにはそれは餘り善く準備せられたと言へる、隨分飛び離れたところまで襲はれてゐるではないか、又た單に慾本位の掠奪事件だとして見ると、彼等がその際支那人を犯さず專ら外人を目的とした點が說明し得られぬと思ふ、支那人富豪より、駐在外人の方が金持ちだとはドウしても言はれ無い、又た支那の喪失してゐた國權回復の便法としてかと言ふと、租界占領ならば兎も角、コウ言ふ襲擊はその意味にはならぬ、徒らに外國との間に支那の得にならぬ難問題を發生するのみである、勿論予も排外心が無關係であつたとは言はぬ、又た掠奪の慾そのものも無關係であつたとは言はぬ、だが之丈けでは說明がつかぬ、而して予は最近共產系が蔣介石氏等穩和派に對し猛烈に執りつゝあつた諸種の手段に顧み、又た實際此度の事件が蔣氏の及ぼしつゝある映響に照し、一部から異論が出るかも知れぬが、ドウも上に述べたやうに考へるものである。

少しく之を說明しやうか。

元來支那の政治には極端な內訌が附き物のやうな觀がある、

軍閥でもそうだが、政黨でもそうだ、南方の國民黨政府が廣東に蟄在して伸ば無かつた重もなる原因の一も、矢張りそれであつた、だが古き事は之を措き、昨年頃共產黨系と蔣介石等穩和系との爭ひは隨分烈しかつた、昨年の春蔣介石氏のクーデター、自由分子四十名の逮捕多數のロシア人の放逐それから延いて此壓迫の下に極左派の汪兆銘はフランスに、譚平山はロシアに去り、共產系も一時手も足も出ないやうな感があつたこと、世人の知る通りである、ところが昨年七月以來蔣介石は北伐軍總司令として專ら吳佩孚、孫傳芳、張宗昌等の敵軍との戰鬪に注意を集中せねばならなくなり、國民政府部內の問題を閑却するの止む無きに至ると、共產黨分子は此虛に乘じて內部の權力機關を獨占すべく畫策し始めたのであつた、第一の準備は言ふ迄も無く宣傳であつた、之が大分成功し、活動の機が出來たと見ると、彼等は南昌に根據を置いてゐた蔣氏の延期希望に反し五ケ月前早くも漢口に聯席會議と名づくる國民政府及び中央黨部の最高權を行使する機關を造り、政令と黨令とを發してゐたのである、これは本年二月二十一日の擴大聯席會議で廢止せられ、同時に中央黨部國民政府は武漢で公式に執務し始めたのは、世人の記憶に新たなところであらう、而してそれが南昌にある蔣介石系、穩和系、軍人系の勢力を抑制する武漢の共產系、極左系の策動であつたこと言ふ迄も無い、ところが、事は玆に止ら無かつた、三月十日に於ける武漢國民黨六千名の「個人獨裁反對」の請願決議同三月十二日中央執行委員會に於ける選擧の結果中央機關たる常務委員九名中六名の多數が武漢派に占められて、蔣介石の味方は少數となつたこと、更らに政治委員會、常務委員會、軍事委員會の各主席が廢止せられ、爲めに蔣介石の占めて居た大切なる地位が無くなる、彼れは最早や一の軍隊總司令丈けとなつたこと、孰れも共產派が蔣介石排斥の大策動に從つて居た反映ならぬは無いのである、然かも何分、常勝的北伐軍の總司令の權威、勢力並びに之に支持せらるゝ右派の力は、決して左派にとりて安心出來るものでは無かつた、コウ言ふ形勢のうちに一は穩健な蔣介石を對外的に板挾みの苦境に陷れ、一は支那と日本等の關係を惡化し以て支人の心を蔣氏等穩和派より離れて共產系に向はしむる意味が加はつて、南京事件のやうな對外暴行が策せられたことも、看取せられ得るではあるまい乎。

コウ說くと、穿ち過ぎた見方だと異論を持ち出す人もあらう、併し予は少くとも斯く信じて疑はぬ一人である。

五

以上のやうな觀察をして居る予は、刻下の局面に對し我が政府及び國民に對し如何なる態度に出でんことを勸めんとする乎、予は第一として率直に言ひ度い、一昨年十月開催北京關稅會議以來、我國が執つた支那國民の正當な欲求、抱負に共鳴し

之を支持するの外交は、根本策として最善たものである、之は時々刻々に變轉する支那の形成一時的に出沒する現象に依つて變更を促さる可きものでは無い、此點は國際道德の命ずる所でもあるが、又た支那に於ける新興勢力の擡頭てふ根本事實にも副ふ所の政策であらねばならないと。

第二として予は亦た言ひ度い、目下蔣介石等の右系が眞面目に左系壓服に努力しつゝある限り、列强殊に日本は出兵其他强硬手段で支那人心を刺戟し、排外心を煽るやうな形成を齎らすことを愼まねばならぬ、と、蓋し前に言つたやうに外國の强硬策を挑發し以て對外的に右派を板挾みにし、對內的に之を不人望にする共産派の意圖から南京事件の如きが計畫せられたとすれば、之に對して餘りに强硬手段に奔ることは、却つて共産派の策戰に乘るの愚擧ではあるまい乎、之も世上の注意を促し置き度いところである。

併し右の內第二の意見は本文を草する瞬間の形勢を本としての所見であり、第一のやうな根本的主張では無い、蓋し今のところ、蔣介石の勢力決して微弱では無いけれども、又た蔣介石が戰爭に忙はしく、內を顧むるの遑無き間に、共産黨が行つた猛烈な宣傳は、工人會は勿論軍兵にも、民衆に及んでゐることを忘れてはならぬ、又た何分過渡時代のこととて、權力者の交代も頻として行はれて來た最近の實例に照すと、よしや支那國民が眞に赤化する危險無くとも、結局將來の支那を支配するものは、穩健な進歩分子に極つて居るとしても、一時的でも、三日天下的にても、共産派が優勢を占むることも、皆無とは言はれ無い、又た革命のやうな時代に、一時急激派の論が人氣を惹くこと、ヨーロッパの例でも往々見らるゝ所である、故に時に或は蔣系の失勢、雌伏の如き現象が起らぬとも言はれ無い、萬一ソウ言ふ時代にはドウするか、我帝國の體面の爲めにも權威の爲めにも、又た在支日本人保護の爲めにも、今日以上に派軍の活動位ゐは求めねばならぬかも知れぬ、予は之迄も差控へよと言ふのでは無い、要するに時々刻々變り行く支那に對しては、實際問題として伸縮自在に適當の行動を執らねばならぬだらう、けれども第一として述べたやうな根本意見を持つ予としては、在支邦人保護は成る可くその身命を全うする爲め安全地に引揚しむる方法に依るのが第一義であらうと思ふ、而して如何なることがあるにしても、先年サイベリア出兵のやうな大袈裟な武力干渉で、赤軍退治を考へ又た一黨一派の援助を圖つてはならぬ、言ふ迄も無いことだが、孰れの國民にも自尊心がある、外國出兵で自尊心を傷けられた國民の人氣は、是非善惡に拘らず排外分子の味方化する危險が多い、之れ位ひ赤色分子を有利にするものは無い、現にサイベリア出兵がそれを經驗したのでは無かつた乎。

右は予の目下の考へだ、之以上は更らに時局の變轉を待たねば述べ難いやうに思ふ。

荒木大尉の自殺行爲

清澤洌

一、大尉の『責任』と當時の事情

責任を感じて自殺せんとしたこと、それだけで、もう批評を超越する尊いものがある。荒木大尉の責任感による自殺行爲は、いかなる批評家も、まづ一應筆をおいて、その誠實なる心持に、敬意を表せねばならない。

私のこゝに書かうとするのは、荒木大尉といふ個人の自殺行爲についてゞはない。荒木大尉が、あの場合當然なすべき事――かれの屬する海軍省、外務省及び一般關係者の、見て以て最も賢明なる方法なりとするところをなしながら、しかも何故自殺を決心せねばならなかつたか。かれの自殺行爲は『責任感』からだといふ。しかもその責任は、かれの直接命を奉ずる上長が、その行動を是認してゐる以上、これに對する責任はない筈である。それだのに、かれは何故に『責任を感じて』自殺を決心するに至つたのであらうか。この思想的矛盾を檢討しようといふのが、この文の目的なのである。

議論を進める前に、まづ概略ながら當時の事情を明らかにする必要がある。かれは南京の邦人保護のために、上官の命を受けて、同地に向つた。但し同地の日本領事と居留民代表者は、日本軍人が武裝して堂々と繰り込むことは、却つて支那人側の感情を刺戟するからといふので、成るべく目だたない方法によつて、上陸し、かつ同じ方法で武器をも持ち込むことを希望したのである。

そこでかれは四月二十三日、六名の部下と共に多少の武器彈藥を車に積んで、日本領事館に運ばうとした。この途中、當時まだ南京を占領てゐた山東軍は、これを發見して、差押へ、如何に抗辯するも、返還しなかつたものである。

これが交渉を繼續してゐる間に、時局は急轉して、南軍は潮の如く南京に入り込んで來た。そして日本領事館にもなだれ込み、領事館に備へつけてあつた武器彈藥は勿論、彼等の武裝をも解除して、一物を餘さないまでに侵略して行つた。在留民保護のために同地にあつた荒木大尉及びその部下は、この亂暴を目前に見ながら、どうすることも出來なかつたのである。

前に武器を掠奪され、更にこの恥かしめを受けた荒木大尉が二重の重大なる責任を感じたのは勿論である。併しながら、これを大局から見れば、それが最も賢明なる方法であつた。もしかれが支那人の暴に對し暴を以て酬いんとする如きことあらば、同處にあつた百數十名の同胞は、尼港の大虐殺と同じ悲運に會して居つたであらうことは同處に居つたものゝ異口同音に認めるところである。故に官憲も在留同胞も、始めから出來るだけの隱忍を懇願し、而して最後まで隱忍するや『よく隱忍して下すつた』と感謝して居つたのである。

二、海軍省の『責任』否認

日本政府の對支政策は、幣原外相が何回も議會その他において聲明したる如く、無干渉主義、觀望主義である。この事の可否は、國民の間においては無論立派に問題になり得る。併しながら直接に政府の支配下にある役人と軍人には、これに對して批評の機能がなくして、服從の義務のみがある。

支那の現場にある日本の官憲の間には、この政府の方針が、動脈に血が流れるやうに一貫して傳はつて居つたことはいふまでもない。如何なる侮辱にあつても、發砲するな、と云ふやうな極端な訓令があつたとは、無論信じられないが、併し政府の方針が、すでに大體において無抵抗主義に終始するにありとすれば、彼等は自己の感情を殺してまでも、この政策を忠實に實行しようと覺悟したであらうことは當然である。これは當時英米の軍艦はドシ／＼發砲したに拘はらず、日本軍艦だけは一發の彈丸も打たなかつた事實によつても明らかである。

荒木大尉は極端と思はれるまでなこの政策の遂行者であつた。かれは自分の方からは一發の大砲も、小銃も打たなかつた。そして在留同胞は隨分な侮辱も蒙つたけれども、幸ひにして無益に生命の一つをも、異郷に捨てるの愚をしなかつた。

この荒木大尉の自殺の報が新聞電報で傳へられると、海軍省は直ちに一つのステートメントを發表した。それは大尉の死が、武器掠奪事件と何等の關係なしといふ點であつた。海軍省の意志は明白である。海軍々人は、海軍省の最高の政策によつて終始すべきものではないか。その命令の發動するところ生命を鴻毛の輕きに比して、猪突すべきは平生、朝な夕な教へて倦まなかつたところである。即ち軍人の行動は、常に高官の命令によつて動くべく、而して今回の荒木大尉の行動は、この命令の埒外に出でて居るものではない。

然るに何事ぞ、新聞電報は荒木大尉が、政府の命令を完全に遵守した理由を以て、自殺を企てたといふのである。海軍省は、故に直ちにステートメントを發表して曰く『荒木大尉の自殺行爲は武器掠奪問題と關係あるものにあらず』と。

三、かれ自身の道德觀

政府の政策を遵守し、その保護すべき在留邦人の希望に應じて行動した荒木大尉は、何故自殺せんとしたか——少なくとも一身を捨てて、償はねばならぬやうな何の責任を、かれは感じたであらうか。

前に述べたことを、も一度繰り返すならば、かれはその場合に處して、最も賢明なる行動に出た。即ちかれは軍人としても、責任者として、最も善い事をしたのである。善い事をして自殺せねばならない理由が、何處の世界にあらう。こゝにわれ等の見逃し得ない問題は生れて來るのである。

かれが自殺を企てた理由が、その命を奉ずる國家機關の譴責を恐れたのでないことは明らかである。何となればかれの處置に對しては、同じ場處に居つた森岡領事も、また同じ軍籍にある上官も、極力これを辯護すべく、場合によればよく忍ぶべからざるを忍んだことに對し、表彰をすら奏請しないとは斷言し得ないであらう。これ程彼等のその

後の談話には、そうした感謝と同情の情が見えて居る。政府が國策の遂行者に對して、刑を課することはないであらうといふやうな、混み入つた考察はあの場合出來なかつたにしても、少なくとも生命と代へ事をするやうな刑罰に處せられるとは、かれ自身も決して思はなかつたに違ひない。從つて譴責恐さの自殺と見るのは、かれの心事を侮辱するものである。

かれの自殺を企てたのは、他になすべき事があつたのをなさなかつたといふやうな自責の觀念からでもなかつたに違ひない。南京の領事館及び城門は、海岸よりは餘程遠く、十人や二十人の軍人では、日本軍人が如何に強くも、衆寡敵し難いのは餘りに明白な事實である。眞先きに無線電信も切り去られて、海上の日本軍艦とは通信し得ないことになつてゐた以上、彼等と戰ひながら援兵の來るのを待つわけには、何としてもいかない事情にあつた。

かれの自殺を企てた動機は、南軍の秩序を信じ過ぎた不明の責任でもなかつたと思ふ。この不明の責があるならば、それは僅か兩手に餘る軍隊しか派遣しなかつた日本政府か、乃至は長く同地に居つて事情を知りながら、南軍に對して備へず、却つて門を開いて歡迎すらもした領事の責任でなければならぬ。

然らばかれが自殺を企てた原因は、そも〳〵何處にあるのか。私の觀察にして誤りがなければ、かれの從來の教育と環境が、かれの行爲に對し自責し、自耻し、面を向けて歩くに堪へざらしめたのである。それは對外的であるよりも、對內的であり、社會的であるよりも、對箇人的である。即ち春秋の筆法を以てすれば、かれを殺したのはかれ自身の道德觀だといつていゝと思ふ。

四、異なる善惡の標準

荒木大尉が屬する社會の教育及び道德觀の著るしい特長は、それが極めて劃一的なること、斷定的なることにある。

彼等はその教育を受くるに當つて、自由研究の結果、これを受け入れたものではない。彼等の教へられたる善なり、惡なりの思想は、既成觀念としてつぎ込まれたに過ぎないものである。その內容を批判することを得ずして、結果をそのまゝに信じねばならないのが、彼等の教育である。

だから彼等の思想なり、行動なりの判斷は極めて簡單な規範の下に生れる。『上長の命令は事の如何を問はずして從ふべきこと』がそれである。『日本は世界に冠絶して居ること』がそれである。そうしてかうした大原則から出發して、武器は軍人の靈魂であることが無條件に信ぜられ、また敵の前には絶對に後を見せずして前進することが教へられる。これ等の思想が、正しいとか正しくないとかといふことをいはんとするのがこの文の目的ではない。この人々の教育、道德が一個の斷定、チクタとして彼等の頭につぎ込まれて居るといふのが、私の指摘せんとするところなのである。

彼等はこの教へられた思想を、唯一の判斷の根據としてその進退を決する。また實際、自由討議から出發しない彼等の教育は、これ以外に混み入つた考へ方をするに便宜に出來て居らない。荒木大尉の場合においては、かれに支那人の感情を刺戟しないやうにといふ上長の命

令、あるひは意志に從つた。そしてそれは軍人として當然なすべき命令服從の行爲であるに違ひなかつた

併しかれが上長の命に從つたのはいゝけれども、四團の事情は、『上長の命令に從ふべし』と同じ時に教へられた他の道德を脚下に踏みにじらねばならない自分を發見した。即ち武人の生命であり、靈魂である武器を奪はれ、その軍人のプライドを極端に傷つけられたのである。昨日、上長の意志を行つて、軍人の一つの務めを果したかれは、その事が翌日、軍人の他の務めを破つたことを發見して、かれは身をおくに處がないことを感じた。その結果かれは、この矛盾にたへかねてついに自分の身を殺して、その立場を明らかにせんとしたのである。

から解釋しないで、どうして百數十名の同胞の內、かれだけが自殺せねばならないやうな、つきつめた感情に立ち到つたことを諒解し得よう。もし在留民保護の責任からいへば、領事、警察署長その他も同じだけの責任がある筈である。しかも普通の文官が、この場合、責任を明かにするに、かゝる手段に出でるであらうとは誰か豫期しよう。この點からいへば、日本軍人の道德の觀念は、一般社會のそれと餘程違つたもののあることを知るべきである。

この事は外の場合を引照すれば、もつと明らかになる。シベリア出兵の時に、原少佐は國家の政策に反して、武器を齎送せんとして、國法に觸れた。しかもかれが國法に觸れながら如何に昂然として、それが志士の行爲である如く振り舞つたか、また甘粕大尉は震災の當時、三名の生命を斷つた。しかもかれ自身も、かれの屬する社會も、かれのこの國法に觸れたる行爲を、いかに一種の誇りと自信を以て眺めたか。これ等の事實は、軍人社會にあつては、國法すらが、その善惡を判斷する規準になつて居らないことを物語るものでなければならぬ。

五、提供されたる思想問題

私はこの小論文の主題として、荒木大尉を引合ひに出したことを、極めて不本意に感ずる。荒木大尉はその責任を感じて死を以て、これを償はんとした人である。この責任が何であるかは、前述の通り議論があるけれども、死の決心は冗談ではない。殊に妻子のあるかれが、かう思ひ立つた生一本な誠意に對しては、われ等は眼瞼の熱くなる感があるのを禁じ得ない者である。

私の問題とするのは、かれがその寄託を受けたる國家に對しては、何等生命を以て償はねばならぬ責任がないに拘はらず、敢へて自殺を企てたその道德觀の矛盾である。かれ自身の道德觀といふよりは、かれの屬する社會の道德觀が、かれをして單に『國家の政策を遂行した』といふだけの理由では、正面からかれの僚友に相對し得ぬやうな空氣のあることとである。

國際關係が複雜になつて行く現代にあつては、國家のために盡す方法は單なる一筋道であつてはならない筈である。進むこともあらうし、退ぞくこともあらう。劍を捨てることが、劍を把ることよりも有利なる場合は、速やかに劍を捨てるべきである。この融通性が荒木大尉の屬する社會にあるだらうか。

同じ自己を殺す場合でも、猪突する時においてのみ賞揚され、表彰

された、これに反して隱忍して自己を殺す場合には、却つて嗤笑を受けるといふやうな社會が、もしありとすれば、それは日本の前途を幸福にするものだと云ひ得ようか。

それよりも、もつと問題なのは、一般社會の思想と、かけ離れた思想の一團が、永遠に同じ國の中に存在して、手をとつて進み行き得るであらうかといふことである。一つの階級が、他の階級に、より重き責任と義務を課することは、武士階級が沒落して、立憲政體が出來あがつてから、もう失くなつた筈である。そして又同じ道徳と、同じ責務を背負ふて、國民が一體に進むところにのみ、進歩も、また憲政々體の妙味もあらう。

荒木大尉の自殺が未遂に終つたことは何よりであつた。併しこれによつて提供された問題は、それにかゝわらず、日本の將來に殘されて、賢明なる人々の解決に待つべきものである。（一九二七・四・二）

若槻首相辭職の時期

鶴見祐輔

政治は現實である。現實である以上、我々は出來ない理想を吹きかけて見ても初まらない。我々は政治の實際が歩一歩理想に向つて進んでゆくことを希望する。しかしそれは歩一歩である。我々は今日といふ現實に生きてゐるのだ。從て我々は若槻首相の辭職といふことも、現實問題として取扱ふより仕方ない。

現實の日本の政治問題としては、私は若槻首相は辭職する必要はないと思つてゐる。純理論を離れて、實際論として考へれば、若槻首相がやめなければならぬ理由は、少くとも私には見當らない、若しありとすれば、それは若槻首相自身がやめたいと思ふ場合である。さうして我々多數の局外者の直觀では、若槻首相はやめたいと考へてゐると思ふ。そこで若槻首相の辭職が、實際問題として、我々の視野に入つてくるのである。

理由は後廻しとして、私は端的に言へば、若槻首相の辭職は四月末か遲くも、五月初旬がよいと思ふ。その理由を說明することが、私の現在政局批判である。

何故に私が、若槻首相はやめる必要がないと言ふかといへば、それは、我々が立憲政治をやつてゐる以上、首相の辭職は議會多數の反對をうけて、これ以上政策遂行が出來なくなつた時でなくてはならない。然るに第五十二議會に於ては、反對黨は一致して不信任案を撤回し、且つ政府の最重要なる豫算案を大多數をもつて通過さしたのであるから、首相の辭職する理由はない譯である。それ以外の色々の理屈は、暗室の私語である。立憲政治の本體には關係ない。私は勿論この不信任案撤回及豫算成立の道行及動機については賛成をしてゐない。それは他の機會に於いて既に私の意見を公表した。しかし如何なる理由と形式とに依るにせよ、既に政府重要法案の多數が立憲的形式を具へて、上下兩院を通過した以上、政府の辭職すべき理由は毫末も存在しない。

形式論は左様であるとして、實質論としては如何であるかといふに、私は現內閣の事業及勢望が、必しも全國民の間に於て甚しく不評であると思はない。それは比較論である。即ち國民は現內閣以上によき內閣が出現し得るといふ强い待望を抱いてゐると思はないといふことである。五十步百步であると思つてゐる。先づ誰がやつても、あんなものであると考へてゐると思ふ。否むしろ之に代つて現はれる內閣は、まづくすると今より惡いかも知れないとの危惧を抱いてゐる人々もあると思ふ。從て今日直ちにこの內閣を倒さなければならないといふ熾烈なる國民的要望はまだ無いと思ふ。國民の抱いてゐるのは、一切の既成政治家に對する漠とした反感である。從てその反感は、一つの既成勢力を倒して、他の既成勢力をもつて之に代へんとするの具に用ゆることは出來ない。この國民的反感はある將來の時機に於て、別の形で現はれて來るであらうと私は考へる。

そこで現實の問題としては、私は若槻內閣は、やめる必要はないと思ふ。このまゝやれる處まで一路邁進すべきである。來議會に於て、反對をうけたなら議會を解散して、その國民的票決によつて進退をきめていゝ筈であると思ふ。然るに、何故か世上においては、若槻首相の辭職を問題としてゐる。首相や與黨が否定すればする程、世間は首相は辭職するものと考へてゐる。かゝる春霞のごとき茫漠たる感じが、今は打ち消すべからざる政治的事實として全日本に瀰漫してゐる。然らば、かゝる事實の儼存する以上、その理由及び當否は別として、それは實際政治上の問題として、吾人論評の範圍內に入らざるを得ない。

それはつまり生物界を支配する原則が、若槻內閣を支配してゐるのである。即ち若槻內閣の生命力が盡きたといふ國民の豫感である。形式や理論を超越するちからの問題として、若槻內閣の生命がその終りに近いたといふ直觀である。あのまゝでは、あれ以上やつてゆけまいといふ全國民的の謂はゞ虫の知らせである。かゝる不可思議なる豫感の說明としては、我々は色々のことを擧げ得る。一つは若槻首相自身が政治に倦んだ、といふ感じである。若しこれが事實でないといふならば、若槻首相は口頭のみならず、實際的行動に於て、生氣潑溂たる新生命の飛躍を國民に示す必要がある。さうでない限りは、加藤友三郎內閣の末期のやうに、また加藤高明伯の歿前のやうに、國民は何とはなしに、影が薄いといふ直觀を腦裏から拂ひのけることは出來ない。それから今一つは、憲政會自身の狀勢である。私は今日の憲政會は政友會に比して、必しも地方に於て不評判であるとは思はない。しかるに拘はらず、我々一般國民は、今日の憲政會はあのまゝでは、若き日本を作り出すやうな生命力に身振ひしてゐるとは考へてゐない。日本民衆政治史の回轉期たる普選を前にして、憲政會は深淵の前に戰いてはゐないか、といふ感じがある。それよりもつと適切に、あのまゝで憲政會は有機的統一體として、暴風雨の下で躍動し得るのか、といふ疑ひを持つてゐる。分裂とか頭數限少とかいふやうな卑近な危險より、もつと本質的な生命力の退潮が、今日の憲政會にはないか、といふことを國民全體は、漠然とした感じとして抱いてゐる。

そこでこの內閣は、あのまゝでは來議會に臨めまいと國民が感じてゐるのである。勿論現實政治の對策としては、是が非でも、この秋の

府縣會議員選擧までは、このまゝでやつてゆかうと言ふ議論があるであらう。あはよくば、その餘勢に乘じて次の總選擧をやらうといふ熾烈な要求があるであらう。形式上の理論からは、それでよいのだと、私も考へる。しかし生きた生命の問題としての政治は、かゝる理論の實行を困難ならしめるであらう。要之、首相と憲政會とは、共に倦れてゐるのだ。こゝいら邊で、新生命注入の新回轉をしなくては、刻々隱約の裡に動いてゐる國家生命の代表者とはなれなくなつてゐるのだ。我々局外者として見れば、憲政會は何故解散しなかつたのかと齒痒ゆく思ふ。千載一遇の好機を逸したのだ。議會劈頭か、または最後の清瀬君中心に亂鬪の日に、一と思ひに解散したならば、全國民の眼中において、憲政會は新しき力として復活したであらうと思ふ。しかしそれは、もうすんだことである。故にこれからの問題としては、憲政會はこのまゝ成行にまかせて進んで、ロイド・ジョーヂ内閣の末路のやうに、一切の力がつきて後、朽木の如く倒れて、四分五裂の苦境に陷るか、乃至は一と奮發して蘇生復活のために最後の努力をして見るかである。その努力の時期としては、我々は早いだけ憲政會の利益であると思ふ。

それは憲政會は在朝黨である關係上、有利な條件を持つてゐる。それは政權を持つてゐると、人材が伸びる機會が多い。從て今日の憲政會内閣に於ては、數人の人々が發達した。その一人は濱口氏で、いま一人は幣原男である。濱口氏は不思議に人の信頼をかちうる人である。幣原男の外交は、明白に一般國民の信任を擔つてゐる。この二人は憲政會の財産（アツセツト）である。この財産を巧に利用する事が、憲政會の復活の途である。殊に今日、三黨首が三人ながら、忌まはしき色々の事件で國民の信用を失ひつゝある時、この二人者は少く共無疵である。ゆゑに無疵にして國民の信任する者を、その政黨の新しき看板とすることは、黨略上のみから言つても有利である。ことに若槻氏が首相をやめる前に、憲政會總裁を濱口氏に讓つておくことは、次の内閣を三度び憲政會のものとする爲めに有利なる局面を展開するに違ひない。

若槻首相の政治は、幕末の阿部伊勢守を想像せしめる。しかし、幕府が老巧な阿部伊勢守では支へきれなかつたやうに、今日の既成政黨は、若槻氏の如き政治家では支へきれない時期にさし迫つてゐる。いづれ一度は、井伊掃部頭が出なければならぬ時が來るであらう。しかし、それは明日であるか、二十年後であるか、我々は知らない。

しかし英國ですら勞働黨が天下を取るまでには、四十年かゝつた。日本の無産政黨が、政界の實勢力となるのは、可成り將來のことである。その間に、日本の既成政黨の一つが勇斷をもつて中產階級のための急進黨となるか、或は既成政黨以外に於て新しき中產階級黨たる新自由黨が生れることが、日本政界の必然性である。問題は、その政黨には、憲政會が成るか、政友會が成るかといふことである。今日のままでは兩黨とも、トーリーとなる成きべき可能性をもつて進んでゐる。それは日本の現在の政權が、六十年依然として封建的保守階級の掌中に存するために、政權に近付かんとする者は、この保守的空氣に迎合し、半呑半吐の態度を取るためである。而して一方、普選の民衆的大潮が滂湃として脚下に寄せたる爲めに、各政黨は保守黨の頭をもつて、民衆黨の尻尾を引づつてゐる。その胴と尻尾とを切り離さなければな

らぬ時機が、今各政黨の眼前に迫つてゐるのだ。もう今日の選擧民は、一個一圓の辨當と我田引鐵のお題目だけでは、釣り切れない程變りつゝある。自由黨以來の野武士の傳統を有する政友會が、多年の政權病に累せられて、野黨たる今日すら進步黨になり切れずに居る今日こそは、在朝黨たる憲政會が、進んで進步的自由黨となるべき絶好の機會である。その爲めに若槻首相の引退を必要となる。これを事蹟の上から云へば、若槻首相は歴代首相中必ずしも遜色はない。しかし民衆的政黨の首相としては、明かに不向きである。憲政會が新生命に更生する爲めには、若槻首相引退の時期は早いだけよい。明敏なる若槻氏が、これに氣付いてゐないわけはない。若槻氏の政治的生涯の最後を飾るためにも、ソールスベリーが、バルフオアーに遜つて引いたやうな、水際立つた引退が必要である。それには、豫算編成期に入らない前に、さうして、初夏の候全國遊說の時間を充分に剩して居る今日に於て、陣を撤することが有利である。

さうして新しい黨首の下に、憲政會が、永井君や中野君あたりを入閣さす位の元氣で、全國に呼號して民衆の政黨と爲るの意氣込を示せば、若槻氏も有終の美を爲し、憲政會も復活の機會を得るであらう。

若しそれだけの決心が若槻氏にも、憲政會にもないなら、このまゝで壇の浦まで往く外はない。從て若槻氏の辭職は、府縣會議員選擧以前には起り得まい。何となれば今のまゝの形勢で、うつかり若槻首相がやめれば、政權は飛んでもない處に轉んで往くかも知れないから。

（昭和二・三・三一）

粗製濫造

下村海南

品物の値が高いが質は惡い、輸入は增すが輸出は減る、つまり品物の粗製濫造を以て世界に聲名を馳せつゝある日本の國は、釣合上、人間の粗製濫造も拔目なくやつてゐる、どうして中々如才が無い。

近頃はブラヂルに移民だといふそりや至極結構だが一年に八十萬人も殖える人間の一割だつて八萬人である、とても八ケ切れたものではない。北海道樺太方面の拓殖といふ大まかな千萬人收容出來るといふて見てが、十年そこ〳〵で滿員になる。勿論近頃は泥棒や人殺しの手合も、主人とか主婦の外に乳吞兒まで殺すことになつてる、又一家で主人夫婦が心中するときは子供達まで卷き添へにする方針をとつてゐる。しかしこれとても人口調節策としては二階から眼藥どころか、九牛の一毛にだも如かずである。

どうも人口問題食糧問題を八釜しくいふ日本といふ國で、一番失念してゐるのは人種改良といふことである、惡質淘汰といふ事である。ヤレ癩病ヤレ精神病、ヤレ三期の梅毒アルコール中毒などと、惡質遺傳の見えすいてる者まで、極めて不用意に尻から尻から勝手放題に繁殖せしめつゝある事である。

昔から百利を興すより一害を除くに如かずといふてる、男一匹一生

かゝつても一萬圓の富が容易な事ではデッチ上げられるものではないが、女子供でも一時の間に極めて手輕に故意に又無心に、幾千萬圓の富を煙にすることが出來る。日本では無駄な算盤に合はぬ人殺しも多いが、一番馬鹿氣て困つた事は放火である、ヤレおかみさんに叱かられたとか口惜しいとか云ふので主家に火をつける子守女もあれば、僅かな火事泥かせぎをしたさに放火する分別盛りの男もある、殊に一寸とした煙草の火一つの不注意で山火事だとかガソリン爆發だとか、爲めに多くの人命や資産を煙にして仕舞ふ。況んやかうした連中の爲めに小中學校と矢張り金をかける、學校の生徒の定員をなにがしか塞ぐ、教育費はかさむ一方で、しかも不良少年が多く出來れば、青年までに死ぬ者が又馬鹿に多い、先きに立たれる二親も辛いが先き立つ子供も割が惡い。況んや早死する者の爲の教育費からそれ病院、それ感化院、それ警察、それ裁判所、それ刑務所と國家の失ふ處や誠に莫大なものがある。

こゝに於て歐米諸國は體質改善平均壽命延長の爲に積極消極に努力をつゞけてゐる、中にも北米合衆國などは精神狀態の無能力者の爲に、一年に失ふところ二億弗を超えるといふので人種改良が中々八釜しい、外來移住者の數はもとより質の制限が極めて嚴重になつた、國內では人種改良につとめて國民の平均壽命は男子四十九歳三二女子五十二歳五四に上り、近くは五十八歳位まで更らに延長されて來たが、此上平均壽命を七十七年まで延ばさうといふので研究と實行につとめてゐるといふ事である。

目方が輕く身長は短く、乳兒幼兒少年の死亡率が高く、おまけに小學校の實際離れした教程は長きに過ぎ、さて世の中へ飛び出した日本人の平均の壽命はといへば先づ四十四年だ。せめてはかうした弱質者殊に癩病院精神病院などに收容せるもの又刑務所に收容せられある精神上の無能力者などは、法律の力をかりても、之れが生殖力だけ無くなる手術、極めて手輕い手術だけは施したい。

一體かうした事は帝國議會と稱するところで考へてくれても好ささうに思へるが、何分日比谷が原といふ處は、或る階級や地方などの利害に絡んで來て、直接間接に黨勢擴張とか政權獲得とかにならぬと問題にして與れぬらしい。日本國民全體の恒久的福祉といふやうな問題はあまりに普遍的であり重大すぎるさうだ、もと／＼積極的にどういふ政策を行ふといふのではない、只消極にどうして政局に立てる相手方を突き落とし得るやといふ揚足取りの一手しかないのだから……尤もさうした疵が各政黨に行き屆いてる時は丁度松島事件の如く互に口を緘して謙譲の美德を發揮する事になつてるが……朴烈事件とか機密費事件とかいふ事になると大に歡迎されるが、かうした國民の保健といふやうな問題をかつぎ出すと、それこそ氣狂ひ扱ひにされるかも知れない、といふてさうした代議士を選んだ選擧民といふ事に想到すると、結局は蓋を明けて見ないと分らないが、兎にも角にも普選が俟ち遠しい。

（二、四、二、於湘南莊）

震手法案と世の誤解

小汀利得

(一)

東京の或る女學校で、先生が生徒に一つの質問を出した。

それは『若し貴女方自身の部屋から、火が燃え出した場合には、貴女方はどうしますか?』と云ふのであつた。

この問ひに對する生徒達の答へは十人十色で、或ひは羽織を脱いで消しますとか、大きい聲をあげて家の人を呼びますとか、或ひは急いで庭へ飛び出すとか云ふ類ひであつたが、就中最も奇拔なのは『ベルを押します』と云ふのであつた。此答へを聞く時、その答案の主の如何に貴族的であり、且つその考への薄ぺラであるかを笑はずには居られない。

自分が現に起居して居る部屋から、火が出て燃えて居ると云へば、一瞬も躊躇はならない時ではないか、それにも拘はらず自ら働いて火を消さうとはしないで『ベルを押します』と平然として居るところ餘程の愚か者か、然らずんば命の惜しくない人間でなければならぬ。

恐らく彼女は十幾つかの今日迄いつも『ベル』を押せば御附きの女中か三つ指を突いて『お孃さま御呼びで御座いますか』と出て來るに定つた生活に慣れて、人間はいつでもさういふ條件のもとに、生きて行けるものとぼんやり考へて居るのであらう。

若しかう云ふ愚か者が、たつた一人某女學校の生徒のみであるならば、我々はこれを一笑話として看過することが出來る。併し靜かに考へて見るとこの女學生の持つ依頼心、言葉を換へて云へば他人が、社會が、國家が何時でも助けて與れるものだと云ふ考へは、恐らく現代日本人に共通の悪傾向ではあるまいか?

(二)

此處で話は本論に入る。五十二議會に政府が提出した震災手形の補償及び善後公債法案では大いに議論が沸騰して、野黨側では政府と政府の與黨をば、まるで一鈴木商店の手先きでゝもあるかのやうに宣傳してしまつた。何でも受けのいゝ方に向きたがる新聞の論調も、いつの間にかこの野黨の宣傳と同一歩調を取つて居た。大多數の國民が全くそれと思ひ込むに至つたのも、ちつとも無理でない。

併しこの震災手形問題の沸騰した時、さきの一女學生の『ベルを押します』を考へ出すと、やれ鐵道を敷いて與れ、それ港灣の修築をして與れ、義務教育費を増して與れ、いや俺達には金鵄勳章年金を殖やして貰ひたい、と明けても與れても國家といふものを目當てにベルを押し續けて居る、その同一の國民や議員達が、震災手形の問題についてのみ、ベルを押してはならぬと國家の犠牲を否定しようとしたのには多分の矛盾と無智とがあるのではないかと思ふ。

私はこれからこの人氣の無い震災手形の法案が、何故に議會に提出されまたそれが通されざるを得なかつたか、について少しく震手案の爲めに肩を持つて見たい。所謂震手法案に反對の聲を擧げた人々は少なくなかつたが、其中の代表的な人物であり、且つ少くとも不純な動機から出發したものでない點に於いては武藤山治氏に指を屈さなければなるまい。

(三)

武藤氏は大正十二年九月廿七日の緊急勅令第四百二十四號即ち所謂震災手形補償令には大なる欠陷があつて、震災に關係なき財界の有力者をも、同時に救濟するを目的として居る、之れ政商救濟と呼ぶ所以であると云つて此案に反對して居る。

あの緊急勅令に色々な意味の欠陷があることは私も同感である。そして直接震災に關係なき手形が含まれて居たことも事實であらう。併しながらあの大地震の後の大混雜の時に於いては地震の當日たる九月一日以前に割引した手形と定めるより外に適當な方法は考へられなかつたのではないかと思ふ。

また武藤氏は震災手形の現在額二億七百萬圓の中、日銀が再割引して居るのは九千八百萬圓で、殘る一億九百萬圓は手形所持銀行が、その手形の確實なことを知つて日銀から買ひ戻したものと認めなければならない。と云つて居るがそれは實際と違ふ。けだし震災手形を持つて居る銀行では資金の要る時には日銀へ持つて來て再割引を受けるか、年末とか月末とかを越せば金が要らなくなるから日本銀行から手形を買ひ戻して日銀に對する利息の負擔を免れようとする、そこで、二月頃に日銀の再割高が減じたので、決して確實だから手許に引取つたと云ふ譯ではない。更らに武藤氏は政府が手形の振出人及び裏書人の名前の公表を拒んだことを以て、國民の疑惑を深くすると云つて居るが、之れは一應尤もである。併し之れまた案の通過が確實であればいゝが、姓名は發表した、案は通らなかつた、と云ふやうになると唯徒らに財界を攪亂する結果になるから當局者として、あの場合云へなかつたことは同情してやつて然るべきである。また武藤氏は震災手形は癌腫であるから、一日も早く破裂せしめなければならぬと云つて居るが、之れは大いに議論の分かれるところで、日本の財界に米國流の外科治療を施すことの是非はなか〳〵大問題であらう。

武藤氏の議論を批評することは私の目的で無いから之れ位に切り上げて、以下簡單に震手問題の由來を說くことにする。

(四)

震災當時の東京の銀行の有樣はどうであつたかと云ふに、加藤友三郎內閣の末期で金融は大いに硬塞し今日ならば日歩一錢六厘から一錢六厘五毛位で立派に割引を受け得る一流の商業手形割引步合が二錢三四厘の高率を唱へ、政府の公債政策も行き詰まりを唱へられて居た位のところへ、あの大地震で東京市內に本店のある銀行百三十八の中百二十一は燒け落ちて仕舞ひ、同じく支店の三百十行は二百二十二を燒いて殘るは山の手の八十八に過ぎず。横濱の銀行はその殆んど全部が燒けてしまつたこと云ふ迄も無い。

かう云ふ慘澹たる狀態で流言蜚語は盛んに行はれ、一時的ながら米國へは日本銀行全滅の電報さへ飛んで外國の日本に對する信用も殺らんとする虞れすら有つた際だから、先づ銀行に店を開けさせて資金の疏通を圖ることは焦眉の急であつた。

と云つて日本銀行が全然銀行自體の危險に於いて資金の流通を圖ることは到底不可能だから、そこで所謂震災手形補償令が出て、日銀が損をした場合には一億圓だけは政府が出してやると云ふことになり、玆に初めて必要な資金が全國に動くやうになつた。

さて震手問題の抑々の起りは右のやうであるが、段々やつて見ると何分にも欠陥の多い日本の經濟界のこととて、震災手形の量も當初思つたよりは多く、またその決濟も容易につかない、勿論中には何とか出來なくもないのに金を返さないで居る者もあらうが、それは例外で、大部分は大正九年の反動の創痍が癒えないところへ、また震災の打撃を受けたので手も足も出せないと云ふやうなものが多い。震手問題のコヂレた三月の十五日から一週間の間に東京、横濱で相當名の知られた銀行が七つも破綻したのもそれを證據立てるものであらう。

（五）

一體純理論からすれば、いけないものは片つぱしからブッ潰して行つて差支ないが、内外の事情を見るとさうばかりも行かない。

それならばその内外の事情とは何かと云ふに戰時中から禁止してゐる金の輸出の如きも今では佛伊兩國を除いて大國で依然禁じて居るものはないのに日本はまだ解禁出來ない。お隣りの米國はその弗の威力を世界の隅々にまで及ぼさうとして居るのに日本は指をくはへて居るどころか、絶えず米國から借金をして居らなければならない。而も不景氣のところへ人口が無暗に多く、國民は皆半ば失業狀態に居るものだから、ウッカリ事業を潰してしまふと、色々な小五月蠅い問題が起つて來る。臺灣銀行のやうな業態の惡い銀行は、潰してもいゝと云ふ議論も一部には在るが兎に角臺灣の中央銀行でもあり、又海外に對しては横濱正金に亞ぐ、澤山の爲替を取扱つて居て、貿易上重要な金融機關となつて居るから、之れを潰して經濟上はもとより植民地統治の上に迄大きな惡影響が起つても困る。

加ふるにこれ迄毎期末毎にかれこれ一億五千萬圓の震災手形再割引を日本銀行がやつて來たのを一億圓で打ち切つて仕舞へば少くとも今後六月末と十二月とには五千萬圓位宛は金融が硬塞して來ることは慥かである。そこで姑息ながら國民經濟を圓滿に發達させて行く爲めには此上財界に惡い變化の無いことを希望せざるを得なかつた。

かう云ふ理由から、當局としてどうしてでも震災手形の解決を圖らうとしたことは、必ずしも謂れの無いことでもなければ、またその動機に不純な何物かゞ潜んで居たと見ることも邪推であると斷言して差支ないと思ふ。

げだし議會で震災手形の二法案が通過した、その日に問題とされて居た臺灣銀行が重役會を開いて鈴木商店に對する新規貸出しは一切中止することゝし、永年の腐れ緣を打切つたので、玆に震災手形の法案が通過すると同時に之れによつて巨大な利益を得るものとして攻撃されて居た所謂政商の鈴木が倒潰することになつたのに徴しても武藤氏

等の邪推するやうな不純な動機の無かつたことが判るではないか。

實は台灣銀行は今日迄も數度鈴木との關係を絕たうとしたが震手問題が片付く迄は迂濶にそれを遣ると反つて鈴木と心中するやうな破目(はめ)になつて居たのが、震手の解決で漸やく宿志を達したのである。

（六）

から述べて來ると、今日の幼稚な且つ欠陷だらけの日本の財界では、震災手形のやうな問題も、或程度までは是認せざるを得ないのみならず、今日まで國家のやつた何々救濟、何々貸付等の中では、比較的最も有意義のものたることが知られる。

と云つても私は決してかうしたことを奬勵するものでは無い、否や寧ろ一日も速かに斯樣な變則な施設の必要がなくなるやうにしたいと希つて居る者である。而も旣に震災手形問題が解決した以上、いま差し當り日本の國民經濟の發達を脅かす程の病障もないやうだから、恰もよし從來最も多く此種の施設を、やつて來た政友會までが、震手案に强く反對を唱へたのであるから、之を機會として、從來の『ベルを押す』思想を國民全體の頭腦から奇麗に取り去つて仕舞ふべく、政府の極端な保護誘掖主義を改めたいものである。（二・四・五）

智的浪人の救濟

遊佐敏彦

失業は近代社會的疾患の最も深刻なるものであり、且つ慢性的致命的な苦惱である。現今の世相を瞬めて何人かその陰慘な行詰を發見しない者があらう。學校は入學志願者を拒絕するに峻嚴である一方、卒業生は社會に追出されて過剩であるとせられ、社會は就職難の聲に滿ちて天分も才能もあらばこそ。彼の有名なマルサスの語をもつてすれば『彼は正當なる要求をなし得る親達より生活資料を得ることが出來ず、社會が彼の勞働を欲しないならば、食物の最小部分に對する權利の要求を持つてゐない。實際彼は生れて來た世界に於ける全く餘計な者である。自然の盛大なる饗宴には彼のために設けられた空席はなく、自然は彼に出て行けと云ひ、直ちにその命令を執行する』のである。この自然淘汰の苛酷な宣告は、實に現實の我が社會相に適中してゐるではないか。

而も勞働階級の失業苦に加ふるに最近所謂智識階級の就職難の甚しくなつて來たことは眞に悲しむべき現象である。而も彼等の或者はその履歷書を謄寫版で刷らなければならぬ有樣だと聞くに至つては現況の如何に慘めであるかは想像に難くない。現に私共の机上にはそれらの人々の履歷書が日に日に山積されて行くが、而も捌けて行くものは

頗る寥々たるもので、自分は職業柄とは云へ、解放されない重い氣分で毎日を努力してゐる次第である。從つて涙なしには聞くを得ない幾多深刻なる失業の體驗談を聞くが、勞働階級のそれとは可成り趣きを異にしてゐるを發見する。

勞働階級の失業者は勤勞の精神に滿ち、假令血の滲み出る生ま生ましいものがあつても、よくこの社會の現實に抵抗力と彈力性のある意氣の揚る丈を有するものであつて、吾々もその幾分かの力を致す心に燃やされるのである。換言すれば勞働階級の失業問題は本質的であるだけそれだけ對策に於て輿論に於て通ずる所がある。然るに智識階級の失業者はどうか。彼等は氣力なく、思ひ切り惡く、依頼心強く、勞働精神の退化をさへ見うける一方、皮肉な一種の優越感を有ち、自己評價が高く、それに都市享樂の憧憬が强いと來てゐる。

江戸時代初期の重要な社會政策の一は刀を帶びた浮浪人の仕末だつたといふが、現代の惱みは智識を有つたこれら失業者の救濟でなければならぬ。關ヶ原役に續く大坂落城の結果は約十萬の浪人を生み、その續出は社會不安の醱酵素であり煽動者であるとして當時爲政者の頭を惱ましたものであるが、今智識階級浪人の年と共に激增して行くことは我々の心痛の種である。而して德川中世以後の武士生活が窮乏に瀕して精神的にも物質的にもその根據に大動搖を感じそこに武士階級の存立が破綻に瀕したのであるが、現代の智識階級の行詰は正にその轍を踏まんとしてゐるものではあるまいか。かく我教育制度の破綻から智識を有する浪人の問題はいよいよ深刻となり、目下勞働階級のそれよりも更に重大視せられてゐるのである。加之、江戸時代の浪人の巣窟が江戸であつたと同樣、現代の智識階級の都市集中現象は更にこの惱みを深めてゐる。

現在中等學校入學難の聲が喧しい。而も文部省の發表する所によれば卒業生と比較し半途退學者は約半數に及ぶとのことである。これは何に起因するものか。私は、その腦力と資力とを考慮せず徒らに親の誇りと子供の名譽心の犧牲となつたものである結果を暴露せるものであると解する。約百萬の小學生の僅か十萬人のみの問題に小學校は最大能力を傾注し、惠まれざる九十萬人は肩をすぼめて我產業上の人的要素たるべき者を見限つてゐるやうなものである。

今日の智識階級はこの得意なる場面を通過した者であるとし、教育は一種の投資の如く考へられてゐる。その裏切られたる現實暴露の悲哀は學校卒業後の就職難に直面するのである。而も彼等の希望は決して確實な基礎あるものではない。醫科が賣口よければ醫科を希望し、軍國主義の時代には陸海軍大將を夢み、法科萬能なれば法科を希望し、建築科の賣行きよき時には建築科を希望するに止まるのである。何等個性の進展、天分才能と適性に基礎を有しない。一方にまた我國も東洋風の抽象的學問に向ふ風をなしてゐる。そこに自力の奮鬪努力職業意識の辿る全人格的燃燒がない。先輩の引立て、緣故就職、學閥、學裏式にして意氣を麻痺せしめて了つたのである。この諸種弊害の沖積こそ最も陰慘な失業問題となつて來たのである。

失業の原因の分析は先づ措いて、職業市場の現狀を見る必要がある。產業界の不況は更に智的勞働の需要供給を硬塞したのであるが、要するにその供給の過剩であることは云ふまでもない。

東京地方職業紹介事務局管内の需給關係を見れば、先づ大正十五年中に止めて、求職者總數三十七萬六千五百五十七人である。その教育別調査によれば、高等小學卒業程度以下二十七萬七千二百四十人、即ち七十三%であり、高等小學校以上中等高等專門學校程度以上の者九萬九千三百十七人、即ち二十七%である。而してその職業別五十九種中左の五種の需給關係を俸給生活者として見れば大表の如くである。

俸給生活者取扱數（大正十五年昭和元年）

職業別	求人數	求職者數	就職者數	就職率
官公吏	五五三	八五四	三〇五	三六%
教員	一一一	六四一	三五	五%
事務員	五、七八一	三七、一三〇	二、九七二	八%
醫師	五〇	四八	五	一〇%
藥局生	七二七	一、二七四	二三八	一九%
計	七、二二一	三九、九四七	三、五五五	八%

以上の數字に見れば、事務員は俸給生活者の代表的なものと見ることが出來る。而してその需要に對する供給が約七倍を示してゐるといふことは、今日の智識階級失業者——その適確な數字は何を以てするも計量し得ざるも——の狀態の斷面を示すに充分である。即ち少くもこれ等が漫然東京を中心として彷徨する智識階級失業者の現狀と見るべきである。

然るにこれら智識階級浪人は勞働者の間に見るが如き生活の不安、失業不安の脅威に對する防衞の陣營を張る團結心もなく、はつきりした階級意識も持ち合はさないのである。何等の覺悟もなく步調も不揃な臆病その者のやうな煮切らない手合ひである。『武士は食はねど高揚枝』の痩我慢も出來ず、さりとて身を鴻毛の輕きに置いて主君のために忠死するの意氣もない。徳川末期の武士の歎聲は『武士ほどつらいものはない』であつたが、現在の智識階級も亦そのヂレンマに陷つて動きのとれぬ現狀にあるのである。この不安が腦裡に低迷して些しも解放されない重い氣分にあるのである。十年螢雪の苦を積んで贏ち得たものは結局この不安とこの暗く重い氣分とだけであつた。

茲に於て吾吾は更に内省すべき時機に逢着したのである。今日の學問は個人的に社會的に果して何の幸福を齎らしたかの問題である。勤勞と職業意識とに醒めて此現狀からの方向轉換を考へる時、特に新しき酒は新しき革嚢に盛られなければならぬの感を深うする者である。

一般社會は決して學問と理論だけで立つ人を要求してはゐない。然るに今日の學校は職業指導も職業教育も一向に考慮してゐないのである。この意味からいふならば、今日の職業問題行詰りの責任の一班は當然現今の教育制度に嫁さなければならぬ。

要するに今日の失業問題は全社會的責任であり、今日の社會組織下では止むを得ない現象としても、當面の問題としては、我產業界の發展、產業立國の人的要素としての血路を開くべきことであり、將來の問題としては何よりも先づ現今の教育制度を改善し、死學をして活學たらしめることである。勤勞と技能に生きる尊さを知る智識階級人は決して過多なる筈はない。

トチ面棒の田中總裁

緒方竹虎

田中政友會總裁みづから、世間の考へてるやうに、進退兩難を感じてゐるかどうかは措くとし、田中男が昌違ひに踏込んで、多少トチ面棒の形といふだけは、爭はれまい。田中男は、よく口癖に『ワシは瞞されることはあつても人は疑はぬ』といふが、これは、考へやうでは、時々トチ面棒をふることを告白してるやうにも聞える。然しそれは當然である。さうでなかつたら寧ろ不思議だ。元來僕は、軍人は軍人、政治家は政治家、いづれもそれ〴〵專門で、田中男に限らぬが、軍人で政治家を兼ねることが、そも〳〵無理のはじめであると思ふ。戰爭は勝つことが目的である。故に時に手段を擇ばない。政治は目的を達する前にまづ多數を納得させねばならぬ。それがためには絕對に手段の合理的なることを必要とする。のみならず、人間軍人を志して大將になれば、まづ功成り名遂げたとして、靜かに餘生を養ひ、國家萬一の際の御奉公を期するといふのが常道であらう。もちろん、體力元氣餘あるものが殘年をさらに公事にさゝげるは、差支ないとして、少尉から大將まで、一つの軍人といふ專門に育てられたものが、政黨の總裁として指揮するところに、世間から見れば無理があり、本人としてもトチ面棒をふらざるを得ない理由があるのである。

トチ面棒の一つの例は、三黨首妥協、不信任案の撤回である。

田中男は先頃の政友會議員總會に、總裁公選論を唱へて、政黨の性質から總裁だけは將來是非共公選制にすべきであると論じた。これは一面からみれば、田中男に多少の自信が出來た證據、味な芝居とも見えるが、いづれにしても、總裁公選論は、議論としては決してケチを付くべきものでない。政黨總裁と黨員との關係は、主人と家來のそれでない。したがつて政黨のことはすべて公論に決するのが當然である。その中には總裁の公選もはいる。現に外國の政黨は、大體その制度によつてゐる。

然るにこの總裁公選論を唱へ出した田中男が、若槻首相に招かれて、例の三黨首會合をやつた時はどうか、田中男はある人に向つて、『ワシの信條としては、あの場合、昭和新政のはじめに當り豫算の不成立だけは避けたいといはるれば、假りに瞞されることが分つてゐても、承知せぬ譯にゆかぬ』と述懷したとのことである。この『ワシの信條』と特段に擧げたのは、とりも直さず、外の政治家と同じでない軍人仕込の信條といふことであらう。問題はそこにある。田中男の、軍人として養はれた信條として、かうすることには非難がない。たゞ今日では田中男は政黨の總裁である。田中男自身、公選制が本來當然だといふ、その政黨總裁である。してみれば、田中男の軍人としての信條は、若槻首相の懇請を、一も二もなく聞かん、とするに傾いても、不信任案の仕末については、一黨の總裁として、ともかくも黨論に聞いて然る後に決めなければならぬのである。それを一切獨りで呑み込んで、『ワシの信條としては、あの場合、假りに瞞されることと

が分つてゐても、承知せぬ譯にはゆかぬ」と、不信任案の撤回に早速同意して來たところに、總裁公選論が本音か、「ワシの信條」が本來面目か、その多數政治論の根據にはなはだ疑を挿ましむるものが出來てくるのである。

要するに、五十年間軍人として養つた頭は容易に變るものでない。變つては今度は軍人が困る。そしてそこに田中男と政友會の將來とにかゝる重大な問題があるのである。

古くはエドマンド・バークから、このごろのマクイバーに至るまで、政黨の第一條件は『一定の主義』のあることだと說いてゐる。日本の政黨も、もうそろ〳〵『一定の主義』があつてよからう。今の政黨のやり方は賛成せぬが、如何に無産政黨が新興の勢ひに乘じて出來てきても、既成政黨は既成政黨としての立場が當然になければならぬ。新興勢力の前に既成政黨が一時に消えて無くなるなど考へてゐたら間違ひである。たゞそれには、既成政黨自ら、その依つて立つ立場と主義主張とを今少し明かにしなければならぬ。冬は燒芋屋、夏は氷屋といふ態度では、その存在の理由はなくなる。たとへば、憲政會は普選を主張しながら、その手で平氣で治安維持法を起草してゐる。政友本黨は、政友會の急進化をあきたらずとして出た手前、已むことを得ぬ保守黨の立場を守るかと思へば、政權の前には忽ち憲政會とでも手を握る。もちろん政友會も御多分に漏れぬ。これでは主義も立場もない。ことに政友會の弱點は、その兩頭の蛇たるところである。いはゆる總務級には、よくこれで普選に賛成したと思はれるほどの守舊論者がある。と同時に、その少壯黨員中には、よくこの幹部の下に辛抱してゐると思ふ急進論者がある。この兩頭の蛇は、政友會として早晩ドッチにか片付けねばならぬ。

政友會が今後如何なる方針をとるかは、それこそ政友會みづから決すべきことで、第三者の容喙すべき限りでない。自由黨の精神がどうだつたといつても、今の多數黨員がその傳統を好まぬといへば、それも致方ないといふことになる。たゞ政友會は、先年來すでに一つの方鍼にむかつて一歩を踏出してゐる。地租委讓や知事公選や地方分權論やが、それだ。これには黨內の守舊論者も異存はなかつたはずだ。この政友會のとる新しい方鍼、それによつて裏付けられるリベラルな旗色、それと田中男の五十年軍人で鍛はれた頭とが、果して反撥なしに行けるかどうか。こゝで問題はふたゝび田中男に復る。

かういふと、田中男の周圍の人は、地租委讓や地方分權論は、田中男みづから政友會の東北大會で演說してゐるといふであらう。然し一度の說が必ずしもアテにならぬのは、總裁公選論を唱へる田中男が、僅か二月前に、黨議も開かず獨斷で不信任案撤回をやつたのにみても分る。田中男が政友會に飛込んだ當時、田中男の抱負は、支那問題と在鄉軍人の政治的指導を爲すにあるとのことだつた。支那問題の料理もよい。在鄉軍人の政治的指導といふことも、やり樣によつては結構なことである。この田中男の抱負と政友會の一步踏み出したリベラリズムと、どちらが良いかといふことも、こゝでは觸れない。たゞ在鄉軍人を統一的に指導しやうといふ考へと、地租委讓や地方分權論の基調をなす考へとは、何處まで延長してみても、相交錯しさうにない。さうすると、溯つて田中男が支那問題と在鄉軍人指導を提げて政

友會に飛込んできた時に、總理大臣の影坊師が眼の前にブラつかなかつたまでも、政治と政黨とをきはめて簡單に、たゞ自分の持論を行ふに便利な位に考へてきたことが、やはり軍人流だつた。『サシの信條』でサッサと不信任案を撤回してきたのと同一轍である。それだけ、田中男の抱負の善し惡しよりは、ホントの政黨總裁になり切るか何うかゞ先づ問題となる。

田中總裁が何時政權を操るか、結局、『長閥』と『政友會積弊』のホコリを浴びるだけの、損な役廻りに終りはせぬか。それらの推測は政界策士に任せておいた方がよい。理論からいへば、『長閥』であれ、『政友會積弊』の相續人であれ、田中男がその唱ふる公選制によつて公選され、しかしてその黨派が總選擧で多數を得れば、政權を操らざるを得まい。それよりも僕は、軍人の專門で五十年間鍛へ上げた田中男の頭が、何處まで多數政治を擁して、政治家乃至政黨總裁らしくなり得るかを、一つの人間試驗として見てみたいと思ふ。

銀行の合同傾向に就いて

法學博士　渡邊鐵藏

銀行の任務は、一方に多數の人から大小に拘はらず、絶えず資金を集中して、之れを生産事業、其他金融を必要とする方面に融通するにあることは云ふまでもない。金融の必要は單に生産取引の方面に於てのみならず、政府公共團體の財政に於いて、個人の消費生活に於いて絶えず起る問題であるが、之等の金融機關としては單に銀行のみならず信託會社、保險業、信用組合、其他の組織が存在するが、最も巨額の金融を必要とするものは勿論生産取引の方面である。或國の經濟が農業時代より商工業時代に移るに從つて、殊に工業及び交通機關、動力設備の發達するに伴れて、益々巨額の資金を必要とするやうになる。假りに之れを數字的に現して見ると、農業、工業、商業、鑛業、運輸業等の總ゆる産業に利用される資金は、今から約三十年前の明治三十年には拂込資金と積立金の合計が約五億に過ぎなかつたが、歐洲大戰の當初大正三年には二十六億圓になり、大正十三年には百三十六億といふ驚くべき膨張を來して居る。之丈の資金を産業に投下し得るまでには、我國民が三十年の間粒々辛苦した結果であるが、斯かる巨額の固定資本の運轉するについては又之れに相應する巨額の運轉資金を必要とする。各種の金融機關に集中された資金の中所謂普通銀行即ち商業銀行に集中して居る資金は、其一部分は國債に投資され、政府財政の援助をなし、猶僅少の一部は株券として事業に投資されて居るが、大部分は生産取引に對する流動資金を提供するものである。而て之等一切の銀行の提供する資金は、所謂自己資本と稱せられる拂込資本金、及び積立金と、他人資本と稱せられる預金より成立するものであるが、此兩種の資本は上述の我國の産業界の發達に伴つて等しく驚くべき勢を以て激増して居る。即ち明治三十年には、我國普通銀行の自己資本金は僅かに二億四千三百萬圓に過ぎなかつたものが、大正十三年には二十八億圓に達して居る。而して他方に他人資本である預金は明治四

千年に十七億八千萬圓であつたものが、大正十三年には百七億八千萬圓になり、最近には百十四億に達して居る。殊に商業取引の分量を想像せしむるに足る手形交換高を觀察する時は、更に驚くべき數字が我々の前に横はつて居る。明治三十年には僅かに七億四千萬圓であつたものが、大正三年には百二億圓となり、大正十五年度の手形交換高は八百三十五億といふ驚くべき數字を示して居る。かやうな次第で產業の發達と金融機關の膨張は、外國に類例を見ない驚異的記錄を示して居るが、翻つて我國銀行の組織を見る時は、外國の金融機關に比較して大に異れる狀況を發見する。

產業界に於ける大規模生產、資本集中の勢は二十世紀の最も著るしい現象の一であつて、英吉利、亞米利加に於けるトラストの發達、獨逸に於けるカーテルの發達は何人もよく知る所であるが、單に製造工業、電氣事業交通機關等に於いてのみならず、銀行業の方面に於いても、斯くの如き大合同、或は少くとも大規模組織の傾向が現れて居る。然るに我國に於いては、事業界に於いても近年漸次合同傾向が發達して居り、金融界方面に於いても其傾向があるが、之等は孰れも歐米に於ける大資本力の利用、經營上の利益の爲めに行はれるものでなく、寧ろ整理の必要上より生ずる、組織變更の理由に基くものが多いやうに思はれる。其原因は暫く措き、斯かる合同傾向があるに拘はらず、我國の事業界及び金融界の規模は一般的には未だ甚だ小規模のものである。事業界の方面はさて措き、銀行業に就いて之れを見るのに、普通銀行の數は、英國の如きは、本年初めの現在數四十二行に過ぎず、獨逸は百一行を有するに過ぎないが、我國に於いては大正三年に於いては全國銀行の本店の數は二千百五十に上り、其後合同運動が起つて漸次減少したが、大正十三年度に於いて尚千七百九十八行を算して居る。之れを以て見ても如何に我國には多數の小銀行が分立して居るかゞ窺ひ知られる。

日本全國銀行資金表

	本店數	拂込資本金	積立金	合計	預金
大正三年	二、一一五	六四五、二九七	二[illegible]六、九二六	八八三、二二三	二、三二二、七四七
大正十三年	一、七九八	一、九四五、九四八	八六一、二〇二	二、八〇七、一五〇	一〇、七八五、八七四

英國の銀行資金表

	行數	拂込資本金（千磅）	積立金（千磅）	合計（千磅）	預金
昭和元年末	四二	九八、三三〇	八五、八〇〇	一八四、一三〇	二、三三四、八九四

獨逸の普通銀行資金表

	行數	拂込資本金	積立金	合計	預金
大正十五年十月末	一〇一	七六七、一	二七七、三	一、〇四四、四	五、七三二、一

右の表に基いて計算をして見れば、我國の銀行は大正三年には一行平均の預金額は僅かに百萬圓に過ぎず、其後合同が進行したが、それでも大正十三年に一行平均預金額は六百萬圓に過ぎない。然るに英國の如きは右の四十二行の一行平均預金は五千五百六十萬磅に上り、我國の一行平均預金高に對して約百倍に近からんとして居る。獨逸の普通銀行に於ても其一行の平均預金高は五千七百萬馬克であつて、我國の一行平均高に對して約六倍半に相當して居る（圓に換算しての計算）殊に英國の如きは左記の五大銀行が預金總額の約七割を占めて居る

割合であつて、之等の五大銀行は圓に換算して一行平均約三十億圓の預金を持つて居る割合である。英國の金融界は左記の五大銀行が主腦となつて支配して居るものと云ひ得る。

英國五大銀行資本金及預金(昭和元年末、單位千磅)

	拂込資本金 千磅	積立金 千磅	合計 千磅	預金 千磅
ミッドランド銀行	一二、六六五	一二、六六五	二五、三三一	三六六、四二三
ロイヅ銀行	一五、八〇一	一〇、〇〇〇	二五、八〇一	二四六、一三三
バークレイ銀行	一五、八五八	一〇、二五〇	二六、一〇八	三〇九、三七一
ウエストミンスター銀行	九、三二〇	九、三二〇	一八、六四〇	二八五、四〇六
ナショナルプロヴィンシャル銀行	九、四七九	九、四七九	一八、九五八	二五九、二四九

我國最近の金融界の情勢に於いて、預金額に依つて所謂十大銀行と稱せられるもの〻資金を見ると凡そ左表の如くである。

我國十大銀行資金表(昭和元年下半季貸借對照表ニヨル)

銀行名	拂込資本金 千円	積立金 千円	合計 千円	預金 千円
安田銀行	九二、七五〇	三六、六九四	一二九、四四四	六一二、五〇四
三井銀行	六〇、〇〇〇	五五、四一八	一一五、四一八	四五五、八四四
住友銀行	五〇、〇〇〇	二四、九五六	七四、九五六	四三五、一四九
第一銀行	五〇、〇〇〇	四九、〇〇〇	九九、〇〇〇	三九一、八二二
十五銀行	四九、七五〇	三二、四五五	八二、二〇五	三六八、四五五
三菱銀行	三〇、〇〇〇	二七、〇〇〇	五七、〇〇〇	三三八、八三三
三十四銀行	三九、七〇〇	一九、九七〇	五九、六七〇	二九〇、三七一
山口銀行	二七、五〇〇	一一、一〇〇	三八、六〇〇	二四六、二二三
川崎銀行	一〇、〇〇〇	九、六六三	一九、六六三	二三八、四二〇
第百銀行	一七、五〇〇	一一、二九九	二八、七九九	一五五、〇五四

之等の十大銀行は孰れも一億圓以上の預金を有して居るものであるが、右の英國の五大銀行と比較すれば、其間に大なる規模の差があることが容易に窺はれる。

我國に於いては大正八年頃より合同に依つて消滅する銀行の數が漸次に增加して、大正十二年より更に合同の勢が强くなつて、此年には合併に依つて消滅した普通銀行の數は八十八に及んで居る。就中安田銀行の如きは盛んに地方銀行の合同を行ひ、創立以來大正十二年迄に既に約十五の地方銀行を合同して居たが、大正十二年には一擧にして新に十一の銀行を合併して居る。其他滿洲、臺灣等に於いても銀行の合同が頻りに行はれた。他方に大正十年貯蓄銀行條例が改正されるや、突然之等が合併せられ、或は業務を廢業して、大正十年に六百三十六を算へた貯蓄銀行が翌十一年には百五十二に激減して居る。

我國の政府も多數の小銀行が分立することは其基礎が薄弱なる上に、近代生產界の特徵である著るしい景氣の浮沈に對抗することが困難であり、而も小行併立することは重役の費用、其他業務の手續きに於いて經費の膨張を來すものであるから、極力之等を併合せしむることを得策とし、殊に此數年來は、大藏當局は地方長官と連絡して極力銀行合同の方針を實現せんとして居る。我國に於いては作來多數の小銀行の他、或は金融會社、無盡會社、或は信託、興信、殖產、證券等の會社名を冠して、甚だ曖昧なる金融事務を扱つて居るものが多くある。無知なる小資金の所有者は彼等の巧言に乘せられて、貴重の膏血の結晶を空しく卷上げられたものも少くない。斯くの如き其業務の閉

確でない、信用の薄弱なる自稱金融機關が多數に存在じたことは、預金者の無智を語ると共に明かに我國金融制度の缺陷を示すものである。大藏省が此種の金融會社に對して嚴重なる取締りを開始したことは最も其當を得たものである。之れと共に多數の地方小銀行を合同せしむるために積極的に種々の方策を樹て、他方に大正十二年以來銀行の新設を認可せざる方針を執り、又最近本年に至つて新に銀行法を制定し、資本金を百萬圓若くは二百萬圓以上として小銀行の存在を許さざる方針を取つたことは寔に當然の措置である。

事業及び金融機關の合同運動は世界的大勢であり、殊に我國に於いては銀行業の合同を促進する必要が存在するが、其經過の道程に於いて細心の注意を要すべき點がある。元來銀行は一方に商工業に活動する者に對して資金を供給する任務をなすものである故、自ら各地方の產業、各個の取引者等地方的に又個人的に特殊の關係が生ずるものである。其間に又年來の取引上の因襲も自ら發生する、大規模の製造業者、貿易業者は自ら一流の銀行と取引し、又一流の銀行は此種の取引先を重んじて、小規模の商工業者を多く顧慮しない。それに反して中流以下の商工業者は自ら二三流の銀行と取引關係を生し、それぞれ特殊の相依賴する關係を生ずる。又事業の種類、商品の種類に應じて特に之れを主とする取扱ひ銀行が發達して之等と其製造業者と問屋との關係は又特別な複雜な相互關係を生ずる。此故に單純な理想論よりする合同方針に依つて地方の銀行を合併し、二三流銀行を一流銀行の勢力範圍に合併し、又特種事業に金融をして居たものを大銀行にしたる上に於いて何等從來の特別の取引關係を顧慮せざるに於いては、或は資金が徒らに中央に集中し又大企業者に有利となつて、地方の商工業者、二三流の小商工業者は突然其依賴する金融機關の助力を失ひ、或は營業方針の變革のために苦しき困惑を感ずることがある。此故に銀行の合同傾向は止むを得ずとしても、地方の資金を涸渇せしめ、小商工業者の金融に困難を感ぜしめざることに就ては特別の注意を必要とする。

最近の銀行休業に基く金融界の恐慌は寔に遺憾のことであつて、之等休業銀行の預金總額が二億圓以上に及び其預金者の苦痛は察するだに同情の言葉がない程である。如何に理論上銀行の合同運動が必要でありとは云へ、輕々しく二三流銀行が如何にも危險であるかの如く世人をして感ぜしめるやうな言說が流布されることは最も戒心すべきことであつて、政府、日銀に於いても勿論之等の點には細心の注意を拂つて居ることであらうが、此種の二三流銀行が中小商工業者のために目前に於いて缺くべからざる有要なる機關である以上は、我國の商工業の實情に鑑て一方に健全なる存立を助ける必要が存する。不良の銀行を整理し、過小の銀行を合同する運動を着々として行ふはよしとしても、金融界の中堅をなし、而も中小事業家のために多大の貢獻をなして居る二三流銀行が其規模の大ならざるために自ら信用を失ふ如き情勢に立ち至らしむる如きは努めて之れを避けねばならぬ。預金者が其輕卒な行動を慎むべきは勿論のことである。從つて現在休業せる銀行は多く二三流銀行の中堅をなすものであるから、假令從來の營業方針に於いて誤つた所があるにしても、其預金者に及ぼす悲慘なる結果の重大なことを考へて、且つ中小事業家の受くる打擊を考へれば、極力之れが復活に盡力するは勿論、其整理の方針として之れを他の大銀行と合同せしむる如き場合には、是非とも併合せる一流銀行は之等の二三流銀行の過去の取引者の利害を考へて、所謂一流銀行式の營業方針に依つて、突如として小商工業者に資金融通上の困惑を感ぜしむることのないやうにすることが必要であらう。

社會時評

志賀重昂先生

吉野作造

四月六日夜志賀重昂先生病を以て逝く。痛惜の至に堪へない。先生の名と業績とは昨今の青年には餘り親しみがないかも知れぬ。けれども先生の學と識と併せてまたその不息不倦の努力とは、慥に一世の師表たるに足るものがあつた。所謂流行兒たらざるの故を以て、彼れの遠逝に依て蒙る現代日本の一大損失を忘れてはならない。

私が先生の名を始めて知つたのは、中學二年生の頃或る教師から先生の著にかゝる英文の西洋史教科書を貰つたときからである。それから日本風景論とか地理學小品とかを讀んで益々敬慕の念を深うしたのであつた。先生の著書論作に依て感化を受けた者は、私の友人中にも決して尠くはない。

いま顧つてあの當時私共は何の點で先生の著作に感動したかを回想して見るに、それには二つの方面があつた様に思ふ。

第一は學問の講明に清新の氣分を味はされたことである。學校で學ぶものは、數學にしろ理化學にしろ、皆教科書の暗誦と机上の空論とに過ぎなかつた。先生の著作に依てはじめて私共は、學問と人生との密接なる交渉を教はつたのである。今から考へれば何でもない事の様だが、當時に在ては斯んた處に私共は未だ曾て經驗したことのない新しみを覺へたものである。單に新しいばかりではない、活き〳〵した清新潑溂の氣分を以て學問に臨み、又斯うした味ひを學問に見出し得ると信ずる綫になつたのは、何と謂つても先生の賜である。この點に於て先生の地理學に關する諸著は、それ自身の眞價以外に、猶後世から記憶せざるべき或ものを有つと考へる。

第二に先生の地理學講明の態度は特に私共の青年時代の國民的理想に多大の示唆を與ふるものであつた。思ふに日清戰爭前後は、國内の整頓漸く其緒につき之からは大に海外に對つて平和的發展を試みようと云ふ時代であつた。退嬰局蹐是れ事とすべき時ではない。海外發展といふことは何のわけなしに私共青年の心血を沸かしたものである。之も今日の青年にはわかるまいが、日露戰爭後大正の御代に入るまでそれが續いたと觀ていい。而して斯うした時代に、空漠疎雜な煽動論でなく眞に内容のある海外知識を供給して與れた人々の隨一は、實にわが志賀先生であつたのだ。この點に於ても彼れは、明治後半季の青年に取て、たしかに一方の師表としてその尊敬する所の中心であつた。

私は個人的には餘り深く先生の知遇を辱うしては居ない。それでも一二度親しく敎を乞ふの機會に接したことはある。腹心をひらいて城壁を設けざる所、談論風發而もその話には常に科學的正確と詩的興趣とを兼ね具ふる所、一度會つた者にも忘れ得ぬ深き印象をのこさずには置かない。その人格の高潔と學識の廣く深きとは申すまでもないが、更にモ一つ見逃してならぬのは、先生の經世家としての熱情である。この點でも私共は最近の先生から大に學ぶべきものがあつたと考へる。地理學講明の根本的態度に昔と今と變る所なかつたかを詳にせざるも、斯の學に立脚して先生が絶えず現代世界の形勢を説き、又日本の世界に於ける眞の立場を明にせんと努められ、その爲に自ら親しく世界の隅々までを踏査し、南船北馬の勞を惜まずして世人の蒙を啓くに骨折られたことは、何と云ても國民の深厚なる感謝に値する。私の想像では、最近の十年間は先生に取て或は世界の變局に伴ふ新なる材料を集むる爲の準備期ではなかつたらうか。先生の新しい仕事はいよ〳〵之から始まるのではなかつたらうか。私はひそかに雌伏十年の後先生の再びあの大元氣を以て論壇の表面に出現し來るべきを期待してゐた。いま突如病を以て他界せられしの悲報に接し、私は心から先生の爲め又社會の爲め深く之を悼まざるを得ないのである。

志賀先生を弔ふに方り、玆に一つ是非とも書き殘しておきたいことがある。そは直接には杉浦重剛先生に關したことではあるが、一度よき折を得て志賀先生に聞いて見ようと思ひ乍ら遂に永久にその機會を失してしまつたのである。その次第は斯うだ。

大正のはじめ我國にデモクラシー論の盛になつた頃、杉浦先生がその事に付ての説明を求むべく私の宅を訪問されたと云ふ報道が、新聞のはしに見えたことがある。別に取消もしなかつ

たが、之には少しく誤傳があつたのだ。實際の順序は、一日杉浦先生が私の宅を訪はれ、私が留守であつたので名刺を置いて歸られた。夕方私は大學から戻つてその名刺を見、未だ一度も面識もないのに杉浦先生程の長者がわざ／＼私の門を叩かれたことにいたく恐縮し、直に書面を呈して留守を詫び改めて日を期して往訪の禮を取るべき旨を申送つた。斯くしてある日私は先生を小石川のお宅（その頃はまだ新宿の方へは移つて居られなかつた）にお訪ねしたのである。その時はじめて先生はデモクラシーその他のことにつき說明を聞きたいので訪ねたのだといふお話をされた。が併しこの事では左程深く私に訊ねられはしなかつた。最も多く話されたのは、さうした思想的方面のことも青年時代から考へぬでなかつたこと、今も古い友人の中には斯方面に深き理解を有するものあり時々會合しては意見を交換して居ると云ふ事等であつた。そこで私は、斯く申しては濟まないが、その時直ぐ先生もなか／＼負け惜しみの强い人だナと思つた。その外に於いても、どう云ふものか、先生は負けじ魂の躍動を屢々私に見せられたのであつた。

餘談はさておき、玆に私の述べておきたいのは、その時先生が私に示された一通の手紙のことである。卷紙に大きな字で書いてはあつたが、長さは三四丈もあつたらうか、餘程親しい友人から寄せられたものらしい。が、名前は嚴重に封じて見せて下さらなかつた。之は先生が時の東宮殿下の御教導職に就かれた時、さる人から寄せられた祝辭を兼ねる忠告と云ふ様のもので新時代に處すべき帝王道の眞髓を說いた大論文であつた。初めから終りまで殆んど全部の通讀を許されたのであつたが、古い事とて今細かには記憶して居ぬも、西洋の民主主義乃至社會主義にも十二分の理解を持てと繰り返し／＼勸めてゐた點は、今にはッきり目に殘つて居る。斯んな事で急に私にお遇ひ下さつたのかナとも考へたが、先生はさうとは仰らなかつた。只自分の志も固よりこゝに在るのだとて、書面を恭しく卷き收めながら、私に今後とも心おきなく足らざるは輔けて欲しいなどと丁寧に云はれたのであつた。

之に關連して云つて見たいことは外にもあるが、問題外だから今は略する。只右の書面の差出人に付ては、嚴秘に附すると云ふを以て直接先生に之を質すを得なかつたが、私は心中ひそかにあれか之れかと先生の周圍を想像して之を物色して見たのであつた。その時に思ひ浮んだのかその後のことか今記憶せぬが、いつとはなしに私はその手紙の差出主を志賀重昂先生ときめてしまつたのである。或は三宅雪嶺先生かとも考へて見たが、曾て見た志賀先生の手に書面の字體が似ても居るので、志

賀先生にしてしまつたのである。そしてこの事を一度折を見て直接先生にたゞして見ようと考へて居たわけである。若しこの事が果して私の想像する所の如くんば、志賀先生は更にも一つ違つた意味に於て、我々の問題になる。

附言 右の書面のことは、或は既に公刊されて居る杉浦先生側に出て居るのかも知れぬ。丁度帝大內に於ける私共の書庫が移轉最中なので今急に參照の便を缺くのは遺憾である。後に至り事實に著しき相違あるを發見せば、次號に於てその誤りを訂すであらう。この點豫め讀者の諒恕を乞うておく。

支那近事

國民軍の對外態度の急變

國民軍も先年北方で馮玉祥が活躍して居つた頃は、內外人の間に評判がよかつた。官兵たると土匪たるとを問はず亂暴狼藉を働かぬ兵隊といふものは古來いまだ曾て無かつたのに、珍らしく國民軍と稱するものだけが規律整然として秋毫も犯す所がなかつたからである。そこで天津北京邊の商民のうちには、今日現に內心ひそかに南方國民軍の速に北上せんことを心待ちに待つてゐるものが多いと云ふ。之と同じく南支那の北伐軍も亦到る處頗る評判がよかつたやうだ。馮玉祥の部下ほど規律が立つて居るかどうかは分らないが、勝に乘じて不義を働いたといふ噂は餘り聞かない。但し主權回復を要求する限り、外國人の或者に對しては多少親切でなかつた嫌はある。それでも例の漢口事件の發生するまでは、ひとしく內外人の双方から信頼を受けて居つた樣である。斯くして國民軍は南北を通じて相當に評判がよかつた。それだけ彼等の間には秩序もあり規律も立つてあつたことが想像されるのである。

所が漢口事件の勃發を見てから急に國民軍の排外的素質が鮮明になつて來た。それでも初め鋭鋒は專ら英國にのみ向けられるので、人或は却て、國民政府の聰明巧慧なるを稱するものがあつた。すべての國に同時に刃向ふよりも、一國宛狙ひ打ちする方が遙に有利だからである。多くの人は排英に次いで排日の到來すべきを心配したけれども　中にはその全然杞憂に終るべきを說いた人もないではない。幣原外相の比較的公明なる政策が

多數支那人の滿足する所なるべきを想像して、右の如き考に安じた人もあつたらしい。孰れにしても、支那の立場としては、この際無用の軋轢を日本との間に釀すのは得策でない（當時はまだ南下北軍もなかく優勢だと傳へられてゐた）。さればや、支那の側には日本に對して特に諒解を求むるの希望があるといふ說さへ傳はつたのであつた。

さうすると、今度は突然南京事件なるものが起る。之に依て從來の豫想乃至空賴みはすツかり打ち毀されてしまつた。固より日本と英米との見さかひもあらばこそ、單に外國人たるの故を以て誰も彼もが無類の暴虐を加へられる。而もこは單なる亂民の所爲とのみは見られない。之等の點の證明は新聞の報道に讓り、玆には說かない。只之について私共は新に一つの大きな問題に逢着したことを注意しておきたい。曰く、あゝした對外態度の變化は國民軍の本來免れ得ぬ運命なのか。さうでないとすれば、何があゝした暴虐を發生せしめた原因なのかと。

共產派の活躍

右の問題に關しては私は當初、之は國民軍の質の惡くなつた爲めではないかと考へて見た。そして質のわるくなるのは亦免れぬ運命だとも考へた。蓋し戰線の擴がると共に兵員の急激なる增加が必要とされ、之が亦自ら著しくその質を低下すべきを以てである。質がわるければ亂暴もする。而も數が多いから統制がつかないと云ふわけだ。併し翻て考ふるに、若し之が今度の事件の原因だとすれば、被害者は外國人よりも寧ろ抵抗力のもツと弱い自國人の方に多くなければならぬ筈だ。そこでまた斯うも考へて見た。上海南京を取つた以上當分は恐るべき敵も居ない、本來の排外計畫も之からは安心して始められるといふ所から起つたのではあるまいかと。併し折角取つた地步を十分安全にする爲には、前途になほ多くの爲すべき仕事がある。之等のことを思ふと、斯の解釋も亦一片の局外的揣摩憶測に過ぎざることが推知される。

さうすると、殘る所は共產黨活躍の結果と觀るの外はないことになる。果せる哉、昨今になつて國民黨と共產黨との激烈なる衝突が頻々として報ぜられて來る。而もその爭ひや日に增し猛烈を極めて居るらしい。既に蔣介石君はその蟠據する上海南京方面に獨立の國民政府を建てて、遂に武漢の共產黨政府に對抗して居ると云ふ。國民黨正系の勇躍と共に在留外人もほツと一ト息安心したと云ふ形に見えるが、斯くして光途中の兇暴も、今となつては全然共產黨の仕事なることが明白になつた。日本に於ても、共產派と無產運動正系との爭ひは、一二年この

方烈しくなつた。其間未だ十分の結末を見ぬが、支那では近き將來に於て之が何とか片づきさうに見える。而して支那に於けるこの爭の結末は、我が在留同胞の運命にも至大の關係をもつ丈け、私共は全然之を對岸の火災視するわけには行かぬ。さればにや、昨今我國の論壇も漸くこの問題を中心として頗る賑はつて來たが、實際の形勢は、各種の政治團體に向つて、實はもッと立ち入つた措置を執るべく促してゐるかにも見える。

共産派と國民黨との立場の相違

共産黨は何の爲に外國人に對して暴虐を振舞ふのか。之には次の諸理由を算へることが出來る。(一)暴虐の結果外國人が跡を絶てば、自分達の手柄として之を國民に誇ることが出來る。(二)その反對に外國の出兵でも見ることになると、之に依て亦益々排外思想を民間にそゝり、以て自派の勢力を一層增大するの機會が作れる。(三)外國の干渉が民心を極度に憤慨せしむるの效果をもつ所から、自然去就の曖昧なりし者をして亦決然自黨に來り投ぜしむるの結果を導き易い。(四)若し夫れ不幸にして外國と戰端をひらくことあらん乎、例へば蔣介石の如き反對派をして對戰の任に當らしめ以てその勢を弱らしむるの效がある。而も民間に於ける對外昂奮の結果、益々自黨を大ならしむることが出來る。(五)加之相手國の內部にも亦共産黨の異常なる活躍を促がすことが出來ぬでない。其外にもまだ澤山の效能が列擧され得るが、要するに、共産黨の立場に取て「外人迫害」はどの點から觀ても決して損なことはないのである。

之と國民黨の立場とを比較すると、事態の了解が猶一層明白になると思ふ。彼等の民族主義は、勿論共産黨とおなじく、主權の囘復を希望し不平等條約に基く種々の結果を極度に忌む。けれども彼等は之を合理的な方法を以て平穩確實に奪還せんことを期する。共産黨のやり方の如く、脅迫でも取れぬことはないが、手段の選擇に潔癖な所が彼等の特徵とする所なのである。さて道理に基いて根柢的に解決しようと云ふ場合に方り、一番邪魔になるものは何かと云ふに、常規を逸した愚民の妄動である。之をひいきの引き倒しといふ。半開國の外交に珍らしくない圖だ。而してこの愚民の妄動を挑發する最大の誘因は、云ふまでもなく外國威力の示現である。就中外國の出兵が一番その國の民衆の神經を刺激する。神經を突付くので妄動する。妄動に備へるとて兵を出す。因果交も〱はたらいて際限がない。そこで外交當局は、妄りに外國と事端を構へることを極度に嫌ふのである。斯くして國民黨は、共産黨の最も喜ぶ所を以て極度に惜む所とする。この點に於て兩者は根本的にその主張

を異にするものである。

共産派に對抗する國民黨正系の蹶起

斯く考へると最近の支那の事情は一ト通り分る。南京に於て我が同胞に加へられたあの暴虐は、それ自身眞に宥し難いものであるが、併し其故を以て直に支那そのものの責任を問ふのは穩でない樣な氣もする。南方國民政府が完全に共産黨の占むる所であつたなら、或は軍陣の間に見えるを辭せざるの覺悟で彼の責任を糺す必要が起るかも知れない。けれども共産黨は支那の極めて小なる一部局の勢力に過ぎず、昨今武漢を本據として長江一帶に廣大の勢容を張つて居るのは一時の變態に留まり、而も國民多數の輿望の中心たる國民黨は、今や蹶然としてその息の根をとゞむべく起つたのである。謂はば支那自身が今日現にこの問題を解決すべく奮然として起つたのだ。然らば我々は姑く彼等の誠意を信じてその事の結着を待つべきはないか。或は進んで彼國國民黨の立場に聲援を與へてもいゝ。いづれにしてもこの際我々日本人が、政府鞭撻の必要を高調したり、少くとも對支方針强硬論を唱へたりなどするのは、却て兩國將來の平和を傷くるものと謂はなければならぬ。

但し斯く云ふは、南京事件其他に於ける被害日本人の民事的請求權を斥ける意味ではない。

北京に於ける列國の對露十字軍

共産黨の排擊は、今や支那に於て、單なる支那人内部の問題ではなく、一種國際的の大問題たらんとするの形勢にある。四月はじめ安國軍總司令部が露國大使館附屬兵營を搜査せし事件に絡む露國對列國の對立反目は、正に是れ一種の十字聖戰ではないか。

義和團事件最終議定書の第七條は、北京に於ける所謂公使館區域を全然公使館警察權の下に屬せしめ、全體として之を治外法權區域と認めて居る。故に若し安國軍總司令部が、外交團の承認なくして恣まに警察權を行使したのだとすれば、これは正しく關係諸外國の權利侵害である。併し之を自家の權利の侵害として北京政府に糺彈の鋒先を向け得るのは、議定書の調印國に限る。而して今日の露西亞は不幸にして此列に加はつてゐない。加はつてゐないから、自ら支那政府に文句を云ふわけには行かぬが、併し彼は、支那が調印列國の條約上の權利を侵す可からざるの義務を負擔するの結果として、自らまた濫りに支那の警察的支配を受けざるを得るの地位に居る。故に露西亞は直接には權利として之を主張し得ざるも、本來支那の宥意からそ

の特殊地位を犯さるる危險は絶對になかつたのである。何となれば各國は故なくその管轄區域内に於ける支那官憲の干渉を承認する道理はないからである。

今度の安國軍の捜査は一體條約違反の行爲なりや如何。さうだとすれば、各列國はもッと大に騷がなければならぬ筈だ。所が案外騷がない所を見ると、何等かの形に於て既に暗默の承認を支那に與へたのではあるまいか。支那側では承認を得たと明言して居るさうだが、芳澤公使は、少くとも日本の關する限り、毫も與り知らぬと言つて居る。併し如何に張作霖の專恣横暴を以てするも、全然無斷であれ丈けの事を決行する道理はない。私は必ずや其間に一種默示的承認のあつたものと確信する。只之を公然と云ひ得ぬのは、事實上それは露西亞に對する敵對行爲と取らるるの恐れあるからである。斯く解するを誤りなしとすれば、今度の事件は一面に於て、北京に於ける各國使臣が張作霖と聯繫し、平和的形式に於て露國に對し一種の宣戰を布告したものと觀ることが出來る。

斯んなことは本來外交上眞に最も稀な異例に屬する。又實は餘り好ましいとでもない。大抵の事なら、各國は支那の彈壓に對して飽くまで露國を庇護した筈だ。併し今度に限り彼等がこの常例によらなかつたのは所謂共產黨の活躍が一般在留外人の安全と根本的に相容れぬと觀たからである。斯の見方の正しいかどうかは別問題として、兎に角列國の責任ある代表者は、露國を黑幕として活躍する共產派を全然相容れざる敵と觀るに一致した。彼等が相携へて張作霖を助けたのは、實は張その人並に彼れの政策を助けたのではない。彼を助くることの外、巧に露國と鬪ふの方法を見出し得なかつたのである。即ち彼等は安國軍に便宜を與ふることに依て、彼等自身の戰を鬪つて居るのである。故に曰ふ、今や支那に於ては露國共產主義に對する列國の十字軍が起つて居ると。

蔣介石の地位と日本の態度

終りに蔣介石君の地位と排日激情との關係に付て一言しておく。共產黨が單純な宣傳でよく蔣介石君を倒し得るや否やは問題だが、若し茲に最も有效に彼れを窮地に陷れ得る方法ありとせば、そは彼れを以て日本に通ぜりと宣傳することである。何となれば今日支那に於て最も人氣のわるいのは日本であり、從て排日の目的を以て民間の激情を煽るは易く、而してこの勢を一轉すれば蔣を倒すに格別の困難なかるべきを以てである。故に我が日本の立場としては、彼れをこの不幸なる陷穽に追ひ込まぬ樣、特に細心の注意を拂ふの必要があらうと考へる。

この點に於て今日の蔣介石君は、二重に困難な立場に居ると云へる。一つはいよ／＼上海に乘り込み、まともに日本の利權に直面したことである。斯うなつてはいやでも應でも日本と交渉なしでは居れぬ。先き頃戴天仇君を我國に派遣したのも、恐らくこの爲めであらう。所が日本に接近すると、事の內容如何に拘らず、それが直に惡宣傳の種に利用され易い。モ一つには武漢派と相爭ふ以上、彼れが常に敵方から日本と通ずるなきやを怪まるるは亦致し方がない。謂はば共產派はわれから、蔣君を日本と通ぜざるを得ざる地位に押し込めた樣なものだ。蔣君に其意圖ありや否やは問題でない。現に居る其地位が頗る之を懸念せしむるに十分なのである。そこで共產派としては、一方に彼れの日本と通ずるを妨ぐる爲にも排日宣傳の高唱に依て豫め之を牽制するの必要を見るのだが、少しでも怪しいとあれば彼等は直に日本通謀の嫌疑を以て民心の離反を促すに難くない。それだけ蔣君は精神的にその言動の上に大なる拘束を受けて居る形になる。

斯う云ふ形勢を考へるとき、日本側が少しでも支那民心の憤激をそゝる樣な態度に出るのは、意外に蔣君を困める結果を伴ふものなるを知らねばならぬ。蔣君の苦むと否とは我の關する所でないと云はばそれまでの話だが、支那の國民黨の素志に對して若干の同情を有し、而して蔣君を以て國民黨の正系を代表する一勢力と認むる限り、多少の隱忍抑遜を以て隣邦國民の誠實なる志望を遂げしむるは、我々の道德的義務ではなからうか。我國昨今の論壇が概してこの點に就て吾人とその觀る所を一にして居るのは、私共の大に滿足とする所である。

麻生君の批評に答ふ

——政治及び政黨に關する私の見解を明にす——

私の近著「無產政黨の辿るべき道」（之は本年一月號の本誌に載せたものを最近あらためて單行本として公刊したものである）を畏友麻生久君は四月九日の東京朝日紙上に批評して具れた。かねて入懇の間柄でありお互によく思想感情を知り拔いて居る仲とは云へ、あれまで明白適切に私の考を紹介して與れられたのは私の敬服して措かざる所であり、併せてまた彼此所見

を異にする點につき卒直にして憚る所なき評言を寄せられたに對しては、心から感謝するの外はない。

麻生君は私の『政治を以て特殊政治家の專門に限定し一般民衆を政黨外に居らしめんとする主張』と『無産階級運動に於ける經濟的行動と政治的行動とを絶對的に區別』せる立場とに、理論上からまた實際上から、異議を申し立てられて居る。所が之が私に取ては一番大事な主張なのである。この點で今日の無産階級運動の先達諸君と見解を異にすると云ふが實は私をしてあの一篇を草せしめた所以なのである。故にこの點に付て麻生君の異議に接するはもと私に取て怪むに足らず、恐らく私がその成立に多少の盡力をした社會民衆黨の諸君と雖も、私の說をその儘採用するには躊躇さるるだらうかとも思ふ。之を懸念したればこそ、私は黨の成立に斡旋して而も直に手をひいてしまつたのだ。而して無産階級の政治運動の初期に於て――殊に無産階級政治進出論に促されて勃興した我國無産政黨の創成期に於て――無産政黨に關する偏見の流行するは或る意味に於て當然の勢でもある。故に私の様なものが一人位局外に留つて憚る所なき批評を浴びせるのは決して無用のことではないと考へる。無産階級の政治運動も、第一期の仕事を終つて第二期に入ればいやでも應でも私の云ふ様に落ちついて來るに決まつて居る。それかと云ふてその自然に其處へ行くのをぼんやり待つて居るわけにも往かぬ。出來るなら一日も早く安定の地に送り屆けてやりたい。之には今のうちから最も正しき姿に於てその到達すべき目標を理解し、之を見つめて直往邁進せしむるの必要があらう。敢て私がこの任に當ると謂はば僭越の誹りは免れぬだらうが、立論の責任を明にする爲め、先づ始めに斯の私の態度を明にしておく。

× × × × ×

政治は政權を握ることを以て盡くるのではない。更に進んで社會民衆の利福の爲に（一）政策を按じ（二）之を實行し而して（三）相當の效果を實地に擧げしめねばならぬ。之を總稱して假りに「政治的價値の社會的實現」と云うておく。之を政治の第一義的の仕事とし、而して之を可能ならしむる爲の手段として「政權の獲得」が必要だといふことになる。そこで政治はその缺く可からざる內容として「政權の獲得」と「政策の社會的實現」との二つの方面をもつものと謂はなければならぬ。從て政黨も亦この二種の仕事を本來の使命とするは言を待たない。最近我國の政治を論ずるもの兎角この點に明了なる理解を缺くのは、私の常に遺憾とする所である。

ツイ一兩年前までは「政策の實現」だけを以て政治の全內容

と早呑込みするものが多かつた。斯うすればいゝあゝすればいゝと云ふだけで、如何にして之を實現すべきやに考へ及ばない。はては政治は社會政策の攻明に盡くると考へるものさへあつた。之れでは活きた人間を度外しての健康法と同じく、我々の現實の利福とは何の係はりもない。斯うした考方は今日でもあろ。處が他の一方に於て昨今は、政治とは政權の獲得だと考ふるものが簇出して來た。之は前の考とは正反對であるが、歴史的に觀れば、前者の過誤の反動として新に生れた第二の過誤ともいへる。幾ら熱心に社會政策を攻明してもそれ丈けでは毫も實地に現れて來ない。現在の爲政階級は頓と之を顧みて與れぬのである。そこで先決の急務は彼等の地位を取て代ることだと氣のつくのだが、勢の激する所、差し當りの目標に急ぐのあまり、さてその目的を達した曉一體何をするのかを一寸忘れるといふ形である。警鐘の亂打に身仕度をして勇ましく飛び出しはしたが、火事が何處にあるかを突き留めて居ないと云ふのである。斯かる類の連中の近頃所謂無產階級運動者間に如何に多きかを反省せば、蓋し思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

政治を「政權の獲得」のみと觀るとき、之はたしかに民衆自身の仕事に相違ない。所謂近代政治は政權爭奪の鍵を個人又は少數者の團體から奪つて之を一般民衆に渡した點に最も顯著なる特色をもつものである。そこで(一)政治には猶他にもう一つの方面あることを迂つかり忘れて、動もすれば人は、在勢力打破に一時的の熱情を示す民衆の要求に永久性を認めたり、又はこの一時の民衆的躍動を基礎として本當の政黨が成り立つと考へたりする。例之(二)我國の無產政黨の如く、從來の政權爭奪圈と何等の交渉のないものに在ては、差當り「政權の獲得」を以て唯一の仕事とし、從てまた、事實上民衆的背景を大に濃厚ならしむるの必要あると共に、實際上民衆自身の解決に堪へぬ様な問題に當面することも少い所から、自から一般民衆を組織して立派な政黨の成立し得るが如き外觀を呈することになる。是れ私が先きに無產政黨運動の初期に於ては、私の見解と違つた現象も外觀的には成り立ち得ると說いた所以である。

併し乍ら「政權の獲得」は政治の玄關に過ぎぬ。玄關を突破して奥の間には「政策の社會的實現」が控へて居る。抑も政治的價値の創造には深き専門的智識を要し又その手際よき實現には格別の練達を必要とする。而して斯はもと一般民衆のよくし得る所であらうか。盜まれた自働車を奪ひかへすには多數人の力を必要とする。取り返した自働車の運轉は誰にでも出來るのではない。「政權の獲得」は性質上大衆的な仕事であり又さうあらしめねばならぬのだけれども、「政策の實現」に至ては飽くまで背

族的であり又さうであらしめねばならぬのである。但し茲に貴族的といふは、貴族と稱する社會的階級を意味するのでないことは勿論だ。社會階級を上下に分ち、上の級に屬するものに人を支配するの權利を運命づけるのは、封建制の壞滅と共に亡くなつた。今はすべての階級に自ら養ひ十分その能力を發展するの機會は惠まれて居る（實際はこの原則の未だ十分に制度の上に認められてゐない憾みはあるが）。そして其中の最も優れた者に、社會の先達となつて一般大衆を指導するの地位が許される。その人のもと屬して居つた階級の如何は問ふ所でない。斯くして最も優れた人が社會の先達となる、私の所謂貴族主義たる所以である。只その貴族は機械的に固定した階級にあらず、廣く一般の大衆の間に之を物色するのである。この點に於て之を平民主義と親ても一向差支はない。要するに平民の間から惠まれた秀才を選び出し、之に價値の創成と實現との仕事を托するのが、近代政治の最も正しき且唯一の可能なる型式である。之を一般の民衆自身に出來ると思ふのは又斯く説くのは、政治の一面を知てその全面に通ぜざる謬論である。この事は實は私の之れまで繰り返し〳〵説いた所であつた。

× × × × ×

政治の本質的な仕事に對する一般民衆の當然の地位は、消極的でありまた受働的である。消極的であると云のは　進んで積極的の立案をするだけの素養を缺くを意味し、受働的であるといふのは、彼等自身が實に先進者の施設の効果の判ぜられるべき試驗臺であり、その現に蒙る影響を如實に訴へて政治家の參考たらしめ得るの關係を意味する。斯の關係に於て彼等の痛苦や希望やは適切に政治家の政策決定に反映し得る。斯の關係に立脚して彼等が最も正直にその去就を決するときに、始めて最も優れたものをして政權獲得の成功者たらしめ得るのである。政治に對する大衆の任務は之につき、之れ以上に出づることの必ず弊害の原因たるべきは　言を待たずして明白であらう。

一般大衆運動の一組織として政黨の可能を説明し得る爲には　彼等にも政治上積極的の意見あることを前提せねばならぬ（之を一般民衆の中にも積極的意見の抱懷者があると云ふことと混同してはいけない）。一般大衆が謬りなく政治的價値の創成と實現とに堪うるのは、併し乍ら、彼等が完全にその能力を各方面に發展し盡した時に於てのみ可能である。けれども斯の如きは遠き將來に期すべきことで、現在の問題としては多くの人の懷く美しき幻影に過ぎぬのではないか。而して人はとかく情熱のほとばしる所幻影を現實視し識らず〳〵その上に實際行動の方針を立てたがるものだ。所謂ヒポスタライジングの誤りを

を重ぬるものを現に我々は到る處に之を見る。無政府主義の如きもその一種に相違ないと思ふが、一般民衆が積極的に政黨組織の中堅たり得べしと考ふるのも　亦識らずしてこの濁流に彷徨してゐるものに外ならぬのである。

× × × × × ×

一般大衆の政治に對する當然の關係が前述の如しとすれば、無産階級政治運動の指導者の之に關して執るべき措置の何であるべきかは自ら明瞭な筈だ。麻生君は「無産階級の自覺」と「階級的政治鬪爭に對する熱意」とを無視するなと云ふ。成る程斯うした方面に於ける無産階級の自覺等々は私も之を認める。併し乍ら之は既成政黨乃至之を支持するブルジョア階級の不しだらに激せられて政權を新興階級に奪還すべきの必要に目醒めたのに外ならず、理論的にいへば僅に政治的活動の消極的半面の覺醒に過ぎぬのである。而して之は時勢當然の結果として固より怪むに足らぬのだが、之を推して直にその儘之が組織結成に依て一政黨を作るべしといふのは、論理の無謀な大飛躍である。若し斯く考へて論者に何の矛盾を感ぜぬと云ふなら、彼は恐らく政黨の本體を誤解して居るのに相違ない。一派の共産黨の如く、無産階級を利用して之を政權爭奪の目的に驅使せんとするのなら格別、苟くも政黨を以て積極消極兩面の奉仕を爲すべきものとする限り、所謂階級的自覺だけで十分奉仕の功を完了し切れぬ位のことは分る筈だ。舊式の弓矢では戰に勝てぬ。武器改善の必要に目ざめて國民的輿論の作興を見たからとて、その國民を直に新兵器使用部隊の中堅たらしめるわけには行かぬ。政治の本質並にその棄類分擔の筋を明にして之と所謂階級的自覺との關係を誤らないやうに願ひたい。

正しき政治の發達の前提として無産大衆の自覺の必要なるは言ふまでもない。併しその所謂自覺の何樣のものなるかは我々の篤と心得置くべき事柄である。弓矢では駄目だと氣づいたことは、必ずしも複雜な新式武器の取扱にも通じで居ると云ふを意味しない。そこでこの一般大衆の自覺を如何に實際政治の掛引に利用すべきかが識者の大切な問題になる。而して私はこの問題に付ては、公平なる第三者の立場として、一種の註文を無産政黨の指導者諸君に呈したのであつた。麻生君の異議は特殊政黨の指導者としての立場から向けられたものであるが、立論の根據たる前提に重大な誤謬ありとする私の反駁に耳傾けられたら、或は案外意見の一致を見るのかも分らない。

ひとり麻生君の一派ばかりではない。無産政黨の運動に關係せらるる諸君は、實は多く皆同じ立場に立つて既に運動を始められて居るのだ。而して之は或る意味に於ては已むを得ない現

级だともいへる。一つには今日は恰度階級意識に立脚する政治闘爭を先決の急務とする所謂無産政黨運動初期に該當し、從て誤つた考に甚く運動の推進にも今の所多く破綻を示して居らぬからである。斯う云ふ事情を念頭において私も、私の本來の立場と全然一致せざるを覺悟しつゝ、先きには社會民衆黨の創立に多少の微力を捧げたのであつた。この事は私の小著の中にも既に述べてある。故に麻生君などが、理窟は理窟として、實際の運びは當分の所お前の云ふ様なわけには行かないと云ふのなら、私にもよく分る。が、理論の上でも自分達のやつて居ることが正しいのだと云ひ張るのなら、私は何處までも之を爭はずは居れぬ。

× × × × ×

ついでを以て云ふ。前述ぶる所でも明なるが如く、政黨指導者の無産大衆に對する態度には二種あり得る。但し之は無産大衆は政治の積極的方面の分擔には堪へぬものだと前提しての話だ。輕々之を肯定するの謬見に立てば、麻生君の様な政黨觀にもなる。そこで肯定說の間違だといふことが分ればどうなるといふに、即ち二つの方法しかないのである。一つは宣傳誘惑乃至脅迫に依て盲目的に自分達を支持せしめることで、他は自分達の施設の効果を正直に告白せしめ、又は自分達の言說を冷靜に省察せしめ、その上に各自自由の判斷に基いて政策に去就を決せしむることである。後者は、迂遠ではあるが、社會の向上進歩とは完全に兩立する。前者は最も早く目前の急に應ずる便法であつて、マキアヴェリ以來說き古された、而して近くはナポレオンやビスマーク、就中最も花々しく最近レーニンやムツソリニに依て採用された方法である。而して我々に取つてこの二つの方法の孰れを擇ぶべきやは他言を要せずして明であらう。只麻生君の立場はこの二つのいつれでもない。いつれにも入らざる一種獨特の立場を執らるゝのは、蓋し立論の前提に誤りあるが故である。その點に反省し、その上同君が如何なる立場を採らるゝかを承つて、始めて同君と私とのへだゝりが内容のある問題となる。近き將來に於てこの點に關する精細なる說明を聞くを得ば幸甚。

附　記

私と全く違つた立場の政黨觀——共產主義の立場からの政黨觀——を知るに最も恰好なる論文を私は本年四月號の「社會思想」で見た。スターリンの著を學友住谷悦治君が譯したものである。同誌は私の尊敬する年若い學友達の研究發表機關であるが、最新の思潮を知るに見逃し難き論文が澤山ある。

小題雜感二則

教育ある青年の職業問題

四月六日の東京日日新聞に、法政大學佛文科を卒業した中野博君といふが、在學中からも辻待車夫をやつたり又は人の抱へ車夫となつて生計を立てて居たが、卒業後も引續き車屋營業に勵み、傍ら「佛語英語教授」の看板をかゝげつゝ、『本當の勞働生活から生ひ立つた眞の勞働者のよきリーダー』たらんことを期して居ると云ふ記事が見えて居た。勞働者のよきリーダーたらんとする抱負にも敬服するが、高等教育を受けながら生活の途を斯んな處に打ち立てた氏の態度は亦、就職難に惱む近頃の青年に對する一警告として、特に之を傳ふるの必要がある樣に思ふ。

之は六七年前の話であるが、私の友人に卒業試驗直後可なり重い病に罹り爲に就職の機會を失つた者があつた。學生時代から貧乏して居たから今頃は嘸困つて居るだらうなどとその當座蔭ながら心配して居たが、何とも訴へて來ない。所が或る日外出の途中、思ひ掛けなく妙な風をして通る彼れに出遇つた。粗末な和服の着流しに小さい風呂敷を抱いて居る。場末の商家の小僧と云つた風だ。何處に往くのかと訊いたら、毎日斯うして淺草の方に通つて居ると云ふ。段々話を聞けば、徒食しても居れぬので、思ひ切つて淫賣窟の中に飛び込み代書屋を開業したのださうな。仕事も面白く收入も相當にあるので、專門の勤め口が見つかつても、之に未練が殘りさうですなどと笑つてゐた。間もなく彼れはさる大工場の技師に雇はれたが、其後も口癖の樣に彼れは、どんなせち辛い世の中でも、探せば仕事は幾らでもころがつておると豪語して居つた。彼れの說に從へば、就職難をつぶやくは橫着者であることの證據だと云ふ。いさゝか酷評の嫌はあるが、徒らに勞少くして報酬の多きを望むに非る限り、食ふだけのことにさう困る筈はないといふ見解にも、相當の眞理はあると思ふ。況して己れをすてて世に奉仕する氣なら、最低限の生活を保障しつゝその望みを叶へて與れる樣な機會は幾らでもあると思ふ。

も一人私の知人に斯んなのがある。小學校を卒業してのち暫く田舍で百姓をして居つたが、兵役終了後東京に出て來て苦學

生生活を始めた。玄關番をしたり新聞配達をしたり車を挽いたり徹頭徹尾自力で押し通し曾て他人の慾を求めたことがない。軀も丈夫だが、一つには勞を厭はないのと、頼まれた仕事の遂行に誠實を打ちこむので、何處へ往つても忽ち信用を博し、仕事の方はいつも順調にすゝむものらしい。勞働しながら學校の勉強も眞面目にやり、而もこの四五年間に千數百圓の貯金まで拵へた。彼れはよく私の內へ來ては語る、仕事はあるか無いかの問題ではない、するかせぬかの問題である、眞面目に働く者に取て職業難なんぞといふことは絕對にあり得ないと。

以上の諸例を擧げたからとて私は、近頃世上に喧傳さるる就業難乃至失業問題に全然眼を掩はんとするのではない。之はこれとして對策研究の必要は大にある。社會的事實として斯種の問題の存在することと又その益々逼迫の勢に推し進みつゝあることとは、何と言ても爭ひ得ないからである。けれども職業を求むる側の態度にも、全然議すべき點はないのだらうか。求職者の態度の間違つて居るといふことが亦斯種の問題を一層險惡ならしめて居るのではないだらうか。

米が足りなければ麥もある。どうしても米の外は食はぬとなると、食糧問題の解決はそれ丈け一層困難になる。私の眼界は主として高等教育を受けた青年の上に限らるるが、彼等が餘りに職業選擇に付ての料簡の狹いのには、時々呆れさせられるのである。私は必ずしも彼等に車屋になれとは云はぬ。淫賣婦の爲に代書をやれとも云はぬ。併し今なほ彼等が彼等の先輩が辿つて來た樣な途のみを目がけて群がり集るのは、餘りに時勢の推移に通ぜざる仕打ではないかと考へるのである。

大體に於て明治時代は謂はば「仕事」が「人」を待つて居た時代だ。もつと適切にいへば、「地位」は作つたが之に據はるべき「人材」が拂底だといふ時代であつた。故に高等教育を受けた者は、その本當の能力の如何も吟味されず、卒業證書一枚でどんどん捌けて行つたものだ。而して斯うした風は惰勢的に今に續いて居り、學校出の青年はみな卒業證書を引當に相當の月給にありつかんとあせる。而も時代は變つた。不幸にして今日はもはや「地位」が「人」を待つて居ない。「人」が「仕事」を作つて行くべき時代となつたのだ。斯く時代の變つたのにも氣が付かず、依然として明治年間の變態的好景氣時代を今日に夢想して居るのは、教育ある青年にも似合はぬ盲目的誤算ではないか。この點に於て今日の青年は、維新直後の士族程の洞察もない。

士族はもと家格に依てその生計を立てたものである。維新となつて家格は家祿となり、更に公債證書と變つて來る。が、依

然として生活方式を變へることを知らざりし者は間もなく沒落の悲運を見るが、多くの者は從來の空疎な體面を顧慮することなく、平民と伍して生存競爭の實世界に突入した。士族の商法など云つて慣れぬ仕事に慘めな失敗をしたものも多いが、兎に角今日になつて見れば、彼等の多數は相當手際よく時勢に棹さして結局その生活を今日に榮えしめて居る。明治十年代の新聞雜誌などを見ると、士族の將來如何は今日で云ふ一種の社會問題として當時の識者の頭を大になやましたものだ。而してこの問題は、社會全體の心配した程のこともなく、兎に角相當の解決を見、少くも後世に大なる煩累の種をのこさずに濟んだのは、何と謂つても士族自身の覺悟よろしきを得たりしことにその效を歸せねばならぬ。之に較べると、今日の青年は學問をして居る割合に頗る實世界を見る頭の働きが鈍いやうに思はれる。

卒業證書は謂はば家格である。今日家格が物を言はぬ樣に、卒業證書だけではもう世の中は渡れない。一枚の證書で樂に飯を食はうと云ふ考を棄てたら、就職難の問題も、青年の主觀的立場から觀て、大に緩和されるのではあるまいか。更にその方が寧ろ正しき途なるを思ふとき、青年各自にこの點を反省するは決して無意義のことではない。

斯く考へつゝ私は、適切な教訓を與へ良い先蹤を示して吳れたことにつき、心から中野君に感謝せずには居れない。願くは勞働者の好リーダーたるのみならず、教育ある青年の模範としてその與へられたる地位に善處し、個人的にも社會的にも大に意義ある成功をいたされんことを。

松岡君に對する暴行

四月七日朝勞働總同盟の松岡駒吉君は、北品川岡部電機製作所の前で、元同所の職工であつて先き頃日本勞農黨に關係せしの故を以て總同盟系の同製作所職工組合から除名された某々數名の者に擲られて重傷を負うた。原因の何であれ、多大の期待を以て前途を囑望せられて居る新興無產階級の有力なる鬪士間に斯かる不祥事の頻發するのは、見ても聞いても快き話ではない。先きには關西で總同盟系の人達が棚橋小虎君を襲擊して重傷を負はしたと云ふ事件があつた。今度は日勞系の人達から松岡君が襲はれる。之では既成諸政黨の擲り合と何の異る所もない。斯くては彼に愛想をつかして此に望みを寄せた國民大衆も、この事のそも〳〵間違でなかつたかをモ一度緩つくり反省して見る必要を感じよう。兎に角事こゝに至つた以上、今更何等の辯解を許さない。幹部の人達はこの種現象の頻出につき、重き責任を感ずると共に深く戒愼する所なくてはなるまい。

更に私は思ふ。暴行その事の忌むべきは勿論のことだが、事態をこの急迫に運んだ事情に付ても、虚心に反省を重ぬべきものがないだらうかと。聞く所に依れば、松岡君に暴行を加へた人達は、新に日勞黨の支部を作るべく奔走して組合から除名され從でまた會社からも解雇されたのだと。總同盟に屬する同製作所職工組合は會社より團體交渉權を認められその結果會社との間に種々の權利義務を有すると同時に又組合員に非る者を雇傭すべからざる旨を會社に約束せしめてゐる。組合としては之は必要な事項に相違ない。故に組合の統制に服するを欲せざる者は自ら組合を脱し同時に工場を退くのが當然で、强て之を爲さざる者あらば、組合が之を除名し又會社に對つてその解雇を迫るも失當でない。この點に於て松岡君側の執つた處置は或る點まで無理はなかつたといへる。併し更に進んで松岡君達が會社に迫り被解雇職工等に手當其他の支給を受け得ざらしめる必要は何處に在つたか。組合を除名された者は、組合と會社との約束に基く權利として規定の手當を請求することは出來ないかも知れぬ。が、一般の慣習に依り又は工場法に依るの權利は依然として殘つて居る。さうでなくとも、松岡君等の地位としては、敵方に寢返つた連中だとて濫りに之を憎まず、無產者としての共通の立場に同情して出來る丈け物質的利益を保護してやるべきではなかつたか。社會民衆黨と日本勞農黨との理由のない最近の確執から觀ても、此位の雅量は特にあつて欲しかつたと思ふ。立ち入つて聞いて見たら外に深い事情のあつたのかも知れないが、局外者の觀察としては、この點に十二分の遺憾を感ぜずには居れないのである。

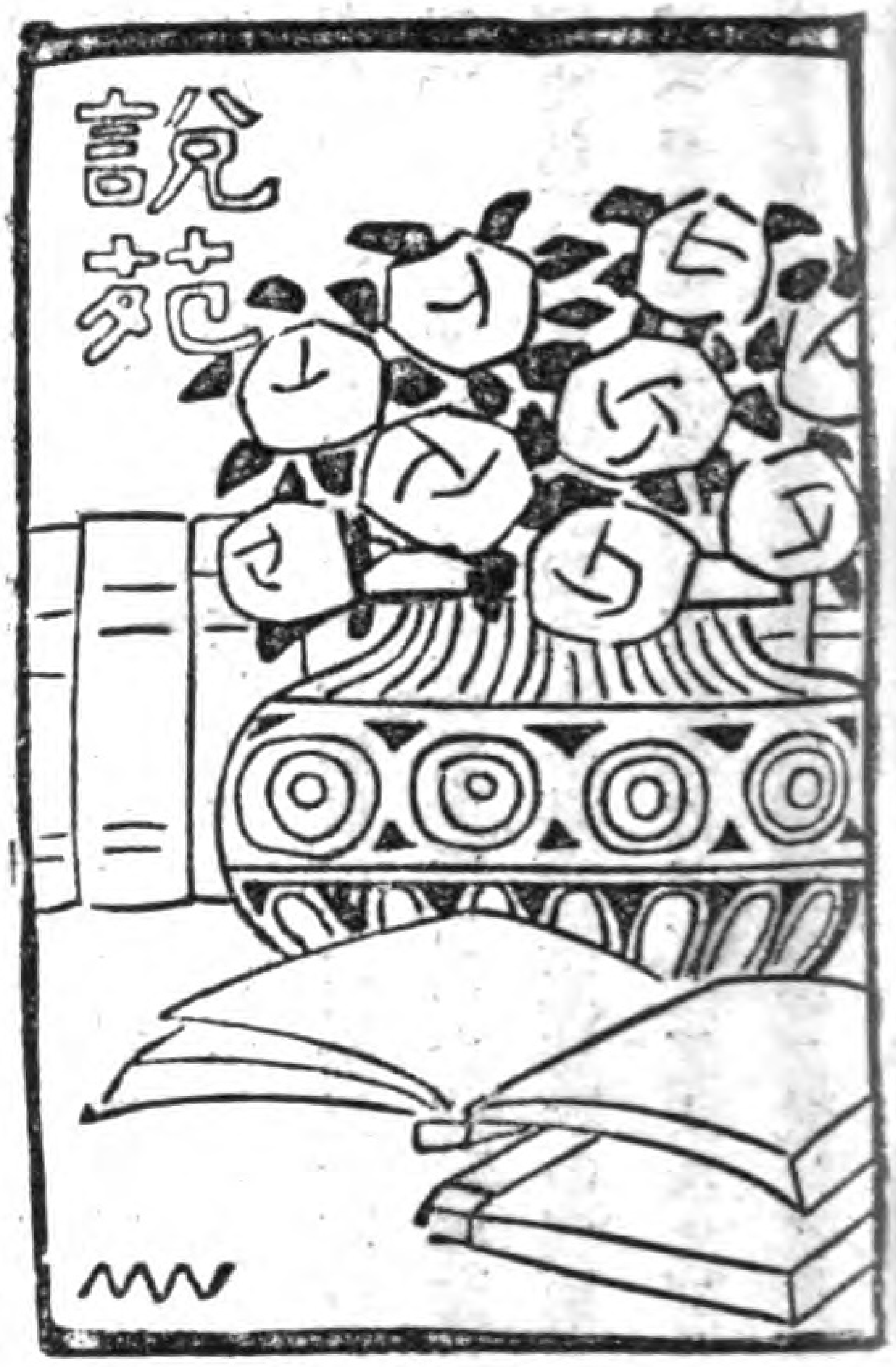
更に遡つて考ふるに、某々二三者が日勞黨支部の計劃をしたと云ふ事は、何故必然に總同盟の統制を傷くることになるか。尤も實際の形勢をいへば、總同盟は擧つて社會民衆黨を支持し、日勞黨は之に對抗して起つたものだから、日勞黨支部の計劃が總同盟に對する反逆に外ならぬは云ふまでもない。そこで一體斯うならねばならぬ形勢にこの儘放任するのがいゝか惡いかが新に我々の問題になる。私は政友會員たる田舍の物持が、嫁の里方の親が憲政會の爲に奔走したとて生木を割く樣に悴夫婦を離緣さしたと云ふ類の、よくある悲劇に當面する每に、既成政黨の人心を惑はし風教をみだるの害を呪はぬことはない。公けの問題で意見を異にする爲に、私の交通に支障を來してはいけない。親が甲黨に屬し悴が乙黨に屬し、堂々と意見を闘はしても家庭の圓滿に何の傷く所なしと云ふので、政爭は立派な君子の爭になる。況んや同じ工場に働く職工同志に於てをや。勞働組合に在て、組合員の政治的立場は本來何人からも拘束さる

べきものでないと、私は考へて居る。この點に於て私は、總同盟の態度を理論上正當とするわけには行かぬ。が併し私はこゝで總同盟の處置を非難しようとするのではない。寧ろ總同盟をして斯かる處置を執らざるを得ざらしめた事情に、讀者の注意を促さんとするのである。それは外でもない。讀者も知らるゝ如く最近我國に於て無産階級政治進出論などいふ飛んでもない謬論が流行し、各種の勞働組合をして所謂組合主義に安んずるを得ざらしめて居る。はては彼等を促して地盤競爭に對する自衞必要上、悪いと知りつゝも政治上の立場を機械的に固定せざるを得ざらしめる。さればこそ日勞黨支部設立の計劃は總同盟に取て直に一種の反逆行爲にもなるのだ。やる者も亦始めから總同盟の切り崩しをもくろんで着手したことに相違ない。表面に標榜することの何であれ、始めから喧嘩腰でやることに圓滿な解決の期せられないのは分り切つて居る。是れ遂に血の雨をふらすに至る所以。幹部の中には立派な人物も多いのに、末流の人の動もすれば斯く兇暴に陷り易く、而も之を十分に指導者達が抑へ切れないと云ふのは、惟ふに彼等の運動の根本に重大なる缺陷の伏在するが爲ではあるまいか。

既成政黨に望みを失つて世人は將來の光明を無産階級の運動に期待した。知らず、無産階級の新運動は、既成政黨の陷りし過誤より免がれ、能く世人の期待に孤負するなきを得るや否や。前門に虎を拒いで後門に狼を迎ふるの悔を殘さしめざる爲め、無産階級運動の先頭に立つ先覺の士は玆に深甚の省慮をす必要があらう。末節に拘泥し私心を逞うする場合ではあるまい。

某君に謝す

私が先きに本誌に於て豫審調書の書き方に就き述べた意見に對し、關西の某法官から、自分も兼々同じ考を有つて居たこと、而して自分だけは出來る丈從來の型を改めて來たこと、並びに斯くすることが屢々同僚などから批議されたこと等を、細々と知らして來た。之に依つて、裁判部内に在つては因襲の久しき容易に在來の慣行の改め難きを敎へられたと共に、他方また、その無意義を信じ率先して之を改めて居る人もあることを知つて、大に意を强うする次第である。之とは違ふが、京都の學生事件の公判廷では「お前」と呼んだといふて判事が學生からやりこめられて居る。呼び方にしても書き方にしても、單にそれだけのことなら大した問題ではない。斯うした形に現はるゝ判官の心持が實は大なる問題なのだ。私は形式の公平を要求することに依て、心事の不偏不黨を冀望するのである。關西の某君に謝するの傍ら更に一言この事を申添へておく。



貌刺屈の事

花園兼定

橫須賀先生が校長であつた淺草小學校の生徒の時分に、叔父や何かと一所に、『前川』へ行つて、其の歸りに、赤提灯の並んだ狹い路次を入つて、『並木亭』へ上ると、一人の赤ら顏の、肥つた西洋人が、扇子をパチパチやりながら、もつれたやうな舌をして、何やら話をしてゐた。これが抑も私がブラックを見た最初であつた。その時、ブラックがどんな話をしたかは、今は、まるで覺えてゐないが、私は西洋人で、よくもかう日本語を立派に――アクセントはをかしかつたが――話せたものだと、ひどく感心した。西洋人が、日本人とはアクセントのちがつた言葉で滑稽をいふので、お客は却つて之を喜んで笑つてゐた。

中學を終る時分に、私は英語に恐ろしく狂熱的になつたことがある。その時分出てゐた雜誌に、山縣五十雄氏の『英學生』といふのがあつたが、其の中で、英語を勉強する一つの方法は何でも構はないから西洋人に出會つたら話しかけて見る事だといふやうなことを、山縣さんは雜誌の卷末についてゐた『記者だより』といつた風なところに書いてゐた。それで私は、全くドンキホーテのやうに、一切構はず、公園などを散歩してゐる西洋人に出會つたら、何とか話をしやうと決心して、又實際にさうしたものである。その中には、無論英語の分らない西洋人にもぶつかつたし、ひどく不機嫌な顏を見せられた事もあつた。今考へて見ると、滑稽でもあるが、恐ろしく山縣さんの感化を受けて了つて、山縣さんの『白梅孃』や何か英文學の翻譯を愛讀したりして居て、成る程、英語を學ぶにはその位ゐの事は忍ばなければならないのだと本人は頗る眞面目であつた。或る時、日暮れ時分に、私は近くの淺草本願寺の境內を散歩して

居た。その時分は高等學校の入學試驗の準備もあつて、代數の本などを懐ろに入れては、靜かな所を歩いて居たものである。すると、一人の異人がフラフラと裏門から入つて來て、銀杏の樹を見上げたり、池のあたりに佇んだりしてゐた。その時も、私は本能的に、山縣さんの魔術にかけられて居た。そして話しかけたものである。すると、その人は笑ひもしないで、併し柔和な表情をもつて、日本語で私に返事をしたものである。私はひどく失望して了つた。その晩、私は、あまり頭が疲れたので、公園の活動へ行つた。すると、その時、トロイ物語の説明をして居た石井ブラックが、私がさつき本願寺別院の境内で話をした人であつたではないか。私は其處にトロイの城廓を見た。木馬に入つて攻め入るオヂツセウスを見た。

『ワヤワヤ、ワヤワヤと百萬の軍勢』の押寄せるのを、ブラックは面白く説明してゐた。今でも、その『ワヤワヤ、ワヤワヤ』の聲が私の耳に殘つてゐる。

最後に私がブラックを見たのは、芝白金三光町の破れの家に於てであつた。それは大正八年であつた。私は勤め先の社から頼まれて新聞先驅者の一人、『日新眞事誌』の創始者、ガゼット、ヘラルドの主筆をしてゐたヂョン　アール　ブラックの事をしらべる必要から、落語家快樂亭石井ブラックを訪問したのである。實はその頃まで寡聞にして、日本にブラックといふ新聞の先驅者のゐた事も知らなかつたし、無論落語家のブラックが其の人の子であることも知らなかつた。

三光町の家は、小橋一太氏の邸宅を少し行くと、小さな橋があつて、其の橋から右手に一寸入り込んだところにあつた。家の裏手は樹で蔽はれてゐた。小さな格子作りの家であつた。中は三間ぐらゐしかなかつた。

私がブラックの事蹟をしらべるやうに頼まれたから、私はいろいろと雲を掴むやうにして、あちこちへ手紙をやつたりした。そしてクロニクルのヤング氏から貰つた返事に依つて新聞先驅者のブラック(貌刺屈と自づから記してゐた)の子息の一人が神戸にゐる事を知り、更に神戸のブラック氏から、兄のブラックが芝白金三光町に隱退して居る事を知つたのであつた。

それから三光町へ宛て、二三度手紙を書いたりしたが、其の後、私はブラックを麻布の自宅に訪問した。ごく疲弊してゐる樣子で淋しい家であつた。その時、我が人の善い落語家は、大體日本語で話してゐたが、時々英語をつかつて見たりした。

『私は Emperor Meiji が、初めて京都から東京へおいでになつた時、father と一所に陛下の progress を見ました。』

ブラックは、特にプログレスといふ言葉をつかつてゐた。ロ

本語かと思ふと、英語でしやべつて居たりした。英語を聞いてゐると、急にいつからか日本語になつてゐたりした。

『兄は、あのやうに日本語がうまかつたが私はちつともしやべれません』と神戸のブラック君は私に話した。『そのくせ、兄は濠洲で生れたのですが、そして私は横濱で生れたんですけれども。大方、私はすぐ子供の時にロンドンへやられて了つたからでせう。私だつて子供の時は、日本の子供と同じやうに上手に日本語をしやべつてゐたものでした。』

石井ブラックの日本語は、やはり日本生れでない證據には、アクセントが變であつた。神戸のブラック君は、たしかに子供の時は、日本の子供と同じやうに上手にしやべつてゐたのにちがひない。

私は石井ブラックの話で、大體、彼れの父の事蹟をしらべる緒口を發見したのであつた。それから、私は社の宿直の翌日の休み休みに、ブラックに接觸したことのある人を、それからそれへと訪問して見た。

牛込に大井憲太郎氏を訪問したのも、ブラックの『日新眞事誌』の寄稿家の一人であつた事を知つたからである。その時、當年の大井馬城が、病みほうけて、小さな家に臥床されて居るのを見て氣の毒に思つた事である。あとで、副島八十六氏に會つた時に、其の話をしたところが、氏は、『はじめて私が東京に出た時分に、新聞の政治家投票で、大井馬城が一等でした。どうにかしなければならないな』と言つてゐた。孫娘の方か何かと看病してゐられた。傍には、學生の用ゐるやうな小さな本箱が一つ置かれてゐるだけであつた。氏の記憶は頗る朧ろげであつた。

細川潤次郎男を訪問したこともある。細川男は、當時の事は、やはり一番よく知つてゐた。新聞條例の事などについて、いろいろの話を聞く事が出來た。高齡にも似合はず丈夫な人だなあ！と云ふのが、一番强い印象であつた。歸る時、わざわざ玄關まで送つて出られたのに、ひどく恐縮したものである。

増上寺にブラックが寄附したシャンデリヤを見せて貰つた折、増上寺の坊さんから話を聞いたので、大門の傍に、何とか云ふ人を尋ねたことがある。その人はブラックの『日新眞事誌』の印刷に關係した人であつた。その時は駄菓子屋をしてゐて、お湯から歸るのを私は待つてゐたことである。

かうして色色の人に會つた中で、最もよく貌刺屈の人物を話してくれたものは、日本橋區南傳馬町二丁目二番地に住んだ印刷師鷹野楠山氏であつた。私は、この人の店に腰かけたまゝ此

の老人から貌剌屈の人物や、西郷南洲の事や、その頃出來た英和字書の事やらを興味深く聞いた事である。ブラックの唯一の著書で、幕末、明治維新史料として價値多きヤング　ヂャパンの中に、『日新眞事誌』の事に就て、次のやうな記述がある。

私は最初新聞の活字として、僅か二三百の種類の漢字があればいゝだらうと云ふことを聞いたが、どうしても一千二百字の種類の必要を見出した。それからやつて見ると、一萬二千字の種類を用意しなければならなくなり、それでも足らないで毎日増加して行つた。最初必要なだけづつ彫る印判師を五六人雇つておいた。何の文にも必らず一つ二つの文字が不足してゐたから、必要に應じて彫つて貰つたのである。木活字にするコマを澤山用意して置いて、必要あるごとに、どしどし彫つて行つたのである。此の木活字を數箇月用ひた後ち、市内に活字を製造する場所のある事を知り、鉛活字に代へるに至つた。それでも、新らしい活字が入用になると、人を活版屋へ走らせなければならなかつた。活字一本が二錢であつた。

外國の同業者が聞いたらおかしがるにちがひない。（ヤング　ヂャパン、第二卷、三六七頁、三六八頁）

この廬野楠山氏を訪問する前に、私は貌剌屈の名著、ヤング　ヂャパン（第一卷四百十八頁、第二卷五百二十二頁）を手に入れて讀んで居たので、廬野氏が、木の活字を『日新眞事誌』のために彫つた一人かと思ふと、殊更なつかしく思はれた。柳河春三の『中外新聞』も木活を用ひて居るが、成るべく活字としての均一のあるやうに、つとめて同じ字は同じやうに彫つたものである。廬野氏の談話に依ると、つげのコマを十ばかり縛つて、同じ字を同じやうに彫つたさうである。

初め一萬二千字の種類を用意し、それから次第に増加して行つた木活字は通計八萬程にも達したことは、明治七年二月七日紙上の告白（社告のこと）に、

今般鉛製の活字に改正致し候に付是迄相用ひ候木刻の活字通計八萬程不用に相成候に付御望の方有之候はば極廉價にて差上可申候

とあるによりても明らかである。

斯うして、石井ブラックから暗示された色々の人を訪問、又他の人から教へられた人に會つたりして居る間に私の親類の家の二階に、恐ろしく多くの古新聞が保存されて居るのを知つた。そして其の保存の中に、『日新眞事誌』も發見された。其の後、慶應大學へ新聞に關する講演に行つた折に、賴んでおいた學生からの知らせで、慶應大學の圖書館に『日新眞事誌』の合

本のあることを知り、見せて貰ふことが出來た。慶應の圖書館のは、明治七八年の分が、完全に保存されてゐる。これも貌刺屈研究には、得易からざる材料である。

そのうちに、急に私は紐育に向つて立つことになつたが、大正十二年に日本に歸つて間もなく、あの大地震であつた。幸に私の居た本郷西片町は震災を免れた。飲水には隨分と困り、中央公論社長の麻田さんの井戸へ水を貰ひに行つたりしたが、書籍や何かは別に片づけもしなかつたし、貌刺屈に關する材料も紙屑にもならずに保存された。大正十四年四月に、大阪に轉任になつた機會に、はじめて貌刺屈の子息ヂヨン　レデイ　ブラツク（John Reddie Black）に會ふことが出來た。そしてこの人から、あの震災の後、數日にして、震災のシヨツクのために、快樂亭石井ブラツクは、あの數奇の人生を絶つたことを知つたのである。

あの當時のさわぎの爲めに、新聞は、アメリカに於ける大電氣學者にして、思想家であり、エヂソンを繼ぐものとされたチユイ　アール　イレクトリツク會社の技師長スタインメツツの死去も報ずることを忘れたものが多く、此の興味ある落語家ブラツクの死去も報道しないで了つた。

石井ブラツクとはいふけれども、貌刺屈の夫人は日本人ではない。『母も近くにゐますが、もう九十の高齢ですし、誰れにも會ひません。妹が母の面倒を見て居ます。福澤さんの御世話になつて居ります』といふやうな石井ブラツクの話であつたが、此の貌刺屈夫人も、大正十一年頃亡くなられたさうである。貌刺屈夫人に會はないで了つたのが、かへすがへすも殘念である。

今度、大阪から東京へ引移りをやるので、本の整理や、慶應及び明治初年の新聞の整理に追はれてゐた。毎日毎日ビール箱に本や新聞や印刷物などをつめてゐた。東京に歸つて暫らくは、此等の箱を開かないつもりであり又開くわけにも行くまいとあきらめて、つめるだけつめてゐるが、その中で、特に私の眼についたものは、貌刺屈に關する材料であつた。貌刺屈の事を、こくめいに又稍々物好きに調べた人は何人あるか知らないけれども、少くとも私も其の一人に加へて貰ひたいと云ふ心から此の際此の新聞先驅者の事を書いておかうと考へた。今書かなければ、當分書く機會も來ないかも知れない。其の中に、其の材料も見失はれて了ふかも知れないと思つて、兎も角も書く事にきめた。

大正十五年に、私の先輩、太田（もとの春秋）玄在文氏が、

『十大先覺記者傳』を編輯して、大阪毎日新聞社から出した時も、氏は其の序文の中で、「ブラック氏の如き材料蒐集に困難なるものには何人も筆を觸れざる狀態』であると云つて居る。それで、私は春秋さん（私はかう呼び慣れて居る）に、私の材料の一部を提供したことである。

其の前後に、私は英文で、日本の新聞史に關する二つの著述を公けにした。その中にもブラックに關しては、特に章を設けて書いたのであるが、此等の本は英米の新聞は長文の批評をして呉れたが、日本ではからきし問題にされないで了つた。去年十月廿六日のヂヤパン　アドヴアタイザに、『もう少し知れていい本で知られない本』として、二段に亘つて批評が出た。それ故、私が此等の本の中でブラックの事を書いておいたけれども見て呉れた人は、日本人の中には殆んど一人もないだらうと思はれる位ゐだ。誠に一面から見て失敗した著者である。

貌刺屈の事の眞實が分つて居ない證據が澤山にある。そしてまた、それは貌刺屈の場合止むを得ない事である。

大日本文明協會發行『明治文化發祥記念誌』は、明治初年の文化を研究するものに取り無くてならない書物であるが、ブラツクの項（同書六十二頁）には、ブラックの事は僅かに一行しか書いてないし、ブラックの名の頭字JRが分つてゐないし、「『明治四年頃に來邦し、東京銀座に住み日新眞事誌なる邦文新聞を發行した。東京に於ける最初の邦字新聞である』とある。

同じ本の箕浦勝人氏談（六十九頁）には、

初めて新聞の出來た明治五年頃には、論説といふものは無かつた。どの新聞も雜報が殆ど其の內容の全部であり、論説と云ふ可きものは見られなかつた。たゞ英人ブラックの經營して居た「日新眞事誌」と云ふ新聞があつて、當時獨り論説を揭げて居たので、稍ゝ世人の注目を惹いて居た。

とある。ブラックの日本に來た年代はヤング　ヂヤパンにも出て居ない。又ヤング　ヂヤパンは一八五八年の條約調印から書き起して居るけれども、それは他の材料に依つてであることは同書の序文に明言してあるので、同年以後に日本に來たものであることは、序文の文句から充分に推察される。神戸のブラック君のいふ所に依ると、一八六三年（明治元年は一八六八年）すなはち文久三年であるらしい。ブラック君は、はつきりと私に答へたので、間違は少いことゝ考へる。ヤング　ヂヤパン第二卷三百六十五頁に、

一八六九年か一八七〇年にシー　ヂエー　プファウンデズ（C. J. Pfoundes）が私に申出でを持つて訪問して來た。」

とあるのでも、『明治四年頃來邦した』といふ『明治文化發祥記

念誌』の記述の誤りであることは明白だ。ブファウンデスの訪問は、『日新眞事誌』の發行に關するものであつた。『明治文化發祥記念誌』に、『日新眞事誌』を、二箇所とも『日新眞誌』としたのが誤りであることは勿論、此の『日新眞事誌』は、今日の新聞發達の上から見て大いなる意義があり、殆んど今日の新聞の形や編輯の創造者であり、箕浦氏の言ふ如く社說欄の創始者ではあつたが、『東京に於ける最初の邦字新聞』でなかつた事は、いふまでもない事である。

貌刺屈の來朝を一八六三年（文久三年）とすれば、文久二年には、バタビア新聞あり、海外新聞あり、貌刺屈來朝以前に、日本で初めて新聞が起されて居る。慶應期に入つて、新聞は再び形を整へ來り、更に明治に入つて貌刺屈の新聞が明治五年三月十七日第一號を發行した以前に東京に幾多の新聞が起されて居る事は誰しも知る所である。

宮武外骨氏の『明治演說史』は、誠に立派な著述であるが、『外國人ブラックの政談演說禁止さる』（八〇頁）に、『英人ハーレーブラック』が政談演說をして禁止されたことを記して、

ブラックは我國へ早く渡來した人で、明治五年より八年まで「日新眞事誌」といふ日刊新聞を發行

とあるのは、貌刺屈と其の息子とを混同したことを示してゐる。ハーレーブラックこそは後の落語家ブラックなのである。大記者ブラックは、ジョン アール ブラックであることは前にも述べた通りである。

明治十三年四月末の『近時評論』第二百六十三號に、

英國人ブラック氏ハ藤澤驛ヲ初メ各所ニテ演說ヲナシ終ニ小田原驛ニ到リ滔々ト國會開設ノ是非、徴兵令ノ便否ヲ演ベタルニ其第三日目ニ至リ警察官ヨリ差止メラレタルヲ何トカ蚊トカ論ジツケテ又モ該場ニ上リタルガ今度モ第三日目ニ其筋ヨリ斷然差止ヲ命ジタレバ大ニ不平ヲ鳴ラシ其儘箱根ノ溫泉ニ入浴シテ居タルガ去ル十九日同所ヲ發シ歸京ノ上ハ直チニ小田原警察署長ヲ相手取リ右差止ノ儀ヲ出訴ニ及ブト呟キ居タリト

とあるのは、無論、外骨氏の指名せる如くハーレー ブラックである。父貌刺屈は當時、ヤング ヂャパンの執筆に忙しく、且つ胃癌を病んで居たので、政談演說などして廻る筈もなく、記者貌刺屈は、明治十三年六月十一日に、ヤング ヂャパン執筆半ばで急死して居る。心臟痲痺で死んだのである。

大體貌刺屈は、政談演說をするほど日本語が出來なかつたことは、『日新眞事誌』の賣り弘めに、いつも日本語の巧みなダ・ローザを伴れてゐた（ヤング ヂャパン三七〇頁）ことでも知

れるし、ブラック兄弟のいふ所に依るも、父はあまり日本語は巧みでなかつたらしく、ハーレー ブラックは、洲間守がにすすめられて落語家になつたと私に話した點から見て、此の政談演説家はハーレー ブラックであつて、貌剌屑ではなかつたと思はれる。此處に外骨氏の混同があるわけである。隨つて外骨氏が、此の政談演説は、政府が新聞條令を改訂して、『邦字新聞の社主及び編輯人は内國人に限るべしと制定し、尙政府は國際問題の起るのを避けんため、巧みにブラックを籠絡して、新聞を廢刊せしめたのであつたが、（中略）ブラックは燒腹を起して一時支那上海に高飛びし、間もなく再び東京に歸つて居たが政府が嚴酷な集會條例を制定したのを見、國法で外國人を罰する事が出來ないのに乘じ、往年の欝憤晴らしに、巧みな日本語で政談演説をやつたのであらう』と書いてゐるのは、ブラックの憤慨は本當であるが、政談演説者と結びつけたところに、外骨氏の混雜があるのである。

併しながら、此の新聞條例の變改の爲めに遂にブラックが『日新眞事誌』を手放すに至つた事情については、父の貌剌屑も、息子のハーレ ブラックも、ひどく憤慨して居たのであるから、ハーレーも確かに政府の處置に對して不滿であつて、反政府的色彩は甚しかつたにちがひない。

政府はブラックが外國人であるために、他の日本の記者を取締るやうに取締り難い事情があつた。それで、どうしても、外人が新聞の持主であることを禁止しやうと試みた。或る時、細川潤次郎が貌剌屑をたづねて、今度新聞條例を更替したいが、政府の顧問となつて相談にあづかつて貰ひたいと云ふので、貌剌屑は喜んでそれに應じたのである。すると政府の役人になつた上は、新聞の名義人を代へて呉れといふので、荒木政樹を社長としたのであつたが、忽ちにして、政府は、新聞條例を改めて、外國人が新聞の持主になることを禁止して了つた。此の事情は、私がハーレー ブラック（石井ブラック）から直接聞いたものである。此の點に及んで、人の善い石井ブラックは、ひどく興奮を示して居た。

ヤング ヂヤパンには、

政府は新聞條例を改め、外國人は新聞の主筆又は持主となることを禁止した。私の不平を此處に記すは不適當ゆゑ、私の新聞の最後の運命については私は沈默する。（第二卷三七二頁）

と書いてある。つまりペテンにかゝつたといふのがブラック一家の憤慨であつたのであらう。同時に、またブラック一家が之が爲め財政的に大いなる打擊を受けたことゝ思はれる。

一時、『朝野新聞』の成島柳北は、同紙上に於て

貌剌屈氏の日新眞事誌を發行するに當ては我國の新聞紙は猶寥々罕れに見る所なり、然るに貌剌屈氏獨り奮勵して親ら鉛槧を執り社員を鼓舞して其の業を勉めしかば、其の社運は紅暾の碧霄に昇るが如く右に日報の背を折ち左に報知の喉を扼せり、我が新聞紙の如きは固より彼れが爲めに狗蝨せられたり。

と云つたほど、紅暾の昇るが如き勢を示した『日新眞事誌』も、ブラックの手を離れてからは次第に衰微に傾き、明治八年に遂に廢刊となつて了つた。

若しブラック兄弟にして、文筆の人であつたならば、貌剌屈に就て彼等自づから詳しく傳記したであらうけれども、一人は落語家として生を閉ぢ、一人は貿易商であつて文章の事には全く緣のない人である。文章人――貌剌屈は中々の名文家であつた――の子息であるにも拘らず、二人とも其點に於ては親に似たかつた。貌剌屈の死んだのは明治十三年であり、さして古いことでもたく、近松の歷史が不明であるのと比べて、如何やうにも明らかにする機會がありさうであるにも拘らず、材料の少きを憂へたければならないのである。殊に貌剌屈の一子が、今倘ほ神戶に住んで居ながらも、此の人は餘りから云ふ人物の歷史に關する史的搜索の意義の分らない人で、質問すれば答へるし、聞かなければ話もないと云ふ人なので、貌剌屈の一生を記すに、あまりたよりにならないのが、誠に遺憾に思はれる

日本新聞發達史に於けるブラックの位置は全くユニークなものである。ヘラルドの主筆として、またガゼットの主筆として、彼れが社會に奉仕した功も少くはないが、彼れの創めた『日新眞事誌』に至つては、全く我國の新聞の行くべき道を示したものである。この意味に於て、ヤング　ヂヤパンに、『日本の邦字新聞として（其の名に價する）最初の新聞』と謂へるは決して僭稱ではない。

德川時代の隨筆物から、慶應年代の新聞を見ると、此の隨筆物と新聞との間に、一種の關係のあることを、我々は知ることが出來る。柳河春三（シユンゾーとも、シユンサンとも呼ぶ。好事家の間にはシユンゾーで通り、藤澤利喜太郎博士は、父君がシユンゾー、シユンゾーと呼ばれるのを聞いたことがあるさうである。有司武鑑には柳河春藏とあるのから見てもシユンゾーが一つの呼名であつたことが分る。然るに、尾佐竹猛氏に依ると、柳河自身はシユンゾーとも、シユンサンとも讀ましたものの如く、洋學指針蘭學部にはローマ字で Sinsan とあるが、

英和對譯袖珍辭書には Sunsam とある）の『中外新聞』（慶應四年二月二十四日第一號發行）の如き品位ある新聞ですら、『夫婦同寢多少の限ある話』（第十六號）とか、『髮切の怪談』（同號）の如きを掲げて居る『髮切の怪談』といふは、

四月廿日夜小川町步兵屯所にて一人髮を切られたる者有り夜半の頃寢所より起きて厠に往きしに何物とも知らず眞黑なる物突然と來りて頭に突當るよと覺ゆるや否や卒倒して人事を知らず此物音に驚きて人人集り介抱せしかば甦て正體に成たり然るに髮は落ちて二三間も離れたる地上に在り其眞黑なる物は猫の如くにして黑き事恰も天鵞絨の如くなりしとぞ。

と云ふ話、『遐邇新聞』第一號（慶應四年四月）には、『英國法律書一章を譯す、男色或は人と畜生と交合るの罪並に所置方の事』の如き讀物を掲げて居る。太田南畝其の他、德川末期の隨筆には、いろいろの怪聞珍談が、載つて居るが、慶應の新聞には、此等の隨筆趣味を受繼いだ所がある。これは當時の有閑階級に賣り込むには、必要であつたかも知れない。當時の讀者は、明治初年の讀者も同樣に、斯くの如き記事を喜んで讀んだものに違ひないからだ。

私は親類佐竹氏に保存された新聞の堆積と共に、たんねんに試みられた新聞の切拔をも見出すことが出來た。其の切拔を見れば、慶應から明治へかけての讀者が、どういふ記事を喜んで讀んだかを知ることが出來る。私は、此處にその中の少しを表記して見たい。

魚腹内の死屍――『或る人が買て頓て腹を斷割しに一人の婦人の死骸が其儘にて現れ出たり』（東京日日、明治十四年十月三日）

畑の中から太刀等古物の出た話――『はたけ　の　なかより、こぶつ　かずかず　を　ほり　いだし』（每日平假名聲滕社新聞、明治六年四月十七日）

『昨今兩年暑氣の比較』（東京繪入新聞、明治廿一年八月三日）

『震雷彙報』（東京日日新聞、明治十四年八月二十四日）

墓所地より出火せし珍話（魁新聞、明治十年八月十五日）

『本年東南の方に當つて正に一大彗星を現出すべし』（團團珍聞、明治十三年十二月十一日）

『金環蝕』（朝野新聞、明治十六年十一月十四日）

『日食論』（讀賣新聞、明治十六年十月二十八日）

『地震研究の依賴』（時事新報、明治十九年五月廿九日）

『獨逸國帆走船ヲツト號に飼てある犬は今年で八十四年な

れど』（魁新聞、明治十年八月廿一日）
『彗星』（やまと、明治十九年十二月十五日）
『小兒の遺尿』（醫事新聞、明治十三年六月三日）
『阿蘇山噴火』（神戸港新聞、明治六年三月十二日）
『伊豆の大島の火山の噺』（東京繪入新聞、明治十年一月卅一日）
『太陽の黑點』（朝野新聞、明治十八年十月七日）
『八日の晩の光物は時候の所爲』（浮世、明治十三年一月廿三日）
『大きな鮑……中から眞珠が二つ』（東京日日新聞、明治九年一月七日）
『長崎縣醫學校に於て……髑髏を解剖したるに胃の大彎に於て直徑半インチ餘の孔あり』（報知、明治十三年十月十四日）
『彗星觀測』（東京朝日、明治廿一年七月三十一日）
『戸隠山の洞の中に年久しく栖みしとかいふ巨蛇の長さ一丈七八尺』（繪入新聞、明治十年十二月二十日）
『松葉より綿を製する事』（讀賣新聞、明治十四年三月九日
『ア、ア怪しやなアともいひさうで少し變だが……生れた兒は眼が三ツ』（魁新聞、明治十一年十月廿一日）

此の忠實なる新聞の讀者は此の外に、倫敦通報（東京日日新聞、明治十四年一月七日）とか、關稅局の年表（中外物價新報、明治十一年十月十二日）等の切拔もしてゐるけれども、大體に於て、今日の所謂、ヒユーマン　インテレストの記事を喜んだもののやうである。此の一人の讀者の趣味好尙を以て、當時の一般讀者の趣味を推することは、稍失當であるけれども、私はこれとは關係なしに、當時の讀者は、珍聞種を喜んだと信ずるものである。新聞も亦、此の種の記事を爭つて提供したことは明かである。

然るに猊刺屆の『日新眞事誌』に至つては全くほんとうの新聞であつて、隨筆趣味とか草双紙趣味に無理に迎合しやうと努めたところがない。新聞がなければ商賣が出來ないといふやうな新聞を作らうとしたのである。『全く普通のヨーロッパの新聞と同じ内容』（ヤング　ジヤパン、第二卷三六八頁）を持つて居たのである。

『日新眞事誌』の發行の辭のうちに、『耕作のよしあし、諸の値段、もろ〳〵の産物、諸道具の發明、入船出船の品物、山林商船軍艦などのうりかひ觸出し』等の文句を、『中外新聞』、『内

外新報』、『遠近新聞』、『もしほ草』等の發刊の辭と比べる時は、如何にも貌刺屈の新聞が米の飯であり、他の新聞は、『異端異説を集め』（內外新報第一號）、『彼此處々の巷談風說等其外珍奇にして耳を悅ばしむる』（遠近新聞第一號）ことを努め、『童蒙婦幼の爲に耳近きを枚擧』（江湖新聞第一號）して、今日の所謂興味本位の新聞を作らうとして居たことを知ることが出來る。『日新眞事誌』は、御布令、東京新聞、縣新聞、横濱新聞、英國新聞、電報、佛國新聞、論說、投書、月湖時報、貿易之景況、告白（社告のこと）を含み廣告を揭げるといふ風であつた。

明治初年の朝變暮改の甚しい時代であつたから、政府の布告は一般の人に最も重要視されたものである。東京新聞、縣新聞等の新聞はニユースの意味で、新聞のことは新聞紙と稱へてゐたのが、その當時の用語例である。明治五年東京横濱間の汽車が開通したので、創刊當時の『日新眞事誌』は、汽車の發着時間賃銀表を揭げて居る。これは當時の他の新聞に見ざるところである。當時の汽車賃は、東京横濱間上等一兩二分、中等三分、下等一分二朱で、『小兒四才迄は無賃十二才以下は半賃金の事』であつた。時間は、たとへば、午前八字（八時）發が同五十三分に着いて居る。

貌刺屈の新聞記者としての態度は、甚だ親切なることである。彼は、ほんとうに、日本の向上を念として居たものの如くである。それ故、たゞ寫眞の如く報道しさへすればいゝと云ふ今日の或人たちの考へて居るのとは違つて、彼れは世の中を指導するつもりで居た。『新聞は政治する』といふ思想の出て來た今日から見れば、貌刺屈の態度は、最も進んだ態度と見る事が出來る。

廣島新聞ニ同縣下山縣郡ヨリ來書中ニ醫生某東京ヨリ歸國シ携フ所ノ舶來菓子ヲ某先生に贈ル東京新製ノ良菓子ト心得忽之ヲ賞味ス而シテ始メテ舶來品ナル事ヲ聞キ驚愕措ク所ヲ失ヒ指ヲ以テ咽喉中ヘ差シ込ミ喰フ所ノ菓子ヲ悉ク吐キ出シタリト共洋風ヲ嫌フ大概斯ノ如シト邊土僻陬ニ至テハ舊習ニ泥メル實ニ冷笑ニ堪ヘズト此ノ一事ヲ以テ推ストキハコノ地方ノ開ケザル知ルベキナリト（日新眞事誌、明治五年十一月十二日）

京橋以南ノ煉瓦石家屋ハ此頃已ニ居ヲ占ル者多シ夫レ煉瓦石ノ家屋タルヤ濕氣ヲ防ギ火氣ニ强ク又空氣ノ漏ルルコトナシ故ニ冬ハ暖カニシテ夏ハ凉シ歐洲諸國ニテモ之ヲ以テ家屋建築ノ第一品トス然レ共冬分若シ窓戶ヲ密閉シテ木炭ヲ焚ケバ炭素室內ニ充滿シテ之ガ爲ニ人命ヲ害スルノ恐レアリ故ニ彼ノ國ニテハストウブヨリ外ニ火ヲ用ユルコトナ

シ方今此家屋ニ住居スル者ヲ視ルニ概ネ家內ハ國風ニテ矢張火鉢ヲ用ユル者多シ若此慮リナキトキハ恐ラクハ炭素ノ爲メニ生命ヲ失フ者出來ナン動物ハ常ニ炭素ヲ吐クモノナレバ必ズシモ炭ヲ焚カズトモ煉瓦石造リノ小サキ部屋ヲ密閉シテ其內ニ數人ヲ置キナバ亦心(必)ズ此害アルベシ世人大抵是ホ(ホド)ノ必(心)得ハアリ給フナレ共不斗心附ノ儻忠告スルモノ也(日新眞事誌、明治六年十一月十四日)

横濱每日新報ニ曰ク頃日東街道三島驛ノ一商家ニ佛事供養ノ事アリテ親族緣者ヨリ比隣合壁ヘ俗例ニ倣ヒ饅頭ヲ配附セリ然ルニ之ヲ食セシ人々皆腹痛吐瀉シテ大ニ腦(惱)マサマル者、七八十人ニ及ベリ人々大ニ怪ミ其原由ヲ尋ルニ全質ノ白キ饅頭ニテハ文彩ノ心目ヲ悅バシムル能ハズトテ之ヲ彩スルニ綠青ヲ以テスルヨリ之ヲ喫スル人皆銅綠ノ毒ニ中リテ斯ノ如キ傷害ヲ受ケタリト云フ幸ニシテ食死ノ者ナシト雖モ附者ノ不注意ナルカ菓舖ノ杜撰ニ出ルカ戒心スベキ事ナリト獨リ饅頭ノミナラズ方今菓舖ニテ製スル干蒸ノ百菓文彩ノ美觀ヲ爭ヒ妄リニ丹碧ノ畫具等毒ノ有無ヲ檢セズ食物ニ和附スルハ人命ニ關スル大切ノ事ナレバ百物毒ノ有無ヲ吟味シテ之ガ禁例ヲ設ケ度事ナラズヤ(日新眞事誌、明治六年十一月十四日)

千葉縣下中山元成ナル者ハ嘗テ心ヲ製茶ニ用ヒ横濱に往復シテ茶ヲ洋商ニ鬻ギ實際ニ苦慮スルコト茲ニ十數年頃日又其感ズル所アリ一說ヲ作ス其文ニ曰　夫レ六大洲中新忽爾蘭土亞弗利加ハ茶ナシ歐羅巴諸國往昔ヨリ茶ヲ種殖ストイヘドモ風土適セズ南亞米利加モ未ダ茶アルヲ聞カズ北亞米利加中北緯三四十度ニ亘ルノ地近頃茶種ヲ植ヘ既ニ生育ヲ得タリト云ト雖モ而ルモ未ダ其確說ヲ聞カズ今亞細亞ニ就テ之ヲ考ルニ印土ハ元來茶木アリト雖モ赤道直下熱帶中ニテ炎氣過當ナリ依テ佳品ヲ得ズ魯西亞領內冷威凛烈ニシテ產殖セズ唯支那ヲ以テ茶木適應ノ地トス而シテ四十度以北ノ地ハ絕テ茶アルコトヲ聞カズ江南寧州抗州等ノ地方及ビ貴州ヨリ蜀山ニ產スル多シトス皆東南ニ向ヒ大川長江ニ沿フノ地ト云近頃聞ク暹羅國茶ヲ植スト然レドモ二十度前後ノ地炎熱過酷其木短小ナリ我邦ハ東海ノ一大島北緯三十度ヨリ四十度ニアリテ風土極メテ茶ニ適應シ全國ノ地味異同アルモ概シテ茶木ノ生ゼザルハナシ而シテ其製唐宋ノ風ヨリ由來シ往々我ガ自法ニ移リ種々派流アリト雖モ今日ノ產宇治ノ流傳ヲ以テ第一等トス而シテ支那ノ製茶方法ハ大ニ我ト異ナルアリ日本人ヲシテ之ヲ喫セシムルニ香味共ニ適セズ然レドモ歐洲各國皆之ヲ賞喫セリ其我茶ヲ賞シ之ヲ

買フ者ハ米利堅人ヲ最モ多シトス依テ考ルニ支那ト我邦ノ製其是非果シテ何レニアル乎歐洲人ト米人ト茶ノ精味ヲ辨解スル果シテ何レニアル乎若シ支那ノ製ヲ以テ是トセバ我方法ヲ改ムベシ我法ヲ善トセバ益之ヲ製精シ海外ニ輸出シ國益ノ隆盛ヲ期スベシ翼クハ速ニ其方法ヲ一定シ世ノ製茶家ヲシテ二念ナカラシメンコトヲ云々（日新眞事誌、明治六年十一月廿日）

斯くして、彼は常に日本を少しでもよくしやうと務めたのである。彼れの新聞をして彼れの讀者に缺くべからざるものとしたのである。スコットランドに生れ、少年時代の教育をタライスツ　ホスピタルで受け、後ち海軍士官となつたのであるが、遂に海軍士官たることをやめて、濠洲に赴き、其處で商業に從事した。後ち、歸英せんとして日本に立寄つたのであるが、ひどく日本および日本人が氣に入つて、彼れは一生の殘餘を日本で送つて了つた。

彼れの死は突然であつた。私は彼れの死を思ふ毎に、夕方の空を見てゐたが急に驅け込んで死んだ小泉八雲の死を思はずには居られない。彼れの名著ヤング　ヂヤパンを讀むものは、

Whether there ever was such an orders issued as that asserted to have been given for the assasination of saigo can never be known. A full confession was made——

西鄕を暗殺せよと云ふやうな命令が果して政府から出たか如何かは知ることが出來ない。一つの告白は——の後に直ちに、

此處に著者の原稿は終る。一八八〇年（明治十三年）六月十一日、ブラック氏は急に死んだ。彼の筆が、ミカドの王政維新以來、最も重大なる出來事——サツマ叛亂——に及びつゝあつた時に死んで了つた。

と云ふ編者のノートがあつて、更に一章を附して、結末をつけてゐる。この『告白は』と云ふのは、編者の書き足しに依れば、西鄕の陣營の爆破を企てた一警官が政府の命に依りて暗殺の計畫を爲したことを告白したものである。

『もしほ草』の發刊の辭の中に、

曩にヒコサウの新聞誌ありしが、かの人此地を去りしのちは久しく其事絶えたりしが、去年正月我友人ベーリイ萬國新聞紙を版行せしが、これも第十編迄出版してやみぬ：………近來開けたるハワイにても五六年前までは島人大抵文字を知らざりしに近日は追々にひらけて人々文明に進み毎朝新聞紙を出版する事七千枚に至るといふ。支那にても

近來香港上海にて漢文の新報を版行す。大抵毎月二萬四千枚を賣出すといへり。是は皆新聞紙を買ふの人前以て週年の價金を版元へ渡置きて出版毎に新聞紙館よりくばる也。………日本にても新聞紙の盛に流行せん事を願ふ也。

とある。ペーリイの萬國新聞紙は、其の後第十一號を出して居るので、其の點は誤りであるが、如何に新聞經營者が苦心したかを知ることが出來る。今日にありては新聞の流行は絶頂に達し、今や行きつまりを感じて居る有樣であるが、昔を思へば新聞の發達驚くべきものがある。

ブラックが、『日新眞事誌』の賣弘めの爲めに如何に骨を折つたかは、ヤング　ヂヤパン第二卷三七〇頁―三七二頁の記述に依りて略ぼ察することが出來る。すなはち、一般の人の間に地盤を作る爲めに、ブラックは、日本語に巧みなダ・ローザを作れて、勸誘運動を始めたのである。

私達が勸誘に入つた家は、ロンドンならばツーレー　ストリートの商人――たとへば油商人、青物商、酒屋といつた類であつた。

私達は店に入つた。地から八インチほど高い床の上には例の疊が敷いてある。その上に數人のバントーが座つてゐた。或るバントーは何か書いてゐた。他のものは何にもしないで、客を待つてゐた。

そのバントーたちの後ろに、一尺ばかりの帳場があつて、其の中に主人がゐた。私達が入つて行くと、凡ての眼は私達の方に向いた。凡ての耳が私達のいふことを聞かうとしてゐた。ダ・ローザは何でも日本語で云ふことが出來たので、彼れが代表となつて話した。主人はぢつと聞いてゐた。新聞とは何であるか主人には分らなかつた。

その中に一人のバントーが云つた。

「あなた御覽になつたぢやありませんか。日新眞事誌はたしかに來てゐましたよ」

主人は「あゝ、さうさう、こゝにあつたつけ」と云つて、一部取り出して、大變外國の事など書いてあつて面白いと云つた。その時、私達は、此の人は、きつと讀者になつてくれるだらうと思つた。

ダ・ローザは、それなら一つ讀者になつて頂きたいと申込んだ。すると、主人は「何にさ、こゝに一部ありや、それで澤山ですよ」

「それは一日だけの分なんです」

「毎日同じものを取つたつて仕方がないぢやありませんか。

これほどの苦心を、我が新聞先驅者の何れもが、して居るのである。

さきに私が引用した『もしほ草』の發刊の辭の中にあつた『ヒコサウの新聞誌』といふのは、日本に於てバタビア新聞(一八六二年文久二年一月發行)と共に日本に於ての最初の新聞で、一八六四年(元治元年)から翌年末まで發行された。此の新聞の名については、『新聞紙』であるといふものと、『海外新聞』とするものとの二つの意見があるが、兎に角、此の新聞の創始者ヂオゼフ　ヒコ(後の濱田彦藏)が播州の水夫であつて、少年の頃難破して米船に救はれ、米國に歸化し、米國で敎育を受けて歸り、日本に於て最初の新聞を起したのであるが、此の人が、米國の影響を受けたのと對象し、『其の名に價する最初の新聞』を起した人が英國人であり、其の子が落語家として死んだ如き、興味ある事である。濱田彦藏に就ても、マードツク氏の編輯した彦藏の英文の記述、The Narrative of A Japanese がある外、あまり其の生活を知る材料の少ないのが憾みであるが、貌刺屈に就ても、同じ遺憾があるのである。これは、日本の新聞發達の上に、彼れの遂げた大いなる功績の爲めに、一層惜まれなくてはならない。

貌刺屈の發行してゐたフアー　イーストは寫眞入りの雜誌で、此の寫眞は皆な、本物の寫眞を張りつけたものである。此等の中には當時を偲ぶに絕好の材料となるものが少くない。一時上海へ行つた彼れは、其處で上海の景色を入れたフアー　イーストを發行して居る。初號は明治三年五月三十日に出されて居る。上海の分は明治九年七月に發行されて居る。上海で彼れはシヤンハイ　マーキユリーを創立したが、明治十二年六月健康を害したので再び日本へ來た(ヤング　ヂヤパン序文參照)。そして彼れは靜養すべき地を求め、あちこちとさがしてゐたが、遂に見あたらないので滯在十日ばかりの後、上海に歸らうとしたが、そのまゝ日本に止まつて了つた。

或る日、病愈つた後、フアー　イーストの綴込みを見て、盛んなりし日を追懷した。その時、彼れの眼を打つたものは、明治八年六月に書いた回想記であつた。それは、明治三年五月創刊以來の出來事を回想して書いたものであつた。これを土臺として、更にアーネスト　サトー等の著述、英國公使館の記錄、自分のノートを參考にして、『若き日本』を書かうと決心したのであつた。德富蘆花の『日本より日本へ』に、蘆花がアメリカの日本人の若い連中から聞いた言葉の中最も感心したのは、日本はまだ若いのだといふ言葉であつたさうであるが、ブラツクの時代の日本こそ、全く若き日本であつた。ブラツクは日本の都市

を防火的にすべきことをガゼツト其の他で絶叫したにも拘らず、若き日本は、いつまでも餘りにお若い日本で止まつてゐたことは殘念である。內田魯庵の所謂火に燒け風に倒れ水に浮く家に住む事に於て貌剌屈の時代も今も變りがない。

はじめの頃の『日新眞事誌』は、芝增上寺大門内の源興院で發行された。新聞にも、さう書かれて居る。調べ事といふと、夢中になる私は、臆面もなく、源興院を訪ねた事がある。增上寺の山門から大門の方へ歩いて行くと、左側にある大きな寺だ。大きな黑繪の襖と、陰氣なじめじめした書院の北向の庭とが印象に殘る。此の寺の前に、左院御用と書いた高張を立てゝゐた御一新直後の東京が想像された。馬車で、その頃の長めの服を着た異人さんが來ては、羽織袴のエキス・サムライを記者にした新聞といはるべき最初の新聞を編輯して、寺から出て行く貌剌屈の姿を想像することは興味あることであり、あの當時の色彩の强烈な錦繪を思出すことが出來る。丹塗りの山門に松高き境内を長身の貌剌屈が日本のミユージツクを口ずさみながら(貌剌屈は、大變音樂が好きであり、日本の音樂が好きであつた。貌剌屈が、日本の婦人のひく三味線をピアノに合してゐる寫眞がある)出たばかりの『日新眞事誌』をひろげながら散步して居たこともあるであらう。

其の後源興院から、銀座四丁目九番地(さう新聞に印刷されて居る)に移つた。『新舊時代』大正十五年十月號に、『明治初年のヘラルド事情』を話してゐる太田長四郎氏の談話の中に、

ロールマシンをブラツクに賣つたことがあつた、ブラツクは、日新眞事誌といふ日本字の新聞を、今の(銀座)服部時計店の處で發行して居つた、社では英國製の印刷機械を取次いで居つた、機械とインキと紙を日本で賣つたのは、恐らくヘラルドが始めだらう。

とあるのは其の當時である。

源興院から銀座に移る時に、貌剌屈は、暫らく增上寺々中の源興院にゐたことの御禮として、和蘭から來たばかりのシヤンデリアを增上寺に寄附したのである。私はこれをも見る爲めに、增上寺を訪問した。震災前の增上寺の書院の裏堂に、吊されてゐた。破損したので、裏堂に保存したのである。シヤンデリアは其の時でも、うつくしいガラスが水晶の如く輝いてゐた。かういふ點にも貌剌屈の、やさしい感情を見る事が出來る。

貌剌屈の人物の溫厚純情であつたことは、貌剌屈に接したものゝ何れも云ふところである。ヤング　ヂヤパンの表紙扉に、過去三十年間、私の幸福を第一念とした我が愛妻──私の友達、

私の慰め、私の王冠――に此の書を捧ぐの文字を印刷してある如き、如何に彼れが彼の妻を愛したかを知る事が出來る

彼れは、はじめ、日本を永住の地と定めて初めて日本を訪問したのではなかつたが、一つには、同國人の誰れ彼れの信頼尊敬の的となり、遂に日本に止まつて了つたのでもあらう。彼れの一家が横濱に於て、如何に外人の間に親しまれたかは、今神戸にゐるブラック君の家に殘る書翰に依りて明かである。可愛いブラック兄弟姉妹が、どれほど皆なから可愛がられたかも、ブラック家に殘る手紙に細々と書かれて居る。去年の終り方に神戸市外原田村のブラック君の家が自火で燒けたけれども、此等の手紙や、ファー　イーストの綴込や、寫眞やが、安全に持ち出されたことは、ブラック史料の乏しい今日喜ばしき事である。あの暖いサンルームにヂョン　レデイ　ブラック君夫人が丹精してゐた植木鉢の燒失を御氣の毒に思ふけれども、其等の貴重の材料の安全であつたことは不幸中の幸である――と、私は、見舞の手紙に書いたことである。

『母が、私の家に寫眞や何か置くことはあぶないといふので、みんな弟の方へやつてあります』と、石井ブラックの私に話した其等の物柄が燒失しなかつたことは、新聞史研究者に取りて此の上もない幸である。

鋭劍屋の事は、全く世間からは忘れられて了つて居る。若し石井ブラックが斯くの如き新聞先驅者の息子であることが文學者の間に知れて居て、而も彼の眞打ちの落語家が震災後數日餘殘喘々たるうちに淋しく眼をつぶつたことが報道されてゐたならば、彼れの死は、吉井勇氏たちが『何樂』の死を悼んだやうに、何人かに依りて、悲しき歌となつてゐたこと丶思はれる。

デュ・デボア夫人の幽靈

——もだん・でかめろん其の一——

谷讓次

はしがき

近代の都會は一個の生物である。

大地にしつかと根を張り、人間を餌食にして空へ空へと伸びて行く機械文明の巨大な怪物、それはもう人間の手に成る幾何學的立體の集團などといふものではなく、人間とともに生長する一種の動物的植物なのだ。だから都會は、それじしん獨立した思想と、統一された感情と、自分だけの生活とを有つてゐる。そこでは、人間の神經と神經とが觸れあつて奏でる交響樂がその騷音であり、都會の明暗はそのまゝに詩だ。

そしてまた都會は妖女だ。

浮氣な、手におへない莫連者かも知れない。その證據には、夜と晝とで、その貌に、其の相に、なんと奇術的な相異が行はれることよ。だから、大都會に夜がおり、星屑とビルデングの灯が一つにぼやけて、老遊女の厚化粧のやうなものゝ怪が立つ頃になると、蝙蝠みたいに晝間屋根うらに寝てゐた獵奇者のむれが、どこかに何かしら面白いこと、變つた事件があるやうな「氣」がして、只もうじつとしてゐると取り返しのつかない損をするやうに、たまらなくなつて流れ出てくる。かれらは愉快にあわれな近代病の不具者なんだ。うたはない詩人、えがかない畫家の、訓練された大軍なのだ。

都會の智情意とその神秘に幾分なりとも近づき得てゐるのは、この夜の散歩者たちであらう。かれらはいたるところに居る。ある者は貧民街の酒場の椅子の脚に化けてゐやうし、或る者は大通りに踊る紙屑になりすまし、また他のひとりは角のポストに、一人は紳士の襯衣に、ほかのいたづら者は若い貴婦人

の靴下留めに化けたりして、かうしてそれぞれ身を窶して、都會の心臓の奥ふかく忍びこんでゐる。

　この人々の見た都會のいろいろな場面は、あの「どこかに何かしら面白いこと、變つた事件があるやうな氣」の探險による滿足であり、同時に、都會の物の怪への挑戦でもある。私はこれから順々に、亞米利加といふ「現代の雜馬」を背景にした都會の不可思議な挿話を、近代十日物語（モダン・デカメロン）として繰りひろげて行きたいと思ふ。

1

　チヤアリイ河瀬とフランク高田は、大紐育の投げる陰影の谷底で生きてゐた。なんかと氣取るよりも、マンハツタンの步道の下に巢をくつてゐたと言つたはうがいゝかも知れない。とにかく、この二人の亞米利加日本人は、惡いことには生えぬきの紐育つ兒で、そして――これはキリストも知つてゐる――さう惡いことには、祝福された職業的博奕打ちだつた。事實なんだから世界ぢうに聞えたつて構はない。本人たちもさぞ大得意だらう。

　南京豆の油を皿へあけて、紙を浮かべて火を點けて、そいつを灯りにするんだが、いやに黄つぽい光線が壁に貼つた赤や紫の色紙に反射して、線香と燻製と野鴨の天ぷらと茶と生姜のにほひの渦まいてゐる地下室、そこを生活の本據にして、フランクとチヤアリイは晝夜の別のない日を送つてゐた。早く言へば四五（しいこ）・四五（しいこ）だ、馬券票（まかつぺい）だ、支那街の蟲だ、先生（しんさん）ばくちだ、投機心の乾物だ、機會のおばけだ――きりがないからやめる。

　夢のやうな支那街、なんてことを寄席なんかでよくいふ。極彩色の大道具に、仁丹だの大學眼藥だの天下泰平だのといふ文字を左右あべこべや逆さまに書いたりした妙痴奇林な舞台面に、これはまた何ういふ趣見か、大きな壺から煙が出はじめると、それが豫ての合圖とみえて、ぱつと電燈が消えて、壺と煙へだけ丸く光りが當る。すると、待つてたやうに壺が割れて、中から、今の今まで楽屋で黑麵麭と腸詰を嚙つてゐたばかりの若い猶太人の女が、上海の寢卷みたいなものを申譯に引つかけて、兩手の人差指を腋の下のところで上へ向けて、爪先で立つていや、正確に言へば立たうとする努力でよろよろして、につこり笑つて見せる。これが夢のやうな支那の氣分なんださうだ。成程違えねえ、夢のやうだと思つて感心してゐると、どうんと銅鑼（どら）が鳴る。と、腋下で捧げた人差指をにょきにょき上下に動かして、小刻みに跳ぶやうにしながら、上海の寢卷が唄ひ出すのだ。

『ちやあいなあ、あ、う。
ちやあいなあ、あ、う。
ちやいなあゝう・たあうをん。』

どうん、と鐵がはいる。實に有難い。見物はひとしく感に打たれてゐる。いゝ氣味だ。

そのうちに大變なことになる。一時に電燈がつくが早いか、舞台正面下の樂隊が、火事を出したやうに騷ぎだして、めりけん名物の俗謠樂（チヤゼム・テツプ）にかゝると、無數の上海の寢衣がずらりと脚下燈の前に眼白押しに並んで、さて、その合唱がかうだ。

『う、ゝ・ろんぐ
そう・ろんぐ
はう・ろんぐ
ゆどんな・ぴ・どうん――。』

これぢやあ何のことだか一向判らないが、先づ、まさに助からない。見物は、と見ると、疾うの昔に「夢のやうな」支那から歸朝して、ぽかんと口を開けて、ぴんぴん動く女の四肢を凝視めて、多くは新しい夢に入らうとしてゐるし、その中の或る者は「やあ、こゝに夢のかけらがゐるぞ」といふやうな失體な顏をして私――假りに私が其處にゐたとして――のはうを見て、まはりの人にもこの發見を分けようといふ親切から、兩隣を肘で突ついたりしてゐる。で、つい癪に觸つて幕の半ばに出てしまふから、夢のやうな支那が其の後何うなつたか知らないが、ほんとの支那街は決してこんな生易しいものぢやない。それはチヤアリイ河瀨とフランク髙田が一番よく知つてゐる。

話は、この紐育の支那町に始まる。

葫と醬油（うちよい）とぎやそりんと醱酵菌と毛皮と白粉のにほひがごつちやになつて、紫色に淀んでゐる大都會の體臭のやうな空氣のなかを、あらゆる人種の行列が、製材工場の調革みたいな、低い音律を作つて流れて行く。さうすると、空を衝いて四方に迫つてゐる多角形の超特高層建築物が、何うかするとすうつと遥のいて、あとがそのまゝ地に滅入り込むやうな氣がするのだ。なに、割つて言へば、早い秋である。

紐育の秋は深山の秋と同じだ。そこには只、遠近を一色に塗りつぶす夕闇のやうな大氣の魔術があるばかりで、女といふ女は、みんな下等な劇場の花形女優――恰度さつきの上海の寢衣みたいな――のやうに、顏半分を外套の襟で隱して、白堊の佛蘭西踵で敷石を叩くし、巡査は愛蘭特産の鼻の頭をかつ風に赤くして嚙煙草の唾を吐くし、その黃色い唾が、街路樹の落葉と一しよに四五呎も横ちよに飛んでタキシを呼んでゐる紳士の靴にかゝるし、紳士はそんなことは知らずに新聞をおとして歩き

出すし、浮浪人が新聞を拾ひ上げて求人廣告欄に眼をさらしてゐるし、これらの動き、たゞずまひが、まるで山奥で風に搖れる大森林の立木のやうに、それでゐていかにも紐育街上風物とでも言ひたく、ふと開いた書物の頁みたいに、何がなし非常に重大な意味を藏してゐるらしくさへ思はれる。くどいやうだが、やつぱり秋は秋だ。紐育をしんみり包んで、そのくせ、かうしちやあゐられないと言つたやうな、わけの解らないあわたゞしさが冷やかに立ち罩める。

が、これは地面から上のはなし。その下の世界はまた別だ――。

青苔をかぶつた石地藏、唐金の春日燈籠、金銀の屏風、剝製の孔雀が翼を擴げたやうに幾つとなく壁に掛つてゐる日本着物、雜多の色彩と彫刻の盆、手筥類、指物と椅子卓子、みかど趣味の大飾燈（シャンデリア）・額縁のはまつた浮世繪、佛像、立ち昇る香の煙り――面倒だが、その他白人が見て日本くさいと思ふものならフジヤマでもたわしでも竹の皮草履でも何でもいゝ――が白い埃りを被てうづくまつてゐる――全くそれはうづくまるといふ感じだつた――カワセ・エンド・タカタ東洋美術商會の店を突つ切つて、つき當りの扉をあけて足許の階段を降りると、もうそこは秋も日光も法律も衛生も國境も屆かない支那博奕の公開場だ。いよいよこれから本筋にはいる。まづ一服しよう。

私はいま、じつさいペンを措いて煙草を喫んでゐるんです。皆さんもどうぞ御隨意に――。

2

そこで、と。煙草が濟んだらまた紐育支那街へ歸りませうか。

そこで、と。そこでこの、カワセ・エンド・タカタ商會なる東洋美術店だが、これはチヤアリイ河瀨とフランク高田の兩人が、其筋の了解を得て――そこは、くさいものにはふた主義の行き屆いてゐる亞米利加のことだから――世間體を作るために表向きだけ掛けてゐる案山子看板で、客なんか間違つても來はしないが來ないはうがいゝくらゐ、地下室を、大資金を擁する支那人の株式會社賭博團に貸して、その料金を資本に自分たちもお客になつて張つては取られ、張つては取られしてゐる次第である。同居人に間代を前借りして、その金が直ぐさま逆戻りするんだから、二人とも何時まで經つてもうだつの上りつこがない。しかし、よくしたもので、市と州と中央政府の法律によつて開いてゐる善良な商店の體裁をそなへてゐるんで、博奕場のことは勿論知れてはゐるが、警察のはうでもお眼こぼしといふ

體で滅多にお手入れなんかといふことはない。いや、あるにはある。市長が更つたり選擧があつたりして、一時市の風儀がやかまし／＼論じられるやうになると、警察でも打つちやつては置かれないから一網打盡といふ意氣込みで自働車をつらねて檢擧に來る。が、普段から部内によく藥が利いてゐるので、かういふ場合には、警察自動車の運轉手より先にカワセ・エンド・タカタのはうが其の自動車の目的地を知つてしまふ。誰からともなく電話がかゝつて來て未然に判るのだ。だから、それつと言ふと、非常訓練に慣れてゐるので胴元も客も正々堂々と店を出て行つて、地下室には荷物の空箱を散らかし、扉を締め、さうして警官の一隊が乘りこんで來た時には、チヤアリイ河瀬とほか二三の日本紳士が賣台のむかふとこつちで淑やかな雜談に耽り、フランク高川は博奕仲間の希臘人を東洋美術愛好家に仕立ててそこらぢうを引き廻しながらオハイオ州デイトン市製の九谷燒花瓶を賣りつけようと努力してゐるといふ、はなはだ平和な、市と州と中央政府の法律にかなつた光景しか發見出來ないといふことになる。見事た手ぎわだ。もとよりお役人も心得たものである。どやどやと這入りこんで來て、

『ハロウ、ハロウ、商賣は何うだい、商賣は何うだい。』

『儲かるかい。煙草はないかい。』

『ま、せいぜい靜かにやるさ。』

『こゝ鳥渡うるさいかも知れないぜ。』

『や！　これあ何だ？　なに？　脊中を掻く棒だつて？　成程、先が手みたいに出來てらあ──日本人は器用だな。』

『べらぼうに利口だよ。』

なんかと口々に言ひながら、やたらに店内を見廻したりチヤアリイの肩を叩いたり、フランクから燐寸を借りたりして、がやがや歸つて行つてしまふ。すつかり引上げるのを見すまして、今まで通行人に紛れて街路をうろうろしてた常連が、やがてぞろぞろ集つて來て、地下室を片づけて、さらさらと扣鈕を摑み出して、竹の柚を構へて、

『しいこ・しいこ！』

『りやんこいなあ。』

『ほうさいかい・しんさん？』

『默つてろい馬鹿奴！　さあ來い。』

『ちゆうにか・かいやい・い・なあ──あ。』呪みたいなことを怒鳴り合つて、天下御免の博奕にかゝる。世話はない。

全體がぼうつとぼやけて、天井も床も壁も沈んでゐるから、部屋の大きさはちよつと判らないが、それでもこれだけの人間が鼻を突き合はして、むきだしに感情をぶつけあふんだから、

それでもなほ破裂しないところを見ると、相當廣いには違ひない。支那街の心臓の心臓、ちつとやそつと捜したつて素人衆に解るやうな場所ではないのだ。

廻轉盤もあるにはあるが、何といつても一ばん張人の多いのは四五・四五の卓子である。油布を掛けた四尺平方程の机で、正面の壁に「つう・ちえん・くい」の尊像がかゝつてゐる。つう・ちえん・くいは支那ばくちの神様ださうで、羽の生えた金箔塗りの虎の木彫りだ。こいつが面白いことには亞米利加合衆國の弗の金貨を前足で押さへて、蔗みたいな乾からびた植物性の紐でぶら下つてゐるんだが、それに南京豆油のお燈明がうつつてちらちらするところ、さう言へばこれこそ現實よりはよつぽど夢に近い支那街の象徴であらう。こんな素晴しい物があるのを知らずに、仁丹の看板なんかを逆さに舞臺に吊るしたりするから、折角の支那劇「上海の一夜」があゝ滅茶々々になるんだ。

さて、この世にもあらたかな「つう・ちえん・くい」を脊にして、白髪白髯の仙人みたいな老人がひげ田の醤油樽の上に端然と胡座をかいてゐる。その道で「たんくうん」といふ、すなはち親である。たんくうんの直ぐ右側に物凄い面つきのあめごろ・ちやいな――支那人の亞米利加ごろ。もつともかうした盆蓙の貸元側はすべて支那人だ。客とかかもとかといふつまり張り手には、たまには猶太人や伊太利人や希臘人やブルゲリアやズウマニアの面もまじつてゐるが、多くは日支のあめごろである。以下そのつもりで――が渡邊綱もどきに控へてゐて、金歯だらけの口でにやにや笑ひながら、金指輪だらけの手で出入りの紙幣を一々手に取つてぴんと彈いて音を聞いたり、時に金貨が飛び出すと、指先に載せて爪で叩いたり歯で咬んでみたりしてゐる。この係りを「たい・にんがん」といふ。何かと思ふと、これは贋造に備へる堅壘なのだ。この「たい・にんがん」にかゝつたが最後、大概のがんは即座に正體を暴露しちまふといふから豪氣なものだ。賭場あがりの専門家――通貨偽造とそれに由來する鑑定智識との――が、かうして高いお給金で雇はれてゐるのである。また一方から言へば斯うまでして贋造を防ぐ必要があるほど、それほどこゝでは公然とがん的が動いてゐることも見逃せない事實だ。が、使つたことがばれでもしやうものなら、それこそ大ごと。叩きのめされる位ゐはいゝはうで、殺されたつて文句は言へない――死人は多くの場合口が利けないものである――し仲間の秘密を守ることにかけちやあ、この連中は見事な道徳律を有つてゐる。で、まづ、へんな眞似はしないがいゝといふことになる。

四六時ちうきびきびしてゐるとを生命とする商賣人の取引所

だから、いくら支那街で「惡の華」や「美しい罪のろまんす」の筆觸(タッチ)が要るからと言つても、こゝでは決してお馴染みの阿片のにほひだけはしないんだから、仕方がない。阿片は隱語でパイプと言ふ。コケインのことを雪(スノウ)といふがごとし。もつとも、コケインも固まりになると糖菓子(キャンディ)なんかと洒落てゐるが、ともに「どうぷ」で、これにだけは合衆國政府の眼が神經的に光つてゐるから滅多に手に這入らないし、はいつても途轍もなく高い。といつたところで、在るところへ行けばある。が、こゝにはない。そんなら、あの甘いにほひのする煙は何かといふと、あれあなんですよ、馬來煙草ですよ。

『さあさ、張つたり張つたり！　張つて惡いは父親の頭、張らなきや食へねえ提灯屋！』チヤアリイ河瀨が卓子のそばに立つて岡山訛りで喚き出す。

『いえゝす、いえす！　はらなかくへにいちゆうちんや！　ちゆ、う、ちん、やあ――つ！』たい・にんがん氏が早速引取つて、おしまひのはうは唄にして節をつけてゐる。

四五(しいご)・四五(しいご)がはじまるのだ。

3

博奕のことは、不幸にして私は知らない。で、知らないことは書けない。

しかし、それでは話にならないから、すこし知つたふりをしてみると、四五(しいご)・四五(しいご)といふのは純然たる卓子賭博で、名前の示す通り偶奇の數によつて勝負がつくのだ。襯衣の釦鈕――何もぼたんときまつたことはないが、釦鈕が一番手頃だから、四五(しいご)と言へば襯衣の古ぼたんを使ふことになつてるらしい――をざらざらと卓子の上へあけて置いて、それを尖端の曲つた箸のやうな竹の棒で、

『しい・ご！　しい・ご！　しい・ご！』と呪文のやうに唱へながら、竹の先で釦鈕の山から四つ五つづつ手許のはうへ――知らないなんて言つたくせに大分詳しいことを饒舌つちまつたが、要するに、そんなことで、つまり、その何だ、結局勝敗がついて、お鳥目のやりとりが出來るものと見える。解つたやうでわからないが、こんなこたあ解らないはうがいゝや。

かういふと比較的簡單に聞えるが、何うしてどうして、四五(しいご)には嫌に七面倒くさい規則があつて、金の賭け方、その配分法なんかに到つては、四五年こゝのお粥を啜らなければ到底通にはなれない。なれなくても一向困らないが、お粥をすゝるといふのは斯ういふわけだ。

支那街の博奕場では時分どきになると誰かれの差別なく御飯

を出す。湯氣の立つてゐる鐵の大鍋をあちこちに持出して、それに圓い柄杓と茶碗がついてゐるから、そこらの連中が思ひ思ひに寄つて來て、食べては張り、休んでは食べるのだ。これは大抵薄いおぢやのやうなもので、菜葉の尻尾や豚の骨が浮んで油でぎらぎらしてゐる。汚いやうだが慣れて來ると高價な支那料理よりも美味しいさうだ。そこで、張る金なんか一文だつてないくせに只この地下室にうろうろしてゐる一團がある。お粥にあり付かうといふ心算なんだが、もつと質の惡いやつはお粥の頃になると何處からともなく必ず遣つて來て鱈腹食べて行くのもある。かういふ支那街の蠅のことを「しやつこたい」とか言つてゐるが、その中に多くの日本人がゐるといつたら、情けながるかも知れないが事實だから仕方がない。大部分はブルッタリンの波止場か南部フロリダのジヤタスンヴイル港あたりで丸船(マルウ・シツプ)――なになに丸から來た日本船の總稱俗語――を上陸と同時にどろんを極めた脱走下級海員で、かれらの大親分が支那街の成功者――そのくせ何時も素寒貧の――わがチヤールス河瀨とフランク高田の兩君なのである、とさへ言へば、兩人のお人柄もおほよそ想像がつかうといふものだ。だから四五勝負に通曉するためには、この幾春秋の菜葉粥を食べなければならないといふことになるが、そんなに食べられても、何ら痛痒を感じないで、一晝夜に六ぺんも毎日炊出しをして十年一日の如く少しも動じない半官半民？株式會社――組織――支那博奕團は、さすがに大陸的だと言はざるを得ない。とゝもに、こんなことをしても引合つて往くところを見ると、博奕の胴元といふものは恐ろしく儲かるものとみえる。

ま、そんなことは何うでもいゝとして――。

こゝにもう一つ、馬鹿票(ばかぺい)といふのがある。これは富籤みたやうなもので、幾らか出して札を買ふと、それに六かしい漢字が書いてあつて、翌日時間をきめて地下室で開張するんだが、天地玄黄といつたやうな千字文みたいな紙の幕が貼つてある。それに自分の札の字が出てゐれば、字によつて倍とか三倍とか五倍とか十倍とかになつて金が戻る仕組みださうで、毎日買つて毎日しよげてるやつが、紐育あたりには隨分ある。こんなものに係り合ふものは馬鹿だと言ふんで、さてこそ馬鹿票だらうが、馬鹿は馬鹿だけに時として大きなのを當てることがある。チヤアリイ河瀨とフランク高田は、相前後して、おのおのこの馬鹿票で大金を手に入れたのである。どうも物凄いことになつたものだが、一體「つう・ちえん・くい」がものずきだからいけない。

――ともかく、二人の分を合はせると可成りの額に達したと思ひ

たまへ。その用途——早速何とか費つてしまはなければ氣が済まない。つかはない金なんて持つてゐないも同じことだ、と言ふんで——について、フランクとチヤアリイは毎晩おそくまで談合したが、なかなか意見の一致を見るにいたらなかつたらしい。『母國觀光團にはいつて日本見物をして來ようや。』

といふのはチヤアリイ河瀬の主張だつたが、これにはフランクが猛然として反對した。日本なんか俺たちが背中にしよつて持ち廻つてゐるだけで澤山で、見物したければお鏡を見るがいゝわざわざ海を越えて行くがものはない、それよりこの金でもつと愉快なことをしようといふのがフランク高田の言分であつた。

それで二人は、たうとう家を買つて、當分家庭めいた氣分に浸らうといふことになつたのである。

家庭といつたところで女氣抜きなんだが、それでも金が轉がりこんだので家を持たうといふ氣になつたところに、超國境の放浪兒支那街大親分の中年過ぎたこゝろもちが出てゐて、この話にも一脈のものゝあはれが加はるといふものだ。

土地家屋賣買業者(リアル・エステイト・エイヂエンシイ)の事務所を二人がゝりで歩きまはつた末、いよいよ決めたのがハアラムの上町(アプ・タオン)も郊外に近いスクラントン散歩街(ブウルヴアド)に面したかなり廣い一軒の邸宅(マンション)——全くそれは邸宅と言つてもいい程の——すこし過ぎた構へであつた。

賣買取引には所有主は顏も出さず、しかも何ういふものか名前さへも現れないで、代理人の法律家がむこう側に立つて、仲介の不動産業者を通して契約を終り、登記も済んで、チヤアリイ河瀬とフランク高田が共スクラントン散歩街の家へ引き移つて行つたのは、いさゝかこゝで小說的敍述が許されるならば、大紐育に秋雨が煙つて、白いしぶきが自働車の車輪に光る鉛色の午後だつたかも知れない。

鐵と石と石炭の紐育に、これだけはほんとにあつた怪談——たいがいの話は「これだけはほんと」ではじまるが、そのなかでもこの紐育の怪談だけはほんとにあつたことだと私は强調したい——として、幽靈が出たのはこの家である。

4

ときどき紙屑が風に吹かれて走るやうに自働車が通りきりで、電車は勿論、あまり人影もないだゝつ廣い散歩街の兩側に、前面と左右に大きく芝生をとつた色々の様式の住宅が押し默つて並んでゐる、忘れられたやうな一區域、それがスクラントン・ブウルヴアドだつた。もの淋しいがそれだけまた、教養といゝ育ち(ウエルブレッド)の氣が漂つて、職業的博奕打ちとは言へ、如何さま日本人が好きさうな簡素な景色を作つてゐた。あかしあの並木に雀が群れ

飛んで、敷石の凹凸に夕陽が照つてゐた。白づくめの娘が口笛を吹いて學校歸りの子供を呼んだり、それに答へて子供のかはりに犬がとんで來たりして、なんだか懐しく田舍めいてゐた。

二人の買つた家は、楕圓形の地面の眞ん中に建つて、廻りが廣く、柳が一ぱい植はつてゐた。全部白塗りの瀟洒な外觀で、それが柳のみどりといゝ對照を見せて、低い門に「柳莊（ウイロウ・ダレス）」と讀める、古びた金物の札がはまつてゐた。で、一般にも柳の家といふ名で呼ばれてゐた。

家といふものは人間と同じに、個性と運命をもつてゐる。過去と現在と未來に跨がつて、呼吸し、生活し、或ひは傲然と、あるひはおづおづと、或ひは嬌態の限りをつくして、人間と一しよに怒り、恨み、憎み、喜び、笑つてゐる一つの存在だ。古い家の壁は、人間の感情を吸つて黒光りしてゐるし、床は、眼に見えない死人の足跡で一ぱいである。柳の家は、ヴイクトリアン風の、家族と召使ひが全然べつの生活をするやうに出來た、ふるめかしい建物であつた。

玄關を這入ると廊下で、廊下のむかうに西班牙じみた曲つた階段が見えてゐた。階下は應接間と圖書室と食堂と台所やなんか、それぞれに大きな部屋で、もろつこ皮の大椅子や背の高い隅椅子（コナアチエア）や、蔦色の厚い窓掛けや、ドレスデンの燒物や、桃花心木の卓子や、新英州めいた戸棚（ビユロウ）や、波斯の絨毯や埃及模樣の壁布や、英吉利の田舍路の居酒屋にあるやうな石で組んだ大煖爐などが、先住者のどつしりした好みを示して、割りに親しみやすい、それでゐて冒しがたい氣品を出してゐた。二階は寢室や居間で、三階の屋根裏には玉突場もそのまゝになつてゐた。その他各階ともにおやと思ふやうなところに小さな部屋があつたりして、何年にも開けないらしく、埃り臭いにほひがこもつてゐた。紐育あたりで古家を賣買する時に大方さうであるやうに、チヤアリイとフランクも、家財器物一切附屬で「柳の家」を買ひ取つたのである。どうせながつゞきしつこない金だ、持つてゐるあひだにうんと「相當な家庭」らしい氣分を味はゝうといふのがこの二人の肚だつたに相違ない。で、女中も家政婦も置かずに、二人はこゝで出鱈目きわまる滅茶苦茶な自炊の共同生活を始めた。支那街の東洋美術店は支那賭博園に任せきりにして、二人は柳の家で大いにのらのらして、來る日もくる日も戸外へ出ないで洋襟もかけずに襯衣の襟を内側へ圓く折り込んで置くやうな、完全に「嬶ばた」の役割を演じ出した。一人がちよつと女房を氣取ると、他の一人は直ぐさま反射的に無意識に旦那様になり濟まして、妙な大人（おとな）たちの、眞面目なだけに不景味な氣まぐれの遊戲がはじまつた。異國にあつて數十年、頭髪

に白い物が見えてから、こゝに彼らのいはゆる「家庭」を持ち出したこの二人のめりけん日本人のこゝろのよろこび、私はそこに泪を見る――とまあ、言ふやうなわけで、チヤアリイとフランクはしごく呑氣に暮らしてゐた。

二階の寢室に寢臺を二つ並べて、二人は晩くまでしやべりあつて何時となく眠りにつくのが常だつたが、その寢室の窓ぎわに立つと、庭の一きわ高い柳の頂きが眼の下に迫つて、青い絲が浪のやうに搖れるむかうに、隣家の自働車庫(グラアヂ)――ついでだが、日本でいふガレイヂなる發音は何處から來たのかと私はいつも不思議に思つてゐる。成程ガレイヂと讀めるし、またさう讀むべき綴りかも知れないが、亞米利加あたりでは佛蘭西讀みにしてグラアヂと言つてゐる。ガレイヂなんていふやつは一人もない。どうせ眞似するんなら正確に眞似したら何うだ。第一、車庫とか自働車庫とかでいゝぢやないか。わざわざパ、ママ流が、それこそ有難がつてゐる「あちら」では、てんで通用しない言葉なんかを半可通に振り廻さうとするから、今の日本の新奇な傾向やモダンといふやつは生活樣式から思想まで何處を見ても冷汗ものばかりだ。へん、その屬する地獄へ行つて、さうしてもう歸つて來るな!

あんまりたんかを切つたので續きを忘れてしまつたが、えゝと、何の話だつたつけな? さうさう、柳の家の二階の窓だ!

その二階の窓から隣りのグラアヂが見えて、その上に、日によつていろいろな色あひの空が擴がつて、その空の端に、夜は霧に映つて赤く、晝は事業と活動が立ち昇つて薄暗く、ともかく紐育下町(マンハッタン)の投影がふるへてゐた。フランクもチヤアリイもこの窓に立つて下町の空を眺めるのが大好きだつた。それは、世に勝つたやうな、なんとなく淡い、他愛のない滿悅を二人の背骨へ吹き送るのだつた。早く言へば、先づ支那街の大親分、馬鹿票「つう・ちえん・くい」の申し子たちは、このところ大いにいい氣になつてゐたのである。幽靈は、えてかういふ時に出るものだ。紐育にだつて幽靈はゐる。それを一番よく知つてゐるのがチヤアリイとフランクだといふことに、これから追々なつてゆくんだが、これが話なんだから、この場合私には何うも出來ない。

寢室に、大きな床電燈(フロア・ランプ)が置いてあつた。二つ寢臺がならんでゐる、その右側の、チヤアリイの寢臺のそばに何十年となく立つてゐたものらしいがチヤアリイは床へ這入ると直ぐ煉瓦のやうにぐうぐう眠つてしまふので、電燈の必要なぞは毛頭なかつたから、床の中で雜誌を見るために、フランクが左側の自分の寢臺の枕頭へ移しておいた。そして、雜誌の上によだれを垂らして寢込んでしまつて、朝眼がさめて何氣なく見ると、昨夜こつ

ちへ持つて來た筈の床電燈がちやおんと元のチヤアリイの寢室の向う側に歸つてゐた。その時はまだチヤアリイは口をあけて眠つてゐたが、多分夜中にでも起きて持つて行つたのだらうと思つて、フランクはべつに氣にも留めずにゐた。それでもチヤアリイが起きたら一應訊いてみようと考へたが、それは考へただけで、フランク自身何時の間にか忘れてしまつたのだつた。

このことがあつてから二三日して、その日、一日おきで丁度炊事の番に當つてゐたチヤアリイが、午後の四時頃だつたが、夕飯の仕度半ばに突然二階へ上つて來て、搖り椅子に腰かけて新聞を讀んでゐたフランクにいきなり妙な質問をした。

『おい、君は今階下へ來まいな?』

『いゝや。おれは今日、朝から一度も階段を下りない。どうしたい。何か要かい。へんな顏をしてるぢやないか。』

『不思議だなあ! 晝飯の皿をそのまゝにして流しに出しといたんだが、どうも誰か洗ひかけたあとがあるんだ。お湯を取つた桶なんかあつてね、それに石鹸が溶かしてあるんだ。』

『はゝゝ、君(ユウ)は何うかしてる! 當番が嫌なもんだからそんな勝手な夢を見るんだ。助手(ヘルプ)がゐて都合がいゝぢやないか。もう晩めしにしないと君がき印(カクウ)になる先に俺が餓死にしちまふ。早く(ニイヤ・カイカイア)しろよ!』

急いで臺所へ降りて行つたチヤアリイは、間もなく階段の下へ走つて來て叫んだ。

『おいおいフランク、冗談ぢやない、皿が綺麗に洗つてあるぜ!』

5

チヤアリイが自分で洗つておいて忘れたんだ――といふやうなことで、その日は何うやら二人の間の大笑ひで濟んだ。

が、笑つて濟ませないのは寢室の床電燈の件である。

と云ふのは、フランクは毎晩その床電燈を自分の寢臺の傍へ持つて來るのだが、朝になると、必ず元の位置、チヤアリイの枕もとへ歸つてゐる。で、たうとうフランクが怒り出したものだ。

『チヤアリイ、眠るのに電燈は要るまい。そんなに意地惡く持つて行かなくたつていゝぢやねえか。何でえ、ユウ小海老(シュリンプ)!』

チヤアリイは暫らく眼をぱちくりさせてゐたが、フランクの不平と煩悶を說明されて、自分は嘗つて一度も床電燈になんぞ手を觸れたことはないと、赤くなつて辯明した。それがあまりに眞劍で、うそを言つてゐるとも――また嘘をつかなければならないとも――思はれないので、たうとうフランクが陳謝しなければならないくらゐだつた。

そこでフランクは、其の夜一つの試驗をしてみた。

チヤアリイと相談のうへ、床電燈(フロアー・ランプ)を自分の頭のところへ持つて來て、かんかん灯りのついてゐるやつをしつかり兩手で握りながら、彼は寢臺の中から眼を光らせてゐた。が、そのうち、となりのチヤアリイの鼾に混つて、何處かで打つ十二時の時計が聞こえる頃には、フランクもつひうとうととして、床電燈に手をかけたまゝぐつすり寢込んでしまつたものと見える。

ふと眼が覺めると、部屋は眞暗で、窓の幕を洩れる月光の縞が床の上に細長く倒れてゐた。氣がつくと、自分の兩手が寢臺の横にたれ下つてゐる。床電燈！と咄嗟に思ひ出したので、闇黑の中で枕頭を手探りしてみた。ない！床電燈がないのだ！フランクは强盜に入られたやうに跳ね起きてチヤアリイを搖すぶつた。二人で室の中央の吊電燈を捻つてみると、床電燈は自分の場所へ歸つて安心したやうにチヤアリイのベッドの傍に立つてゐた

この家の何處かに、ひそかに誰か人が住んでゐるのだ。かういふ當然の推論に達した二人は、翌る朝早く床を離れて、大仕掛に家宅捜索をした。部屋といふ部屋、地下室から天井裏まで、ほとんど午前一ぱいつぶして丹念に見て廻つたが、人影はおろか、何者も住んでゐるやうな形跡はない。家ぢう埃りだらけで亂雜を極めてゐることを、今さらのやうに發見したに過ぎなかつた。

『どうだ、女中でも雇はうか。かう汚なくちやあ住ようがない。』

『全くだ。これぢやああんまり非道い。ちやいな・ぼういを一人呼んで來ようぢやねえか。』二人はこんなことを話し合つた。廣い邸がすくなからず不氣味になり出したのだ。

が、女中もちやいなも入れる必要はなかつた。まるで誰かゞ二人のこの會話を立聞きしてゐて掃除でも始めたやうに、家が眼について清潔に、だんだん整頓され出したのである。

まづ圖書室で煙草をのんで、ちよつと廊下へ出て歸つて見ると、灰だらけの煙草盆が拭き清められて光つてゐた。

チヤアリイが朝起きると、いつも玄關の石段の上に配達されてゐる新聞が、寢臺のそばの小卓に載つてゐた。

早朝、食堂の爐へ火を入れようとして降りて行つたフランクは、爐から白つぽい石炭のけむりがぷすぷすとゆれ上つてゐるのを發見しなければならなかつた。

脫ぎ捨てた着物は、何時の間にかきちんと衣裳棚にかゝつてゐた。

家具なんか其のまゝにして置けばよかつた。誰かゞぴかぴか光澤を出して呉れるからだ。ことに、高價な卓子や敷物にはいつも誰かの細心の注意が行き屆いてゐた。

誰かゐる――居るには相違ないが、その恐怖がむしろ圖々しい好意に變り、結局二人がそれをいゝことにして、氣樂から、

この頃ではすこし五月蠅くさへなりかけた時、今まで色のない空氣のやうに只感じられるだけ——はつきりとだが——だつた「一存在」は、ちようど氣體が蒸發して液體になり、液體が凝つて固體の形を採るやうに、ちらちらとその片鱗を見せるやうになつた。例へば隠れ蓑を着て歩いてゐる人が何うかした拍子に着物の裾とか手の先などを見せることがあるやうに、または忍術を使ふ仙人が段々通力を失つて斷片的に空間に現れてくるかのやうに、チヤアリイもフランクも時々へんてこれんな小物體が勝手な場所に動いてゐるのを見るやうになつた。

右の手首だけが空中に斜めに輪を畫いて、煖棚(マントル・ピイス)の上の枯れた活花を火へくべたり、洋袴(スクアト)——さては女だな——のはしが魚のやうにひらひらしながら廊下の底の空氣を縫つてゐたり、眼鏡が忙しさうに台所を右往左往したり、さうかと思ふと、ひしやげた上靴(スリツパ)が一足鹿爪らしく階段を下りて來たり、箒がひとりでに器用に塵埃を集めたり、そこへちり取りがやつてきたり——まるで、初期の活動寫眞の化物屋敷そつくりな光景に、二人は日々直面しなければならなかつた。それは實に幻妙をきわめた、奇術師の惡夢のやうな世界で、小氣味よく科學を蹂躙してゐるところ、まつたく痛快な見物であつた。

二人の職業的博奕打ちがすつかり恐縮してゐる眼前へ、この「存在」はたうとう現實に姿をあらはしたのである。

『おい、誰だ其處にゐるのは。』

フランクがかう怒鳴つたので、チヤアリイが居間のそとの廊下を覗いた時には、もう影も形もなかつたが、しかし、たつた今戸口の前を人が通つたと主張して、チヤアリイはきかなかつた。それを二人が同時に見極めたのは、其の晩、寢室へ引き取るべく、二人が並んで廣い階段を昇つてゐるときだつた。階段の眞ん中に一人のお婆さんが立つてゐたが、二人と顔が合ふと、非常に遠慮深く、悪いところでも見られたやうに處女みたいに赭くなつて首垂れて、壁へ寄つて背中を貼りつけて、二人を通す路を作つた。

『失禮ですが何誰ですか、あなたは。』

叮嚀に訊いてみた。しかし、お婆さんはまるで壁の中へ消えこむやうにますます身を縮めるばかりで、何とも答へなかつた。

かうなつてみると、いくら神經の太い支那街の親分でも、流石にこわくなつたとみえて、其の、毛髪の眞白な、若い頃はさぞ美人だつたらうと思はれるほど顔色の綺麗な、ぱてんと革の上靴(スリツパ)をはいて胸に小さな金の十字架をかけたお婆さんを見た晩から、買つた仲介人(エジエント)を通して柳の家を捨値で賣つて、二人はすこし離れたところに又べつの仲介業者の周旋で柳の家よりもずつと

狭い家を買つて、日ならず引き移つたのだつた。が、運命は影みたいなものだ。どこへ行つたつて付いてまはる――昔は付いて廻る物は米の飯ときまつてゐたが、當時では、こつちから付いて廻らうとしても烏渡油斷すると離れやうとするのが米の飯だ。

そんなことはともかく――。

新しい家へ移つた翌日、一しよに起きたフランクとチャアリイは、毛髪の眞白な、若い頃はさぞ美人だつたらうと思はれる程顔いろのきれいな、ぱてんと革の上靴(スリッパ)をはいて胸に小さな金の十字架を下げた小柄なお婆さんが、せつせと瓦斯すとうぶを拭いてゐるのを見つけたのである。これはじつに、綺麗ずきな、いつも掃除してゐる幽靈――もし幽靈とすれば――であつたと言はなければなるまい。

ことごとく怖氣をふるつたチャアリイとフランクは、早速二軒の仲介所へ出かけて行つて、それから二三日といふもの八方に手分けして、たうとう元の柳の家とこのあたらしい家の以前の所有者を突きとめてみると、驚いたことには、それが兩方ともジュリア・デュ・デボア夫人といふ一人の未亡人であることが判明した。下町の張子李氏の區域に近いアパアトメントにゐるといふので、二人は即座にタキシを飛ばした。

その番號の部屋へ這入つて行くと、死に望む老病の床に、毛髪の眞白な、若い頃はさぞ美人だつたらうと思はれるほどの顔色のきれいな、ぱてんと革の上靴をはいて胸に小さな金の十字架をさげたジュリア・デュ・デボア夫人が、困つたやうに赫くなつて横たはつてゐた。

だんだん訊いてみるとかうである。

デュ・デボア夫人は富豪の未亡人だつた。それが、天地のあひだに一人ぼつちになつたので、最後に死んだ夫と自分が一年の半期をかはるがはるに住みなれてゐた二軒の家――柳の家とあとのもう一けん――をさへ手放したものゝ、ながい間自分の一部のやうに思つて來た家や家具に對しては、いくら賣り渡した以上他人のものと理性では考へたところで、何うしても斷ち切ることの出來ない愛着が殘つてゐた。いや愛着といふよりも、それは一つの迷執(オブセッション)に近かつたらう。良人とゝもに若い日を過ごしたあの家に、あの長椅子に、誰が住んでゐるだらう、どんな戀人同志がたはむれてゐることだらう――あの花瓶に色のうつらない花を差してゐやしないかしら?あの床電燈はやつぱり良人の寢臺のそばにあるかしら?もし動かしてあつたら、何うしても元のところへ返さなければならない。若し卓子が汚れてゐるなら、椅子の位置が變つてゐるなら、ぜひ掃除して正しい場所へ置かなければならない。敷物に焼けこげでも出來たら何

うしやう。朝になつたら誰が瓦斯をつけるだらうか——？
などとかう考へて來ると、夜中でも何でも、お婆さんはたまらなくなつてふらふらと立ち上つて、都會の夜の三千三百三十三の影の一つのやうに、または法の手に追はれる犯罪人のやうに、闇黑を選んで夢中に走つて、はじめは柳の家へ、つぎにあとの家へ、それぞれにあの不思議な出現をして、何にもかも忘れて、掃除と、家のなかの整頓に沒頭してゐたのだといふ。

『はじめは隱れてゐましたが、だんだん御好意に甘へて大膽になつて、朝もこゝへ歸らずに一日働かせて頂いてをりましたが、お移りになつた時はがつかりも致しましたし、柳の家がわたくしの手にはいりますので何となく嬉しくもございました。しかし、お引越しになつた先がやはりわたしの家だと知つたとき、わたしも何うしてもご一しよに參らないわけには往かなかつたのでございます——どうぞ、どうぞ御めん下さいまし。』

お婆さんは涙の眼をこすつてゐた。

つぎの日、フランクとチヤアリイが相談の上、あらためてお婆さんに來て貰ふつもりで迎へに行つた時には、デュ・デボア夫人は涙のあとを白くさせて死んでゐた。

が、アパアトメントの女中やお婆さんのかゝりつけの醫者の言ふところによると、お婆さんは二日前に死んでゐて——臨終には醫者も女中も立ちあつたさうだ自然昨日來たチヤアリイとフランクに口なぞ利くわけはないといふのである。それにしては、死んだ時なかつた涙のあとも變だし——死人は泣かないのが常だ——第一、固く鍵をかけて置いた遺骸の部屋があいてゐて、二人の職業的博奕打ちが何らの困難もなく這入り得たといふのからして、大いにおかしい。

しかし、これは、私はかう思ふのである。

デュ・デボア夫人の告白は飽くまでも事實であらう。「掃除する幽靈」なんてこの夫人以外にさうあるべき性質のものではないから。

だから、あれはやつぱり幽靈ではなくて、實在の夫人が出かけて行つて、いろいろ世話をやいたのだらうが、それにしちやあちと何うも呑み込めないやうな氣がしないでもない。

欠伸をする。すると、氣が遠くなつて、耳があんとして、自我（エゴウ）が——たましひが、そうつと拔けて行くやうな氣もちがすることがある。その時、咽喉から出た自我が、自我の形で何處かの大通りをすたこら歩いてゐないと誰が言へる？そして、その狀態が長くつゞくことはないと、はたして誰が言ひ得る？

デュ・デボア夫人のやうに年をとると、人間はよく欠伸をするものだ。

——をはり——

預金帳

二つの悲喜劇

上司小劍

私は金融に關する知識に乏しいから、銀行のことなぞに就いても、多く知るところがない。日銀が金利引下げを行つた結果がどうなるのやら、手形割引日步がいくらであるのやら、念頭にかけたこともない。どうも自分の專門以外に就いては、常識だも備へてゐないといふのは、甚だよろしくないことで、上は天文より下は地の底のとに至るまで、一と通りの常識は備へてゐたいものである。自分が乘つて旅行してゐる列車の番號さへ知らずにゐるといふやうな滑稽は演じたくないものだが、偖今度本誌から、銀行破綻のことに就いて何か書けとたのまれてみると、ぼんやり乘つた列車の番號を不意に問ひかけられて、面くらふどころの騷ぎぢやない。列車の番號なら下りが奇數で、上りが偶數だぐらゐの概略なことは心得てゐるし、時間表さへ開けば、すぐわかるのだが、どうも銀行のことゝなると、さうは簡單に行かない。

貨幣なぞを作るから、銀行といふものゝ必要が起つて來るのだ。貨幣をもつて、物々交換に代へたとなると、其の流通に平均がとれないでは困る。流通の公平を期するために設けられたのが、銀行であらうなぞと、考へながら、試みに座右の辭書をとつて、ぎんかうの項を引いてみると、『金融の機關をなす一種の法人、信用を利用して、自家の資本、及び公衆の預金により資本の需要と供給との媒介をなすもの、……』といふやうなことが書いてある。バンクを銀行と譯したのは誰れだつたか、聞いたことがあつたけれど忘れた。今の日本は金貨本位だから、銀行でなくて金行といふべきだとか、理窟を言つてゐた人もあつ

たがそんなことはどうでもよい。とにかく貨幣が一方に堆積して、死藏されることを防ぐために出來たものだが、資本主義の勃興と相待つて、手形の割引とか、荷爲替の取組みとかいろいろの仕事が出來たものであらうと、素人流に考へる。

先頃の銀行騷ぎは、大藏省がまづいことをやつたからだといふ説が最も多く、またそれが當つてゐるやうだ。しかし銀行といふものが、今日のやうな狀態におかれてゐる以上、取付にさへ遭へば、どんな銀行だつて潰れるにきまつてゐる。それは日本銀行からドン／＼紙幣を廻して、取附けに遭つた銀行の金庫に運び込み、紙屑のやうなものでも何んでも紙幣の形において預金者に拂ひ戻し、後でゆつくり内部で勘定するといふことにすれば、一時は救はれるであらう。後で勘定の出來るほどの力がある銀行ならば、かうやつて救はれるのであらうが、其の力のないものは『帳簿整理のため』といふ變な理由の下に、店を締めて、預金者を泣かせるのであらう。

昔し、酒匂常明とかいふ學者上りの實業家が、自己の關係事業の破綻に責任を感じて自殺した時、其の自殺の記事の出てゐる新聞紙の一隅へ、麗々しく『酒匂常明儀永々病氣のところ養生相叶はず何月何日死亡仕り候間……』とか何んとかといふ廣告の出てゐたのを見たことがある。其の以前にも、其の以後にも、さういふ嘘つぱちの實例はいくらもあるが、銀行の破綻に際し、『帳簿整理のため休業……』も、これに似た滑稽で、帳簿なぞを整理しなくとも金さへあればよいのだ。しかるに、正直な、氣の毒な預金者中には、ほんとうに帳簿の整理さへ出來れば開業するものと思つて、一週間待ち、二週間待ちして、旅した子の歸るのを待つやうな氣もちでゐる人もある。しかし、帳簿の整理はなか／＼出來ない。一週間が二週間となり、二週間が三週間となり、今一週間今一週間と、小刻みに延ばして行く。電車や汽車がおくれると言つたつて休業銀行の帳簿整理ほどおくれはしない。ほんたうは帳簿の整理なんかやつてゐないところもあるのだから、かなはない。

今時そんな馬鹿な預金者があるものか、帳簿整理なぞといふおきまりの挨拶をほんたうにするものがあるか、と嗤ふ人がありさうだが、やゝ金融界の事情に通じて、預金だつて、尠くとも二萬三萬とある人には、そんな馬鹿なことはありもしなからうが、高々五十圓、百圓を特別當座に入れて、虎の子のやうに大事にしてゐる人たちの中には、銀行の窓口へ入れた金は、神さまにお預けしたほど大丈夫なものと思つてゐるのだ。神さまにお預けしたのでは、百圓が百年經つてもやはり百圓だが、銀行の有りがたさは、雪だるまのやうに、預けた金がだん／＼大

きくなつて、百年はおろか、十年經つても、何倍になると思つて樂んでゐるのだ。其の金が、谷川の水や、雨滴の集つて、大河となり、遂には海へ注いで、行方がわからなくなつたやうなことにならうとは、夢にも思はない。不確實きはまる事業の投資に用ゐられて、大海へ石塊を放り込んだやうに消えてゐることも、もとより御存じない。

　それに就いてかういふ話がある。大阪のある家の後家さんが、食ふものも食はずに溜めた臍くりの五十圓とかを、或る第二流銀行大阪支店の特別當座に入れておいたが、後に入用があつて、其のうち十圓か二十圓かを引き出した時、『紙幣が違ひますがな』と言つて、銀行の窓口でぐず／＼言ひ出した。銀行の預金係も初めは何んの意味かわからないで、なだめるのに困つたが、よく聞いてみると、後家さんは預ける時に、紙幣をばスッカリ新しい、手の切れるやうなのに兩換へして、一々しるしをつけた上、銀行の窓口に入れたのだつた。其のしるしといふのは、紙幣にある清麿か鎌足か、何かそんな人物の像の兩眼へ、絹針で細く穴をあけ、なほ、こつちの横の方にある神社の社頭の光景の中に立つてゐる神主の頭へも、絹針をさして、しるしをつけたのであつた。ところが今度入用があつて其の金を引き出してみると、前に預けたのとは似ても似つかぬ古びたものになつて、自分のつけておいたしるしは、もちろんない。『あの紙幣を使ひなはつたか。』といふやうなことで、ひどく怒つたのに、銀行員は面くらつたが、いろ／＼に說きなだめられて、預けた時のやうな新らしい紙幣にしてもらつたので、後家さんは漸く納得して歸つたが、『もう銀行はこり／＼だす、使ひ込まれるさかい』とこぼして、殘りの金もやがて引き出し、鏡台の鏡の裏へしまつておくことにした。さうして知つてゐる人から『そんな阿呆なことはない』と言はれても、首を横に振つて、『もう／＼決して銀行へは金を預けない』ときめてゐた。ところが今度の騷ぎで、其の銀行の本店が東京で破綻し、大阪支店の方も駄目になつたので、預金者は皆蒼くなつたが、其の後家さんは大得意で、『それ見なはれ、わてえ、銀行ちうもん、初めからあかんと思ふた。なんしよ、人から預つた紙幣を、だまつて使やはるんやさかい』と言つてゐるさうな。

　無知のくりごととして笑つてはいけない。東京にも今度の騷ぎの時、私の近所に住むある老婦は、自分の帆まちを預けてゐる某銀行の郊外の支店が危いと聞き、すぐ引き出したのはよかつたが、それをば東京の中心地にある其の銀行の本店へ持つて行つて預けたものだ。さうして遂ひに『帳簿整理のため二週間休業仕候』の厄に遭つた。支店は危いが、本店なら大丈夫と思

つたところが可愛いではないか。

かういふ人たちの零細な、しかも其の人たちにとつては、生命と同様に大切な金を預つて、それをば沒收してしまふやうな罪を作るのは、實に怪しからんと思ふ。

よろしく、銀行法に徹底的の大改正を加へて、安全確實なもののばかりにしてもらひたい。それでもまだ、第一流の大銀行がばたばた破綻するやうな時代が來るとするならば、それはまた別問題である。

制度に對する憤り

小川未明

銀行に恐慌が來るであらうといふことは、大戰後ぢきに豫想されたことでした。しかし、それは、いつであるか分らなかつた。歐洲では、銀行整理がされたといふことを聞いたけれど、日本には、それがなかつた。いまから考へて見るのに、内部でいろいろびぼうしたばかりでなく、當局もそれを内密に處理しようとしたからであります。

地方の小銀行が、合同をしだしたのは、二三年前からでした。しかし、東京や、横濱には、そんな様子は見えなかつた。見えなかつたのは、外部に丈けであつて、内部は、火の車であつたにちがひない。こんど休業した銀行などは、その筋の人の觀測には、すでに四五年前に、今日の運命に到達してゐたものばかりだつたといふ。たとへば、ある銀行の基礎的の不動産が三重にも抵當にはいつてゐるといふやうな噂も、多くの預金者は知らなかつたでせう。

兎に角、一般には、辨金を政府がほのめかしたりするので、日本の資本主義は、安定したものと思はれた。震災手形といふやうな、問題が今議會を騷がし、それが、臺銀を救ふことによつて、政商を助けることが、非立憲的な行爲であり、特權階級の横暴であるといふやうな、輿論が一方に起つて、なぜその金をもつて復興に惱んでゐる多くの企業家を救はないのかといふものがあつても、まだみんなは、銀行の倒潰が接近しつゝあつたことを知らなかつたのです。

人々は、片岡藏相の不用意な一言から、はしなくも内情を暴露し、終に收拾すべからざるに至つたとして、一人藏相を責めるものもあるけれど、日銀が六億の金を其他の銀行を救はんがために、僅かに三四日間に貸出した一事を見ても今日、いかに

金融界が危機に立つてゐたかゞ想像できると同時に、たとへ、今日、内幕を秘し得たとするも、いつか、近い將來に、今日あつたことが分るのであります。なぜなら國際的に於ても、遙かに、我國に有利なる何物もなく、それどころか、支那の現狀からしては、この上生產され、輸出されると信ずる材料も見出されないからでした。

故に、銀行破綻は、いはゞ既定の事實であつたのかも知れない。そして、その筋の人々には、何の銀行は、どうした事情に於てあるといふことが分つてゐたのである。だから警戒する者は、してゐたのである。恐慌が、あまり大資本家に影響するところ少なく、企業家、商人、中流階級及び、それ以下に影響し關係するところの多いのはそれがためです。

瞞ますところに、資本主義のからくりは存する。とかく銀行によつて、五厘、一分、一分五厘といふ風に、利子の上に差がある。同じ社會に於て、何うして同一貨幣の通用に、かうした差が生ずるか。しかも、銀行によつて、異なることに、人々は、注意しなければならなかつた。郵便貯金は、確實であるが、利子が少ないといふことは誰でも知つてゐます。それがために、少ない利子の機關に預けずに、利子の多い機關にあづけるのは、人情ではあるが、いはゞ誘惑されたのである。」

もう一つは、地の利と銀行の繁昌である。大抵の人は、資本金何千萬とかいへば、先づ無條件に、その銀行は、金のあるものと考へる。そして、自分達のそれに比較すれば、極めて零細ともいつていゝ程の金を預けることに屈托し、不安を感ずるものでない。(今日後、苦い經驗を甞めたものは、さうでなからうが)たゞ、その場處が出入りに便利であり、自分の家の近くであり、また電車に都合がいゝとかいふ理由で、その銀行に預けた者が多いと言つていゝのです。

銀行が、地勢を撰び、其處に宏壯な建物を設定するに理由のないことはなかつた。こんど、それ等の中のあるものが、堅く扉を閉して、休業の貼札をしてゐるのを見ると、何となく陰慘に近い、變な氣持を受けるのでありました。

これについては、いろ〳〵の挿話があることゝ察せられる。小資商人や、企業家が、明日の取引にも困ることは勿論であるが、さうした人達は、信用も亦資本の一種とするかぎり、他に、金の融通されないこともない。たゞ獨り、長い間に、少々づゝの貯蓄によつて、老後に備へんとしたり、子供達の教育に費せんために貯へたものが、一朝にしてその金が水泡に歸するといふことは忍びない氣がする。單に、氣の毒とか、悲慘と言ふだけでは過されないのであります

これによつて、支配階級の不條理と冷酷さが現はれるやうに思はれた。現在の金融界を監視する任にありながら、自然淘汰と競爭に委して置くところに、資本主義の缺陷があり、民衆に對する不忠實さが現はれなければならぬ。

社會が、個人の生活を保證せざるかぎり、個人は、いかにして自衛すべきか。今日にあつては、これを解決するものは、何といつても、金より他にない。金より他にないためには、かうして貯蓄をして、それに頼るのは、現存制度を正直に信ずるが故である。これに對して、政府が、監督し、常に注意と警戒を怠つてならないことは、むしろ必然であつて、若し、それが不可能なる場合には、即ち、資本主義の缺陷を實證したことになるのである。經濟界の實況に暗い、また銀行經營者の內的生活を審かにすることのできない、一般人や、預金者に、監視を委すことの不當であり、無理なことであるは言ふまでもありません。

銀行不安と聞き、その銀行へ取附の際に、卒倒した女があつたことや、また、鞄の中から札束を摑み上げて、「取つたぞ！」「取つたぞ！」と、往來を狂氣の如く呼び步いた男があると聞いた時、その人人の淺間しさを思ふよりも、かゝる組織に對して、私は、憤りを感ぜざるを得なかつた。

不安なしに、生きられない世の中であることも、新しく、すべての人は感じたでせう。小さい搾取をする者は、より大きい搾取をする者のために呑まれて行く。たま〳〵その禍を免れたものは偶然である。しかし、いま偶然にしてもその禍を免れた者も、いつかは、二たびかうした大恐慌に遭はないとかぎらない。その時を誰が警戒するとはきまつてゐないのだ。すべてが、自然淘汰であり、自由競爭であり、そして、今日の資本主義は、多くの無辜の犧牲者を見殺しにしても、末期の道を辿りつゝあるのです。

預金帖が、仲買の手によつて、何割かで資本家の手に回收されたり、また銀行整理の名の下に、預金者が株主に早替りをして、畢竟、空虛な株券を持たされるやうなことが、すでにあつたといふことを聞き、またあらんとしてゐることを聞いてはこんどは、預金者の無自覺を責めなければならぬ。しかし、この際、焦り氣味の預金者に向つて、預金帳を讓渡せずに、結束して會社に當れといつたとて、行はれるものでない。所詮は、資本主義制度下の一悲劇として、終るに過ぎなからうと思はれるのであります。

——三月三十日——

父の尊嚴

岡本一平

銀行の無味乾燥な應接間へ呼び込まれてあたゝかい紅茶を一椀振舞はれた事がある。そうしたら行員から當座預金を定期預金に振換へる「お德」な理由をじゆん〱と說かれた。その話は大概で切り上げて僕は訊ねた。

『銀行にも紅茶道具の用意がしてあるのですか』

『いゝえ他から取るのです』

『ぢや、こういふ話の時だけあなた方も銀行で紅茶が飲めるんですね』

『左樣、交際(つきあひ)はさして頂きます』

『紅茶の費用はどういふところから出るのです』

『もし定期が成立すれば定期預金勸誘費の中から立派に支辨出來ます。もし不成立だつたら炭やインキのやうな消もう品の費用に組込んで株主に報告します』

こはぜ形の窓口から紙幣を官女の檜扇のやうに操り擴げてゐる手元だけで馴染のある若い現金支拂係に訊ねてみる。

『そんなに大金を扱ひつけて間違ふ事は無いかネ』

すると紙幣をしめつた淺草海苔のやうに無雜作に投げ出して彼は窓から青白い希臘鼻を突き出す。

『大金と思つたら乾度間違ひますよ。木の葉のやうに思ふやうになれば決して間違ひません』

『大金に思はないやうになるには、慣れかネ』

『一つは方法があるんです』

それから彼は左右を見廻して小聲でいつた。

『度胸が無くなつてね。つひ大金と思つてならないやうな日には先づ紙幣束を泥靴でギユツと踏んで置くんです。すると紙幣(さつ)奴(め)、錐(きり)で打たれた蛇のやうに性をすつかり失つて木の葉になります』

『自分の俸給を貰つた時、金扱ひの癖がついて居るからぱつぱと使ひ捨てないかネ』

『それが危ないから自分の金は、貰つた時、何遍も頂いて置くんです。すると價値(ねうち)が出て來ます』

同じ窓口から時々人のよい然しとても擔保の價格を內輪に假

踏みさうな北越訛りの支配人が僕の姿を見かけて頭を出す。僕が新聞に政治の論を受持つてるのを知つてるものだから

『いかゞです近頃政治の方は』

いつも同じ問である。

『政治は當分若槻君に任してあるよ』

僕の答も同じである。

彼はこの皮肉をどう解するものか

『ハア、やつぱり若槻君は偉いですかな。なにしろ出身が財政家ですから危氣がムいませんな』

彼の若槻君に對する見解は、これもいつも同じである。

移轉をするので金を引出しに行くとみんな引出さずせめて取引の繼續出來るだけの規定の元金だけは殘して置いて與れと懇願されてそれが貯蓄銀行だものだから二三圓かなにがし殘高を殘してある預金帳がある。未來永劫取りに行く氣は無し、といつて捨てる事もならず、隣の耕と一しよに無益な保存の責任を果すべき抽出しの底に平伏して居る。

貯金といふ字はいやな字だ。意識して貯め込むといふみゝつちい感じを抱かせる。預金といふ方がいゝ。さし當り必要な金でも一層切實な必要な爲めに取つて置くのが即ち預金の目的だ。貯金は亡國で預金は立國だ。

郵便貯金簿に差引殘高を記入しないのは不便だ。遞信省は改良を要す。

女が銀行の窓口で預金帳を持つてるのはどの種類の女でも美でない。亭男の口をつめても溜込む奴だらうと一律に感じられる。美では無いが安心な氣のするのは老婆が預金帳を持つてるところだ。見る人は彼女よりも彼女の悴夫婦の爲めに安心する。

父の死んだ時讓られた父の預金帳の中を見て父の尊嚴を損ずるの感がした男、もし自分が子供に何か讓れるものとしたら預金帳以外の他の方法で讓り度いと思つて居た。そうして死ぬ時父が損じた尊嚴を更に一倍損じてしまつた預金帳を子供に讓つた。

ある大銀行の頭取が自宅で强盗に遭つて三百圓の金を請求され今手許に現金が無いから明日銀行で手渡しすると約束してそ

の約束を履行した記事が新聞に出て居た。これによつて大銀行の頭取でも三百圓の現金を家に置かない事があるを知つた。單に知つた迄である。以上に哲學的の感想を附けてこの事實を珍奇なものにし度くは無い。

ある流行る神社の賽錢を預る銀行がある。それを毎日勘定する行員はいつてる。

『世の中の景氣不景氣は一番よくお賽錢に現れますよ。彌宜さんの擔いで來る袋を開けて見て景氣の惡い時は光つたものが一つも混つて居ません』

それから

『序に春の消息も判ります。錢の中に花片が混つて居ますから』

その銀行が預金宣傳のビラを拵へた。文句に曰く

『本行は神さまさへご信用あつて預金して下さる絶對確實なる銀行であります』

そしてその銀行は神さまと取引する證據を示す爲めに秋祭りに大きく銀行の貼紙した備餅(そなへ)を神前に供へる。

兵營の一人の兵隊さんが自分の班の全部の預金帳を委任されて銀行へ金を預けに來る。預金係が一と纏めに差出された預金帳の上の方から順々に取つて金高を記入して行こうとすると兵隊さんは周章(あわて)ていつた。

『一寸待つて下さい。記けるのは上等兵殿の帳面を一番先にして下さい。あとはみな同年兵ですからどれが先になつても關ひません』

工女と工女と貯金帳を出し合つて話をしてる。一人の工女が溜息をついていふには

『いつでも金高があんたに敵はない。どうしてこう溜らないのだらう』

『銀行が性に合はないのかも知れなくつてよ』

『ちや、銀行を代へて見よう』

折角溜めて終りへ行つて引出して使つてしまつた預金帳を夫、妻に差出して見せる。

『この邊のところで氣を引締めればよかつた』

『一體預金帳は頁が多過ぎますわ』

特別當座預金帳

近松秋江

現實は、人を着實にする。或は、人を爺むさくする。

私など、昔から、文士の仲間では、最も金に縁の少ない人間と見られてゐた。實際、縱から見ても横から見ても、私は何となく貧相をしてゐる人間である。

それで、あんまり私が、いつまでも貧窮な境地から脚を拔くとが出來ぬので、私の郷里の、去年亡くなつた老母など、不幸な倅の現在と將來とを案じて、近いところの卜者に見てもらつたところ、この人はどうも金に縁のない人ですといつたさうである。いつかも新潮社の樓上應接室で、早稻田の英文科出身の何君とかいつた面白い卜者先生に偶然出會し、一寸手の筋を見てもらつたところ、私は長命の手筋をしてゐるさうであるが、金運は生涯向いて來ないとじろ〳〵顏を見守りながら云つた。

すると、よく落語家のいふ、この貧乏神は私にとり付いて二世も三世も離れやせぬといふ奴である。

それを思ふと、私には到底金運といふものはないのだから、運命に惠まれざるところを、せめて、自力に依つて補つて行くのほかはないのだが、その自力に鞭つべき自身が中年はおろか、老境に入るまで、爲方なしの獨身者風來坊で居たゝめに、貯蓄心などといふ爺兒むさい量見は露ほども持つてゐなかつた。尤もやつとこさ、下宿屋の飯に有附けるが關の山で、その上に貯蓄などする餘裕など有りやうはなかつた。年が年中始終金に窮迫しながら生きて來た。卜者の豫言に依ると、今後もそのとほりなのであるから、樂しみのない次第さ。

そんな次第で私は、銀行だの郵便局などの貯金帳を大事にして、少しづゝ金がふえて行くのを樂むといふやうなことは、ついぞ味はつたことがなかつた。今でもそのとほりである。

私には銀行の預金帳に金がふえて行くのを樂むといふやうな樂みよりも、もつと人間的な樂み――尤も人各々見るところがあつて、銀行預金のふえるのを何よりも一番樂む人もある筈だが、――を樂みたいと思つて、從來は、ありもせぬ金力を傾倒して、それ一方に注ぎ込んだりしたこともあつたものだ。單に戀愛ばかりに止まらず、私の趣味、人生觀からいへば、銀行の預金帳を後生大事にする樂みよりも、もつと潑剌とした人間的慰樂は他に幾らもあるのだが、私も老境に入つて、

思ひがけもない子供がつづけさまに二人も出來たりしたので、さう／＼自分一己の欲望のみに耽けてもゐられない。

私自身としては、前にいふとほりに預金帳を後生大事にするといふやうな殊勝な心掛けには、今以つて、なれないのであるが、幼い子供のことを思ふと、いろ／＼責任もあり、又配慮もしなければならぬ。これでも、自分が、せめて三十代くらゐで儲けた子であるならば、さまで子供の生ひ立ちを氣にするほどのこともないが、私などのやうに、もう四十代、しかも四十代は愚かなこと、五十にも直ぐといふやうになつて出來た子供のことで、それやこれやを種々考へてみると、實に日暮れて道遠しの感が深い。

で、それ等の小さい女兒どもの將來の爲めに、私も多少の用意はして置かねばならないとおもつてゐるが、それは、決して、自分の樂しみの爲に、預金帳を後生大事に藏つておくのとは違つてゐる。從つて、ちつとも樂しくない。

そしてその用意といふのは、貯金帳ではなくして、生命保險である。（そのことは、いつか婦人公論に書いた。）生命保險契約も無論一種の貯金法であるのだが、私のは同じ生命保險でも終身保險だから、長命をして生前に滿期の保險金を受取るのとは種類を異にしてゐる。即ち、貯蓄を樂むといふ譯にはまゐらないのである。私がいかに、生前金を愛さないで、しかも死後幼兒や妻女の爲に、自身の生命を質に置いて、保險料を積立てゝ置くか、いかに自身一己を犧牲にして、わが亡き後までも、責任の負ふべきところまでは、それを負ふといふ用意はして居るのである。

が、前、度々申すとほり、貯金を樂むといふ氣樂な境涯には、まだ、どうしてもなれない。

しかしながら、本當ならば、私にも、貯金のふえるのを樂みたい心は十分にあるのだが、まだ／＼そこまでの餘裕がない。よく一と頃、ほんの少許の預金でも、今後は必ず一定して實行して、どんなことがあつても、それに手を着けまいとおもつてゐるが、最初からもう、決心を裏切つた、引出しの自由の利く特別當座預金の口にしたりして置くものだから、いつの間にか、すつかり引出して無くなつてしまつてゐる。それを以て見ても私にはとても、堅忍不拔、たとひ舌を噛んでも貯金を繼續して、一厘一毫の微細たりとも、一旦預入した以上は、金輪際これを取り戻さないといふ意思の強いところは樂にしたくもない人間の如くに考へられるのであるが、事實生活に追窮せられてゐて、なか／＼それどころではないのである。

私のやうに、年中每時（いつも）いつも小使錢にも不自由をしてゐる人

間にとつては、しかし貯金といふものは、樂みといふよりも調法なものである。その用意の金がないと、イザ鎌倉といふ急變突發の場合にどうすることも出來ないが、それがあると、萬一の時に窮困しない。私のやうな心掛けの惡い者でも、その意味に於いての貯金の難有さは身にしみて分つてゐる。

ところが、格別濫費するわけでもないが、事實は支出に對して收入が少ないで、多少纏つて入つた金を特別當座に預けておいても、長い間には段々喰ひ込んでしまつて、いつでも、終には徽々に減つて來る。その心細さといつたらない。これは度々申すとほり、樂みではなく、安心の爲にしておくのだから、その預金が乏しくなつて來ると、ひどく心細い。勿論、そんな次第で、それで以つて吾が亡き後の子供の將來をどうするといふことも出來はせぬ。

加之、人間には——私もその一人並みに——いろ／＼な欲望や向上心もあつて、それ等を滿足する爲にも相應に金は費さねばならぬ。從つて何時まで經つても貯金專門にはなれない。收入の割合が多ければ多くつて、欲望（高尚の欲望の場合として）をも多方面に滿足せしめたくなるのが心情である。

働ぐに追ひ付く貧乏なしとは、平凡な眞理をよくいつたもので、たとひ特別當座にでも多少纏つた預金があつたりすると、敢えて怠ける氣でもないが、平素手から口への一夜漬け仕事ばかりしてゐるので、その預金の餘裕のあるのを生活の保證にしておいて、少しは、宿年の理想的な物を書いてみようと思つたりして、その爲にいろ／＼參考書を讀んだり、又は心の中でそれを凝乎と醱酵させたりしてゐる間に一ケ月くらゐは直きに立つてしまつて、又その月々の出費を要したり、或は經常費でない不時の支出があつたりして、とても、多少は、莫大に纏つた金が入らない以上、預金帳の面には、上段の處に金額を記入せられないで、いつも／＼下段のところに金額が背比べをしてゐるといふ始末。銀行の窓口でも恥しい思ひをしなければならぬ。

それに吾々文士にとつては、此の頃あつちでも此方でも安價版の豫約全集の企てがあつたりして、私などその中では最もカスを掴んだ方であるが、それでも少しは金の入つて來る心當てがあつたりするところから、兎角人間の（殊に私自身の）惡い弱行薄思が大いに手傳つて、取れぬ狸の皮算用をして、却つて預金帳面の減少して來るといつたやうな心理作用が活躍したりして甚だ可けないことである

そのとほりの、いつも／＼乏しい錢でありながらも、私は安心の爲に生命保險と銀行とは、日本國の亡びない限り、不拂ひや取付け騷ぎなどの有る氣づかひの毛頭ない、勿體ないほどの

銀行に頼んで置く。(四月四日)

古代銀行物語

川田順

金錢は人生の散文的方面を代表する。隨つて、立派な客間ではその話をするさへ不作法な事とせられてゐる。乍併、眞實のところ、金錢は薔薇の花ほど美しい。といふやうな事を哲人エマアソンが言つた。あの皮肉家のショオでさへ、金錢は此の世で最も必要なものであり、個人に取つても、國家に取つても、健全な道德的基礎を構成すると、例に無く眞面目くさつて言つてゐる。尤も、こんな事を言ひ乍らノオベル賞の大金を返上したりするのだから、此男の言ふとは全く以つて當てにはならない。

斯様に道德的基礎でもあり薔薇の花でもあるところの黃金が、何千萬圓、最近某々銀行等の不始末によつて吹つ飛んでしまつた。迷惑を被つた預金者が三十萬人、その各は少くとも平均三人の家族を扶養してゐたであらうから、今回の破綻騷ぎで百二十萬の人間が健全な道德的基礎を失ひ、美しい薔薇の花を散らされてしまつたことになる。

猶太人の藝術であるところの樓を覗るに敏なる編輯者から、銀行とか金貸業とかいふものを主題にして何ぞ書くやうにとの註文であつた。當面の諸問題でいつも食傷してゐる予は、せめて筆の上でなりと現實を回避し度く思ふ。それで、今回も、現實を回避して、古い古い物語を書く。

文藝復興期の大立物、藝術の最大保護者、メディチ家のロオレンツオが、シヤイロツク其處退けの、祖先傳來の、大金貸であつたと云ふ事を何人が想像し得るか。自作の淫猥な小唄を謡ひつつ謝肉祭の夜の街上をそぞり歩いた詩人ロオレンツオが、梟の如き實業家であつたといふ事實を何人が信用するか。

ウオルタア・ペエタアもそれは氣付かなかつたらしい。サヴオナロオラの額は山羊のやうで熱烈な眼光を持つてゐたと描寫し、ミケランジエロの鼻柱には打撲腫があると考證した、あの博學のロマン・ロオランでさへも、此の事だけは識らなかつた。神の如きミケランジエロすらも大理石採掘場で土方や機械工の生活を體驗せねばならなかつたのだから、メディチ家の公子が秤を持ち、金貨入れの革袋を腰帶にぶらさげ、綠色の卓布を掛けた勘定臺にかじり付いて、銀行の見習小僧を七年間勤めたとしても、格別不思議は無いのである。

メデイチ銀行の本店はメルカト・ヌオヴオの街頭に巍然として聳え、その大天井はシニヨレルリやダ・ヴインチ等の彩色壁畫で眼も眩ゆかつたと云ふ。あはれ予も、その時代に生れ落ちて、ロオレンツオ公子受持の窓口に行き、十萬フロリンの預金帳をその御手から親しく渡して貰ひ度かつたものではある。因に、當時フロオレンスの金利は月二割乃至三割といふ、滅法な高率であつた。嘘なものか、予は確實な文獻に據つて物を言つてゐるのだ。末世のアイス諸君、此の光榮ある歴史の下に、安心して家業を勵みたまへ。

沙翁劇「ヴエニスの商人」の脚色は伊太利の作家ジヨヴアンニ・フイオレンチノの小説集（西紀一三七八年刊行）を出所にしてゐるから、劇中の出來事は第十四世紀以前の事であらねばならぬ。基督教徒のアントニオは利息附の貸金を罪惡だと惡罵し、猶太人のシヤイロツクは、舊約のヤコブの挿話を栖に取つて、金錢が牝羊と同様に仔を生んだからとて不思議は無いと抗辯する。

畢竟、アントニオは、「金錢は成長せず」といふアリストテレスの哲學に源を引き、遙かに降つて第二十世紀の共産主義とも脈を通じてゐるものと言へる。乍併、純正經濟學の問題としては、シヤイロツクの方が正しいのは言ふ迄でも無い。アダム・スミスやリカアドを引合に出したら、讀者諸君は「古い／＼」と嘲笑するだらう。まあ、野暮な事を言はずに、「博多小女郎波枕」の毛剃九右衛門が長者經を聽聞したまへ。

棄てる物はなんにも無い。鍋の墨では細眉作り、しべのきれは疼痺の妙藥、水なき井戸は梯子の入れ物、鼠の尾まで錐の鞘、させ干せ傘、人に貸すな鰹節、摺粉木、擂鉢、砥石、石臼、薬研まで、目にこそ見えね貸す度に、減らずに戻る例は無し。

と喝破してゐるでは無いか。利息といふ制度は、畢竟此の、減らずに戻る例無き貸金の、危險に對する報酬なのである。借主が金利を拂ひ貸主がそれを貰ふのは、牝羊が仔を生む限り、餘りに當然の次第だ。

そも／＼利附貸金を罪惡とするのは羅馬舊教の教義であつて、第八世紀頃の長老會議に於いて既に早くその禁令を出してゐる。基督教徒は全部その禁令に拘束されたから、金貸業はおのづから猶太人の獨占となつてしまつた。伊太利はじめ、歐洲諸國の王侯貴族は金貸業者なる猶太人の存在を便利と感じない譯には行かなかつた。それで、遂には、彼等の基督教に改宗するのを防止する手段に出た。例へば、改宗した猶太人の全財産を國庫に沒收する如きがそれである。

シヤイロツクの一人娘ジエシカは、ロオレンツオといふ基督

我の紳士と戀に落ちて、こつそりと洗禮を受け、寶玉や金貨を父の金庫から盗み出して、月明の夜に駈落をしてしまつた。沙翁は此處で筆を擱いた。後世の予が後日譚を補足して見るならば、薄命なのは此の異教の美少女である。愛人の爲めに折角苦心して持ち出した金銀寶石は、改宗の手數料として、そつくりヴエニス侯に沒收されてしまつた。猶太の娘の財産を當てにした輕薄才子のロオレンツオは、幾何も無く彼の女を捨てて、ベルモントの富裕な相續人ポルシヤ姫の食客になり、放縱な生活を續けた。

預金帳

閑話休題、銀行物語を羅馬共和國時代（西紀前）まで遡らせる。

羅馬人は西紀前四百年の遠い昔に於いて既に金融機關の完全なものを持つてゐた。當時立派な銀行がフオラム（公會所）の北側、ジエイナス街に立つてゐた。其處では、近代の制度と全く同樣に、當座勘定、預金、爲替、信用狀、貸付、不動産賣買等の諸科目を扱つてゐたといふ。預金に利息は無かつたが、例外として定期預金だけにはそれを附けたらしい。それから、面白い事には、兩替の係は一段と高い椅子に坐つて、机の周圍に靑銅製の網を張つてゐた。して見ると、今日現金出納係の諸君が動物園の猿猴然として金網の中であくせくして御座るのは、紀元前からの宿命だといふ譯か。

ジエイナスは伊太利の古い神樣で、前後兩面に顏を持つ氣味惡さは興福寺の阿修羅像などを想はせる。悲劇「オセロ」の敵役イヤゴオは此の神の御名に懸けて腹黑い起請をした。序幕第一場三十三行目を參照の事。表裏二面のイヤゴオの守本尊としてこれ程ふさはしい神樣は無い。世界最古の銀行が出現したのも此の神の御名を冠した街頭であつた。ジエイナスと金貸業者、切つても切れぬ惡緣は二千數百年後の今日まで續いてゐる。

此の古羅馬の銀行は西紀前二百年に火災で滅びてしまつた。近年その廢墟を發掘した時、熔け塊まつた金貨が大理石の鋪道のわれ目に燦として光つてゐたと云ふ。

雅典のパルテノンが銀行の營業所であつたと言つたなら、世界中の藝術家連が眼をむいて「此の瀆神者め」と憤るであらう。乍併、文獻の示す事實だから仕方が無い。古代希臘には專門の銀行といふものは無かつた代りに、隨所の神祠がその役目を勤めてゐた。當時、貴重品の保管場所として、神祠の奧ほど安全な處は見當らなかつた。神官等は、手數料を收めて、善男善女から貨幣、寶石、金銀の延板、その他の貴重品を預かつた。それが發達して、遂にはパルテノン、デルフイ、オリムピヤなどではオピストドムスと名付くる特別な設備（安全金庫の類）を

造るに至つたと云ふ。現今の保護預り制度は此のオビストドムスなるものの模倣に過ぎないのであらう。

斯う考へて來ると、メロスのアフロヂテも一度は金庫の番人をして御座つたに相違ない。希臘の神々といへども東方粟散邊土の惠比須大黑と格別變つた種族では無いのである。

希臘羅馬はまだ新しい。ずつと高飛びして、四千年前まで遡らうか。バビロンのハムムラビ式日には明らかに「預金」といふ名詞が使つてある。さらに又、五千年前の大金字塔は、埃及の王者の墓場であつたのみならず、同時に公衆の爲めの貴金屬保護預り所であつたといふ事實が、近頃考古學者達によつて考證されようとしてゐる。墓場と銀行、銀行と墓場、兩者の間に微妙な連絡が存在してゐるやうだが、睡魔しきりに襲ふので、その穿鑿は後日に讓つておく。

高枕寐語錄

水島爾保布

曾ては貴族院の議員だつたか何だつたかに貯金魔とやら稱する稀代の惡漢があつた。俺に五圓預けろ、向ふ五年の間にそいつを一萬圓にしてやるなどと、メフィスト・フェレエなら知らぬ事、いくら手の利いた贋紙幣屋だつて、こいつア一寸おいらの間尺には抑えかねると、小首七三上目でゴックリやりさうな相談を、どういふ靈梅式のあやとからくりにかけたものか、日本國中のお人よし、もつとも慾丈は人なみ以上に突張つたやからをたばかりまくつて、二年と三年の間にまんまとせしめた金がウン百ウン十ウン萬圓、野郎にして見りや事實に於いて五圓紙幣が三年とはいはさずに、忽一萬にも二萬にも化けおうせたわけだが、さう化けさせた當人同士、手品の種の供給者諸君にとつては全くもつてとんだ面の皮、とらぬ狸の皮よりもう一つ惡い。まア馬鹿につける藥でも買はされたと思ひ諦めるより外はなからう。――「馬鹿につける藥」といへば、近頃見渡す世間で大分流行のやうだ。ピンだのピンだのと、訝しく尻つ跳ねのした名前の藥、それから淋しき病梅の毒、なんてえのをあての特効藥、これが一圓本五十錢雜誌と新聞の廣告欄に奪ひ釣り合ひの景況だ。もつとも、さうはいふものの日比谷公園上野の美術館、銀座淺草のそこらをのたくり歩く男や女の衆生諸君、どれを見たつて花柳病に惱み性的不能を悲しんでゐるやうな顏や容子は一つもないが、朝夕の新聞では、どうも天が下の士農

工商両立不慕知天命のおしなべてが、教外別傳不立文字の苦患の中に呻き喘いでゐるかの有様だ。正に國家の亡兆衰兆といつてもいゝ。

そんなことはどうでもいゝが、貘の貯金庫といひ、今度の銀行騒動といひ、生中錢を貯めやうなんて不了見を起すと兎角ロクな事はない。と考へさせられる。全體勤儉貯蓄なんて尤もらしくいふものの、ありや確に危險思想の變體だ。論より證據、こちとらのやうな年がら年中ピーピー風車の空つけつ仲間、國家への御公納金さへ催促方取り立て役をしてならし三度ぐらゐ無駄足させずには滅多に御納め申した事アねえなんて、さも見得か外聞か伊達か看板かのやうに自慢する程膏肓に入つた貧乏人、直助權兵衛程の睨みはきいてもきかいでも、金箔つきの御釋迦様、しやかさまにしたつて鼻血も出やアしねえのさ……なんて、不貞腐れたタンカを、お長屋の衆を大向ふに、お立ち合ひの喝采を目安に、けつつぺたから叩き出さうて人間には、お預け申すやうな無駄なおあしは百はおろか鐚が仙台通寶一文もない代り、先頃のやうなドガチャガで、どこの銀行が戸を閉めやうが、何々銀行の前には銀座のパン屋よりももつと大勢人がたかつてゐやうが、或は又日本銀行が紙幣も銀貨もすつかり切らして了つたとか、勸業銀行が向ふ三十九週間休業の貼り札をしたとか、郵便貯金拂出し今後三年と八月中止といふお觸れが出るとか、明日つからは全國一般銀行悉くモラトリュムだとか、そんな流言蜚語がリン無しの號外のやうに都大路を脅かして廻つたところで、決して資本家諸君並に資本主義を怨んだり、惡んだり攻撃したり、或は大藏大臣を彈劾したり、國家の行政を非難したり、そんな大それた事はしやしない。安閑如として枕を高く眠つてゐる。眠つて居ればたとへ河豚とお腹を膨らしつこした夢位は見るかも知れないが、とにかくに世間の誰彼に對して不逞る了見を懐いたり、國家の經濟組織に對する不滿を感じたり、そんな七面倒な事は先大抵は忘れてゐる。

で、一寸へんな事をおもひ出した。

支那の第一次革命が終つて間もなくの頃、上海の申報の一欄にこんな漫文が出てゐた。宜しく阿片禁止の令を解くべしといふのである。革命つてものは前朝の舊令一切百擧倶に廢するのが原則である。であるから前清政府の發布した阿片吸喫の禁なるものも此際宜しく解廢して了はなくてはいけない。といふ事からはじめて由來人の明日の樂境を慕つて今日に苦しむのも今日の樂地を喜んで明日の苦を忘るゝのも、その樂しむことを以つて樂しとする心はもと一つでなければならない。必竟人の性は元來懶なる所以のものに因く。死後の安樂國を望むのも亦

怠惰の一念有ることに據るに非ずして何ぞや――と、なまける事則人間の本然性であることを稱した上句、さういふ人間が特別に快い懶惰を貪るべく阿片に親しむつて事は決して咎むべきではなく、干渉する方が却つて間違つてゐると混ぜつ返へしてゐた。それだ。

既に古人からは子孫に美田を殘すつて事は人としての責任であるかに敎へられてゐる。若い時ウンと働いてミツチリ貯め込んで、さうして老後及び子や孫の爲めに安樂な年の計を立てることを人生最大の道德かの如くに云ひ聞かされてもゐる。その何れにしろ本來の心に「樂がしたい」つて要求がありやこその問題で、慈悲善根の數々、觀音樣へのお賽錢、暮の四つ辻の鍋へ投げ込むなにがしかから、つまりは極樂往生若しくは天國を購ふ約束の積立預金見たいなもので、とにかくに「樂がしたい」「働かなくてもすむ」といふ目標目算を、どつかに見ての上での話に相違ない。郵便局の窓口で味淋精のやうなヘチヤムクレから、惡く橫柄に、時には劍突まじりの取り扱ひを受けながら、恐る〳〵貯金帳へ紙幣を挾んで提出してゐるおかみさんだつて、末始終の我身の德を考へれば一時の屈辱も忍んでゐるわけだ。

尤もこいつが變態になると、勸業銀行へ五兩と十兩のテラ錢を出して、何萬何千の中の一本に運を賭けて見ようなんて了見になる。數學的に考へる迄もなく一天地六の賽の目よりも、カシノのルレツトよりも餘程割の惡い事なんかにはどこの誰も些とも氣がつかずに、只もう政府が堂を取つてるんだから大丈夫だとばかり、尾張町の銀杏の側で、娘さんからマツチ一つでチヨロリ懷柔されて了やがる。

どつちにしろ安樂慾か物慾かを道連れの向ふ面には紛れない。とすると、昔の江戸のお職人衆の主義であり標語であつた、宵越しの錢は持たねえといふのと、形方法は違つても內容は結局同じ事だ。一つを積んで十、十を百、百を千、こいつの利息が何ぼ何ぼ、十年經つたら……胸算用、大體の當りで家が立つたり藏がたつたり花壇が出來たり台所電化が行はれる。眠られぬ夜の妄想世界貯金の通ひ帳が蛤に化けて蜃氣樓を吹き上る。事のついでにさうなつたらと、嬶がお召を要求し、亭主が獺を襟首にからめやうとなる。おのがじしの豫算目算の桁と桁がブツかり合つてとどのつまりはお互が言葉と言葉に蹴躓いて銅羅聲と金切り聲の合奏に至る。折角圓滿な家庭があつたら餘白澤山の貯金帳の爲めにとんだ波瀾を起したり何かする。――といつたやうなのも、又、その日その日をなしくづしに飮んだくれて、明日の百より今日の五十で暮らして行くのも、つまりは生活意識享樂意識の上の出來事と見れば道德に甲乙は無いわけだ。

と、闇雲に勤倹貯蓄にケチをつけては、誠に時節柄相濟まないが、倩つら〳〵考へて見ると、この金を貯めるといふやつ、その大根はもと動物的本能に發してゐる。たとへば熊が栗を拾ひ集めて木の洞穴や岩の窪に隱しておくのや、百舌が蛙やバッタを木の枝へ刺し貫いておくのと同じやうに單なる本能的わざくれに違ひない。無論人間が手前惑で判斷すれば缺乏を豫期しての準備だなんて事にもなるんだらうが、熊の栗に於ける百舌の蛙に於けるどつちにも一向そんな觀念も意識もないさうで、隱しは隱してもその栗をどうするでもない。蛙なんかはいつか一度も顧みられず乾からびてコチ〳〵になつて了つてゐる。栗の方は大抵獵師や木樵に失敬されて了ふ。蛙やバッタだつて、食つてうまいもの或は長命丸の代用若代りの滋藥になるなんていふんなら、それこそ目つぱりつこで探し求めるに相違ない。

人間にだつてその原始時代には吃度この熊や百舌のやうな營み事をやつてゐたんだらう。それが個々生活方法狀態の變化に伴つて漸徐智識的になつて行つた結果が、米を俵に入れたり魚を天日に乾したりするやうになり、次いで小判を瓶へ入れて地面へいけたり、銅貨や銀貨を泥の寶珠の玉へ入れたりするやうになつた次第らしい。不時の入用を慮つての仕事、轉ばぬ先の杖、何も末始終の安逸榮耀をばかりが目的ぢやないかも知れないが、とにかくに原始動物時代から遺傳した本能へ、皮が生じ毛が生へたものには紛れもない。これが分化的になつて書畫を集め、佛像を集め古切手を集めマッチのペーパを集め諸國のおもちやを集める。

文明つて事は自然から見れば人間の退化といふ事を意味すると同時に、人間からいはせれば自然を改造するつて事にもなる。だから、過去何萬何千何百年以前に於ける本能は本能としてもさういふ仕事を轉ばぬ先の杖の用意、若しくは未來の享樂生活の準備なんて、イヤに個人主義的色彩の下におく事は、もうそろ〳〵我等人間世間から取り除いて了つてもよい頃だといへる。少くともお互が宵越しの錢なんか持つ世話のないやうな社會組織になつても、さうしなければならない文明時代は、誰の頭の上にも迫つてゐると見ても差支へなからう。

とにかくに、勤倹貯蓄つて事は、國家國民どつちにも、至極結構な精神であり思想であるさうだが、その裏には何も金づく錢つ子づく、阿彌陀も金で光る世の中。地獄の沙汰も金次第。浮世のからくり金卅しやまゝよ。金もつてこいがホンのこひなり……といつたやうな黃金萬能金權主義拜金思想愛錢守錢利己貪吝といつた我等先祖の武士道と甚だ相そぐはぬ奴が控へてゐるんだから、鼓吹するにも奬勵するにも是亦深甚の考慮を要する。

天變地異と迷信

國富信一

自然現象には迷信が附きものゝ樣である。と云ふよりは寧ろ澤山の人の中には見たり聞いたりする凡ての現象に何とか因縁をつけたがる人が居る樣である。科學が進んで來た今日でさへも尙可なり馬鹿々々しいと思はれる樣な迷信が喧傳されて居る程であるから昔の樣が思ひやられる次第である。尤も迷信と云ふ語を廣義に解すると今日の樣に人氣者の太陽黑點が地球上の氣象に何か影響を與へると云ふ事が判ると、火山が噴火した共れも黑點の爲めだ、池の水が濁つた共れも黑點の爲めだ、鬼熊が暴れて居るあれも黑點の爲めだと過信するのも矢張り迷信の一種で科學的な部類に屬するものと云へるかも知れない。

兎に角本來の迷信なる語は斯樣に結果から原因を推量するのでは無く、或る現象から結果を豫測する意味であるらしい。其處で私も斯かる意味の下に迷信と云ふ言葉を解釋して、扨天變地異と共れが生んだ迷信とを調べて見ようと思ふ。又天變地異と云ふ意味も別に一大變事と云ふ意味あひのものでは無く、只單に異常現象と云ふ程度のものであると御承知願ひたい。然も天變地異と一概に云ふても其の範圍は頗る廣いのでこれを私の專攻する氣象、地震を中心とした範圍内に限定する。

一、日蝕、月蝕

先づ迷信の始めは天體の現象より起ると云ふも過言ではあるまい。即ち星辰に關する迷信は古代の神話、二十八宿の話などから始まつて數限りなく多い故之れは暫らく預つて其の外の重なものに就て記す事としよう

日蝕は我國では遠き昔、神代に天照大神天の岩戸に隱れさせ給ひたる故事がある。共れは兎も角も日蝕なる現象は一般に惡い意味に考へられて居る。漢書孔光が傳に

日者衆陽之宗人君之表至尊之象、君德衰微陰道盛彊侵蔽陽明則日食應之。

と云ふ事が書いてある。之れに依れば日蝕は君德衰微の兆であると云ふので其の時代の人の世の有樣に天象が共鳴したと云ふ

事になる。尤も中緯度以上の土地では皆既日蝕は比較的珍らしいから斯かる迷信を生じたのも無理は無い。然し現今では日蝕の影響は極めて微々たるもので地球の磁力に影響するか何うかと云ふ問題が起つて居る位なものである。

又性理大全には「日食は定數あるものなり。然るに治世に少なくして亂世に多し」と記してある。然も日蝕に依る災を免れる爲めには春秋にある如く「日食する事あらば之れに鼓して牲を社に用ゆ」と云ふ方法を取るらしい。

月蝕の方は大して深い迷信も無いが面白いのは淮南子に

麒麟鬪而日月蝕、鯨魚死而彗星出。

とあることで昔から麒麟は有德の世に現はれる動物と考へられて居たから、日月蝕が一層瑞象で無いと云ふ事が判る。日蝕月蝕の説明は今では三歳の童子も之れを知ると云ふ程度であるが、其の理由が判らなかつた時代の人々に取つては確かに一大脅威であつたに違ひない。

日月蝕に連關して日月明を失ふと云ふ現象がある。之れは雲が全く無いのに太陽や月が昏くなるので多分黃砂が風の爲め中空へ卷き上げられた爲めか或は遠い火山の噴火の際の灰が空中へ撒き散らされた爲めかに依つて起る現象であらう。即ち比較的粒の大きな塵が上空に多量に存在する樣になれば其れが太陽の光線中比較的波長の長い赤色の光迄も反射して分散せしめるから空の色は赤味を帶びて昏くなるのである。

大正三年櫻島の大噴火の際に空中へ撒布せしめられた火山灰は間もなく日本全體を襲つて、東京でも一天晦冥となつた事がある。宋志に

日昏晝而無光是爲晝昏、陰反陽臣反君奸臣盛法令不行。

又觀象玩占には

日赤如赭兵車滿野、日靑無其下有死王、日赤如血其下君憂臣叛、日色黃土功興、日白光國主憂喪、日色黑天子臨危天下大水民半死。

斯樣に日の色が樣々に變る事に就て夫々な迷信があるが此の內「日赤くして赭の如きは兵車野に滿つるなり」との意味は若し現在の狀態を云ふならば科學上からは合理的である。即ち兵車が細塵を高く空中へ捲上げしめたと考へれば善いであらう。

支那の舊史には日月色を變じたと云ふ例は極めて多いので一々其れを枚擧するに暇ないが其等の中には太陽黑點の現出した記事もある。宋史の天文志に「政和二年四月辛卯日中黑子あり、乍に二つ乍に三つ栗の大さの如し。」又通鑑には「宋の德祐二年日中黑子あり、大さ鶩卵の如し相盪之れを久す」とある。太陽黑點は目下大分喧しい問題となつて居るものであるが、巷間で云ひふらして居る程絕大な勢力を有するものでは無く勿論日々

の氣象狀態が太陽黑點に支配される程のものでは無いのである。只氣象狀態の長期豫報をする場合には太陽黑點も考慮すべきものと云ふ程度の關係を有するのであらう。

二、日暈、月暈

暈はハローと名付けられるもので太陽の周圍に生ずる大小二個の光環と其れに附隨する澤山の光弧とを總稱した名である。之れは太陽の周圍に出る場合もあるし又月の周りに現はれる場合もあつて、夫々日暈及月暈の名がある。

日暈、月暈は必ず卷層雲と稱するヴエールを敷いた樣な高い薄雲に現はれる。何故なれば日暈は空中に浮ぶ微細な氷の結晶に日光が入射した際に屈折をなした結果として生ずる現象だからである。元來卷層雲は大部分氷の結晶したものの集合から成つて居て、然も其等の氷晶は六角錐であるから其の方向に依つては、日光に對して夫々頂角が百二十度、九十度及び六十度なるプリズムの作用をして日光を分散せしめ美麗なスペクトル色帶を生ずる。

然し之等の中百二十度、即ち六角錐の相隣る側面のなす角を頂角としたプリズムでは光が如何なる方向から來ても全反射をして結局日光はプリズム中へ入らずに仕舞ふが他の二つの頂角即ち六十度と九十度の場合には虹の樣な圓形な色帶を生ずる。之れが即ち暈である。斯樣に暈は氷晶がプリズムの作用をした結果として生ずるものであるから、其の結晶の形が定つて居る以上日暈の大さも定つて居る可きである。

實際暈は日暈、月暈とも一定した大さを有して居て、二重色圓の外圓の視半徑が四十六度、內圓の其れが二十二度である。又日暈は極めて複雜なもので種々な色弧が附隨して居るが其の中內圓の圓周上太陽の左右に光の可なり強い部分が現はれる場合があるが之れは幻日と稱せらる。通常完全な日暈が現出する事は極めて稀で、其の中の一部分が現はれる場合は極めて多い。晉書には

日暈者軍營之象、周環匝日無厚薄敵兵軍勢齊等。

又魏帝延興五年正月庚子虹彌天、日重暈左右兩珥、占曰白虹兵氣也。

兎に角日暈は戰亂の象であると考へたらしい。日本にも此の例は頗る多い。三代實錄卷二十五、貞觀十六年四月七日乙未時加未有重暈、白虹貫日、即日在胃、天文書曰、日月暈氣者三日以內有陰雨、則其災消而不成八日丙申癸雨然則可謂災消云々。

日暈、月暈は卷層雲に依つて生ずるものであるが此の雲は元來天候不良の兆で數日を出ずして降雨があると云はれて居る。從つて日月暈も共に降雨の兆であると見做す事が出來る。さればこそ三代實錄に「三日以內有陰雨云々」と云ふたものであら

う。

三、隕石、流星と彗星

天文の方の現象には迷信が頗る多い、前述した日蝕、舛等の現象にも其の迷信の數は極めて多數で玆には只例として其の中の一二を掲げて居るのであるが、隕石や流星も御多分に洩れず迷信の的となつて居る。然も大體は隕石、流星は鬪星流動した結果であるとの考へから兵戰に關する迷信が多い樣である。中に漢の五行志の説は面白い。其れに依れば星辰が天に固定して居るのは丁庶民が王者に附隨して居る樣なものである、從つて若し臣民が王に叛く樣な事があれば星も其の位置を離れて地に墜つるのであると説いて居る。

隕石の記錄は我國にも少く無い。日本紀に「天智帝三年三月星あり京北に隕つ」とか日本後紀に「延歷二十四正月壬辰未の時大星隕、乙未地震あり」などは其の一例である。

流星は飛星又は奔星と稱するもので夜這星とも稱せられて居る。天上の使者と稱せられて居るから晉書の如く、「流星天使也自上而降曰流、見使者出」の如く考へられたり又中には觀象玩占の如く

流星墜落有聲野雞皆鳴羣鳥鵲驚者所下之分兵起大戰血流。

所が之れとは全く反對に通鑑大全には

宋徽宗政和五年八月有流星出于柳其光照地、色赤黄有尾占者以爲天子宗廟方喜、百官賀表。

とあつて天子宗廟に當つて喜びあると云ふのであるから全く判らない。然も昔、流星や隕石に對する註解が面白い。訓蒙天地辨や怪異辨斷等に載せた所を見ると、「隕星や流星は同一物であるが實際の星で無く、地の燥火が中空に昇つて凝結した上一塊の形と爲つて飛ぶものである。而して其の生ずる所は地上五六十町或は二三里の間を出ない。其の火氣が漸くに滅じて勢が盡きると共處で地に墜ちて冷濕な土氣に觸れ石となるのである」と説いて居る。

今頃は勿論こんな考へを持つ人も無いが、近頃は流星も可なり小さなもの例へば直徑一粍以下のものでも充分あの位な光を出すと云ふ説もある。

流星を夜這星と稱する所からか知らぬが之れを見て鼠鳴をすると云ふ迷信があるそうである。怪異辨斷に「其故不知」と斷つてある。

彗星は長星、うき星等種々な名稱がある。私共が未だ小供の時分にハレー大彗星が現はれて、戰爭の起る前兆だなどと傳へられて居たのを記憶して居る。支那の舊記例へば晉書天文志などにも「兵起大水ある」の兆であると記して居る。更に角昔の

人に取つて彗星はうす氣味の惡いもゝの一ツであつたに相違ない。

天體に關する事は此の位に止めて置くが例の太陽黑點なども陽烏或は金烏と稱せられて其れが現出する時は臣君を弑するの兆であるなどと唱へられて居たものである

四、雲

次に氣象上の事に移るとして先づ雲であるが、之れは昔時浮雲と雲氣の別があつた樣である。即ち浮雲の方は現時我々が見て居る卷雲其他眼に見えるものであるが雲氣と云ふのは頗る厄介な代物である。昔の語に觀天望氣と云ふ事がある、此の望氣と云ふのが即ち雲氣を望むので單に天氣豫報のためばかりでは無く、吉凶を判斷するにも用ゐたものであるらしい。

從つて雲氣の方は主として占術に用て來るもので我々には判斷し難いものばかりの樣である。例へば「雲氣有獸居上者勝」と云ふ如きで雲氣が獸の居る所の眞上にあれば戰に勝つとでも云ふのであらうが、扨此の雲氣と云ふ代物の正體が判然しないと折角斯かる瑞兆があつても其れを知る術が無いから殘念である。又

天子氣、內赤外黃四方所發之處當有王者、若天子欲有遊往處其地亦先發此氣、或如城門隱隱在氣霧中恒帶殺氣森森然、或如華蓋在霧中、或氣象青衣人無手在日西、或如龍馬、或雜色鬱鬱衝天者此皆帝王氣也。

などとあつて帝王の氣は一定してゐると說いてある。又京房易傳には「四方を視、常に大雲五色有らば其下賢人隱るゝ也」と記してある。此の外戰亂の氣等等凡て定つて居るらしい。

形のある方の雲即ち浮雲には大した迷信もないが只一つ慶雲と稱するものがある。景雲は又卿雲、輕雲、瑞雲又は卿雲、治世雲等の名稱があるもので形は「煙の如くして煙に非ず、雲の如くして雲に非らず郁々紛紛蕭索輪囷是謂慶雲」と漢書にあつて太平之應也としてある。

昔の畫でみると奇妙な形の雲が出て居るが五彩に彩られて居るところを見ると現時氣象學で謂ふ、彩雲（イリデッセント、クラウド）の樣である。つまり慶事のある時彩雲が龍の形とか麟鳳の形とかに見えれば其れが慶雲と稱せらるゝのであらう。唐史に

代宗卽位日慶雲見黃氣抱日

とあるが、これなどは好例である。慶雲は日本の舊記にも數多く記されて居る。殊に面白いのは續日本紀に稱德天皇の天平神護二年八月三河國に慶雲が見えたとの記事があるが怪異辨斷などにては之れを難じて稱德帝の御世には道鏡法師の無道の政行があつたのに何故慶雲が現はれたのであるか不審しいと言つて

居る。

雲に關しては迷信と云ふ程のものは景雲以外には少ない。即ち此の外雲に關する記述は大抵天氣豫報の一助としてであつて多くは多年の經驗から割り出したものであらう。其の最も古いものとしては萬葉集にある天智天皇の御製である。

わだつみの豐旗雲に入日さし今宵の月夜明らけくこそ。

と云ふ有名な歌がある。又狂歌には

芝浦の漁人も網を打忘れ、つきには厭ふ鯖雲かな。

と云ふのがある。前者は夕暮に西の空を起點として旗手の様に靡く卷雲が夜半の晴天なるを示す様を歌ひ、後者は俗に鯖雲又は鰯雲と云はるゝ小雲塊の集合から成る卷積雲が暴風の前兆である事を歌つたものであらう。

五、雲の峰

幸田露伴の雲のいろ／＼の中にこんな記述がある。

「舟にのりて灘をゆくをり、天黑く海黑くして月星の光も漏れず舷をうつ浪のみ青白く騒立ちて心細く覺ゆる沖中に、夜は丑三つとも思はるゝ頃、舶上に獨り立つて海風の面を吹くがまゝ、衣袂濕りて重きをも厭はず、寐られぬ旅の情を遣らんと詩など吟ずる時、いなづま忽として起りて、水天一齊に凄じき色に明るくなり、千疊萬疊の濤の頭は白銀の磨したる如く輝き立つかと見れば、怪しき岩の如く獸の如く山の如く鬼の如く空に峙ち蟠り居し雲のみな黄金色の縫緣つけて、いとおごそかに人の眼を驚かしたる云はんかたたく美し」。

雲の峰又は入道雲は學名は積亂雲と云はれ藤原博士は大むくむく雲と云はれて居る。夏の空に特有な白雲の山でむくむくと昇り昇つて、昇りつめた揚句の果が頂から崩れ落ちて夕立を起す。實に男らしい雲で、形の上からも其の生涯即ち成立から寂滅迄の徑の上から見ても氣持よいものである。從つて古來數多の俳人歌客の間に歌はれて居る。

山の上特に富士の様な高山の六七合目あたりから甲府の盆地に湧き起る雲の峰は實に雄大と云はうよりも物凄い限りである。重疊と重り合ふたとばかりでは云ひ足りない。巍々として大空を摩さんばかりに彌が上にも聳えて行く。果ては自分の踏んで居る大地が揺ぎ出したかと思はるゝばかりに天を蔽ふて頭上に千尋の怒濤が押し寄せたらんが如くに崩れかゝる。此の時には物凄いばかりの電光が雲間を縫ふて閃々する。

雲の峯を歌つた歌句は極めて多い。先づ形を歌つたものには

奇峯突兀火雲昇　杜甫

八雲立つ此の輪廓を雲の峯　其角

がある。之れは前に述べた様な山上からでも見た景であらう。

又素戔嗚尊の御製である

八雲立つ、出雲八重垣、妻ごみに、八重垣つくる、その八重垣を。

の歌も一面から見れば此の雲の形容であらう

あれ夏の雲又雲の重なれば　惟然坊

などはやゝ形容もゆるやかだが

八重雲に朝日の匂ふ五月哉　太祇
町中の山や五月の上り雲　丈草
衣張りも九十九折ほど雲の峯　麥水

となると次第に優しみを帶びて來て遂に芭蕉の

ひらくとあぐる扇や雲の峯

となると折角の入道雲も小手先のあしらひ程の眺めになつて仕舞ふ。然し之れとは反對に其のドッシリした樣を云ひ現はしたものには

颱のおし動かすや雲の峯　井華
雲の峯湖は小さし旅硯　麥水
艮(ウシトラ)のことに恐ろし雲の峯　來泥
旱年や恐ろしげなる雲の峯　移竹
蟒(ウハバミ)の住む沼涸れて雲の峯　子規

等がある。又

夏の雲われらが上に輝けりそを恍として仰ぎける日よ　窪田空穗

などは雲の峯の輝かしい一面であるが同じ形容にしても

夕暮や兀げならびたる雲の峯　去來
兀山のうしろを昇る雲の峯　來泥

などは少しく氣持の惡い氣がする程である。

雲の峯は强い日射に依つて激しい上昇氣流を生じて起るものである事は既に善く知られた所である。故に多量の水分を有するのが常であると同時に其の雷中には電雷を生ずる。之れ等の方面から見た雲の峯に關する歌句も少なく無い。中にも夏目漱石氏の

雲の峰雷を封じて聳えけり　漱石

は此の方面から見て捨て難い興味がある。雲の峯が發達し發して昇りきる所まで昇り切れば先づ頂上が崩れて蛤の足の樣に或は鐵砧の樣な形になる。これを鐵砧(カナトコ)雲とかかさほこ雲とか云ふ。幸田露伴の「雲のいろいろ」には

「南の方の天にさしがさを開きたるやうに立つ雲をかさほこ雲といふとぞ。その雲やがて破れて、その破れたる方より風吹くと聞きたれど市中にのみ住める身の未だよく見知るべき時のあらざるこそ口惜けれ。」

「東の方に築地をつきたる如く立つ白雲を、かなとこ雲といふよしなり。かなとこは鐵砧にてそのかたち鐵砧にも似たればなるべし。その雲先しりぞけば西風强く吹きたちあがれば足をおろして雨となると傳ふ。東に白雲の築地の如く見えたるを眼にしたれど、なほかなとこ雲の風情といふを知らず」

の如くに說いてあるが此の鐵砧雲が更に崩れてゆくと其れから雨足が出て遂に雷雨となつて來るのである。

雲の峯なんぼ嵐の崩しても　鬼貫

雲の峯いくつ崩れて月の山　芭蕉

斯様に雲の峯が立てば夕立が降るのを豫期する事が略出來やう。從つて

雲の峯大工屋根屋を傭めり　井華
雨となる戀はしらじな雲の峯　蕪村

などの句となつて現はれて居る。又雲の峯が崩れ出してから夕立となつて襲ひくる迄の時間は殊に短かく

馬ながら軒へかけこむ夕立哉　麥水
夕立や法華かけこむ阿彌陀堂　其角
夕立や樂屋をかぶる傀儡師　丈草

などの光景を演ずることゝなり時には

稻妻やうつかりひよんとした顏へ　一茶

の名句を出さしめる。尚雲の峯に關する歌句も少くないが其の中の面白いものを連記して見よう。

湖水から出現したり雲の峯　一茶
投げ出した足の先なり雲の峯　一茶
蟻の道雲の峯より續きけり　一茶
乙女子が辷りて落ちる雲の峯　園女
國の峯山見ぬ國の拾ひもの　西鶴
雲抱いて夕立こゆる北の海　舊國
湖や暑さををしむ雲の峯　芭蕉
櫛挽のこゝろすかすや雲の峯　其角

蠶まつや蠶をひかへの雲の峯　去來

此の外に陶淵明の「春水滿四澤、夏雲奇峯多」から歌つた蕪村の次の句もある。

雲の峯四澤の水の涸れてより　蕪村

前にも述べた樣に雲の峯は強い日射によつて生ずる上昇氣流によつて出來たものであるから、特に日射の強い樣な處、例へば盆地などへは出來易い。關東などでは甲府の盆地に出來る雲の峯が取りわけ有名である。從つて雲の峯の著しいものは大抵所々により一定した個所へ出來る。つまり東京から西の方へ立つ雲は甲府の盆地に出來るものであると云ふ如く雲の峯により方向が判然するし又關東地方、近畿地方と云ふ樣な地方地方により雲の峯が常に形や位置が定つて居る。從つて其れぞれの地方により此の雲に異名がある。例へば關東地方では阪東太郎、大阪地方では丹波太郎、九州では比古太郎、近江越前では信濃太郎、長門地方では石見の境方面に見えるのを石見太郎、讃岐地方では阿波方面に立つのを阿波太郎などと呼んで居る。此の外加賀の「いたち雲」安房の「岸雲」播磨の「岩雲」なども同雲異名である。

先に立つ丹波太郎や道しるべ　舊國
廿日路の背中に立つや雲の峯　蕪村

夏雲や辰巳にあるを阿波太郎　子規

揚州の津も見えそめて雲の峯　蕪村

幸田露伴の「雲のいろ〱」には次の様な記述がある。

丹波太郎は西鶴の文に出でたりと覺えたり。阪東太郎は未だ古人の文にその風情をしるされざるにや。雲にも人に知らるゝ知られざるのあるもをかし。阪東太郎は東京にて夏の日など見ゆる恐ろしげなる雲なり。夕立雨の今や來らんといふやうなる時、天の半を蔽ひて、十萬の大兵營を占めたる如く動かすべくもあらぬさまに黒みわたり、しかも其の中に風を含みたりと覺しく、今か動き出さんとする風情、まことに一敗の後の將卒必死を期して悉く靜まり返つたるが中に勃々として抑ふべからざる殺氣を含めるが如し。この雲天に漲ると、やがて風ざわ〱と吹き下し雨どつと落ちかゝりて來るならひにて、あらしめきたる空合に此の雲の出でたる、またなく物すさまじく、をかしき形などある雲とは異りて、秋水の千里を浸し犯す如く出で來れる宏壯の趣きありて、心弱き兒女の愛する能はざるものなり。東京の市中にて眼にするものゝ中、この雲の風情などを除きては壯快なるものいと少かるべし。

雲の峯は又日射に依つて生ずるばかりで無く、大正十二年九月一日の大震災に依る火災の如き大火によつて烈しい上昇氣流を起した際などにも發生するものである。然し此の場合には上昇氣流を起す源が火災であるために多量の水蒸氣を含有するを得ない。從つて斯くして生じた雲の峯は只漸くに雲となる事を得たと云ふ程度のもので到底雨を降らす程の水分を含有し得なかつたのである。斯の關東大震災當時、東京の直上へ出た雲の峯は斯うして出來たもので、日々頻々たる餘震と相俟つて絶えず我々を脅威した事は諸君の尚記憶に新なる所であらう。

花田比露志氏の歌に

むくむくと湧く白雲は地震のむた
熾（シキメ）立つ烟を捲きてし湧くも。
晴れ澄みし眞青の空に捲き上がり
あなものものし五百雲白雲

とあるは當時の狀況を叙したものである。尚雲の峯は山火事の際にも出來る。兎に角雲の峯は怪魏なる一面に頗る俳味に富んだものである。

大空になにもなければ入道雲、むくりむくりと湧きにけるかな　白秋

六、ブロツケンの妖怪と海坊主

富士の山頂に陽も暮れゆく頃、其の東側を微かに埋め盡して居る薄霧の中にクツキリとした暗紫色の圓錐形が南は蘆の湖を横り北は山中湖を掠めて遙かに太平洋の彼方へと頂を浮べて現はれる。之は富士が落日を背にして霧中に其暗紫色の影を映じたので之が影富士と云はれる現象である。つまり影富士が出現する爲めには太陽と反對の側に稀薄な霧がなければいけない。尤も影富士と呼ばれるものには他にもう一つ、富士の姿が遙

かの下層に浮ぶ雲海に映じて生ずるものがある。前者は雄大、後者は端麗共に大自然が描く一幅の繪畫である。

影富士に似た現象に「ブロッケンの妖怪」と云ふ現象がある。之ればブロッケン山で發見されたまゝに斯く名付けられたものであるが矢張り日を背にして山頂に立つた時に其の人の影が前面の霧中に投ぜられて巨人の像の如くに現はれるものである。

昔紀之國屋文左衛門が紀州より蜜柑を積んで江戸へと志ざした途中、遠州灘に差しかゝつた時、薄暗をついて走る舟の前面へ當時の船頭達が最も恐れる海坊主が現はれて舟子達を脅かしたさうである。其の時文左衛門少しも驚かず菊一文字の短刀を右手に船首に立つてハッタと睨むと海坊主の姿は掻き消す如く消え失せたと云ふ事を小供の時に何かで讀んだ記憶がある。此の場合の海坊主も矢張り前の影富士や「ブロッケンの妖怪」と同じ性質のものであらう。雲海を昇る氣球や狹霧の立ちこめる空を翔る飛行機なども其の影を薄霧の中に落す事がある。

更に近くの霧の中に自分の影が映つて然も、佛像でも見る樣其の頭の周りに五彩の色環が現はれる事がある。俗に御來迎とか御光（ごこう）とか稱する現象は即ちこれで、只に霧の中へ出來るばかりで無く、溫泉から立ち昇る湯氣の中にも現はれる。靈山の頂などでは殊に御光が有難いものとなつて居て之れを見た人は來世に善い事があると隨喜渇仰されて居る。全く山頂などでは餘程天氣都合が善くなければ見ることが出來ない珍らしい現象であるが、實驗的にならば容易に作つて見られるものである。

七、怪雨と天泣

怪雨と云ふのは通常の水滴ならで全くとんでも無いものが降るのを云ふのである。其の原因を尋ねると旋風や龍卷で卷き上げられたものが風に送られて少しく離れた所へ落ちるのが主なもので、時には火事で捲き上げられた焦紙が降る場合もあるし、大規模なものは滿蒙あたりの黄砂が冬の北西風に送られて來て雨や雪に混じて降る事もあり、火山の爆發の際の灰が降るのもある。

續日本紀に「光仁帝の寶龜七年九月二十日毎夜瓦石及塊自ら內竪の曹司及京中往々屋上に落つ、而して之れを視れば其物見在二十余日を經て乃ち止む。年代紀に堀川院の寬喜二年奧州石降ること雨の如し」と記されて居る。善く小供の時九段で狸が石を降らしたと云ふ話を老人から聞かされたが、石の降るのは狸の業にでもせねば納りがつかなかつたものと見える。

斯樣に石の降るのは石雨とでも稱す可きであるが、之れには隕石の場合と旋風で捲き上げられたのが落ちる場合と二つあるらしい。支那では石雨の降つた下には大戰亂が起るであらうと

か民が困窮の象であらうとか傳へられて居る。

土砂の降るのは泥雨又は霾と名付けられて居る。晋書天文志に

凡天地四方昏濛若下塵十日五日已上或一月或一時雨不沾衣而有土名曰霾故曰天地霾君臣乖。

之れから考へると乾燥した土砂が降れば君臣互にそむくと云ふのであるから、多日本では滿洲あたりの黄砂が風に送られて來て降る事が多い故大に用心を要する譯である。土、黄塵、灰などの降る例はあまりに多いが時には五穀の降る事がある。

大正四年一月二十三日の夜宮城縣石巻町には五穀が降つた。然も其の種類は大豆、麥、ハチコク等で不思議な事には此の穀雨の降つたのが同町の神社の境内だけであつたさうだ。穀雨が降つたとて喜んではいけない。觀象玩占に

京房が曰ふ天五穀を雨らす是を惡祥と謂ふ。一年を出ずして人民流亡す

と石巻町で果して此の占が適中したか何うか。支那の舊史にも五穀の雨は可なり例があり、場所柄だけに粟、黍等が多い、日本年代紀には

聖武帝天平十四六月飯雨于京師、後深草帝建長元三月十六麥雨于常陸國、後花園帝文安元四月十日雨大豆小豆。

等の記事がある。

血雨と稱する雨は別に血液が降るのでは無く火山灰や粘土などが泥じて居る爲めに赤味を帶びた雨である。時には雪が赤味を帶びて降ることもある。さういふ雪を紙に受けて溶かすと必ず跡に赤土狀のものが殘る。大正十四年の一月三十日には東京地方に紅雪が降つたが之れは多分當時活動をして居た信州燒岳の噴火の灰か、滿洲あたりから來た黄砂かゞ泥じたものであらう。漢五行志に

京房易傳に曰ふ佞人祿し、功臣僇れば天血を雨らす、又曰ふ天血を降らして止まざれば久しく其位に處る事を得ず、歲中に兵起る

と說いて居る。

雨も段々奇拔になつて來ると魚雨と云ふ奴がある。讀んで字の如く魚が降つて來るのである。荀悅が漢紀に云ふ。

天魚を降らすは者道淩夷し臣敢を専にす、又曰ふ民流亡して兵喪あり

と。我國の例としては日本紀に

齊明帝四年出雲國言於北海濱魚死積厚三尺許、其大如鮐、雀喙針鱗鱗長數寸俗曰雀入於海化爲魚名曰雀魚。

雀海中に入つて蛤とならずに魚となつたのは面白い。此の種の例は外國にもあつて、千九百一年六月二十一日に米國南カロライナ州のチラーズ、フエリリと云ふ所に大雨があつて其水溜

りに無數の小魚が泳いで居たそうである。

昔の人は魚雨が何うして降るか餘程不審しかつたものと見えて、魚類發揚の氣に乘じて飛行する事もあるにやとか俗に云ふ鯽の山越の類かなどと云つて居る。然し實際殆んど全部が龍卷で湖や池などから捲き上げられたものが降つて來るのである。

更に氣味の惡いのでは蛙雨と云ふのがある。千八百九十七年六月二十日英國バーミンガム市の續きであるモズリ町に蛙雨が降つて、あちらこちらに白つぽい蛙が落ちたそうである。これなどは珍奇を通り越して奇拔と云はざるを得ない。從つてこんな例外には別に迷信も無いが一般に蟲の雨としては蝗などが多い。蝗の雨群臣互に相賊せんとするの象であると云つて居る。

又花粉の雨、草の雨、毛の雨などはありそうなことである。毛の雨に就ては京房易傳に

邪人進み賢人逃るれば天毛を雨らす。

と記されて居る。俗に毛の雨は龍の駒の毛であるとの說がある。龍の駒とは雷の乘る馬の事であるが其れに就て西川求林齋如見の面白い記事がある。

「予幼若の時一日毛降れりとて男女是を採つて怪み見たる事有り、其時一人の曰ふ是毛に非らず薄の穗、尾花の類なりと、一人の曰ふ實の毛ならば火に燒て其香有る可しと則ち是を火に入しに毛の香に非ず。亦一人の曰ふ龍の駒は尋常の獸に非ず何ぞ其香斗馬犬鹿と同じからんやと或は信じ、或は之を嘲つて去る。又或人の曰ふ何れの國に有し時、毛降りし事あり採つて火に燒しに鳥獸の毛羽を燒の香ありしと是實說也。蓋按に傳聞く西南の蠻夷に大風甚多し、其國大鳥は羽毛齊獸の毛に似たる者多く之有り、未だ日本華に於て之れ無き處の者也」云云と

草木の雨に就ては觀象玩占に「天木を雨らすは君臣和せず讒人進用せらる、其歲多風に五穀傷民多死。天草を雨らすは民破亡する有り」と云つて共に不吉の兆とせられて居る。尙更に凶兆なのは花の雨で觀象玩占に「天雨花國有喪」と云つてる。仲仲以て下谷上野の花の雨なんて洒落て居る譯には罷りならぬのである。

扨最後に思ひ切つて欲深い錢の雨と云ふのがある。唐書の五行志に「武后垂拱三年七月廣州に金を雨らす」と云ふ記事があるが斯樣な金の雨に對する昔の人の解釋が又面白い。其の說に依れば金は麗水より出ると云ふ事が千字文にも載て居る。日本にても金山の川には茄子實と云つて砂中に細かい金が混じて居るが之れが地中昇發の氣に依つて上昇すると中に含まるる金も之れに附隨して昇り、終に空中で凝固して再び金となつて降るのであらうと云ふのである。誠に以て名說で若し此の事あれば砂金は手を濕さずして純金となる譯である。錢の降る例もある

幽霙錄に

海陵富尊家先貧、一日大風雨散飛錢至其家䌫籬岡隙落無數其餘皆拾得富數千萬。

と記されて居るが斯うなると少し眉唾ものである。然し若し造幣廠が大火にでもなつて旋風でも起り紙幣が空中にでも卷き上げられゝば錢の降る事もあらう。先づ湯灌場吉三の芝居でゝも無ければ錢の降るのは一寸難かしそうである。

次に天泣と云ふのは雲もないのに雨の降る現象で多分遠方にある雲から降つた雨が風の爲めに運んで來られたか、雨を降らした雲が既に消え去つた跡で雨が落ちて來たか或は水蒸氣が雲とならず直ちに水滴となつて落ちて來たものであらう。唐書に僖宗三年浙西無雲而雨、占曰無雲而雨是謂天泣とある。又隋書には

天無雲而雷有叛臣、天無雲而雨者反臣伏誅也

と記されて居る。然し日本に於ける記錄は前述の占とは異つて日本紀に

敏達帝十四天無雲而雨雷霧滿國中。

別に天泣などは大して珍らしくも無い現象であるが然も斯樣に迷信の的となつて居る。人の心理狀態は全く不可解な謎である。

八、虹と雷

虹などは如何にも平凡なもので三つ兒も知る程であるから別に迷信にもなりそうは無いが矢張り、月令章句に「夫れ陰陽和せず婚姻序を失はゞ即ち此の義を生ず」とある。元來虹蜺は蜃氣樓の如く蟲類の息と考へられて居たから其の文字も蟲篇となつて居る。然し虹は雄で蜺が雌であると考へられて居た所から此迷信が生じたものであらう。又虹が東に在る時其を指すと女子ならば父母兄弟に別れると云ふ迷信があるそうである。

雷を雷神として虎の皮の褌に太鼓をかつがした鬼神としたのは何處から來たのか知らぬが支那には雷斧と云ふものがある。一體雷は總稱で光は電、墜ちたものが霆、鳴響破裂するものが霹靂と稱する由である。昔は雷を以て陰陽衝激の聲としてあつた、即ち冬は陽が地中にひそむ故冬は井戸水が溫かであつて、陰が上空にある故大氣中は寒い。然し夏になると此の陰陽が交代して陽は空中に陰は地中に沈む故、空は暑く地中は寒冷となるのだそうである。然も此の陰陽の交代する時分が丁度春先で其頃が最も雷が多いと稱して居る。其れ故に雷の生ずるには時季があつて、丁度春先の雷は蟲出の雷とも云はれて居る。

初雷や鮎の鵜のくゝとなく　　子規

從つて時季を失した雷は迷信の種となる譯である。然しそれ

どても低氣壓に伴ふ雷ならば冬起らうと秋鳴らうと實は一向不思議も無い筈ではあるが。晉書には

非時而雷君失政賊臣將起。

と記されて居る。

九、地震

先づ天界の現象は此の位にして次は地界の現象に移るが、其の中の最たるものは何と云ふても地震である。昔の諺に地震かみなりと一言に云はれて居るが全く地震と雷は其の源を同じうするものと考へられて居たらしい。前にも述べた如く陰陽交代の際には空中は虚であるから其の聲百里に瀰くのであるが地は實體であるから地を激動して地震を起すのであると云ふのである。又一說に地震は鯰公の尾鰭を振はすに依つて起ると云ふがあるが之が多分地中は通常陰氣が充滿せるのと、一方鯰は陰の魚であるとの考へとから來た說であるらしい。

兎に角我々としても大磐石であると賴みにして居る地面が地震の際には遠慮會釋もなく、縱横無盡に動くのであるから迷信も湧く譯である。先づ地震鎭めの迷信から云へば先づ指を鹿島の要石に屈する。之は日下部博士の信仰佛利二人行脚に依れば陽物たる要石を以て陰物たる鯰公をおさへたと云ふのである。

次には地震治めの歌と云ふのがある。寛文二年近畿、近江地方の强震の際には京都にも震害はあつたが其の時朝廷より地震治めの御製として洛中へ下された歌に

むねは八つ門は九つ戸は一つ身はいざなきの内にこそすめ

と云ふのがあり、之れを諸人門柱に貼つた由である。又地震守りの歌としては

天照るや大神宮の誓にて治むる御世ぞ目出度かりける。

石淸水八幡宮の誓にて民安穩ぞめでたかりける。

等と云ふのがある。又安政二年十月二日江戸の大地震の際には迷信もあつたであらうが大分ユーモアラスなものが作られて後世迄も殘されて居る。鮮人騷ぎで神經を尖らした神經質な現代とは違つて興味の深い事である。當時發行された安政見聞錄には早速地震を讀み込んだ市中雜十郎外良質のせりふ、とか三河萬歲とか又は地震火事厄拂へとか云ふものが載せてある。此中三河萬歲のはあまり知られて居らぬ樣であるから其れを拔萃して見よう。

得意場も御滿足とはお家も潰れずましんますイヤそうとうなりけるうら店の軒ぶちかへる柱には幼子を夢中でおぶつてあねへの方の手をひらいてイヤ新玉の樣なる泪をこぼして夜中に野宿のひだるさ、しるこにうめんかつぎ賣諸人のたべたる大燒場一統の柱はびりとをれ、二階の階子は迯るに難澁、三座の櫓は損亡今年、四文もださねばしわんぼう五ヶ所の御小屋は御仁心、六本の卒塔婆は即死の追善、質店は貨夜

具（中略）旦那さんも薄着ならおかみさんも薄着お釜の前の三助なんざまつ裸でかなてこや鶴ッぱしおんがらかいて、あつちこつちかつぼじれば小部屋の隅からおさんどんがでつかいけつをむくりやイヤむつくり／＼這出した。見舞に來たおかゆなんどてゝの椀に五六杯もかつくらつて、ひよつくり／＼まいる。騒動起した鯰なんぞはふんじばつて鹿島へ參る是れからはつゞいて能いこと許り來る。お客なんざア朝から晩迄引切なしに來る、あつちからも此方からも小判や小粒が來る廓千軒金は萬兩の御受納。

更に一方では地震の際に年號を改めると同時に各神社にて祈禱を修行させた等の事があつた。之れが爲めに地震は元年にのみ起るかの如き感を後世の人に抱しめる樣な珍現象が起つて居る。

例へば京都の大地震は天慶元年、貞元元年、文治元年、慶長元年、天保元年等に起つて居るのは皆地震に依つて改元して元年となつたからである。特に面白いのは元祿十六年十一月二十三日の關東大地震で此の時は太神宮、鹿島、香取神宮等にて天下泰平の祈禱を修したと同時に翌年は改元して寶永元年としたが實際地震活動は尙止まず寶永四年には富士山の噴火あり又同年東海道の大地震があつて有史以來の大地震の記錄を殘して居る。

斯樣に迷信が盛んに行はれる一方又諧謔的な狂歌などが殘されて居るのは頼母しい次第である。かの弘化四年信濃善光寺の御開帳に當つて不幸にも長野を中心とした大地震があつて善男善女數千の生命を奪つた際なども

死にたくば信濃へござれ善光寺うそはござらぬほん多善光。

の狂歌が出來て居る。

支那の舊史では「地の氣其の序を失はざれば」陰伏して出ず從つて地震は起らないが若し其の序を謬つて陰が盛んになり、陽伏して出ざる樣になると遂に地震が起る。故に地震は四方叛亂の兆であると說いて居る。面白い說である。

尙噴火の際にも平定の目的を以て當山鎭坐の神社に位階を奉つたり又は改元したと云ふ例もある。何れにしても地震、噴火共に我々如何ともすべからざる天災の大なるものであつて之れに依つて迷信の生ずるは當然な事であらうと考へられる。

支那から歸つて支那を語る

（國民革命を續る人々とその社會）

長永義正

二月堂の水取もすんだ三月の初、奈良の宿は『むさし野』の二階で、私は青疊に寝そべり反つて硝子戸越に外を眺めて居た。はや萌へ出た若草に三笠山はうす緑に彩られて、鹿に戯れる子供の姿や、團體の旗に引摺られて山を登る人の影が繪のように浮んで見える。この平和な落着いた風物を見るにつけても、あの騒々しい——戰爭、暴動、罷業、暗殺、排外の巷である上海が一層騒々しい殺伐な都だと思はれる。

寧波あたりの高樓から『ふりさけ見れば』春日なる奈良の都を戀しがつた朝衡（阿部仲麻呂）ではないが、上海の銀座——南京路の雜沓の眞中で、よく、支那人の無遠慮な手洟を浴る不安と饒舌の喧しさの無い日本の風物を想ひ出したものだ。實際、上海は——いや近頃の支那は騒々しい處である。

五六年前、支那通はよく『十年九亂』と云ふ言葉で支那の動亂過多に呆れたものだが、之は民國建設以來十年までの間に九年間毎年一回は動亂があつた事を指したものである。その民國十年の後、十六年を數へる今年まで、動亂は連年、年中行事のように繰返されて居る。先づ『十六年十五亂』と云ふ譯であるがこの二三年來と云ふものは單に動亂だけでは濟まなかつた。動亂の前後には排外暴動だとか、勞働者の罷業だとか、罷業に伴ふ暗殺だとか云ふ鳴物が入つて騒しさは一しほであつた。

鹿を呼ぶ笛の音が春日の森に流れて、薄墨の刷毛で撫でられるやうに硝子戸が暗くなつてゆく頃、大阪新聞の夕刊を女中が持つて來た。革命軍の上海占領が、大きな活字で頗るセンセーショナルに取扱れて居る。上海占領は何應欽氏の統卒する國民革命軍第一軍の先鋒隊に據つて爲されたのであらうが、この第一軍の中に私の忘れる事の出來ない王俊（達夫）氏なぞ交つて居

るのであらうと思ふと『やりをつたな』と私は心の中で叫んだ。

× × ×

昨年の二月、南支那を旅して汕頭から潮州を訪れたことがあつた。潮州と云へば韓退之が佛骨の表を上つて流謫された古の潮安の都である。潮州行の汽車に乗ろうと汕頭停車場にゆくと、一等も二等も賣切れで、三等客の支那人はおすな〳〵の盛況だつた。これでは、とても座席を得ることが出來まいと驛長室へ窮狀を訴へに行つた。日本語を多少解して居た驛長は特別な好意を寄せてくれた。

『一等も二等もあるんですがね、軍人が薩摩守をきめこむものですから普通のお客は切符を買つたところで乘れそうもありませんから切符を賣らないことにして居るんです。日本人なら軍人も多少遠慮しましようから切符を買つて乘つて御覽なさい。一等車はプラットフォームに繋いである列車にはありませんよ、あそこ迄歩いて下さい』と云つて、驛長は驛から二三丁も離れた機關庫の方を指した。

一等車は給水タンクの下にぽつねんと置かれてあつたが驛長の豫言の如く既に國民革命軍の一團の兵士が完全に占領して居た。日本人だと思つてか、流石に上級將校は從卒を追ひ出して坐席を設けてくれた。この置てきぼりの一等車を列車は忘れもせず末尾に繋いで走り出した頃、若々しい上級將校の一人は手抱の中から陳獨秀の譯した共産黨宣言を出して讀み初めた。康民尼斯特叢書を持つて居るものもあつた。『虎の卷を研究して居るな』と私は微笑を禁じ得なかつた。

汽車が蜜柑の産地として有名な鶴巢附近を通過する頃には、私はこの革命軍の若い將校等と口を利き合ふ位の親しさになつて居た。

『この邊の蜜柑は實に美味いですね。加州のオレンヂより美味いと思ひますよ』と私は累々として黃ばんで居る畑の蜜柑を車窓から親ながら將校の一人に話しかけた。

『蜜柑をお好ですか』と一人の將校がすぐにきゝ返した。

『蜜柑は餘り好きぢやないんですがね、特別にこの邊に出來る蜜柑だけは大好物ですね』私は決して御世辭に鶴巢の蜜柑を讃めたのではない。上海邊で喰ふ所謂汕頭蜜柑も美味いが、汕頭で喰ふ鶴巢の蜜柑は特別に美味い。奥蠻の地に流謫された韓退之の腹の蟲もこの蜜柑あつたが爲めに多少は落着いたらうと秘かに思つて居た程であつたから。

私の返事をきいた將校は一人の從卒を呼んで何事か命令した。暫くすると汽車が不意に止つた。窓から首を出すと、列車のどの窓からも慘事でも起つたのかと云ふやうな怪訝な顔が幾つ

も出て居た。その時、從卒の一人が汽車から飛下りて蜜柑畑の中へ飛込んでゆくのを見た。汽車は再び動き始め、從卒も還つて來た。

『熟した美味い蜜柑が無かつた由ですよ。御辛棒なさい』と數人の將校が殘念そうに私を慰めて與れた。蜜柑を御馳走しようと汽車を止めてくれた將校の親切には私は感泣した。私が蜜柑を喰ひたがつたのでまだ幸だつた。若し、サロメのようにヨカナハンの首が欲いんだア、と駄々をこねたとしたら事態は穩かに濟まなかつたらう。思へば親切が身に浸み過ぎる。蜜柑も喰はなくてよかつたと後で思つた。この元氣な將校連は、替る替る、國民革命軍の規律の正しいこと、北方軍閥のやうに惡事を働かぬ事、三民主義に基いて國民革命を遂行し中國を統一するんだ、と云ふやうな事を熱心に私に聽かしてくれた。

潮州の驛で將校連と別れた後、車中で交換した數枚の名刺を調べて見ると、中に國民革命軍第一軍第一師參謀長王俊と云ふ肩書のがあつた。蜜柑を御馳走してくれようとした親切な將校が誰であり、Communist Manifesto を讀んで居たのが誰であつたのか今は判然と憶えては居ないが國民革命軍第一軍と云へばいつも私はあの鶴巣の美味い蜜柑を思ひ出させられる。

× × ×

その當時から廣東政府が北伐軍を起すであらうとは誰にも想像できた。民國十三年に孫文の北伐が失敗に歸し續いて孫文が北京に客死して以來廣東政府は蔣介石氏が事實上の首腦者となり勞農露國の後援もあつて孜々として經營努力して居た。從つて廣東廣西の二省は先づ廣東政府の威令の及ぶ處となり中國の國民黨のモットウとする『國民革命』はいやが上にも宣揚せられ廣東政府の餘力が北に向ふのが當然の趨勢のやうでもあつた。

一體、『國民革命』は何を目的として居るかと云へば、孫文の言葉を借ると『獨立自由の國家を造成して國家及民衆の利益を擁護する』ことである。この國民革命の精神から觀ると、所謂北方の軍閥が日、英、米の帝國主義者と勾結して利權を賣り借款を興して私腹を肥して居ることは明らかに國家及民衆の利益を害し、獨立自由の國家を造成することを阻げる。從つて國民黨が國民革命を金華玉條として振廻す以上、斯の如き不良の軍閥を打倒し先づ國民革命の途上にある第一の障碍物を掃除せねばならない。

成程國民革命を黨是とする中國國民黨の構成する廣東政府にとつては北伐軍出師は當然の成行であつたらうが廣東の財政が果してよく北伐の軍費を捻出し得るであらうかと疑はれた。今日でも國民政府の財政は窮乏困憊の極に在るが北伐決行前に於

ても決して樂觀出來る財政狀態ではなかつた。

一錢五厘の端書で兵士を召集することの出來る我國と異つて支那の軍隊は兵一名に對し少くとも六元乃至十元の月給を拂つて傭入ねばならない。從つて三十萬の軍を動かせば兵卒の給料だけでも一ケ月三百萬元は要する。之に輸送費その他の軍費を合算すると一ケ月五百萬元の軍費を見込んで置かねばならない。北伐が一年續けば六千萬元の大仕事である。(廣東省の財政報告に據ると昨年九月に終る一ケ年間に於て全收入の八割に當る六千百餘萬元を軍事費として支出して居る。)假令、小銃や彈丸の供給は勞農露國が一手に引受けてくれるとしても廣東の財政がこの莫大の軍費を支出する事は容易でなかろうと思はれた。

事實、當時の廣東の財政は窮乏の極に在つた。從つて、廣東政府は石油專賣制度を設けて勞農露國から石油の供給を受けて居た。之は一面英米の石油を壓迫する目的を有して居たであろうが他面財政の窮迫を救ふ途でもあつたらしい。又廣東政府は中央銀行を設けて『流通貨幣』と稱する不換紙幣を盛んに發行して居た。

この廣東政府の中央銀行が發行する流通紙幣が不換紙幣なりや兌換紙幣なりやと云ふ問題で現國民政府財政部長宋子文氏と廣東の財政廳で大激論をしてしまつた事があつた。『流通貨幣』が不換紙幣であろうと兌換紙幣であろうと、私にとつては何んの問題でも無かつたが言葉の行懸り上、鋭い論旨を進めねばならぬ破目に双方共陷つた譯であつた。

後日、清水廣東總領事代理に『あれは日本の探偵ぢやないのか』と私の事を尋ねたと、聽いた。不換紙幣が餘程彼の感情を害したらしいが、この話をきいた時、彼の正直で眞摯な頭に一寸驚かされた。

宋子文氏、年は三十を三つ四つ越して居たろう、小肥のロイド目鏡をかけた立派な紳士であつた。彼は孫文未亡人宋慶齡氏の令弟であり、孫文の令息(孫文先夫人の子)孫科氏と共に國民政府中の歐米留學派に屬する錚々たる人物である。

あの貧乏の大世帶を切廻し、あれだけの大戰爭を繼續さしてゆくだけ彼の腕は凡ではない。我片岡藏相なら、とうの昔に財政上に『ほころび』をあけて居るのであろうが、年は若いが腕は兎に角、冴えて居る。然し何分、貧乏世帶遣繰の悲しさは苛斂誅求の跡をこゝかしこに止めて居る。

最近、廣東省で第二回の公債五百萬元を募集したが、香港對英經濟絕交以來火の消えたような廣東の財界では五百萬元の募債は實に容易でなかつた。尤も國民政府の資本家虐めに懲て資

本はとつくの昔に上海や香港に流出してしまつた關係もあつたろうが。家屋税の納入に公債を四分引で現金代用の納入を許して見たりしたが大した效果も無いようだつた。この公債の發行には餘程の苦心をしたものと見え公債賣捌人を各方面に派遣し强制的賣捌をやつた。我國のように、電車の停留場でメカホンを口に當てゝ『勸業債券をお買ひ下さい』と黃色い聲を張あげて居る程の手緩いやりかたではない。

この公債賣捌人の最も活躍したのは、妓院（遊女屋）であつた相だ。妓の前でやに下つて居る嫖客を捕へて『結構な御身分で、エイ公債を一枚どをぞお睛め下さい』と云へば、妓の前で一枚や二枚の公債をお買上になる位の面子(みえ)はどの支那人でも持合して居ようし、若し購ふのは厭だと云へば、公債賣捌人の後に控へて居る糾察隊員が『國家多端の際、斯んな處に鼻毛を延して居るとは不都合な奴だ』と脅かすは必定。捕つたが百年目で公債は賣れたらしい。縞の財布を空に費ひ果した嫖客に對しては又別に辦法がある。男の歸つた後で妓に公債を買はせる。厭だと云へば鑑札を召上られるし、泣く子と公債には流石に有名な廣東の紅裙連も弱つたらしい。

北伐軍出征の當時、汕頭、潮州の間では牛馬は愚か犬猫から脊柴の端切、豆腐に迄税金がかゝつて居た。最近では陸上に課税するものが無くなつたのか船頭に迄及んで、海洋汽船は五百元、洋舢板(えんばん)は四元といふように各種の船舶を區別して一律課税を始めて居る。

革命軍が武漢を占領し揚子江の中流に蟠居するに至つて、この宋子文氏の財政的辣腕は長江を震駭した。

第一は電氣水道に附加税を賦課し第二に家屋税を徵收した。高い家賃の家屋に對しては一年に二三ヶ月分の家賃を、低い家賃の家に對しては一ヶ月分の家賃を借家人から徵收した。借家人は家賃の代りに税金の受取證を家主に持參すればよろしいと云ふ譯である。借家人とすればどちらに拂つても一向差支へのない次第であるが、ベソをかいたのは家主である。家主が國民政府は赤化して居ると憤慨すれば、國民政府の方では社會政策的な徵税法ぢやないかと自負して居る。

二分五厘の關税附加税を最先に實施したのは武漢の國民政府である。(平素、國民政府の遣方を惡罵し、赤賊と稱して居る北方軍閥が二分五厘附加税問題だけは口を拭つて直に模倣したのは流石に支那人である)。次に國民政府は郵便切手を作つた。外國人の管理監督する北京政府の現行郵便制度に反抗する意味でもあろうし、又郵便收入を國民政府自から納めんとする魂膽で

もあらう。

ひと頃、漢口の街で、絹の衣服を着て歩くと奢侈税をとられたと。税金を拂ふと背なかへポンと納税済の印を押してくれた由だ。私の實見した話でないから出だとして置くが宋子文氏の金の取り途は拔目が無い。

孰れにしても、國民政府がその勢力の膨大につれ、正比例して財政の窮乏は著るしくなる。尤も上海を手中に納めれば彼處で取れる阿片の收入が數百萬元に上ろうから一時の凌ぎはつくであらうが各種の課税の裏には財政窮迫のさまが餘りに慘しくも覗はれる。この財政の窮迫が南方派の親日空氣を醸す潜れた一つの原因となつて居るとも見える。

『あわよくば、一つ日本に借款を申込んでやろう』位の下心は必ず出來て居そうなものである。

×　×　×

この財政的危機あるにも拘はらず昨年六月北伐の大擧を決行したのは一に國民革命軍總司令、蔣介石氏の果斷とこの果斷を誘致する好機會が到來した爲めであつた。當時湖南では、趙恒惕氏一派に屬する葉開鑫氏賀耀祖氏等と唐生智氏との間に湖南省長爭奪の爭ひが起つて居た。吳佩孚氏を背景とする趙氏一派は兎もすれば唐生智氏を壓迫しつゝあつたので、唐氏も事態自然の成行から廣東の國民革命軍に款を通ずるに至つた。廣東政府としては早晩、北伐の出師を斷行せねばならない時でもあつたし、この唐氏の申出を快諾し氏を國民革命軍第八軍長に任命して北伐の先鋒を務めさした。革命軍としては求めずして先鋒隊を得た譯で、この好機會を握つて北伐を決行するの果斷に出でた。

唐生智氏として見れば、北伐の大擧に加り先鋒隊として殊動をぬきんでたが、元々湖南省長の椅子を覗つた爭覇戰に革命軍の援助を得ようと、半ば利用の爲めに款を通じたのであるから湖南を平定し武漢さえも革命軍の手中に入つた今日未だ湖南省長の椅子を貰えないとすれば利用せんとした寧ろ利用された態である。從つて唐生智氏の身にとつて見れば國民革命なぞその成否はどうでも構はない譯で、早く湖南省長の椅子が欲しい、然るにこの椅子が與へられないとすれば心穏かでないのは當然である。玆に蔣介石を中心とする國民政府の武力派である所謂南昌派に對し好感を持てなくなつた。この不平滿々たる唐生智氏に對し秘かに秋波を與せ自家藥籠中のものとなさんとしたのが所謂武漢派、——即ちボロデイン氏を中心とする徐謙、鄧演達、陳友仁、陳公博氏の如き政治家の一團である。何故にこの武漢派が唐生智氏に對し笑顔を作つて寄り添つて來るかと云へば、「

彼等は所詮政治家としての存在より有して居ないから最後の大詰はいつも南昌派の武力に壓迫される懸念がある。この懸念に備へる爲めには南昌派に心平でない唐生智氏の如き軍隊の統率者を抱き込んで置くことが得策だと云ふ打算が成立するからである。この唐生智氏は今國民革命軍中に一軍長の地位を占めて居るもの丶根は北方軍閥と變らず地盤の欲しい手合である。地盤の關係でどちらへ轉ぶか判らない一軍閥である。共産主義の洗禮を受けて支那新政治家の典型だと自誇する武漢派の政治家連と、この一軍閥の聯繫はどこ迄續くかは疑問である。この政略結婚的聯繫に武漢派の惱みがあり唐生智氏心中の動搖がある。

× × ×

武漢派に對し南昌派の中心人物は何んと云つても國民革命軍の總大將蔣介石氏（號を中正と稱す）である。蔣介石氏の麾下には何應欽、朱培德、李濟琛、程潛、李宗仁氏等の軍人が集つて居るが張靜江、黃郛氏なぞの政治家も南昌派に屬して居る。

張靜江（人傑）氏はもと上海の裕富な商人であつたが孫文の革命思想に共鳴し巨財を獻げ早くから革命に隨伴して居た。從つて今では國民黨中の元老で左右兩派の軋轢のある場合など調停役として缺ぐ可らざる人物である。年來ひどい神經痛を病んで今は廬山に病軀を養つて居る筈である。この調停役の元老までも南昌派と目され武漢派から目の上の瘤扱ひを受けて居る裏面には南昌派と武漢派に思想的間隙が益々擴がりつゝある事を物語つて居る。

蔣介石氏は浙江省奉化縣方橋鄉の人である。彼の子供時代の生活は、石を投げて樹を傷めたり、鴉の巣へ火を放つて燒落すとか、お守りをいひつかつた赤坊の妹を放り出して遊び廻るとか並の子供と同樣の惡戲をして歩るいたらしいが、たゞ一つ珍らしく思へるのは、彼が「戰爭ごつこ」なぞ滅多にする事の無い支那人の子供の中で、獨り兵隊ごつこのがき大將をきめ込んで野良犬を追驅け廻つたと云ふ話である。

母の王太夫人は彼を橋のたもとに在る私塾に入れて讀書せしめた。私塾の周枕琴先生と云ふのが孔孟で凝つた村夫子であつたらしく、未來の革命軍總司令官をとても持あましたらしい。私塾の先生は『孺子教ゆ可らず』と匙を投げてしまつた。そこで彼は杭州の學校へ移つたが私塾に居る間も如何に惡戲はしても決して家へ逃げて歸ることはしなかつた。それは彼が母を非常に懼れたからだと傳へられて居る。彼は國民黨が未だ同盟會と稱して居た當時から革命に關係し、第二革命の時は江浙の間に轉戰し勇名を馳せて居た。日本の士官學校は孫傳芳氏や雲南

の唐繼堯氏、陝西の閻錫山氏等と同窓で士官學校卒業後暫く上海にブラ〳〵遊んで居た。この時であろう一時寧波の甲種商業學校の校長を勤め、後に上海證券物品交易所の經紀人の下働きをして居た。彼が二カヒ三ヤリの手を振つたかどうかはわからないが當時の彼を知つて居る上海の一商人が『彼があんな大立物になろうとは思はなかつた』としみ〳〵私に云つたことがあつた。この當時の出來ごとであろう。彼は上海の某旅館の一室に寓居して居たが、或夜外出先から還つてくると榻の上に五尺餘りの大蛇が長々と寢て居た。彼は靜かにこの蛇を戶外に出して少しも傷けなかつた。傍人が其故を問ふた時、彼は『龍は能く天に上る、我も大望を懷いて居る身である』と答へた。之を聽いて人々は、また蔣介石の夢囈が初つたと笑つた。

彼が廣東へ赴き、孫文の下に活躍する樣になつたのは其後である。彼が廣東へ赴く時、上海の實業家某氏は三萬元を餞別として贈つた。この三萬元が或意味に於て彼の出世の緒口であつた。蔣介石氏の人となりに就ては二樣の觀方がある。蔣氏の人となりを偲ぶために二三の挿話を語らねばならぬ。蔣介石氏が革命軍總司令として、廣東の總司令部に納つて居る時、昔の私塾の周先生が彼を訪ねて往つた。周先生は昔の門人であるから喜んで遇つたくれた上、師に對する禮を執つてくれるであらうと思つて居たが、會見は之と反對に蔣介石氏は起立もせず、たゞ頤の先で挨拶をしたゞけで周先生の方が寧ろ威厳に感じ直立不動、慇懃な敬禮をしなくてはならなかつたと云ふ話である。

北方軍閥の張宗昌氏が李徵五氏（上海きつての青幫の大親分である）に對し口に『老師』と稱へ鄭重なる師禮を執るに對し、古い典型の支那人は新舊軍閥巨頭の態度の相違に呆れ返つて居る。

支那共產黨の創設者とも云ふ可き陳獨秀の有名な『孔子之道不合現代生活』といふ論文以來、新支那の一面には孔流は相當の虐待を受けて居る。その虐遇の最も端的に現れたのは、最近國民政府が孔子廟の祭祀を中止してその費用を教育費に流用してしまつた事である。新支那に於ける孔流は一の幻滅である。蔣介石氏に從つて形式的な師弟の禮なぞが尙ばれよう譯が無い。それに關して面白い一つの挿話が最近の支那新聞に掲げられた。その大意は斯うである。

祥泰公司の新祥泰號に九江から乘船した寧波生れの一婦人があつた。賤しい身なりをして竹苦に面やつれはして居るが、何となく因緣のありそうな女性であつた。無聊に苦む乘合の客を前に、この婦人は次の樣な話をした。

『妾はもとの蔣介石の妻です。蔣と結婚してもう十年にもた

りますので、今でも蔣姓を名のつて居ります。蔣が廣東で名を擧げる樣になつてから妾の父は廣東へ赴き、蔣に妾を引取るように申したのですが、僅か數十元の金を與へられて追ひ返されました。蔣は夫婦の恩義を知らない男です。妾の父は既に亡なり、家產も無いので其日の暮しにも困る始末になりました。蔣が大官になつた今日、このみすぼらしい身なりでは誰も蔣の妻だとは認めてくれません。また蔣も妾を妻だとは呼んでくれませんでしようが、この窮迫した生活を知らしたならば、せめて多少の金は惠んでくれるだろうと思ひましたので漢口から九江、南昌へと蔣の跡を尋ね歩きました。南昌では城內の小客棧に十數日も泊つて人に賴んで手紙を屆けてもらひましたら、反つて警察に拘禁せられると云ふ譯で、しまひには總司令部の門前で哭き乍ら訴へましたが誰も相手にしてくれる人さえもありませんでした。斯な有樣で他國で流浪の悲を味ひましたが、幸ひ同鄕の人に旅費を戴いて上海へ歸ろうとする處です」

兩眼は紅に、淚は下つて襟を沾し、悲痛に耐へざるものがあつた。

斯樣な話は支那小說の常套的な筋で珍らしくは無いが、主人公が支那現代の大立物だけに多少の取得はあろう。その話の眞僞はもとより私の保證し得る處では無いが現在の蔣介石氏夫人は二度目の妻である事だけは事實である。

蔣介石氏と昵懇の間柄である二三の日本人が彼に就て語る處を綜合すると、彼は寡言默行、情誼に篤い、支那人としては珍らしく嘘を吐かない男であると云ふ事である。國民黨の顧問をして居た某氏の如き、東京に殘してあつた家族に對し久しい間、生活費を送つて居た人が誰であつたか判らなかつたが、遂に蔣介石氏が匿名で每月送金して居た事が判然してその厚情に感泣した由である。孰れにしても五十萬の大兵を統率し、長江以南の支那を席捲する大事業をなし得る人物であるだけ常人に優れた性格と氣品を持つて居る事だけは疑ひの餘地が無い。一時、彼は臺灣籍の日本人ではなかろうかと云ふ噂が立つた。彼の容貌と氣質が餘りに日本人に似て居るからであつた。容貌は兎も角、彼の氣質が日本人に似て居ると云ふ一點で複雜な支那に處してゆく彼の將來が案じられる。

× × ×

蔣介石氏の統率する國民革命軍が湖南、福建、江西、浙江、江蘇の各地方で戰勝を重ねてゐる、その裏面には相當の理由がなくてはならない。昨年の六月蔣介石氏が廣東境の韶關を出て北伐の壯途に就いた時、その實力は約九六萬の軍に過ぎなかつ

た。この五六萬の軍隊の核心は彼が二三年來必死の努力で教育陶冶した黃埔の軍官學校（現在では軍事政治學校と改稱されて居る）の卒業生であつた。この軍官學校の卒業生は數に於ては三四千に過ぎなかつたが、三民主義と國民革命の精神がみつしりたゝき込れ、革命と主義に生死を托した青年のみであつた。從つて彼等は戰場に於ては常に決死的活躍をなした。從來支那の軍隊では容易に行はれない夜間移動や、拂曉戰や、間道を迴る奇襲を試みて意外の成功を納めた。

また、國民革命軍には連坐法と稱する特別の軍規があつた。この連坐法は簡單に云へば小隊長が退却しない前に兵卒が退去すれば兵卒全部銃殺、兵卒の退却前に小隊長獨り退却すれば小隊長銃殺といふ風に必要以外の退却を嚴罰するの軍規であつた。この連坐法の爲めに兵卒は退却して銃殺されるよりも、寧ろ敵地に勇戰して死地に活路を求めるの態度に出た。戰意のなかつた吳佩孚の軍隊が敗戰したのは當然として、支那軍隊の中でも奉天軍と並んで優秀と稱された孫傳芳氏の直轄軍が江西の一戰で一敗地にまみれた所以は玆に在つた。

民衆の好感を得ようと努力した事も革命軍戰勝の一因をなして居る。例へば漢口に於て吳佩孚軍の食料米を占領すれば之を下層民に廉賣した。革命軍の進む處、民家を徵發して宿舍に充てる樣な北方軍隊の慣行し來つた事を爲さなかつた。彼等は露營した。又食料品の如きも中央銀行劵で代金を支拂、沒取はしなかつた。支那では軍隊の通過した跡は草も生へないとまで嫌厭されて居たのであるが、革命軍はこの民衆の豫期に反してあまり多くの禍害を殘さなかつた。斯うして多少民衆の好感が擡頭した處へ軍隊に附屬する政治部員が三民主義、國民革命の宣傳に努力し人氣を煽つた。多數の無智な民衆が思想的宣傳を了解しよう筈がない。三民主義とは『賃銀を三倍くれる』ことであると勞働者は解し、共產主義とは『人の物は俺の物、俺の物は俺の物』と田舍の慾ばり親爺が解釋しようと、一向かまはず宣傳された。宣傳の効果は革命軍の作戰に多大の便宜を與へた。附近の住民が敵陣の動靜を傳へ、郵便配達夫が間道を敎へて奇襲に便ならしめた。革命軍の行つた各種の戰策の中、最も新奇のものは所謂便衣隊である。便衣隊とは平服を着た軍隊と云ふ意味で軍事政治學校の卒業生又は國民黨々員の青年が之を組織して居る。便衣隊は商人に化け、苦力に化けて敵の都市へ入込み間諜の役目を勤める。間諜のみでは無い三民主義の宣傳をしたり、敵軍に不利の傳言を放つて民心を攪亂する。或る場合には武裝し、勞働者を煽動して擾亂を起さしめる。革命軍の上海占領に先つて、この數千の便衣隊は種々の流言蜚語を放つ

て上海を極度に不安な都に陷入れてしまつた。

孫傳芳氏が三民主義に做つて舊式な三愛主義を提唱したように、山東軍が便衣隊を倣つて宣講隊を組織したがその効果は全く無かつたと云ひ得る。

この新奇の考案であり、著るしい效果のあつた便衣隊も上海占領の爲めに、武裝せしめた事が革命軍としては今日著しい禍根を爲して居る。敵の勢力圈内に入つて活動するのであるから捕へられたら生命は當然ないものと覺悟せねばならない。斯樣に危險な決死的任務に就かうとする青年は國民革命の熱心な支持者であるか又は帝國主義に對し極めて濃厚な嫌厭の感情を懷く、換言すれば左傾的思想を有する青年である。『國際都市上海』を掌握した蔣介石氏が、國際關係を愼重に考慮して緩和的態度に轉ぜんとするのは當然の歸趨であるが、この歸趨を無暴なる熱血に燃ゆる便衣隊の青年が許容するとは思はれない。玆に、蔣介石氏の態度を軟化し、右化したと觀ての反感が起る。蔣介石氏が便衣隊の武裝を解除せんとした時彼等は擧つて反抗した。現在、蔣氏は彼等の武裝解除を斷念して居る模樣である。之が將來蔣氏にとつては惱みの種にならう。例へば、蔣氏が圓滑なる國際關係を維持する爲め溫和手段を講じたとすると之に反對する彼等は外國人官吏を暗殺するなり又は外國人を虐殺するたりして蔣氏の地位を顚覆せしめるの方策に出でないとも限らない。彼等の心理を洞察すれば斯の如き不祥事件の發生も想像されないでは無い。

× × ×

日本人の支那問題に對する錯誤は速斷から來る。あの複雜な社會相を有する支那の事物を、一二の現象を基礎に結論を下すことが錯誤の原因である。常に『例外』と『變化』とを持つのが支那である。今日の淵は明日の瀨になるのが支那の社會である。上海を流れる黃埔江の水が、水面と河底とは相逆流して居るように、右と左と、勞と資と、文と武が相錯交し渦紋を構成して居るのが今日の中華民國である。支那に對する早がつてんと速斷は喜劇と悲劇を齎らす。

戴天仇氏の渡日に對する我國朝野の態度は先づ喜劇に屬する。上海に、國民黨代表として戴氏の渡日說が傳つた時、國民黨關係者は『それは亡命だらう』と稱して信じなかつた。若し國民黨の代表を渡日せしむ可き必要があるならば既に過去の人と目されて居る戴氏を日本に派遣するの理由が無い、それ程、國民黨は人材が拂底しては居ないと云ふのが亡命說推測の一理由であつた。戴氏が廣東の中山大學の校長として赴任して後、左右兩派の學生から挾擊され、青年間に人氣を失墜した事や、國民

政府部内において彼の地位が置いてきぼりの態に在る事等から彼が局面展開策を講ずるの必要を痛感して居た事は何人にも察し得られた。この時に、『國民政府の對日政策如何』と云ふやうな問題が我國で想論せられて居たのを慧眼な彼が利用して一芝居——彼自からの爲めに——打つのであらうとは彼の赴日説を半信半疑ながら肯定する者の推説であつた。この戴天仇氏が花のお江戸で『國民政府赴日專使』と云ふ名刺を振廻して居るのには敢て驚く必要はなかつたが、戴氏を擔ぎ廻つた我朝野の早がつてんに呆れざるを得なかつた。戴氏は如何なるミツシヨンを齎らし、如何なるお土産を持つて歸つたのであらうか。

早がつてん、速斷も喜劇として笑つて居られる内はよいが、速斷の錯誤が笑ふ事は勿論、泣くにも泣けない悲劇を齎らしたのが南京事件である。國民革命軍の軍規が嚴正であり、掠奪暴行なぞは決してしないと云ふ事は革命軍自からの宣傳と共を實見した日本人の口からも傳へられて居た。概して、陸軍が北方軍閥に肩入するに對し新興の南方軍閥即ち國民革命軍に好感を持つて居た海軍がこの軍規嚴正に信を置いて居た事は容易に想像され得る。革命軍の軍規の嚴正を信ずるはよろしいが、茲に變化と例外の存在するを忘れて速斷した事が錯誤の原因であつた。國民革命軍の中堅部隊、即ち蔣介石氏の直轄軍隊が北方の軍閥に較べて嚴正なる軍規を有して居た事は事實であるとしても、支那の勝戰は雪達磨を轉すやうに軍隊が膨脹してゆく事實を忘れてはならなかつた筈である。今日の革命軍中には昨年の六月北伐決行の當時の軍隊と異つた素質——戰勝の結果新に正規軍として編入された——の軍隊が混入して居る。從つて革命軍が上海を占領すると同時に、一部の軍が太湖の裏を廻つて一擧南京を攫んとしつゝあつた時、居留民保護の任に當る遣外艦隊の責任者は南京の守備を嚴重にするの必要があつた。この必要を痛感しなかつたのは革命軍の軍規は常に嚴正であると云ふ速斷に頼り過ぎた結果であると觀られる。

× × ×

水は温み、楊柳は綠に、江南の春は今酣であらうが、この閑かであるべき春色にそむいて、事態は益々、紛糾を重ねんとして居る。南京事件が如何に解決するか、蔣介石氏と列國の關係が如何に展開するか、更に武漢を顧れば、共産、非共産の葛藤はまさに暗雲低迷の趣がある。語る可き材料の多きに對し私は春宵の徒に短きを託たなければならない。(三月三十日記)

松助閑話（二）

尾上松助（談）
邦枝完二（稿）

○

へえ、左様ですともお前さん。何の商賣だつて、もうこれでいいといふ、行き止りなんてものの、あらう譯がありません。そのうちでも「藝」で身を立てる者には、安心といふことは大の禁物ですよ。いくら年を取つても、一旦舞台へ踏み出した以上は、唯々一生懸命が命なんで。……

○

ですがかう年を取ると、意久地がありませんね、どうも。——私ア自分を見て戴かうなんてことより、立者のお邪魔にならねえやうにと、そればツかりに苦労して来ましたよ。何んでも役者は、その身分だけの、分を守つて働いてさへすればよう御座いますが、こいつをひとつ間違へると、飛んだ申譯のないことになりますからねえ、もし。

○

十八の夏でした。（完二曰く、萬延元年の夏の事也）その時分私アまだ勘子と云つてましたが、三代目三十郎さんに連れられて、初めて甲府の芝居へ行つたことがありました。名題は三十郎さんに田之助さんのお二人で、「伊賀越」「嫗山姥」なんて物が出ましたが、何しろ今と違つて、江戸芝居がめづらしかつた當時ですから、甲府あたりへ出掛けると、半月は楽に打てたもんです。——ところが愈々乗込んで見ますと、座附の三味線が、どうもその、まるツきりお話にも何んにもならねえんで。……私と松次郎といふ二人が、利かねえ氣でしたから、そんな三味線ぢや江戸役者は踊

れねえツて、まア止せばいいのに、いつぱしの役者のつもりで、やまひづかせ（註、病み付かしむるより來れる樂屋の通語にて嘲罵するの意也）を云つてやつたんです。するとお前さん、その晩三十郎から、私と松次郎に直ぐ宿まで來いと云ふ使ひぢやありませんか。何事かと思つて、早速行つて見ますと、浴衣掛けでおいでなすつた三十郎は、居ずまゐを直して、さて、かう云はれました。

「勘子、松次郎、お前達は若造のくせに生意氣な事ア云ふもんぢやねえぞ。あの三味線で踊りにくいなア、お前よりおれの方が、丁場が長いだけに、もつとこたへらアな。だが、おれア旅だと思ふから、何一つ云やアしねえ。第一お前達ア、三味線を踊に合せて貰はうと思つてるのが、量見違ひだぜ。先が拙けりや、こつちの踊を三味線の方へ合せてやんねえ、おれア毎日さうしてるんだ。お前達だつて役者なんだから、そのくらゐな藝は出來るだらう。永喜の三津五郎（註、深川永喜に住みて名人と云はれし人也）でさへ、旅へ出りやア、向ふの絃で芝居をしたぢやアねえか」

私ア聽いてるうちに、腋の下から、水のやうな汗が流れて來て、唯もう恐れ入つてしまひました。――こつちの踊を、三味線の方へ合せてやる。――いやどうも、大そうなものだと、つくづく頭が下りましたよ。ろくな腕もねえくせに、手前勝手のことばかり云つてたあの時分を思ふと、どなたにも、申譯のないやうな氣がします。

○

今の左團次さんが、ぼたんといふ子役で、舞台へ出て間もなく、新富町で「大徳寺」を出しましたが、この時三法師君で團十郎さんの秀吉に抱かれてゐたぼたんさんが、いい心持に舞台で寢ちまつて、流石の親方を困らせたことがありました。今でも左團次さんと御一緒になるたんびに、あれを思ひ出して、おかしくなることがありますよ、はい。

○

澤正といふお人の舞台は、まだ拜見したことがありません。何んでも大そう立廻りがいいさうですが。……去年、浪子さんが一緒の時に、連中の切符を取つとくから、是非見に來いと云はれて、そのつもりでゐましたところ、何かの都合で、やつぱり行かれませんでした。それアもう、お若くて威勢のいい舞台ださうですから、面白いにや違ひ御座んすまい。一度ひとつ、都合を見てお供をしませう。

○

近頃は芝居で、色々目新らしいことをやりますが、何んと云つても、新物の元祖は五代目ですよ。明治の初めに中村座でやりました「音響曲駒鞭」なんて淨瑠璃物は、五代目や私共が、みんな異人や南京人になつて、囃子方は、西洋喇叭だの、オルゴオルなんて物を使つたんですから、大新しでした。何しろお前さん、六十年から前の話ですからね。凝りやの師匠は、こんなことになると、夜つぴて夢中で考へたものでした。

○

新らしいと云へば、これもたしか明治四年の、中村座だつたと思ひますが、五十三次の猫で、羅漢や薄雲の幽靈なんかの出る、だんまりをやつたことがありましたよ。このだんまりに、師匠ははじめ座頭のこしらへで出て來ましたが、さぐりのうちに、これも座頭の私と杖がぶつかると、「こそれ」といふのがキツカケで、師匠は淺葱の頭巾を脱ぐ。するとこれが日本駄衛門に變つて、私に寶物を渡しながら、袴の股立を取ると、當時新物の彰義隊の頭といふ趣向です。ご見物がオヤと思つてゐるうちに、師匠は帯の間から、大型の懐中時計を取出しますが、折からの上野の鐘のゴーンと鳴るのが相圖で、かういふセリフに掛ります。

「今宵ももはや十二時なれば、これから先がこつちの仕事、めくらさぐりの宵闇も、隈なく晴れし秋の夜の、月をよすがに出かけようか」

ここで竹笛の合方になると、直ぐにその頃はやりの、唐詩選を裏で聞かせながら、引込みになるのでが、師匠は、初日にやつた囃子部屋の詩吟が氣に入らないといふので、二日目からは、三溪といふ淡法師を雇つて、この詩吟をやらせましてす。——何しろ懐中時計が、むやみに珍らしい時分でしたし、九つを十二時といふお人は、官員さんに極つてゐた當時でしたから、この師匠のせりふは、大受けに受けましたよ。

○

御維新になる前の年の夏（註、慶應三年七月）市村座で「累」を出したことがありましたが、この時は水中の怪談といふので、花道を川に見立てて、本水を使ひました。花道の板をすつかり上げて、一杯に張つた水の上を、累の死骸が流れて來るといふ仕掛です。珍らしいには違ひありませんが、今と異つて、水道がある譯ぢやなし、あれだけの水を換へるといふのは大事ですから、毎日その儘にして置いたんで。……何しろ暑い盛りですし、それにお前さん、溜り水を打ちやつてあるんだから堪りません

や。半月ばかりのうちに水が腐つて、累の亡靈をやつてる師匠(注、菊五郎の家橘時代也)は、すつかり胸を惡くしてしまひました。

そんなこんなで、この芝居はひどい不入でしたが、丁度市村竹之丞さんの百五十回忌とあつて、大切りに付けた「法燈籠」に、師匠が宙乘りの燈籠を滑り拔ける所作事がありましたので、洒落者がこんなことを申しました。

「かさねて見ずに通らう。おかずがないから水粥でげす」

この後も市村座は不入續きで、明治五年に、とうとう山村座と變りました。

○

私が覺えてから、一番人氣のあつたのは、今の歌右衞門さんの御養父の芝翫さんでせう。繪に描いたよりもいい男だといふ、評判のあつたくらゐのお人で、眼などは水が垂れるやうでした。繪師の國周さんが、或る時樂屋へおいでなすつて、「芝翫さんといふ人は、いくら骨を折つても、繪より本物の方が綺麗なんだから、何うにも張合がねえよ」と仰しやつたことがありましたが、まつたくかう、男が見ても、惚れ惚れするやうなお人でした。

○

田之助さんが、横濱のヘボンさんのところで脚を切つたのは、丁度三田の薩摩屋敷の燒打の日でした。私は品川まで用達しに行つて、今日高助さんや、田之助さんの姉のお歌さん、それに芝居茶屋の紀の國屋さんなどが連判で、脚を切りに横濱へ出掛けたといふ話を聞いて、びつくりしましたよ。——用達しを濟ませて三田まで來ますと、薩摩屋敷がやられてるといふので、大變な騷ぎ。仕方なしに池上を廻つて歸つて來ましたが、歸つて來てから尾登五郎にその話をしますと、食べかけてたおまんまを途中で止して、驅け出して行きました。珍らしい事があると、待て暫しはない男でしたからねえ。それだけに、何かにつけて凝り屋で、師匠のためには、色々役に立つ小道具なども拵へましてす。

○

左樣、五代目は芝居道でも有名な凝り性なお人でしたから、書拔でも衣裳でも、びつくりする程丹念なものでしたよ。衣裳の生地なんぞ、少し込み入つた物だと、いちいちその切れ地を取つて、書拔のはじへ貼つといたんですからね。それもご自分

のばかりぢやなく、相手役のものまで、克明に取つとくんですから、なみ大抵のことぢやアありません。團十郎さんの「高時」の衣裳を、型の置き具合まで記してあつたのを見て、私アその心掛けに驚いたことがありました。

これがあの震災で「茨木」の腕一本の外は、みんな焼けでしまつたんですから、芝居道に取つちやア大した譯のもんです。その當時六代目さんにお目に掛つて、このことをお話ししますと、六代目さんは、「なアにとつつあん、親父の書拔なんて物ア、おいらに取つちやア目安のやうなもんだから、入りやアしねえよ」つて、凉しい顏でおいででした。いいやどうも、五代目が豪いお人だけに、六代目さんも大さうなもんだと、その時私ア泌々思ひましたよ。

○

六代目さんの踊は、流石に團十郎の親方から、みつちり叱れて覺えただけに、見てゐても、有難いやうな氣がします。道行の忠信なんぞと來たら、お世辭のないところ、眞似手はありますまい。これに就て面白い話がありますんで。……或る時六代目さんが、築地のお宅で、この忠信を浚つたんですが、いくら骨を折つても、團十郎は、いいとは仰しやらない。そこで六代目さんが、「小父さん、どこが一番惡いんです」と訊くと、團十郎は、「一番みつともないのは、見物に鼻の穴の見えるところだ」と仰しやつたさうです。なる程と悟つた六代目さんは、それからまた、ああやり、かうやりして、幾度も繰返して見ますが、やつぱり團十郎は、それでいいとは云つて下さらない。そこで六代目さんは、團十郎が厠へ立つた際に、あわてて柱へ小さな紙を貼つて、それを目安に踊つて見ました。「小父さん、今度は？」「幸、お前私の留守に、仕掛をしておいたな」——六代目さんは、返事が出來ないくらゐ驚いたさうですが、これ程にして修行をした藝だけに、人の及ばない、確りしたところがお出來になつたに違ひありません。

○

今では大抵のお人が、色々な役をやれますから、名題下にゐたつて、腕を見せるのに、大した苦勞はいりませんが、昔は稻荷町（註、俳優中一番の下廻り役者也）にゐて、腕を見せやうといふのは、並大抵の話ぢやありませんでした。第一お前さん、夜の白々明けから芝居をしてるんですから、少し氣の利いた方達は、みんなお宅で寝てゐて、見てなんぞ下さりやしません。今のやうに、舞台へ蒸汽が通つてて、默つてゐても、暖かいのとは、てんから

譯が違ひましたよ。冬場なんぞ、まだ見物が五人か七人しかゐない中で、それでも一生懸命にやつたもんです。

○

猿若町の芝居の順序を申しますと、一番が這入つて、のつけにやるのが、何座も極つた「三番叟」です。この役者は稲荷町から出すので、囃子もやつぱり見習が勤めました。

その次が脇狂言です。これはその座にちやんと極つた狂言がありましたんで。……中村座が「酒呑童子」市村座が「七福人」守田座が「甲子待」河原崎座が「二人猩猩」でした。これもみんな稲荷町の役になつてましてです。

それから序開。つまり惡魔を退治るといふのが序開の筋でして、型のやうに上手が鳥居、下手が藪疊になつてゐました。この作者は見習の役で、三枚目か四枚目が三味線に手を付けると、振付の二枚目が振を付けたものです。仕出しはその時分はやつた、商人のこしらへなんかが多う御座んした。これも稲荷町のいいところが勤めましたが、岩戸囃子になると、まづ下手の藪疊から怪しい奴が出て、「まんまと寶藏に忍び入り」といふやうなセリフがある。すると上手から、武士が出て曲者を捕まへる。「いざ正體を現はしくれん」なんてえのが極りのセリフで、とど曲者は「斯くなる上は何をか包まん、まこと我れこそは、何々の生靈なるわ」となる。今にも斬られやうとするところへ、鳥居から神主が出て來てこれを助ける。そこで命を救はれた恩返しにといふので、その生靈が「何が何してこの上は、榾繁昌祈り申さん」のセリフで、幕になるといふのが筋でした。

これが濟むと、二つ目に移ります。二つ目は中通り(註、名題下中軸の也)の芝居で、十一月の顔見世狂言には、きつと寶物を取る奴を出したものです。

この四つが濟んでから、始めて本狂言、つまり今いふ一番目に掛るんですから、稲荷町なんかにゐた日には、よつぽど間がよくないと、お客の目にとまるやうな事は、ありやあしません。

——それでも、みんな役者にならうつて覺悟ですから、愚痴をいふ者なんさ、一人だつてありませんでしたよ。今のお人はどうも、役者になるのと、工場へ通ふのと、同じ量見でおいでなさるんだから困ります。

○

よく御見物衆は、役者が氣を入れるとか、入れないとか仰しやいますが、役者が舞臺で氣を入れなかつた日には、どんな芝居だつて、出來る譯のものぢやアありません。他のお人は識ら

ず、私は餓鬼の時分から、今日まで、どんな仕勝手の悪い役でも、氣を入れずにやつたことなどは、唯の一度もありやしません。それが勤めだと思ひますよ。

○

木戸幸元さんを振つたとかで、名前を上げた吉原の今紫といふ花魁が、三崎座の女役者になつた時は、大そうな評判でした。三崎座ぢや阿古屋をやつただけでしたが、あれからぢきによして、やつぱり女役者で、旅を廻つてたさうです。何んでも駿府の二長町へ行つた時、二長町の花魁に、八文字の蹈み方を教へてやると云つたさうですが、今時用のあるもんぢやないから、いやだと云ふんで、一人も習ふ者がなかつたとか聞きました。

○

毒婦で名高い夜嵐お絹は、猿若町一町目の、芝居新道に住んでゐましたから、私アよく通り掛りに見たもんです。二十二三の、高橋おでんなんぞとは違つて、ぞツとする程色つぽい女でしたよ。家の師匠なんかも、お絹がお仕置になつた後で、「まつたく首にするなア惜しいやうな、いい女だつたなア」と云つてました。この話は御承知の方もおありでせうが、お絹はもと三社様の茶見世の女で、それを小林金平といふ旦那に囲はれて、芝居新道に住んでゐたんです。はじめ三津五郎さんを、大そう贔負にしてゐましたが、そのうち何うしたはづみか、當時賣り出しの璃寛さんとああいふことになつて、旦那を岩見銀山鼠取りで殺したといふ一件です。このお絹が、千住で討首になつた時、師匠は見に行きましたが、私ア小氣味が悪いと思つて、行かずにしまひました。師匠の話を聞いて、あとから幸藏が駈け着けた時には、お絹の首は、もう仕置場の上に載つてたさうです。

○

もとは、部屋の蠟燭は、男衆の持ちになつてゐました。つまり男衆の身上（註、給金の意也）といふものは、表（座の勘定方）から、蠟燭代といふ名目で出ましたので。……ですからその時分は正直なもので、男衆は、決して無駄な明りなんかつけやしません。一分でも餘計蠟燭を殘しといて、また明日使はふといふ量見でしたよ。ところが開化になつて、ランプが出來ると、自然蠟燭はいらなくなつてしまひましたので、その代りに足袋を持ちにするといふことになりました。この時もやつぱり、男衆は今まで粗末にしてゐた足袋を、急に大事にするといふ仕末で、舞台から

引込んで來ると、一番先へ足袋を脱ぐやうな仕末でした。

丁度歌舞伎座を、大河内さんがやるやうになつた時、大河内さんはこれをきつかけに、「役者が自分で使つてゐる男衆にまで、座元から給金を出すのは理窟にないから、今後止めにしようぢやないか」と云はれましたが、これを聞いた田村さんが、うまいことを云ひました。「大河内さん、お前さんも藝者遊びをする人なら、考へておやんなさい。藝者に玉祝義を拂つたから、箱屋にはやらくなつてもいいと云ふなア野暮でせう。箱屋だつて、祝義の欲しさに異りはありますまいよ」――默つて聞いてた大河内さんは「よろしい、判つた判つた」と云つて、蝋燭も足袋もなしに、男衆に座元から給金を出すやうになりました。この時の樣が、いまだに續いてるやうなわけです。

○

明治八年に、新富座で「明治年間東日記」といふ狂言を出したことがありましたが、この狂言が極つた時に、紀州樣の御家老とかいふお人が見えて、「今度の芝居は、きつと當らねえよ。なぜつて、男はまだいいが、女は維新の恐かつたことを、一人だつて忘れちやアゐねえだから、たとへ芝居だつて、もう一度あんな目に遇ふのはいやだらうからな」と云はれました。この方のお言葉通り、芝居はちつとも入りがありませんでしたよ。

○

今の小道具の藤浪の出來る前までは、中村座には蔦屋、市村座には常盤屋、守田座には潜屋といふ小道具師がゐたもんです。ところが明治五年に、市村座が潰れて山村座となつた時に、肝心の小道具師常盤屋の富さんが、大阪へ落ちてしまつてゐないといふので、大騷ぎになりました。そこで仕切場の茶番(小使の意)をしてゐた與兵衛が、蔦屋の弟の米さんに相談して、どうにか小道具を間に合せたんで。……これが藤浪の始まりです。

○

「關の扉」のうしろは、黒幕に極つてたもんですが、いつか雪の山の書割になつてしまひました。見た眼にも、どうも黒幕の方がいいやうですが、如何です。それに、關兵衛の持つ鉞は、上が三段の山で、中に五筋の火焔のあるのが本當ですのに、時丸形の中に、小の字のあるのを使つてるとか聞きました。あれは金太郎の鉞を、間違ひてゐるので御座いますよ。

○

立木で、根こぎにする松は小道具、立つた儘の物は大道具。夾捧刺股が小道具、下の飾り鑊が大道具。馬の胴は小道具、股引（脚）は衣裳、馬具は小道具。犬の頭は小道具、縫ぐるみは衣裳。鼠も同じ。大小と鎧は、今でこそ小道具の係りですが、もとは衣裳の係りでした。

藏衣裳といふのは、太夫元（興行師の事也）の藏にある衣裳のことで、表衣裳といふのは、勘定場の方で、別に金を出して拵へる衣裳のことです。木綿の黒四天は藏衣裳。これが繻子だと表衣裳になります。藏衣裳は、いつも十二番（十二組也）しか出さないことになつてますので、中通り十二人、稲荷町八人と、都合二十人出る時には、八人分だけは、表衣裳になりました。――今では何もかも座方持ですから、こんな面倒はありませんが、昔はかういふことになつてゐたものです。

○

小道具の馬は、もとは腹がなくて、まわりにのれんのやうなきれが、ぶら下つてゐたものですが、中村座の嵐芳といふ小道具屋が、初めて腹を拵らへました。吉原に夜櫻が始まると、仲之町の左側の燈籠は、この嵐芳が請合ひ、右側は花増がやつてゐました。

○

切首や面は、禿げるといけないといふので、みんな布張になつてたもんですが、今ぢやまた殘らず塗になりました。

○

煙硝、火焔、雪、血紅、鐵砲の音などは、市村、守田、河原崎三座共大道具の係りでしたが、中村座だけは、小道具の係りになつてゐました。近頃は色々いい物が出來ましたから、不自由はありませんが、その時分雪の狂言が出るとなると、道具師が、芳町のよしやまで、元結の切屑を貰ひに行つたものです。それをすのこから散らす前に、一度焙じるんですから、なかなか骨が折れましたらう。

○

衣裳が器用になりましたから、今では手や脚を塗る代りに、莫大小の股引なぞで事が足りまするが、昔は否應なしに、こいつを塗つたもんで。……これでおかしいのは、皿と刷毛が小道具から出て、紅が頭取から出たことです。よく皿と刷毛だけあつて、紅の這入つてないことなんかがありましたよ。

○

おかる勘平の道行で、伴内の着てる四天は、長襦袢の見立てのわけですから、両脇の割れてるのはいけますまい。それに、八卷も赤になつたやうですが、あれは白です。勘平の股引も、淺葱は本筋ぢやありません。やつぱり白が本當なんで。……

○

左様さ。和唐内と、押戻しの衣裳は別ですよ。和唐内は、平戸の漁師の伜といふ心ですから、紫地に手綱の模様が付いてますが、押戻しは猩々緋の小手臑當、腹卷に鯉の模様の大どてらといふ形です。近頃は初めから竹を持つて出て來ますが、もとは裃を着けた後見が、揚幕の外に竹を持つて待つてゐました。それを竹抜五郎が、出て來てから抜いたものでした。

○

總じて時代物よりも、世話物の方がやりいゝのは本當ですよ。それに時代物となりますと、どうしても型といふものがありますので、思ふ通りにや行きません。ですからよく、その年になつて、新劇をやるのは難劫だらうなんて、仰しやつて下さるお人もありますが、實を申せば、新劇をやるのは、さほど苦にならないんでして。――第一古い物ですと、モデルといふ物がありませんが、今の物は、どなたの作物にしましても、生きたモデルがありますからね。譬へて申しますと、幸四郎さんが仁木で、私が外記を勤めることになつたとしましても、外記といふ人を、本當に見たお人はないんですから、唯、誰々のやつたといふ、型で行くよりありませんが、當節の物ですと、そんな苦勞は、ちつともありやアしませんよ。宿屋の親父をやれと仰しやれば、宿屋の親父のモデルは、どこにでもありますし、酒屋の御隠居をやれと仰しやれば、そのモデルも楽に探せます。ですから、凝らうとさへ思へば、いくらでも凝れますんで。……

○

新劇に初めて出ましたのは、いつでしたか、よく覺えてませんが、まだ歌舞伎座にゐました時分に、たしか明治四十一年だつたと思ひますが、益田さんのお書きなすつた「女房の心得」といふのを演つたことがありました。役者は幸四郎さん、段四郎さん、八百藏さん、羽左衛門さん、宗十郎さん、それに私などでしたが、いま帝劇にゐる藤間房子さんなどは、この時、ひよい

うたんといふ名前で、團十郎さんのお嬢さん達と一緒に、雛台を勤めて居りました。

○

年を取つてから、淺草へは一度もまゐりませんが、もとは奥山に、いか藏、菁吉といふ二軒のおててこ芝居があつて、これがまたよく繁昌したものでした。芝居と云つても、つまり見世物ですから、下から二尺ばかり開いてゐて、中がよく見えたもんです。木戸はやかましくて打てないんで。……ですから婆さんが繩を持つてて、八文出すと、繩を放して入れてました。小屋は掛けてゐましたが、野天といふ心持ですから、雨が降ると休みです。この眉毛のない奴が、雨が降ると、よく猿若町の芝居へ來て、見た狂言を、そばから書き取つて歸りましたが、歸るとすぐそのあくる日からやるんですから堪りません。初め口上が出て、これより御覽に入れまするは、只今中村座の當り狂言何々で御座います。物眞似にて演じますれば……といふやうなことで、そつくりその儘をやつて見せました。物眞似といふのですから、座方の者も、仕方なしにゆるしてありましたよ。

○

この外に、門芝居といふのがありましてす。狹い往來の兩側を、不破と名古屋になつた二人が歩きながら、「通ひ廓の大門を、這入れば忽ち極樂淨土」などとやると、その後から笊を持つた小僧が「只今のお笑ひ草」と云ひながら、いくらかづつお錢を貰つて歩いたもんです。

○

憲法發布の二三年前に、大阪から鳥熊芝居といふのが來まして、本郷の春木座で當てたもんです。役者は大阪中芝居の腕達者との評判でしたが、私はとうとう見ずにしまひました。何んでも鳥熊といふ太夫元が、なかなかのやり手で、雨降りにはお客の下駄をいちいち洗つて、土間へ持込めるやうにしたんださうで。……おまけに木戸が六錢で、中錢なし、場所は早い者勝ちといふんですから、これア流行つた筈ですよ。――安くつて、珍らしい物の流行るのは、今も昔も同じ譯合でさ。

○

總じて昔のお作者は、世間の裏表に詳しかつたやうですね。もつとも、みんな役者と同じやうに、どのお作者も、隨分困つておいでのやうでしたから、表はともかく、裏の方のことに

は、仕方なし詳しくなつたのかも知れません。ですが、同じ世話物をお書きなすつても、當時のお人は、みんな御自分の世話場を、實地にお書きなさるんで、仕出しのセリフなんぞにまで、ぎつくり肚に應へるやうな、旨いところがありましてす。――こうどうも、セリフに味がありましたよ。

○

保名といふ仇名のあつた、松島半次といふお作者が居りましたが、いい腕をもつてゐながら、いつも大世話場（註、貧乏な暮しの樂屋語也）でした。或る夏のことで、この半次さんが、着てゐた浴衣まで曲げてしまつた擧句、毎日家の中で裸で暮してゐると、急に芝居から呼出しが來たんです。そこで、出掛けないわけにも行かず、思案に餘つて、近所の子供が忘れてつた、お祭の絆纏を引掛けて、汗を拭き拭き樂屋入りをしました。おまけに、その言ひ草がいいぢやありませんか。

「どこの餓鬼だか、御酒所の酒に醉拂やァがつて、おれの上布と、こんな絆纏と間違えて行きァがつた。今どきの餓鬼に目やが放されねえ」

こんな洒落たことを云つてたお人が多かつただけに、芝居の中は、何がなくてものんきに暮せたものです。

○

家の師匠は、今の六代目さんと同じやうに、話の巧いお人でしたが、四代目さんは、ひどく話の拙いお人でした。ちよいとした話でも、嘘のことを本當らしく云ふ、なんてことの出來ないお方で、――「ここに大そう惡い奴があつたんだ。さうだな、面倒臭え、こいつをまァ仁木彈正と思ひねえ」――と云つた風ですから、お話を聽いてましても、ちつとも身が這入りませんでしたよ。

○

橋場の師匠の二階にゐた時分のお話ですが、尾登五郎と二人で、遊びの金が欲しくてたまらず、さりとて芝居は休みですし、師匠や松崎の旦那には、さうさう無心も出來ずといふ、しがない身の上になつた時でした。尾登五郎の才覺で、夏時分お樂屋から預かつた絽の羽織を、我慢が出來ずに殺した擧句、さて吉原へ出掛けやうといふことになると、どうにもそれだけの金ぢやァ心細い。せめてこれを、二分にしたいといふのが二人の腹でした。あとから考へれば、どうせ豪勢な遊びをする譯ぢやァなし、一杯にさへ使へりゃ結構なんでしたが、これが欲と

い人数で、仕方がありません。山谷に久八といふ博打宿があつて、そこへ行きさへすれば、いつでも小博打が出來てるのを幸ひ、私と尾登五郎とは直ぐに相談して、久八の家へ出かけましたです。

何しろ先を急ぐ身の上ですから、一分の金を三度に張つて、右から左へ儲けて行かうと打合せをして出ましたんで、向ふへ着くと、すぐに尾登五郎が、その通りに張りました。大した勝負をするわけぢやアありませんが、その時分にも、よく博打は度胸だと聞かされてましたので、初め一度取られると、惡度胸で、あとの二度分を、一度に張つてしまつたんで。……いや、勝てばお前さん、直ぐに四倍にならうといふんですから、こてえられやアしません。

ところがこれが、大的外れでした。壺皿をあけると一緒に、有金はもう、そつくり先方の手へ渡つてしまつたんです。泣くにも笑ふにも、私も尾登五郎も、張り詰めた氣がゆるんで、ぼんやりしてしまひました。胸糞が惡いつたら、ありやアしません。——頭を抱えて久八の家を出たんですが、生憎な時には生憎なもので、おもてへ出ると、大粒がぽつぽつやつて來るぢやありませんか。おまけに、廓へ行つてから、一杯やらうといふ意氣込みでしたから、午飯を食べたつきり、夜の八時過ぎまで、錢一つ口へ入れねえんだから堪りません。とうとう家へ歸るまで、二人はひと言も話をしずに辿り着きました。あんなひどい目に遇つた事アありませんでしたよ。（つゞく）「四月四日」

近頃見聞記

薄田泣菫

相續税

1

今日新聞紙を見ると、紀州徳川家では家什整理のため、四月上旬東京美術俱樂部で書畫骨董の賣立入札を催す筈で、出品數は三百點、大變な前景氣ださうで、呼物の主なものとして、虛堂墨蹟、馬麟寒山拾得、牧溪江天暮雪、大名物瓢箪茶入などが擧げてあつた。

虛堂墨蹟といへば、足利の初めから茶人仲間に大層珍重がられたもので、松平不昧なども祕藏の唐物茶入油屋肩衝に圓悟墨蹟を配したのに對して、古瀨戸茶入鈴の鞘には虛堂墨蹟を配し、參覲交代の節には二つの笈に入れて、それぞれ家來に負はせて、自分の輿側に隨行させなければ承知しなかつたものださうだ。

不昧の鑑識で、虛堂墨蹟に配せられた鈴の鞘の茶入は、もと京都の町人井筒屋事河井十左衞門の祕藏で、その頃の伏見奉行小堀遠州は、京へ上るときには、いつもきまつて井筒屋を訪ねて來て、

『京へ上つて來る樂しみは、たつた一つ鈴の鞘を見る事ぢや。』

と言つて、この茶入を前に、いつまでもいつまでも見とれてゐたものださうだ。そんなだつたから、井筒屋の主人がこの茶入に對する愛し方はまた格別なもので、店にゐるときは、いつでもこの茶入を箱に入れて側に置き、縋りつくやうにしてその箱に手をかけてゐたといふことだ。後に家運が衰へて、止むなく三井八郎右衞門に讓渡さねばならなくなつたが、せめて箱だけはと言つて、そのまま殘しておいたのを、とてもともと通り家が榮えさうにもないので、いつまでも引き離しておくのも

本意ないわけだと、その箱をも三井家に送つて、久し振に茶入にめぐり合せたのは名高い話である。

そんな名器に配するやうに考へられたところを見ても、虛堂墨蹟がむかしからどんなに重んじられたかがよくわからうといふものだ。

2

紀州家の虛堂墨蹟は、同家の祖先大納言賴宣が、父家康から授つたもので、これについてはいろいろな逸話が傳へられてゐるが、その中で最も興味多く考へられるものを、一つ二つここに思ひ出してみることにする。

虛堂禪師の墨蹟が家康の手から紀伊大納言に下されたことを聞いた當時の老中方は、かねて噂にのみは聞いたことのある名品である。何とかして拜見させていただくわけには往くまいかと、口を揃へて賴宣に賴んだものだ。きさくな賴宣は氣持よくそれを承諾して、日をきめて茶會を開くことにした。

その日になつて、赤坂喰違の紀州家の邸では、數寄屋の床の飾りつけから道具萬端ちやんと用意が出來てゐる筈だつた。出迎のものの口から、お客の老中方が揃つて數寄屋に入つたことを聞いた賴宣は、挨拶に出かけようとして、居間を出て黒書院を通りかかつた。ふと氣がつくと、違棚の上に箱から取出したばかりの懸物が一つ置いてあつた。賴宣はもしやと思つて檢めてみた。それは紛ふ方もない、虛堂の懸物だつた。

賴宣は胸に動悸を覺えた。道具奉行の鴨居善兵衛と、茶道の千宗左とは呼び出された。賴宣はきつと二人の顏を見据えた。

『あれほど申しつけておいたのに、何故あつて數寄屋にこれを掛けぬのぢや。今日の茶事を何と心得をるか。』

主人の手に虛堂の懸物を見た二人は、はつと恐縮して、猫の子のやうに頭をすくめるより外に仕方がなかつた。

『恐れ入りました。全く手前どもの粗相から、お數寄屋には他のお軸を掛けましたやうな次第で……』

愚しい粗忽者をいくら叱つたところで、さしあたつての間違をどうすることも出來ないのを知つてゐる賴宣は、長くは二人を相手にしてゐなかつた。彼は家來中での老巧者として知られた渡邊若狹守直綱を呼んで、何か小聲で耳打をした。

若狹守はいそいそと數寄屋に入つて往つた。そこには老中方が膝を押並べて、いずれも腑に落ちなささうな顏をして、床の間の懸物に眼をやつてゐた。若狹守は主人に代つて手短に挨拶をした。

『かねて御所望になりました虚堂禪師の墨蹟は、御案内の通り權現様お直々に賜はりました品ゆゑに、床に懸けおいてお待ちするのは勿體なく存じますので、皆様のお入を待つて、主人自ら懸けて御覽に入れたい所存にござります。しかし、それまでの間を素床のまゝに致しておくのもどうかと存じまして、代りのものを御覽に入れましたやうな次第で……』

それを聞くと、客人達は言葉を揃へて感心した。

『御用意のほど、御尤に存じます。』

『しからば御免を蒙つて……』若狭守はその機會をはづさなかつた。そして聲を高めて次の間に呼びかけた。『茶道これに參つて、床の軸物をはづしなさい。』

次の襖がさつと開いて、千宗左の姿が現はれたと思ふと、床の懸物は手早く取りはづされて、宗左はまた影のやうに消えてしまつた。すると、入違ひに左手に懸物を、右手に矢筈竹を持つた主人賴宣が入つて來た。皆はその態度の水のやうな靜かさに、覺えず心を惹きつけられてしまつた。

懸物は流れるやうに床の間にかけられた。虚堂禪師の筆は、石のやうな重みをもつて客人達の上に落ちかかつて來た。皆はその重みに堪へられないやうに、思はず頭を下げた。

3

紀伊大納言賴宣は、茶道の稽古は古田織部正や織田有樂齋を師匠として勵んでゐたから、利休七哲として有樂齋と肩を並べてゐた細川三齋から見れば、ちよつと後輩だつた。

虚堂禪師の懸物が、家康の手より賴宣に傳へられてから間もなくの事だつた。江戸から西國の所領に歸らうとした三齋は、何かの席上で紀州家の重臣渡邊若狭守直綱に會つた。四方山の話のついでに、三齋はこんな事を言つた。その頃彼はもうかなりの老年だつた。

『今度權現様より御拜領になりました虚堂の御懸物は、天下一と承りますにつけて、一度拜見いたしたいと存じながら、今日までその折がなくて過しましたことは、殘念至極でなりません。もしお骨折により、拜見が叶ひますならば、今生の面目この上もない事かと存じます。何分御覽の通り、老年の身の上、この度歸國いたしました上は、次の參府はとても望まれないことかと存じますから……』

三齋の言葉には、生のあるうちに一つでも多く傑れたものを觀て、その風格を味はうとする茶人の謙遜な心掛が溢れてゐた。若狭守はそれに動かされないわけに往かなかつた。

『さほどまでの御執心、何とかお取計ひいたすでござりませう。』

若狭守は歸つて、このことを賴宣に告げた。賴宣はこころよく承諾した。

『それはいと易いことぢや、早速案內したがよからう。』

約束の日が來た。今日こそ生涯の望が遂せられて、天下一の虛堂が見られるのだと思ふと、三齋は自分の身のまはりが急に明るくなつたやうに感じた。赤坂喰違にある紀州家の門を潜つたときには、胸に動悸をさへ覺えたやうに思つた。

三齋は案內せられて、數寄屋に入つた。何よりも先きに床の間を見た彼は、自分の眼を疑はずにはゐられなかつた。そこに懸けられたのは、清拙派のある僧侶の書いたもので、墨の匂も爽やかには出來てゐたが、自分の見たいと思つてゐた天下一の虛堂ではなかつた。

『何か仔細があつての事だらう。』

不思議には思ひながらも、三齋はそんな氣振も見せないで靜かに席についた。

やがて主人賴宣が出て來た。彼は自分で茶を立てて、客にすすめた。そして言葉丁寧に挨拶した。

『御所望により、虛堂の墨蹟を御覽に入るべく御招きはいたしたが、都合あつて、今日はその運びに參りかねた。所以つてそれを申したら、お入りはなからうと存じて、わざと隱し立てしてお招きいたした次第、なにとぞ惡しからず……』

三齋はそれを聞くと、はつとなつて、急に眼の前が暗くなつたやうに思つた。だが、容子には少しもそんなところは見えなかつた。

『ぶしつけな御願を申上げましたのに、お叱りはなくて、却つて御丁寧な御挨拶痛み入ります。御秘藏の禪師の墨蹟、今日拜見が叶ひませぬのは、まことに殘念至極に存じますが、また重ねての折をお待ちすることにいたしまして……』

四方山の雜談の後、三齋は禮を述べて立上つた。そして聖護院と白書院とのなかにある廊下に來かかると、そこの杉戶の前に、若狭守が一人立つてゐた。若狭守は、箱から取出した懸物を菰の上に持ち添へたまま、先刻から何ものかを待つてゐるらしく思はれた。三齋が近づくと、彼はそこに跪いた。

『お口上にござります。』

三齋もぴたりと歩みを止めて、廊下に跪いた。若狭守は言つた。

『先日のお言葉に、御老年の御身、次の御參府も望まれないによつて、虛堂の墨蹟御覽になりたいとのことでござりましたが、

この後とも引續き御參府をお待ちいたせばこそ、わざと今日はお目にかけるのを差控へたのでございます。この次に御參府の節には、きつとお約束を果しますが、しかし、たつての御望ならば、書院にて御覽に入れよとのことでございますから………』

若狹守が箱の蓋に持ち添へた懸物は、長年の間三齋が夢にも忘れ得なかつた虛堂禪師の墨蹟だつた。彼が一言所望さへしたら、その場で直に天下一の禪師の風格に接することが出來る筈だつた。實を言へば、彼はもう年をとり過ぎてゐた。どんな事があつて、次の年の參府が出來なくなるかも知れなかつた。それを思へば、彼は今生の思ひ出としても、飽かずその懸物に見入りたかつた。彼は思はず、

『しからば、お言葉にあまへまして………』

と言はうとして、急に口を噤んだ。

そんなことが言はれるべき義理はなかつた。かたい約束に背いてまでも、彼の息災を祈つてくれる若い大納言の心遣ひを思へば、そんなことは噯氣にも出せるわけではなかつた。實際大納言の誠心は身に沁みてありがたかつた。その心遣ひの細かさの前には、懸物を見る機會が、一年遲れようとも、二年遲れようとも、よしまたは百年遲れようとも、そんなことを詮議立することは、とても恥かしくて出來なかつた。

『有難き仰せには、お禮の申上げやうもございませぬ。お言葉に從ひまして、この後も度々參府仕るべく、御懸物はその節あらためて拜見いたすでございませう。』

三齋はかう言つて、虛堂の墨蹟を手にとつて、丁寧に頭にいただいた。そしてそれを若狹守に返すと、急ぎ足に廊下をすたすたと彼方へ去つた。

4

聞くところによれば、紀州家では今度の賣立で相續税を産み出すとのことだが、虛堂禪師の墨蹟を初め、重だつた書畫什寶は、それぞれかうした逸話をもつてゐないものはない筈だから、逸話や傳說を珍重する茶人仲間では、たいした附値を見ることだらうと想像せられる。紀州家の當主は、先づ何を措いても、所藏の書畫什寶にこんな逸話を添物にして殘しておいてくれた、祖先頼宣に對して感謝しなければなるまい。

頼宣が老年になつて、家を嫡子光貞に譲るとき、次男左京大夫には茶入や懸物などの家康傳來の名品を幾つか取揃へて譲つたものだ。それを見た渡邊若狹守は不審さうに訊ねた。(この三つの話を通じて、いつでも渡邊若狹守が顏を出すのを不思議に思ふ人があるかも知れないが、かういふ役はいつも相手を引く

たせて、大きく見せるために存在する、言はば冬瓜の肩にとまつた蟲のやうなもので、それが髯を生やした蟋蟀であらうと、若狹守であらうと、どちらにしても少しも差支がない。」

『御次男樣へ、茶の湯のお道具、さやうに數々お讓りになりましたところで、さしあたりお用ひになるべき御客樣もござりますまい。』

すると、賴宣は、

『左京は小身のことゆゑ、時には兄に金銀の借用方を申込むこともあらう。その折これを質ぐさに入れたなら、道具は本家にかへり、左京はまた金子を手に入れることが出來ようと思ふからぢや。』

と言つたといふことだ。してみると、紀州家の當代が、相續稅を產みたさに、傳來の重寶を賣つたところで、賴宣はただ笑つて濟ます位のことだらう。

小說家の死

小說家M氏は、腦溢血で懇意な友人にも挨拶しないで、突然歿くなつた。每日日課として、八種ほどの田舍新聞の續き物を何の苦もなく書上げ、その上道頓堀の芝居見物や、古本あさりや、骨董いぢりなどに、一日中駈けずり廻つて、少しの疲勞をも見なかつた程達者な人だつたが、歿くなる折には、まるで朽木が倒れるやうに、ぼくりと往つてしまつた。

入棺式の時刻になると、故人の懇意な友人や門下生達は、思ひ出の深い書齋に集つて、この小說家の遺骸と一緒に、白木の棺に納めるべき遺愛品の撰擇について協議を初めた。M氏には子供らしい妙な癖があつて、自分に門下生の多いのを誇りたさの念から、一度物を訊きゝに自分を訪ねて來たものは、誰によらず門人名簿に書き加へてゐたから、その日そこに集つた人達のなかにも、本人はいつぱし懇意な友達のつもりでゐても、その名前がちやんと門人名簿のなかに發見出來ないとも保證は出來なかつた。

『井伊大老の短册などはどんなものでせう。たしか一二枚あつたやうに覺えてゐますが――』門下生のHといふ新聞記者は、寢不足な眼をしよぼしよぼさせながら皆の顏を見た『**新聞に載つてゐた、大老についての記述が、先生最後の絶筆となつたやうなわけですから、その緣でもつて……………』

『あれは、たしか未完結のままでしたね。』

故人と同じ古本道樂で、豆本の蒐集家として聞えた、禿頭の

銀行家は、丸つこい膝の上で、指の節をぼきぼき鳴らしながら、誰に訊くともなしに、こんなことを言つた。
『さうです。未完結のままで………』
『それやいかん。そんなものを棺に納めたら、却つて故人が妄執の種となるばかりですよ。』
銀行家は、取引先の擔保にいかさまな品書きを見つけた折のやうに、皮肉な笑を見せた。Hはそれなり口を噤んでしまつた。
『義士のものはどうだつしやろ。Mはんの出世作は、たしか義士傳だしたな。』
故人と大の仲よしで、その作物を舞臺にかけては、いつも評判をとつてゐた老俳優の駒十郎は、こんなことを言ふのにも、臺詞らしい抑揚を忘れなかつた。
『さあ……』
誰かが氣のない返事をした。
『いけまへんやろか。』
駒十郎は、てれ隱しに袂から卷煙草を一本取出して、それを口に銜へた。身體を動かす度に、香水の匂がぷんぷんあたりに漂つた。
『可愛らしい玩具か何かないものかしら。來山の遊女人形といつたやうな……』
胡麻白頭の俳人Sは、緣なしの眼鏡越しに、じろじろあたりを見廻した。自分の玩具好きから、M氏をもその方の趣味に引込まうとして、二三度手土産に面白い京人形を持つて來たことがあるので、それを搜すつもりらしかつたが、あひにくその人形は、物吝みをしないM氏が、强請られるまゝに出入の若い女優にくれてしまつてゐたから、そこらには影を見せなかつた。
『十萬堂の遊女人形は、あれは女房の代りぢやなかつたんですか。』故人がかかりつけの醫者で、謠曲好きのGは、痺が切れたらしい足を胡坐に組みかへた。『すると……
『Mさんには、却つて御迷惑になるかも知れませんな。』
皆は意味あり氣な眼を見交した。
先刻から襖を開けて、押入に首を突込んだまま、そこに山のやうに積重ねてある書物を、あれかこれかと搜してゐたらしい、脚本作者のWは、そのなかから八冊ばかりの大型の和本を取出すと、
『これだ。これだ。これだつたら、誰にも異存なんかあらう筈がない。』
と、頓狂な聲を立てながら、得意さうに頭の上にふりかざして、皆に見せびらかした。それは西鶴の『好色一代男』で、ど

の卷も、どの卷も、手持よく保存せられたと見えて、表紙にも小口にも、汚れや痛みなどの極めて少い立派な本だつた。

『なるほどね。一代男とはいい思ひつきだ。Mさんは夙くから西鶴の歎美者だつたし、それに一代男といふと……』

銀行家は、禿げた前額を撫上げながら、一寸言葉を切つて、にやりとした。

『一代男といふと……』皆は頭のなかで、この草子の主人公世之助が、欲望の限を盡した遊蕩生活を繰返してみた。そして人情のうらをもて、とりわけ女心のかげひなたを知りぬいたM氏にとつて、こんなに好い道づれはまたとあるまいと思つた。

『それはいい。Mさんと世之助とでは、きつと話が合ふから。』

皆は口を揃へて『好色一代男』を棺に納めることに同意した。そして生前懇意だつた人のために、死後好い道づれを見つけることが出來たのを心から喜んだ。

『それぢや、どなたも御異存はございませんな。』

脚本作者のWが、『一代男』八冊を手に取上げて、やつとこなと立上らうとすると、急に次の間の襖が開いて、

『異存がおまつせ、わてに。』

と、呼びかけながら、いが栗頭の五十恰好の男が入つて來た。大阪に名高い古本屋の主人で、M氏とは至つて懇意な仲だつた。

古本屋の主人は、脚本作者の側に割込むと、一寸頭を下げて皆に挨拶した。そして懐中からぺちやんこになつた敷島の袋を取出すと、一本抜取つてそれに火をつけた。

『どなたのお言葉か知りまへんが、一代男をとは殺生だつせ。これを灰にして見なはれ、世間にたんとはない西鶴物が、また一部だけ影を隠すわけだすからな。それにこんな手持のよい一代男は、どこを捜したかて、滅多に見られるわけのものやおまへん。わてがこれを先生に納めたのは、つひ先日のことだしたが、その時の値段が確か千五百圓だしたぜ。』

『ほう、千五百圓。そない高い本とは知らなんだ。どれ、どれ、……』

駒十郎は、喫みさしの煙草を、火鉢の灰に突込んで、その手で脚本作者の膝から、本の一冊を取上げた。あたりの二三人は、首をのばしてそれを覗き込んだ。

『そんなに高くなつたかな。五百圓の値を聞いて、びつくりしたのは、つひ二三年前のやうに思つたが。』古本好きの銀行家は、書物の値段が自分に相談なしに、ぐんぐんせり上つてゐるのが、幾らか不機嫌らしかつた。『ともかく、そんなに高價なものを灰にしてしまつては、遺族の方々にも申譯がないかな。』

一代男だけは思ひ止まりませう。』

『外に何か見つかればいいが。』誰かがこんなことを言つた。駒十郎は先刻から挿繪の一つに見とれて、側に坐つた新聞記者のHを相手に、自分の出る芝居の番附だけは、どうかしてこんな風に描かせたいものだといつたやうなことを、小聲でひそひそ話してゐた。

『いいものがおます。也有の『鶉衣』だす。』古本屋の主人は、勢よく立ち上つたかと思ふと、かねて勝手を知つた書棚に往つて、四冊本の俳文集を取出して來た。

『この本だしたら、也有の名著で、先生のこの上もない愛讀書だしたし、それに………』

『それに………』

皆は後を聞かないでも滿足した。そして一代男の代りに鶉衣四冊を棺に納めることに同意した。

『ああ、さうだつたな。』醫者のGが、拍子ぬけのしたやうに呟いた。『也有もMさんも同じ尾張人だつたから、途々名古屋辯でもつて仲好く話して往くことだらう。』

皆はそれを聞くと、故人の特徴のある名古屋訛を思ひ出した。そしてそれももう二度と聞かれなくなつたのだと思つて、覺えずほろりとした。

暗示

1

かういふ話がある。

ある時、山ぞひの二また道を、若い男と若い女とが、どちらも同じ方向をさして歩いてゐたことがあつた。

二また道の間隔は、段々せばめられて、やがて一筋道となつた。見ず知らずの二人は、一緒に連立つて歩かなければならなくなつた。

若い男は、背には空になつた水桶をかつぎ、左の手には鷄をぶら提げ、右の手には杖を持ちながら、一頭の山羊をひつぱつてゐた。

道が薄暗い溪谷に入つて來ると、女は氣づかはしさうに言葉をかけた。

『わたし何だか心配でたまらなくなつたわ。こんな寂しい溪谷を、あなたとたつた二人で連立つて歩いてゐて、もしかあなたが力づくで接吻でもなすつたら、どうしようかしら。ほんたうに困つちまふのよ。』

『え。僕が力づくであなたを接吻するんですつて。』男は思ひがけない言ひがかりに、腹立ちと可笑さとのごつちやになつた表情をした。『馬鹿をいふものぢやありません。僕は御覧の通り、こんなに大きな水桶を脊負つて、片手には鷄をぶら提げ、片手には杖をついて、おまけに山羊をひつぱつてるぢやありませんか。まるで手足を縛られたも同然の僕に、そんな眞似が出來よう筈がありませんよ。』

『それあさうでせうけれど……』女はまだ氣が容せなささうにいつた。『でも、もしかあなたが、その杖を地べたに突きさして、それに山羊を繋いで、それから背の水桶をおろして、鷄をそのなかに伏せてさへおけば、いくら私が嫌がつたつて、力づくで接吻すること位出來るぢやありませんか。』

『そんなことなんか、僕考へてみたこともありません。』

男は險しい眼つきで、きつと女の顔を睨んだが、ふとその紅い脣が眼につくと、何だか氣の利いたことの言へる脣だなと思つた。

二人は連立つて、薄暗い樹陰の小路に入つて往つた。人通りの全く絶えたあたりに來ると、男は女が言つたやうに、杖を地べたに突きさして、それに山羊を繋ぎ、背の水桶をおろして、鷄をそのなかに伏せた。そして女の肩を捉へて、無理强ゐに接吻したといふことだ。

2

この場合、若い男は初めのうちには何も知らなかつたのだが、女の敏感な警戒性が、思はず洩した一言に暗示せられて、それを實行に移したのである。善行にせよ、惡業にせよ、すべて男の勇敢な實行の背後には、得てしてかうした婦人の暗示が隱れてゐるものだ。

演藝時評

正宗白鳥

「法成寺物語」

四月一日。

風のない、薄曇りの溫い、春の夜であつた。私は歡樂のためと云ふよりも、職業的義務によつて、築地小劇場へ足を向けた。歌舞伎座では、「受難華」など菊池寛氏の有名な通俗物の映畫をやつてゐるらしかつた。新橋演舞場では、今日から「東踊り」が開いてゐるので、華やかな燈火が輝いてゐた。さういふ所を傍觀しながら、小劇場へ足を踏込むと、見窄らしい陰鬱な感じに打たれて、思はず尻込される。

上演脚本が飜譯ものなら、外國劇を研究するつもりで、時々此處へ來る氣にもなつたのだが、現代の日本ものが取扱はれる時には、わざ〳〵こんな所へ來ようとは思はなかつた。ただ同座初演の日本もの「役の行者」だけは、自分で進んで觀に來て、この難物を一通り演じこなしたのに感心した。昨冬、散歩の次手に此處へ寄つた時には、北村小松氏と武者小路氏との新作が上演されてゐたが、はじめから何の期待するところもなかつたのに、意外にも、作そのものも面白かつたし、演出振りも面白かつた。どこまで發展するか分らないが、兎に角、今の日本では新劇の根據地は此處より外になささうに思はれた。

北村小松氏の「人のゐる風景」には新味があつた。今度の「猿から貰つた柿の種」も、私は讀落したが、評判のいゝも

のだらうだ。私は知人から荒筋だけ聞かされて「なる程猿蟹合戰の昔噺をさういふ風にこぢつけるのは、今の流行思想にかぶれた若い才人のやりさうなことだ」と、感心した。桃太郎噺には昔の日本人の侵略的雄志が寓せられてゐるし、猿蟹合戰には、不倶戴天的の敵打が寓されてゐる。それを、今日の目で取扱へば、一つを軍國主義の宣傳見たいにされ、一つを勞資反目の說明ともなし得られるのである。昔噺の新解釋は面白い。

ところが、今度の新作は、頭の古い國家取締り役人の用心深い干渉によつて、過激思想煽動の恐れあるところを一々削除された。原作者には氣の毒である。しかし、あれだけでも作意だけはよく分つた。この前の「人のゐる風景」を觀た時に、私は時事新報紙上にちよつと感想を述べたが、あれと同樣に、今度のも、多少の新味や才氣が認められないことはないが、要するに說明であり概念がまだ生のまゝであることを免れない。桃太郎を單なる軍國主義の宣傳劇にするのが藝術的に詰らないと同樣に、「柿の種」だつて、單なる資本家對勞働者問題の說明にしたのでは、私は飽き足りない。序幕の第一景は、抄略されてゐないやうであつたが、この場は最もよかつた。第二景と、第二幕の一景も筋は通つてゐた。しかし、今時は、誰れでも云ひさうな理窟があるだけで、我々がこの作品から新たに啓發されさうな人間味は出てゐない。藝術上の新舊は、思想問題の新舊とは自から違ふのではあるまいか。「桃太郎」によつて軍國主義を描くのを古しとし、「猿蟹」によつて勞資問題を說くのを新しとする論法の、淺薄極ることを、私は今度舞臺を見ながら感じた。無論この作品に全然新味がないといふのではない。樣式に多少新しいところがあつて、臺詞もキビ〱してゐる。しかし、人物はすべて概念的で、作者の主觀の深さ强さも見られない。此處に現はれてゐる程度の世相の觀察や、現代の批判なら、今時はあまりに月並過ぎて何處ででも聞かれさうである「猿の寢室」は、浮薄極りないものだ。こんな淺はかな趣向を痛快に思ふのは非藝術の極である。まるで子供だましだ。この一場はない方がいゝ。この前の場で終つてゐたなら、まだしも餘情があつて快く見られたであらう。

舞臺裝置はいつもながらよく出來てゐた。

ここまで書いたところへ「演劇新潮」三月號がやうやく手に入つたので、私は、完全に原作に接することが出來た。しかし、首尾を通じて讀んでも、舞臺以上の感じは得られなかつた。舞臺では脚本が抄略されてゐたゝめに暗示的で、月並な臺詞を耳新しげに聽かされなかつたゞけでもよかつたやうに思はれる。ことに第五景の「庭」の、柿の木に猿の首がつられてゐる一場が、削除されたのは、藝術上の意味からも當を得てゐたのだ。

資本家を絞罪に處するのは、この若き作者に取つて最大の快心事であるかも知れないが、それほどまでに資本家を憎んでゐるにしては、序幕以來彼れに對しての憎惡感が足りない。云ふことが月並である。首を討たれたら、首が飛んで相手の喉笛へ喰ひついたといふやうな舊い草双紙にあるだけの憎惡感さへない。

「法成寺物語」は、第二幕目の、四の御方と定雲との對話が少しくどくて理窟ぽくつて、退屈であつた外は、全曲を通じて氣持よく觀られた。この戲曲は、現代特異の藝術家谷崎潤一郎氏が、最も油の乘つてゐた頃の作品で題材と用語と主觀とがよく融和して、一つの渾然たる藝術品が作上げられてゐるのである。私は、上演された谷崎氏の作品では、兄弟座の「無明と愛染」を觀たゞけであるが、あれよりも遙かに劇的効果に富んでゐて、讀み物としても、あれよりは筆がよく行屆いてゐる。明治以來の文學史上の名作の一である。佛工定朝が徒弟定雲の傑れた手腕に壓迫される苦悶、藝術に沒頭してゐる、若き定雲の心に潜在してゐる邪念、道心堅固な良圓の性的目醒めなど、珍らしい題材ではないので、谷崎氏の心理的洞察も、我々を驚かすほどではないのだが、氏の華麗なる筆致は、藝術と愛慾の相剋を夢幻の如く描出してゐる。元來この作者の戲曲は讀み物として傑れてゐるので、上演に適しないやうに思はれるが、そのうちでは、この「法成寺物語」などは、異例の上演價値をもつてゐるのであらう。

執筆の際、作者の腦裡に描かれゐた舞臺上の光景は、その詞句の華麗である如く華麗であつたに違ひない。さうする

と、小劇場の舞臺は、この作品の上演に不適當であることが、自から證明されるであらう。薄汚い感じは、この作品には宿つてゐない譯である。繪の如き古典美、完成された藝術美が、舞臺に現はれなければならない。「柿の種」のやうな、ある社會觀の露出した未熟な作品と同一に取扱はれるべきものではない。かういふものこそ、むしろ歌舞伎役者によつて演ぜられた方が効果が多いやうに思はれるが、しかし、現在の歌舞伎役者には、これ等の新作の表現に心を碎くほどの熱意があらうかと、私は疑つてゐる。富と名に於て自足の境地にゐる俳優は、たとへ新作を演じるにしても、こんな骨の折れるものはやりたがらないであらう。そして、小劇場では、道長でも四の御方でも、佛工でも、美や品位を缺いてゐながら、兎に角退屈しないで觀てゐられたのは、誠意をもつて舞臺に立つてゐたためであらう。

それにしても、定朝はじめなぜあゝ薄つ汚くしてゐるのであるか。この小劇場は歐洲の表現派劇などによつて修養されてゐる上、西洋最新の演出法では、シエークスピアなどの古典を卑近に取扱ひ、表現派未來派の行き方でやるといふことにかぶれてゐるためか、マクベスでも「法成寺」でも、こと更薄つ汚く、卑俗に演じてゐるやうに思はれる。それから、この新しい一團も技藝が手に入るにつれて、築地的くさ味と云つたやうなものが出來かゝつてゐるのではないかと疑はれた。丸山定夫氏はしつかりした役者であるが、マクベスでも、今度の隆家でも同じやうでくさい。力みかへるほど臺詞廻しが混濁して態度がぎこちなく、自然の人間がなくなつて、カイゼル的飜譯の表現派人物になつてしまふ。原作では、目や唇や肉體を重んじてゐるのに、ここの俳優は精神を生かすために努力してゐるかはりに、肉體は疎かになつてゐる。目に邪淫が宿つてゐるとかゐないとかゞ重大な問題になつてゐるほどなのに、俳優の目はみんな死んでゐる。主要人物である薄田研二氏の定朝の如き、私は、舞臺近くの見物席で見てゐるのに、その目は、終始一貫義眼ではないかと疑はれた。定雲の技を見てゐる時、良圓に感動してゐる時、藝術家の燦きがなかつた。臺詞廻しが何時も苦しげなのも聞きづらかつた。友田恭助氏には、自由さのあつたのを取る。「柿の種」の蟹もよかつた。私は今度はじめてこの俳優に心が留まつた。

小劇場も、飜譯物だけをやつてゐるうちは、私なども、飜譯小說を讀んでゐると同樣な氣持で、原作を伺ふよすがとするだけでゐられるが、日本の新作物に接するとさうは行かない。築地の諸氏も、激しい世評に鞭打たれる覺悟をしてゐなければならない。

市村座の澤田

四月二日。

改築後の市村座へはじめて足を入れた。椅子が座席にかはつて、出方といふ者が出來て、居ながら飮食も出來るらしく、すべて復古の形である。私には、座主の意見が分らない。時代錯誤も甚だしい。かういふ形式の小屋も一軒くらゐあつてもいゝといふ見物があるかも知れないが、それは少數で、多數者は却つて不便を感じるに極つてゐる。この座は地の利にだて劣つてゐる上、自から好んで見物を遠ざける手段を講じるとは呆れる外はない。出方廢止のためには大劇場が長年月を要したことを思ふと、今度の改惡は愚及ぶべからずと云つていゝ。たゞ舞臺がいくらか狹く、見物席とゝもに、尨大に過ぎるところがなくなつたのは、あやまちの功名見たいなものだ

澤田正二郞氏は、今こそ順風に帆を上げてゐるらしい。年がまだ若くつて活氣があつて、人氣が立つてゐる。見るから、藝術家としての幸福に浸つてゐるやうである。私は彼れの私生活については何も知らないが、今日その舞臺を見てさう思つた。それとゝもに、藝術家としての危機がそこに潛んでゐることを、今日その舞臺を見て私は感じた。

私は、舞臺で澤田氏をはじめて見たのは、彼れがモンナヷンナのプリンチヴアルレ（？）に扮した時であつた筈だが、その時の記憶は少しも殘つてゐない。ついで、サロメのヨカナンを觀た。私は彼れがいやに白い齒をむき出すのを記憶に留めた。

その後可成りの歳月が經過した。私は歸郷の途次大阪に於て、澤田氏が新様の立廻りを賣物にして世間的成効を收めてゐるのを、たびく傍觀した。私は自由劇場や藝術座の新演劇をも傍觀してゐたのであつたが、それは場内に入つて舞臺を目に映しながら傍觀してゐたので、澤田氏の新演劇については、場外からせいぐ繪看板くらゐを見上げながら、雲烟過眼といつたやうに傍觀してゐたのであつた。

それで、しみぐ彼れの藝術を鑑賞することを得たのは、一昨年の冬邦樂座で「兒雷也」と「戀愛病患者」とが演ぜられた時であつた。「兒雷也」はえたいの知れない脚本であつたが、私は、青年のスポーツを觀てゐるやうな快感を覺えた。「戀愛病患者」に於て、澤田といふ役者もなかく味をやると意外に思つた。そして、曾我ノ家五郎氏の如く、いやにねちねちした人情がかつたところのないのが、通俗藝術としても、私には快く思はれた

それで、續いて「白野辨十郎」をも觀た。これも「兒雷也」見たいな粉式脚本であつたが、世評の如く、詰めの幕に於て、感傷的情緒を現はして見物を感動させた。「英雄涙あり」といふ感じは、歴史を讀む時、時代劇を讀む時、人の心を動かすところなのだが、活潑な遊戲を舞臺で試みてゐた澤田でも、かういふ人生の淋しい心境を現はし得るのかと、彼れに新しい價値が加はつたのであつた。しかし、本來、新代の流行俳優としてあのくらゐな情緒が出せぬほどなら、名聲上の不當利得を得てゐる譯になるので、感傷的な氣持は、いろいろな藝術に於て、案外表現し易いものではあるまいかと、私は思つてゐる。

ところで、今日私は、「切支丹信長」を觀た。「桃中軒雲右衞門」を觀た。「國定忠次」を觀た。澤田氏の藝術を腹一杯に貪食した感じがした。初幕から大詰まで、殆んど幕毎に現はれて、よく働き、よく激し喋舌り、その活氣縱横の努力は、當代無比である。

この一日、私は舞臺に於て、澤田式英雄のみを見續けた。三つの脚本が三つとも、彼の本領を發揮するに適してゐるや

うである。築地小劇場好みの凡人化に共鳴する者が多いやうな今日でも、人間には英雄崇拜心が根深く存してゐるので、昔は團十郎的英雄が舞台に活躍して人心に投じ、今は澤田式英雄が舞臺を横行して、人心に投じてゐる。そして後者は前者とは正反對で、英雄氣分を露出してゐる。内に潛めるところがない。

「雲右衛門」は作者が作者だから、皮相な通俗劇以上に心理的の表現があつて、可成り面白い芝居になつてゐる。しかし、くど過ぎるので觀てゐて次第に倦怠を覺えた上に、ともすると、昔の壯士芝居なるものを、久振りに思起された。

「法成寺物語」に於ても藝術家の苦しみを觀たが、あれに比べると、この「雲右衛門」は、いかにも苦しみ方が騒々しくて物狂はしい。平安朝の佛師と浪花節語りとの相違のある所以であらうか。最終の場には、「白野」同樣、英雄の末路が現はれてゐるのであるが、あれほどのしみ〴〵した感情が現はれてゐなかつた。全體、無暗に激したり氣焔を吐いたりし續けてゐるのでは、英雄も天才も、空威張りの滑稽人物として我々の目に映じるのである。尤も作者も俳優も、この一篇の主人公を、增長慢の自稱天才、實は卑俗な藝人として現はしたのかも知れないが、さういふ所は私の目につかなかつた。「雲右衛門」の藝術觀も變な藝術觀だが、それはさういふ人の藝術觀としていゝとしても、雲右衛門は絶えず自己を說明してゐるのである。說明劇である。子供に對してさへ、殆んど說明的態度ばかりを取つてゐる。だから、激したり泣いたりしてゐても、それは上べばかりの誇張が我々の耳目を動すだけである。

澤田氏も將來は、今のやうに無暗に騒々しくしないことと激情を沈滯させることに心を注がねばなるまい。劇壇人なきの今日、氏の如く春秋に富む才人は、見物の通俗的興味にのみ投ずることを、次第に警戒しなければなるまい。

「國定忠次」は成程面白い。大詰の舊套を脱して、得意の立廻りの活躍もなしに、事もなげに片附けて立退くところ、役者もさぞいゝ氣持だらうと思はれた。

以上、何とか非難を加へたものゝ、長篇の新作をこれだけに演じこなす努力は、古物の棚ざらしに安んじる舊俳優など

の及ぶところでない。

菊吉合同劇

四月三日。

今月の舊派劇では、本郷座の菊吉兩氏の合同劇が最も觀應へがするであらうと豫期してゐたのだが、來て見ると、案外詰らなかつた。「河内山と直侍」でも、まだしも昨秋帝劇で觀た時の方が概してよかつた。吉右衛門氏の河内山は、幸四郎氏よりもよかつたが、あとはみんないけない。比べて見ると、梅幸羽左衛門の兩氏は、たとへ老いてゐても氣が拔けてゐても、三千歳や直侍のやうな役にかけては、本郷座の若輩とは段ちがひである。彼等の舞臺にはとに角江戸の遊蕩情調が流れてゐた。松江侯でも高木小左衛門でも、北村大膳でもみんな默阿彌胸裡の人物とは遠く離れてゐる。

あゝ、私は、團菊晩年の「天衣紛上野初花」を觀て以來、一生に幾度「松江家上屋敷」や「大口屋別莊」を觀なければならないのであらう？ 私は先頃、春陽堂本の默阿彌全集によつて、この長い〳〵脚本を通讀して、はじめてこの芝居の全面を知ることを得た。當時の名優を網羅した新富座全盛時代の名狂言も、今讀んで見ると、水つぽくて、むしろダラシのないくらゐで、時代の違つた今日では、全部上演の不可能は、一目瞭然としてゐる。初演以後は、大抵その長いうちの二三幕しか採用されなかつたのは當然である。帝劇では、「天神境内」をはじめ二三の珍しい場面を舞臺上に復活したが、無論面白くはなかつた。それで、例の如く、「松江家」と「大口ノ寮」くらゐが、默阿彌の代表的江戸狂言として、舞臺に生命を保つ譯であるが、それも、無駄を除くと、後へいくらも殘らないことになるのだ。「大口寮」でも、清元で味ひつけられた男女の色模樣が、相變らず見物の心に觸れるだけで、清元が唄ひ收めて、市之丞が奥から出て來てからは、默阿彌の詩の世界は影を消して、馬鹿々々しい筋の運びがはじまるのである。松江邸でも、玄關先の氣焔によつて見物も痛快味

を感じるだけだ。諸参屋とても、書卸し以後の松助の存在によつて興味がつながれてゐるやうなものである。

今、二月末の「週刊朝日」を見ると、「歌舞伎は何處へ行く」と題した小山内薫氏の感想録のうちに、「今でも徳川時代の歌舞伎の型が殘つてゐると思つたら、大變な間違ひであります。比較的古い傳統の「直侍」の芝居で、侍をするにしても、これが當時の歌舞伎劇だと思ふのは間違ひで、少くとも私の子供の時代に見たのとは違つてゐる。……今はまだ默阿彌のものにしろ脚本が殘つてゐて、歌舞伎劇の形體が存してゐるやうに思はれるが、それは上つ皮で、日本の歌舞伎といふものゝ精神は變形してゐるのであります。變形してゐるのはあたり前で、芝居といふものは、時代々々の生きた人間が見るもので、これに依つてゐるやうにやらなければ、見物も感歎しないし、役者自身もやり甲斐がなく、もしさうでなければ、芝居は死んだものであります……」と述べてゐる。

私もこの説には同感である。先代菊五郎の直侍の形體と背法は、羽左衛門氏に傳つてゐるので、今度の菊五郎氏のはそれから遙かに遠ざかつてゐるが、それは、小山内氏の所説の如く、時代がそれだけ變化してゐるためであらう。しかし、菊五郎氏は、自己獨得の見解によつて默阿彌物を手に掛けてゐるのであらうか。昔の型式や風致をそのまゝに傳へようとしながら、時世の變遷で知らず識らず變形しつゝあるのであらうか。……私は思ふに、少くも直次郎に於ては、氏は大して變つた表現法を用ひてゐるのではあるまい。淸元の江戸情調と調和しない點では、時藏氏の三千歳も菊五郎氏の直次郎も大した相違はないのだ。

全體菊は吉よりも藝風が自由であるのだが、その才氣のあまりか、見物に見せよう〳〵と努めてゐるのが見透いていやになることがある。そこが親讓りの性癖であるのかも知れない。却つて羽左氏のやり放しに、見物を顧慮しない妙味がある。

菊五郎氏は微細な寫實を努めてゐる俳優であるが、直侍は案外大まかであつた。先代の寫實的の細かさも、三四年も經

けて見てゐると、同じやうな型をやつてゐるのが私の目にもついて物足らなかつた。丑松との離別に「達者でゐろ」と聲を沈ませて、手の甲を鼻にあてたり、蕎麥屋で盃の埃を取つたりするのは、舊世話物の常套であるが、今度の直侍はそれをやらなかつた。先代の說に、「火鉢に當るにも、大名はやゝその火鉢を離れて坐る。重立つた武士は火鉢の緣に手の先だけを掛ける。町人は火鉢に手を翳してあたる。バクチ打やゴロツキは火鉢の中を掻散らしたり、あるひは股火をしたりする」と。舊劇の舞臺では、火鉢のあたり方にも舊幕の階級思想が現はれてゐて面白い。しかし、かういふ型が、名優の型として何時までも嚴守されないのは當り前である。だから、羽左氏は股火をして寒さを凌いだが、菊五郎氏はそんなことはしなかつた。氏は、新作の貧しい勞働者などに扮した時、バットの吸ひさしを耳に挿んだのを私は、二度も見たやうに思つてゐるが、あゝいふところが、氏の心掛ける現代の寫實なのであらうか。若しさうだとすると、氏の寫實ぶりが、火鉢の當り振りに現はれてゐる先代の寫實と似てゐる。

私は、「同志の人々」や「髪結新三」などに於て、菊五郎氏の藝術味を喜んで、舊劇壇の幹部では、最も將來を期待し得られる人と思つてゐたが、今度の「直侍」や「喜多八」からは、わが心に與へられる何ものもなかつたのを悲んだ。喜多八の惡巫山戲で、見物がゲラ〳〵笑つてゐるのが觀劇價値の存するところであるかも知れないが、これなら、菊五郎も現代の名優であり、藝術家であることを斷念すべきである。……私は見ない前には、今度の出し物のうちでは、「法界坊」に巧みだつた二名優の「並木道」に最も多くを期待してゐたのであつたが、脚色が拙いせいでもあらうが、操られて强いて笑はせられる程度のものに過ぎなかつた。

要するに、菊吉合同劇には私はさしたる興味を覺えなかつたのである。

開演二日目の今日は、二時にはじまつて十一時過ぎに終つた。無慮九時間を滿員の劇場内で過した私は、身心の疲勞に甚しく惱まされた。市村座の澤正芝居も隨分長かつたが、六時間制限の制度はいつの間にか廢れたのであらうか。

歌舞伎座の鴈次郎氏の「炬燵」の紙治は、江戸狂言「直侍」と對照して、見たくないことはないが、私は觀劇に疲れてゐるので、まづ見合せることにした。しかし、鴈次郎氏の「引窓」は三月の歌舞伎座で觀た。氏の技藝もかういふものでは完成美を見せてゐるが、原作も舊劇中では傑れたものと云つてゐゝ。云ふまでもなく、鴈次郎氏の完成美は歌右衛門氏のそれの如く、生氣に乏しい完成美であつて、我々を感激させる力は缺いでゐるが、時代の變遷で崩壞しつゝある舊劇のうちで、彼等や松助氏の古典的所演を觀るのは興味のないことはない。

斷片錄

△小劇場と市村座と本郷座と、違つた種類の演劇を續けて見ると、日本の劇壇の現狀が髣髴として浮んで來る。混雜した時世をそこに見ることが出來る。見物人がそれ〴〵に違つてゐるのが、東京生活者の三種の縮圖をそこに描いて與れてゐるやうで面白い。私は三日間の觀劇中、どの座のどれに最も感動したかと考へると、特にある一つを取上げて云ふことが出來ない。しかし、現代の千兩役者菊吉兩氏が、微々たる新劇團の築地以上に、我々を感動させ得なかつたのは、兩氏の名譽ではあるまい。顏を出しさへすれば、見物が譯もなく聲を立てて、場内がどよめくのにいゝ氣になつて、傑れた藝術家になり濟したつもりで己惚れる勿れ。舞臺藝術家を等閑視し、玩弄物視してゐる見物に對して時々は憤慨するくらゐの意氣込みを持つことを勸める。昔の役者でも、團十郎は見物受けを顧慮しないで、自己の是とする活歷主義を舞臺で試みて苦闘した。彼れの藝術觀は今から見ると間違つてゐたにしろ、その藝術家的態度は尊敬すべきものである。吉右衛門氏の如き、河内山などに於て團十郎を眞似るばかりでなく、その藝術態度をも少し眞似たらよからう。

△舊俳優の重なる者は富を得てゐる。名をも得てゐる。ことに藝術家として取扱はれるやうになつてゐる。文學者も重立つた俳優に接する時は、一目置いてかゝるやうである。それだから、俳優が自足して、藝の上で苦慮しようとする向上

心がなくなるのだ。

△永井荷風氏曰く、「歌舞伎劇の眞髓を知るには、聲色を稽古した人でなければ分らない」(小山内氏の感想錄より拔萃)と。しからば、私などは、何十年芝居を觀、劇書を讀んでゐても、歌舞伎の妙味は分らない譯である。……氏の說を進めると、聲色の稽古ばかりではない、踊りの稽古、三味線の稽古もしなければ、歌舞伎の味は分らないことになる。……もつと進んで考へると、菊五郎の直侍の妙味は菊五郎自身に分るだけといふことになるのかも知れない。……私は荷風氏の說を必しも否定するのではない。荷風氏の藝術は氏以外の誰れにも分らないとも云へるし、私の作品は私以外の誰れにも分らないと云へるのだから。

△今、ホテルの圖書室で筆を執つてゐる間に、座側の新聞の綴込みを取つて讀むと、時事新報の文藝欄に於て、廣津和郎氏は、私の「光秀と紹巴」の批評をしてゐるのが目に留つた。氏はあの作品の舞臺効果に乏しかつた所以を「俳優の罪ばかりでなく、作そのものにもあるのではないか」と云つてゐる。私は人に云はれるまでもなく、稽古を一度見ただけで、すでにさう思つてゐた。廣津氏は、私の作を散漫であるとし、その理由を、「構想力の不足、あるひは構想についての不用意」に歸してゐる。構想力の不足は、私は少年の頃の作文に於てすでに自から感じてゐた。創作に從事しだしてからは、構想力の缺乏を絕えず憂ひてゐた。ところが、この頃は、多年古今の文學を研究した結果、藝術には規準のないことを知つた。批評家は西洋の大家でも文學作法を機械的に極めたがるものだが、本當の傑れた藝術はそんなものに拘泥して出來たのではない。「水到つて渠成る」といふ態度の作家も尠くない。筋立てなどにかまはないで、第二卷あるひは第二幕目はどうなるか分らないで、筆を執るのが、必しも藝術家としての間違つた態度ではないと、私は信じるやうになつた。そんなことに拘はるのは、文學上小乘の教へである。文學の習ひはじめに守るべき心得である。

さう云つて、私は自作を辯護してゐるのではない。「光秀と紹巴」は云ふまでもなく、その他の私の戲曲も、上演可能性

えらい役者がゐたら、あんなものでも、原作以上に演じ生かして、面白く見せるかも知れないと、時々は空頼みをしてゐる。たゞ、の乏しいもので、その効果のないのは、俳優の技能が稚拙であるためばかりでない、ことは分りきつてゐる。

△今月中旬に新劇協會三回目興行として上演される筈の、岸田國士氏の「葉櫻」を讀み、つゞいて氏の戯曲を幾つか讀んだ。奇を弄する現代振りの作品よりも面白かつた。「村一番の栗の木」や「留守」などに、私は心を惹かれた。(四月五日、東京にて)

ラヂオ演藝

目で見るだけの映畫と對立して、耳で聽くだけのラヂオ演藝が現はれた。後者が民衆に及ぼす影響は次第に重大なものになるだらうと思はれる。現在の日本の藝術が、銀座街上の風俗のやうに雜駁混沌としてゐることは、日々の放送目錄を見ても察せられるのだが、そのために我々は居ながらにして、いろ〳〵な演藝を次へ次へと瓶賞することが出來るのである。富本、新内、説教節の如き、平生聽く機會の乏しいものでも、各地の民謠でも、ラヂオに由つて頻繁に聽かれるやうになつた。豫約出版の廉價本によつて、江戸文學をはじめ、いろ〳〵な古典にたやすく接し得られるやうになつたのと同樣である。聽取料月一圓のラヂオと、一冊一圓の豫約本とは、この頃相呼應して藝術の民衆化を行つてゐる。

その結果はどういふ風になるのであらうか。私は今夜、ある知名の講談師の「光圀諸國行脚」の一節を聽いて、興味よりも嫌惡の感じに打たれた。天下の副將軍がわざと卑賤に身をやつして旅してゐるうち、自己の眞相が暴露して得意になるところが、彼れの漫遊記では、つねに讀み手聽き手の興味の中心になつてゐるのだが、その實そこは最もいやみなキザなところなのだ。昔の富有な通人が、わざと野暮な身すぼらしい服裝をして遊廓などへ行つて、冷遇されたあとで、伽羅を焚いたり小判を投げたりして得意になるのと、同じ心理狀態なのだ。それを講釋師が、封建的階級思想に基づいた口調

で演じるのだから、いかにも時代錯誤な感じがする。一般民衆はまだかういふものを喜ぶのかも知れないが、新代の教育を受けた若い男女は、こんなものには惹寄せられないに極つてゐる。新聞やラヂオの連續講談を幾つか續けて見聞した者は、どれもどれも筋立てが似寄つてゐて、その趣向がみんな封建時代の民心に迎合してゐることが分るだらう。

放送局の當事者だつて、音曲以外の放送演藝を、時代錯誤の落語と講談にのみ求めるのは、劇場の當事者が、江戸狂言のみを續演するのと同じことで、聽衆の方で價が廉いのに免じて文句を云はないにしても、いくらか氣が差すであらう。そのためだか何だか、この頃は頻繁に、舞臺劇を放送してゐる。今日の日曜には、午后岡本綺堂氏の「貞任宗任」を延若を主とした一座の俳優が放送してゐた。一般民衆は、手輕に千兩役者の臺詞が聞かれることを喜んでゐるのかも知れないが、私には、暇潰し以上の何者でもなかつた。私は、脚本を讀んだことがあるので、大體の筋が分つたが、さうでなかつたら、何のことやら分らなかつたかも知れない。「貞任宗任」はまだいゝ。「丸橋忠彌」や、「對面」のやうな、目に訴へることを主として作られた舊歌舞伎劇を放送するのは無意味である。盲人で芝居見物をするものもあるさうだが、私は、今度ラヂオ歌舞伎を聽くに及んで、いくらかその氣持を解することが出來た。……それよりも、ふと氣づいた大事なことがある。それは、舊俳優の臺詞を、それだけ聽いてゐると、極めて乾燥無味で非藝術で、むしろ滑稽な感じのすることである。舞臺の背景や所演の役々の形の美を取去つて、臺詞だけを裸にしたなら、かうなるのが當然なのかも知れないが、俳優自身も衣裳を着けて舞臺に立つた時ほど、その役々の氣持を臺詞の上に現はし得ないやうである。もつと突込んで考へると、周圍の色取りで誤魔化されないで聽く舊俳優の臺詞に、音調の上の美があるのであらうか。と私は疑つたあるひは、劇場内で聽く時と、文明の利器によつて遠距離で聽く時とは、何かの微妙な作用で音調の味ひが薄らぐのではあるまいか

兎に角、ラヂオ演藝が今後盛んになるとすると、その特有の藝術も現はれるやうになるであらう。放送局用として、ラ

チオプレーと名づけられる新作が、知名の作家の筆によつて世に現はれるさうである。既に里見弴氏のラヂオ脚本「ある夫婦」が「女性」に掲げられてゐる。私は讀むだけは讀んで、小説に於て見られる作者の持味のよく現はれてゐるのを感じたが、放送した上の效果は、讀む以上であるか否かを疑つてゐる。……放送用としなくつても、この脚本には讀み物として文學的價値があるのだが、普通の戯曲だつて、讀み物として隨分存在の價値があるのである。今まで嘗て世に無かつたラヂオプレートいふ文學さへ新たに現はれるやうになつたのではないか。昔は無かつた雜誌や新聞が盛んに流布される今日、紙上戯曲といふ文學の新體が現はれるのは、何の不思議もないのだ。私は全く上演を無視した紙上戯曲の出現をも期待してゐる。

ラヂオプレーが何處まで發達するか分らないが、芝居と云へば、見ることを主とするやうに習慣づけられてゐる日本の觀劇客も、次第に聽くことに心を注ぐやうになり、臺詞をよく味ふ習慣がつくことになるであらう。俳優も舊劇的マンネリズムを脱して、新たに臺詞廻しを工夫するやうになるであらう。新劇の發達進歩のためにはいゝことだ。

私は、ラヂオ演藝では、最もよく音樂を聽いてゐるが、西洋音樂には親しみが出來ないし、日本の三味線樂によつても、つねに貧弱膚淺な感じしか傳へられないのである。蕪雜にいろ／＼な藝術が存在してゐるのが、日本の現狀なのであらう。（三月二十七日大磯にて）

柳北仙史の柳橋新誌につきて

永井荷風

明治時代の書生にして成島柳北の柳橋新誌を讀まぬ者は鮮かつたであらう。柳橋新誌は其の表題の示すが如く柳橋烟華の地の繁榮を記述したものである。

此の書が其の體例を近くは寺門靜軒の江戸繁昌記に、遠くは明人曼翁の板橋雜記に則つたことは著者の叙とまた編中の文によつて明である。

江戸繁昌記は天保の初年に出で柳橋新誌は萬延元年に成り明治七年に及んで其續編が刊行された。江戸時代の末造より明治二三十年頃までの書生は恰今日の學生が文學雜誌を手にするが如き興味を以て靜軒柳北二家の戯著を耽讀したのである。

寺門靜軒の名は江戸繁昌記の戯著によつて世に傳稱せられ其の學識徳行の如きは之が爲に全く蔽はれてしまつた。成島柳北に於いても亦異るところがない。柳北世を去つてより四十餘年今日たま〳〵其名の世に記憶せられてゐるのは柳橋新誌の戯著あるが故であらう。近年坊間に古書の豫刻飜刻を企つるものが鮮くない。柳橋新誌も既に某書肆の某叢書中に選

入れられてゐる事をわたくしは聞傳へてゐる。

柳橋新誌の始て成つたのは安政六年己未の歲の冬であつて、著者は其齡二十三才、翌年萬延元年の初秋に至つて更に增補せられたことは編中に言はれてゐる。今之を柳北が當時の日誌なる「硯北日錄」といふものに就いて見るに此戲著の成つた所以を一層審にすることができる。

柳北の居邸は和泉橋の北、藤堂侯上屋舖の西方、御徒町の通にあつた。柳橋妓歌の地を去ることもとより遠くはない。また成島氏累世の墳墓の在つた處は本所押上の本法寺であつた。柳北は嘉永七年家督を繼いでより年々法事墓參の歸途既に屢親戚門人等を兩國邊の酒亭に招いで饗應してゐた。親戚の中に寄合醫師にして醫學館の教授をしてゐた杉本忠達といふ者がある。杉本家は柳北の父稼堂桓之助の實家で、忠達は當時杉本氏の當主であるらしく、其の居邸は成島氏の近鄰であつた。忠達は柳北の日誌中には杉達或は杉恒篠の名を以て呼ばれてゐる。忠達は其の親族なる田村宗達と云ふ醫師と共に時々柳北を誘つて舟を墨田川に泛べ又柳橋の酒亭に上つて妓を聘した。

柳橋新誌の始めて草せられた年より猶二年前の日記を検するに既に夙く柳北の遊事跡を窺ひ見ることができる。わたくしは安政四年の「硯北日錄」からそれらしい記事を左に摘記しよう。

正月三日乙酉の記に「雪霏々。直營。午後田村宗達杉恒篠來誘。放舟墨田川看雪。晩酌於川口亭。」川口亭は橋場の酒樓川口屋である。五月に至つて、「廿一日辛未。晴又雲。與杉恒篠田宗達澤兵九等。放舟于墨江。憩河喉坦巖二樓。小勝來伴。」の如き記事を見る。「河喉」は前に說いた川口屋であり「坦巖」は向島の酒樓平岩のことである。

夏六月に至つて、「十四日の癸亥。與細井忠介舟而遊墨川。飲河喉樓。月彩來伴。夜泛二州。晩前雷鳴無雨。」とある。この記事に「月彩」としてあるのは柳橋の妓某の假名である。憾むらくは其本名を知ることができない。

柳北は此年安政四年三月廿五日に其前年に娶つた妻狩野氏を離別し翌四月廿四日に本所松井町に住した旗本永井氏の女

を迎へて繼室となした。離別せられた前妻は幕府の繪師狩野董川中信の女で、柳北の姪に當るものらしい。董川中信の妻は柳北の父稼堂の次女であるが故である。

安政五年戊午の歳の日記を見るに柳北が柳橋の地を訪ふた事は前年に比すれば更に頻繁となつた。隅田堤の花を見るにも堀切の菖蒲を見るにも必妓と酒とを舟に載せて行くやうになつた。況や毎年五月廿八日の夜に行はれる兩國河開の花火または暑中の納涼に於てをや。柳北が勝遊の伴侶となつた者は寄合醫師杉本忠達や親近の門人兩三人の外に此の年から奥醫師竹内玄同法眼と奥詰醫師吉田秀貞とが加つた。竹内玄同は後に渭川法印と稱せられた蘭方醫で號を西坡といつた。柳橋新誌第二編中に柳北が「竹西坡」といつてゐるのは此の人である。また吉田秀貞は鍼科の奥醫師吉田秀哲法眼の男で元矢の倉なる父の家にゐた。硯北日錄には秀貞のことを華芸子となしてゐる。其號であらうか。或は柳北が隨意に付けた異名であらうか。それはまだ考へない。竹内杉本吉田の三醫師の外に姻戚なる旗本永井氏の後家と其の當主なる主膳兄弟とまた其族人中永井芳山と呼ばれる者なども常に柳北の酒伴となつてゐた。芳山の名は竹内西坡と共に柳橋新誌の第二編中に見えてゐる。柳橋の名妓お清と云ふものが文久二年麻疹に罹つて死した時永井芳山の之を弔つて「國色古今相遇稀。多情涙盡血沾衣。夕陽人弔孤墳下。野菊香殘老蝶飛。」となした絶句が新誌第二編に摘錄せられてゐる。

旗本永井主膳は恰此年安政五年六月朔日に御書院番に召出されたので其の日本所松井町の邸に祝筵を張つたことが日記にしるされてゐる。主膳の家には父は既に世を去り母と弟二人妹一人が殘つてゐたことも日記の文によつて推察せられる。永井氏の後家は其邸宅に藝人や藝者の出入することを好んだ派手好きの婦人であつたらしく又常に物見遊山のみならず釣や網をも好んだらしい。

此年七夕の日に柳北の室永井氏が初めて女子を產んだ。恰幕府に於ては水尾の二侯が井伊大老の爲に黜けられた其翌日である。十二月に至つて女子の宮參を祝ふ赤飯をば親戚中に頒つた晩、永井氏の後家は柳北の知人や門人と共に米澤町の

酒樓柏屋に上つて共に妓を聘して絃歌を聽いた。此夜招かれた妓の中に「月券」とよび「組八」とよぶものがある。「月券」の名は柳北が假に其日記中にしるしたもので本名は之を知ることを得ない。柳北は初この「月券」を愛したが其意に從はなかつたものと見えて後に組八とよぶものを招いで遂に雲雨の戯をたしたらしい。

十二月二日の記事中に「二日癸卯。陰。直營。有申樂。兩賈賜觀。晩訪襟島。遂如鼎浦。與組八逢。有醉來偶折未開梅句。」としてある。十二月二日は家茂公將軍宣下の儀式の擧行せされた翌日であつて、營中に猿樂の演奏があつて町人が之を拜觀した。柳北は此日城中に出勤し家に歸つて後、御書院番を勤めてゐる襟島何某を訪問し其歸途船宿何某屋で妓組八と逢つた。「鼎浦」とは柳北が假に呼んだ名であつて、實は叶屋とでも呼ばれた船宿であらう。日記の文中「醉ヒ來ツテ偶折ル未ダ開カザルノ梅」の語がある。是によつて想像するに組八はまだ男の肌を知らなかつた十六七のあと氣ない藝者であつたらしく此夜初めて柳北先生に身をまかせたものらしく思はれる。柳北は當時二十三才の青年で其身分といへば將軍家の讀書御相手を勤めるものであるそ。妙齡の美妓組八は尋常一樣の嫖客として柳北を遇してゐなかつた事は言ふを俟たない。當夜此の佳人と此才子との船宿に相逢うた情景は正に爲永氏が人情本中に見るが如き艷美なるものであつたのであらう。

翌年安政六年は乃柳橋新誌の草せられた年である。柳北が妓組八と相逢ふことは日と共に稠くたつてゐたやうである。三月十日柳北は一友と共に妓組八を舟に載せ隅田川に白魚を捕りながら滿開の櫻花を眺め賞した。又家人門生等と共に品川沖に汐干狩を催すこと前後二回に及んだ。其の度每に組八は必伴はれて行つた。然し花は散り夏四月となつてから組八との交情は忽ちにして斷えた。四月十五日の日記に柳北は斷然酒を斷つ可きことを記し、翌十六日の記には「晩ニ鼎浦ヲ過ギテ組八ニ逢フ。未ダワガ心事ヲ語ラズト雖、余獨リ楊柳枝ノ感アリ。(略) 知ラズ滔々タル歲月何ノ時カ吾意ニ適スルヲ得ルヤ。昨日ハ麴生ト別ヲナシ今夕ハ又蝴蝶ト夢ヲ分ツ。多情ノ客イカンノ意思ゾ。是豈慈人ノ言ニ拘ルナランヤ。是豈錄兩ノ財ニ吝ナルナランヤ。特ニ思フ所アルナリ。渠ワガ意ヲ知ラズ。眞ニ憐ム可キノ蟲ノミ。他日豈悵惋タルヿ其

ヲシヤ。語ラントシテ語ラズ。慰メントシテ慰メズ。天地ハ大ニシテ人物ハ夥シ。知ラズ何人カ能クワガ多情ニ似タルヤ。惨然タルノ餘聊カ書シテ以テ後日ノ一噱ニ資ス。噫。」と記してゐる。而して此の以後組八に代つて日記中には妓「番氏」の名が屢見られるやうになつた。「番氏」の名も柳北が假に與へたものであつて其の本名は之を知ることが出來ない。然し日記を通讀するに番氏には姉と妹とがあつて柳北は姉の方に馴染を重ねたものらしく思はれる。萬延元年の五月六日に柳北は其弟妓の妹が始めて藝者の名弘したのを祝するがため二三人の友人と共に番氏姉妹を伴ひ柳橋から舟で今戸の料理屋大七に登つて飲んだ。此の日の記事を見るに「己亥。霽又小雨。芳山悔齋一犂ヲ拉シ、舟ヲ同ジクス。小番珠兒留奴コレニ陪ス。墨西ノ巨七樓ニ遊ブ。新ノ日小番名ヲ揭グ。余與テカアリ。故ニ賀筵ヲ開ク。興味筆ニスベカラズ。諸子ト別レテ番氏ヲ過ギ獻酬差アリ。又酌ム。興高ク意熟ス。嗚呼佳盟三年今日始テ其ノ約ヲ踐ム。喜ビ知ルベキナリ。」云々。

かくして此の年九月の朔日に始めて柳橋新誌が草せられたのである。日記に「九月朔。丁卯。風雨。登殿。拜賀例ノ如シ。新誌ヲ草ス。」としてある。此の文によれば柳橋新誌は此日を以て脫稿したものゝ如くに思はれるが、新誌の本文には「此ノ編ハ己未ノ仲冬ニ成リヌ。」となしてゐる。されば九月の朔より稿を起して十月に至つて始めて書き上げられたので日を費すこと三旬の餘である。これを昭和現代の文士の創作に比する時は一代の才筆柳北の如きも文をつくること甚遲緩であつたと言はねばならない。

當時柳北の生涯は頗多事であつた。啻に公事の多忙であつたばかりでなく風流韻事の遊びにも亦殆虛日なき有樣であつた。公事は同僚の奧儒者小林榮太郎と交代して登城し奧殿に伺候して侍講をなすの外、時々湯島學問所の構内に在つた實紀編纂所を見廻り修史の事を督するのである。安政萬延の交恰も柳橋新誌の成つた頃に、柳北が監修の下に或は編纂せられ或は校訂せられたものは役人代々記、大猷政要錄、明君德備抄の外に實紀五百餘卷と後鑑三百七十五卷とがある。實

紀は始め祖父東岳の編纂したもので今日活版本の德川實紀である。後鑑は父檪堂の編纂に係るもので足利幕府の記錄である。鎌倉幕府の事を記錄した東鑑に繼ぐべきものなので之を後鑑と稱したのである。

此の如く公務の輕からざるにも係らず、柳北は平生家に在つては日を期して經書の講筵をなし詩會と和歌の會を開いてゐた。又每月林大學頭の塾中に開かれる詩會と、侍醫多紀棠邊の詩會とにも赴き親戚永井主膳の家に催される發句の會にも出席した。

每月柳北が其家に開いた詩會には安政六年から大沼枕山も來り會した。植村蘆洲關雪江の如きは其の以前より一度も欠席した事がないやうである。枕山蘆洲等安政時代の詩人のことについてはわたくしは既に拙著下谷叢話に述ぶる所があつたから茲には贅せない。わたくしはこゝに安政萬延の頃に至つて柳北の知友には幕府の醫師が多かつた事を言つて置く。而して其醫師中の知人には伊澤磐安榛軒と森養竹枳園との二人も亦まじつてゐた。磐安は福山侯の侍醫伊澤蘭軒の次男である。わたくしは森鷗外先生の名著伊澤蘭軒の詳傳を反覆して榛軒磐安の記事中には成島柳北との交遊に說き及んでゐない事を見た。安政六年十一月五日の柳北の日記には伊澤磐安が鍼科の侍醫杉枝仙貞と共に柳北の家に來つて「欵語數刻」に及んだと言つてゐる。又萬延元年五月五日の記を見るに、「五日。戊戌。晴。小雨。登殿拜賀常儀ノ如シ。午下（多紀）棠邊、（多紀）雲從、（伊澤）磐安、（遠田）澄庵、（田村）宗達、（村山）自伯、（森）養竹ト舟ヲ共ニシテ小梅村ノ淸川氏ノ別業ニ遊ブ。主人モ亦會ス。衆興磊然タリ。米ト吉ノニ校書スル。夜棠邊ノ居ヲ過ギテ歸ル。此ノ日暑甚シ。」

柳北はこの年（萬延元年）六月の廿四日頃から暑氣にあてられて旬日ほど病に臥してゐた。そして其病の全く癒へた日に柳橋新誌の追補を畢つて始めて此の戯著を完成させたのである。

日誌七月五日に「丁酉。晴。柳橋新誌編ヲ成ス。芳山恂齋來リ酌ム。」また、翌六日には「戊戌。晴。恩賜例ノ如シ。林祭ニ託シテ之ヲ受ク。晩ニ脚ヲ試ミ喬氏ニユク。契濶ノ後歡アリ。」としてある。病後始めて戸外を散歩し妓「喬氏」の家

に行つて久しぶりの逢瀨を樂しんだのである。

當時狎客の直接に妓の家に赴いて相逢ふことは酒樓船宿の冗費を節減することになるので妓の情夫にあらざれば宿も好遇せられた狎客の特權となす所であつた。此等花柳の事情は柳橋新誌中に詳であるからこゝに贅せない。

柳橋新誌は今日の文藝鑑賞の眼を以てすれば柳北が風俗の叙述に託して青春の歡樂を唱つたものと見て差支はない。然りとすれば幕府滅びて明治維新の後に至つて執筆せられた其の續篇の如きは是正に柳北が時勢に對する失意と中年の悲哀とを述べた感慨の文字といふべきである。

新誌第二編の草せられたのは明治四年三月廿三日である。日誌を見るに、「廿三日、晴。柳橋誌二篇卒業。」としてある。岸上質軒の柳北先生年譜に明治六年新誌二篇成としてあるのは誤である。而して其刊刻せられたのは刊本の奥附に明治七年二月としてあるから言ふに及ばない。

明治四年柳北は年三十四になつてゐた。七年前繼室永井氏が其の一女機(はた)を遺して歿した後柳北は外妾お蝶を正妻となし既に一男二女を擧げてゐた。お蝶は初め柳橋の妓であつたが柳北が「有待舍の記」について見れば文久元年六月の頃から外妾となつたらしく思はれる。明治維新の後柳北は一時家族を携へて向島秋葉神社の傍に隱棲したが翌年明治二年には淺草森川町に僑居し西遊の後明治三年の夏には日本橋箱崎町なる古河藩主土井氏の邸内に移轉し又別に馬喰町に一商舖を開いた。わたくしは柳北の經營した商業の何であつたかを知らない。唯日誌中に記された次の一律詩を見て、馬喰町の別家と稱するものゝ一商店であつた事を知り得たに過ぎない。律詩に曰く、「三餐一睡亦君恩。飢醉自憐生理存。販貨馬街新市舖。摘蔬墨水舊田園。林泉到處詩材富。風月隨時酒德尊。悟了優遊乃仙訣。奚須喋喋五千言。」

馬喰町の商舖は半年を出でずして閉されたらしい。明治四年三月柳橋新誌第二編の草せられた頃には柳北は既に本願寺門主大谷光瑩の知遇を受け秋八月六日には箱崎町の僑居を引拂つて淺草本願寺中敬覺寺の境内に轉居し間もなく學舍を開

いて漢洋の學を教授し翌五年には大谷法主に從つて洋行した。

柳橋新誌第二編の刊刻せられたのは著者が歸朝の後である。二編刊刻の後明治九年に至つて更に第三編が つくられた。然しこれは公にする事を許されなかつたと云ふ。岸上質軒氏の柳北先生年譜に、明治九年「柳橋新誌三編成。官不許公之。先生大詰文部大輔田中不二麿。田中氏裁書以答。」といつてある。第三編の禁令は其の刊刻の後にあつたものか、或は其以前に在つたものか、わたくしは未能く之を調査してゐない。舊南葵文庫の高木さんは柳橋新誌第三編の藁本を見た事があると言つて居られたが、然しわたくしは未之を知らない。今日成島家に保存せられてゐる柳北の日誌は不幸にして恰この當時三四年間の冊子を闕いてゐる。暫く此等の事を記して後考を俟つより外はない。

柳北は柳橋新誌三卷を草した後、明治十二年四月に至つて更に又「新柳情譜」なる艶史を作つた。然しこれも亦わたくしはまだ見るを得ない。纔に信夫恕軒の文集について新柳情譜の序文を讀み、新橋柳橋二處の繁華を叙したものである事を知つたのに過ぎない。その考攷を他日に讓る所以である。

文藝時評

佐藤春夫

批評の勃興

近頃ぼつ／＼批評や評論の勃興しかかつた氣運のあるのは、注目すべき現象である。

一時批評といへば月評に限り、或は評論といつても、所謂文壇ゴシップに毛の生えたやうなもののみで、たとへば人を論ずると偉いとか偉くないとか、作を論ずるといゝとかつまらぬとか、たゞ簡單な評價をしただけで、たとへ少しばかりの理由を數へ立てても、決して評論などといふ態をそなへたものではなく、立場も分らぬ好惡からのみ簡單にいつてのけ、その好惡もどうかすると眞の好惡ではなく、世渡り上手な相手の顏色次第でどうにでも變るといふやうな態度で、その上個々の作品についていふ場合には、その作全體の精神などはそつちのけになつて、ほんの部分部分に拘泥して、いつも末技的の技巧論に終り、とかくそれより外に論ずることを知らないほどの、つまり何一つ藝のないのが四五年も文壇の空氣を吸ひ、先輩と仲間の間を馳けずり廻つて、別段ありさうにも思へぬ才氣を絞つたのを枯木も山の賑ひのつもりで、編輯者が三度に一度刊行物に載せるのを、それを批評だと思ひ、だが、讀む方では餘りたわいもないといふので月評家の名稱を與へ、そのまた月評家の中で多少氣のきいたのが、批評などといふ野暮でもあるまいなどと、氣のきかぬことを氣のきいたらしくバラ／＼ッと五行位の斷片を一二行おきに十も並べて氣取つたのを雜文などと稱し、それが批評の通がつたものだと心得たり、また親方の鼻息を窺ふのには、批評なんていふ廻りくどいものより、ゴシップといふ便利なものがあるなどと、一さう直截な才子がゐて、いつの間にやら、批評家といふ名前は、月評家、雜文書き、ゴシップ名家などと

同じ意味のものになつたかの感があつた。文壇泰平時代の一現象とも見るべきであつたらう。

ところが、近頃になつて、いままでにも隨分批評的識見のあつた人が、いま迄のやうに斷片的にではなく、もつと向きになつて、批評的の筆を振ひだした。たとへば正宗白鳥氏、宇野浩二氏、芥川龍之介氏、谷崎潤一郎氏などがその重なるものである。必ずしもこれらの諸家が自發的に批評的文章を書かうと思ひたつたのではないかも知れないが、それにしても雜誌編輯者が多少質のある文學評論を、乃至は文壇批評を要求するやうになつたといふことが、やがて前述の諸家に批評家的の仕事をさせた譯だから、時代が、昨日までのやうに批評をおろそかに思はなくなつた。といふことは、たしかにいへる。これには多少の理由があるに違ひない。

昨日までの批評が餘りにたわいもなさ過ぎたからといふやうな簡單なわけのものではなく、僕の見るところでは、これには案外深い理由がある。

一體批評といふものは、個人にとつても時代にとつても、實行的能力が一ト休みした間に頭を擡げるものなのである。實行力——文學的にいへば創作的活動などの旺盛な、「すなはち油ののつた時代には、批評や評論などは自然と萎微して了ふ。つまり、懷疑だとか反省だとか、くだけていへば、「どうして？」といふ氣持ちが無く、たゞ勢ひにまかせて、調子づいて、仕事をしてゐていいのである。楊枝でほぢくるやうな詮議立的批評はいつも大勢の定つた泰平時代の副産物である。まつたく逆に時代がいくらか不安になり、動揺を感づくとまづそこに批評的な精神が、その要求が生れて來る。つまり、僕にいはせると、批評の勃興といふことは、創作力の減退と關係があり、さてその批評勃興の氣運の隆盛の程度が、やがて次の文運の消長によほど重大な影響がある。僕が見るところでは、批評はいつも一つの時代から次の時代に歩み入らうとするその一瞬間で、つまり過渡時代で、片脚がまだ地上に落つかぬ場合のその狀態とよほど似通ふてゐる。次の足の踏み場がただの足場でないやうな場合、我々は足を擧げたままで、長いこと思案しなければならぬやうに批評的要求が

多ければ多いだけ、またそれが隆盛であればあるだけ、次の時代の賴もしいことと同時に今日の難局とを證據だてることにもなる

僕は批評が精一つぱい勃興し、その上、その題目が出來るだけ野蠻な根本的なものであり、文壇の今日の均衡はめちや〱にくづれることを喜びたいのである。それは明日をたのもしく豫想させる。

事實、普通世間ではいはれてゐる我々中堅作家なるものは今日殆んど皆十年以上の仕事をして來た。疲れたといつて惡るいならば、我々が文壇へ出て來る以前に考へたその種は十年の間に殆んど收獲れつくした。我々にとつてはこの通りであり、文壇全體にとつては、はなはだ僭越な言ひ分かも知れぬが、われ〱以後新進作家らしい作家が出現したのを感じない。これは誰れも言ふことだから僕が改めていつたからとて別にわれわれ以後の新進作家を誣ひることにはなるまい。

それらの新進作家がほんの一日の長である我々を褒めることを餘り愉快に思はぬからといつてそれは當然なことではあり、なほのこと事實十年を經過したわれ〱は殘念ながらたとへ刻々に努めるつもりでも、いつも新鮮であるわけには行かない。このわれわれ自身も亦自尊心の高い作者氣質の常として多少の活動力を殘した作家を推重するだけの雅量も乏しく、この結果が昨年來のやうな二三のずつと先輩の大家を推重するやうな事實の半面の理由にもなつてゐるのではあるまいか。これは或は穿ちすぎた批評であるかとも思ふが、ともあれ新進の中には時代を動かすほどの作家がなく中堅の中に眞に中軸的活動をする人がなく、彼等の中の或るものはその賣名をつなぐ苦しまぎれな策として利を以て年少の作家たちを誘ふなどの淺はかな苦肉の策を案出したりしなければならぬ程になり、かうして時代は徐ろに頽廢して來た。その頽廢が月評的批評、ゴシツプ的雜文となつて現はれたけれども時代はいつもそのやうな馬鹿なところに止つてゐる筈はない。ほんとうの時代的反省が、やがて批評の勃興を促しつゝあつたのである。恐らくはかうしてきつとこの時代的反省の後にわれ〱のエピゴーネンでない一つの時代をもつた新進の作家が現れるであらう。さうありたい。その時代がどれだけ新しく、どれだけ大きなものであるかは、もとより出來て見なければ分らないが……。

「心境小説」と「本格小説」

この題目は所謂文壇以外の人々には何のことか通じないかも知れない。けれども一般に通じ難いやうなこの問題が、昨年中で或は第一に所謂文壇で取り上げられた題目なのである。これを以て見ても、われ〱の文壇が餘りに文壇的なことを證明することが出來る。だが僕はいまはさういふ點を論じようと思つてこの題目を選んだのではない。僕がこのジヤアナリステイツクには古びた問題をもう一ぺん取り上げるのは、僕にはこの問題も要するにわれ〱中堅作家がくたびれて早くも老を感じてゐることから、「無意識にかういふ問題も生じたのではあるまいかといふ疑問があるので、かういふ立場から、もう一ぺんこの事を仲間の諸君に聞いて貰ひたいと思ふのである。

それにこの問題は餘りに文壇的であり過ぎるとは云へ、文學上の問題としては根本的ではないながらにもさま〲なことを考へさせる題目には相違ない。小さいながら一つの分水嶺だと思へる。ある時期の間この問題が論じられたのは、さう考へて見ると必ずしも無意味なことではない。それだのに別にこれといふ明快な答案をも得ないですんで了つたかのやうに見える。この問題のみに限らず文壇では大抵の論題はいつも有耶無耶にすんで了ふ。有耶無耶でもさしつかへない程なつまりさほど重要でもない題目ばかりが議論のたねになつてゐるのかも知れぬが、それでもともかく一つの問題である以上思ひを潜めて見るとそれ〲に多少意味ある點まで堀り下げられるものを、それを充分になし遂げないで了ふごとく見えるのは殘念である。さうしていつも大したことでもない話が大した題目でもないがまゝに通つて了つて、しかもそれ相應に賑かしにはなつてゐる。つまり、いつもどんな問題でも落付くところへは落ちつかない。もつとも重大な問題はさう直ぐ明快に解決されるものでもないから、それが重大であれば、またそのうちに何度でも蒸し返されて、少しづつは分つても來るのだから、それでもいゝやうなものゝ、ともかく不得要領のうちにみんな要領を得るのだか、それとも倦きるの

だか、いままでの文壇的問題は大抵さういふ工合である。これも文壇といふところの一つの現象で、問題が深いところから來てゐない證據であるかも知れぬ。

「心境」か「本格」かの問題にしても個々の作家の素質やら國民性やら或は「修行としての文學」「經營としての文學」などの見方も出來るだらうし、それの見方から出發して論じてこそ文學論の一項目にもなるものを、僅かにその出發點を見出しただけでそれ以上には觸れないで了つた。事實「心境小說」の流行を見て「心境小說」か「本格小說」かといふだけでは一向批評的題目ではなく、ただ文壇現象の表面的觀察からほんの一歩も踏み出してはゐないのである。さうしてそれ〳〵に僅かに一歩を踏み出したところでもうその題目はやめて了ふ。論旨が深いところに徹するひまもなく、ふわ〳〵とジャアナリズムの流れの上を漂ひ去つて了つた。

僕は作風そのものとしては「心境」「本格」その何れをもよしとするもので、それがどちらかでなければならぬやうなことを主張するのを見ると、問題が變なところへ飛んで了つたやうな氣がしたほどである。作家の素質によつて文學を自己一個の修行と心掛けるもよし、また自己の文學的制作の中に世界を再造する心掛けで作者が自から神であらうとするのもよし、それらの點はもつぱら作者の素質をもとにし、また作者の人生觀が自づからに作者をこの二種類の作風の何れかにきめさせるのだから、その二つの作風の可否を決定することは、恰も蘭の花がよきか櫻の花がよきかを論ずるが如く愚である。寧ろ問題は何故蘭があのやうな形で花咲くか、また櫻がさうであるかにのみかゝつてゐる。その好惡を敍べまた己れがその何れに屬するかを宣言することは無論差支へない。だが蘭に向つても櫻の如く花咲けといひ、櫻に向つても蘭の如く花咲けといふとすれば明かに滑稽である。ただ僕のは、何故にこの土地には蘭が多いかを考へるのである。

僕の考へ方では「私小說（イヒローマン）」と稱するものは所謂「本格小說」の一面である。つまり浮彫にされた本格小說が「私小說」なのである。「私」といふ一面から浮彫せられたのである。おなじことを逆にいへば「本格小說」とは丸彫にされた「私小

說」とは丸彫にされた「私小說」である。殆んどどの私小說でも主人公一人といふ小說は全くない。その幾人かの作中人物を悉く「私小說」に於ける「私」の如くに描くことによつて、所謂「本格小說」が出來る。千萬人の心ある作者が、千萬人の私小說を重複せしめたときに完全に本格小說が出來るわけである。同時に一人の心を悉く描破し、或は熟知してのみ「私小說」が完全に出來るわけである。この意味では、この二つの作風は、その差異は、存外大したものではないと考へられる。一人の人間の心を限なく知りつくすといふことは、千萬人の心を有つことと同樣に決してさうたやすいことではないからである。さうして僕の考へてゐる「私小說」なるものは一つの「本格小說」的世界を表現する上に簡單で效果の多い一方法として作者がこれを選ぶ樣式であつて、決して作者が骨惜しみの末に案出した狡るい方法ではないのである。

われ〳〵の文壇で「心境小說」と呼ばれてゐるものは、それらの點で、僕の考へてゐる「私小說」とは多少の相違があるやうに見える。所謂「心境小說」はその樣式に於ては「私小說」に類似してゐる。けれどもその精神に於ては餘程の相違があるやうに思ふ。「私小說」を浮彫といつた比喩をもう一ぺん用ゐて見るとすれば「心境小說」は寧ろ繪畫である。繪畫と浮彫とが違ふほどに僕の考へてゐる「私小說」と僕の見る心境小說とは違ふ。僕がかくいふのは決して一概に我が國の「心境小說」を難じようとするのではない。この點は重々注意しておいて貰ひたい。僕は寧ろそこに非常な特色をさへ見出す。さうしてこれが世界の文學の中で一種特有の傾向のものだといふ說にさへ贊成する。僕は所謂「心境小說」なるものに對しては散文詩を見るが如き面白さを感ずる。この散文詩は曇り日のやうに美しい。この散文詩は取材に人間生活を選んで簡素な筆致の中に日常生活的心理の陰翳をつかまへた。或はつかまへようと努力した。そのかわりには周圍のすべての人間との交涉の如きは甚だ朦朧として了つて、われわれは僅かにその作者の實生活を思ひ合すことによつて作中人物のそれ〴〵の位置と關係とを臆測し得る程度である。これを人間と人間との交涉を立體的にあらゆる方面から描きつくさうとする小說として考へる時、心境小說は甚だ變態的なもので、その趣きはまた變則的な美觀である。寧ろそれは抒情のかはりに心理描寫を以てした詩といふ方が適切のやうに思ふ。

しかし僕が今論じたいと思ふのは所謂心境小說の面白さではない。それよりもどうしてこのやうな傾向の作品が我が國で生れたか。またそれが二三の作家にのみ止まらず、時代の批評家をしてこの變則的なものが「本格」と銘うつほど普通の作風に對立するものとして考へられるまでに注目すべきものとなつたのはどういふわけであるか。その間に潜んでゐるかも知れない何ものかを知らうといふのが僕の問題に外ならぬ。

一つにはこれは國民性にもよる。しかしその國民が特にこの時代にどうしてかういふ文學的一傾向を發生せしめたかを思へば、これはまさしく時代にもよほど關係のあることである。

一體我が國の作家は大體において——といふより九分九厘まで殆んど二十五から三十までの間に一個の作家として擡頭してゐる。さうしてこれから以後の文壇についてはいさ知らず今までのところ文壇で生息してゐる人達は何れも我が國の中産階級の子弟のみといつても差支へない。さうして大部分は大體において順當な生活環境の中から多少の藝術的才能とそれ〴〵に先づ普通以上の教育を受けた上で作家として世に立つてゐる。それらの作家が世に出るのは今もいふ通り何れも三十を越えないうちのことである。一體廿代の青年が體驗するところのものは、それが中産階級である場合には先づ戀愛生活ぐらゐなもので、また廿代の青年の普通の傾向として或る素質の性格は空想的であり又神經質で內面的でいつも自分自身の中で自分自身を追及し考察してゐるのが常である。さうしてそのやうな素質の性格とは要するに文學的に出來てゐる人物のものに外ならない。實際彼等廿代の青年の文學的の仕事は何處の國土においても普通詩作である。又華やかな性格を有たないものにとつては瞑想である。つまり彼等の眼は中空に向けられてゐるか、或は自分の內部生活にのみ向けられてゐる。さうして彼等の外部の生活はその接觸する社會も狹くその中から受けとるところの印象も甚だまとも過ぎるものである。せい〴〵學校生活と戀愛生活とそれに詩的空想と又自己反省的心理解剖とが、中産階級の子弟の廿代に於ける生活の大部分である。彼等の手になつた文學は大抵以上の如きものの基礎の上に作られてゐる。さうして多少の才智ある

人物はこれらの作品によつて世に出て來たのである。我が國の今日の文學が心理的小說に於て一番完成してゐるかの如く見えるのはその作者達が靑年であるがために外ならぬ。

かくして作家生活に入つた我々は十年のうちにもう靑年ではなくなつて來る。我々は壯年期に到達するのである。しかも十年の間の作家生活は今日の我が國の狀態では決して豐富な生活であるとはいへない。その生活のまた見聞の範圍は他の社會の人間に比べて寧ろ狹少であつても廣汎だといふことは出來ない。それにどのやうに考へて見ても我が國の文學者の社會的生活は、今までの傳統上決して社會的に惠まれたものといふことは出來ない。それは近年物質的收入に於ては多少の潤澤を加へてはゐる。文學者といふものが一つの職業として立派に成り立つものであることは事實である。そればかりか我々は所謂資本主義の活動家と比べたならばいざ知らず、一般の己れの努力と才分とによつて社會から酬られてゐる人達に比べて見ると、寧ろ過分なほどの物質的報酬を受けて居るものではある。が、しかも公人としては極めて狹い範圍に於てのみしかその存在の意味を認められてはゐないのである。我々の有名は遊藝人の有名と大差ないものである――またその生活に於ても。つまり酒を飮んだり麻雀をやつたり、その外にはせい〳〵他の社會の人間より幾らか書物ぐらゐは讀むかも知れぬ。或は讀まぬかも知れぬ。さうして生活がそれほど困らないだけに、さま〴〵の考へも死身にはなれぬ。自然も一向美しくは見えぬ。いつの間にか生活は倦怠を催し、仕事は十年前に考へたことの力のない餘剩になつて了ふ。(これが願くば私一人の告白であれよ)われ〳〵はかうした靑年らしい熱情を消磨すると同時に空想力は減退し生活反省は麻痺し、またさればといつて廣い社會に網の目を廣げてゐない我々の外面生活は所謂體驗するところも少く、また見聞にも乏しい。しかも我々は隆盛なジヤアナリズムの影響を受けて沈思してゐる餘裕をさへ持てぬ。勢ひ我々の取材は家常茶飯事になり又今までの藝術的修行の續きはこの家常茶飯事の中での心理的方面の觀察に終始する。われ〳〵は藝術家を主人公とし、また書室と書齋とカフエーとを取材にした小說にはもう倦き飽きしながらも外には世界をもう知らないので

ある。しかし、青年期は過ぎて我々の物の見方考へ方の中には多少の複雜さを加へないではない。かういふ狀態の中に自づから出來て來るものが、その中の多少傑出したものが、所謂「心境小說」の佳作である。

批評家が所謂「心境小說風」の作品がどうして發生したかを注目するかはりに、たゞその種類の作品が多いといふ現象のみを看取した。その事實は間違ひではないが、それと同時にこの國この時代に、何が故に所謂「心境小說」的作風が旺盛であるかを摘發すべきではなかつたらうか。僕は「心境小說」の隆盛をわれ〳〵當年の青年作家の止むを得ざる多產と生活的狹隘とまた無意識の偷安から來る早老と、しかしまだ磨滅しつくさずに殘つてゐる才能との奇妙な混血兒ではないかと考へるのである。僕の觀察は餘りに己れを以て他を類推するに過ぎるだらうか。ともあれ所謂心境小說は餘りに個人的であり、同時に心理にのみ終始し、さうして微妙な陰影をのみ求めるのを見て僕は、これらの小說作品を早老者の詩だと考へるのである。また芥川龍之介氏が近頃發表したところの所謂筋のない小說の說も、一個の新時代の俳文とも稱すべきものでこれもまた餘りに早老的な浪漫主義の一面ではなからうかと思つても見る。

壯年者の文學

僕は鑑賞家としてではなく、若し一個の文藝批評家としての立場からの答案を要求されるならば、心境小說の贊成者ではない。

これが餘りに個人的であり餘りに日常生活的に終始し、作中人物は餘りに作者の生活に即するがために作品の世界は非常に狹隘になり、また主人公もその他の人物もその性格などを窺ふためには一行半句の微細な點にのみ賴らなければならぬ。これは讀者が常に作者と殆んど近い位の藝術的敎養を要するわけで、從つて一種の高踏的な文學であり過ぎる傾きがある。これは作者一人の人格的完成のためにのみ書かれた修行的文學としては當然の結果であるかも知れないが、今日の

我々の見る心境小説なるものは餘りに現象の觀察にのみ沒頭してゐてそこに精妙な見方はあつても、人生を如何に生きるべきかといふやうな野暮な考へをすてゝゐるらしい今日の多くの心境小説的作家が人生そのものに對する意嚮をはつきりと竪ふに適切な機會に乏しい。また主人公なる只一人の作中人物も己れの心理にのみ終始するのみか作者自身その主人公のおかれた環境を鳥瞰的に觀望してゐないがために、その結果この主人公なる一個人が社會とどんな交渉を有つた立場にあるかを明確に讀者に意識させることが出來ない。出來ないといふよりも作者はてんからそれを度外視してゐるかの如くにも思へる。要するに心境小説は縞柄の面白い織物や、またどんよりした曇り日の風景などのやうな微妙はあつても餘りに立體的な面白さに乏しいのである。往年平面描寫なる標語を提げてたゞの描寫論とし、又無解決と稱する標語を人生觀とした自然主義の窮極と我が國傳來の隱遁孤立な文人氣質との融合がこゝに到達したかと僕には思へる。さうしてこの種の作品の面白味は要するに一種の潔變小説だと思はれるのである。さうして心境なるものは青年期の詠嘆が年と共に燻されたやはり一種の抒情の謂ひに外ならぬと思はれる。從つて僕は心境小説の作者を面白い一派の散文詩人として鑑賞する外には所謂小説家としては餘りにせせつこましい無川な人間記錄を作つてゐるものだと感ずるのである。

これだけの僕の云ひ分でも、敏感な諸君には或はもう分つて貰へるかとも思ふが、僕はここに僕が小説といふ藝術をどういふふうに見てゐるかを改めて明記しておくの必要を感ずる。もつとも簡單に小説は世態と人情とを描くのが本來の使命だといつたならば人々は僕の云ひ草の餘りありふれた古めかしさに失笑するかも知れぬ。けれども若しこの同じこととを、小説といふ藝術の使命は描寫といふ方法によつて作中人物の性格を明かにし作中の時代の文明批評をするにあるといひ直したならば、或は多少眞顏で聞いて貰へさうな氣もする。人情を寫してそれがもつとも深いところに到達すればそれは自づから性格の描寫にならざるを得ないし、世態を描いてその間に作者の識見を潜ませてゐたならばそこに自づから文明批評を生み出さずには措かないのである。また相當の識見なくしては眼光が世態の內面に穿ち入ることも人物の性格を

知らずしてその人物の人情を極めることも不可能であらう。僕は明治の廿年代頃に說かれた小說論の世態人情を寫すといふ言葉を千古の金言であると思ふ。たゞ子女の痴態をのみ人情と思ひ、また流行の風俗のみを世態だと考へたかの如く見えるのは、その論旨の誤りではなく作者の至らざることを稱するのみである。さうして僕は性格の描寫と文明批評とを小說道を行く唯一の車の兩輪だと信じてゐる。この外の車は多分、小說道以外の別の文藝の野道を行きつゝあるのである。

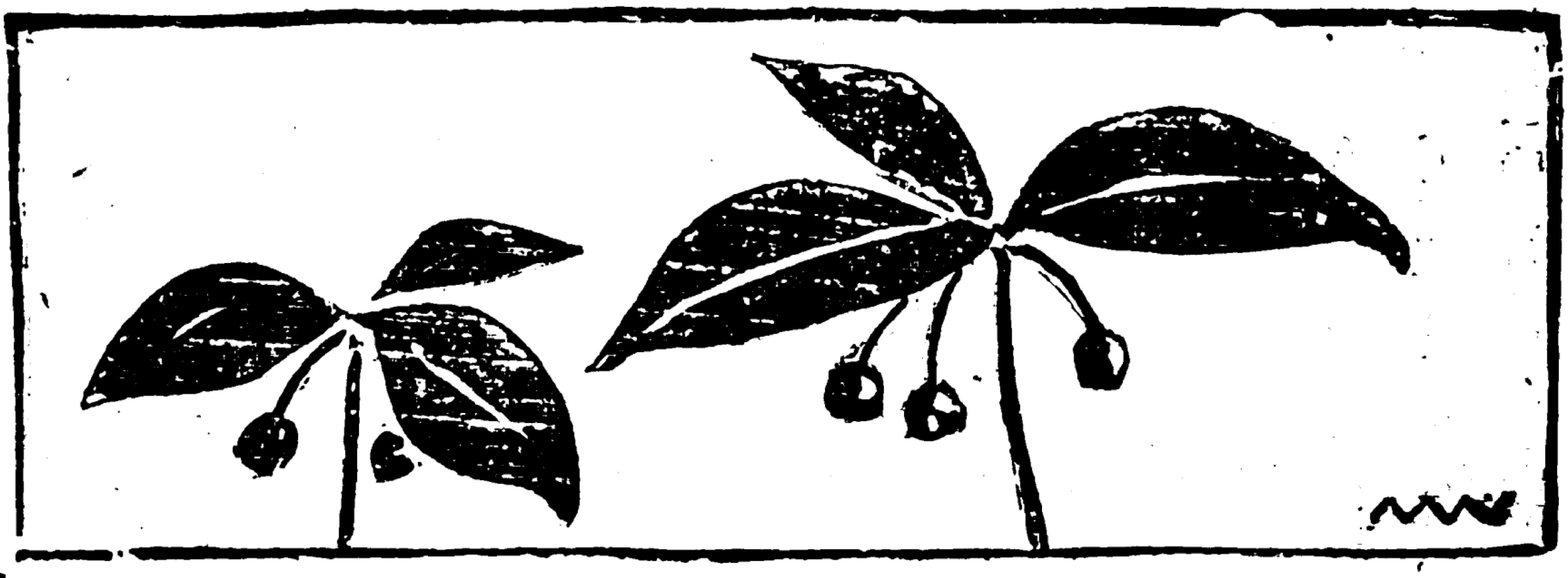
この車の兩輪の中で性格の描寫の方はまだしも之を今日の我が國の文壇で求め得るだらう。しかし文明批評に至つてはまつたくこれを見ることが出來ぬと云つてもいひ過ぎではあるまい。この點に於ては僕は寧ろ今日の文壇よりも明治二三十年頃の文壇の方がもつと文明批評を持つてゐたかのやうに思ふ。假りに作家的人物を選ぶにしても、北村透谷、國木田獨步の如きは正しく時代の背景の中に生きて彼自からこれを自覺しその間に思索することによつて、彼等の感慨はたとへ餘りに少年的ではあつても、そこに自づから文明批評的要素を帶びてゐた。また自然主義時代にしても今日の文壇よりももつと時代と密接な交涉を持つてゐた。傳統的藝術美の打破、偶像破壞的な言說、その中には社會的要素をも多分に含んでゐる。新聞の三面記事などが漫畫化して自然主義といふこの言葉を使つた一事に見てもそれが社會的に働きかけた範圍が如何に廣かつたかを證明することは出來る。またその次ぎには文藝家が競ふて危險なる洋書を愛讀することによつて社會から有害視された時代もある。これらのことを思ひ合せて、さて今日の我々の文壇を見ると、嗟、我々が何事を我々の社會全體に語つてゐるか？　我々の名は有名であつて諸種の全集物の廣告書きとしては役立つ。さうしてそれツきりではないだらうか。文學者が文明批評を要しない程今日の我々の文明は完美したか？　この我々の今日の社會が少しも動揺してゐないといふのか？　その動揺の中には我々が批評するやうな價値ある現象は何もないといふのか？　恐らくは僕のこれらの質問に對して然りと答へる人は一人もないであらう。しかも我々の文壇の、その中心點に近づけば近づく程彼の

の作品にも言說にも生活にも殆んど何らの文明批評的のものをも見出し得ない。彼等ではない、これは我々自身の問題であつた。

それにしても我々はどうして何の文明批評をも持ち合せないのか。答は甚だ簡單である。それは批評さるべき社會があつても我々の中にそれに憑つて以つて批評すべき何ものもないからである。我々は餘りに個人的自我にのみ生活して來た。二十五歲から三十五歲までの間に我々は原稿用紙と雜誌編輯者と以外にその外のどんな者と一緒に暮して來たか。我々は他の一般の人々が最も多く社會と接觸してその間に自づから社會に於ける自己の立場を、社會と自己との交涉を、社會的自我を自覺するその時期の間、我々は編輯者と出版書肆とに甘やかされて浮世の風を知らずに來た。社會人としての我々は溫室の中で育つて來た。その我々に何の社會的見識が、何の文明批評があり得ようぞやだ。かうして我々は詩的空想乃至自已解剖的青年文學から一轉して心境文學の早老者と早變りしつゝある。我々は社會的自我を知らず、さうして社會的活動をほんとうに持たないことの結果として我々は若者から直ぐに若隱居になるのである。我々を一度壯年であらせよ。さうして社會的繋鎖のために暫らくは自已省察をさへ忘るるまでの多忙の中に壯年としての我々自身を見出したいものである。また壯年者の文學を持ちたいものである。感傷と鑑照との文學の外に我々は意嚮のある文學を持ちたいものである。

こゝまで考へて來ると僕は自づから此頃喧しいところの——これは住目すべく甚だ當然であるところの、無產階級文學について思ひ及ぶのである。この題目については僕はこの次ぎに改めて論じようと思ふ。

前月號の文章につき德富蘇峯先生の秘書及び山本有三君からそれ〴〵に私信を受取つた。前者は不完全な座談の筆記が僕をして先生の意嚮とは違つたことを讀まされたといふことを明かにしたものだし、後者も亦前號の文中に山本君の言葉として引用したものは矢張り筆記の誤りで山本君の言葉ではないといふことである。僕はたゞ一つの現象を論ずるための一例として自然と諸家の名前を引いたまでで、この現象の觀察にさへ大した見當違ひがなかつたならば、そこに名前を擧げた諸家を傷けようといふ意志は少しもないのだから、それらの點を明かにして置きたいと思ふ。僕はその筆記をその二つの場合とも好んで間違つて讀んだのでないことは諸家も又讀者諸君も多分諒としてくれるだらう——。私信に對して別にお返事をも差上げなかつたし、旁々こゝに附記する。



古風な寫眞

室生犀星

一

津島龍藏の家では主人の龍藏と妻のみどりに娘のあや子、店の小僧二人に番頭が麓の茶店へ先着してゐた。相蘇の家では母親に姉娘のおとは、弟の隆(たかし)が水車のある通りへ出かゝると、津島のみどりとあや子が手で差し招いてゐるのが、廻りながらゐる水車と一緒に見えて來た。

麓の茶店で花茣蓙や鍋七輪炭などを小者に擔かせ、大乘寺山へ連中とは一足先きに擧るのだつた。松林の間に遊山の家族が彼處此處の柔かさうな芝生に擴ろ重箱の煮物を開いてゐるのもあつた。

津島の妻のみどりは足弱で番頭に勞はられながら、氣の合ふたおとはと手を引き

合ふてゐた。
「祖母さんがゐらしつたころは毎年まゐりましたんですけれど、こんどは久振りでございますわ。」
「わたくしも二三年來なかつたものですから、すつかり山を見異えてしまひました。」
みどりやおとはは此町に育つたので、遊山の面白いことは知つてゐた。けれども山へ來るごとに山路の樣子が每年變移つて行くやうであつた。
「わたくし、けふあなたがゐらつしやらなければ來なかつたかも知れませんの。」
下町の店の奧の間にばかり籠つてゐるみどりは、山へ登つただけで最う昻奮してゐた。
おとはの弟の隆は、あや子と茨の生えた嶮しい傾斜へ走り出て、こちらを振り顧つては手を上げて聲をかけた。その仲の善い容子を津島はおとはの方を向いて笑つて見せたが、おとはは自然みどりにその笑顏を向けるのであつた。
みどりは子供達を危ながつたので、小僧が一人そのあとに尾いて行くことになつた。みどりの心配さうな氣の弱い眼付が、隆とあや子の姿がくさむらに匿れると姿を搜ねて危險がつた。
津島と相蘇の母とは、みどりとは後に步き遲れてゐるのが、わざとの樣に思はれないでもなかつた。
「多分その話で手拍ちにしようと思つてゐるんです。世間の景氣も考へなければなりませんからね。」
相蘇の母は片倉町の自家を賣物に出してから、今度で三度目の買手が付いたのだつたが、賣る腹は決めてはゐたものゝ慾が出て何時も賣り惜むのであつた。それに津島の方へ利子付で廻す金の事では、別に心配はなかつたにしても、右から左へ融通することは氣が咎めて快い氣持ではなかつた。
「金を遊ばして置くことはどうかと思ひますね。」
津島は一時預るといふ名義でもよいと言ひ、利子で暮すやうにと相蘇の母の氣を惹くのだつた。

「その買手の人とも立對つて下さいな、女一人では何んですから。」

津島はそれを承諾した。

廣場の芝生で重詰を開いたところは、遊山の連中がお互ひに重の物を頒け合ふて莚から莚へ杯の遣り取りをするのであつた。津島は松を隔てた隣の連中へ流れ込んで騒いでゐたが、谿の上にゐるおとはの姿を見付けて呼ぶのだつた、おとはは頭を振つて見せて行かなかつた。

みどりは其處から谿間へ下りられるところで、蒼ぐろい谿の水を見下しながら美しい子供のない女のやうな邪氣ない顏付で言ふのであつた。

「龍が住んでゐないでせうか。」

津島は二人の傍へ馳けて來ると、おとはの手を引いて連れ立うとするのだつた。おとはは厭だと言つて聞かなかつた。

「おいやだと言つてゐらしやるのに。」

みどりは年下のおとはの手を引いて自分の方へ寄せるのだつたが、津島は悅けた顏付をして元の酒の座へ戻つて行つた。相蘇の母親も知り合ひの同じ年輩の女と應酬をしてゐた。

「あの人はいつもあんなふうなのでこまりますわ。」

みどりは元の莚座の席へもどると、寒氣がすると言つて顏色を變えた。松の覆ひかぶさつた空の日が稍々肌寒う陰つてから、急に春蟬の聲が啼き歇んだ。唇の色を失くしたみどりの爲めに車が町から呼ばれた。

あや子は蕨を束にして隆と赤土の山路を走つて下りると、最うみどりの車は出たあとであつた。

「お母さまはどう……」

「少しかげんが惡くてね。」

津島は醉をさましてあや子の髮を撫でながら、愛想さうに言ふのだつた。隆はあや子を呼んで水車のある川のへりにある鐵せんの花を摘もうとして、蔓を引くのであつた。蔓は引くことはできたが弱い花瓣は破れて手元に殘つた。

津島と隆の母親とは後始末の心付を置いてから、立話をし乍ら今にも歸りさうで急には歸らなかつた。隆とあや子は何度も欲がした。茶店の庭にある山吹の大株も隆の疲れた眼の中では、妙に濁つた黄い塊りに過ぎなかつた。

深い竹藪の路を歸つて行く途中で、あや子も又寒氣がすると津山にもたれ乍ら訴へるのだつた。その母親によく肖た弱弱しい皮膚は沈んだ蒼さに變つてゐた。小僧は竹藪とは反對の町端れにある車を呼びに行つた。車が來てあや子がぐつたりと父親に抱かれて乘るのを見て、隆は氣が付いて蕨の束をあや子の足のところに入れて遣つた。あや子はそれを知らなかつた。

二

相蘇の母親は本家の方を越前から出て來た人に讓り渡したが、も一軒の自分達の住んでゐる家も賣らねばならぬやうになつたのは、六年越し夫が病褥に臥てゐたゝめでつた。越前から來た小林の荷物が本家へ着き初め、これまで住んでゐた本家の座敷へ搬ばれるのを二階から見下しながら相蘇の母親は殘念がつた。僅かな小金で本家を手に入れたのは、嫁に來てから十年目だつた。五年目の市區改正で前通を十七坪ばかり道路のために買收されたが、割のよい金が手に入つたので今住んでゐる隣家を買ひ取つたのだつた。下二階を奥二階に建增したのも、地面の半端な都合で三角の間取りを作つて人に貸して置いたのも、つい近頃の事だつた。

越して來た本家へは越前訛のある女が指圖をして、藁苞の中に新しい簞笥や茶棚長持、勝手の物なぞの席包を解いて、すぐ手早く茶の間や奥の間の飾付を濟すのだつた。相蘇の母は當時左ほども思はなかつたが、今から考へると資金を絞られ

過ぎたやうな氣がして、口惜しげに舌打ちをするのだつた。

相蘇の母は二階から下りて來ると、三疊の間へ這つて性短に佛壇の扉を開いて、撞木で鉦をかんかん敲くのであつた。

「あの家も此の家も賣るのはみんなあなたの爲めだ。口惜しかつたら出て來てください。」

彼女は鶴の燭臺の前に立てかけてある亡夫の寫眞を睨み付け、凄じく昂奮しながら生けるものを怨む樣に言ふのだつた。寫眞の中の色白の人の善さ相な夫は、扇を片手に持ちながら微笑みをうかべ、紙屑で緑色に染めた人造芝生の上に足を揃へて撮されてゐた。

相蘇の母は一と搾り鉦を叩いて荒くなつた氣が和らぐと、また二階へ上り隣の容子を見るのだつた。仲介人であつた川向ひの吳服屋の主人も來合せてゐたが、話の模樣から親戚の間柄らしく思はれた。相蘇の母は軒下に挿し込んで置いて、引越しの折に忘れてゐた旗竿のあることを眼敏く思ひ出した。

「お取込中でございますがこちらに旗竿がございませんでしたか。」

彼女はその旗竿を横に上げてある軒下に故意とらしく立ちながら、急き込んで誰に云ふともなく言つた。小林は奧の間へ何故か座を外した。

「あ、此處にございました。」

相蘇の母は爲方なしに自分で見付た振りをして、極り惡い思持ちで言つたが、川向ひの吳服屋の主人が引き出してくれた。越前訛のある女は相蘇の母親を見て見ぬふりを裝ふてゐた。彼女は顏をあかくして隣を出るのだつた。

晩方に津島屋の主人が訪ねて來た時、相蘇の母親は直ぐにでも居づらい此處を引越して、隣の家の見えぬ處へ行きたいと言ふのだつた。「まるで家を騙り取られたやうなものだ。」

「お八重さんは正直だから世間がさう見えるんだ。」

津島は孰方つかずに左う言つて、此間話のあつた御影町の買手は三千圓まで氣張ると言ふのであつた。最初の買手とは少しづつ上を向いて最う千以上に増額したのだが、相蘇の母は隣を手離した痛い經驗があるので、まだ上を向く考へを持つやうになつてゐた。

相蘇の母は話がぎりぎりに進むと何時も後退さりした。津島は賣りどきでもあり躓づくと取り返しがつかぬとも注意した。津島自身でも相蘇からの融通が月一杯を切れると、問屋の期限の切れる難澁さが目前に逼つてゐた。津島は大店だけに腹を大きく見せ、相蘇の母の前でも弱音は氣振りにも出さなかつた。津島は赤子の手を捩ぢ上げる樣なむごい氣はしないでもなかつたが、店を支へる爲めには相蘇からの金を廻させる外、どうにも手の付け樣がなかつた。妻のみどりは勿論、番頭にすら今度の難關には隙間を見せなかつた。直ぐ眞向ひの大阪支店の經營になる大龍雜貨店の影響で、町の大通りの大半の客が吸ひ取られた上に、ビルヂング風のA呉服店の出店までが此程落成したのだつた。唯でさへ地みちな客すぢの此の町の人は、二軒の雜貨店に根こそぎ客を奪はれてしまひ、ばたばた店を閉じる老舗もあつた。

それに觀音町の手を今度こそ切ることに話は纏めたものの、それへ廻すのにも金の方が忙しかつた。六年以來微塵も外へ漏れない周到な津島の氣苦勞も、その儘では濟されなかつた。今度は相蘇の母親にだけ打解けやうかと迷ひながら、矢張り太腹で通す考へを放擲らなかつた。併し津島は今度の切盛りが出來たなら相蘇へは悉皆を打開ける心算で、その後始末の用途も目論んでゐた。

「此話は私に委せて貰へませんか。」

「お委せすると言ひますと……」

相蘇の母は何となく聲に顫ひを帶びて來た。

「日影町へはお八重さんの考へを話して遣るのです。それでどれ程までのお八重さんの胸算用だかを判然と言つて貰へば

いいのです。」
「私にしますと難しいことでせうが最う五百は出して貰へないでせうか。津島さんの前ですが私も年のせいか慾が出ましてね。」
「それは尤もです、併し三千五百となると……」津島は暗い顔付をした。「先方がどう言ひますかな、可成住み古した家ですからね。」
津島は何氣なく天井へ眼を遣りながら、相蘇の母の性根の手固さに今更乍ら舌を卷いて驚いた。梯子段の下の段にも既う蟲が這入つてゐるが、それも津島は知つてゐた。時價にしては土地柄であるとは云へ値が張り過ぎるやうに思はれた。
「私が手鹽にかけて色々苦しい世帶の間から剝ぎ出して作つた家ですから、いざとなると未練が殘つて手離されないんです。昨夜もいつそ此儘で居やうかとも思つたんですが、さうも爲りません……」
「お八重さんの氣持ちは能く分るが、この不景氣に値が張り過ぎては買手を逸してしまふばかりぢやないんですか。」
「それは私も考へて見ないんぢやないんですが、せめて三千二百位にならないとどうにも片がつかないのですもの。」
「二百位ならば話の仕樣もあるんです。」
津島はこの邊の言質で片をつけたいと心は焦るのだつたが、相蘇は家の借財の整理を話し出し、此の家を賣れば後に金になるものは無い事も打解けた。幾らか預金のある模樣を傚いてゐた津島は、地味な相蘇の暮しの中にも金は幾らも殘つてゐないのに、拔道の素早い金錢のいきさつが頭へ瞭乎と感じられた。
「それにおとはも今年はどうにか形をつけたいと考へてゐるんでございます。」
津島は家の事情に深入りする母親に、鬱屈した氣持をさとられまいと故意と平氣をよそふてゐた。
「いいえ、二十七ですよ。話はあちこちに起りかけてゐるのですが、何しろ準備が少しも出來てゐないものですから。」

下の町の米谷からの緣談もずるずるに氣を惹いて返辭をしなかつたので、この頃近在から嫁が來たらしい事、又上町の或る官舍からの貰ひ手も今だに引つぱつてある事などを話したが、彼女も今では內々焦つてゐるらしく何處でも身の振方をつけたいと言つてゐる。——可愛想にも思ふが、いい加減な話に捲込まれたくもないと、相蘇の母親は二度目のおとはの身の上に大事を執るのだつた。

おとはの嫁つた專賣局へ勤めてゐる家庭では、三月も經たない內に型の通りの嫁いぢりの祖母の爲めに出て來たのだつた。主人は素直過ぎるおとはを別れた後にも能く夕方どきに呼び出しに來たりしたが、仲へ入つてゐる津島の弟になる村田屋に懸合ふて、手嚴しく相蘇の母は充分未練のある緣を切らせたのであつた。優しいおとはは一と頻り喪失して何も手のつかぬ容子だつたが、漸つと幾らかの諦らめがついてから、軀柄は大きいが矢張り元のおとはらしくなつてゐた。あの時に添はせて置いてもよかつたのだと相蘇はさうも思ふて見ることがあつたが、利かぬ氣性では町內の聞えもあり頑固を打徹して、復緣の話には頭から手を振つて斷つたのであつた。

津島の弟の茶舖をしてゐる中村屋も、相蘇の母の腰の手强さには窮らせられたが、當時口を開いた津島にも此の緣談に係りがないでもなかつた。

「お宅のみどりさんの娘時分に彼女の氣性がよく似てゐるやうでございます。」

津島の妻の肝煎をした相蘇の母は、娘時分のみどりに性質の弱いところなどが能くおとはに肖通ふてゐると言つたが、津島はそれには答へなかつた。此間の山遊びで冒いた風邪氣のこぢれが存外深く機關を傷め、寢たきり快い目を見せないみどりの事が、津島の頭のシンに觸れて來た。店の商品の仕入れや金の出納の細々したことを柔皆知らないでゐるみどりが、津島には可愛想な氣がするのであつた。

「兎に角二階を見廻つてくださいませんか。」

相蘇は折を見て津島に査べて貰ふことにした。「どちらにしても見て置かなければなりませんから見ませう。」津島は立ちあがつて帶の間の時計を差し覗いた。

「おとはや燭臺を持つておいで。」

おとはは燭臺を持つて來た。

「先日はいろいろどうも。」

おとはは挨拶をすると、自分も母親の後に尾いて二階へ上つた。梯子段のとツつきの立鏡に後から上つて來るおとはの白い顔を津島は何氣なく眼に止めた。

八疊の座敷に隣つた四疊半、その次ぎの奥の間は物入部屋になり高窓から明りが採られてあつた。長持や古箪笥に火鉢やボロ屑入りの塗葛籠などを指差して相蘇の母は言ふのであつた。

「これだけの品物を整理するだけでも大變ですわ。」

梯子段を境目にした四疊半は、前二階で通りに臨んでゐて小靜閑と纏つた間取りであつた。

「此處は何時もお雛様なんぞ飾る外使つたことがございません。」

津島は柱や天井、押入の工合や床の間なぞを精細に見て歩いた。「何時ころでしたお建てになつたのは？」

「十二三年前ですから、おとはが恰度十二くらゐの時分ですね。」

「大工は高田屋らしいですね。」

「ええ、あの人の達者な時分でございます。」

高田屋は年老つてから仕事には出なかつたが、腕は立ち勝れてゐて釘は殆打たない大工であつた。木口を組合せ持合はせるだけだつた。「あれはいい大工でしたね。」

相蘇の母は押入のガラクタや、二十人前揃の膳の物なぞを見せ、「これも要るかどうかしないと荷厄介でございましてね。」と今時に必要の無い幾双もある屏風なぞを指差して見せた。昔からある嵩張る雛箱の数だけでも、座敷の押入一杯に積れてあつた。

「おとはが今度嫁くときは皆持たしてやりたいと思ふんでございます。」

おとははお可笑しさうに笑つた。

「わたくし最うお雛さまなんかいりませんわ、おばあさんですもの。」

津島は若い氣になつて持つて行くのもいいと言つた。座敷の窓から隣の家の茶の間の燈が見え、賑やかな笑ひ聲に興じてゐる有樣が手近に聞えた。

「今から思ふとよく此麼大きな家を二軒まで切廻してゐたものですよ。」

相蘇の母は雨戸を閉めると自分で先きに立つて階段を下りるのだつた。その後に尾きながら津島龍藏は相蘇の父親が商人として、太腹の男だつたことを思ひ出した。

三

みどりは纖い喉と胸とに濕布を當てゝ、仰臥したまゝ動かずにゐた。咳の切れない喉の刺戟は增すばかりで、自分でも肉體（からだ）の瘠せたのが手で觸つて見るまでもなかつた。去年の春、津島の父の死に會つたみどりは、その死んだ前後の光景ばかりが考へるともなく、何時の間にか考へてゐて厭だつた。

朝の内、烏渡顏を見せたきり津島は午后過ぎにも二階へ上つて來なかつた。物置小屋を隔てた土藏の二階で小僧達の甲高い聲が入り雜つて品物を動かす音響（おと）が聞えた。季節も過ぎた今ごろ藏の中の物の出し入れをするのが、場外れだつただ

けみどりの神經に觸るのだつた。

晩、風呂を浴びてから二階へ上つて來た津島は、疲れた眼をして、加減はどうかねと尋ね乍ら言つた。

「四五日鳥渡田舍へ行つて來る……」

みどりは聲が出ないので首づいて見せた。津島は臥ると美しくなる妻を顧るのだつた。

その翌日も津島は藏の中にゐた。

永い間の半端物、時勢遅れの品揃えは大部分片は付いたものの、中には蝕食ひの這入つた上物の毛布や膝かけ、子供のマントや夏の物なぞも今度は始末を付けたい考へだつた。毎年能登の古街道で立つ糶市へは津島は仲間を冷笑つて品物を搬ばなかつた。盆前の往來で古着や雜貨を買ひに集る田舍の商人達だけでも、何百といふ人出であつた。津島が二十の頃に父に連れられて一度きり出かけたものだが、その折の記憶や印象はいまの津島を陰鬱にするに充分だつた。篝火を焚いた町すじに夏近い熱い風が蒸しついて、糶市の呼聲だけが斷層の多い能登の山境に谺するのだつた。その光景は成り下つて行く小商人の淺猿しい氣もちを、露骨なほど津島は感じなければならなかつた。

父のゐた彼の時分は家の經濟がうまく行かなかつたのだらうかとも考へたが、間もない日露戰役でトランクや行李の凄しい賣上げは、津島の覺えてゐるだけでも莫大なものだつた。あれから家勢を盛り返すことが出來たのだと、津島は今になると父親の踏んだところが解るやうな氣がするのだつた。何時も微笑つてゐたやうな父親の心を嚙み分けて見ると、陰鬱から拔け出て最う一度今度の仕事に勇氣づけられる氣もするのであつた。津島はその頃の仕入帳や賣上の帳簿を繰り返し見ながら、藏の中にゐても稍々汗を感じる程の暑さを、明り窓から見える隣の高い灰色の塀の上に感じた。

午後から荷造りが初められたが、津島は藁埃の中で小倅達や運送屋の指圖をしながらも、兎角氣分は沈み勝ちだつた。

「田舍はどちらへ入らつしやいますの。」

みどりは夕方津島が二階へ要事に來たときに、何氣ない風でさう尋ねた。

「後で話はするがね、さし當りお前の仕事は切角病氣を癒して與れることだ。」

津島は平常の通り店の商賣の事では一切妻の前で口を切らなかつた。みどりもさういふ事は訊ねてはならぬ事情だとも思ふてゐた。併し昨日も今日も土藏の中にゐた津島に屈托らしい表情の膠着がある。みどりはそれは推してゐてもそれ以上問ねられなかつた。

「先刻相蘇の隆がお前のお見舞だと言つて何か持つて來たが見るだけは見たかね。」

「ええ、くだものを戴きました。」

「隆さんはかへつたのか。」

「いえ……」みどりは力なく笑つて見せた。

「今まで枕元で遊んでゐたんですけれど、おぢさんが入らしつたと言つて、――」みどりは次の間を顎先で指して見せ、病人らしく弱々しく頬笑んだ。

津島は次の着換への部屋を開けて見ると、あや子と隆が小さく折重なつて衣桁のかげに隱れてゐた。津島は故意と見つからない樣子をして妻へは笑つて見せて、階下へ降りて行かうとした。

「何か心配なことがございますの。」

みどりは持前の優しい眼で津島の顏を見上げた。

「隆に何かご馳走しておやり。」

津島は別の事を言つて階下へおりて行つた。次の間にゐた二人は、津島の襟首が階段に消えるとみどりの枕元へ又た跡つて來た。

津島はその翌日、能登の市場へ出掛けたが、市街の問屋筋や大店の連中が投げ物を往來の莚の上に鬻いでゐた。津島は番頭に荷を解かせると、近在や町村の小商人對手の糶市へ品物を委せるのであつたが、値を絞ることに小狡しくなつた田舍の商人達も、時勢遲れの品物は讀み分けるだけの眼は有つてゐて、思ひの外の乏しい收入だつた。

津島は晩は廟の裏に葱の種子束を干してある旅籠屋の二階で、賣上げの書き入れしてゐる間にも、大龍吳服店へ出入りする客の雜閙を自分の店の眞向ひに思ひ浮べるのであつた。あれ程の大雜貨店の向ふを張ることの不可能なことは判つてゐるものの、永年の商賣をむざむざ見殺しにするのも業腹であつた。津島は晩酌の後に早くから睡れない眼を開いたまま、綿の固い床の中にゐた。觀音町のお貞は此方から當分の手切れをしてやるだけで、今まで買ひ入れた家財は呉れて遣ることにしてゐたが、女の母親が窮してゐるらしい津島の足下を見て、相應の金が出なければお貞の身を引かせない心構えも見え、津島は今度の賣上の内からその方の金を苦面する心算りだつた。

お貞は氣立のない女だつた。毒にも藥にもならないかはり邪魔者でもなかつた。裏町の觀音坂下の家に六年間津島の家庭には氣振りにも自分といふものを知らさないで住んでゐた。別れると言へば直ぐにでも別れる女だつたが、それだけ津島が行きさへすれば女中のやうに働くお貞だつた。津島は時々足を絕つても手紙一本寄越すこともなかつた。金絲島の卵を孵しては小鳥屋へ賣るくらゐが彼女の特徴だつた。津島は即かず離れずにずるずるに圍ふて來たお貞には、今度の別れ話を持ち出して見ても未練がましい氣持が交つてゐなかつた。女の方でも今の住居を割貸しにして下宿人でも置いて世話する考へらしく、さうなれば又近間へ入らしつたら寄つて呉れるやうにと言ふのであつた。津島はこの氣立の平凡なお貞を時々馬鹿のやうな氣も起るのだつたが、それよりも不思議に憐れむ氣もちになることが多かつた。

「お前もまだ若いんだから世話する人があつたらして貰つたら方がよい。」

津島も此變風に心から女の將來を氣づかふのだつた。

「末のことは末にしてわたしは當分一人でゐますわ。」

津島はお貞に母親がゐる間は只は遊食させまいと思ふのであつた。五つ位から士族の落ちぶれ者の貰ひ子を育てゝ、娘で食はねばならぬ母親は、元は或町で口入周旋業をしてゐた女であつた。津島も最初お貞のことでは母親から口を切られたのだつた。

「お母さんは又た何彼と話を持ち込むんでせうが、矢張りわたしは一人でゐるつもりですわ。」

母親のする通りになつてゐるお貞に、これ以上津島は言ひ甲斐の無いことを知つてゐた。

津島は妻のみどりに此話を明して見たい考へを持つてゐた、と云ふのは、薄々お貞を嫌ふてゐることを知つてゐはしないかと思はれるからだつた。何も嫉妬がましいことを言はないみどりは、津島の品行には固い自信を持つてゐるやうでもあり、悉皆知つてゐて口に出して言はない樣な容子も疑へば疑へるやうだつた。その孰方とも解りかねてゐる津島は、身綺麗になつた後でお貞の事を話するのも、永い間内密にしてゐたことだけに却つて爽ばりするだらうと思ふた。みどりの氣質を知り盡してゐる津島は、その打わけ話で妻との間が混亂することの無いことは解つてゐた。

一週間の糶市が濟むと津島は殘品を棄値で捌いて、市街へ歸つたが町の樣子は僅かな留守の間に夏らしく變つてゐた。みどりは快くも惡くもならなかつた。津島はみどりの病氣が何であるかゞ略ろ想像した通り動かないところであつた。

「寢てばかりゐて濟みません。」

津島の顏を見ると、みどりは起き上るやうな心ばかりの姿勢をして見せた。津島は手でその儘にしてゐるやうに制した。病氣のせいでみどりは泪迅い目をした。

「藏の半端物を捌いたのだ。いい工合に行つた。」

「それはようございました。」

今までにない津島の弱りが手強く感じられた。大阪へ仕入れに自分で出掛けても、田舎へは行かなかつた津島の腹の中が、見てゐても氣苦しいくらゐだつた。みどりはどう言つてよいか、津島の顔を鳥渡見ただけで眼をそらしてしまふのであつた。

四

相蘇の家は母親の思惑通りの値段で取引されたが、引越しに一週間も手間取り登記濟になつた買手の者は、まだ荷作りをしてゐる最中へ荷物を押しつけがましく搬んで來るのだつた。

「人を追ひ出すつもりでゐる、――」

相蘇の母親は足場もない道具と埃との間から、癇高く聞えがしに言つたが、先方はそんなことに係はらないで景氣よく自働車で荷物を運び込むのだつた。午後から孰方の道具だか見境のつかないまでに混雜して、相蘇の母親は泣き聲で樣子を見に來た津島に言ふのであつた。

「登記濟になつたからと言つて何と薄情な仕打でせう、これぢや孰方の荷物だか分りはしない、――」

津島は苦い顔付で別に返辭はしなかつた。併し自分も加はつて荷物を搬ぶ差圖をした。「出す荷物を待つて入れてくれこれぢや荷物の區別がつかない！」津島は搬びさへすればよいと考へてゐる人夫らに、斯う言つて手を擴げて制し乍ら決め付けた。下町の商家の主人らしい津島龍藏の利かぬ顔貌は、人夫等を躊躇がせるに充分だつた。

相蘇の母はどれから手を付けてよいやら、惘然と佇んでゐたが、何やら耳元でさゝやくおとはを口ぎたなく呶鳴り付けるのだつた。

「そんな牡丹なんぞに係つて居られるもんですか。」

おとはは一言で遣り込められたが、津島は小耳に挾んで、「おれは掘つて持つて行つたらいいでせう。」と相孫の同意を求め乍ら言つた。

「今そんなことをして居られるものですか。」

「わたくし掘るわ。」

おとはは元からある古い牡丹の大株を此儘に置いて行くのは、心殘りでどうしても持つて行きたいと言ふのであつた。父が温かい馬糞で丹精して育てた牡丹だつた。母親もそれは氣に懸つてゐるのだつたが、手が庭のものなぞに廻り兼ねるのと、それに桐の根が地面の下へ來てゐて素人には掘れない困難があつたからだ。彼女は十日程前にも自分で掘つて見たが、鍬の刃が女手に立たぬので諦らめたくらゐだつた。

「あとで人夫にでも掘らせますよ、おとはさんはあちらの手傳ひをなさい。」

おとはは少し不機嫌になり花の過んだ若葉の牡丹の前を去るのであつた。相孫の母は全部着物を送り出して終ふと、非戸端へ出て乾いた喉元へ生水を流し込んで、へとへとに疲れて言ふのであつた。

「こんな酷い目にあつて此家を出るとは思はなかつた。津島さん察してください。」

「遣り方がすこし酷いやうですね。」

「酷いの何のと言つてこれぢや全で追ひ出されたのも同樣です。」

津島は先方の荷物もほど到着して、肌に風を入れてゐる人達を見ても、爲渡挨拶の仕樣もなかつた。登記前あれ程親しく商談した日影町とも、今になると最う口をきくのも億劫であつた。向ふでも帽子のへりに手を當て何やら言つたゞけで、後は素氣もない他人同士であつた。津島はこんな人情は始てゞあつただけ、腹の中で拘泥つた固い氣持ちを感じた。

手落もなく送るものは出した後、相蘇の母親は二階と階下を見て廻り、「あの人さへ生て居て呉れゝば此度に覚らなくとも済んだのです。」と誰に云ふともなく言ふのであつた。押入や床の間にも相蘇家の家具らしい物が一つも見當らない中で、母親は汗を拭きながら眞實に寂しい顔付で言つた。

「では津島さん、お宅へ廻すものも今朝から肌につけてゐるのですから、受取つてください。」

相蘇はまだ肥りを見せてゐる胸元を絆けて用意の袱紗の包みを取出した。そして津島へ手渡すのだつた。

「では利付の方は充分にあづけることにします。これが證書です。」

津島は用意の證書を取り出した。

「津島さんの前ですがこの金だけは私のいのちも同様のものでございますから、間違ひなくお願ひします。」

相蘇の母は顔中痺れたやうな窮屈な表情をして言ふのであつた。

「それは萬々承知です。どうも心配をおかけしました。」

津島は金を受取ると、相蘇の母の顔をまともに見ないで、俄しく暑くなつた屋根の上を見て汗を幾度も拭いた。相蘇はこれで自分も落着いたと言つて窓のところから、庭木の若葉を沁々と身に應えて眺めるのであつた。梅は實になるので持つて行きたいと思ふたが最う遲かつた。

先方の道具や荷造りの狹苦しい間を潛り乍ら、相蘇と津島とは土間へ下り立つたが、母親は先方の主人にもやはり人並に挨拶をしなければならなかつた。

「ではよろしくおねがひいたします。」

「色々お疲れでせう。」

二人は明るい夏の道路へ出たが、相蘇の母親は近隣へ挨拶に廻らねばならぬので、津島と自家の前で別れた。相蘇は明

るい外へ出ると一層氣もちが沈んで行つた。隣の菓子屋から順々に挨拶をして行く内、相蘇の母はその儘の顔では外を歩けない程よごしてゐた。彼女は出入りの指物屋で烏渡顔を洗はせて貰ふた。

「わたくし、すつかり泣いてしまひました。」

彼女は泣き笑ひをして指物屋の氣さくなお内儀にさう挨拶をしながら、間もない自家の前を顔をそむけて行くのだつた。越して來た人達は忙しく立働いてゐるので、相蘇の母なぞに注意して見てゐるものなぞ居やう筈がなかつた。彼女は永年住み慣れた自家を夢中になつて通り過ぎたのであつた。

相蘇一家の引越先は寺の多い裏町の藪の中にある小路であつたが、荷物も大概片付いてから、母親は越中の海岸の町にゐる彼女の夫の腹異ひの兄のところへ出掛け、兄の息子の妻の葬式を濟して歸つて來たのは、一週間の後であつた。彼女は汽車の中でも兄の息子の妻が巌丈な身體をしながら脆くも倒れたので、すつかり怖氣て了ひ、自分も何時あんな死態をするかも知れないと、神經の尖つてゐる矢先だつたので酷く氣に病むのだつた。

家に到くと着換えもしないで、荷物の片付けをしてゐるおとはを佛壇の間に呼び入れて、居坐りを正して言ふのであつた。

「實はお前には默つてゐようと思つてゐたんだが、私もこんどの引越やその他の紛紜で身體も草臥れてゐるし、何日何時とも言はれないやうな氣がするから——」相蘇の母は立つて箪笥から書類の包みを取出した。

「お前に明して置きたいのも、此證文にある通りのことなんです。一寸見なさい。」

おとはは母親の何時にない更まつた語調に惹き入れられて、證文をひらいて見るのだつた。

「津島さんはこんなにお窮りだつたのでせうか。」

おとはは大通りに彼れ程の大店を開いてゐる津島に、之加も母親から借財があらうとは思はなかつた。あや子にしても

今だに女中を付け、雨の日は俥で通學させてあることを思ひ出した。

「津島さんではお金を遊ばせて置くより自分が預つて上げて置いた方が、銀行の利子よりか得だと言つてゐるんだけれど、私の考へでは今が津島の家の苦しい最中だと思つてゐるの。まさか永いつきあひの私たちに不義理をする人ではないからね。それでお前には内秘にして置かうと思つてゐたんだけれど、この事はお前にも知つてゐて貰ひたくてね。」

「でもわたくしはよそへ行くかも知れない身體なんですもの。」

「その時はその時のことさ。」

相蘇の母は今度越中の兄の家で話は出たのだが、若しかすると二度目の嫁でもあり子供が一人までゐるのだから、母親さへ諾と云つて呉れた上、おとはさんも厭で無つたら後添へに來て貰へまいか、支度なぞは内輪の仲であるから、ただ身體だけ汽車に乘つて來て呉れゝば宜いのだと、おとはの顏色を覗ひ見乍ら言ふのであつた。

「他人の仲へ這入つて辛い思ひをして暮らすよりも、この話は私も安堵の出來る縁談だと思ふのさ。」

おとはは急に話が自分の上に變つて來たので、慌てて喋つてしまふのだつた。越中のその息子は小さい時分から知り合つてゐるだけに、年齡も違ひ今更ら一緒になるのは何か並外れた極りの惡さであつた。想像しただけでもお可笑しい程有り樣のない話に思はれ、母親の眞摯なのが寧ろ氣味惡い程に感じられた。

「私の腹ではおとはさへ承知をして呉れゝば上げますと綺麗に引受けて來たの。」

「でも越中へ行くのは變だわ。」

母親は何度も少しも變な縁談ではないと諄く言ふのだつたが、おとははその變だわを打通すのであつた。實際に思ふほど變な氣がするのであつた。

「お前はお前で考へてごらん。」

母は着換へをしながらも今になるとお前の身の振り方さへ付いて了へば、私には最う何も心殘りのことが無いのだと、半ばおとはを說き伏せるやうに言ふのだつた。

緣談の途絶えてゐる時はおとは自身も早く身の定りをつけたかつた。併し話が起きて來ると何時も泣き勝な、沈んだ厭な氣もちで一日を過すのだつた。越中の方の話が出てからおとはは母の顏を見るのが苦しく、同じ家にゐても成るべく顏を合さないやうに機會をつくるのだつた。

おとはは久濶りで津島の家にみどりの病氣見舞ひに出掛けたのだが、歸つて來ると春時分と較べると別人のやうに衰弱してゐた事、唯さへあゝいふ人だのに淚脆くなつた事などを話して「かへるときにわたくしの手を握つたりなさるんですもの」と、おとはは母親の前で泪ぐんで見せるのであつた。

おとはは心の內では自分の身の上も色々話したかつたけれど、弱り切つたみどりの顏を見ると、何も相談できなかつた。唯、春に山遊びをしたことの愉しかつたことを繰り返して言ふのであつた。

「元のお家へも一度行きたかつたのですけれど……」

みどりには相蘇の元の家に馴染が深かつただけに、庭木の事や、秋深いころに茶畠にお茶の實を落葉の間に搜したことなど、子供のやうに思ひ出しては懷しがるのであつた。町の眞中にある津島の家には庭がなかつた。靑い樹を見たくなると物干へ登つて僅かに公園の林や森を遙かに遠見するのであつた。それ故津島家では庭の廣い相蘇の家へ皆で法樂に遣つて來て、わざわざ莚を敷いて庭木のかげで下町の家族らしく遊んで行くことがあつた。「お宅へ來ると爽々するわ。」みどりは薄い皮膚に木の葉の色をうつしながら、何時も昂奮してさう言ふのであつた。

「元から弱いんだからね。」

相蘇の母は、みどりの母親である野村とも幼な友達で、そんな緣引で津島の妻の爲めに仲人役をつとめたのだつた。野

村さんも四十を過ぎても美しい人であつたけれど、痼疾のために亡くなつたのだと言つた。

おとはは歸る時、何やらみどりから手渡されたが、おとはは譯が分らずにみどりの顏を物問ひだけに眺めるのであつた。

「家へ歸つて開けて頂戴、わたくしそれをおとはさんに上げようと思ひながら、だいぶ以前から包んで置いたの。」

おとははその袱紗をほどいて見ると、それは古い更紗作りの寧ろ澁い味のする紙入れであつた。おとはは此の紙入れを自分に贈れたみどりの心に、或る暗い氣持を讀み分けることができるのだつたが、みどりはもうそんな果敢ない氣になつてゐるのだらうかと思ふた。

五

みどりの容體は寧ろ悪い方へ傾いてゐた。鋭どく瘠せた鼻や頰は殆透明に近い色をして、咳をするごとに烈しい紅みが内側から採み出され、頰には苦しげな結核性の赤い斑點が搔き上るのだつた。先刻から異常に昂奮してゐるみどりは凝然と津島の眼に見入つて言ふのであつた。

「わたくしその方に逢つて見たいと思ひますの。」

津島はだまつて答へなかつた。

「逢はしてくださらない?――」

「逢つたつて別れて了つたものだから爲方がない。」

みどりは依然津島の眼を見つめたまゝ瞬きもしなかつた。津島は不圖みどりの氣が狂ひはせぬかと思はれる程、正氣でないやうな昂奮を恐ろしく感じた。觀音坂下のお貞のことを少しも知らないと思ふてゐたのは、津島の考へ違ひであつ

た。津島の方で打明けようと隙を見てゐたが、却つてみどりの方で切り出したのであつた。

みどりの顔は絶えず痙攣（ひきつ）つて顫えながら、時々後方へ引かれるやうな眩暈を感じてゐるやうであつた。

「お前には何も係つてゐたいのだから考へない方がいいんだ。」

みどりは子供の様に頭を振つて見せた。蒼褪めた表情は硬ばつて解けなかつた。この儘みどりを置いたら卒倒しさうに思はれた。横になつてやすむといい、津島は妻の肩に手をふれてそつと寢かせるやうにしたが、みどりはその尖つた肩先を劇しく振つて拒んだ。そして汚らはしいもののやうに津島を睨むのだつた。津島は立ち竦んで露骨に自分を憎む表情のあることを妻の顔の中に認めた。

津島は妻の肩に夜具を被せると、默つて二階から下りるのだつた。今までみどりのあれほど露はな憎みを感じたこともなければ、又あれ程正氣で打つかつて來たみどりを見たこともなかつた。津島は妻に明したことを悔んだ。晩二階から女中が津島に鳥渡來てくれるやうに呼びに下りて來た。

貧てたいみどりが自分を呼びに寄越しただけでも、脅かされて胸は不愉快にさはぐのだつた。津島は澁々二階へあがると妻のみどりは床の上に起きあがらうと、瘠せたからだを揉み伏せられるやうな姿勢をしてゐた。津島を見ても何も言はないで顔ばかり凝視するのだつた。津島は苦痛を感じた。「横になつたまゝ話をしたらどうかね。」津島は漸つとこれだけ言ひ、何時までも自分の顔を見据えてゐるみどりをその儘に、置いて、二階を下りた。彼は妻の氣がどうかしたのではないかと思ひ惑ふたが、別にそれらしい徴候はその後無かつた。

十一月の或寒い夕方から霰になり、持ち直したみどりはその前の晩から危篤の狀態だつた。この寒い町の人々の死ぬのは冬のはじめの雪か霰の降るころに多かつた。みどりはこの種の病人らしく氣は確乎してゐたものの、身體の方は冷たくなつてゐるも同様であつた。

おとはは泊りがけに來てゐたが、みどりの傍を離れなかつた、みどりは少しでもおとはが階下へ行くと直ぐにその姿を慕ふた。彼女は言ふのであつた。

「わたくしあなたゞけにそばにゐて貰ひたいの。」

おとはは鳥渡階下へ行き、津島の思ひ屈してゐるらしい悲しさうな顔を見ると、妙に津島に甘えるやうに言ふのだつた。

「みどりさんが若しかしていけなかつたらわたくしどうしませう。」

彼女は病人の前で泣けない辛さを津島の前で聲を忍ばして啼くのであつた。津島は彼女はおとはさんさへ居てくれゝばよいと言ひ、わたしなぞ傍にゐても喜ばないのですと、あれ以來津島は妻の心に固まる憎しみがほぐれないで、妙によそしくなつてゐるのを感じてゐた。それは津島の心を苦痛以上に苦しめたのだつた。津島は半ば死に面してゐる妻の前に謝りたい氣もちに焦つて見たが、既うそれさへ旦夕に迫つてゐる妻の前では遲かつた。

津島はおとはに内秘にたのむ事があると言ひ、冷たい柱のある奥の八疊の入口で言ふのであつた。

「私はあれに濟まぬ事をしてゐるのだ、若しおとはさんから私が謝まつてゐることを話して下すつたら、あれも幾らか氣が休まるだらうと思ふのです。」

おとはは譯が分らなかつたが、津島の眞劍になつてゐる氣もちに壓せられた。

「それだけ言へばようございますの。」

おとはも自然に聲に顫ひを感じるのが不思議だつた。

「どうか頼みます、あれの呼吸のある間に言つてほしいのです。」

「分りました。」

おとはは津島を殘して二階へ上つて行つた。津島は稍々胸の透く思ひがしたが、次には暗澹たる何かゞ又彼を壓して來るのだつた。

相蘇の母、津島の兄とみどりの妹なぞが前後して來たころは、みどりは二十九の最後の呼吸を引取つたばかりであつた。津島と醫師、あや子だけが枕元に坐つてゐた。

「先生も明日までは持つだらうと言つて居られたのでしたが、何しろ此の寒さと雪とが死を早めたらしいのです。」

朝からの雪は小歇なく宵深くなつて漸と止んだが、寒さは一入嚴しかつた。醫者は歸り床を階下に移したころ、津島は相蘇の母に手傳つて貰ひ臺所を委すことにした。——彼は醫師が何か耳にささやいたかと思ふと、みどりは烈しい咳の後に朗らかな爽々した顏つきになり、津島の顏をしげしげと打眺めるのであつた。

「おれの顏がわかるかね。」

「ええ。」

みどりは首づいて見せ津島の顏を見つめてゐた。それには柔らかな表情があつた。「何かいふことがないか。」とも言つたが、みどりは無いといふふうに首づいて見せた。津島は何かみどりに言つて遣りたい氣は絕えずあつたが、醫師と看護婦の前では言ひにくいことであつた。彼はやつと病人の額を靜かにさするくらゐで、みどりは彼の手に自分のを觸れるのだつた。

翌晩も雪だつた。おとはと二人きりのところで、おとはは鳥渡と言つて津島を呼んだ。

「わたくしあの事を言つて置きました。」

おとはは左う言つて泪ぐんだ。

「ありがたう。」

みどりはその事については何も言はなかつたが、唯涙を見せてゐるだけだつた。併し一昨日の夕方おとははその時みどりから意外な殆ありやうのない事を話されたのだつた。あや子のことや、津島の面倒を見てくれるやうとの事だつたが、あまりに想像外のことでおとはは返辭ができなくて、みどりの顏を見つめてゐるばかりだつた。

醫師が這入つて來たのでそれきりみどりは默つてしまつた。おとはは津島へは勿論母親へもその話はしなかつた。みどりが何故あゝいふ事を考へてゐたのか、おとはにはその氣持ちが解らなかつた。

「その外に何も言はなかつたのですか。」

「診察にお見えになつたものでございますから……」

おとははあの時醫師が入つて來て呉れてよかつたと思ひ、さうでないと彼女は窮るのだつた。

經帷子を着たみどりに相蘇の隆（たかし）はお時宜をして、間もなく子供らしくあや子の姿をたづねたが、あや子は二階で寢てゐた。おとはは家の都合もあるので弟の隆を連れて雪道を歸るのだつた。更けた道路は雪に埋れ途絶えて人かげもなかつた。姉弟は何も話をしないで眼に沁みる吹雪に歩き惱んだ。

「津島のおばさんの病氣は何――」

隆はこんな質問をした。おとはは故言と知らないと答へた。

おとはは津島龍藏の姿を思ひうかべた。子供の時分から津島につれられ芝居や祭を見に行つたことを、つひぞ考へ出したこともないのに思ひ出した。おとはは何故津島がみどりの死際に謝まることがあつたのか、よく分らなかつたが、或は二人だけの間に何か起つてゐたのではないかと、朧氣ながらそれが女の事かららしく思はれた。

おとはは彼時（あのとき）のみどりの顏の混亂した氣持ちを、急に烈しく啼り泣いたことを思ひ出すのだつた。

みどりの死後、おとはは津島へは自分から足踏みをしないで、母親に行つて貰ふことにしてゐた。それでゐて津島家の

樣子を聞きたがるのだつたが、おとはに懷いてゐるあや子だけは時々泊りがけに相蘇の家へ來てゐた。

おとはは越中の母の兄の家への緣談は、母親がどんなに進めても手强く斷るのだつた。母親はしまひにお前は自分で勝手に捜したらいいだらうと、此頃急に意地を通すやうになつたおとはの心に疑ひを起して見たものの、取立てゝ別に疑ふ筋のことなぞある筈が無かつた。

六

津島の兄を仲に置いておとはを津島の後添に貰ひに來たのは、みどりの一年忌が濟んだ秋の初めであつた。知らぬ他人を貰ふことはあや子の教育に惡いばかりでなく、津島の心もすすまぬと言ふのだつた。おとはさんなれば兩方の家の事情にも通じ理解もある、第一にあや子が喜ぶといふのに重きを置いてゐた。故人もおとはが來て世帶を盛り直して吳れるなれば、必と滿足するに違ひないと云ふにあつた。

「とにかく一兩日考へさして下さい。」

相蘇の母は或はと云ふ氣も時には起つてゐたが、正式に切り出されて島渡驚いたのであつた。尠くとも津島の兄の前では一應驚いた風を裝はねばならなかつた。そして彼女は津島龍藏が此問題を自分で進んで望んでゐるかどうかを確めたが、「つまり私は本人の氣持をおつたへに來たのです」と津島の兄は言つて、お土産を置いて歸つて行つた。母親は越中の緣談に心を遊らせてゐるおとはだけに、この話はおとは自身で承諾はすまいと懸念されるのだつた。彼女自身の心では或はこれがおとはの生涯を決定するもので、これ以上おとはの行くところが無いやうにも思はれた。併し母親は寧ろ冷淡に近い氣持をてらひ乍らおとはの氣を惹いて見るのであつた。

「厭なれば直にでも斷れるのだからね、併し人間にはそんなに幾つも運が開いて待つてゐるものではないよ。」

彼女はさう言つて自分で昂奮を押しころしながら、聲をはずませるのであつた。おとはは母親の切口上が更まり過ぎてゐるのを、何時もとは少し異つてゐると思ふた。

「その話といふのは外のことでもないがね、津島さんからお前に來てほしいと兄さんが態々お見えになつたのさ。」

おとはは頭のシンが鳴るやうに感じたが、次ぎには母親と同じい冷淡をよそほふことができたのであつた。彼女は何日かはこの話が切り出されることのあることを、みどりの死後感じ過ぎるくらゐ考へてゐたのだつた。併し話がかういふ手廻しになつて來ると、自分の腹の決つてないことが解つた。

「お母さんはどう言つてくだすつたの。」

「いづれ本人に訊き糺してからお返辭しますと言つて置いたの。お前にはお前の考へがあるだらうからね。」

相變の母はおとはが何時になく落着き拂つてゐるのが不審に思はれた。何度も出た話のやうにおとはは寬くりと構えてゐた。「これは私だけの考へなんだがね。」と母親は又念を押した。「こんどはお前もよくよく考へて見るがいいよ。この話なぞは再度と降つて來る緣談ではないのだからね。」母親はおとはの顏の中に反抗する色の無いことを見て取つた。

「越中の方は？――」

おとはは別のことを言つた。

「勿論斷るのさ。遠方ではありお前には氣が無いんだから。」

おとはは例の鬱屈した氣もちで、すぐに返辭をしなかつた。わたくしにも少し考へさせて下さいと言ふのであつた。しかもその二三日は例に依り氣の沈んだ二三日であつた。飯に味が無く腹にちからのない脾懈い、絕えず急がされるやうな慌しい二三日であつた。津島の兄から返辭を聞きに來た時、母親は秋の日の當つた背戶口に張り物をしてゐるおとはに言ふのだつた。

「津島さんから兄さんが見えられたが、お前は挨拶をしないかね。」

おとはは張り物の手を休ませずに一寸母親の顔を仰ぎ見て、弱々しく眼を伏せるのであつた。「失禮しますわ。」

「それから此間の返辭はどう言つて置いたらいいの。」

おとはは張り物の上の皺をためながら永い間答へなかつた。母親も默つて肩の凝る程衝立つてゐた。おとはは張り物の指さきを休ませては、又思ひ付いて取急いで指先を働かせるのだつた。母親はおとはの身體の中で動いてゐる手ばかり見つめてゐた。

「どうするの。」

おとはは俯向いた儘、「お母さんのよいやうに。」と低いこゑで云つた。

「ではいいんですね。」

母親は念を捺してから茶の間へ行つた。おとはは眞赤な上氣した顏を上げ、惘乎として濡れた手を拭かうともしなかつた。おとはは土間へ這入つて茶の間の様子を覗かうとしたとき、津島の兄は歸り支度をしながら玄關に立つてゐるところであつた。おとはは元の張り物板の前にかへつた。

次ぎの日にあや子が遊びに來たが、八つになつた彼女は相蘇の母の言草ではないが、黒子(ほくろ)の位置までみどりとよく肖た、生き寫しの顏貌だつた。おとはは今日あや子が遊びに來た事も、さう言ひ附けたらしい津島の腹の中をも思ひ浮べるのだつた。おとははあや子の母親になるのにさへ、この子の手前氣はづかしかつた。況して番頭小僧の多勢の家族中へ這入つて行くのに、臆病な氣遲れが終日おとはを打沈ませた。

母親は一人で津島の家へ往き來しながら、何や彼とおとはの支度に忙しがつた。母親のさういふ忙し相な様子をおとはは反對に落着いて眺めて、自分で着物の選り好みなぞしないで母親に委せきりであつた。自身でも不思議なくらゐ冷然と

構えてゐられるのに驚く程であつた。おとはを考へ沈ませるものは津島自身でもなく、また死んだみどりからの例の遺言めいたものでなく、何かその外のものであつた。彼女は床の中で眼をさましてゐる時、物怖ぢするくせがついて、態々母親のそばに床を取つて寢るのだつた。

おとはは歳暮(くれ)に迫つて津島と結婚した。

津島はみどりの着物や頭髪の物、箪笥やその他の日常の細々したものなぞを使用するやうに言つたけれど、おとはは其等の物に手を觸れなかつた。其等の品物は一度皆見覺えのあるものだけに氣が負けてならなかつた。

併し翌年の春が過ぎようとする頃、おとはは何時の間にかみどりの品物を身に着けるやうになり、津島もそれを奬めるのであつた。しまひに何故津島が諄々とみどりの着衣を着せたがるかと云ふことが、おとはには次第に解つて行くやうな氣がするのだつた。それにも係はらず後でおとはは何時も沈み込んで終ふのだ。津島にもその氣持ちが解るのか其麽時に津島はおとはに妙に遠慮するのだつた。それが又濕和しいおとはには悲しくもなるのであつた。「此ごろよくお前は泣くやうになつたね。」と津島も時には言ふのだつた。

「えゝ、どういふものですかしら。」

彼女は實際すぐに騒いてしまふやうな事が多く、自分でもお可笑しいくらゐ泪ぽくなつてゐた。遇(たま)に實家へかへつて行くと、母親は戯談のやうにおとはの顏をつくづく眺めて言ふのであつた。「津島さんへ行つてから お前は綺倆がよくなつたね。」

おとはは默つて不愉快な顏附をして見せた。これは母親から聞く言葉だけではなかつた。實際、おとはは何處か觸れる

と落ちるやうな危險に近い美しさを、津島の家へ行つてからその表情の上に增したのであつた。おとは自身もどうかしらと思ふ程だつた。

おとはの氣にかけてゐた母親と津島との間の貸借問題が、母親の口から期限が切れてゐることを話し出された時は、結婚してから一年後だつた。津島家の經濟は例に依つておとはには知れずにゐたものの、特に餘裕のある樣子も見えなかつた。ビルヂング風の雜貨店の影響も今では次第に落付いたところで、どうやら行手に眼鼻はついたものの龍藏の手元が樂に見えるといふ程でもなかつた。自然おとはは母の言傳をつたへることもなかつた。その故か津島は相蘇の家へ足を向けることが絶對にないと言つていい位であつた。おとはが眞中に挾まれ厭な思ひをすることが度々であつた。

母親は云ふのであつた。

「あのお金はわたしのいのちも同じだと津島さんに言つて置いたのです。」

そして津島といふ男は私の家の資金ばかりでなく、お前まで持つて行つたのだと、利子の屆の遲れたときにおとはに諷刺けて言ふのであつた。

津島は心でかうなる事が分り切つてゐたのだ。今の商賣ではどうにも相蘇の借金さへ切り拔ける餘地がなかつた。問屋筋の人の出入や、悒鬱になつた津島が相場町へ朝早く出掛ける事などの容子で、おとはには段々解らなかつたことが判るやうになるのであつた。氣拔けしたやうな津島を店先に見出したとき、おとはは母親の言傳など言へないばかりでなく、さういふ津島を心に辛く感じるのだつた。

相蘇の母親が久濶振りで津島へ來たのは、思ひ餘つて訪ねたものらしかつた。おとはは店先に母親の姿を見出すと母親の只ならぬ昂奮した眼付をぢかに感じた。そして直ぐ自分の部屋に連れて行かうとすると、彼女は頭を振つて詰問に言ふのであつた。

「いいえ、今日は龍藏さんに要事があつて來たんです。」

七

津島龍藏の家計の盛り直したのは、歐洲戰爭後の好況時代だつた。津島は一切の借財の整理をも其間に片付けたのだが、その中には相蘇への借財も遅れ乍ら還したのだつた。殆津島はその二年間に父の時代の津島屋を取戻したと言つても宜い位であつた。土藏の修繕や二階の建增しをしたのもその二年間であつた。彼の頭髮に白いのが殖えたのも此の二年間であつた。最つと肝心なことは津島龍藏はともすると、不健康な日のつづく幾日かを絶えず臥床に就いてゐたのも此の二年間であつた。

あや子は女學校へ通ふてゐた。おとはが毎月の十八日の宵の程に、川向ひのお觀音へ詣りに出掛るときにはあや子を連れて行くのだが、或時、彼女はおとはに言ふのであつた。

「お母さまと歩いてゐると姉妹みたいだつてお友だちが言ふんですもの。」

おとはにはその言葉が頭に殘つた。實際、人の目にはさう見えたかも知れなかつた。あや子の背丈はおとはと同じいくらゐであつた。一緒に入浴するたびにおとはは新しく驚くことが多かつた。

それにおとはには子種がないのか、相蘇の母が首をかたげるくらゐおとはには子種の容子がなかつた。母親はその原因を津島の身體よりもその心に疑ふた程であつた。併しおとはは子供の無いのを苦にしないでゐたが、それは母親の前をつくらふに過ぎない事かも知れなかつた。母親が津島のことを訊き糺さうとすると、おとはは手を振つて聞いて呉れるなと言ふのであつた。

津島はあや子にできるだけの贅を盡させ、咳の止まない病床から眺めるのであつた。あや子は母親のみどりと容貌の上

からは少しも違つてゐなかつた。異つてゐるところはみどりとは稍々肥つてゐることと、みどりを娘にしたくらゐの相違に過ぎなかつた。おとはの神經にも觸れる程津島はあや子を愛するのだつた。露骨すぎる津島の愛情の中におとはは時々輕微な不愉快を感じることがあつた。それが彼女を沈鬱にすることが度々だと言つていい。

津島の病氣は何であるかと言ふことも、皆には分つてゐたが誰も判然と言ふものがゐなかつた。併し津島は自分でそれを知つてゐた。そのために亡妻のことを口にすることもなかつた。彼は不思議にみどりの殘して行つたものらしい何者かに、刻々自分の衰へて行くのを惧れはしなかつた。寧ろ强ていへばそれが順當な彼の受取るものとしか思へなかつた。

或夜津島はおとはから今まで忘れてゐて、十年も口にしなかつたことを聞き質されたときに、おとは自身の中にもみどりの何ものかを感じた。その瞬間に彼は彼を見詰めたまま物言はないでゐたみどりの烈しい眼付を思ひ出したのだつた。

「わたくし彼の時は何も分らなかつたのですけれど、いまになると判りますわ。」と、おとはは何時の間にかお貞のことを知つてもゐるらしい樣子であつた。不圖した輕い日常の話からそこまで話が進捗したのだつたが、津島はさういふおとはの中にあらゆる女のもつものを空恐ろしく思ふのであつた。おとはの方で平氣で言つてゐるらしい事も、津島には未來永劫に亘つてゆくものとしか思はれなかつた。みどりの頭の物を挿し着物もそれを著てゐるおとはには、津島は今まで溫良であつた彼女がその晩から急に姿を變へ心を尖らしてゐるやうに思はれてならなかつた。彼は寢返りを打ち曾つてみどりが見詰めてゐた壁の方を向いて、物憂く生きるに樂しみ薄いやうに思はれるのだつた。そして漸つと津島はおとはの顏を見ないで言ふのであつた。

「お前はそれを何處で聞いたのだ。」

然しおとはは答へなかつた。

彼女はお貞が煙草屋を開くための身元保證人としての津島の名前のある、その書類を用箪笥の中から發見したに過ぎな

かつた。おとははお貞の身元を調べる氣は毛頭なかつたが、實家へ行く途中何の氣なしに通りすがりに觀音坂下の小間物と煙草屋とを兼ねてゐる店先でお貞の姿を見かけたのだつた。おとはには直覺的にこの女が保證書に署名された木村貞であることゝ、みどりの死際に津島が自分に托した內容が、この女であることが瞭乎と頭へ掻き上つて來たのであつた。

唯おとはの不思議に思ふのは、お貞が決して綺倆のよい女でないことだつた。津島が何故この女の世話を永い間見てゐたかゞ訝しい位に思へるのであつた。しかし彼女はその店を通り過ぎてから、何か知らお貞の女としての感じが强烈なのに驚いたのだつた。名狀しがたい譯はな女として頭に殘るものがあつたのだ。

「わたくし今になるとみどりさんがお可哀想でならないんですもの。あなたは能く永い間隱してゐらつしつたのね。」

津島は壁に向いた儘答へなかつた。みどりの心を受け繼いでゐるやうなおとはの聲音まで、何時もの彼女の優しい聲音ではなかつた。

津島はおとはが嚴つと烈しく自分を燻し立ててくれゝばよいと思ふのだつた。それが却つて彼の心を安らかにするのが彼には珍らしい氣もちであつた。

「お前の氣の向くやうにおれを燻し立てるがよい。」

津島はおとはを凝乎と見入りながら、肺の奧から出るやうな聲で不圖言ふのだつた。

「おれはお前をほしいばかりに彼女(あれ)の亡くなる前から色々考へてゐたのだ。」

おとはは自分に對してゐた子供時分からの津島龍藏を、殆此の一瞬に思ひ當てたのだつた。おとはは衰弱しつくした津島を始めて悲しく、半ば愛情に乾いた氣持ちで眺めた。

津島はおとはが急に目に見えて元氣になつたことを感じた。すくなくとも津島を見るおとはの眼の內に、伴つて見ることの出來ない生々しさを感じるのだつた。津島はぜいぜい喉を掠める呼吸切れの中で、おとはが自分の前で子供の時分に

尻を捲つて叩いて見せて巫山戲たことや、彼女が先に結婚した折の暗い氣もちを順々に考へ、それが自分の妻になつてゐるのが殆有り得ないことのやうにも思はれた。津島は病勢が進む毎に言ふのであつた。「せめて床の上にでも起きられるといいんだが……」仰臥した津島の病勢はかう言ふ間にも決して惡くなつても良くはならなかつた。その反對に彼は物憂い病臥の中から拔け出したい焦燥を餘りに露骨なほど、おとはに感じさせたのであつた。

その年の暮は稀れな大雪だつた。津島龍藏は二階の廂がずり雪の餘勢で陷ち毀れたのを見てから三日目の夜明けに、多難なその生涯を終えたのだつた。自動車も車も動かない雪道におとはは足袋洗足で、あや子と町端れまで歩くのだつた。相蘇の隆は中學を卒たばかりであつた。

おとはは家財の整理をしてゐる內、津島の困難な生涯を最う一度見たやうな氣がした。おとはは永い間の店を閉ぢ裏町へ越してから間もなく、あや子に緣談が起つた。陸軍へ勤める男だつたが話はすぐ纏つた。あや子は津島の死後二年の秋に結婚した。

おとはは氣乘のしないあや子の結婚にも、彼女は何も彼も諦らめて纏めたのだつた。唯、隆がこの話が起つた時に、軍人にあや子を嫁入らせることで姉を遣り込めるのであつた。おとはは弟があや子に氣のあるのを知り、そのため急いだ緣談を相蘇の母にも打明けなかつた。彼女はさんざん隆から罵られたあとにも、生活に苦勞の少ない軍人を選んだことを後悔しなかつた。彼女は弟の心を透見するには最う世帶染みた一介の母親に過ぎなかつた。

おとはは僅かな遺產を惜氣も無く費つてあや子を嫁入らせた後、日蔭町の二階借りの部屋で麻糸を繋いだりして暮しを補ふてゐた。「お前があまり人が善いからそんな手內職をするやうになつたのさ、」相蘇の母はあや子の支度の分不相應なこ

とを言ふのであつた。しかしおとはは出來るだけの美しいあや子の姿を見て置きたかつた。それが死んだ津島の心の貢さでもあつた。

「わたくしそんなにお母さまに肖てゐるでせうか。」

あや子はおとはの取り出した寫眞を泪ぐんで見て、おとはに遠慮しながら言ふのであつた。おとはは二十何年か前に見たみどりを今あや子の晴れの姿に描き見るのだつた。彼女はさういふみどりに能く肖たあや子の傍に居耐らぬやうになり、梯子段の上り口へ行つて暗い方を向いて泣くのであつた。暫くしてあや子が自分の肩に觸る氣はひを感じた。

「お母さま、色々ありがたう。」

あや子の聲音までみどりそつくりであつた。おとはは優しく自分の言ふままになり、しかも娘らしく苦情も言はないあや子を憐れに思ふた。併し今の婚期を滯らすことはあや子に不幸を重ねるも同樣であつた。おとははその事情を詳しく話したのだつた。「わたくしお母さまのそばにゐたいんですけれど……」あや子はさう言ふのであつた。

「それはわたくしだつて同じなんだけれどね。今お前をお嫁にやらないと、わたくし達には一生そんな餘裕がなくなるんですよ。」

九

あや子が夫と朝鮮に四年ゐる間に二人の子供の母親になり、夫に死に別れて郷里へ歸つたころは、相蘇の隆が東京に出てゐて留守中であつた。迎えに出たおとはは停車場でさほど窶れてゐないあや子を見て、幾らか吻としたのであつた。手紙などには世帶ばかりでない病弱な夫への氣苦勞が漏らされたりしてゐたので、おとはは憂慮で胸さわぎするくらゐであつた。

子供は男の方はあや子に似てゐて、女の子は夫に似てゐた。おとはは自分の二階借りへ連れ立つ間に、荒い朝鮮にゐたあや子の氣持ちがそれほど荒んでないのを知つた。

「こちらも變りましたのね。」

「電車が裏町へまで通るやうになつたからね。子供たちの丈夫なのは何よりね。」

おとははその後、あや子と狹い二階で暮してゐたが、夫の實家の兩親が死に絶えてゐるので、あや子の心持を聞くと再縁の意志が無いらしかつた。併しまだ若いあや子は見たところ二人の母親とは思へない初々しいところがあつた。

おとはは高寨に二階家を一軒見付て、與生の貼付の間貸しをし乍ら、子供を育てたいといふ考へを實行する前に、隆に手紙で問ひ合すとその方がよからうと云ふのだつた。隆は東京の或る會社の建築方面の技師をしてゐて、七十まで生き永へてゐる相蘇の母に毎月仕送りをする傍、おとはにも月々送金して來るのだつた。

「隆の世話にならうとは考へなかつたの。」

おとはは今になると隆にあや子を添はさなかつたことが悔まれたが、あの頃の隆には今日の隆の暮向きが想像もされない程亂暴な生活であつた。

「隆さんが早く歸へるといいのね。」

あや子は隆が歸省する前に待ち兼ねて言ふのであつた。おとはは明らさまにあや子をほしがつてゐた隆のことを話すのであつたが、あや子はその話が出ると笑つた。

「何かお前に隆が言つたことがあつたの。」

「ないでもないんですけれど……」

あや子は又笑つて見せた。おとはは彼の時分に二人は何時の間に話をする機會があつたらうと思ふのであつた。あや子

は隆の事はこれ以上言はなかつた。おとはは隆のことで妙な昂奮を感じ乍ら、あや子に好意から何や彼と話をすることが多かつた。それがあや子にそれとなく觸る程度の露骨さであつた。

「そんなに隆さんのことを言つちや厭。」

さういふあや子は、二人の子供の母親とは思へなかつた。おとはは朝鮮に行かない前のあや子の姿を、心に描いて見るばかりではなく、眼の前に娘々したあや子を見るのであつた。

相蘇の母は年を老ると、なほ同くかつちりと瘠せ上つて健康だつた。彼女は時々訪ねてくると、自分で子供らを遊ばし乍ら、「お前だちがさうして揃ふてゐるのも因緣だね。」と、仕立物をしてゐるおとはとあや子を見て、さう口癖のやうに言ふのであつた。

「でもおばあさま、仕方がないのよ、かうしてゐるより外。」

あや子は言ふのだつた。

あや子の夫と同じ聯隊にゐた將校から、子供を連れて來てもよいから來て呉れるやうに緣談があつたが、あや子はその話を聞かない間に斷るのだつた。亡夫の扶助料と隆の送金とを併せ、彼女らはどうやら不足勝ちではあつたが、暮らせるのであつた。「わたくし樂なんかしなくともいいわ、娘時分にお母さまが仕たいことをして下すつたから。」彼女はおとはに勝手のことをさせないで、自分で進んで春寒い井戸端へ立つて行くのであつた。おとはは何か悲しい氣もちであや子の背後姿を見送るのだつた。

「みどりさんにそつくりだね。」

相蘇の母はその從順なところが似てゐると言つた。

子供を生まなかつたおとはは、「まだ身體に殘る色」つやを見せてゐたものの、娘の前に母親になつたあや子を見、又自分

の生みの母親を見ると自分の老けて行くのが當り前のことに思はれた。津島が生きてゐたら自分らはどういふ暮しをしてゐるだらう、彼女は稀にかういふ考へに捉はれないことも無いではなかつた。

歸省する隆を迎えに出たあや子は、子供は連れないで停車場に早くから行着いてゐた。そして步廊に下り立つた隆をすぐ眼に入れたが、隆も氣附いて笑つて親しく帽子を取るのだつた。

「姉さんは……」

「電車道へお迎えに出てゐますわ。」

「五年くらゐ會はなかつたね。」

「ええ、けさもお母さまとそんな話をしましたの。」

「僕、變化つた？」

「いいえ、別にさう見えません。」

隆は電車で片町まで來ると、停留場に姉のおとはが、あや子の子供を連れてだいぶ前から待ち倦んでゐるやうであつた。

「草臥れたでせう。」

おとはは隆の重い鞄を受取らうとするのだつた。これは姉さんには持てやしませんよと隆は自分で提げようとすると、傍からあや子が、わたくしが持つと鞄に手をふれながら言つた。

「お嬢さまには持てないよ。」

「まあ、ひどいわ、わたくし朝鮮くんだりまで行つたんですもの、鞄なんか大丈夫よ。」
彼女は鞄を持つと故意と勇敢に先きに歩いた。
おとはは笑ひながら角の魚屋で何か注文しながら、直ぐ行きますと二人を見ながら言つた。
「姉さんもおばあさんになつたな。」
「でもお母さまはまだ若いわ、わたくしこそすつかり……」
隆は拒むあや子の鞄に片手を遣り姉を待つた。子供は眩しさうに隆を見上げてゐた。隆は子供にもおもちやを用意して來てよかつたと思ふた。そしてあや子が娘時分よりかすつきりとした顔をしてゐることや、氣の弱さうに見えるところが昔通りだと思ふた。

家へ着くと二階から隣の低い屋根の上に李の花が一杯に散つてゐるのが、皓い雨のやうに美しかつた。隆は湯から歸つてくるとお膳の膳がならんでゐたが、それは隆が子供の時分の赤い輪島塗りのお膳であつた。あや子の分も昔のお膳であつた。一寸したことだつたが姉の氣のつくことが、隆の心を嬉しくさせた。
「まだこんな古いお膳が家にあつたの。」
「お可笑しい？」
と、姉は笑つて云つた。隆は頭をふつて面白いと云つた。
隆は食事を済すと氣輕に横臥してゐた。けふは一日やすむと云ふ仕立物が、壁ぎわに昨夜まで仕事し續けてゐたらしい様子で片附けられてゐた。

相蘇の母親が夕方來て、「みんな揃つたんだからお寺へお詣りをしてくれなければ……」と言つた。みんなは自然に墓詣りの腹になつてゐたので、明日行かうと言ふのだつた。あや子は湯からかへると隆の着物をたゝんだりした。

「これぢやまるで寢るところもないのね。」

おとはは六疊に床を三つも敷きながら、氣の毒さうに隆に言つた。

隆とあや子とがならんで枕の上から顏を對き合せ、姉は子供を隔てた顏を隆の方へ向けてゐた。春ではあるが海鳴りがまだ晩には聞え、隆はそれを何度も姉に聞き糺した。隆とあや子とが永い閑話をしてゐたので、おとはは、

「もう寢ませうね。」

と冴えた聲で言つた。

「明日は津島さんのゐる大乘寺山へ最初(さき)に行かう。」

津島龍藏の墓は大乘寺山の寂しい墓畔にあつた。隆はその山へ久濶りで登りたいと思ふた。隆はあや子が寢苦しがつてゐる氣はひを感じて、明け方近くまで眠れなかつた。

翌朝一行が大乘寺山の麓茶屋に着いた頃、朝日の一杯に當つた水車が雫を輝かせながら相渝らず廻つてゐた。「お前覺えてゐる？――」おとははあや子に左う言つて水車を眺めた。

「ええ。」

あや子は何氣なしに隆の方を振向くのだつた。

「もう古くなつてゐるな。」

水車の輻(や)は朽ち古びて漏つた水が內側へ走つてゐた。隆は皆が非常に面白いもののやうに水車に見惚れてゐる間に、山の方へ登りはじめた。深い松林の日の當つた明るい方から春蟬が啼いてゐた。隆は汗をふきながら皆を待つた。

津島とみどりの墓から一行は少し隔れたところに、用意の莚や重詰を開くのであつた。今では山遊びをする人も少なくなり、殆さういふ暢氣な人々を見かけなかつた。荒いが淸冽な空氣は少し寒い位だつた。

相蘇の母親は言ふのであつた。

「みどりさんは此處で風邪をひいたのが原因なんだよ。」

隆はあや子と谿川の見える方へ行つた。おとはは二人の姿が見え隱れするのを見据え、母親にいふのだつた。

「この山は變に悲しい山ね。」

「その筈さ昔から何百年の間の墓があるんだもの。」

母は見當ちがひの返辭をしたが、おとはは笑へもしなかつた。彼女は森としたあたりに何かを考へ當てるやうな眼付をしてゐた。餘りの冴えた靜かさ、その靜かさの中におとはは時々躓づいた氣もちで、何かを心の奥で見定めるのだつた。

隆とあや子が谿間から上つて來た。

「綺麗な水よ、深くて底まで見えるんですもの。」

あや子はおとはに甘えるやうな聲を出して云つた。おとははあや子の顔を見ないで、優しい好意のある聲音で隆に對ふて、そろそろ山を下りませうねと云つた。

海邊の町で

佐佐木茂索

その日はいいお天氣だつた。だから私達もぶらぶら散歩に出たわけだが——。

私は妻に云ひかけた。

「いいお天氣だね、暖かくて——。」

だが妻は私に答へる代りに——なぜなら、私が「いいお天氣だね、暖かくて——。」さう云つたのは、さつきからもう三度目くらゐだつたから、——彼女は、私には輕く同意のうなづきを見せただけで、連れだつてゐる華子夫人に、

「これが東京だと、春さきは埃りぽくてあたし厭よ。でもここは、——」

何か話しかけてゐた。

女達は二人並んで歩いて居り、私は彼女たちから二間ほど前を、隔つて歩いてゐた。——私達がある町角へ來かかつた時だつた。私は向ふから一台の馬車がやつて來るのを見た。馬車は形ばかりの幌をかけてゐるに過ぎないので、どんな人が乘

つてゐるかは、正面と側面とからなら、すつかり見てとることが出來た。馬車には三四人乘つてゐるらしい送月だが——何よりも先に私はそのなかに一つの白い顔が、ぢつとこつちを見てゐるのを感じた。その顔は、私に頬笑みかけてさへゐるやうに感じられた。だが、誰だか、不意すぎて、ちよつとは分らなかつた。——馬車は、やがて私達を通り過ぎてしまつた。その人と、子供二人と、老婦人と、四人乘つてゐた。

「見たような方ね。」

「綺麗な方ね。」

「しやれてるわ、馬車なんかで、ゆつくりと。——」

「ほんと。——」

女達は過ぎ去つた馬車をまだ見てゐた。

「誰だつたか知ら。見たような方ね。」

華子夫人はもう一度云つた。それが私には、あんなに知つてゐる筈の人なのにと、おかしかつた。

「末松夫人ぢやありませんか。」

私はきつぱりと云つた。

「末松夫人？富子さんのこと？」

「さう。」

「嘘。何が末松夫人なものですか。」

妻もそれに云ひ加つた。

「さうよ、ちよつと似てゐるかも知れないけど、別の方だわ。」

云はれてみると、私にもすぐ、思ひ違ひしてゐることが分つた。確かに末松夫人ではなかつた。大變な間違ひだつた。餘り變な間違ひ過ぎるので、氣まりの惡さよりも爆發する笑ひの方が先だつた。

「あゝ違つてゐた。あの人だ。―」

「さうでせう、違つてゐるでせう。誰？御存じなの？」

「あの人、水原さんさ。」

「水原さん、まあ。」

妻は驚いた聲をあげた。

「水原さんなの？本當？なら、もつとよく見ておくのだつたのに。――」

「水原さんて？―」

華子夫人が訊ねた。妻はずばりと返事した。

「この人の、戀人よ。」

「戀人？まあ大變。―」

華子夫人は私をからかつた。

「それを見違へるなんて。」

「どうも申譯ありません。その程度しか知つてゐない人だから。何とも――。」

私も、妻にあけすけに云はれて、多少參つてゐないでもなかつたので、冗談めかしてしまつた。華子夫人は、私に笑ひかけながら、

「でも、」と云つた。「でも、あの方なら及第よ。勘辨してあげますわ。だつて、何時でも、あなたの好きなて方、乾度變な

人ばかりなんですもの。あの方なら立派なものだわ、だから勘辨してあげますわ。」

「へえ、そんなものですかね。」

私が時折、雜誌の口繪などを見ながら、この人はどうです美人ですね、などと言ひ出すのが、大抵華子夫人の趣味と合致した事がないので、さうからかふのらしかつた。

「それにしても賴りないわね、戀人を見違へるなんて。」

妻は華子夫人を顧て笑つた

「いつ戀人だなんて云つた？」

「いつでも云つてるぢやないの。」

「云つてるものか。」

「云ひ過ぎてるわ。」

華子夫人が口を出した。

「およしなさいよ。戀人なら戀人でいゝし、見違つてもそれもいゝし、どうせ――。」

「叶はない。どうせ、でせうよ。」

「ほ、錆くなつて。素敵素敵。――」

女達は一緒に囃し立てた。

だがどうして見間違ひたのか、私は自分の不覺が何となく女達に耻かしかつた。もう少し近くで見たのなら決して間違ふ筈はないのだが、――。

「でも、栗原さん。」華子夫人が私に呼びかけた。「戀人が挨拶もしないなんて變ね。」

「そこがいゝところですよ。尤も、先方ぢやちよつと目禮しかけたのだけど。——」
「嘘ばつかり、うぬぼれてるわ。」
妻がさうやつつけた。
「嘘なもんか。それは確かだよ。だけど肝心の僕がぼんやりしてゐたものだから。——」
「ぼんやりだから、さう見えたのでせう。そんな點鈍感だから。——」
「そんな點鈍感だつて?まあ、さうかしら——。」
華子夫人は妻を見た。妻は笑つた。
「それや鈍感よ。」
「まあ、勘忍して頂戴。お淩ひされちやたまらないわ。」
「え?なに?」
「むかし、そんなことがあつて、もどかしかつたといふのぢやないの?」
「あら、ひどいわ。」
私はいつか彼女達から離れて、また以前のように二間ほど先立つて歩いてゐた。女達の話は、水原夫人を中心にして、いつまでも續いてゐた。
「可愛らしいお子達だつたわね。お孃さんでせう?」
「さうね、二人とも七つ位かしら。」
「双生兒ぢやない?　それとも年子かも知れないわ。」
「大へんね。——割に派手なお召しものだつたけど、ぢやもう可なり——」

「さう、二十八九でせうよ。それとも三十越してゐらつしやるかしら。」

「まさか。」

私は振り返つた。

「さう惡口いふのはよしなさいよ。」

「お氣に障つたの？」

「無理もないわ。」

「でもまあ默つて歩いてゐらつしやい。さつきから見てゐると、とても嬉しさうな歩きぶりだから。――。」

女達は口ぐちに云ひ返した。私は應戰した。

「身も心も輕さうな――。」

「憎らしい。默つて歩いてゐらつしやい。」

私は彼女達の目を背なかに感じながら、水原さんを想つて歩いてゐた。やはり、冗談でなく身も心も輕かつた。

「でも可なりいい趣味で、惡くなかつたわ。」

「さう。お孃さん達の洋服もちやんとしてゐたし――。」

「まあ及第ね。」

「ぢや勝手に戀人にされてゐても仕方がないわけね。」

「都合のいい理屈ね。」

女達は、それこそ都合のいい、勝手のいいことばかり話し合つてゐた。しかし、ともすると、それは惡口に、惡口でない迄も、何か水原夫人の缺けたところを探す話題になりがちだつた。さういふ話題で彼女達が一致すると、會話は急に

生き生きとするようだつた。

私は彼女達が何を喋りつづけてゐようと構はなかつた。久しぶりで水原夫人に出會へて、ゆつくり馬車の行衛を考へながら歩いてゐるだけで十分だつた。

華子夫人に別れて二人きりになると、妻は急に息をはづませて訊いた。

「本當？え、本當？」

「何がさ。」

「さつきの確かに水原さんなの？」

「それか、それは確かだよ。」

「あ、癪だわ。やつぱり本當だつたの。」

「癪もなにもないぢやないか。僕一人の勝手な話なんだもの。向ふぢやちつとも知らないことだもの。」

「向ふの知らないは問題ぢやないのよ。あ、癪だ。――」

さつき馬車と行き違つた折は、私が水原さんを末松夫人と見違したりしたので、それに華子夫人もゐたので、妻の氣持も隨分輕いものらしかつた。しかし、段だん時間が經つほど、何かしら妻の胸にはつきりしたものが、むしやくしやと押し寄せてくるらしかつた。噓が本當のような形を形ちづくるものらしかつた。妻は多少不機嫌になつてゐた。

「男て、勝手なものね。」

「そんな古くさいことを云ふなよ。――だつて、遠くから仄かに誰かを想つてゐるなんて、人間のいいところぢやないか。それに僕は熱のない男だし――。」

「だから勝手なものだわ。そんなこと、いざとなつたら、どうなるか、分つたものぢやないわ。──」
「ふん、そんなに實際的に見えるかね。」
家に歸ると、妻はやさしかつた。
「これからは、あまり水原さん水原さんて云ふの、止して頂戴よ。」
妻には水原夫人の姿がはつきりと燒きついたやうだつた。
「いままでだつて、そんなに云ひやしないぢやないか。」
「云つてたわ、目の大きい人を見ると、丸で水原さんだとか。──そのたんび丸で、橋のたもとのダンテみたいに熱つぽい目をしたわ。」
「そいつは大したことだ。」
「そら、もう嬉しがつてゐるんだから。──」
「ぢや、そんな風に思へるのなら、この話はもう止さう。」
「え、止しませう。──だけど、一たい水原さんと何の程度に懇意なの?」
「懇意も何もありやしないよ。たつた一度お辭儀しただけだから。」
「本當?」
「本當さ、僕の方で恥しい位ほんとさ。」
「さうなの?何だか怪しいけど。」
「買ひかぶらないでくれ、川柳になつちまふから。──」

ある朝、私が食事に降りて行くと、妻がにこやかに話しかけた。
「大變よ。知つてらつしやる？」
「何だい、だしぬけに。」
「とても大變。水原さんのことよ。」
「何だ。そんなことか。」
「そんなことかつて、とぼけなくつたつていいわ。――御存じなの？」
「何をさ。何にも知りやしないよ。」
「ずゐぶんな噂なんですつてね。」
「ぢれつたいね。何の噂がさ。」
「水原さんの戀人の噂。――」
「うん、僕のことか。」
「莫迦ね。――冗談でなしに大變なんですつてね。誰だか知つてらつしやる？」
妻はいたづらさうな目つきで私をぢつと見た。私も何故か口のあたりが强張るやうに感じた。私は水原夫人と水原氏とがあまり仲のよい方ではないらしいといふことは聞いてゐた。しかし其處にもう第三者が這入つてゐやうとは夢にも思つてゐないことだつた。それだけに妻のいふことは、まるきり譃ぢやないかとも思はないではなかつたが、何か噂ぢやないらしいといふ氣が一方でひどく强くきた。私には噂の相手といふのはてんで心當りもなかつた。しかし知らないといつて妻からそれを敎へられるのは沽券の下り過ぎるやうな恥しさだつた。で私はあてずつぽうにいつてみた。
「誰がそんなことといつてるのか知らないが、もう古い話だ、そんな噂なら。」
「さう？知つてらつしやるの？ぢや誰だか仰しやつて御覺なさいな。」
「いつたつていいけど、人のことなんか。」

「あんまり人のことでもないぢやありませんか。あなたの戀人の戀人の話だから、とても緊張する話ぢやないの？」
「若しほんとならね。だけどただ噂だからね。」
「內心まゐつてるくせに、そんなに輕く云はなくつてもいいわ。誰だか知りたいんでせう？」
「知つてるよ。」
「ぢや、仰しやいな。」
私は出鱈目に云つた。
「音樂家だらう？今外國に勉强に行つてゐる。——」
「まあ、知つてらつしやるの？そいで何ともない？」
「あるもないも、それは噂だけだもの。」
「ほんとに？」
「よしんばほんとでも、僕の氣持は僕の氣持さ。」
私はあてずつぽうがいきなり當つたのに、自分で意外すぎてしまつた。妻の前で辛うじて自分が落付いてゐられたことは、幾分の慰めではあつたが、しかし實際そんな噂があるのかと知ると、やはり不愉快な、暗澹としたものにひしひしと沈められた。ただかりそめに、その名を口にしてゐるほどの水原夫人ではあつたにしろ、こんな話はどうも愉快でなかつた。私は妻と輕く會話を運んで行きながら、ともするとぼんやりつまづきさうな自分に氣が付いてゐた。
「外國まで追つかけて行きさうだつて、ほんとかしら？」
「まさか、そんな人ぢやないだらう。」
「直ぐさう辯護なさるの。」
私は、はつと思つた。
「さうぢやないけどさ、なるべく物事を無事平穩に考へといた方がいいさ。——だけど誰なんだい、そんなことといつて寄

越したのは？」

「誰でもいいぢやないの。まるであなたには見當のつかない方からよ。それだけにずゐぶん噂は高いものと――。」

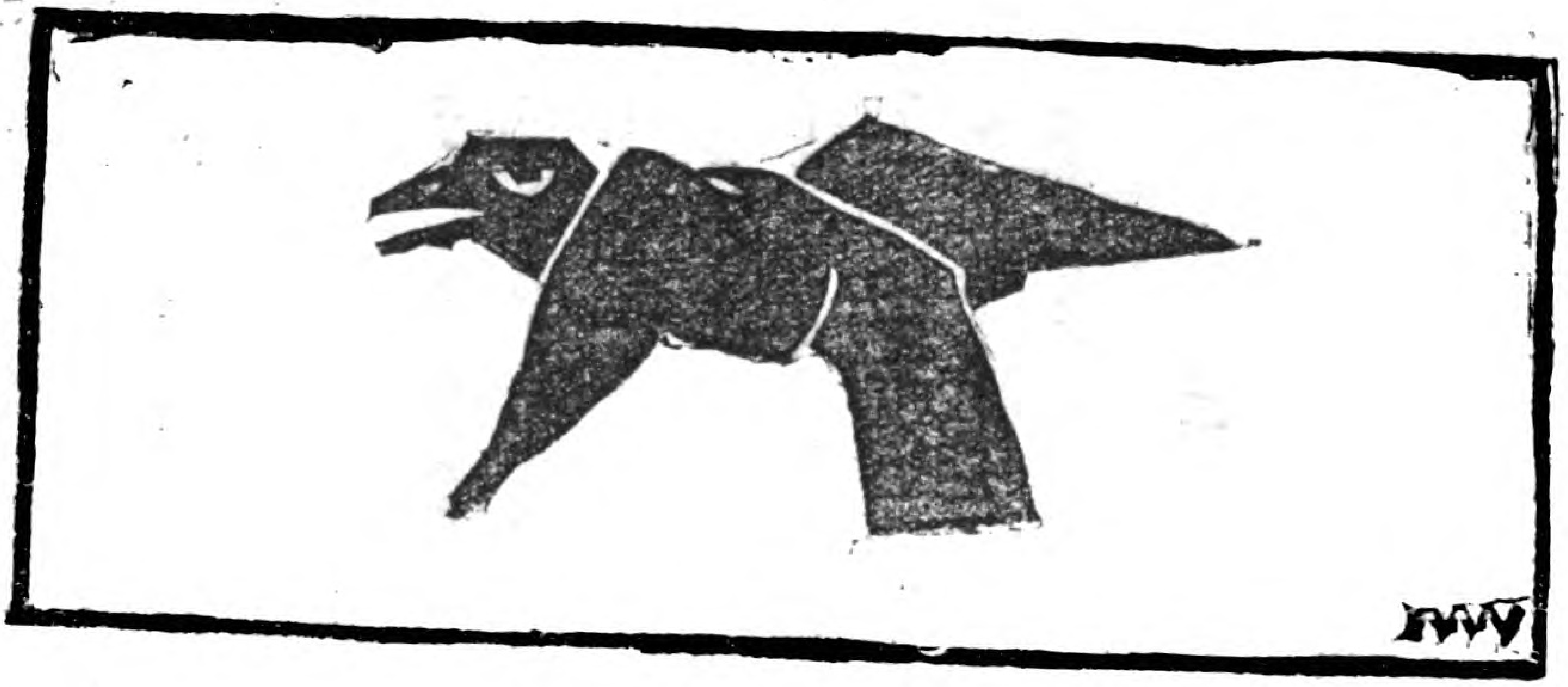
「ぢやあさう承知しておかう。」

此時から妻は又水原夫人の名を心易く口に上すやうになつた。私にしても却つてその方が氣樂で、遠慮なく妻に水原夫人の名で甘えることが出來て便宜的だつた。內心、時折水原夫人に激しい憤怒を感じながらも。――

私は此間水原夫人が馬車に乘つて何處へ行つたかを知つてゐた。その日は土曜日だつた。彼女は二人の子供を伴れて海岸のホテルへ食事に行つたのだつた。私の解釋では、週末には東京から子供を呼び寄せ、樂しい食事と美しい空氣とで月曜の朝までを過すのに違ひなかつた。

彼女がホテルへ行つたことを知つた私は次の土曜日にはそつと食事に出掛けてみた。しかし私は自分の判斷に不信用を拂つただけで歸つて來なければならなかつた。その次の土曜には口實がなかつたので、私は妻を伴れてホテルへ行つた。そして妻から、御馳走樣といはれただけで、私は滿ち足りずに歸つて來た。それでももう一度試みる氣を私はまだ失はなかつた。ちやうど片付けなければならない仕事を云ひたてて、私は次の土曜日にはホテルへ泊ることに妻を承諾させた。私は小さなスーツ・ケースを提げて、剃りたての顋をホテルへ持つて行つた。だが食堂へ出た私は又しても人のゐない澤山のテーブルを見に來ただけだつた。客は勿論幾組かはゐた。デンマーク人の兄妹、背の高いスコットランド人と、何をしてゐるのか分らないドイツ人とその妻の日本人と、いや、もつと手近な日本人が大勢、二人の子供を伴れたのさへゐるにはゐた。一人のモーニングの紳士が文金高島田の、何のことはないホネムーンの出發を廣告して大きな異彩を放つてさへゐた。だが私にはがらんとした、――興味のない見物ばかりだつたとはいはない。しかし給仕人のお辭儀からさへ、かすかな嘲笑を抽き出すほどの私はをどけた奇術師になつてゐた。

まだ日曜がある。――私はその日曜に――何を語る必要ももうないだらう。



彷徨

下村千秋

一

袷をネルに着がへてK病院へ診察を受けに行つた妻は、三時間ほどして歸つて來ると、自分の机の傍に坐つて、

「脊椎カリエスですつて!」といきなり言つた。

「カリエスとは?」

妻は昂奮してゐて、あとがすぐ言へなかつた。しばらくしてから說明した――ほつとけば致命的の病氣である。脊骨の芯が腐つてだん〳〵曲つて來る、そしてそこから膿が出るやうになる、さうなつたら三年や四年では癒らない、だからすぐ手當をしなければいけない、と。

この少し前まで妻は、外の病氣で三月あまり病院通ひをしてゐたばかりなので、また病氣かと聞くと自分はいゝ顏は出來なかつた。病氣そのものよりも、それに伴ふ貧乏と、妻のヒステリーが自分には堪らなかつたのである。

「どういふ手當をすればいゝのだ？」

「あまりテキパキした療法はないさうですの。ギプス・ベットといふのを造り、それに寢て絕對安靜にしてゐるのですつて」

「ギプス・ベットとはどんなものだ？」

自分があまりつけ〳〵言ふので、妻ははら〳〵しながら、

「………わたしにも解りません………それから每日局部の日光浴をすること、出來るだけ滋養物を食べること………さう言はれて來たせいか今日は分けても脊骨がつき〳〵痛んで………」

「しかしそりやいゝ病氣だ」と自分は大きな聲を出した、「寢てゐて、うまいものを食つて、そして日向ぼつこをしてゐるといふんぢやまるで極樂淨土だ。俺もして見たいよ」

妻は顏を伏せてしまつた。やがて、膝の上に置いてある手の甲に、淚がぽとり〳〵落ちて來た。で、自分はそれ以上意地惡を言ふことを止めた。

二

その夜妻は、茶の間へ早くから床を敷いて、病院で注意されて來たやうに、脚を伸し仰に眞直ぐに寢た。自分は長火鉢に凭れてぼんやり煙草をふかしてゐた。庭で蛙がグイ〳〵啼いてゐた。

自分はもう、妻に對し意地惡ではなくなつてゐた。むしろ妻の氣持に添ふやうになつてゐた。顏色でそれが妻にも解

つた。

「あなた」

「なんだ」

「わたしが死んだら、あなたはどうなさる？」

「少し困るね」

「嘘をおつしやい。せい〳〵するでせう！」

「あるひは、さうかも知れん」

「それごらん、どうせさうなんだから！」

「…………」

「わたしは、あなたが死んだら……」

「どうするね？」

「わたしも死ぬ」

「そりや困るよ。來世は俺もせめて一人で暮したいよ」

「さオ、ちややつぱりわたしが死ねば、ほんとうにせい〳〵するのね？」

「それとこれとは話が違うよ」

「いゝえ、同じことよ。わたしにはよく解つてます………でも、あなたがわたしより先に死ぬやうなことは決してないわね」

「そんなことは極つてやしない。第一俺はお前より十年も餘計に年を取つてゐるんだから」

「それでも駄目、もうちやんと極つてるの。わたしは今度の病氣で死なゝければ、また外の病氣が出て來て、それで死ぬに極まつてるの。さうしてわたしが死んでしまへば、あなたは直ぐにまた………」

そこで妻はくるりと向うを向いてしまつた。通りの菓子屋のラヂオから、ヴァイオリンの獨奏が聞えて來た。自分は聞くともなくそれに耳を傾けてゐたが、

「おい、横に寢ちやいけないと言はれて來たんだらう？」と妻に言つた。

妻は默つて仰に眞直ぐになつた、そして、

「あなたは、わたしが死ねば直ぐに結婚する相手があるのでせう？」と艶のない聲で言つた。

「まだその話かえ？」

「逃げちやいけませんよ」

「逃げはしないよ。しかし俺にそんな相手があると思つてるのかえ？」

「とぼけていらつしやる。今頃になつて隱したつて間に合ひませんよ」

妻は今度は眼を光らして自分の方を見た。自分はきぶしさうな眼付をした。と、妻は腹を極めたやうに、

「そりやわたしより十何年も早くから戀し合つてゐるのですから、わたしより可愛いゝのは當り前かも知れませんが、それぢやわたしが堪らないわ。それも公明正大にやつてゐるならまだいゝのですけど、わたしに内緒で何處かで合つたり、一しよに旅行をしたりしてるのだからひどいわ。人を踏みつけるのも程がある！」

「おい〳〵、問題が外れちやつたね」

「少しも外れやしません」その調子が、いつものヒステリーと違つて、意地々々した眞劍さであつた。天井をギロッと睨めてゐる。自分は少し乘り出して、

「それぢや正直のところを話すがね………おい聞いてるのかえ？」

「よく聞いてゐます！」

「さう怒るな。なるほどその女は、俺が中學四年時分だからもう十五年にもなるが、その頃の戀人ではあつたが、現在の戀人ではないよ」

「それも嘘です。何年前か、その女の人がお嫁入りする時、あなたはその女の人にかう約束したといふぢやありませんか――僕は、もしあなたが破鏡の嘆を見るやうなことがあつたら、いつでもあなたを引き受けます。僕の心の中には、あなた一人を容れるだけの席はいつでもつくつて置きますから………」

「だれがそんなことを言つた？」

「あなたの姉さんが言ひました」

「しかし、それも十年前の話だよ」

「十年前だつて今だつて、しつこいあなたですもの、變りはありませんわ」

「馬鹿言へ！變つた證據にはお前と立派に結婚してるぢやないか」

「そんなこと證據にはなりません！」

「それぢや話はおしまひだ………しかし女といふ奴は蟲がいゝものだね。その女は意外にもそれから十年して、つまり去年の春に、お前の所謂「破鏡の嘆を見て」東京へ一人で出て來たのだが、その時その女は、俺がお前と結婚してゐるのを知ると、非常に失望したり恨んだりしたよ。だが十年も經つうちには、俺の心だつていくらか成長するからね。そんな、その女が易々と入れるやうなそんな空地はなくなつてゐるよ。戀愛道から言つたら邪道かも知れぬが、生活道から言へばそれが本當で自然だからな。だから俺はありのまゝの心をその女に言つてしまつたよ。するとその女は、非常に

寂しい顏をした、むしろひねくれた顏をして、そしてそれから俺と合はうとは言はない。だから俺からも會はうとは思はない」
「その後一度も會つたことはありませんか」
「ない」
「これからも會ひませんか」
「會はない」
「出鱈目おつしやい」
妻はそれを部屋にひゞくほどの聲で言ふと、顏を夜具の中へ埋めてしまつた。

三

一日置いた次の日は、妻のカリエス療治の道具であるギプス・ベツトを造る日であつた。これは、今まで何かにつけて世話になつてゐるK病院のOさん（妻のカリエスもこの人が發見したのであつた）の世話で、中野のN病院で實費だけで造つて貰ふことになつた。Oさんの注意で自分もそのN病院へ妻と同道すべきであつたが、實は自分はこの日、妻の謂ふ「破鏡の嘆を見た女」と會ふことになつてゐた。
どういふ氣持で會ふにしろ、未だに妻に秘密にさういふことをしてゐるのは何となく晴々しない氣持であつた。殊にその日はさういふ日であつたゞけいゝ氣持ではなかつた。けれど會はずには濟されない事情があつた。自分は仕事の用にかこつけて妻より先に家を出た。用の濟み次第病院へ駈けつけるからと言つて出た。
彼女は、上野の動物園の鶴や鵞鳥の啼き聲の聞えるやうな場所に、一人で二階住ひをしてゐた。台所から默つて梯子段

を上つて行くと、彼女は亂れた髮をかぶり、北窓の下の壁に凭れて單衣を縫つてゐた。

「おとゝひからかゝつてまだ仕上らないの」彼女は縫ひかけの單衣を持ち上げて寂しく笑つた。過去十年を、自分で自分の着物を縫はずにも濟むやうな安易な有閑生活をして來た彼女は、今となつては海の魚が岡へ引き上げられたやうなものであつた。

「今月は金が出來ないんだが」自分は先づそれを言つた。彼女は髮を掻き上げて何か言ひさうにして默つてしまつた。

自分はそこで、妻の病氣のことや、今日N病院で造るギプス・ベットのことなどを話し、その費用さへどう工面しようかと迷つてゐると言つた。

「質草があればそれで間に合はして上げるのだが、それもきれいに無くなつちまつたし」さうも言ふと、彼女は顏を急に赤くして、

「わたし、お嫁入りの時の裾模様と丸帯を持つてるのですけど」と言つた。自分はまたさういふ品物に手をつけることは何かの祟りがありさうで氣持が悪かつたが、外に手段はなかつた。

間もなく自分は大風呂敷包みを抱えてそこを出た。そして行きつけの質屋で用を濟し、再び彼女の部屋へかへつて行くと、彼女は褞袍にくるまつてごろ寢をしてゐた。

「やつとこれだけ借りて來たよ」さう言つて、質札と金を彼女の枕元へ置いた。が、彼女は褞袍の中から顏も見せず、

「どうも濟みませんでした」と言つたまゝ、枕元の金も、自分の方も見ようとしなかつた。

自分は、病院の方へ心が急いでゐるので、構はずそのまゝそこを出てしまつた。しかし自分の氣持は尾を引いて彼女の方に惹かれた。

四

N病院では、Oさんも來てゐて自分を待つてゐてくれた。自分は妻の顔を見たとき、氣持がひどくちぐはぐになつてゐるのに氣づいた。自分は妻に尻を向けてOさんと對してゐた。

「珍らしく早く發見できてよかつたですね」とOさんは言つてくれた。自分は、自分のいこぢから妻の病氣に手遲れさせたやうに氣に咎めてゐたので、ホッとした氣持で、心から禮を述べた。そして、

「幾月ぐらゐで全快するでせうか？」と訊いて見た。

「さア……とにかく必ず癒りますから心配はないですよ。この前K病院へ奥さんが來た時は、整形外科のBさんもYさんも、それから部長のS博士も診たんですが、みんな意見が一致してましたよ。第四胸椎が冒されてゐるのですが間違ひなし全快する性質のものだといふことだつたです。去年、九州の醫科大會で、カリエスでは權威のT博士の研究發表に依ると、ギプス・ベットに寢てゐること、局部の日光浴をすること、滋養物を取ること、この三つの療法をすれば、九十五パーセントまでは全治するといふことだつたです。博士はこれまで、その療法を約五萬人の患者に實驗して見て、今のやうな結果を得たといふんですから確實なものですよ」

それを聞くと、妻は、傍の自分にも解るほど深い溜息をついて、急に安らかな顔になつた。その後で、

「三月ぐらゐしたら、癒るでせうか？」と訊いた。

「さア……」とOさんはそれにはやつぱり迷ふ風だつた。「とにかく氣ながに療治しなければならぬ病氣ではありますよ。急いちやいけませんよ。まア浮世を離れたつもりでうんと呑氣に寢てゐることです。たまに起ることはいいが、長起きは禁物です。起きてゐて針仕事をしたり編み物をしたりするのはもつと禁物です。それから臺所をしたり、重い物を提げた

り、あなたの所も井戸でせうが、水を汲んだり、バケツを提げたりは大の禁物です。構ふことはない、下村君に飯も炊かせ、雑巾がけもさせて、あなたは済して寝てゐなさい。それからね、これからね……」とOさんは少し禿げ上つた白い額をちよつと赤くして、妻と自分の顔を工合悪さうに見たが　また急に真面目になり、「禁慾生活、これを破るのは何よりの禁物ですよ」と言つた。

「え、え！」と自分は反射的にしつかりとそれを答へた。

妻は少し顔を伏せた。そこへ看護婦が顔を出して、

「用意が出來ました」と告げた。

妻は、手術室で素裸體にされた。

「腰卷も取つた方がいゝんだが」と言はれて、妻は壁の方を向いてもぢ〳〵してゐたが、ソツと自分の方を見て、小鼻をしかめた。

「いや、それはしてゐても構へませんが、汚れるからこれにくるまりなさい」と一人の醫員が、ネルの大巾の布を出してくれた。妻は、それにしかへると、なるべく下の方へ、と言はれ、もつと、もつとと注意され、臍の見えるあたりまでその布をずり下ろされて、耳まで顔を赭くした。

さうして妻は、手術臺の上にうつ伏せに寝かされた。そこの病院つきの二人の醫員にOさんも加はり、看護婦二人と、自分も手傳ふやうに言はれ、都合六人がかりでギプス・ベツトは造り始められた。どういふことをされるかといふ不安で、妻は自分にも解るほど身體を緊張させてゐた。自分もいゝ氣持ではなかつた。

自分はOさんの指圖で、手術臺の端から下向きに出てゐる妻の頭を、額のところで支へ持つてゐた。そして妻の軀體は、正確なベツトを造るために、料理される鰻のやうに眞直ぐに眞直ぐにと引き伸された。さうして見る妻の身體は、夫であ

る自分の眼にも驚かれるほど痩せ細つて長かつた。結核菌が脊椎を冒してカリエスとなつたので、肺を冒されるよりは、傳染性がないだけでも救はれてゐる、と言はれてゐるが、さうした身體を今更ら見ると、或ひは肺までも冒されてゐるのではないかと疑はれた。

巾四寸、長さ七八尺あるといふ白布が、伊達卷のやうに卷かれ、それが四十本ほど、床の新聞紙の上に置かれてあつた。その白布は、布目の中にたつぷりと石膏粉を含ませてあつた。その傍には湯を入れたバケツが一つ置いてあつた。一人の看護婦が、そのバケツの湯の中へ、卷いた白布を四五本づつ浸した。布目の中の石膏粉が湯に溶けて、ねばりつくやうになるのを待つて、看護婦が一本づつ取り出し、一人の醫員の手に渡す。その醫員は、手術台を挾んで立つてゐるOさんと、も一人の醫員に白布の端を持たせる。さうしてそれを互ひにたぐり寄せるやうにしてほぐしながら、妻の背中へぢかに張りつけ始めた。妻はちよつと身體を顫はして、一層筋肉を緊張さした。

一本が濟むとそれに繼ぎ足して二本目が張りつけられた。さうして五本ほどで、背中から尻の上までぺつたりと張りつかつた。

「あつと、頭、頭」そんなことを言つて、六本目から、肩の布につゞけて首から頭の上に張りつけ始めた。耳から下を殘して頭は圓く圓く張りつけられた。凡てこれ等は、恰かも妻の軀體を原型として一つの張子を張るやうなものであつた。圓い頭が首の所で少しくびれて、それが急に擴がつて肩となり背となり、更らに盛り上つて尻の上まで一通りその白布が張りつくと、脚はネルにくるまつてゐるので、妻の身體で見えるものは是きりとなつた。鈍感な曲線を描いた白い身體、自分は見てゐるうちに、厭な氣になつた。そしてその氣持をまぎらすために、何か言はうとし、苦笑しながら、

「まるで木乃伊(みいら)を造つてるやうですね」と言つてしまつた。言つてしまつて自分はハツとした。木乃伊はひどいと氣づいたのである。他の人達は平氣な顏で手を動かしてゐたが、妻にそれがどう響いたらうと、氣になり出した。

「おい、大丈夫かえ？」自分は妻の耳元へさう囁いた。

「え！」妻は、低いが力のこもつた聲で答へた。自分の今言つた言葉などは何とも感じないほど、他のものに對して緊張してゐることがそれで解つたので、自分は少しホツとした。

石膏の布は、一枚一枚と張られて行くうちに、妻の上半身の型なりにだん／＼と厚い層をなして行つた。自分はその層の上から妻の横腹あたりの呼吸運動を見てゐた。最初はそれがはつきり見えてゐたが、層が厚くなるに從つて次第に微かになり、半ば過ぎると、もう自分の眼には感じられなくなつた。見てゐて自分は不安になつて來た。

「おい、大丈夫かえ？」自分は再びそれを高い聲で訊いた。看護婦の一人がチラリと自分の方を見た。

「え」さう答へた妻の聲が、氣のせいか息苦しさうであつた。自分は頭を下げて、妻の息聲を聽き取らうとした。

「大丈夫です。かへつて氣持のいゝもんです。暖かい布にくるまるんですからね」一人の醫員が元氣よく言つてくれた。

やがて四十本の石膏布が殆んど張りつかつた頃、石膏粉は固まりかけた。三人の醫者は代る／＼指先で叩いて見た。叩かれると、白布の層はコツ／＼といふ音がした。その音には自分はまゐつた。妻には殊にどうひゞくだらうと思ふと更らにまゐつた。妻の生きた身體から無生物――石か枯木か、そんなものの音を聞くといふことは實際堪らなかつた。

自分は、自分の掌へ全神經を集めて、妻の額から頬の邊を撫でるやうなことをした。その手觸りで、無生物ではない、生きてゐる人間――立派に呼吸をしてゐる妻を實感しようとしたのであつた。これは自分ながら切ない氣持であつた。

自分は、何か妻の身にしみるやうな言葉を言ひかけたかつた。が、さう思ふと涙が出さうになつたので、唇を喰ひしばつて默つてゐた。

仕事は濟んだ。そして石膏粉がすつかり固まるのを待つて、ギプスはすつぽりと妻の身體から拔き取られた。妻の身體は直ぐむく／＼と起き上つた。自分はホーツとした。しかし手も足もない頭だけの人の形をしたギプスが、傍の寢臺へ仰の

けに置かれたのを見ると、自分はゾーッとした。無生物であるべきそのギプスが、妻の身體のある生氣を奪つて、何かグロテスクな生きもののやうに見えたからであつた。
自分はそれを見ないやうに窓の方へ立つて行つた。妻は上氣した顔をあげて手術臺から下りた。背中の肌や髮にこびりついた石膏粉を一人の醫員が剝ぎ取つてゐてくれる。自分がそれに代つてしようとしたが、自分はその妻にも寄りつけない氣持で、窓から庭の鳳仙花の赤い色を見詰めてゐた。

五

ギプス・ベットはそれから三日して、幾分恰好よくされ、肌へ當る内側は柔かい布で包まれて出來て來た。しかしさうして見ても、形のグロテスクさには變りはなかつた。妻はそれを見ると、顔中に皺をつくつて、そんなものに寢てゐるのはいやだと言ひ出した。
「今になつて何を言ふのだ！」と自分は言つた。
「だつて、あの日は氣が張つてゐたので何とも思はなかつたけど」と妻は口を尖らして「自分の拔殼がそこにある、それにまた自分が入つて寢るなんていやです」と言ふのであつた。
自分も、そんなものに入つて寢てゐる妻を見たくはなかつた。けれどさういふ氣持に對し徒らに同情すべきではなかつた。自分は、自分の氣持にも妻の氣持にも逆襲するやうにつけ〳〵と言つた。
「そんなら、何故そんな病氣になつたのだ！」
「だつて、わたしが好きでなつた病氣ぢやないぢやありませんか」
「まさか好きでなつた病氣ぢやあるまいが、俺の知つたことぢやないんだから」

「あなたまでがそんなことを言ふんなら、わたしはどうすればいゝんです。わたしの心の中はそんなどころか………どうせわたしは死んでしまつた方がいゝんでせうから……」そんなことを言つてゐるうちに妻は泣き出してしまつた。さうしてギブス・ベットは何かの死骸のやうに座敷の眞中に抛り出されたまゝ、自分も妻もそれに觸れようともしなかつた。

妻は默つて床を敷いて寢てしまつた。それは醫者の注意を思ひ出して寢たのでないことは解つてゐた。が自分も默つて自分の部屋へ引き込んでしまつた。妻の啜り泣く聲がしばらく聞えてゐた。

と、背後の襖が開いて、

「あなた」と妻が寢ながら聲をかけた。

「なに？」自分は机に向つたまゝ答へた。

「この前、ギブスを造つた日、あなたは何處へいらしたんです？」

自分は默つてゐた。

「あの日、女の人に會つて來たでせう？」

「………」自分は、背中にある不快な表情を現はしながら尚も默つてゐた。

「隱していらしたつて、わたしにはよく解つてます。あの日、それがあなたの顏にちやんと書いてあつたんですから…………」

かういふ場合、さうしたことを見拔くことにかけては、多くの人妻と同じやうに妻にも不思議な本能が備つてゐた。かうなつてはそれを打ち消すだけ自分の不利になるばかりか、妻を病的に昂奮さすことが伴つてゐた。そこで自分はやうやく妻の方へ向き直りぐつと下手から、

「それがどうなんだ？」と柔かく切り出した。

「どうなんだもありません。あなたほどひどい僞善者はありません。もうわたし何も言ひませんから、その女の人の所へ行つてしまつて下さい」

「俺をおん出さうといふのかえ？」

「ご自分でおん出たくつてゐるのぢやありませんか」

「さうひねくれるな。あの女はまア謂はゞ動物園の駱駝見たいなものだ。現在の生活には少しも心が動かないで、昔のサハラか何處かの砂漠の生活ばかり夢見てゐるのだ。動物園の駱駝をお前も見たことがあるだらう。あのうつら〳〵してゐる眼付を見てゐると、誰でもさう思ふから。あの女もそれだよ。季節毎に流行の着物を三重ねもつくり、履物を一度に三足も買つて貰つた過去の結婚生活ばかり夢見てゐるのだ。それに子供は置いて來てあるのだし、お前のギブス・ベットぢやないが、現在の彼女は、過去の彼女の抜殼なんだよ。さういふ女と新らしい戀など生れよう筈がないぢやないか」自分はこれをわざと浮々した調子で言つた。

「二人で動物園を見物したのでせう？」

「……………」

「わたしには駱駝だか抜殼だかお目にかかつてゐないんですから解りません。とにかくする時は男らしくして下さいね。こそ泥見たいなことは止して下さいね。それだけはよくお願ひしときますよ」

妻はそれをとゞめでも刺すやうに言ふと、ぴしやりと襖を閉めてしまつた。自分はギブス・ベットを送つた日以來、妻に對し新たなる何かを感じてゐたのであつたが、今日の妻はそれを引きさらつて行くやうに感じた。さう感ずるだけ自分の氣持に妻になつたりしてゐないのだ、また根本の罪は自分の方にあるのだ、とさう思つて見ても不愉快は容易に去らな

かつた。堪らない一日であつた。

夜になつて妻はやうやくギプスへ入つて寢た。

「寢具合はどうだえ?」自分は腫物に觸はるやうに遠くからソツと訊いて見た。

「えゝ、何だかかう身體全體が、力のある大きな掌でしつかり支へ上げられてゐるやうで、割りに氣持がいゝの」妻もそれをこちらの氣持に合せるやうに言つた。

「そりやいゝ、お蔭でお前の寢相も直るといふわけだね」

妻は始めて微笑した。その夜自分は、身體中に非常な疲勞を感じてゐた。が、押して机に向つてゐた。けれど十二時近くなると、眼先がくらむやうになつたので、倒れるやうに床へ入つた。と、妻が、

「これへ入つて寢てると、一人ぽつちになつたやうで淋しくて寢つかれないのよ。今夜だけ傍へ寢てくれない?」とほんとに心細さうな聲を出した。

「だが、今夜から禁慾生活なんだからね」

「そんなことぢやないんです!」と妻はそれをムキになつて言つた。で、自分は、狹い敷布團の半分へ、固いギプスと肩を擦り合せるやうにして寢た。

何時頃か、自分は、變に銳どい妻の泣き聲で眼を覺した。自分は氣味惡くなり枕元のスタンドをひねつて、

「おい〳〵」とギプスの肩をゆすぶつた。ギプスは小舟のやうにころ〳〵搖れた。

「あゝ眼がまわる、眼がまわる………」妻はさう言ひながら眼を開いた。そしくびつくりしたやうに頭をあげてギプスを見下した。

「夢だつたの?」

「あゝ恐かつた。わたし、まだ生きてゐるのに棺の中へ入れられたとこなの」
「このギブスがいけないんだね」
「えゝ、やつぱりいゝ氣持ちやない。今夜だけこれに寢なくもいゝ？」
「…………でも、今夜から馴らすのだからね」
「わたし、とても辛い」
妻はさう言ふと、手を伸してスタンドの灯を消した。しばらくすると妻は一人しく〳〵泣き出した。自分は眠つたふりをしてゐたが、その時ばかりは妻がしみ〴〵可哀相になつた。

六

妻はそれからギブスへぎつちりと寢て暮すやうになつた。そしてさう矢鱈に泣くやうなこともなかつた。しかし自分だちが勝手に豫想した「三月ぐらゐ」の日が經つても、カリエスは目に立つて良くはからなかつた。一時間も起きてゐると、脊骨は堪らなくづきり〳〵痛んで來るといふのであつた。妻は少し焦れ出した。

十月始め、妻は盲腸炎に冒されて四五日苦しんだ。妻は、今度こそこれで死ぬのではないかと思つたらしかつた。が、Oさんの手當てでそれは癒つた。再發し易い病氣だからその時は注意しないと危ないと言はれ、妻はまたそれを氣に病み始めた

この頃から自分は、上野の彼女のことが頻りと氣になり出した。考へてゐると譯もなく憂鬱になつた。夢にも見た。夢では、十幾年以前のすが〳〵しい戀心を感じた。自分は今更らのやうに彼女と自分との交渉の深さを感じた。けれど一方に妻のことを考へると、この感じ方はまた自分を憂鬱にさせた。結局自分は彼女を訪ねることを我慢してゐなければならなかつた。

が、十一月に入つて自分はつひに彼女を訪ねた。訪ねて見ると彼女は上野の宿を引き拂つてゐた。自分はある不安を感じながら、引き移つた先の高田馬場の下宿を訪ねた。そこは下宿兼旅館の看板で、主に學生相手の宿であつた。彼女はさういふ宿の二階の四疊半にゐた。

自分がその部屋へ入つて行くと、彼女は薄汚れた横顔を見せて小さな瀬戸火鉢の上にこごみ、口を尖らして火をおこしてゐた。その顔をあげてぢろりとこつちを見上げた。その眼は充血してゐて鋭どかつた。それはいゝ印象ではなかつた。

「わたし、あなたは死んでしまつたのかと思つた！」と彼女は言つた。

「濟まなかつた」と自分はそれだけを言つて坐つた。

「でもよく忘れずにいらしたのね」彼女は皮肉に口を歪めた。「實はね、わたし今度いよ／＼決心して、日本の内地を離れてしまうの」

「内地を離れて何處へ？」

「あなたなんぞの解らない所へ。來て下さらなくともあなたの言ひ譯の立つやうな所へ」

「行きたくなれば僕は何處までゞも追ひかけて行くよ。一體何處だね？」

「樺太」

「樺太へ、ほんとうに?!」

「ほんとうですよ。わたしの女學校時代の友達が、大泊の病院の看護婦をしてゐるの。その人の世話で、わたしも看護婦見習としてそこへ住み込むつもりなの」

この嘘とも本當ともつかぬ彼女の言ひ方に對して、自分はしばらくぼんやりしてゐた。

「どうしてまたそんな所へ行く氣になつたのだね？」やがて自分はそれを訊いた。

「どうしてつて……どうしてつて」と彼女は言ひ澱んで「名古屋のあの人がね（別れた良人のこと）家の女中に子を産ませたんですつて、それも男の子を。そして家のすぐ近くへ大事にかこつとくんですつて……それを知つてからわたし、もう口惜しくつて口惜しくつて……」

「まだそんなことにこだわつてゐるのだね。ちやんと正式に離緣しちやつた人に對して」

「だつて、わたしの子供一人殘しとくぢやありませんか。あの子は、今度女中の子が生れたりしたらどんな目に會はされるか……あの子のためには、わたしはもう一度あの家へかへつてもいゝと思つてゐたのに」

「それはとにかく、それと樺太へ行くことにどういふ關係があるのだね？」自分は、彼女の言ひたがつてゐることには態と觸れずに、話を元へ返した。「看護婦の見習までするつもりなら、東京でいくらでも出來る筈だが」

「それにもいろ〳〵の譯がありますの、實はね、あれから、あなたがわたしの所へ來なくなつてから、わたし飢ゑ死ぬやうな目に會つたの。それで、思ひ切つてあなたを賴つて行かうかと幾度思つたか知れないのだけど、その度に御病氣の奥さんのことが考へられて、とても行けなかつたの。そのうちにわたし、奥さんにひどく恨まれてゐるやう氣がして來たの。これはわたし一人のひがみですけど、夢にまで奥さんが出て來るのよ。一度もお目にかかつたことのないあなたの奥さんの顏が、夢ではつきり見えるの。それがとても恐い顏で、わたし、聲をあげて眼を覺ましたことがありますわ。一度はわたし、奥さんの前に手をついて泣いて謝つたことがありますの。すると奥さんも一しよに泣き出して――あなたがそこにさうしてゐる間は、わたしは夜もおち〳〵眠れない、生きてゐるのがとても辛いからいつそのこと一しよに死んで下さい、とおつしやつたの。わたしその夢にはびつくりしちやつたわ。それからは、覺めてゐる時でもしよつちう奥さんの姿が眼に見えて、外を歩いてゐる時など、奥さんが不意に路次から飛び出して來さうな氣がしてならないの。それでわたしもう東京にはゐたゝまらない氣持になつたの。わたしはあなたの奥さんに對して知らず識らず罪を犯してゐて、それ

でこんな目を受けるのでせうから仕方がありませんわ。それにわたし自身も東京の生活にはすつかり行きつまつたのですから。どこへでも出て行く氣になつたの。さういふ氣になると、何處へでも行つて何でもする氣になつて、どうせ何處かへ行くなら思ひ切つて遠い所の方がいゝと思つて……」そこまで言ふと、彼女は火鉢の上に顔を伏せてしまつた。

自分は、ちり／＼と彼女の本心に觸れて來て、何も言へなくなつた。自分は油と垢で汚れた彼女の襟元を息苦しい氣で見詰めてゐたが、急に立ち上つて、

「外を少し歩かう、まだ日があるから」と言つた。

「いや、いや！」と彼女は鋭く拒んだ。しかし自分は執拗くそれを促がした。彼女はしぶ／＼立つて、鼠色の肩掛けを頭からかぶるやうに掛けて自分の後へついて來た。

山手線のガードをくゞつて、戸山ケ原のスロープを彼女は喘ぎ／＼登つてゐたが、がたりと立ち止つて、

「わたし歸る。歩きたくない」と言ひ出した。自分は彼女の手を執るやうにしてまた促がしたが、彼女は自分の方に反感の色さへ示して、そこを動かうとしなかつた。

「ぢや茲で別れよう。近いうちまた必ず行くからね今日の話はもう一度考へ直して見てくれ。あなたの頭は少し何かに痳痺してゐるやうだよ」自分はさう言つて別れた。

妻の方にだけ集中しようと努めてゐた自分の氣持は、いつか彼女の方にも奪はれてゐた。分裂した氣持のまゝ自分は家へかへつて來た。

七

分裂した氣持は、自分にも意外な執拗さをもつて、頭の中にも視覺にも聽覺にまでも或る妙な陰影をつくつた。これは

自分の始めて經驗する氣持であつた。

この蔭影は、ギプスに寢てゐる妻に反映せずにはゐなかつた。しかし妻に反映するものは、より以上の亂れた蔭影となつて自分にかへつて來た。結局それ等凡ての蔭影は、イヤな形をしたギプスに向つて集中して行つた。

妻はギプスには馴れ切つてゐた。朝、局部の日光浴をする時、妻は、汗と脂肪でしめつぽくなつたギプスの内側を乾かすため、自分が長々と寢そべつた傍へ、そのギプスを自分の子供かなんぞのやうに寢かして冬の陽に當てゝゐた。しかしそのギプスを自分は仇敵のやうにいつも睨めてゐた。

妻が便所へ立つた場合など、そのギプスはぼこりと凹んだ暗い顔を出して布團の中に寢てゐる。不用意にそれを見る時、自分はいつもゾッとした。

「起きた時は、ギプスはすつかり布團の中へ埋めて置け！」自分は妻に向つてさう嚴しく言つた。けれど今度は、頭のないギプスが尻の方を變に高くしてもつくりと布團の中に埋つてゐるのを見ると、またゾッとした。

「もつと何とかならんのか！」自分は今度はさう叫んだ。

夕方、布團を片づけて妻の部屋を掃き出す場合、妻はギプスを部屋の隅に立てかけたりして置いた。立てかけるとギプスのいやな形は更らにはつきりといやな形となつて眼に迫る。

「馬鹿、無神經！」自分はもうムキになつて呶鳴つた。

「そんならこれをどう置いたらいゝの？」妻はおら〳〵しながらさう訊く。

「押入へ入れて置け！」

が、また別の時、何かの用でその押入を開けると、ギプスは暗い中にうす白く橫たはつてゐることがあつた。そんな時、自分は後去りするほどひどく脅かされた。

「何故むやみとこんな中へ入れて置くのだ！」自分は更らにさうきめつけた。
「それぢや、この家の中にこれを置く場所がないぢやありませんか！」
「ありやしないよ。あつて堪るものか。そんなものを置くに都合のいゝ家に住んでゐたら、俺達は滅亡してしまふぞ！實にこいつは堪らなく不吉な影と形を持つてやがる。そいつのゐる間は、この家に運は向いて來やしない。俺だつていつまでも出世しやしない。俺はもうこの家から飛び出しちやうぞ！」
それは雨の降る夕方であつた。自分はこれを、妻に向つてゞはなく、ギブス・ベツトに依つて象徴されてゐる家の中の何かしら不吉な暗い影に向つて罵り叫んでゐる氣持であつた。實際そんな時は、いやな形の暗い影が、家中にうよ〳〵してゐるやうな氣がして仕方がなかつた。妻は呆氣に取られ、押入の前でおろ〳〵してゐたが、やがて眼を涙で光らせながら自分の方へ詰め寄せて來た。
「……だから、サツサとこの家を出て、あの女の人の所へ行つたらいゝぢやありませんか。ギブスがいやなのぢやなくて、わたしがいやなのでせう。そんな廻りくどいことを言はないで、この前にもお頼みしといたやうに男らしくキツパリ言つて、行つてしまつて下さい……わたしがカリエスになつてからこつち、あなたは一日だつて明るい顏をしてたことがないぢやありませんか。いつも心の中でわたしが死ぬことを祈つてゐるのでせう。そしてあの人と一しよになることを思つてるのでせう。けれどわたし、もう殺されたつて死にやしませんよ。カリエスで背骨が蝦のやうに曲つたつて死にやしませんよ。だからわたしの死ぬのを待つてゐずに、今、あの人の所へ行つてしまつて下さい。今すぐ出て行つて下さい！　わたしはもうそんな顏を一日だつて見てたかありません！」
さう叫んでゐるうちに、妻は疊の上へばたりと突つ伏してしまつた。髮をくしや〳〵に掻きむしり、十本の指を釘のやうに折り曲げて疊をガリ〳〵引つ掻いた。そして齒を噛み折るやうに齒ぎしりをしてゐる。

自分は僻易して、妻の傍へ行き肩に手をかけて起さうとした。すると妻は、こつちの片脚にしがみつき起きまいとした。見ると、疊の上に一筋血が流れてゐた。

自分はいきなり妻を抱き起した。口のまわりが血にまみれてゐた。顔は氷のやうに蒼くなり、眼は焦點を失つて只硝子のやうに光つてゐる。「舌を噛んだのだな！」と自分は思ふや、片手に拳をつくつて、妻の口の中へぐいと押しこんだ。さうされると妻は、栗鼠が物を喰ふ時のやうに兩手でこつちの手首を持ち、頭を痙攣的に顫はしながら渾身の力で、口の中の拳をガツと噛んだ。コリ／＼といふ音がした。自分は指が噛み切られた程の痛さを感じた。しかし、「もつと、もつと噛め、もつと噛め！」と叫んだ。

妻は二度ほど力限り噛むと、がつたりとなつて拳を離した。自分は、傍の食卓の上にかけた白布の端を引き寄せて、口の周圍から中までよく拭つた。さうして口を開けて見ると、舌の傷は意外に微少で、先端の皮が一枚の齒でむしれてゐただけであつた。が、鮮やかな血はそこから盛り上るやうに湧いて、すぐ口の中一杯を眞赤にした。で、自分は立つて脫脂綿を取つて戻り、それを舌の傷へ當て、その上を妻に片手でおさへさせた。妻は全身の筋を拔かれたやうにぐつたりとなつて、されるまゝになつてゐた。

やがて自分は、噛まれた指の痛みを感じて來た。見ると、人指指と中指の關節の上が、各々二枚の齒でくびれるほどに噛まれ、皮が切れ血が滲んでゐた。これはまた意外に深手であつた。見てゐると痛みが一時に加つて來て、いつか右腕全體の自由が奪はれてしまつた。自分はその腕を肩のつけ根からだらりと下げたまゝ、「お前は、自分の舌の代りに俺の指を噛み切つてしまつたぞ。が、それでお前自身の災難は免かれたのだからよかつたが」と自分でも解るほど苦い笑ひをもらした。

妻は、夢から覺めたやうにまじ／＼と自分の顔を見上げてゐたが、脫脂綿をくわへた口の中で、アワ／＼と唖者のやう

なことを言つた。そして大きな粒の涙をぽろり〳〵落し始めた。

「泣かなくともいゝよ。が、二度とは御免だよ。止むを得ない原因で悲劇が生れる場合はともかく、相手の本心をつかめない不聰明から逆上して、取りかへしのつかぬ悲劇を起しちや、お互ひに浮ばれないからね」

自分は全身にしみる傷の痛みを感じながらしみ〴〵とこれを言つた。が、これはこの場合妥當な言葉であるか？考へてゐるうちに自分の眼頭にも涙が滲んで來た。

八

Oさんの言つた通り、妻の盲腸は再び冒された。Oさんがまた診に來てくれて、

「今度はいけませんね」と言つた。「五六日したらこの痛みは一先づ落ちつきますから、そしたらすぐK病院へ入つて手術しませう。ほつといたら死んでしまひますよ」と妻と自分の顔を等分に見た。妻は泣くとも笑ふともつかぬ顔をした。Oさんは笑ひながら、

「なに大したことはないですよ。手術は三十分で濟みます。そして二週間で元の身體になつて退院できますからね」と柔かく言つてくれた。

「その手術がカリエスに影響しないでせうか？」自分はそれを訊いて見た。

「大丈夫でせう。手術後一時身體が弱りますから、その點で幾分カリエスのバイキンを繁殖させる譯ではありますが、目に見えて惡くなることはありません。よしあつたところでこの盲腸をほつとく譯には行きませんからね」

自分はこれに對しては只暗い顏で答へるよりしかなかつた。惡魔は惡魔を呼ぶ。今度の惡魔は次にどういふ惡魔を呼ぶのだらう！考へると暗憺たる氣持になつた。

それから五日して、よその家では正月の支度に取りかゝるやうな時分、自分の家は空家のやうにして妻をK病院へ入院させた。Oさんの特別の世話で、手術料無し、入院料半額といふことで、妻は三等室の窓に近いベツトの一つを當てがはれた。Oさん及びK病院の親切に對しては自分達は心から感謝してゐた。

一日置いて次の日の午後、妻の盲腸の手術はOさんの手で行はれた。自分はその手術前に、ギプスを病院に持ちこみ、手術後の妻の身體をすぐそれに寢かせるやうにしなければならなかつた。また手術の際にも立ち合はねばならなかつた。けれど自分はわざと時間をおくらし、日が暮れかゝり、大丈夫手術が濟んだと思はれる頃、家を出た。たとへ隣室にあつても、手術の物音を聞くことは現在の自分には堪へられさうもなかつたからであつた。

丁度この日自分は、下宿の彼女を訪ねる約束を四五日前の手紙でして置いた。指を嚙まれた事件以後、自分の氣持には彼女を訪ねる餘裕がなくなり、つゞいて妻の盲腸で、彼女の樺太行問題を非常に氣にしながら、その後一度も彼女に會つてゐないのであつた。しかし今日だけはその約束を破つて、眞直ぐ妻の所へ行かう、さう思つて停車場へ向つた。

電車に乘ると、人中だけ、ギプスのいやな形が眼について困つた。どう包みかへ、どう置いてもその形は妙な輪廓を風呂敷の外へ浮き出して來るのには全く持てあました

手術後の妻の姿が眼に浮んで來た。しかしその姿はどう浮べかへて見ても、ギプスの中に寢てゐる姿以外の姿にはならなかつた。妻の寢姿にはいつかギプスが附きものになつてゐるのであつた。それほど自分の眼には、この半年あまりの間に、ギプスと離れずにゐた妻の姿が深く强く眼の底に燒きつけられてゐるのであつた。自分は今更らのやうにさういふ自分に驚き、そしてその自分の慘めさを嘆息するやうな氣持になつた。

自分は、今度の病氣で妻は死ぬやうなことはないと信じてゐた。しかしこのいやな形のギプスが妻の身體におゝして取りついてゐる以上は、手術後の經過がはかゞ〵しくないやうに思はれてならなかつた。手術の傷の方では癒らう〵と努

あても、このギプスが何かしら不吉な暗示と刺戟を與へてそれを邪魔しさうに思はれてならなかつた。これは妻に取つては殊に不愉快な想像に違ひなかつたが、いつかの木乃伊の想像と同じやうに妙に頭の芯にこびりついて離れなかつた。さういふものをあの病室へ持ち込んで行くことは、第一、夫れ〳〵の病氣で苦しんでゐる同室の患者に對しても不快な思ひをさせやしないかといふ氣がした。眞直ぐ病院へ行かうとした自分の氣持はそこでこぢれてしまつた。

電車が新宿へ着くと、自分はそこで上野行へ乗りかへてしまつた。やつぱり約束通り下宿の彼女を訪ねよう。そして彼女の問題も片つけ、また自分の氣持の轉換することをも待つて後病院へ行かう、さう思つたのであつた。ギプスは、高田馬場驛へ一時預けにした。驛員は毀れものぢやないかと念を押し、中を覗き、、、、えたいの知れないものを見ると、へえ！と言つた。石膏像です、と自分は言つたが、變な不愉快を感じた

下宿の彼女は買物に行つて留守だ、といふことであつた。待つつもりで自分は彼女の部屋へ入つて行つた。と、そこには薄暗い灯の下に、手提行李を大きな風呂敷包みが二つ、持ち出すばかりのやうにして置いてあつた。そして外には何一つなかつた。自分はハツとした。もう樺太へ發つ支度をしてしまつたのだらうか？さう思ひ、さういふ荷物を見てゐると、一人遠く旅發つて行く彼女の姿が妙にはつきりと見えて來た。自分は急に不安になり苛立たしくなつた。そして火のない火鉢を抱えて無暗に煙草をふかしてゐた。一時間ほどぢり〳〵しながらさうしてゐたが、彼女はまだかへつて來なかつた。自分は病院の方が急に氣がかりになつて來た。で、二時間以内に再び來る旨を書き置きし、宿の女中にもそれを頼んで、そこを出た。が、新太久保まで來ると、下宿の方のことがまた堪らなく不安になつた。自分はそこからまた引きかへした。長い間、彼女と妻との間に彷徨してゐる自分の心は、いま具體的にかうして彷徨してゐるのだと思ふと自分ながら不愉快であつた。

再び下宿へ行くと、彼女はつひ今、荷物を一切持つて引き上げて行つたといふことであつた。今晩は牛込の余丁町の知

り合ひの家へ泊り、明日樺太の方へ旅立つのださうです、と女中がつけ加へた。自分はもう腹が立つてしまつた。が、それだけ自分の心は彼女の後を追ひかけた。余丁町へ行くのなら、省線で新宿へ出てそれから市電に乗るだらうと自分は推定した。つひ今、といふなら何處かで追ひつける、さう思つて自分は走るやうに驛へ引きかへした。

さうして自分は、彼女の後姿を、新宿驛前の廣場で見つけた。こゝで彼女を見つけたことは實は偶然のことであつたが、自分の神經は痛いほど鋭どく働いてゐたので、寧ろ當然のことに思へた。しかし自分はこゝで、彼女に對し名狀しようのない氣持を味はせられた。

九

彼女は片手に手提行李、片手に二つの風呂敷包みを持つて、暮の賣出しで雑踏してゐる電車線路をよろぼりながら踏み越したが、そこで何かに蹴つまづき、彼女の影がだゞつぴろく崩れたかと思ふと、バタリと前へのめつてしまつた。同時に二つの風呂敷包みがころ〳〵と轉げ出した。自分はアツ！と叫ぶ氣持ちで、そこへ走りつかうとした。が、彼女は瞬間に立ち上り、非常に慌てながら、風呂敷包みを拾ひ上げることゝ周圍を見廻すことゝを一しよにした。その樣子は實に悲慘であつた。見てゐられなかつた。自分はもうそこへ寄りつけなかつた。

彼女は、往來の人々の視線が自身の周圍を取り卷いてゐるやうに感じてゐるらしく、小さくなり深くこゞみ、匍ふやうにして近くの電柱の陰まで行つた。そこで荷物を地べたへ置き、更らに小さく深くこゞんで着物の裾の土を拂つてゐる。彼女はさうしてゐながら泣いてゐるだらうと思つた。が、彼女よりも自分の方が泣きたかつた。自分は十五年前から多くの戀する者の心理と同じく、彼女をそこらに歩いてゐる人間共より一段上の世界に置いてその存在に一種のノーブルさを感じてゐた。彼女が如何にみすぼらしくなり賴りない姿になつても、このノーブルさは容易に消えようとしなかつた。そ

れが今、かうした場所でさうした有様の彼女を見せられたのである。それはどう見ても、一個の哀れな惨めな女の存在であつた。自分は手の出しようがない氣持で、またさういふ彼女の姿を自分が見てゐたことを彼女に知らしたくもなかつたので、呆然と廣場の中に立つてゐた。

彼女はやがて恐る〳〵眼をあげて、周圍に見てゐるもののないのを確かめると、荷物を取り上げて人混みの中へ潜るやうに入つて行つた。自分はそこで線路を横切り、彼女のあとを追つた。追分の終點の所で、自分は彼女の肩を叩いた。彼女はギクリとして振り向いたがそのまゝどん〳〵先へ歩き出した。

「おい僕だよ、僕だよ」と自分は人中も構はず大きな聲を出した。

「知つてます!」彼女も高い聲を出した。自分は走り寄つて、手提行李と一つの包みを無理に引つたくり、

「まアこつちへ來てくれ!」と叱るやうに言つて、再び線路を横切り、近くのSホテルの方へ歩き出した。

Sホテルの前で、自分は彼女の近づくのを待つて、

「今晩は、こゝへ泊つてくれない?」と靜かに言つた。

「いやです!」彼女は息を彈ませてかんぶりを振つた。

「さオ怒るな! 僕は今あの下宿まで行つて、それから夢中であなたの後を追ひかけて來たんだよ。大事な話があるのだから、今晩一晩は是非こゝへ泊つてくれ」

そこで自分は彼女の手をぐいと引いて、ドアを押して入つて行つた。二人は三階の一室、窓際に小さな圓卓と二つの出木椅子、それを挾んで灰色の壁際に二つのベットのある室へ通された。スチームも通つてゐず、室内には空家のやうな冷たい空氣が充ちてゐた。そして何となくゴムの匂ひがしてゐた。

「わたし、今晩寢やしませんよ」と彼女は一つのベットを見下しながら言つた。そしてどさりと椅子に腰を下すと、深い

深い溜息をつき始めた。自分はこんなに深い長い溜息を始めて見るやうな氣がした。

　ノックをして女中が茶を運び、小さな鐵火鉢を運び、宿料を請求して、それからドアの鍵穴に合鍵を差しこみ、最後におやすみと言つて出て行つた。

　自分はベットの一つに腰を掛けて煙草をふかしてゐた。暮の街の騷音が妙に淋しい響きで窓硝子をふるはしてゐた。さうして二人はかなり長い間沈默し合つてゐた。自分の氣持は、さつきの往來での彼女の慘めな樣子を見てから、理屈なし彼女を劬はらうとしてゐた。

「どうしても樺太へ行つてしまうのだね？」やがて自分は出來るだけ彼女の神經に觸らないやうな口調で言ひ出した。

「……………えゝ」彼女は不承無承に答へた。

「しかしそれは取り止めにしないかね」

「……………今になつて、いやです。もう切符も買つてあるし、荷物もみんな送つてしまつたんですから」

「切符は無駄にしても構はないから、荷物は送り返して貰へばいゝから」

「そんなこといやです！」

「まアさオプリ／＼言ふな。實はその問題であの後すぐにあなたの所へ行くつもりだつたが、妻が盲腸炎で苦しむ、つゞいて入院して手術を受けるといふ始末で、まるで餘裕がなかつたのだよ。冷淡で行かずにゐたのぢや決してなかつたのだからね」

　彼女は裂さうな表情で自分の方を見て、何か言ひさうにして溜息をついた。

「で、とにかく樺太行は止めて貰ひたいんだ。これから東京でさへ寒くなる一方なのに、何を好んであんな北國へ彷徨して行かうといのか、僕には氣持が知れないよ。まア謂はゞむしやくしや紛れに思ひついたことぢやないかね。そんなこと

で行くのぢや、あんな他國者の寄り集りの所ではとても辛棒しきれないよ。ましてあなたが今考へてゐるやうな金がどつさり取れて樂な仕事は決してありやしないから、行つたその日から幻滅してへたばるに極つてるよ。僕はこの夏に、樺太の活動寫眞の實寫で、オットセイが蟻のやうに無數に海岸に匍ひ廻つてゐる所や、鰊が幾つもの大舟に山のやうになつて積み出される所を見て、樺太へさへ行けば、道端に落ち散つてゐるものを拾つても、人間一匹呑氣に暮せさうに思はれたが、實際樺太へ行つた者から聞くと、いゝ加減な氣持で渡つて行つた大抵のものは、男は乞食のやうになつて野たれ死ぬか、女は淫賣婦になるのが積の山だといふよ。まさかあなたが淫賣婦になるとは思はないが、あなたが今考へてゐるやうな夢は少しもありやしないんだからね。遠い北國、といふ所にロマンテックなあくがれをも持つのだらうが、そんなことは若い文學少女に任せて置くがいゝ」

彼女はもう何も言はうとしなかつた。只肩をすぼめ寒さうに火鉢を抱きこんでゐた。

「考へて見ると、第一そんな北國へさまよつて行かねばならないほどの原因も動機も無いぢやないか。名古屋の良人のことも、もと／＼その良人が藝者と駈落ちをしたり、女中に手をつけたりしてあなたを奴隷扱ひにするところから、いつそ自由な一人になつて人間らしい生活をしたいと、あなたは自分から離縁して來たのでせう。さういふ人にまた未練を起して、揚句が、自暴自棄になるとは今の時代の女のすることぢやないよ。自分の子供に惹かれる氣持はよく解る。それには僕も理屈は言はない。だからあなたは何とかして早く獨立して、その子をこつちへ貰ひ受けるやうにすればいゝ。今度女中に子供が生れたといふなら、あなたの子は女ではあるし、先方は喜んであなたにくれてよこすに違ひないよ。さういふ風に解決をつけて行かうとするのがこれからのあなたの仕事ぢやないか」

と、彼女はキラリと自分の方を見て何か言ひさうにした。

「まア僕の言ふことを聞いてくれ。僕の妻とのことも、それほど氣に病む必要はないよ。僕のことは恨んでゐるが、あな

だのことは恨んでゐやしない。まして夢にまで出てあなたをいぢめるほどの根深い憎しみは持つてやしないよ。只僕があなたとのことを秘密にしてゐるといふのでそれを怒つてゐるのだ。が、これはそのうち凡てを妻に告白して、あなたとも直接會はせもし、出來るだけ正確に了解して貰はうと思つてゐる。告白したつてさう恥かしいことはしてゐないのだからね。さうして公明正大になれば、この問題も自然と解決がつく。これは僕自身の仕事としてさういふ解決をつけるやうに努力する。これで殘る問題はなくなる筈だし、樺太くんだりまで出奔して行く原因も動機も消え去る譯ぢやないか」

「いゝえ、決してそんな簡單に片つくものぢやありませんわ」と彼女はそこで顔をあげ、暗い表情の中にとげ〳〵しいものを含めて言ひ出した「いくらあなたの奧さんだつて、決してあなたの思ふやうにはなりませんから。それはわたしが保證しますわ。さうならないことをあなたもよく御存じだから、今までもわたしの事を告白できなかつたのでせう。告白できない以上は、奧さんの方へは只曖昧にしといて、わたしとのつき合ひの方を絶つより外はなかつたのでせう。わたし、その氣持がよく解りますの、そしてわたしはそれを決して恨みやしませんわ。仕方のないことですもの。只わたしはあなたに去られてしまへば、もう誰一人賴るものがなくなつてしまふの。そしてわたし一人ではとても立つて行けないんです。わたしは十年間の結婚生活で片輪者になつてしまつたのですもの……」

「たとへどうならうと、あなたを見殺しにするつもりは一つもありやしないよ」

「いゝえ、そんなつもりでないたつて自然さうなつてしまひますの。わたしには先がよく見えてゐます。でも考へれば、あなたに賴らうとするのが第一間違つた考へなのですから、わたしはたとへ手足をもぎ取られた不具者のやうでも、生きられるだけ生きて行かうと覺悟を極めましたの。それで、この事はまだあなたに內緒にしてましたが、あなたがあれつきりわたしの所へ來なくなつてから、わたしは一生懸命職業を探しましたの。一度は女店員になるつもりで、三ヶ所も當つて見たのですけど、年が取りすぎてゐるといふ理由でみんな駄目でした。それから今度は思ひ切つて、上野の秋の展覽會場

の女房を赤顔して見ましたの。これもずゐぶん苦心をしてやつと入れて貰ひましたが、一週間ばかり通ふうちひどい脚氣になり、兩脚が膨れちまつてまるで動けなくなつてしまつたの。それからわたしはもう食ふや食はずであの二階に寝てゐましたわ。そして着物は全部あなたの名であなたの行きつけの質屋へ入れてしまひましたわ――その利息は樺太で働いて送つてよこしますから、流さないやうにしといて下さいね――そんなですもの、これ以上東京にゐられよう筈がないぢやありませんか………」

そこまで言ふと彼女は、おゝ寒、おゝ寒、と言つてブル、と身顫ひをした。そして火鉢の火を掻き立て、首を縮めて何か遠くの物音を聞くやうにしてゐたが、また言ひつゞけた。

「別れた良人とのことだつて、あなたには想像もつかない複雜した譯があるのですわ。あの子のことは、場合に依つてはわたしの方へよこしてもよいと先だつて向うからも言つて來ましたから、わたしがさうしさへすれば、それで片がつきますが、わたし一人が食へずにゐる所へ子供を引き取るどころぢやないですもの。たとへ引き取れたとしても、今になつてわたしの子を引き離さうとするその根性があんまり非道ぢやありませんか………そればかりか、わたしはあの人が、あんな女に子供を生ませたかと思ふと、どうしても我慢が出來ませんの。そのことにはわたしはもう意姑地になつてゐるのですわ。あの人と離縁してあらうとなからうとそんなことは關係しませんの。それはわたしでなければ解らない心持ですわ。この心持は親讓りですもの。ほんとうはわたしのお母さんも……」

彼女はそこまで來て躓づいたやうにピタリと口を噤んだが、もう今までの惰性を止め得ないといふやうに、

「わたし、この話は今まで誰一人に話したことがないんですから、あなた絶對秘密にしてゐて下さる？」と恐い顏で言つた。

「大丈夫！」自分は極印を押すやうに答へた。

「ほんとうは、わたしのお母さんもね、今のわたしと同じやうな境遇になつて、そして自殺してしまつたのですよ。病死したんぢやないんですよ。ほんとうは、剃刀で咽喉を突いて死んだんですよ…………」

自分は、彼女の顔を正視できなかつた。

「……わたしこれを考へると、今でも氣が變になりさうです。そして名古屋のあの人を殺すか、自分が死ぬか、そんな氣になつて仕樣がないんです。わたしのお母さんもそんな氣持から自分を殺してしまつたのですわ。お母さんも不幸な結婚をしたのですよ。わたしが生れて誕生も來ないうちに、おととし亡くなつたあのお父さんは、わたし達母子を廣島へ置いたまゝハワイへ行つてしまつたのです。尤もこれはお母さんも贊成の上ださうですが、あとで、あのお父さんは一人の女を連れて行つたことが解つたのです。男つてみんなそんなのでせうか？　それからのお母さんの苦しみやうつたらたかつたさうです。半年もしないうちにまるで氣象が變つてしまつたさうですもの。さうするうち三年ばかり過ぎて、お父さんはその女と二人の子供を連れて日本へ歸つて來たのですよ。これはさすがのお父さんもお母さんに秘密で歸るつもりだつたさうですが、その前に、ハワイのお父さんの知人からお母さんの方へ內通があつたのですつて。で、お母さんは知らん顏して神戸まで出迎へに行つて見たのださうです。するとお父さんは確かに親子四人づれで大きな顏をして棧橋を渡つて來たさうです。……その夜お母さんは一人廣島へ歸へると、寢床の中でわたしを抱いたまゝ剃刀で頸動脈を切つたのです。その時わたしは一番いゝ着物を着せられてゐたさうですから、お母さんはきつとわたしをも道づれにするつもりだつたらしいのです。——わたしもその時さうして殺されてゐた方がよつぽど幸福でしたわ——次の朝わたしは、身體中血にまみれ、ひーひー泣きながらお母さんの血だらけのおつぱいを吸つてゐたさうですの……」

自分は譯もなくベッドから立ち上り、今まで呼吸してゐなかつた樣に一度に幾つもの呼吸をして、今度は反對側のベッドへ行つて腰を下した。

「こんな話、もう止しませうか?」

「いや、最後まで話してくれ!」自分は重いものを力一ぱい支へ上げるやうな風に答へた。

「…………今の話は、わたしが十二の時、その事を書いた古い新聞を見せられて、伯母さんから聞きましたの。伯母さんとお父さんが何かでひどく喧嘩をした時のことでしたわ。お父さんはそれでまたひどく伯母さんと喧嘩をしましたが、わたしはそれを聞いてから幾晩も幾晩も眠れなかつたことをよく覺えてゐます。その頃のお父さんは、その女とも二人の子供とも別れて、少なくも表面はわたしだけを大事に育てゝゐましたが、わたしはそれからといふもの、お父さんにまるでなづかなくなつてしまひましたの。何だか恐くつて寄りつけなかつたのです。そして物心がつくにつれて、わたしは人の心を裏切る者をとてもひどく憎むやうになりましたの。自分に關係のない事でも、さういふ人を見るとのぼせ上るほど腹が立ちましたわ。名古屋のあの人の仕打に對してわたしがこんなに堪らなくなる心も、そんな時代から育つて來たのです。だから今更ら自分にもどうする事も出來ないのですわ。生れた時にそんな血にまみれたわたしの身體はいつまでも淨まらずに、その時の怨霊を死ぬまで宿してゐるに違ひありません。さうして今のわたしの境遇が、昔のお母さんそつくりになつたのですもの…………名古屋のあの人は新川でしよつちう東京へ出て來ますし、時には今の女や子供を連れて出て來るでせうし、そんな時、今晩のあなたとのやうに何處かでひよつくり出つくわさないとも限りませんもの、そしたら今度はわたしが…………何をするか知れやしませんわ。わたしはもうそれだけでも一日も東京やこの近くにはゐたゝまらなくなつたのです…………」

彼女は終りの方を、流れが絶へるやうにほそぼそと言ひ終ると、細かく顫へてゐる手の先をぢつと見詰めてゐた。と、またブル、と肩をふるはし、それからソーツと立ち上つて背後のベツトへ縮まるやうに腹ばひになり、

「わたし、どうしてこんなに寒いのでせう!」と齒の根をガタ／＼言はせながらつぶやいた。それははたら見ても、昔の

芯から寒さに顫へてゐるやうに見えた。しかし自分はそれを只見てゐるよりしかなかつた。しばらくして、「あなた、わたしのからだをおさへてゐて下さい」と彼女は救ひを求めるやうに言つた。

自分は立つて行つて彼女の肩をおさへた。が、それでは應へがないので、彼女の身體を仰に寢かし上から毛布をかけて、その兩手をしつかり持つてやつた。彼女の全身の顫ひは手を傳はつてこつちの身體まで顫はした。

「氣持が惡い？」

「いゝえ、いゝえ……」

彼女は眼をかたく閉ぢ脣を喰ひしばつた。そして今度はこつちの兩手にぎつしりと掴みついた。と、彼女はその手を力一ぱいにゆすぶり始めた。ぐい／＼とゆすぶりながら彼女は何か言はうとした。その言葉が口まで出かかつたのを彼女はまた、手綱を締めるやうにしつかりと締めつけた。それは見てゐる者が苦しくなるほどの努力であつた。

けれど自分は彼女が言はうとすることをはつきりと感じた。それは手を傳つて自分の心臟に響いて來るやうに感じた。

自分はいきなり彼女の手を振り離して、

「あんまり昂奮するな！」と何かを兩手でしつかりとおさへるやうに言つた。

彼女は毛布を頭からかぶつてしまつた。

何十分か過ぎた。彼女は毛布をはぐつて靜かにベットの上に起き上つた。その顏は凄いほど蒼ざめてゐた。その眼は青白く光つてぢつと据つてゐた。見てゐた自分はいきなり彼女の前へ立ち、兩手で彼女の兩頰を包み持ち、

「それで行つてしまはれては堪らない。もつと明るい和らいだ顏を見せてくれ！」と、母親が子供にいゝ顏を強ひるやうに言つた。自分は涙が出さうになつた。が、また強い口調に哀願するやうな調子も含め、全身の熱を彼女のからだに吹きかけるやうに、

「もつと明るく、もつと和らいでよ！」と一生懸命に言つた。けれど彼は同じ顏同じ眼で實に冷靜に、

「濟みませんが、あなたは今夜こゝへ泊らないで下さいね」と言つた。

十

病室は、電燈に青い布がくるまつてゐて、どんよりと青く濁つてゐた。そして五人の患者も三人のつき添ひ人もひつそりと眠つてゐた。自分は忍び足でギプスを持ちこんだ。

妻は、青林檎のやうに青白くなつて、しつとりと眼を閉ぢてゐた。自分は息を殺してそれを見守つてゐた。と、うつすらと白い眼が開いて、

「寒かつたでせう！」と妻は言つた。自分はギクリとした。それで見ると、妻は自分がこの病室へ入つて來る時からちやんと知つてゐたのに違ひなかつた。それにしても、自分が豫期してゐた、うらみ言の代りに、さういふ言葉が出たのに自分は妙な氣味惡さを感じた。妻はその眼で、今夜の自分が今まで何處で何をしてゐたかをすつかり見拔いてゐるやうに思はれて來た。

「手術は、どうだつた？」それを自分は訊いたが、その聲が顫へてゐた。

「……盲腸がね、化膿してすつかり癒着してゐたんですつて。もう四五日ほつといたら、盲腸が破けて、腹膜炎を起し、そして死なねばならなかつたんですつて」

妻はそれを何の感情も混へずに言ふと、またしつとりと眼を閉ぢてしまつた。自分はます／＼氣味惡くなつた。

「ギプスを持つて來たが、遲かつたね」

「さオ、どうも有りがたう」

「手術のあとが痛むか？」

妻は眼を閉ぢたまゝ微かにうなづいた。自分は更らに息を殺して妻の顏を見守つてゐたが、ついに息苦しくなつた。沃度フオルムの匂ひが急に眼にしみて來た。自分はゐたゝまらず、立ち上つて廊下へ出た。長い廊下を三遍ほど往復して妻の傍へ來ると、

「電車がなくなりやしませんか？」と妻は言つた。

「俺は今晩はこゝへ泊るつもりだよ」

「いゝえ、看護婦さんが來てくれますから」

自分はまた廊下へ出た。窓を開けてほてつた頭をしばらく外氣に當てた。そして再び妻の傍へかへつた。妻はもう何も言はなかつた。眠つてゐるのか覺めてゐるのか、身動き一つせず深く靜かに眼をつぶつてゐる。それはどの點からも、傍にゐる自分とは全くの沒交渉の存在であつた。沒交渉どころか、自分の眼の及ばない遠い世界に離れ去つてゐる存在のやうに見えて來た。

十一

自分に對し沒交渉である妻の心は、退院の後もそのまゝであつた。二週間の豫定が四週間になり、自分達は病院で年越しをして、そしてやうやく退院できたのであつたが、その間にも妻の氣持には一度の變化もなかつた。妻は相變らず、ぎつしりとギプスに寢たまゝ白眼で自分を睨むやうにして暮してゐた。

「お前の心はさうして何處まで彷徨つて行くのだ。あの女はね、もう一ト月も前に、樺太の方へ行つてしまつたよ。俺の今の心は最早何ものにも囚はれてゐないのだよ！」自分は、遠く離れ去つて行く妻を呼び返すやうなつもりで言つた。

「そんなこと、どうだつて構ひません」妻は只さう答へた。自分はさういふ妻を見て、却つて自分の指に噛みついて來た當時の妻を今更らのやうに思ひ出す氣持になつた。同時に今は只、それに手のつけやうもなく只呆んやりしてゐなければならない自分を顧みずにはゐられなかつた。

呆んやりしてゐると、樺太へ去つた彼女の姿も遙か遠くに見えて來た。が、彼女も自分の方には背中を向けてゐた。

「おい、さう鬱ぎこんでゐちや仕様がない。寢てゐるばかりが藥でもあるまい。氣晴らしに正月の銀座へでも行つて見ようか。活動を見ようか、それとも芝居の方が呑氣かな、とにかく出て見よう」

「何處へも行きたかありません」

「さァ頑固になるなよ。俺だつて堪らない。カリエスに觸らない程度で、これから毎日賑やかな所へ出て見よう。こんなことをしてゐたら俺達は窒息してしまふよ。さア出よう！」

自分はこれを一生懸命に言つた。そして妻を無理にギブスから起した。妻は着物を着がへながら頼りなくよろぼつた。

少し無理かな、と自分は思つたが、やつぱり連れ出した。もう夜になつてゐた。

新橋から尾張町まで歩いて來ると、妻は、詰らないから家へ歸る、と言ひ出した。

「それぢや、淺草がいゝ、震災後の仲見世は見違へるやうになつたぞ、素晴らしい世界だ！」さう言つて自分は妻を無理に、乘合自動車に乘せた。

目に痛いほどの明るい仲見世の灯の中を歩きながら、自分は妻の欲しいものを何でも買つてやらうとした。が、妻は、子供がほしがるやうなものばかりだと言つて、そつけなく歩いてゐるだけであつた。

活動街へ來て、喜劇大會をやつてゐる館へ妻を連れ込んだ。三十分ほどすると、妻は背中が痛み出した、それにお腹の手術のあとも痛み出し息がつけないほどだと言ひ出した。

すぐ外へ出て、カフエーへ寄つて休んだ。が、妻は何も食べようとせず、テーブルの上に突つ伏してゐた。そこを出ると自分は妻の片腕を釣り上げるやうに持つて乗合のある所まで行つた。

上野驛前で乗合を降りた。そこから省線へ乗るつもりで、ガードの下まで來ると、妻はお腹をおさへて、そこのコンクリートの柱の下へ蹲つてしまつた。考へて見ると、妻は七ケ月もギプスへ寝たきりの生活をしてゐたのであつた。さうして最近一ト月位容易に癒らうとしない手術の傷を癒すため、病院のベットから離れずにゐたのであつた。さういふ身體の妻をしかもこの厳寒の夜に、こんな所まで連れ出した自分が悪かつたのだ。

「冷えたのが悪かつたのだね、ひどく痛むなら何處かこの近の宿屋へ泊らうか」と自分は詫びるやうに言つた。

「宿屋なんかいやです！」妻は苦しさうな聲で、自分の氣持を撥ね除けるやうに答へた。

「それぢや我慢して早く家へ歸らう」

「家へ歸るのもいやです！」

「ぢや何處へ行つたらいいのだ？」

「…………」

何處へ行つたらいいのだ？さう自分にも言つて見て、呆然と立つてゐると、實際自分にも行く處がないやうな氣がした。

「おい、そんなことをしてゐたら死んぢやうよ！」

自分はいやがる妻を無理矢理に抱き上げ、背中を向けてぐいと背負ひ上げた。その身體は凍えたやうに冷たく固かつた。さうして自分は冷たい風の吹き通る暗いガード下の道を、醫者の家を探すためよろ〱と歩き出した。歩き出すと、何だかあのギプスをも背負つて歩いてゐるやうな氣がして來た。そのギプスが頭の上から例の不吉な影を眼の前に投げかけて、自分達を果しの無い闇の中へ紛ひ込ませさうに思はれてならなかつた。（完）

苦鬪

葉山嘉樹

（一）

警察署の隣は消防署になつてゐて、火の見櫓からはホースがブラ下つてゐた。警察の前は大通りで、消防署の横で、電車通りと大きな十字路になつてゐた。

電車通りの裏になつてゐて、警察前の大通りへ、直角に路次がついてゐた。そこから、警察の門内が見えた。その路次は肥料汲取りや、塵埃集め以外には、殆んど出入りのない三尺幅位の路で、その幅の半分位は、下水の蓋が續いてゐて、そのまた蓋が所々引つくりかへつたり、壊れたりしてゐた。

山野歳夫は、もう三日前から、その路次の奥で朝早くから夜晩くまで、猫のやうに薄暗がりで眼を光らしてゐた。

その日は薄ら寒かつた。朝から日が射さないだけでなく、時々パラパラと雨が落

ちて來た。トタン板の扉には悪い腫物の跡でもあるやうな、雨の跡が消えなかつた。
警察の通用門は、電車通りの方へ、洋食屋と雜貨店の間に、一間幅位でついてゐた。
その電車通りの向ふ側の人道には、三日前から廣田とめ子が、絶えず通用門の方に眼を配りながら、二つ位の男の兒を負ひ、六つ位の女の兒の手を引いてブラブラ行つたり來たりしてゐた。
彼女は二十五才位の丈の高い女で、大きい美しい眼を持つてゐた。その眼は美しくはあつたが、淋しい光と、怖とで異様に光つてゐた。
雨が、時々パラパラ來るので、その日は人出も尠く、從つて人目にも立つので、いつもよりはズッと遠くまで行つて、傘を半開きにして、並木に凭つかゝりなどしてゐた。しかしその美しい眼は、警察の通用門から決して離れなかつた。子供は、晝でも暗い裏長屋にゐるよりも、人通りのある、街へ出る事を喜びはしたけれど、二日も三日も、一つ景色、一つ處へ、立つたり、ブラブラ歩いたりする丈けで、活動にさへ入らないので、怠屈し切つて、絶えず、ムヅかつてゐた。
彼女は上の子をあやしたり、下の兒に乳を飲ましたりを、街頭でしなければならなかつた。
路次の中に蹲んでゐる山野は、押送馬車が必要でさへあれば一日に幾度でも出るには出るが、然し、大抵は午后になつて一度と、午前に一度出るものだと云ふ事を知つてゐた。
もう、廣田敏夫たちが擧げられてから、その日は三日目の午后であつた。そしてその間に押送馬車は六七回、檢事局へ通つた。然しその中に、廣田たちが入つてゐたとは、どうしても考へられなかつた。
山野は禿げ殘つた後ろ頭の毛を、引つ掴みながら、空を眺めた。
『これで、雪にでもなりやあ、世話あねえや。』と彼は考へた。
『廣田たちは五人だ。ところが馬車の箱は四つ切りない。一人はどうしたつて、護送巡査と一緒に、護送台に立つて行く

に相違ない。そんなのは一度も通らない。事に依ると二度に分けて這つたかも知れないな。だが、俺たちの張つてゐることを、まさか氣がついてやしまい。それとも、俺が見落したのかも知れないな。だが、とめちやんまで一緒に見落すこともあるまいて。』

人を待つたり見張つたりする場合、誰の心にでも絶えまのない、疑惑の念がうるさくつきまとうものだ。その想念のために、路次の中では山野が、並木道では廣田とめ子が、此三日の間に、瘠せるほど惱んでゐた。

山野の女房のよし子は、ガランとした店の間から通りを眺めてゐた。彼女は七つになる男の子と、生れ立てのホヤホヤの乳呑兒とを抱へて、亭主の山野の事を苦に病んでゐた。

山野とよし子とは、どつちも三十よりは四十に近くなつてゐて、一日に三遍以上は喧嘩をする習慣になつてゐた。

山野が何かで癇癪を起して、茶碗でも薬罐でも投げ初めると、よし子は早速立ち上つて、碌に入つてもゐないビール箱の空箱の中から、丼、鍋、箸箱、ビールの空瓶、等々を、「山野の周圍へ並べ立てるのであつた。それには理由があつた。自分の横つ面を打ん毆られるよりも、丼や鍋の壞れる方がいいからと、も一つは、自分の周圍にガラクタが一杯並んでるのに氣がつくと、山野は投げる事を止めるからであつた。

『何だ、馬鹿にしてやがら。おめえ、そんな戰術を一體、誰に教はつたんだい。飛んでもねえ話だ。大損害だ。』

そう云つて、山野はコソコソ土間へ下りて、痛快に叩きつけた丼や、茶碗などを拾ひ初めるのだつた。

二人が、そんなにのべつに喧嘩をするのは、適切な反抗の對照が手近にない事に起因してゐた。

『米が無い。』

と、女房が云ふと、山野はいきなり、森永のビスケットの大罐を、土間に叩きつけた。然し、米櫃の代用をしてゐる、ビスケットの空罐は、米を産み出さうと努力もしないで、ガラン、ガランと庭でペシヤンコになる丈けだつた。

ところが、廣田敏夫たちが擧げられてからは、二人は喧嘩を止めてしまつた。第一そんな暇が無かつた。山野は朝から晩まで出かけてゐたし、よし子は根限り状袋を貼つてゐたからだ。状袋でも貼らなければ、自分たちは未だ何としても、子供たちが乾上らねばならなかつたし、それに、のべつに指を使つてゐる事と、眼を使つてゐる事によつて、彼等の絶望的な生活の穴を覗くことを、暫らくはボンヤリと遠のけて呉れるからであつた。

一ケ月の後をさへ貧しい者は思ひ煩らうものだが、山野にしろ廣田にしろ、彼等はその日を思ひ煩はずには生きて行けなかつた。

――爾等思ひ煩ふなかれ――

と、クリストは云つた。勿論、思ひ煩つたところで、ただそれ丈けでは飯が湧いて出るものではなかつた。然し又、それだからこそ思ひ煩ひもしなければならなかつた。

今、食ふ事のために、正確に云へば、消化液が、胃壁や腸に對して與へる刺戟のために、生理的に思ひ煩ふ必要のないのは彼等の間では擧げられて官費で食つてゐる、廣田たち五人の同志だけであつた。

よし子は、状袋から眼をたそがれの街に移した。眼に入る限りの電柱、工場の塀、うどん屋の破目板、のどこにも、種種雜多なビラがベタベタと貼りつけられてあつた。縣會議員候補者のや、賣り出しのは、何色かで色刷りにされ、廣田たち五人がそのために檢擧された、勞働爭議の演說會のビラは、ザラ紙に筆でベタベタと書かれ、デパートの樓上で開かれてゐる、西洋畫の展覽會のビラは、ピンで止められて、夕風に顫つてゐた。

朝つからの生暖かい風は急に冷えて來た。そして、雨の代りに、時節外れの雪がチラチラ飛んで來た。

よし子は、十五年間山野と暮してゐる間に、四度亭主が工場で馘られたのを知つてゐた。そのたびに、何故こんな事になるのかを山野に聞いたが、どうしても飲み込めなかつた。それはその筈であつた。山野自身さへ委しくは解らないから

であつた。

新聞紙上に、銀行業者が『重大なる會議を終へて』退出する寫眞が載つてゐたり、大藏大臣がどうだと云つて、大袈裟に書き立ててはあつたが、そんな事は、餘り、よし子にとつては緣遠い事であつた。まして、そんな事と、自分の亭主の骨だらけの背との間に、何かの連がりがあらう、などとは更に思はなかつた。

困るのは、亭主の山野が、いつもの年甲斐もない癇癪から、爭議團なんかに首を出して、鹿田たち見たいに捕まりはしないか、どうもやりかねない『うちの人は向ふ見ずだから。』そんな事にでもなれば、別に口を探す事まで出來はしないのだつた。

『毎日毎日、口を探すなんて云つて、朝から晩まで家を空けてゐるんだけど、何をしてるんだか解つたものぢやない。』

と、彼女は思つてゐた。彼女は、體からすつかり力が拔け切つたやうに、暫くボカンとしてゐた。

と、表にドヤドヤツと人の足音がして、急に彼女の家に驅け込んで來た。

見ると、三人の職人風の絆纏着の人たちと、直ぐ傍の交番のお巡りさんであつた。そして、絆纏着の一人が、水浸りのする氷囊のやうに、濡れてダタダタになつた、辰夫を抱へてゐた。そして、職人の腹がけからは滴が傳つて、半ズボンから地下足袋まで、ズブ濡れであつた。

『お前さんとこの子供だらう、此子は！』

とお巡りさんが云つた。

もうその時は、よしはいきなり辰夫に飛びついて、その額に頰を押しつけて、オイオイ泣いてゐた。

辰夫は、死んではゐなかつたけれど、もう泣く事も出來ないと見えて、ゼーゼー喉を鳴らしながら、小さい肩で息をしてゐた。

『駄目だよ、こんな小さな子を一人で遊びに出しちや。もう、すんでの事でトンネルの中へ流れこむ處だつたよ。よく此人たちにお禮を言ひなさい。』

とお巡りさんが云つた。

よしは、辰夫の着物を脱がせながら、しつきりなしに涙をこぼしてゐて、口が利けなかつた。

ウ、ウ、ウー、と、泣きじやくりながら出鱈目に頭を叩げる丈けであつた。

隣りの、お婆さんが入つて來て、いきなりよしを叱り初めた。此お婆さんは、自分は二階の四疊半に閉ぢ籠つて、殘りの三つの室を皆人に貸して、屑屋を情人に持つてゐた。

『何と云ふ、まあ、ほんとに私なんか、子供が一人欲しいと思つて、どんなに骨を折つてるか知れないのに。まあ、お前さんは、七つにもなつた男の子を殺さうなんて！』

巡査は、お婆さんに靜にするやうにと言つて、家の前の群集を追つ拂つて歸つて行つた。

お婆さんは、巡査と職人たちを送り出して、自分の部屋とよしの家とを、鼠のやうに走り廻りながら、炬燵を辰夫の足の下に入れたり、お粥を拵へたりしながら、全でその動作に音樂でも添ふるやうに、口から出委せによしを叱りつけた。

『お前さんの亭主つたら、どこをブラブラほつつき歩いてるんだい。御覽、雪が降り出したぢやないか、お彼岸すぎに雪が降るなんてたゞ事ぢや、ありやしないよ。ほんとに。辰夫でも殺したら、誰が何てつたつて、このわたしが承知しないよ。どこへ行つたんだよ。じれつたいね。お前さんのおやぢつたら。あい奴、頭の毛が禿げたと思つたら、顎の方へ下つたんだよ。稼ぎ人のくせに顎髯なんか生やしてさ。あんなのが存外助平なんだよ。駄目だよ、お前さん。氣をつけなけや。』

よしは、兩手で辰夫の尻をしつかり抱いて暖めながら、お婆さんの云ふ事など耳に入れないで、辰夫の小さな顔に血の

氣の甦つて來るのを、眼の力で堀り出さうとでもするやうに、瞶めてゐた。

お婆さんは、炬燵を入れてしまふと、今度は乳呑兒を背つて、お粥の下の火を、自棄に團扇で煽いだ。

『どうしたんだらう。ほんとに、うちのおやじは。』

とよし子は、辰夫の可愛いい口の中を、手拭で拭きながら言つた。小さい唇の色は紫色になつてゐた。

（二）

路次の奥に踞つて、火のやうに一つ所に目を注いでゐる、山野の頭や肩に雪が落ちて直ぐに溶けた。

破目板には、噛んで叩きつけた紙に似た霙雪がペタペタくつついた。

愈々、寒さと、首に打つつかる雪とに辛抱がし切れなくなりかけた時、とめ子が上の兒の手を曳き、雨傘で警察の方へ姿を隱しながら、路次の前へ來て眼で會圖をして引きかへして行つた。

山野は反射的に立ち上つた。胸が慌てて高鳴りを初める。死んだ蛙に電氣でも通じたやうに、手足の筋肉がブルブルに震へるのを、どうしても抑へ切れなかつた。

『出て來たのかな。それとも送られるのかな。』

そう云ふ風な疑問が一粒の霙のやうに、彼の頭を掠めて過ぎた。彼はリボンの千切れそうになつた中折帽を、禿げ頭に戴つけると、鍔をグッと引き下げて、眼ばかりギロつかせながら、ヅカヅカと警察の正門の大通りへ、出て行つた。顎髯は首卷で見事に隱してゐたから、誰だつて眼丈けで彼を發見する事は出來なかつた。

通りへ出ると、電車の停留場の「安全地帶」の上に、廣田とめ子母子の姿を見付けた。

二人は電車を待つ二人の乗客のやうに、顔を平行して、警察の正門の方を瞶めながら、並んで立つてゐた。

『山野さん。食事をして來て下さいな。私が見てますから。』

呟くやうに彼女は言つた。

『いや、未だ大丈夫ですよ。それより今日は大抵送られるか、出されるかどつちかだと思ひますよ。もう暫く待つてゐませう。』

『駄目よ。今までだつて、警察からそのまゝ歸つた事なんてないんですもの。』

『然し、………』

山野は言葉が出なかつた。

その時、ガラガラ、ワザとそんなに騒々しく鳴らしでもするやうに、鐵の轍の高い響を兩側の商店の硝子窓に打つつけながら、警察の正門から、押送馬車が、瘠せた骨だらけの馬に曳かれて出て來た。それは音こそ高かつたが、そんなに早く走りはしなかつた。

山野と、とめ子とは撥かれたやうに、馬車の方へ突き進んだ。

汽車の日覆窓のやうな、鐵窓の中からは中聲で何かの歌聲が、その隙間から直かに道路の泥濘に落ちた。

馬車の後ろの台には、押送巡査の手に綱の一端を握られて、腰繩を打たれた廣田敏夫が立つてゐた。

三日の間に、その髭は稀に延びて、肩の肉が少し落ちたやうに見えた。編笠は撥ね落したと見えて、巡査の手に握られてゐた。

巡査は、廣田の耳の側に口をつけて、何か頻りに口説いてゐるやうに見えた。きつと、編笠を被つて呉れ、と云つてゐたのであらう。が、廣田は默つて、ニヤリと笑つたまゝ、肩で顎の邊をこすつた。中途半端に延びた髭が痒ゆかつたのであらう。

山野と、妻のとめ子と子供たちが、雲の中に傘もさゝないで自分を見送つてゐるのを、廣田は馬車が洋品屋の角にさしかゝつた時に、見附けた。

山野は帽子をとつて、襟首を引つ掴んで、廣田を凝視してゐた。とし子は、涙の溜つた眼で、一刻一刻遠ざかつて行く夫の姿を見詰めてゐた。

廣田は、縛られてゐるために兩方が一尺とは離れない、兩方の手を揃へて、左のポケットに手を突つ込んだ。そしてその手から、ヒラリと白い紙片が、泥濘に舞ひ落ちた。

山野と、とめ子とは直ぐにそれを見た。

とめ子は、驅け出したために涙が振り落ちた。子供が取り殘されて泣き喚いた。山野は、――後で困つたたらう――帽子を泥濘に叩きつけると、彼の鐵で出來でもしたような胸を、握り固めた拳固で、力一杯毆つた。と同時に、叩き出されでもしたやうな鋭い叫びが彼の胸から迸つた。

『丈夫で勤めて來い！』

廣田は馬車の上で深くうなづいた。

そして再び、彼は兩方の手をポケットに突つ込んだ。

赤い撒ビラが、泥濘の路上に落ちる迄の間を、赤い雲のやうにヒラヒラと舞つた。

押送馬車と知つて、物珍らしさうに囚人の顏を見ながら、その後を追つかけてゐた、酒屋や八百屋の自轉車小僧たちが、巧みにビラを受けとつた。

とめ子は泥濘に落ちた紙片を砂混りの泥ごと拾つて、大急ぎで開いた。が、それを讀まうともしないで、又、片つ方の掌に握りしめながら、泣き喚く子の方に、後ろ向きに手を出して、遠ざかつて行く夫の姿を瞶めた。

馭者は護送馬車から「急げ」とでも云はれたと見えて、痩馬の尻に滅茶苦茶に鞭を叩きつけた。

とめ子は失神したやうに、夫の姿を見送つてゐた。兒供が火のやうに泣き喚くのも、その袖や手をやけに引つ張るのも、通りすがりの人たちが、堰き止められた水のやうに、溜つて物珍らしさうに眺めてゐるのも知らないで、立ち竦してゐた。

彼女は、夫を刑務所に送るのが初めてではなかつた。だから、彼女は馴れてゐた。だが『馴れ切る』ことの出來る事柄ではなかつた。それは、飢餓に馴れ切る事が出來ないのと同じであつた。

廣田が、突然今度やられる前に、彼女と夫と話した事があつた。

『今度、あんたがやられるやうだつたら、わたしもやられるわ。』

と、とめ子が云つた。

『どうしてさ。何をしてやられるんだい。』

『演說でも、ビラ撒きでもやるわ。』

『それでやられなかつたらどうするんだ。』

『やられるまでやるわ。』

『そのうちに食へなくなつたら、どうするんだい？』

『さうなりや仕方がないから、ワザと見附かるように萬引きをするわ。』

『何を萬引きするんだい。』

『子供の食べられるやうなものを。』

二人は、默つて涙ぐんだ眼を見合はせた。

『子供が可哀想だ！』

と、廣田が云つた。そして、その時は、これ以上話が進められなかつた。

馬車は一丁許り走つて、曲り角を曲つてしまつた。

假死の狀態から甦りでもしたやうに、とめ子は自分に歸つた。

霙は彼女の髮、乳呑兒の頭、上の兒の頭を飴湯でもかけたやうに、グチヤグチヤに濡らしてゐた。

送られる夫、殘された妻、それは全く、同じ此地上に起る、現實の二つの事實とは思へなかつた。

パンを求める人間の本能が「罪惡」であらうか！

正しく、それは現在では、プロレタリアートに「罪惡」であると、あらゆる機會に數へ込まれてはゐないか！

『行かう。』

山野が、上の子の手をとつた。

『いやだ、いやだ、かあちやんと行くんだあ。』

と、とめ子の腕にブラ下りながら、女の兒が再び喚き初めた。

『サア、かあちやんも行きますよ。ね、行きませうね。』

とめ子は、さう云ふと、その小さな手を、今度は痛さの餘り泣き出す程、强く掌中に握り締めて歩き出した。

此不思議な母子が動き出したので、それに好奇の眼を見張つてゐた群集も、ノロノロと動き出した。

陰慘な空と、白くもない霙とは、灰色の夕暮を猶更ら濃くした。

人々は、急いで歸らねばならぬ用事も忘れて、口々に何か囁き合ひながら、二丁許りも彼女たちの後を隨いて行つた。

が、暗が段々薄らぐやうに、その人々も、三丁、四丁と過る中に、減つてしまつた。

明るい、廣い通りから、暗い、淋しい小路へと、彼女たちは歩いて行つた。

彼女に手を曳かれてゐる、女の兒はその小さい素足も、その下駄も、その着物の裾も、泥濘から引き上げたやうに、どろんこに濡れて、寒さに震へてゐた。

そして、飢と寒さと、休息とを絶えず母親に泣いて訴へた。けれども、彼女は自分の家に歸るまでは、燒芋さへ買つてやる事が出來なかつた。

『兎に角、私のうちまで行きませう。』

山野が、無理に冷靜を裝つた聲で云つた。彼も、さつきから、泣いてゐたのだつた。四十に近い、髯むぢやの男が泣くつて法はなかつた。が、彼は常識に反いて、涙を咽に流し込んでゐた。彼は、憤りの辛い涙を腹一杯に溜めやうとでもするやうに、さつきから泣いてゐたのだ。

『ええ。』と、とめ子が云つた。『これ何て書いてあるんでしよう。』

『さうでしたね。』

山野は、とめ子から廣田の投つた紙片を受けとつた。だが、それは泥濘で黒く濡れた上に、片手で餘り力強く握り締められてあつたので、擴げれば破れる丈けであつた。

『駄目ですよ。迚も今、讀めませんよ。眞つ黒になつてて、おまけに擴げたら破れちまひますよ。私んとこへ行つて、バケツにでも浮かして洗つてからでなけりや、迚も讀めやしませんよ。』

『ええ。』

とめ子は山野の返事も、ハッキリとは聞けないやうに見えた。

彼女の體の中に流れる血は、一滴一滴が、云ひ表すことの能きない苛ら立たしい、そのくせ掴み處のない、暴風雨の暗

夜の下に流れる黒潮のやうに、渦巻き逆立つてゐた。

それは呪であつた。憎しみであつた。憤であつた。悲しみであつた。いぢらしさであつた。

數千の勞働者の飢えた姿。

重役と株主の姿。

演壇で一言をも發する事が出來ないで、拳を振り上げたまゝ卒倒する爭議團員の姿。

勞働者の老いたる、病める母、その妻。

泣き叫ぶ子供たちの群。

飢えた、爭議團員の家族たちの群れ。

それ等の姿が、ハッキリと纏つた一つの形にならないで、流れて生れる子供のやうな、苦しい、痛い、やるせない姿で、彼女の體軀を狂つたやうに驅け廻つた。

とめ子は兩側の小さな商店を見なかつた。

子供の事も、頭の角を掠めて落ちる一滴の雫であつた。夫の押送された事も、曾て誰かに聞いた他所の出來事のやうであつた。

町の雜音や、店先に光る電灯や、場末の洋食屋から流れ出る油の匂ひや、冷たく頬を掠める時節外れの雫などは、彼女を現實に立ち歸らせはしなかつた。

彼女は、自分の頭に出來た、丁度その腦門ほどの大きさの腫物を、覗き込んでもゐるやうに、眼を、傘の一本の骨に釘付けにしたまゝ、ヨロヨロして歩いた。

背中の兒は靜に、無心に眠つてゐた。

手をひかれた子供は、そのブラブラした方の手を、まるで赤餅のやうに凍えさせながら、ありとあらゆる、飲食店の前で、彼女がその叫喚を理解したならば、慌てて口を閉がずにはゐられない程、怒鳴つたり泣いたりしてねだつた。そして遂々、ある巴焼屋の前で、母の手を振り切つて、泥濘の中へ座り込んでしまつた。

それでも彼女は『何故子供が泥の中へ座り込んだか』理解し得なかつた。

『いい子、ね、いい子だからもう少しお歩き。』

さう云つたまゝ、彼女は娘の方へ手を『じつ』と、いつまでも延してゐた。

山野は、泣き叫ぶ子供を泥濘の中から起した。背中の上で撥ね廻つたり、泣き喚いたりするので、自分も一緒に喚き、跳ね上りたいのを押し堪えながら、しつかり負つて歩かねばならなかつた。

山野も、とめ子も、子供も、一日中の泥濘中を這ひ廻りでもしたやうに眞つ黒く泥で彩られて、異様な臭氣を發散しながら、山野の家へ着いた。

（三）

山野の家では、辰夫は生きるとも死ぬとも見當のつかない狀態に、ブラ下つてゐた。

よし子は、子供があの世へ旅立つのを抱き止めようとでもするやうに、そんなに強く抱けば猶更ら辰夫が息苦しいだらうのに、力一杯抱き締めてゐた。

お婆さんは、赤ん坊を負つて、表へ出たり裏へ行つたり、辰夫の顏を覗き込んだり、そして出鱈目に叱言を言つたりして、セカセカ狹い家を、ガタピシ鳴らしながら歩き廻つてゐた。

醫者は、近くにいくらでもあつたが、それは山野歲夫一家には、素人よりも惡かつた。何故かならば、呼びに行つて

も『居ない』と云ふに決り切つた事だつたから。

だが、遠い處に一人加藤と云ふ醫者がゐた。此人は勿論來て呉れて、その上、都合によれば小遣を置いて行つて呉れる。その上、その人自身が迚も貧乏な醫者であつたのだが、『子供が死なうと云ふのに、醫者も呼びに行かないオヤジつてものが、世の中にあるかい。あたしなんか、こんな婆さんだけれど、子供でもあつたら、醫者の首つ玉を、指で摘んで連れて來るのに、じれつたいねえ。なんてまあ、なんて。だからあんな顆將なんか生やしちやいけないつて云ふんだよ。畜生！歸つて來たら、何より先に、あたしや、あの顆將を鋏でチョン切つてやるから。いいかい、聞いてお置き。大體、お前が悪いんだよ。あんな働きのない亭主に、顆將なんぞ生やさしとく、譯がないぢやないか。』

と、婆さんが喋舌りまくつたやうに、まさか、『首つ玉を摘んで來る』譯にも行かなかつたし、それにその場合、人もなかつた。

山野が、廣田の上の子を負つて入るが早いか、婆さんはいきなり怒鳴りつけた。

『ど、ど、ど、ど、どこへ行つてゐた！。此、碌でなし奴！　自分の子供を殺しといて、他の子を拾つて來る馬鹿があるか！　辰夫は泥漬けになつて死にかけてんのに。』

だが、婆さんは、山野の後ろに蹤いて、赤ん坊を背負つたとめ子が入つて來たので、默つた。

婆さんは、山野も、その蹤いて來た女も、さつき泥から拾ひ上げられた辰夫と同じやうに、ビショビショに濡れて、泥んこになつてゐるのに愕いた。

『マア。今日は何て日なんだらう。町中が泥川になりでもしたやうだよ。どいつもこいつも泥だらけだ。どれ、お前さんも、子供が殺したいのかい。何て、今の若い者は、自分の生んだ子を大切にしないんだらうね。仕様がないよ。あたしや、二人も背負(しよ)やしないんだよ。まあ、お前さん。早く、卸さないかい、その子を。その子だつて死ぬよ。あゝ、まあ、

何て情ない世の中になつたもんだらうねえ。』

婆さんは、とめ子のねんねこの帶を解いてやつたり、山野が卸した女の兒の着物を脱がせたり、辰夫の着換えを女の兒に着せたり、スピードのついたベルト見たいに、そこら中を走り廻つた。

山野は、辰夫の紫色の唇を見た。息子を抱いて失神したやうになつてゐる女房を見た。

『俺は、加藤さんに行つて來る！』

そう叫ぶと、彼は、靴も履かないで驅け出した。

電車は、ラッシュアワーの混雜であつた。勿論、彼が驅けるより、電車の方が速かつたに違ひない。だが、彼は電車を待つ間が、堪え切れなかつた。停留場で必ず止る電車が厭はしかつた。

彼は狂氣のやうに驅けた。

汽車や、電車の前方に雪が積るやうに、彼の額、胸、足の前に、寒が邪魔をでもするやうに打つ衝つた。心臟も彼にすつかり同情しでもしたやうに、當然、胸苦しくなる筈なのに、反つて彼を鞭打つやうに鼓舞した。

『驅けろ！

驅けろ！

子供たちは明日の時代だ。

明日の時代を生かすために、

俺は死ぬまで驅けるんだ！』

とでも言つてゐるやうな姿で、山野は驅けた。その勞働者に不似合だと云はれる顏の無精髯が、颯爽として夕闇に、寒と交錯しながら靡いた。

街行く人々は驚いて彼を打見た。

だが、もう彼は疾風のやうに、十間も向ふの夕闇に消えてしまつた。

山野の妻も、廣田の妻も絶えず罵る婆さんも、八釜しく泣き叫ぶ子供たちも、暗い電灯の下に集つてゐた。

それは、無上に騒々しく八釜しかつた。冷靜な人ならば逆上する程、騒しかつた。廣田の子は最大の聲で飢を訴へた。婆さんは『八釜しい』と云

婆さを叫んだ。赤ん坊は、とめ子の出ない乳に吸ひついて癇癪を起して、切るやうに泣いた。

つて、『子供たちを、今の者は揃つて粗末にする』と云つて、絶えず喚いた。その婆さんの背中では、山野の赤ん坊が他の

子供の泣聲に喚かされて、合唱した。

だのに、誰も、全で、死に神に首筋を掴まれでもしたやうに、寂しく心細く、顫へてゐた。

それは、『哀しみの曲』のやうに、直かにその人たちの胸に響いた、絶望はどんな騒がしい、又は賑かな中にあつても、

人の心を墓場のやうに淋しくした。

山野の女房も、廣田の女房も、泉のやうに湧き出る涙の顔を見合せて、嗚咽の聲を魂に泌み入るやうに呑み込んだ。

やがて、加藤さんと山野とが歸つて來た。

そして、山野が、少しの隙を見て、洗つて火鉢で乾かした、廣田敏夫の秘密な手紙を、皆で見た。

それには、辛うじて讀める次の文字が、泥に汚されて現れた。

『鬪はねば、妻子を飢えしめる。

鬪へば、妻子を飢えしめる。

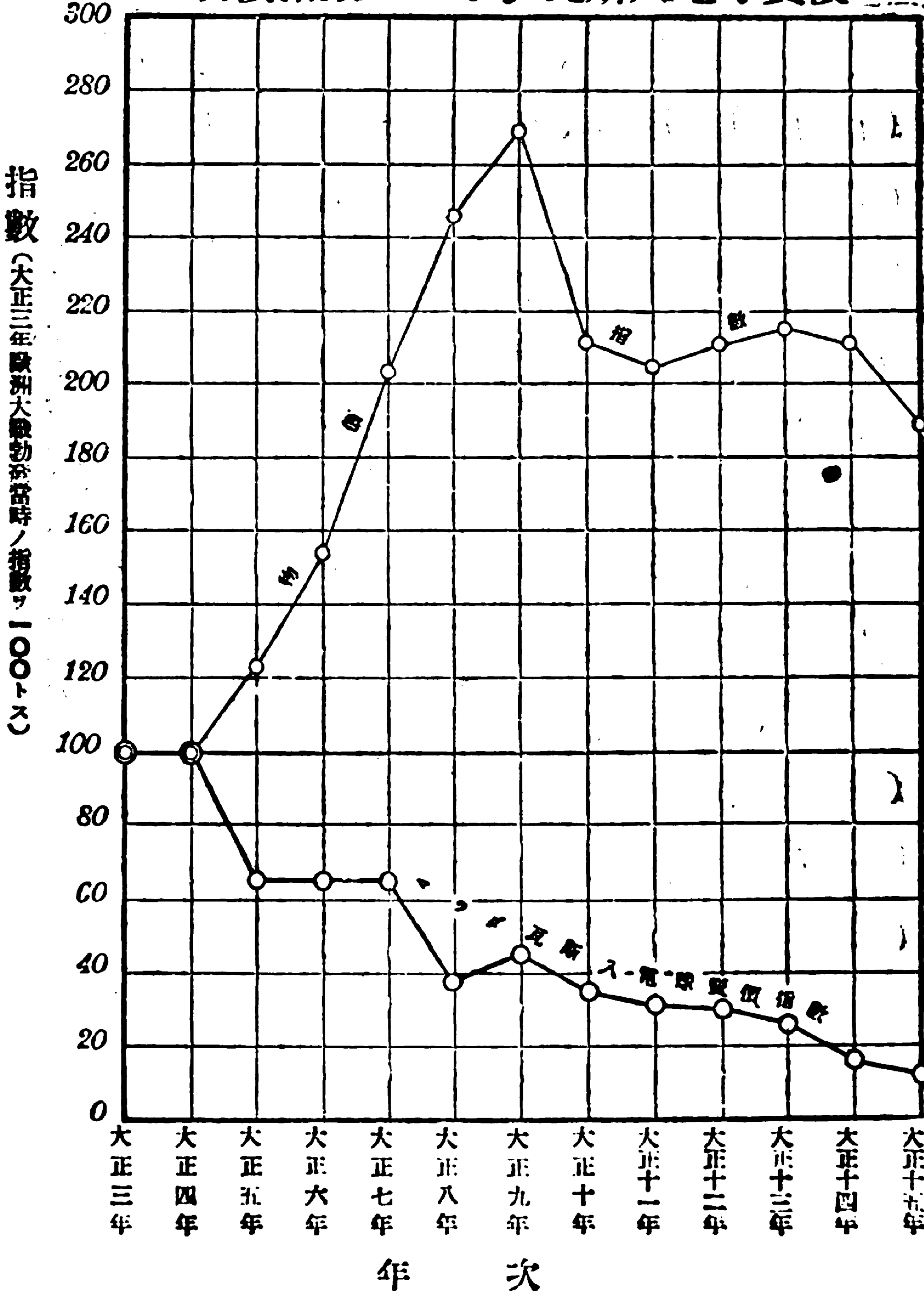
どちらにしても、俺たちの現在は飢餓なのだ。

僕は、絶望よりも、希望を取る。
光りは、今ではない。だが、光りを得るまでは、絶えず闘ふのだ。
妻子、老母を思へば、胸が痛い。
だが、だからこそ闘ふのだ。
遺すのは、最善以外にない。
『同志よ！　闘へ。最後まで！』
暗い電灯の光の下に、その紙片を、村は默つて口めゐた。
子供までも！

——一九二七、四、七、——

マツダランプの社會的貢献

物價指數トマツダ瓦斯入電球賣價



婦人

世 少女 選

公論

文學界集

(六)コーカサスの四人…レオ・トルストイ
(七)ボオシスとファイリモン…トオマス・ブルフィンチ
(八)遠足…ルヰ・フヰリップ
(九)不思議な窓…ロオド・ダンセエイ
(十)泉のまぼろし…ナザニイル・ホオソン

理想的男女交際機關の設置問題

□男女自由交際の機關に就いて……田川大吉郎
□少數指導者の模範的俱樂部……鶴見祐輔
□男女共學が最も有效……安部磯雄
□私の考へてゐる三案……市川源三
□異性は果して友人たり得るか……千葉龜雄

■(童謠)月の歌……白秋

宵話

■乾杯の報酬
■夫の職業
■玩具の紙幣

■市川左團次論……木村莊八
■映畫劇講座……牛原虛彥
■アイヌ心中……西村哲

◆五月號要目◆

((創作欄))

■長篇 顯現……谷崎潤一郎
■長篇 夜曲ホ長調……久米正雄
■短篇 女一人男二人……近松秋江
■短篇 王者の妻……吉屋信子
■長篇 去年の雪今いづこ……佐藤春夫
■長篇 愚人の唄……正宗白鳥

丸ビル七階(振替東京三四)
◆中央公論社◆

毎月一回一日發行

定價	定價	送料
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます
△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割増の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照合次第詳細御回答申上ます

昭和二年四月十八日印刷
昭和二年五月一日發行
（禁轉載）

發行人兼編輯人　島中雄作
印刷人　高木鳥三
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍

東京市丸ノ内ビルヂング七七六區
中央公論社
電話牛込五〇八九番
振替東京三四番
同　長野三二〇五番


カル

GHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co, Published Monthly.

Terms of Subscription : Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.